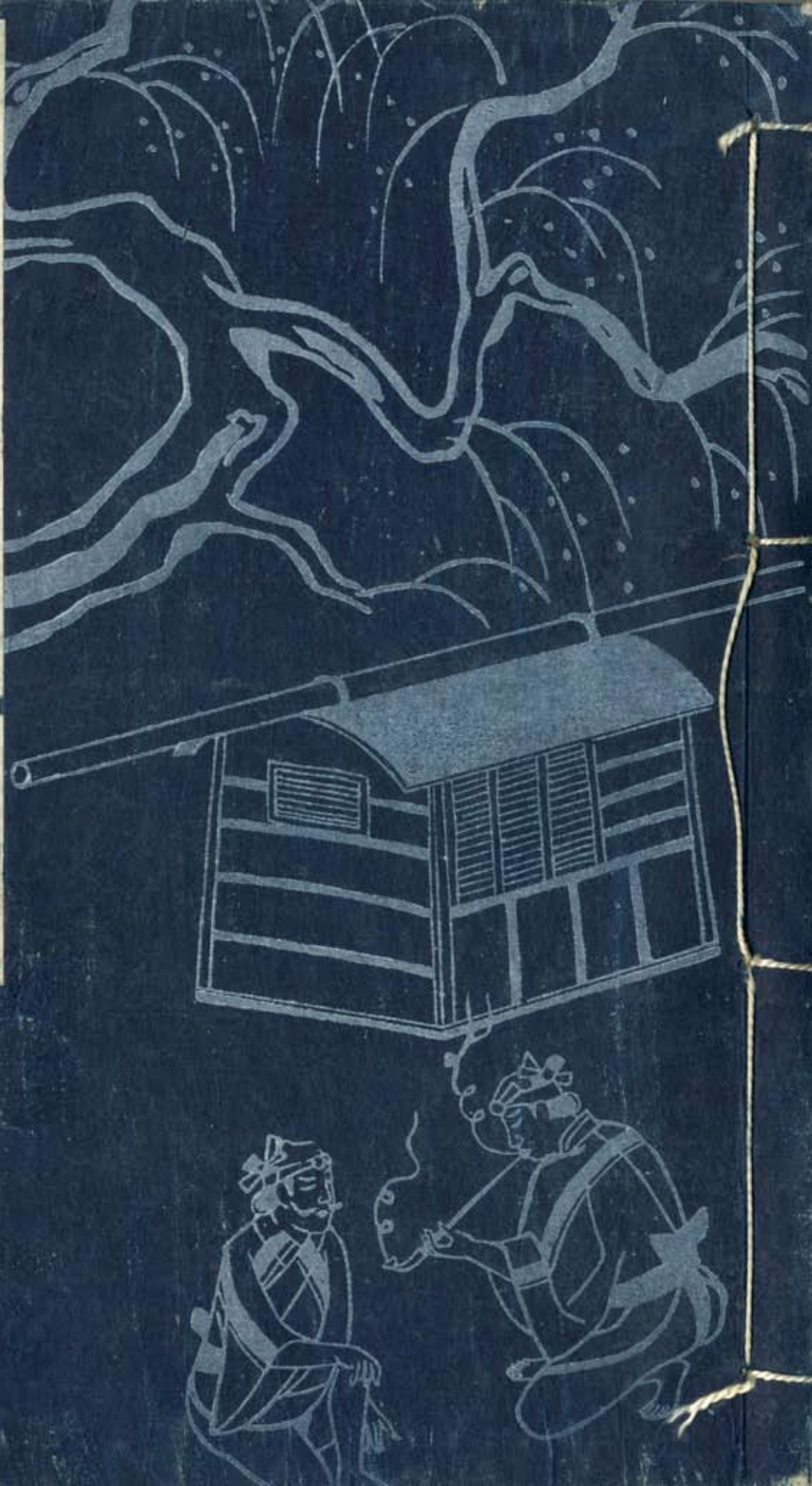


義太夫大鑑



秋山木葉落

義太夫内鑑

上卷

序

雷霆の轟くやドンクワラ／＼この響を聞く前に、何だかグツト押される様な妙感がある。劍客渡邊子爵は曰く、上手の人に打たれる時には、打たれる前に先づグツと押へられるやうな妙感があつて、後からユツクリドンと打たれる。又名畫や名工の彫刻を見るも、其作者の名前を知らぬ先きに、其第一に打付けた筆痕や鑿痕に、先づグツと押へられるやうな妙感が迸ばしる。夫は其人が無意識にて後構はずで、破れても碎けても頓著せぬと云ふ、禪的決心で打付けた行爲の反應で、其瞬間の妙味が永く幾百年の殘骸となつて、後人の耳目にまで傳統せられる。之を藝術と簡單に翻譯するのである。

故に藝術は天地と其揆を一にし、故意もなく、謀計もなき、平易な一呵成の問題であつて、決して飯粒細工で組立てたやうの仕事ではない。修業とは茲に至る心掛けと鍛鍊の事である。

天地間の雷霆は、早魃が續いて陽氣の積極した時に迸溢して磅

轉する問題で、故意に作製したやうの物ではない。萬止むを得ざるに發するが如く、武人の技藝も、永年の修業鍛錬は、無心で居眠りをして居る時に、出し抜けに胸元に鎗で突掛けて來る、夫を一種妙感の前諦に覺醒せられて、萬止むを得ず息に應じて平な胸を筋違にハツこかはす、左すれば胸元の皮膚に三分か五分か突き刺した鋒先はカスリ傷で横に外れる。此時は己に戰鬪時期に移ることが出來て、勝つか負けるかは是からの格鬪、則ち技藝を施し得る境涯に轉化するのである。故に永年寢食を忘れての修業は、暗打に突き殺されぬ一刹那に、ユツクリと生命を助かる丈けの瞬間の爲めに修業して居るのである。名畫伯の筆を下すのも、十分か十五分かで一幅の名畫は出來るが、其畫が幾百年の後まで珍重されて國家の重寶となるのは、最初の瞬間の氣位である。左すれば畫工は幾分間の運筆の爲めに丹誠を擢んで、幾十年の間を研鑽するのである。義太夫節も藝術中の錚錚たるものである。彼等藝人は、大抵一時間前後の演藝であるが、其開演の瞬間に一種氣位の妙感

が定まるのである。故に各自此一時間の仕事の爲めに、朝から晩まで體の工合や、聲の模様や、腹加減やなどを氣にして苦勞をして居る。其苦勞の根元を造るには、幼少の時より心身を抛つて修業をして、漸く五十歳前後になつて一人前の藝術、則ち萬止むを得ざるの趣味に浸染する事が出来るか出来ぬかと云ふ事業である。此の如き拔群の苦心をして演奏する一段の義太夫節も、其日の氣持や、體の工合では、直に三絃師の方に敲き付られて、段切まで心地好く語られぬことになる。是は三絃の方も亦た同様であつて、角力が立會や仕切に念を入れるのこ一般で、ヤツと云ふ時に、少しにても他念に隙がある時は、一番の角力の仕舞まで、不秩序な苦しい目に合はねばならぬ。藝術の神聖とは是の事である。

今の藝術家は、盡く故意捏造の飯粒細工家計りで、思はざる死首を拾ふた一度の歡喜の味に迷倒して、終生の光榮ある事業を失ふ山師計りである。ソナちゃんやら可笑しい魂性で、藝術家なごとはお臍が茶を沸かすよりも價值なき事業で、始めから藝術な

ごを思ひ立たぬがよい。如何になれば、是が義太夫節であるから、良いやうなもの、若し眞劍勝負の撃劍であつたなら、直ぐに眞二ツに切り付けられて、命は幾ツ有つても足らぬ首なし義太夫である。下手は下手なり、未熟は未熟なりに、根本に此心掛けから修業の道に入ツた者でなければ、一生涯一粒の藝術家にはなれぬのである。

又此義太夫節の衰退して進歩せぬのは、角力の如く、一番毎に上になるか下になるか、素人にも能く分明する丈の勝負が分らぬからである。暗夜仕合の我天狗で、俺は彼よりも甘い、此よりも劣らぬと云ふ天狗心許りの寄合故、全くドン栗の脊比べて、勝敗優劣は永久定める事が出来ぬのである。偶々強弱優劣、上手下手の分明を付けるにしても、各自の納得を見るべきメートル條件は、人氣があるに無いと、給金が高いと安いとにて番附の優劣が出来ること云ふ一事であるが、是が根本の間違である。人氣と云ふものは色々種類もあるが、先大多數を以て標榜する問題である。ソコデ大多

數の嗜好に適應しようご云ふて、皆一齊に曝あびり廻つて所謂前受けご云ふものを稼ぐ、藝術道にはコンナ項目條件は更さらにない。隨つて修業の標準もないのである。元來が素人の多數は修業をせぬ人で、藝道の分らぬ人計りである。其人の喜ぶ事を演奏するのは、先づ藝術の根本を犠牲にして居るので、別に修業などする必要はないのである。藝術の神聖を犠牲にするのなら、三段目物や四段目物を、ナゼ浪花節にでも語らぬのぢや。見物を喜ばせて木戸錢を取るのが目的なら、尻振り踊りを仕てもよいのである。義太夫節は藝術中の眞劍勝負で、命掛けの藝術である。夫に修業をせぬ素人に、己れの藝術を捨て、迎合するのは、藝術を戯れにする、即ち白刃の前で蜻蛉返りをする滑稽劇ご同一である。藝術は己れが永年苦心慘憺をして修業した神聖なものを、上手か下手か、爲し得る丈けの所行をなして素人の前に演奏し、以て其精神の妙動が、如何に無心の見物に感應して響くかを試むれば、夫で良いのである。故に義太夫節の勝負も、矢張り擊劍や角力の如く、慥かにハツ

キリと上になるか下になるかを證據立てるが如く分らねばならぬ。最負でもなく、偏愛でもなく、虚心坦懐に聽いて居て、慥かにハツキリと善惡の勝敗が分る程藝格が飛び離れねば駄目である。假りに大阪から歸りて來た人が「今度大阪にて文樂に行き、越路太夫を聽いて來た」と咄す。其の時に「何を聽いて來たか」と尋ねても、「左様何やらであつた」と口籠り、暫く考へて「何でも酒屋であつた」と答へて、夫が古靱太夫の語り物と間違ふて居たならば、慥かに藝は下でも古靱の方が藝が一抔になつて居て、素人の見物に妙感と成つて成効して居るので、角力の勝負には慥かに勝つたのである。越路太夫は藝の拔群なるが如く、見物に與ふる妙感も亦た拔群に著るしからねばならぬ。元々義太夫節は聽くが本旨の物故、聽いた人が永く覺えて居る程藝術の反應が著るしからねば、修業も研究も駄目である。そこで平生の鍛鍊、即ち萬止むを得ざるの境涯、故意でなく捏造でない、滿身修業の流露が一大事である。

と庵主が息繼ぎもなく法螺丸の本性を現はして饒舌り立てたのは、南滿洲鐵道會社の社員秋山木芳君を前に置いての談話であつた。處が秋山君はニコニコ笑ひながら、傍らの風呂敷包を解いて、凡六七百頁も有るべく見ゆる草稿摺の印刷物を取出し、今日は其日庵先生に此本の序文を頼む積りで來たのだと差出された。庵主は怪訝な顔をして之を手に取り、サラサラと繰り廣げて見たれば、可驚可畏、コワく如何に、我日本帝國に義太夫節と云ふ物の起つた始源より、世態の汚隆に伴ふ斯道の盛衰より、歴史系統は申に及ばず、アラユル方面の調査を遂げた、義太夫節のエンサイクロペヂアである。又次なる一卷を見れば、斯道の修業より、藝術觀の批評に至るまで、細大漏す處なき論評である。之を一閱すると同時に、平生鬼にも負けぬ覺悟を持って、明治大正の天地を恐れ氣もなく横行濶歩して來た庵主の兩脇より、ゾーツと冷汗の滴るのを禁じ得なかつた。吐くも苦しき息を絞り出して、君はドウしてコナ可畏一大著述を仕たのかと問へば、ナニ職務の餘暇にボツボ

ツと筆を馳せて、二三年にして是丈の章をなしたのだと平氣で答へる。庵主には兎ても此本の序文などは云はんごすれば、秋山君一聲大喝、書くの書かぬのは皆まで云はせぬ。今まで僕の面前で饒舌つた丈けの、對義太夫の法螺咄を其の儘に書き玉へ。但しは僕が筆記しようか、サアくくく何ごでゴンス法螺丸殿ご、詰め寄せられて今は早や、流石の庵主もグウ————悔し涙に暮れながら、聊以て序ごなすご爾云。

大正丁巳の晩秋

其日庵法螺丸稿

自序

回顧すれば著者が義太夫節に興味を持ち初めたのは齡二十二、笈を負うて上京し、神田の下宿屋の一室で、しきりに權利義務の研究に頭を悩まして居た明治二十四年の比よりの事にして、當時の東都の義太夫界は、夫の「八丁泣かせ」の綽名を取つた初代綾之助の全盛時代で、若竹本郷立花神田連小川神田等の各席に綾之助の招牌が懸るとなること、若い客氣な書生連中は狂喜して押し懸け詰め寄せ、連夜の満員、爲めに八町四方の附近各席は、心細いほどお客の頭數が減じたとまで云はれたほどの人氣を作つて居たのであつた。

綾之助の全盛は、彼が男装せる若衆齧の少女時代より、文金島田の妙齡時代に涉り、可なりに長く續いたのであるが、此の全盛濶歩の綾之助に對し、新に大阪より上ばり、女に稀な堅實な語り口を以て、堂々正面より對抗競争を始めたのは竹本小清である。小清の外には小政あり、素行あり、加之、大阪名古屋あたりの女義中、續々上京して初上り初お目見々の看板を上げるあり、中にも熊梅、小土佐、土佐玉等はなか／＼の人氣を博したものに、此外東京出の若手の人氣者としては、越子あり、住之助あり、孰れも大小多少の最負連——彼等の一顰一笑を無上の光榮として、俾の後押しまでして其の尻を逐ひ廻はす所謂堂摺連——擁護黨を有し、各々對峙して人氣を作興して居たのであつて、當時著者も、折折小川亭や若竹などに出かけては、綾之助も聽き、小清も聽き、越子、住之助、小土佐等

も聴き併せて莫迦くしい堂摺連の堂摺振りも見て、而して徐々義太夫趣味に親み初めたのでありし。

言ふまでもなく明治以前の江戸の義太夫節は洵に憫れなものにして、維新當時までは、外神田に薩摩座あり、久松町に結城座あり、結城座は明治十年頃に退轉したやうに聞くのであるが薩摩座の没落したのは孰時比であつたか判然しな細々ながらも操り芝居の興行をも試み居たりしが如しと雖も、都人の多くは「義太夫節など無粹極まるもの―隠居翁媪の餘閑潰しに聴くべきもの」として之を遇し、殆ど顧眄だも與へざるくらゐの有様なりし。されど明治も十年と經ち、二十年と過ぎ、往時の江戸的氣分は變じて明治的氣分となり、東京ッ兒的氣風となり、其の趣味、其の好尚、まさにやうやく一變せんとするの時に際し、偶々青年客氣の書生連の歡呼喝采に迎へられて流行し出した娘義太夫が、端なくも斯の趣味鼓吹の動機となり、誘引となり、明治の二十八年には神田の表神保町に、新聲館なる操り芝居の定小屋まで創建さるゝほどの變調的機運に向つて來たのであつた。

新聲館一座の顔振は、綾瀬太夫を頭領として播磨太夫あり、織太夫あり、津賀太夫、駒太夫、識太夫、新呂太夫、即今の呂太夫あり、三絃には豊吉あり、紋左衛門あり、大造あり、團八、廣兵衛、新兵衛、寛三郎あり、其の伎、其の藝、孰れも押しも押されもせぬ立派の顔振なりしと雖も、當時の人氣の目標は、藝では無くて容姿であつた。聴くのでなくて見るのであつた。露骨に云へば男でなくて女であつたのである。されば操り芝居は創立されたりと雖も、一座の人氣は一向に寄らず、幾もなくして閉座し、閉座後の一座は、別れて各寄席に出演

して居たのであるが、無論其の人氣も馨しくはなかつたのである。

當時著者は幾回か新聲館に一座の淨瑠璃を聴いた。綾瀬太夫には敬服して了つた。女太夫の甲走つた―せゝこましい節廻しばかりを渴仰して居た著者も、播磨太夫ののんびりとした美調妙音に接するに至つて、思はず嘆美の聲を放つたのである。織太夫も良し、識太夫も良かつた。殊に識太夫の巧緻な語り方には、あの小音、あの惡聲を以て、能くも斯くまで語れるものだ、同情的感嘆を禁じ得なかつたのでありし。

此時よりして著者の義太夫趣味はやうやく其の根柢を下ろし始めたのであつた。爾來各席をめぐつては、綾瀬太夫の『宗玄庵室』も聴いた。『嬢景清、日向島』も聴いた。播磨太夫の『博多小女郎』も聴いた。『大文字屋』も聴いた。而して一回一回と了解も深うなれば、著眼點も得要領的となり、幾もなくして茲に大々の義太夫節崇拜者の一人が出来上る事となつたのである。

雖然、今にして惟みれば、當時の趣味と云ふも、崇拜と云ふも、實は一種の盲信的な―直覺的な―至極幼稚なものにして、義太夫節なるものゝ起源も知らなければ、沿革も知らず、語られて居る正本が誰の手に成つたものか―語るに就ての苦心がどんなものか―研究の要點が那の邊に存するか―彼も此も一切御存じなしにして、さしたる理由もなければ、深い了解ともなかつたのでありし。

然るに明治の三十年頃なりしと思ふ、一日神田の書肆を獵つて居ると、偶然にも『聲曲類纂』一部を發見した。讀んで見るに如何にも面白い、淨瑠璃節の始原より、木偶、三

絃の來歴——太夫の列傳——古き芝居の面影など、凡ゆる著書、雜記、隨筆の類に至るまで、斯道に關するものとし云へば悉く摘録類纂し、原本の古畫類までも轉寫されて在り、斯道研究の資料としては、洵に便利にして趣味多き好著であつたので、著者は此時恰もゆくりなき探險の途次、千古密鎖の一大寶庫にでも探し當てたやうな歡びと満足とを以て、驚喜したのであつた。後にして思へば『聲曲類纂』たる夙に聲曲愛好家の熟知の書にして、大阪邊の書肆には隨所に之を發見することを得る程のもので、別段珍書さか秘本さか稱するほどのものではなかつたのである。

爾來著者の義太夫研究慾は、非常な速度と熱度とを以て進んだのである。上野の圖書館に通うては、先づ『聲曲類纂』に引用されて居る各書の原本を通讀して見て、又新たな感興に耽けるのであつた。淨瑠璃——操り芝居——近松研究に關する新しい著述類は、獵りに獵つて涉讀して見たのであつたが、這は又洵に寥々にして、僅に塚越停春『近松門左衛門』之氏著『淨瑠璃竝に操略史』小中村清『歌舞音樂略史』川山星『淨瑠璃史』大如電『俗曲の由來』位のものにして、之れには少からざる失望と不満足とを感ぜざるを得なかつたのでありし。

されど斯くして著者の研究も次第に秩序的となり、溫故的となり、理論的となり來るに従うて、又新たな別種の研究慾が湧いて來たのである。淨瑠璃元來聲曲である。既に聲曲であり、語るべきものでありとすれば、今一步實地に踏み込んで見て、親しく稽古もし、語つても見ねば、眞個斯道の眞諦に悟入し、妙味を嚼み分くると云ふことは、出來ないのであるまいか……と云ふ一種の感じに捉へらるゝに至つたのであつた。

一日芝の烏森を通りかゝると、しきりにデン／＼の音が聞える。表札には竹本井筒太夫とあり、稽古屋らしい。そゝり立つやうに動いて来る新しい研究慾に吸ひ附けられて立ち止まつた著者は、幾回か躊躇の末、勇を鼓して門をくゞり、稽古志願の意を通ずると、譯もなく承引された。而して早速『三日太平記』の松下住家……これがそもそも著者が斯道に足を踏み込んだ初めにして、實に明治三十一年の秋の比であつたと記憶する。

井筒太夫は曾て文樂座に在り、越路太夫の弟子にして越磨太夫と稱したのだと聞いた。無論左したる腕前の太夫では勿ツたのである。中途不平を起して廢業したが、三十一年上京、當時素人となつ

て居た和玉此の人は芝の隣、日本橋の和玉まで並び稱せられた程の人である。の先名を繼いで井筒と稱し、

看板も上げて見たれど思はしからざるより、退いて稽古所を開くと云ふことになつた

のださうで、稽古所を創むるに付いて入門して力を添へたのは、先頃死んだ杉賈阿彌氏當時毎日新聞の劇評欄を擔任して居た。及賈阿彌氏の同人條野氏探菊氏の息だと言ひ、當時やまご新聞に在りし。外一人で、著者が入門

したのは、稽古所創始後まだ二箇月とも経たぬ頃であつた。

弟子の顔振が右の通りであり、師匠は兎に角太夫出なり、殊に賈阿彌氏のやうな、型ものーデン／＼ものと來ては、指を折られたほどの劇通家もあると云ふ次第なれば、稽古の振合も、普通常例の遣り方とは大に趣を異にし、兎角理窟が多い。斯々の意味なれば、斯う語る―此の意味なればこそ斯うも發音する―イヤ斯う云ふ意味なるべし―ナニそんな意味ぢや無いなどと、研究が始まる。議論が始まる。誰某は斯う語つた―某太

夫の語り口は斯うであるなどと、碌々淨瑠璃も語れもせぬ癖に理窟だけは一廉の大家振り、夫はく賑かなことで……爾後稽古所の位置は二三度移轉したが、著者は通じて四箇年ばかり稽古した。條野氏は長くは續かなかつたやうだが、廣阿彌氏は二箇年ばかりも續いたやうに思ふ。此の間に於て著者は、淨瑠璃正本の眞價たる、讀んでの面白味よりは、語つての興味にして、文の美も一構想の妙も、語り活かされてこそ一層の妙もあり、一段の味も發揮し來るものなることを、較々了悟することが出來たのでありし。

井筒太夫は其後東京を去り、大連に渡り、稽古所を始めて居たさうである。夫れより朝鮮に渡り、元山あたりに放浪の末、病歿したとの事である。

其後暫く稽古も中絶したが、明治の三十六年であつたと記憶する。著者一日民事に關する先例調査の必要があり、司法省の民刑局に田中氏氏は著者の古い友人にして、局の古參屬官なりし。を訪問すると、机の上に一冊の義太夫五行本が置かれてある。どうしたのかと聞けば、稽古を始めたんだと云ふ。良い師匠があるかと云へば、祖太夫即ち今の呂太夫に教はつて居る――どうだ始めたら――宜しい――斯うして又始め出したのである。

祖太夫に就ての稽古の期間は餘りに長くはなかつたが熱心に通つた。而して獲る所は多大なりし。祖太夫の伎倆の優れたる、無論井筒などは比較にはならないのであるが、稽古の仕方も亦一段と立優つて居つた。淨瑠璃を語る呼吸――發音の工合など、丁寧親切、細かに手を取るやうに教へて呉れる。文句を語り殺すな――文章の意味を語れと云ふことなど、幾多豊富な例證――さまざまな實歴談など打ちませて、囁んで含めるやうに説き明して貰うたのであつた。著者の義太夫研究の今日ある、たしかに此の間

に得た幾多啓發的の教訓に負ふ所多いのである。

著者が斯道に關する閱歴は概略以上述ぶる所の如し。無論左したる修練を経たと云ふでもなければ、又左したる研究を積んだと云ふのでもなし。云はゞ幼稚園の鳩ポツポツの組で、未だ尋常科の一年生とまでも行き兼ねる未熟者である。今でこそ著者も、偶には衆人稠座の前で、臆面もなく――未熟な――生硬な――淨瑠璃の一節をも語つて見ることもあるのであるが、過ぎし十有幾年間の役人生活時代には、唯モ―官吏の體面と云ふ事ばかりを顧念して、發するよりは黙する方で――語つて樂むと云ふ事よりは、研究したり、穿鑿したり、書いて見たり、調べて見たり、獨り自ら樂んで、感懷を遣つて居たのでありし。

本書は畢竟著者が過去幾年かの間に獨り自ら樂んで試み來つた研究餘録の集成にして、折に觸れ、興に乗じ、きれ／＼ながらも一枚二枚と書き溜めて置いた斷片小録の集成である。いよ／＼上梓して世に問はんと決心してより、又改めて増補の筆をも加へたのではあるが、無論新奇もなければ獨創の見もなし。唯冗々と解り切つた事を竝べ立てゝ見たまでのものにして、上下二卷に分冊したが、上卷には主として淨瑠璃及操芝居の起源、興廢の蹟を敘し、下卷には主として淨瑠璃を語ると云ふ事の意義語り方の理論、聲音練習の意義と理論、節の解釋、古の心得等に就いて論じて見た。

本書の上卷に就いて著者は、同じ淨瑠璃の歴史を書くにしても、出來るだけ斯道好者の渴仰點に觸れて見たい――どんな太夫――どんな作者――どんな木偶遣ひが出て斯界を

左右したか―聲の美で喝采された太夫は誰―情を語つて成功した太夫は誰―新作正本も絶わくになつた文化以降の斯界―操り芝居としての營業上の盛衰から見た斯界等、苟も斯道好者の渴仰を醫すべき廉々に就いては、出来るだけの努力と注意を拂うて、本書をして、多少でも斯道に指を染めたものゝ書いた淨瑠璃史たるの特色を有たせたいと期待したのであつた。

杉山其日庵主人は著者に訓へて云、「義太夫節以外の淨瑠璃には皆夫れく家元がある。常盤津爾り、河東節爾り、清元爾り。何を語つても、皆等しく其の家々の流風に語り化して仕まうのであるが、義太夫節だけは左様には參り難し。東風、西風と、大様語り風には區別ありと雖も、一段く、其の淨瑠璃の書き下ろされた當時―語り初めた太夫の流風―語り口によつて違ひがある。『太功記』の十段目は麓場とて、初麓太夫の語り初めたものなるが故に、十段目を語るとなると、此の太夫の遺風に從はねばならず、『本朝二十四孝』の十種香は、鐘太夫の語り初めたものなるが故に、十種香を語るとなると、亦此の太夫の遺風に從はねばならないのである。何程上手に語り、どれ程巧者に語つたところで、『太、十』を語つて麓場らしき氣分が出ず、『十種香』を語つて鐘太夫らしき氣分が浮んで來ないとなると、『太、十』を語ると云へず、『十種香』を語るとは云へない。『忠、九』は此太夫風と限られ、『爪先鼠』は駒太夫風と自ら約束あることは誰も知る。されど現下の太夫中、此の意味よりして一々語り物を吟味研究し、夫々區別合點して語り別けて居るものが幾人かある。孰れも普滅法な―各自勝手な語り方をして、得意がツて納ま

つて居るものばかり、實に嘆すべし。須らく君の著書には、克くく此の點を注意すべし」云々。實に至言である。著者も此の意味に於て、出来るだけ本書上巻―興行年表の旁引として、努めて書き下し當時の、各太夫の持場くくの役割りを附記細註し、此種肝要な―興味のある―考量研究の資料に供せんと企てゝは見たりしと雖も、穿鑿不行届の廉々多々にして、折角の示教に背く所多きを遺憾とするのである。嚴格なる意味より云へば、西風の淨瑠璃を東風に語るのも外連なれば、東風の淨瑠璃を西風に語るのも外連である。麓場を駒太夫風に語るのも外連なれば、此太夫場を麓太夫風に語るのも外連である。每段夫々語り初めた太夫の流風を襲いで、各別各箇の趣を持たせて語り活かして往つてこそ、其處に云ひ知れぬ斯道の妙味が存するのである。此の意味よりして著者は、更に大に穿鑿研究の歩を進め、他日本書再刻の機もあらば、凡ゆる語り物に就いて―書き下ろし當時の太夫―各太夫の語り口と流風を詳説し、斯道好者の參考に資するところあらんと、今よりして豫め所企して居るのである。

若夫れ本書の試みにして多少にても斯道好者の推賞に値するものがあり得るとすれば、开は下巻なるべし。著者は本書の下巻に於て、理論的に―解剖的に―將又綜合的に、淨瑠璃語り方に就いての凡ゆる要項を詳論した積りである。從來此の種の著述として、『淨瑠璃早合點』あり、『淨瑠璃祕曲抄』あり、『音曲兩節辨』あり、『章句故實集』等ありと雖も、いづれも古いくく祕傳書やうのものにして、説いて詳しからざれば徹底せず。著者は此の點に就いて、出来るだけの注意を集中し―所信を披瀝し、斯道同好者

の批判に訴へて居るのである。

思ふに文は節に活き、詞に活き、節も詞も共に語り人に依つて語り活かざるゝものなりとすれば、近松の妙文も、半二、松洛、宗輔、出雲等の傑作も、讀んだばかりでは眞の美—眞の妙は味ひ難し。畢竟語つて見ての妙味である、眞諦である。現下の素人淨瑠璃の流行せる、大阪加島屋一軒にて刷行する稽古本だけにても、一年七萬冊に上ぼると云はる。實に空前の盛況にして、著者が自ら揣らす此の著を公刊するに至つたのも、以て斯道の好者に問ひ、相共に研鑽して、斯の樂みを盛んにせんと欲するの意に外ならないのである矣。

大正六年晚秋

大連朶八庵に於て

著者 木

芳 識

義太夫大鑑 卷上 目次

淨瑠璃と操り芝居

第一章 淨瑠璃の起源

義太夫節なる稱呼 淨瑠璃なる語

『宗長日記』に見えた淨瑠璃なる語
淨瑠璃の發端はなかなか古し

『淨瑠璃姫物語』の作者

お通の作なりとする
お通の説は信じ難し

お通の傳記—各種の異説

『俗曲の由來』
のお通改作説

柳亭種彦の非お通作考證

『足新翁記』と『淨瑠璃姫物語』
『還魂紙料』

にも各種の異本がある

『麗の花』の著者が見た『淨瑠璃姫物語』
の正本『牟藝古雅志』に載せた目錄

初段の本文

十二段の大意

參考資料

『麗の花』『江戸名所地』『昔々物語』『門閭
雜誌』『望海每談』『筆のすさび』の一節

第二章 扇拍子時代の淨瑠璃と三味線の由來

扇拍子時代の淨瑠璃

平凡單調
な曲節

扇拍子 盲人一派の世業 當時の

遺風 與淨瑠璃

三味線渡來の年代 永祿説と文祿説 傳來の徑路—傳説區々 胡

(小)弓と三味線

參考資料

『糸竹初心集』『世事百談』『糸竹大全』『琉球
年代記』『竹豊故事』『本朝世事談綺』の一節

第三章 傀儡子の起源と傳説……………三二

傀儡子の起源 平安朝時代に傀儡子 室町時代の日記に散見せる
操りの記事 永祿天正の比度々大内へ夷舁參る 醍醐の花見の餘
興に操り土偶

「でく」「くどつ」の語源 遊女を「くどつ」
と呼んだ淵由 傀儡子の手振りと行装 茶の

衣に赤のく髪
んの大鼓にちくくのつたんだ 實曆明和の比の江戸の傀儡子 淨瑠璃は義
太夫節

カンマンネツコに

土偶操りの祖百太夫 百太夫の傳記—淡路座の起源 神官道兼
の人形 道兼

の伎 兼太夫の工夫—漁祭りの人形舞
太夫と改名—淡路に移る 引田源之丞 淡路座の始め 他の一説引田重太夫

参考すべき各書の記事 『伊吹山嵐』の唱歌

第四章 創始時代の淨瑠璃と操り芝居……………四七

淨瑠璃の詞章 舞曲やお伽草紙の詞章を其の儘語る 評判第一の

『梵天國』と『阿彌陀の胸割』 梵天國に就ての
『還魂紙料』の考證 梵天國の構想—筆致

『阿彌陀の胸割』の梗概 桑門緇徒の手に在りし當時の文權 文事の
荒廢想

ふべ 佛家の因果談—緣起物語めいた當時の淨瑠璃「平家」「謠」「能」

「説經」「祭文」 俗樂の變遷—
『獨語』の記事

操りの上覧 太夫號下賜の始 慶長末年の金澤の操り興行 京都
の操り芝居 四條河原の芝居の右畫 人形操りの進歩の徑路

第五章 杉山丹後と薩摩淨雲……………六九

江戸最初の淨瑠璃 杉山丹後江戸に下る 江戸に於ける新しき淨瑠璃の最初
の宣傳者 『考證資料』としての『色道大鑑』の價値 丹後を淨雲の高弟なりとする謬説 參
考すべき各書の記事

淨雲の傳記 父祖二代の遺傳を受けた淨雲の聲曲的賦才 彼 元和寛永頃
の江戸の芝居街 芝居町柴井町と中橋 淨雲の人氣 島津薩州の眷寵 投獄
の厄に逢ひ芝居は禁止せらる 林羅山の觀た淨雲の芝居 別に傀儡師の名人
小平太ありとの説 段淨瑠璃は淨雲に始まる 六段型淨瑠璃

第六章 江戸淨瑠璃の前半期……………八七

武人濶歩の江戸 金平節の流行 丹波親子の曲風 金平節の始め
金平節の前身『酒呑童子』の淨瑠璃 金平節の盛時 京阪兩地の金平節 其の流行は倏
忽にして熄んだ 弘化の比喩ほ越後の片ほさりに残つて居た金平節

金平節以外の各派 孰れも灑洒にして滋味ある曲風 主なる太夫
の略歴 江戸肥前椽近江大椽語齋土佐少椽薩摩外記虎屋永閑江戸半太夫十寸見河東 說經節

堺町葺屋町の各座 延寶真享の
兩町の圖面 操り芝居興行事歴の一般

江戸歌舞伎と操り芝居興行年表

第七章 義太夫節以前の京阪淨瑠璃……………一四一

京阪淨瑠璃の勃興時代……………一四二

源太夫上京以前の京都の淨瑠璃 京阪淨瑠璃の恩人偉勳者として

の源太夫の位置 源太夫が傳へた曲風 京阪兩地に流行した金平

節 其の流行の渦外に超然たりし山本土佐と宇治
加賀一著しく金平節化せる井上播磨の曲風

山本土佐 宇治加賀 井上播磨

義太夫節前後の京阪淨瑠璃と操り芝居……………一五六

義太夫出づる迄の京阪の操り芝居 大阪に於ける大勢力伊藤出羽

の芝居 京の御内裏様と併せ數へられたほどの出
羽の芝居 文彌節と山本飛騨等の木偶 出羽の芝居の金平節

木偶の技巧と趣向で持った景氣 當時の操りの技巧 糸あやつり
手妻つかひり

水からくり 南京あやまいか 要するに木偶七分の人氣

淨瑠璃本位の義太夫の興行方針「三五の十八」で算盤あはぬ不成

績 義太夫の失望―出雲
の人氣取り改良案 京都を掩有した宇治加賀山本土佐の人氣 歡ば
れざば

りし義
太夫節 加賀と土佐とを喪ふた後の京都

第八章 近松門左衛門……………一六七

近松の傳記……………一六七

文筆趣味に富んだ近松の一族 彼が系統生地に就いての傳説新界の本

傳せられた長州萩説―唐津近松寺縁故説されど此の説は孰れも年代若し古

きは京都説―近江三井の近松寺説 京都説―近江三井の近松寺説ははるかに萩説

山人 唐津近松寺説に優る 京都説の祖述者たる『竹豊故事』の著者―斯界の通人―俳句

『聲曲類纂』『竹豊故事』
『音曲道智論』の一節

近松が奉仕した公家 初歩時代の作者生活放浪生活 常時の作物 義太夫と

相識りたる初め兩者の默契 近松の健康と著作 墳墓の地谷町妙法寺の廻向塔や

智廣濟寺の墓 辭世と自選の法號 水谷不倒氏の唐津近松寺の遺

近松の作物と文章……………一八二

作者生活の最初の十年修業期―練習時代 古淨瑠璃の故習を脱せざりし淨

瑠璃の型式 此の期の卒業論文『出世景清』純乎たる古淨瑠璃の筆致

研究期―實修時代の元祿の十六箇年 凡ゆる研究工夫は此の間に

成つた 構想行文の秘訣を語つた近松の直話 彼が人生詩人とし

ての卒業論文『曾根崎心中』 心中物淨瑠璃の流行

圓熟大成せる晩年の二十年 此の間に成つた幾多の傑作 世話淨瑠璃の最終作

『心中宵庚申』

近松獨創の雅俗折衷文 豊富なる文藻と自在なる筆致を衡いて出る輕妙なる滑稽景情併せ叙した自在なる用筆 其の例として『壽の門』 馬琴と西鶴と近松 怒を描いた西鶴の自我的處松』と『夕霧阿波鳴渡』の一節 生觀道義的長談義の小説化の作物 馬琴性を描き一時代を描き一周圍一人生一實世間を描いた近松

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰……………二二三

流祖竹本義太夫……………二四三

理太夫時代 嘉太夫の芝居に入る一座を組織し宮島に下る 竹本座の初興行 義太夫傳記中の疑問一宮島

で下るま 竹本義太夫なる名乗りの縁由

義太夫の曲風 彼の聲曲的所見と遺訓

斯流勃興時代の三十二年……………二四六

其の前期一竹本座創立後の十八年 中心人物 興行年表當時の道

頓堀の各座 七ツの芝居 振はざりし筑後の芝居 錢が安うても面白竹田の芝居

其の後期一竹豊兩座對立後の十五年 竹本座の中心人物 義太夫の死一權右

衛門の退隱 竹本政太夫 政太夫の曲風一其れを傳へた西風(竹本派)の淨瑠璃

豊竹座の中心人物

若太夫の單身
孤獨的奮闘

豊竹若太夫

若太夫の曲風
傳へた東風
豊竹派の淨瑠璃

功した界の興行
功した界の興行
豊竹座の開場
若太夫の事故より成

紀海音

海音の素養
淨瑠璃作者として

は寧ろ讀本作者
は寧ろ讀本作者
取り立てて云ふほど
彼の作物に對する定評

『心中ニッ腹帯』の一節

竹豊兩座の對立後俄に緊張した斯界の空氣 世話時代物淨瑠璃の

流行

構想作意
の一變

竹豊兩座の興行年表

昌隆時代の四十年

.....二九四

其の前期の三十年 竹本座の中心人物 『國性爺合戰』興行後の竹本

座の大異動

在來の顔振の一新
朽淘汰 孰も有力なる後繼者

豊竹座も亦多士濟々

近松の死

本座の 出遣ひ出語りと人形の工夫 竹本座に上場したる幾多の佳

作 『夏祭浪花鑑』に文三郎の凝らした工夫 禮拜齋戒して勤めた『菅

原傳授手習鑑』當時の盛況

『假名手本忠臣藏』の紛擾

『忠臣藏』の上場
紛擾の主題
紛擾の顛末

東西兩座の混亂

此太夫の後を承けた竹本大隅様

後期の十年

斯界の最盛
爛熟時代

竹豊兩座の中心人物

空前の盛觀

吉田文三郎

中心とした前期三十年間の人氣 太夫の聲を以て 『雙蝶々曲輪日記』の不

評 駒太夫と麓太夫とで呼んだ 『祇園祭禮信長記』 豊竹駒太夫

合作淨瑠璃 兩座の作者 僅々十箇年間に連發した佳作 著しく歌舞伎脚本化した

淨瑠璃正本 地の文は次第に減じ詞の部分にますます加はる 操り芝居敗類の素因 近松作正文珠の智慧の出し合 淨瑠璃の型式の一變 當時の歌舞伎芝居 本の改作

當り淨瑠璃となれば直に歌舞伎に奪はる 木偶よりは活きた役者 合作淨瑠璃

の流行 合作ものゝ長所 勢ひ詞本位の淨瑠璃 千變一律の「こ」の字

ばかりの淨瑠璃正本 合作淨瑠璃の長所と短所を併せ見るべき適例『菅原傳授手習鑑』

竹豊兩座の興行年表

衰滯時代の百二十五年……………

漸衰期の二十五年 吉田文三郎 餘りに世才に邁く自我的であつた別座創立の野望―父子相次いで竹本座を退く

作者として 座主近江の入牢 竹本座の人氣の失墜 竹田竹本打込み興行

さまざま苦心した恢復策も更に效無し 僅に景氣を挽回し得た

『本朝二十四孝』竹本座の顔振 京阪竹本座の入替り興行 竹本座の退轉 再興

一向に客足附かず窮すれ出るさまざまの愚痴 近松半二が智慧を絞つた

『妹脊山婦女庭訓』 四五年の不入を一時に取り還す

一層悲惨なりし豊竹座の末路 重々の不幸 遂に閉座 北堀江市

の側の芝居の創立 『妹脊の門松』の大當り 再興した豊竹座 堀江座の顔振

各座の興行年表

沈滯期の百年 操り各座の概況 畿多小勢の對立 引續き人氣を占めて居

た市の側の芝居 文樂芝居の勃興 文樂御靈市の側三座の人氣を中心とし

た文政—天保時代 爾餘の各座 小は小なりに夫々相應の人氣

社寺境内芝居の禁令 文樂—御兩座の退轉 禁令後の五芝居 西横堀清水町

濱の文樂の芝居 稻荷社内文樂の再築 明治初年の操り各座 松島

の樂座 彦六座との對立となる

次第に種切れとなつた新作正本 舊作淨瑠璃の洗張り興行 斯界

の景氣は減退する一方 當時の歌舞伎興行の一般 首振り小供芝居 されど淨瑠璃の伎巧

はいよ／＼銑鍊の極に達した

二代 政太夫の門系より出た幾多の秀才 越前少椽の系統より出た

斯界の大立者 筑前少椽の流より出た名人上手 爾餘の幾多の名

人 三絃と人形の名手 妙聲第一と云はれた駒太夫いよ／＼練熟して來たり樂屋中を驚かした初代巴太夫 中古の名人 父に劣らぬ二代目駒太夫 初めての出座より

二代目内匠太夫 其餘の幾多の名人上手 然るに景氣は次第に沈衰す

ると云ふ不思議な現象

沈滯時代後半期の大立者 名人上手續々斯界に現はる 天保嘉永

比の中心人物の顔振 三絃界の妙手名人

新作正本表 操り各座興行年表 主なる太夫の略歴

第十章 江戸浄瑠璃の後半期

江戸的氣風の軟化『我衣』『病問長語』『獨語』の一節 宮古路豊後の系統豊後江戸に下る豊後節禁ぜらる

豊後の曲風―時人の批評 豊後の遺鉢を傳へて大成した常盤津文

字太夫幾分改良せられた豊後節 文字太夫の流系

文字太夫と竝んで盛名を馳せた宮本豊前椽豊後の直系なりとするの
説―文字太夫の門下より

出たとするの説
―豊前椽の略歴 宮本の流系 宮本より出で、更に一派を爲した清

元節 初代齋宮太夫 二代目齋宮太夫 清元の流系五代目延壽太夫

宮古路加賀太夫の創めた富士松節 富士松より別れた鶴賀節 鶴

賀の祖若狭椽 富士松の流系七代目加賀太夫 鶴賀派の流系 鶴賀新内

繁太夫と蘭八

豊後節以外の各派 一中節 元祖一中 一中節の流系 菅野派と

宇治派 大薩摩節と河東節 大薩摩節の系統 河東節の流系

江戸浄瑠璃革命時代の各派の混戦『浄瑠璃三國誌』の一節 江戸浄瑠璃の變遷

次第に江戸化する豊後節系浄瑠璃 江戸浄瑠璃衰微の徑路

自正總至文久 江戸浄瑠璃重要事項年表

第十一章 江戸に於ける義太夫節

江戸義太夫節輸入の祖辰松八郎兵衛 二流三流の輩で徐々地盤を固め始む 八郎兵衛江戸入り前後の消息 一旦大阪にて興行し夫れより江戸に下りたるが如し一たび候急盛んなる流行を作るに云ふ段取には運ばざりし 豊竹新太夫江戸に下る 俄に勃興し始めた義太夫趣味 越前少椽一行の江戸興行 延享三年の大火一揉り各座の焼失一肥前座興り再 勃興の勢成る 菅原傳授手習鑑の大當り 菅原屋敷と紅梅の社目新太夫と相續した伊勢太夫

江戸義太夫節の正本 操り各座 肥前座外記 座結城座 寛政比の江戸の芝居

新作正本上場年表

江戸作者 紀上太郎 内鬼外 容楊黛 烏亭馬松 福松貫四 江戸作正本の異色 江戸的气分に醇化された義太夫節の

曲調「關東義太夫」なる一種の稱呼さへ出来た「異色ある筆致語格」一例として「糸櫻本町青」「神靈矢口渡」「白石噺」の一節

太夫の顔振 江戸生抜き太夫あるのみ 僅に筆太夫綱太夫あるのみ 江戸に墳墓を残した京阪の太夫

『塵塚談』の著者が見た安永前後の斯界 享保以後江戸に徂徠した主なる太夫

江戸義太夫節の盛衰 嘉永當時の消息

第十二章 明治時代の義太夫節 六四二

明治初年の操り各座—其の顔振 明治七年の堀江座の顔振 明治六年の大番附 斯界の文楽座の顔振

古老は次第に凋落し太夫の實目は下落し來る— 彦六、文樂兩座の對立 當時

彦六、文樂兩座の顔振 二十八、三十三、三十四、三十六年に至る文樂座の 彦六座の瓦解 其の後

目

次

一一

を承けて起つた稻荷座—其の顔振 明樂座起る 堀江座の再興—

其の顔振 堀江座の好評—
時人の堀江座評—

越路太夫の隠退と大隅太夫の退座 機運の急轉直下 近松座の瓦解
—首振り芝居

さなつた
近松座

明治の斯界を代表した越路太夫と大隅太夫 越路太夫の略傳 養父

は素人淨瑠璃の仲間—彼の初稽古—太夫志願—野澤吉兵衛の門に入る—初めて
旅興行—江戸に下る—越路と改名—江戸興行中の苦心—難行—吉兵衛の死—京都
に歸り春太夫の下に頼る—彼の不平—春太夫の懸論—初めて文樂座に
入る—當時の文樂座の顔振—次第に名譽をあらはし來る—權下と成る 越路の

長所と大隅の長所 越路に對する批評 大隅が人氣を博した二ツ

の原因 大隅太夫の略傳 大隅の死に對する世人の同情—近
松座より發表した退座前後の消息 時人の大

隅評

落寞蕭條の現下の斯界 明治人に歎かれた流行淨瑠璃

補遺と餘論……………七〇五

素語り瑠璃 木偶と雜れて別に開拓すべき天地—運命 深く木偶
と絶縁す

べし—聽くべき淨瑠璃—視るべき歌舞伎—近松作正
本の特徴と淨瑠璃としての眞價 出雲牛二等の筆致 歌曲と劇との中間を往

くべき淨瑠璃 見る眼の面白味よりは聽く耳の感じ
木偶との角力 文三郎ほどの伎倆を以てして尙ほ且つ爾り 木

偶劇より出でゝ歌舞伎に入つた淨瑠璃正本 流行は趨勢である

時人の操り趣味は既に去つて居る

明治に入つての新傾向 浄瑠璃正本の研究 | 紳士浄瑠璃なる新熟語 漸次に衰退廢亡すべ

き在來の正本 徳島政育會の社會教育上より觀た義太夫節正本の

調査報告 首肯し難き廉太だ多し | 餘りに偏狹なる觀察 現在の正本は尙ほ幾多の淘汰を免

れざるべし 素浄瑠瑠となつて保つべき晩年の餘命古浄瑠瑠の復

活 人氣を支配するも流行を左右するも要するに鼓吹の | 仕方一つである 津太夫の復興した「日吉丸」三段目 左までに流行せざ

る浄瑠瑠中にも佳作多し されど孰れも可なりの難物で | ある一々に奮勵努力を要する 浄瑠瑠正本の

新作 現代語にて書いた浄瑠瑠は果して義太夫節の節調を調和せざるか | 元祿時代を直寫した近松の世話浄瑠瑠 渾然として融和して居る 能

はざるに非ず人なき也 浄瑠瑠正本の用語は必ずしも現代語の速

記的描寫たるを必要とし 近松が案出した一種の臺詞 | 代調を以て響いて居る 文語を現代語との

中間を継ふた文章らしき | 詞らしき文章

義太夫大鑑

淨瑠璃と操り芝居

第一章 淨瑠璃の起源

義太夫節なる稱呼 淨瑠璃なる語の意義 『宗長日記』に見れた淨瑠璃なる語 淨瑠璃の發端はな

なかに『淨瑠璃姫物語』の作者 お通の作なりとす お通の傳記には各種

の異説がある 大槻如電氏の『俗曲の由來』のお通改作説 柳亭種彦の非お通考證 『足齋紙料』

と『還魂』『淨瑠璃姫物語』にも各種の異本がある 『麗の花』の著者が見た『淨瑠璃紙料』 『雅志』に載 初段の本文 十二段の大意 『麗の花』の著者が見た『淨瑠璃紙料』の正本 『卒藝古

せた目録 参考資料としての各書 『麗の花』『江戸名所咄』『昔々物語』『門閭雑談』『望海每談』『筆のすさび』の一節

義太夫節なる稱呼

淨瑠璃には幾多の流派がある。義太夫節も其の一派に屬する。初め竹本義太夫の工夫して語り始めたものなるが故に其名を冠せて義太夫節と呼ぶのであつて、恰も薩摩外記げま太夫の創めた淨瑠璃を外記節と唱へ、江戸半太夫の語り出した淨瑠璃を半太夫節、都太夫一中の工夫した節を一中節、十寸見堂河東の考案した節を河東節、常盤津文字太夫の語り創めた節を常盤津節と稱するのと同じ意味に於ての稱呼である。されば義太夫節の起源、沿革、流風を究めんとするには、勢ひ一般淨瑠璃節の起源、沿革、流風より始めねばならぬ順序となるのである。

淨瑠璃なる語の意義

『宗長日記』に見わた
淨瑠璃なる語

『宗長日記』は僧宗長の日記である。

宗長は柴屋軒と號す、連歌の名家なり。字は久庵、駿河島田驛の鍛工某の子なり。幼にして慧敏、國主今川義忠其才氣を愛し、召して左右に近侍せしむ。宗長嘗て歌人宗祇を見て歌聯の事を問ひ、一を聞て十を悟り、遂に仕を辭して剃髮して一草庵を驛中に結び居る、時×

淨瑠璃の發端はなかくに古し

×年十八なり。初め佛法を普捨院に學び、終に一休和尚に參禪す。明應×

『淨瑠璃姫物語』の作者

*中宗祇新筑波集を撰むに方り、宗長の句二十八×

お通の作なりとする
の説は信じ難し

×首を納むと云ふ。宗祇

元來淨瑠璃なる語は、節を附け拍子を取りて語る讀み物即ち語總てを指した稱呼にして、その始め『淨瑠璃姫物語』を語る曲節より出でたるが故に、斯く呼び慣はしたものと云はれて居るのであるが、そもく淨瑠璃なる語の物の記録に見ね初めたるは、柴屋軒宗長の書いた『宗長日記』である。『宗長日記』享祿四年今より三百年前の條に、

八月十五夜九月十三夜は都鄙いづくも月にめであそび芋豆を手向けとて賤の男賤の女も月見るといふ。茲に八旬有餘の老拙夕まごひして目覺めおきて今宵を名月にやと思ひ出て南の椽の柱にとばかりせなかをやすめついで侍る。折しも範甫老人豆に徳裏をそへもたせ送らる。云々 一、兩輩人をつかはし小座頭あるに、淨るりをうたはせ興して一盃にをよぶ。云々

とありて、此の日記の一節は、駿河國宇津の山にて書かれたるものなるに、既に其の比此等偏僻へんぱの地方にまで流行擴布して居たものだとすれば、淨瑠璃の發端はなかくに古く、恐らくは足利氏の中季時代、疾く既に其の芽を發して居たのであらうと想定されるのである。

『淨瑠璃姫物語』は十二段草紙とも云はる。蓋し此の草紙が十二段ものなるが故である從來の傳説にては、此の草紙の作者を織田信長の侍女小野お通なりとし、お通が其君信長を慰めんがために創作したものだと考へられて居たのでありし。されど各種の考證の結果、最早今日では此説は信せられない。信長は天文元年の生れなるに、其の前年享祿四年の『宗長日記』に「小座頭あるに淨瑠璃をうたはせ興じて一盃に及ぶ」云々の記事があり、天文九年信長僅に九歳の幼童也

歿して後ち衆相ひ議し、宗長を推して花下宗匠と爲さんとす。宗長固辭して聽かず。終に天聽を歷て號を賜はる。後ち永正元年今川氏の被官齋藤安元の勸めを以て泉谷に遷り、自から末屋軒と號す。今川氏親厚く之を遇す。六年七月白河の故關に遊びてあづまのつこを書す。享祿五年三月十六日歿す。(實錄に、大永五年十二月又六年に作る。)*年八十五。宗長職歌の*

お通の傳記には各種の異説がある

*奥を究め名聲四方に達す。(野史鑿定便覽、大日本人名辭書)『宗長日記』は大永二年北地に旅行し、同三年、四年薪の里洲息庵に、同五年興津に、同六年懸川に在りし時の日記である。

『俗曲の由來』のお通改作説

『大日本人名辭書』には、小野通。淨瑠璃の作者なり。水戸の城主武田常陸介信吉の子小野和泉の女、初め織田信長に仕ふ。信長亡ぶるに及び隱退して田舎に閑居す。後豊臣秀吉の室淀君之を聞き

の『守武千句』にも、

いとどだにぎとうまがひの杖つきの(前句)

淨るりかたれともしびのもと(附句)

こよひはや時は丑若ふけはてよ(又附)

と詠まれて居るより見るも、當時既に街道筋の宿々まで流行り擴まり居たりしことは明なれば、お通が信長の慰みに此の草紙を作りたりとの傳説は、全然根據を失するところなるのである。

加之、お通夫れ自身の傳記にも各種の異説がある。信長の侍女なりと云ふものもあれば、『普々物語』淀君に奉仕して居たものだと傳ふるものもある。『江戸名所咄』初め信長に仕へ後秀吉に仕へたりとなすものもあれば、『竹豊故事』秀吉公の御臺政所の侍女なりと云ふものもあり、『難波土産』年代も事歴も共に判然でない。『名人忌辰録』には元和二年三月五日五十八歳を以て歿すと記して居るが、之れより推せば永祿二年疑はし。

大槻如電氏の『俗曲の由來』には、

淨瑠璃物語を三味線に合せて歌ふといふことが起つた。それは彼の才女の聞ねある小野お通といふものに琵琶法師共が相談して、昔からはやる淨瑠璃物語はどうしても其儘三味線に合せて語ることが出来ない、何とか仕方があるまいかと云つたらお通は淨瑠璃物語を作り直したのである。新古の二種が淨瑠璃物語にあるのが證據で文章は大に違ひます。

召して侍女とす。通傳學秀文にして善く文を屬し、兼て書を善くす。當時其手、を學ぶもの多*

柳亭種彦の非お通作考證

『足薪翁記の一節』

*し、又畫に工みなり。常に天神の像を畫く。設色の畫に至りては粗ならずして上工なり。人物多くして花鳥少し。世人賞翫す。筆法狩野光信に出るま云ふ。嘗て澁君通を召して謂て曰く、古女の才藝あるものは皆其の徳を末世に殘す。汝亦文を善くし才人に過ぐ、何ぞ腕を奮て其名を後世に殘さざるや。通辭するに其及ばざるを以てす。聽かず。乃ち舍那王(源義經の幼名)淨瑠璃姫(矢矧驛長者の女)に通するの事蹟十二段を作りて之を上つる。是れ淨瑠璃戯曲の權輿なり。澁君大に感歎し、晉人澤角檢校を召して譜を下し和して以て之を唱はしむ。澤角檢校或は云ふ岩船檢校又丹波七左衛門及び橋本筑後なり。未だ其孰れか是なるを知らず。後秀次の家人鹽川志摩の妻となり、死別の後徳川千姫に仕へ、

とあり、お通は此の物語の創作にはあらざるべし、改作者でがなあらうと断定せられて居るのである。

非お通作の考證は、古くは柳亭種彦又愛雀軒足薪の號ありの『足薪翁記』『還魂紙料』に見ゆ。兩書共『百編下卷の二左に收め在り

淨瑠璃節のはじまりは信長の侍女小野の阿通が作れる十二段よりおこれりとは諸書に載てたれ、も知る事なれど此説非也、秀吉の侍女とするは益々誤也。「守武千句」天文九いごゞだに座頭まがひの杖つきの「淨瑠璃かたれどもし火のもと」こよひはや時はうし若ふけはて、座頭に淨瑠璃をかたれどつけ又淨瑠璃にうし若どつけたり。

慶安の印本および守武が現在の世をさること遠からぬ古寫本をもつて校合するにみな此ごとし、さて信長は天文元年の生なり、此千句は天文九年にて、信長僅に九歳のときなり、阿通といふ侍女はありもせんが、淨瑠璃といふもの十歳にもたらざる人のなぐさみに綴りしものともおもはれず、又た「柴屋軒宗長日記」享祿四年の條「八月十五夜九月十三夜は都鄙いづくも月にめであそび芋豆を手向とて賤のを賤の女も月見といふ、爰に八旬有餘の老拙夕まごひして目ざめおきてこよひ名月にやと思ひ出て南の椽の柱にとばかりせなかをやすめついで侍るをりしも範甫老人豆に徳裏をそへもたせ送らる、「こよひ月まめに見よとやことたらぬいもこひしらの一盃としれ、旅宿たすかる一兩輩人を遣し小座頭あるに淨瑠璃をうたはせ

又東福門殿に仕へ、後ち其女阿圓(一に阿閑に作る)に依りて信州松本に僑居す。元和二年三月五日年五十八にして歿す。(聲曲類纂皇朝名畫拾葉扶桑畫人傳、燕石十種)と記して居る。

興じて一盃におよぶ、或所より誘引とておの／＼たちあがるにあまりに無下におぼわて菊につけてこと傳てやる、「たづねこそよしやせざらぬ哀れなどこよひの月の友よびてとる、その名残さびしさ思ひやるべしやがて老をなぐさむ心かきくらしして「くまもなく空も見る見るかきくらしをば捨山のてる月にして九月十三日享祿四年は、信長が生る前年なり、此記宇津山にて書るなれば、當時はや田舎わたらひする小座頭のうたふといふにて、淨瑠璃はふるきものなるを思ふべし。宗長は天文元年三月六日没と二根集に見ゆたさる、年也信長の侍女の作なりといふ附會の説は、貞享元祿の比より日信長公の生る、年也の雜書には、おほく見わたれど、寛永正保の比の冊子にては、いまだ見いでず、慶安二年作「よだれかけ」粹刻は寛文三年なりに、淨瑠璃御前の事より起りし事は、見わたれど、作者のことは、不載、さきにもいふ如く、阿通が事を附會せしは、慶安より後か、又實に阿通が作にて、信長の侍女といふが誤歟。

因に云、十二段のさうし今つたはるは正保三年の印本又寛文の印本活板もありとぞ、印本はさまでの異同なし、古寫本にてつたはるもの二三本を見るに大異同ありて更に校合なしがたし、按にふるき十二段のさうしを、うたふ人のこゝろ、こゝろにてひきなほし、ふものなるべし、印本も此ひき直しうちなるべければ、かの享祿の比うたひし書の全く傳りしとはおもはれねど、強て偽書なりといひ破るもわろし、いづれの本も、天正以後に筆を加へしものとは見えず。

(足薪翁記)

『還魂紙料』の一節

『淨瑠璃姫物語』にも
各種の異本がある

『麓の花』の著者が見
た『淨瑠璃物語』の正
本

『麓の花』の選者は、山崎
美成である。本書巻首に
は好問堂主人著と題せ
り、即ち美成の堂號也。本
書は美成二十三、四歳の
頃の作なりと云はる。文
久三年六十七歳にして歿

淨瑠璃節は何某の侍女小野阿通がつくる十二段に起れりとは誰々も知ることな
り、十二段に起るといふ説はさもあるべし、何某の侍女が作といふは非ならん歟其
故は慶安の印本守武千句前句いとゞだに座頭まがひの杖つきの附句淨瑠璃かた
れ灯のもと又付こよひはや時はうし若ふけはてよこれ天文九年の千句也、當時
淨瑠璃の流行しゆゑ俳諧の句につくりしなるべし、さて何某は天文元年の生れ也、
此千句の時僅に九才、阿通といふ侍女はありやせん、淨瑠璃といふ物幼稚の者を慰
んとて綴りしものとも思はれず、最いぶかしきことに思ひをりしが又一つの證を
得たり、柴屋軒宗長日記享祿四年の條に、(中略)此紀駿河國宇津山にて書るなれば當
時はや田舎わたらひする小座頭のうたふとあるにて、淨瑠璃は古くよりありしを
思ふべし、享祿四年は何某が生る前年なり、何某が侍女に起ると云ふ説の非なるを
いよく知れり。(還魂紙料)

『淨瑠璃姫物語』の板本は大凡六、七種にも達すべし。嵯峨本あり、蓋し最古のも寛永本あ
り、正保版寛文版享保版等あり、十二段本もあれば、十五段本もあり、十六段本もある。『麓
の花』には、「余寛文の比の印本にて、十二段草子とうはぶみせる三冊のものをもたり。
又外に淨瑠璃物語の古寫本二本及び近き寫本一本をおさむ。各異同あるが中に、いた
く違へるは、天正頃の寫本には十六段にわかれてり、そのうへ文もことにながやかに書な
したり。云々」と記して居る。

瀬川如阜の『牟藝古雅志』に載せたる目録より見れば、初めは「序」「花ぞろへ」「外のか

『牟藝古雅志』に載せた『淨瑠璃姫物語』の目録

わんげん」「ふるのたん」「ぬひものゝたん」「内のくわんげん」「しのびのたん」「四季のちやう」「姿見のたん」「しやうぞくのたん」「まくら問答」の十二段なりしに、後に至り「やまと言葉」「精進問答」「御座うつり」の三段を追加し、都合十五段ものとして傳はり居たりしやうにも想はるゝのであるが、夫れには「吹あげ」「東下り」の二段が缺けて居る。而も毎段の順序も他の板本の目録とは彼此れ相違あり、今となつては孰れが書き下し當時の正本なるか判定に苦しむ次第なりと雖も、もとゞゞ『淨瑠璃姫物語』なるものは、盲法師ごもが心覺々に覺て傳へ來り、次第に語り擴めて流行するに至りたるものにして、初めより全段を通じて語りたるにはあらず、望まれては中の一段、二段を取り出しては語り、即興を添へ、喝采を博して居たりしこと、恰も平家を語りたると同じき有様にして、後に至つて追加せられたるものもあるべし、爲めに順序も區々となり、段數さへしかと定まらず、遂には右の如き紛淆をも來たすに至りたるものなるべしと思料せらる。

帝國圖書館所藏本並大槻如電氏所藏本『大日本史料』所載の十二段草紙の目録は孰れも一致する。單り『牟藝古雅志』に載せたるものゝみ太しく相違あり、即ち左の如し。

初 段

發 端

じやうるり

二 だん 目

花そろへ

花そろへ

三 だん 目

外のくわんげん

びじんぞろへ

牟藝古雅志 (二卷)
瀬川如阜の著。狂文集にして、一名を『寫體入禁辭』といふ。正二位公藤の金銀萬能丸の序、意行子の連併附合武藏野の序等以下凡て二十八編を収む。雅俗に論なく、年代の順に排し、下卷には本書の透寫を掲げて、往古質素の趣を示せり。小野の於通淨瑠璃十二段等

刊本なきもの外は大抵
其の印本を模寫せり。六
樹園の序、文政九年丙戌
の自跋あり。(圖書解題)

四だん目	ふるのだん	外のくわんけん
五だん目	玉藻のだん	ふるのだん
六だん目	ぬいものふだん	つかひのだん
七だん目	内のくわんげん	しのびのだん
八だん目	しのびのだん	じやうるり枕もんだう
九だん目	四季のちやう	やまごことば
十だん目	姿見のだん	ござうつり
十一だん目	しやうぞくのだん	ふきあげ
十二だん目	まくら問答	御ざうし東くだり
後ち左の三段を書き加へて通して		
十五段となる。		
十三だん目	やまと言葉	
十四だん目	精進問答	
十五だん目	御座うつり	

『牟藝古雅志』には尙ほ原本初段^序の全文を載せて居る。稽考の資料として左に之を轉載することとした。

但此の本文が當時琵琶法師どもが語りたる淨瑠璃其儘のものであるが、將又讀み本としての十二段草紙の本文なるかは稽へ難し。『淨瑠璃姫物語』には語り本と讀本との二種ありしことは多くの考證ありて、

初段の本文

略ぼ一致して居る。されど孰れにもせよ、左までの相違もあらざるべし。

浄瑠璃十二段序即ち初段 發端なり

扱も、そのうち上るり御せん、ゆらいを、くわしくたづぬるに、たうごくに、ならびなし、ならびなきこそ、ごをりなり、ちよはふしみのげんちうなごん、かねたかどて、みかはのこくしなり、はよはやはぎの、長じやの、ひとりむすめ、びじんなり、かの長じや、よろづにつけて、わくたからを、七ツまでこそ、もたれける、中にも、しろかね、こがねを、水のあはとぞ、思はれける、されども、長じや、子を一人も、持せたまはねば、どころくへ、しゆくぐはんを、もうされける、されども、じげん、しるしは、さらになし、そのころ、三河の國に、はやらせたまふ、みねのやくしへ、参りつゝ、さまざまの、しゆくぐはんを、こそ、もうされける、なむやくし、十二じん、ねがはくば、みづからに、なんしにても、によしにても、子たねを、ひとり、さづけたまへ、そのぐはんじやうじゆ、するならば、やはぎの家、に七ツまである、たから物を、ひとつづつ、しだいくゝに、参らすべし、まづ一ばんに、こんぢのにしきのまもりを、六十六、八尺のかけおひ、五尺のかづら、八ツはながたの、からのかどみ、六十六面、十二の手ばこを、そへて、参らすべし、こがねつくりの、かたな三十六こし、そろへて、らんかんわたして、まいらすべし、これをも、ふくそに、思しめさば、まはのそやを、百すじそろへて、いがきにくみて、まいらすべし、こんじのにしきの、御とてう、月に三十三、八年かけて、参らすべし、あけのいどにて、まきたてゝ、黒のこまおどし、三

十三疋づゝ、五ねんひかせて、まいらすべし、かの、御ごうのまへに、ほうらいさんを、かざりたて、こがねにて、日をつくり、しろかねにて、月をつくり、まいらすべし、すゞめ、小鳥、かも、まがりば、つるのもとしろ、ここのしもふりをもつて、御しやだんを、たてかへく、としに一度づゝ、三ねんが間、たてゝまいらすべし、なんしにてもによしにても、長じやを、あはれど、おぼしめさば、子たねを、一人さづけたまへ、是をも、御もちい、さむらはすば、この御ごうの、内ぢんにて、はら十文じにかききり、はらわたつかんで、やくしになげかけ、あら人神となつて、參る人にしやうげをなし、さむらはんどき、長じやをうらみ給ふなど、ふかくきせいを、申つゝ二七日を、こもらせたり、かくて百日の、まんずるあかつき、ほとけは八じゆんばかりなる、らうそうに、へんじ給ひつゝ、みにすいしやうの、じゆずをつまぐり、長じや御せんの、まくらがみに、立より、いかになんぢうけたまはれ、なんじがなげくところ、あまりふびんさに、八尺のかねのぼうが八寸になり、八寸のかねのあしだが四寸になるまで、たづねまはれど、さらになんぢに、さづくべき、子だね一人もなし、子だねのなき、いわれを、かたつて、きかせ候べし、たかのぬまといふところに、池あり、かのいけのふかさ八萬ゆじゆんなり、なんぢが、たけをもうせば十六丈の、大じやなり、この大じや、人をおよくどり、てうるいを、ほろぼしたるに、より、なんぢに、子だねはなきぞとよ、やはぎの長じやに、うまるゝ事は、かのいけのほとりに、くはんおんごうあり、このごうに、たつとき、御そう一人まします、か

十二段の大意

『聲曲類纂』には、『十二段草紙』の大意を載せたり、即ち左の如し。

の池のぬし、じやうぶつせよとて、よる、ひる、ほつけめうでんの、おこなひ、なんぢに、ゑこうし給ふ、かの、御きやうを、てうもんしたりし、くりきにより、ほどなく、やはぎの長じやに、うまれたり、なんぢが、つまの、げんちうなごんは、人もなき、たかみねにすむ、わしといふ、たかなり、おほくの、どりのかすを、ほろばすと、いへども、れい山の、かねのこへ、御きやうを、てうもん、したるにより、くげ大めうどうまるふといへども、其いんぐはにより、子だねもなし、さりながら、あまりになげくも、ふびんさに、子だねを一人、さずくるぞとて、たま手ばこをひらき、たまづさをとりだし、長じや、御せんの、たもとへ、うつさせ給ひけるぞと、おぼしめし、ゆめうちさめて、くはんぎの、こころかぎりなし、らいはいまいらせ、げこうもふし、くるま五百りやう、そろへて、長じやのもちたる、七ツのたからを、みねのやくしへ、一ツづふ、しだい／＼にまいらせたり、そのうち、長じや、ほどなく、くわいにんして、日かずつもれば、御さんのときたもふ、かれをとりあげ、見たまへば、まことにたまをのべたる、ごどくなれば、淨るりとぞ、なづけたり、このひめぎみには、おちが六人、めのとが六人、十二人あひそひて、てうあい申なり、きのふけふとは、ぞんずれども、はや十四歳になり給ふ、しいか、くはんげんにくらからず、ちうのためには、四十三の御子なり、はうのためには、三十七の御子とぞ、きこへける、ごにも、かくにも、かのふうふの、御よろこび、申はかりは、なかりける。(終)

『聲曲類纂』は齋藤月峯の著。聲曲に關する參考書類を摘録拾纂したるものにして、斯道研究家に取っては尤も有益便利なる參考書也。

齋藤月峯、名は幸成、通稱市左衛門、松濤軒習葉又白雲堂等の別號あり。江戸の人、家世々神田雄子町の名主たり、兼て幕府の野榮納屋を掌る。祖父幸雄は松濤軒長秋と號し、父幸孝縣鷹と號す。皆文事あり。長秋嘗て江戸の故事名蹟を輯め畫圖を加へて江戸名所圖繪と名く。寛政十二年脱稿したれども猶完備に至らず。縣鷹其志を繼ぎ、遠聞逸事を搜索追加して其書を完成す。月峯文化元年に生れ、十歳にして、父を失ふ。此頃より早く既に此圖繪を上梓せんとするの志あり。文政三年其事を始め、天保七年に至り十五年間に於て全部二十冊刻成る。翌年又東都歳時記三冊を上梓す。當時江戸の形勢風俗殆んど此二書に盡せり。後圖繪の拾遺十冊を作りたれども上梓せず。又江戸開府より嘉永元年に至る二百五十九年の沿革變遷を年月に懸けて表し、名づけて武江年表と云ひ、凡て八卷、嘉永三年上梓す。其續編

第一章 淨瑠璃の起源

一一一

淨るり御前十二段草紙とて繪入の刊本三卷あり、刻梓の年號なし、此書お通が述作せるところのものか、又は餘人のなぞらへ作りしもの歟詳ならず、その十二段の大意は、

源の牛若九十五歳の時、奥州秀平の代官金賣吉次が從者となりて、あづまへ下り給ふとき、矢矧の宿長者の家の門邊にたゞすみて見給ふに、家居前裁の壯麗なるは更に類ひすべき方なし、あるじは上るり御せんと申、父はふしみのげんちゆうなごんかねたかとて、三河の國の國司なり、母はやはぎの長者とて、かいだう一のゆうくんなり、かの長者よろづにとみたれど、子をひとりも、もたざりしかば、そのころ三河の國にはやらせ給ふ、峯のやくしへ宿願をこめてさずかりし所にして、ことし十四にならせ給ふ、すがたかたちは、さらにもいはず、げいのう、なさけ、萬の事立まさりて、世にたぐひなくぞ見わけ、されば上るりごせんは、あまたの女房たちの中に、十二人めしぐせられて、くわんげんをはじめてあそばれける、上るりごせんが琴のやく、月さへは琵琶のやく、れいせいはいちりき、十五夜は笙のやく、有明はわごんのやくにて、祕曲をつくし給ひければ、御ざうしかんじ入、笛を出して樂に合し、吹きすさび給ひしかば、上るり姫笛の音をかんじ、侍女をして招きいれ、くさくさの風流の問答ありて、つひに姫君御さうしの才智にめで、僧老の契りをかはし、夜々忍びあひたまひしが、御曹子上るりにわかれをつけて、吉次とうちつれて東へ下りたまふとき、駿河國吹上の

は明治六年に及ぶ。維新以後は職を區長に奉じ、教部省の諮問に因りて歌舞音曲の流系傳記を述べ之を記して五卷を得たり。聲曲類纂を號し世に行はる。其の他武江震災紀略等の著あり。明治十一年三月六日七十五歳にして歿す。淺草法善寺に葬る。月峯又曾て米使來航より開港攘夷の爭論起り東西騷擾の世となりし事實を編年記述して五十卷を得たり。恐慌記事と名く。外交上の參考に供せられんことを著ひ外務省に上納す。省之を賞して數十金を賜ふ。月峯江戸沿岸の事實に熱心にして殆んど寢食を忘る。安政大震の時其家殆んど傾かん。す。月峯飄然として出て行く所を知らず、家人皆以て公務によるとす。次日亦然り。此の如くすること數日なり。家人怪みて其故を問ふ、曰く、此の災は開府以來未曾有の大災なり、今日の現況を後世に残さん欲すれば今にして之を筆せざるべからず、因て府内を巡觀し見聞の限りを筆記するなりと、其勉めたること此の如し。(大日本人名辭書)

濱につきたまひ、わやみにかゝりておもき枕にふしたまひしが、吉次もせんかたなく、宿のあるじにつめよき馬にこがねとりそへてあたへ、御ぞうしの事をたのみ置て、あづまへとて出さりぬ、御ざうしはたゞ一人、うちすてられておはしけるが、此所のくせとして、邪見のものども、きびやうをやむ人を一ツ家にはかなふまじとて、なさけなくも、後の濱に松六本ある中に、ほうき竹を柱として、松の葉をとりおほひつゝ、沼のまこもをひきはへて、おんざうしを追出しける、此浦人、御ざうしがこがねづくりの太刀、かたな、笛ひちりきをぬすまんと、此濱へ行き見て見れば、太刀は大蛇、刀は小蛇とへんじ、近づく者を、のまんとす、是を見るものきもをけしてにげ行ける、こゝに氏神正八幡あはれと思し召、老僧と現じ給ひ、御ざうしの病をとひたまひ、望にまかせてやはぎの上りごせんに此事を示したまふ、姫はおごろき、めのごどもに、ならはぬたびちに御身をやつし、からうじてこの所へ尋當りしに、御ざうしはまさごの下にうづもれて、姿かたちも見わたまはず、金作りの御太刀のいしづき少し出たるを見出して、やうやくにして御なきからを尋出し、神にちかひなごしてそせいを祈りたまひし時、いづくともしらす十六人の山伏出來り、加持したまひしかば、つひに御ざうしよみかへりたまひ、姫君よろこび御ざうしを引具して、はるか奥に、尼のすみけるいほりに宿をかりて、いたはりたまひしかば、快氣ありて、これよりおくへ下り秀平をたのみ十萬ぎのせいを催し、都へ登り平家をつゐたうし、又こそ對

面すべしとて、あたごひらのゝ大天狗小天狗をまねきて、二人の女をやはぎの宿へ送りどづけたまへとたのみ聞ね給へば天狗ははがいにのせて、二人の女を送りどづけたまひ、御ざうしはふきあげを立て、奥州ひでひらが館につきたまふといふ事を、十二段にわかちてかきつづけしものなり。

参考資料としての各書

因に、淨瑠璃及び操り芝居の研究資料としては、『聲曲類纂』、『大日本史料』十二編、『百家説林』、『溫知叢書』等を尤も便利にして有益なる参考書とする。『聲曲類纂』には、『江戸名所咄』、『昔々物語』、『小窓雜筆』萩原宗固の隨筆、『江戸砂子』、『還魂紙料』、『門岡雜談』、『南水漫遊』、『窓のすさび』等、大凡斯道に關する参考書の本文を摘録し、『大日本史料』には、『言緒卿記』、『時慶卿記』、『雍州府志』、『今昔物語』、『麓の花』、『三壺聞書』、『宗長日記』、『守武千句』、『色道大鑑』、『望海每談』、『足薪翁之記』等の本文を摘録せり、而して『溫知叢書』博文館發行には、『奈良柴』、『望海每談』、『近世奇跡考』、『諸事聞書往來』、『寛天見聞記』、『窓のすさび』、『江戸節根元記』、『我衣』、『三絃考』、『俗耳鼓吹』、『用捨箱』、『麓の花』、『本朝世事談綺』、『賤のをだ巻』、『奴だこ』、『東海道名所記』等の全文、『百家説林』には、『足薪翁記』、『柳亭記』、『還魂紙料』等の全文を收めたり。今左にお通の傳記に關する一部を抄録して参考に資すべし。

江戸名所咄 (六卷)
武藏國の事、御城の方角
竝大名小名の屋形、江戸
御城の由來、内廓外廓の
御門竝知足院、日本橋よ
り北の方の町等より數十
目に分ち、江戸の雜事を
圖入に綴りたる地理書な

『江戸名所咄』豊臣、太閤、秀吉公の御臺様の宮仕に、小野のおつうと申て、いうにやさしき上臈のありけるが、容顏いつくしく、ゑかき花結ひ詩歌糸竹のわざも世に勝れ、殊更手跡は聖武の女帝も、同じ世にだにましまさば、はぢ思しめす程なりとかや、有時御臺様通女をめして仰られけるは、いにしへ女の世に勝れた

り。六卷四冊に版す。何時何人の作なるか詳にせず。(圖書解題)

る才藝ありしは、其徳を末世に残し置しぞかし、中略和御前も才藝の程を末世に残して、名のかたみどもなし候へかして御望有ければ、おつう御返事に、いにしへのかしこきは、皆神や佛の化身にてまします故、さやうの事を後の世まで置れ候へども、今拙きわらはの及ぶべき事にござなく候、さりながら仰おもければ、よしあしなには入江のもしほ草、書あつめてさし上、ときの御わらひ草にもなし奉らん、とて、昔左馬頭義朝の末子牛若丸、鞍馬の東光坊の弟子と成、舍那王丸と名をつきおはしけるが、十五歳の春の頃、奥州秀平がもとへ下るとて、金賣吉次信高が家人にまぎれ、三河國矢矧の宿長者がもとに著給ひて、長が娘淨瑠璃御前に忍び逢給ふとて、ぬれにぬれたる言の葉を、十二段にわけて書記し、御臺様へさし上げれば、御臺様御上覽まし、て、扱々言葉のつぎきやかたに、筆勢玉をのべたり、今の世の伊勢の紫式部か、まことは小野のながれ程こそあれとて、御感の餘りに、太閤様の御上覽に備へさせ給へば、秀吉公取上たまひて、是程の物を、其儘すて置んもをしき事也とて、岩船檢校に節をつけよと仰付られければ、檢校仰を承り、則山中山城守に讀せらるゝをつく、と聞て申様、十二卷平家は信濃の前司行長が作にて、生佛と云座頭節を付けると申傳へ候なり、今通女の作に此旨目が節を付申さんこそ、末代迄の譽れにて御座候、通女の作なくば音曲の妙も空からんに、よき幸にも生れあひ候とて、しばらく閑居して節を付かたり初めけると也、彼通女の作は、筆勢伊勢物語に似たりけるを、

節や付がたかりけん、岩船檢校言葉を下しけるとかや、夫より世上の座頭つたへて語りけるを、淨瑠璃節とてはやし、次第に事廣く成て、京田舎遠國端島迄はやりける程に、四條の河原にて芝居をたて、六字南無右衛門といへる女太夫かたりける時、十二段ばかりははや人の聞ふれて珍らしからざるとて、舞にまふ八島、高館、曾我などを、彼節にかたりける故に、淨るり節に八島をかたる、高館を語ると云てより、おのづから其名になりたると也。

夫より左内、宮内などいふ太夫うちつどきて、四條河原にて語りける故に、河原節といふて座頭よりはいやしめけるとかや、扱江戸にても、そのかみは芝居町にて座をはりかたり、其後中橋へ移り、又此堺町へ移り語るなり、其頃は大薩摩、小薩摩、四郎與吉、七郎左衛門とてかたる、中頃虎屋源太夫、油屋茂兵衛、鳥屋次郎吉、南北喜太夫などいふ太夫あり、然れば家々の節出來て、淨瑠璃をもさまざま作り出す事限りなし、太夫ども皆々受領して丹後、近江、長門、丹波、かれこれと、源平藤橘の氏を名乗、芝居をも金銀をのべかざりけるゆへに、度々御改にあひたり云々。

『昔々物語』むかしは淨瑠璃、小哥、せつきやう、ケ様の音曲近年とは替りたり、先淨瑠璃の初めは、織田信長公以之外大病を煩ひ給ひ、病氣本復といへども、大病之跡故大きに草臥給ひ、夜も寝かね玉ひ、さびしがり肥立かね玉ふ、側さらすの伽に城立勾當、角都勾當、小野おつふといふ女、此三人晝夜少も側をはなれず、其

外近習若侍大勢晝夜相詰伽仕、色々の物語申といへ共、毎日毎夜の事故、咄も絶、淋しがり給ふ、其時城玄、角都一同に申は、おつふは能書の文者に御座候なれば、何ぞ而白き文を作り、よみて御耳に入候はゞ、御慰にも可成と申上る、信長則おつふに被仰付、おつふさま、辭退申けれども、再三御所望故、おつふ是非なく筆取て、何をか書つづらんと色々思案し、源義經しやな王殿と申時、あづまへ下り給ふに、三河國矢はぎの宿長者が娘上るりと申女に戯れ給事書つづり、作り濟して讀聞せ申、殊之外面白くおもひ給ふ、城玄、角都を初め、近習に有あふ小性若侍、耳をすまして聽聞し、輿に入、皆々感を催に付、毎日毎夜右の一卷繰返し繰返し讀故あき給ひ、聞人も眠出たり、其時城玄、角都申は、同じ事をぞよみ計にてはいかゞの義に候間、是にふしを附てうたひ候はゞ可然と申、信長公、尤に候、誰にかふしつけさせんと思召處に、此頃御慰の御伽、御領分より出たる丹後七郎左衛門、橋本筑後と云、頓作第一の利發者、殊に聲わざ得たるもの、兩人ともに詰罷在、諸事拍子方氣かろき者成しを、七郎左衛門ふし出來、是は名は何と付可申と伺ふ、淨瑠璃御前の事を作りたることなれば、淨瑠璃の初也、七郎左衛門聲は好し、是を毎日毎夜語るに、信長公ことの外面白がり給ひ、聞人感を催す、これ肥前ぶしの元祖なり、是も亦毎夜、故珍敷からず、此上また城玄、角都鳴物にあわせ候へと所望有て、右兩人談合にて、三味線にあわせて引、彌以おもしろく聞人感に絶たり、信長公、逆の事に、今一流作り候得と、今度は武士の働はげしき事、

世上靜謐の政の文作り候得と城玄角都に申付られ、兩勾當則作る、今度は大江山酒呑童子を源頼光たいじの事を作り立差上る、其時橋本筑後召出され、ふしを付候様にと有、筑後もとより七郎左衛門に替らぬ利發者、頓作はよし聲はよし、思様にふしを付差出す、是を城玄角都三味線に合て毎日語る、依之今に至る迄、十二段は肥前家の淨瑠璃、酒呑童子は筑後家の淨瑠璃なり、今の土佐が先祖なり、扱又三味せん計にては、聞計にて見所なし、いかゞ有んとありければ、又城玄角都申は、西の宮のくわいらいし召て、人形持參仕らせ、人形の仕かた付様にと可被仰付と申、則くわいらいし召よせ給ふ、くわいらいし參、右之旨承り、大きに悦、人形に淨瑠璃文句のあやを仕かたにして人形まわする、是よりあやつりの初なり、元は此二流計なりしが、後には段々番數出來しなり云々。

『門岡雜談』編者不詳

小野のお通といへる秀才の女の事異説色々あり、あるひは太閤秀吉公の侍女とも云へり、織田信長公の側女なりと云、何れも虚説にして其年代齟齬す、改選諸系圖百五十卷或家系圖下の卷載之、其略に云、小野のお通は長澤の松平上州侯の老臣、小野能登守が養女にして、實父は松平隱州侯の老臣長沼吉兵衛といふ者の女なり、吉兵衛は二千五百石を領す、後隱居剃髮して閑齋と號し、九十餘歳にて死す、お通は池田家の家臣鹽川志摩守が妻となる、此鹽川は始高野越中守の女を娶りて男子を生ず、鹽川内藏之助といふ、内藏之助より四代に至り、故有て沈落す、然るにお通志摩守に嫁して一女子を生じ、後故有

『望海每談』の選者は不詳、享保年間の遺老の隨筆なるべし。書中に享保二十年の記事あり、輪王寺宮の歴代を叙するに七世迄に止め居るより觀れば、本書の成りしは元文後明和の比なるべしと想像せらる。江戸府下の神社佛閣其の他の故事雜談を記したるもの。すべて六十箇條あり。

て離別する故、女子を引連て母子ともに後光明院の女御、新上東門院の御前に奉仕す、其後門院崩じ給ひ、又秀頼御簾中御介添となる、其後に東福門院に奉仕し、金子二百兩百人扶持下し給る、此お通文學に達し、能書世にかくれなく、人是を褒稱す、又萬藝に通じ秀才なり、門院御慰のため參州矢矧里淨瑠璃姫の事を十二段の假名文に作り、澤住檢校小關句當節を付てこれを諷ふ、其女子後に眞田家上洛ありし時縁ありて男子を設く、勤ヶ由信就といふ、其母お通の後來江戸に來り、稻葉家披露によりて三千石を給ふ、後に淨閑院と號し、お通に似て秀才能書なり、又糸竹の道に妙なりと云々。

『望海每談』小野のおつうと云女は、常陸水戸の城主武田常陸介信吉卿の家臣、小野和泉と云ふ者の女也、其始關白秀次公の御家人鹽川志摩と云者の妻と成しが、死別の後、天樹院様大阪城へ御入與の時、御介添に成て御供す、尤秀才にして萬に器用なり、然るを陽光院の女御新上東門院様御入内の時、御貫ひにあづかり、參て供奉す、其後御暇取りしかば、直に東福門院様へ招かれ相勤む、後年江戸へ召され百人扶持二百兩の御合力を賜る、かぶりし女なれば、大御所様の御前へも以前より度々罷出しより、尊影を書寫したきよし申上調たり、渠が男子、父とともに播州網干に在しが、池田輝政姫路在城の時召出され、祿を賜ふ、鹽川喜太郎と云へり、外に女子一人あり、お通内裏に仕へし時、相伴て是をも在仕せしむ、將軍家上落の時、眞田内記供奉し逗留の内、此女子と密に通じ、夫より御暇

取り、京都に置かれたり、男子一人産たり、おつう江戸にては、春日局と懇にして執成多きを以て、稻葉家の吹擧にて、真田内記の胤の男子公儀へ召出されて三千石賜はり、真田勘解由と名乗りたり、中略、倍内記の妾たる女には、後年江戸に參らるゝに付、春日局へ頼み入、尾州御簾中御琴の師と成る、尤琴の上手なり、後尾州にて尼と成り、淨閑と號す、おつう小野の姓を殘し、置度に付、才藝ある人と志ざすより、神子上典膳是を幸に所望ゆへ、稻垣三左衛門と云人執持にて小野を貰ひ、小野次郎右衛門と號す、おつう學才あるを以て、世に玩ぶ琴の組の十二組の歌の文句をつくる、中略、又東福門院様の仰を蒙り、十二段の文句を述作す、是淨るり御前といふ女の事より、あみ立しゆる、是を淨るりと呼たる始也、戸田左門殿の抱ね座頭澤住檢校、京にて章句を付たり、小關勾當是を傳へて、半琴に合す、近江椽淨雲是を嗜で、淨瑠璃太夫と成る、彼れ始は鍛冶の弟子仁藏と申者也、是を好で名人となる、筑後と云は、其子也、肥前と申はその弟子なり。

『筆のすさび』は橋彦通の著。文學、史傳其他和漢の事實を考證したる隨筆也。文化三年板行。

『筆のすさび』小野のお通の母は室町松本町に住せし人なり、お通の女は、真田河内守といへる人の妾となりて、信州松代へ行、後に於通を手元にて孝養したしとて、迎の人を登し、於通を松本へ引とる、於通松本へ下る道にて、姥捨山の近きあたりを通りけるに、迎の從者どもいふには、是よりわずか七八丁ばかり廻り道すれば、姥捨山を通りまうすべく候、名所の事ゆる御覽なさるべく候はゞ、廻り申べくやといふに、於通承知せず、廻り道早めて山へは行ずしてけり、其時

お通の歌に、

姥捨の山には入らし名を聞て　くるまをかへす人もこそあれ
とよめり、こは史記號縣勝母而曹子不入名邑朝苛墨子回車とあるをとりてよ
める也、近時には心がけのよき婦人にてありし也、此事の始末詳に記せしもの、
松代の長國寺にありと實岩和尚かたりき、河内守といへるは眞田伊豆守の實
弟にて、七千石を分て別屋住の由なり云々。

三州冷泉寺は矢作矢端或は矢端に在り。彼驛に金高長者と云者有けり。嬢
を淨瑠璃と號く、源の牛若丸奥州に下る時、一夜ひそかに彼女に逢ひて再
會を契り別れ去り給ふ。後期を過して歸り來らざりしかば、彼女は恨みて
菅生川へ身を投て死す。其侍女冷泉といふ者有、悲歎の餘り尼となる。淨瑠
璃秘藏する所の十二の手箱を紀念に得たりしをひさぎて、阿彌陀堂を建
て冷泉寺と號すとあり。本文縁記の可否は知らざれ共、冷泉寺の號あるを
見れば、淨瑠璃十二段にいへる所の侍女冷泉の名も由緒なきにしも有ら
じかし。右淨瑠璃御前の御影堂、參州岡崎舊城内二の丸に有、故に今迄は他
所の者の見る事なしと、彼城下に住ける者の語れり。牛若丸十五歳の姿に
て、淨瑠璃女十四歳の畫像なりと云々。淨瑠璃女の墓は西矢矧左の方圓の
中に石碑、又矢矧の堤の少し西に誓願寺といふ寺有、是に有は木像なり(和
漢三才圖會、原本は漢文也)

第二章 扇拍子時代の淨瑠璃と三味線の由來

扇拍子時代の淨瑠璃 平凡單調な曲節 扇拍子 盲人一派の世業

當時の遺風 與淨瑠璃

三味線渡來の年代 永祿説と文祿説 傳來の徑路に付きても傳説

區々である 胡(小)弓と三味線 参考としての各書の記事 『糸竹初心集』『世事』

百談』『糸竹大全』『琉球年代記』『竹豐故事』『本朝世事談綺』の一節

扇拍子時代の淨瑠璃 平凡單調な曲節

江戸砂子 (八卷)
菊岡沾涼の著。江戸の名所温故誌なり。著者が凡例の一節を擧げて、本書の組織を示さん。凡編纂の序次、新古に拘らず御城を以て始す。首巻は先武陽の大意を論じ、次に御城を始として御外曲輪の内を終る。第二は江城の東淺草橋場に始め、

扇拍子時代の淨瑠璃の面影は今に於て偲ぶに由なしと雖、謠と平家琵琶とをつき混たやうな幼稚な曲節にして、説經、祭文などの節も多少は加はり、趣向も章句も淺薄卑近な語り本が三ツか四ツ、同じ曲をば繰りかへし、別に合はすべき樂器とてもあらざれば、僅に扇を掻き鳴して拍子を取ると云ふ位のものにして、至極單調平凡のものなりしこととは大概想像するに難からざるのである。

『江戸砂子』には、

「瀧野、澤角と云兩檢校琵琶の妙手なりしが、淨瑠璃物語をつどり直し、曲節を語り出せり、其頃は三絃に合する事もなく、右の爪さきにて扇の骨をかきならし拍子をとりたりとぞ」云々。

『鸚鵡が杣』の序文には、

扇拍子

下谷千住に終る。第三は江城の良、湯島、谷中に始め、駒込、小石川に終る。
* 第四は江城の乾、牛込、四谷に始め、赤坂、澁谷に終る。第五は江城の南、芝西久保に始め、品川目黒に終る。第六は河東、深川、本所に始め、龜井戸、隅田川、真間に終る。而して各條神社佛閣舊蹟の來歴及び方角等を記せり。享保十七年壬子の原遷にして、明和七年庚寅に恒足軒之れを再校増補して、同九年壬辰に刊行す。
菊岡沾涼は俳人なり。初の名は房行、通稱は藤右衛門といふ。崔下庵とも號せり。俳句を芳賀一昌に學び、後、内藤露沾に學びて沾涼と改む。櫻町天皇の延享四年丁卯六十餘にして歿す。(國書解題)本朝世事談綺亦其の著に係る。

盲人一派の世業

「淨瑠璃はじまりて百十餘年、瀧野、角澤兩檢校、平家にくはしく琵琶の妙手たりしより、淨瑠璃物語といふ雙紙をつどりなをして、藥師の十二神をかたごり、十二段といふふしを語り出せり、その時は三味線にあはするといふ事もなく、扇をひらき、左にもち、右の手の爪さきにて、骨と地紙とを搔きならして、色々の拍子を取りたる事也。その十二段の目錄さへ、今は知りたる淨るり語りもなし」と記して居る。

以て當時の平凡單調なりし淨瑠璃の一般を推考することが出来るのである。

澤住、瀧野の兩檢校が、新たに十二段に節附して語り出した年代は、明かには知り難し。『色道大鑑』には、「抑淨るりは瀧野勾當ふしを付て、文祿三年甲午の年よりかたりはじめたり、此じやうるりに本ふしとてあり、此本ふしに表裏とて祕傳あり」云々と記して居る。

其の文祿三年と押へた根據は明かならずと雖、大凡其の前後の事なりと推定すれば大差なかるべし。

されど此の單調平凡な淨瑠璃も、三味線の渡來と人形操りの發明とによつて倏忽にして面目を新たにし、いよ／＼三味線に和して語ることとなりてよりは、男女の太夫も輩出し、男、太夫としては杉山七郎左衛門後ち杉山丹後あり、薩摩淨雲あり次で淨雲の京の次郎兵衛あり、目貫屋長三郎あり、河内左内等あり、女流には六字南無衛門、左門、よし高など云へる語り人も出で、俄かに盛況を極むるに至つたのであるが、三味線渡來以前の淨瑠璃語りと云へば、座頭と稱する一派の盲人にして、宮社などの人集りの場所や、往來繁き街衢の傍側などに、さふやかなる日除けなどして之を語り、招かれては饗儀の席にも侍り、若き者等の酒興の相手ともなつて、世業とも

當時の遺風—奥淨瑠璃

なしたる薄倅の輩は旅より旅へとさすらひ涉り、泊りくゝの旅の宿に、一齣二齣を語つては僅かな收入みいりに其の目を送ると云ふ、果敢なき運命の下に彷徨して居たのでありし。但し、三味線に和するやうになり、淨瑠璃の面目一新せられたる後と雖、僻陬の地方なごには當時の曲風はるかの後までも遺り、後年、奥淨瑠璃又は仙臺淨瑠璃と呼ばれたものゝ如きは即ち夫れにして、江戸馬喰町の永壽堂といふ繪草紙屋には、元祿寶永の年に再刻した『阿彌陀の胸割』、『さりかね會我』、『熊谷』杯六七種の摺板傳はり居り、文化の頃までは年々春毎に鋌釘して仙臺地方の注文に應じて居たこの事である。

『俳枕』寛文年問選に。

奥淨瑠璃緒絶々の橋や古扇

調 和

『軒端の獨活』延寶八年刻松意選に。

琴瑟律疎に扇を調ふ

昨 今 非

奥淨瑠璃頻迦のなまり鴈過て

同

『其袋』元祿三年刻風雪選に。

みちのくの三絃きけば扇かな

錫 立

とあり、孰れも奥淨瑠璃を咏つたものである。

三味線渡來の年代—
永祿説と文祿説

三味線渡來の年代に付いては永祿年代説と文祿年代説との兩説がある。永祿と文祿とは其間三十年の差がある。『三弦考』、『絲竹初心集』は文祿説にして、『竹豊故事』、『本朝世事談綺』、『絲竹大全』等がは永祿説である。『竹豊故事』には「永祿五年壬戌の春琉球より泉州堺の津に渡り來り、

室町殿日記（寫本二十卷）
僧林長教の著。萬松院足
利義晴の當時、書記等の
筆録せる日記の、永祿の
亂後に残りたるものごも
に添がきしたるものなり
といふ。二十卷四冊に寫
傳す。（國書解題）

三味線傳來の徑路に
付きても傳説區々で
ある

胡弓と三味線

其頃の武將織田信長公下知有て、是を朝廷に獻じ奏覽に入奉らる。」と記してあるが、何に據つて永祿五年と確と年次までも押へて斷定したかは明かならざれど、『室町殿日記』天文、永祿の頃の日記には、「遊女二人を中に置きて何心なく三味線を弾きて遊び居ける」と記し、文祿五年慶長の跋ある『義殘後覺』には、「七月十五日夜藝州御城の馬場にて諸方の侍小性衆、さみせんつゝみにて大をどりをはじむるほどに、大藏之丞も、道場の太鼓三尺四方有けるに、つなを付て首にかけ、是をうつて中をとりしたまふほどに」云々の記事ありて、文祿五年の頃既に藝州邊にまで廣まり、太鼓に合して演奏せらるゝ迄に進歩して居たものだとすれば、少くとも文祿以前に渡來したるものなることは推斷するに難からざる次第なれば、永祿年代説當を得たりとすべし。

三味線傳來の徑路に付きても傳説區々である。『三絃考』には「元朝にはじめて製造し、琉球に傳はり、琉球より我朝に渡來したるは文祿年間なるべし」と云ひ、『糸竹初心集』には、「石村檢校琉球に渡り、親しく習得て歸り、琵琶にやつして造り初めたるものなり」と記し、『琉球年代記』には、「後柏原院の御宇、梅原少將琉球に漂著し、按司の女と契り、月琴の術を覺わ、後、日本に歸り其子石麿、月琴よりうつして之れを造り弘む、石麿増官して石村檢校となる」と傳へて居るのであるが、大槻如電氏の『俗曲の由來』には、

三味線はもと葡萄牙の樂器にして、原名をらべかと云ふ。日本にては訛りてラベイカといへり。始め琉球に渡來し、永祿の末年日本に入れり。今の三味線にはあらず、胡弓なり。胡弓はバイオリンと同物なり。此胡弓なるラベカは三糸にして、弓の如

きものに馬尾を釣り、これを以て音を出せり、よりて胡弓といひしなり。此樂器は漸次廣まれりといへども、當時の盲人は琵琶に堪能なれば、撥を以て弾くに慣れ、胡弓を以て奏するを難んじ、遂に琵琶の撥を以て弾き初めたるが三味線の始めなり。とあり。兎に角琉球より傳來したりと云ふ點だけは、各説とも一致する。

尙ほ左記各書の記事を参照すべし。

『糸竹初心集』抑日本に三味線を彈初し事は文祿の頃ほひ石村檢校といふ琵琶法師あり、心たくみにして器用無雙の者也、あるとき琉球の島に渡りけるに、彼島に小弓、といひて糸三筋にて鳴す物あり、小き弓に馬の尾を弦にかけて、ひくなれば、小弓とは云とぞ、石村これを探り見るに琵琶をやつしたる物なり、糸のしらべやうも一二はびはの如く三の糸はびはの三よりも二調子ほど高くあはせたる物なりと思へり、所の者いひけるは、此島には真蛇の多き所なるがらへいかといふものありてこの真蛇を食物とする、さればらへいかのなく、聲小弓の音に少もちがはざる故、真蛇を退んが爲に專ひく也、琵琶法師も爰に逗留の間はひきたまへといふ、其後石村京都に歸りて同じく琵琶をやつし、此三味線を造り出せり、琉球の島より得て來るといふ心にて琉球組といふ事を作りおけり、弟子虎澤檢校に残らず傳へしかば、虎澤又組端手といふ事を作り出す、虎澤より山野井檢校傳授して世に弘る、糸の合せやうはこれも一二は琵琶の如く三の糸はびはの四の糸調子也、たやすき物に似てはなはだ彈得がたき物なり云々。

『世事百談』は山崎美成の著。美成別に『麗の花』の著あり、因に云、山崎美成、通稱久作、北峰と號す、江戸下谷長者町の賣藥舖にして長崎屋新兵衛と稱せり。家業の傍ら著作に親み、後ち本業を捨て、屏居し、幕臣鍋島内匠頭に仕へ、専ら文藝を以て其の顧問となれり。文久三年六十一にて歿。

『糸竹大全』は松風軒（其の本姓不詳）の編む所、

『世事百談』三味線は、もと蠻樂の器にて、琉球にて専ら翫び、海蛇皮もて張りたれば、世俗はジャヒセン蛇皮といへり、文祿年間警者石村檢校、それが弟の平兵衛といふものとおなじく琉球國に渡り、兄の檢校は、其曲を習ひ、弟はその製作をならひ、得て歸り、石村平兵衛は、始めて三味線をうちたり、そのかみは寸尺定まりなし、さてかの石村檢校が琉球にて習ひたる唄、

チャウリヤウ、フリヤウ、ソレヒヤウラニ、リヤウ、ニ、イヨアリヤヨイ、フリヤウ
ソレルリヒヤウフリヤウ、

このうたの三味線の手にて、石村檢校のはじめて作りたる唄、

ちよの始のてんに照る月は、十五夜が盛りよの、あの君さまはいつもさかりよな、

檢校これに次ぎて、七組の曲を作る、琉球組もその中なり、この時猶三味線の寸尺定まらず、一二三ともに上駒をかけたなり、その弟子虎澤檢校新に六組を作る、その後柳川檢校は、始めて三味せんの長さを二尺一分と定む、その弟子淺利檢校、佐山檢校、市川檢校など、みな三味線の名人と稱す、ことに佐山檢校の端手七組を作り、手事といふことをはじめむ、かつ二上りの調子をはじめて、弾き出だす、若みどりといふ唄二上りの調子のはじめなり、この後連川檢校一下りの調子を引きいだすといへり云々。

『糸竹大全』大奴

三味線の起は、永・祿・年・中・に・琉・球・國・よ・り・是・を・わ・た・す・其・時・は・蛇・皮・に

も「知音の謀」大坂佐
「紙書」の三書を集成した
るものゝ如し。

て張て二絃なる物なり、泉州堺の琵琶法師中小路といひける盲目に人の取らせたりけるを、此盲目よろこびてしらべつゝこゝろみけれど、をしへをかざれば音律かなはず、是を心憂く覺て長谷の觀音へ詣で一七日參籠し彈やうを祈りしに、あらたなる靈夢有て階を下る時に大中小の絲三筋盲目が足にかゝる、是より三筋の絲をかけて弾くに無盡の色音いでたり、夫より三絃にきはむる故に三味線としかいふ、其砌はむざとひきてなぐさみとせしに、しばらくして虎澤といひし盲目是をひきかため、本手破手といふ事を定めて人に是を傳ふ、其後澤住といふ盲目ありて是をひき覺て歌にのせてひき出したり、夫より卿家武家の内に賞翫させたまふ方多くありて自らもひかせたまふ、其後は此器に緒をつけて首にかけてひくを用とす、其後平家の係にして淨瑠璃といふ物始りつゝ語り出たりしかば、びはをひく如くに淨るりといふ事をのせて三味せんをひきはじめたるは澤住がなす所、然して後寛永の始攝州加賀都、城秀といふ座頭兩人、世に三味線を彈出すに此堪能なる事古今に獨歩せり、東武にはしりて大家高門もて遊びものとて既に盲目の極官に昇進す、加賀都は柳川檢校、城秀は八橋檢校となれり、今にいたり三味線において柳川流、八橋流といふは是なり、其後出世したり、檢校勾當の中に此兩檢校をあざむく程の名人餘多あれども、先柳川八橋兩檢校は三味線の曩祖たり、是によつて今世三味線の工夫に八橋の柳川のといふも此名字よりゆるされたる者なり云々。

『琉球年代記』後柏原院の御宇の頃梅津少將といふ人、生質音樂に委しかりしが、應仁の亂をさけて長門國なる大内義隆によりたまひしに、義隆の家老陶尾張守晴賢ひそかに少將を害せん事をはかりしかば、義隆此事を知りて文を書して毛利元就へさげしめまゐらす、其船暴風にあふてたゞよひ琉球島に漂著したまひしを、兼城按司いつくしみまゐらせしに、按司のむすめよく月琴を彈せり、少將はもとより音律にたくみなりしかば、立所に學び得て月琴の妙手とはなれり、つひに此女に通じて夫婦となり、ともに月琴の名國中にかくれなかりしかば、尙元王このよしをきく、夫婦を宮中にまねきて月琴をこゝろましましむ、少將王位をしやうしてうたを作りうたひたまふ、いま琉球組と世にとなふるものこれなり、徂徠の琉球聘使記に三線歌琉曲也といふに同じ、王この曲にかんじて品々ひきで物有て日本へ歸し送らしむ、永祿五年の春夫婦ともに豊前國につき、夫より同國石田村といふ所に隠れ住たまひて一子を生む、幼名を石麿となづく、此石麿晩年に及んで瞽となれり、月琴の祕曲を父母よりうけ得たりしかば、其形をものずきして丸胴を角胴に製し、八乳の猫皮をもちて兩面にはり、月琴の意を以て海老尾に月の形をのこす、此人のち増官して石村檢校とはなれりけり云々。琉球にては椰子をもて胴をつくり、うすき板にてうらをはり、蛇皮を以て表を張る云々。

『竹豊故事』抑々三味線の來由と謂は元來琉球國の弄そび物故琉球絃と號す、琴瑟琵琶和琴等の音を摹したる物也、日本に是を傳來せし始めは人皇百七代の帝

正親町の院の御宇永祿五年壬戌の春琉球より泉州堺の津に渡り來り其頃の武臣織田信長公下知有て是を朝廷に獻じ奏覽に入れ奉る時に帝久我右大臣通奥卿を以て其頃音曲に名譽を顯はせし琵琶法師瀧野檢校を内裏に召出され是を彈せて叡聞在ませしに其郢曲甚はだ妙音成しを叡感ましましぬ其砌京都に名を得し琴琵琶の細工人龜屋市郎左衛門石村と云ひし者此三絃を模し作りけり琉球には三絃の胴を蛇の皮を以て張ると云へ共我朝に斯る大き成蛇皮なし依て猫の皮に替て是を張たり此三絃の形も大體琵琶に同じ總尺三尺は天地人の三極を表し掉長二尺餘は陰陽の二氣海老尾の五寸は天の五星胴幅六寸は地の六合同長さ六寸餘は地の六種震動厚さ三寸は高下平の三形を象れり轉手絃手又天柱共云也是天の象ちを表し反首に半月の形も有海老尾の糸巻に三臺の星を象ぐる一の糸は虛精と云二の糸は陸淳と云三の糸を曲順と號す十二調子の内一越斷金平調勝絶の四ツは一の糸の中に兼備ふ下無雙調鳧鐘黃鐘の四ツを二の糸に兼備へ鸞鐘盤涉神仙上無等の四調子を三の糸に兼備ふ首楞嚴經に曰譬へば琴瑟琵琶の妙音有といへ共若し妙手無んば終に發する事能はずとの佛説のごとく堪能の達人此三絃を鼓則は衆人の神魂に徹して邪念を退ぞく而れば自然と六根を清淨ならしめ神明佛陀の加護に預るべし亦懦弱好色の意を欲して彈則は聞人搖欲惑亂の念を發す尤欽まざるべけん哉然るを傾城遊女藝子野郎等の業に翫物となせるは歎かは敷事はならずや當世の三絃は其形少し異

山崎美成の『本朝世事談綺
正誤』には左の如くに云へ
り。

三のはねかなを閉口にて
みさいふさいへるこささ
もあるべし、んばにもじ
にて、片假名のニをはね
てンとなるさいふ説はよ
けれど、そをかながきに
して、んになるさいへる
はうけされぬこさなり、
美成案に、んばいろはか
なのにもじのあさをはね
たる者にやさ覺ゆ、んを
んさしたるなるべし、南
留別志一の卷乗穂録二篇
下の卷なごに見ゆる、
ん字の説、儒者の論さい
ふべし、又昆陽漫録三の
卷に、關字なりとし、
同文通考三の卷に、梵字
のンに取れりなさいへ
るは、まずくうがてり
さいふべし、されど先哲
の説を考證に備へなくの
み。

にして總長三尺一寸五分海老尾五寸二分掉長さ二尺五分胴幅六寸同長さ六寸
六分天手三寸五分也云々。

『本朝世事談綺』三線。永祿年中琉球より渡る、その時は蛇皮を以張る、或人泉州
堺の盲人中小路と云ふものにござせたり、其後虎澤と云ふ盲人本手破手といふ
術を引き始む、慶長の頃澤角と云ふ盲人琵琶の名人なりしが三線を手練し小哥
にのする、そのころ淨瑠璃節出來たり、これに載て彈るは澤角がはじめなり、其後
大阪に加賀都、城秀の兩人術を得たり、江都にくだりて加賀都は柳川檢校と成城
秀は八橋檢校となれり、當時八橋流、柳川流と稱するは此兩檢校の術成り、是を三
線と號は三の線あるゆへなり、三の字さみと云は閉口の音にて、はねがなを、みと
いふ也、目論はもくろみ燈心はどうしみ御帶はおみ帶などの類ひなり、しかるを、
いつのころ、何者の書そめしに、や、味の字を加へて世間一統に三味線と書、又はね
が、なの、んを、近來むを用ゆ、元來んは、に文字なり、片假名のンは、ニ文字の跡をはね
てンとし、此ンを又んとかなに出たるもの也、當時此かなつかひの粗のこれるは
紫苑苦膽蘭錢など也、難波はむかしの假名書をよびて今以なにはといふ也、此類
多し。

第三章 傀儡子の起源と傳説

傀儡子の起源 平安朝時代既に傀儡子あり 室町時代の日記に散見せる操りの記事 永祿天正の頃度々大内へ夷舁參る 醍醐の花見の餘興に操り土偶

「でく」「くどつ」の語源 遊女を「くどつ」と呼んだ淵由

傀儡子の手振りと行装 茶のく衣に赤のく髪の小鼓 寶曆明和の

頃の江戸の傀儡子 淨瑠璃は義太夫節マンシヨマ

土偶操りの祖、百太夫 百太夫の傳記、淡路座の起源 神官道兼道兼の人形、百太夫の

伎兼太夫の工夫、瀧祭りの人形舞、京阪までも上ほりて好評を取る、百太夫と改名、淡路に移る、引田源之丞、淡路座の始め、他の一説、引田重太夫 參

考すべき各書の記事 『伊吹山嵐』の唱歌

傀儡だんぎょうを淨瑠璃じゆるりに和あはして操あそることを工夫し出したのは、澤住檢校の門人目貫屋長三郎

なるが、其の相談相手となりし傀儡師は西の宮の引田某とあるも、果して爾るか否か保し難し。註 目貫屋長三郎京都東洞院二條上る町に住す。三絃家を以て世に稱せらる。嘗て業を澤角檢校に受く、最も妙手たり。兼て戯文を善くす。嘗て八島高館と云ふ淨瑠璃を作り、後陽成帝の

觀覽に入り、初て淨瑠璃太夫の受領を受く。是れ淨瑠璃芝居の元祖なり。述る所、其他に都巡見左衛門等の數種あり。(淨瑠璃大系圖早引人物故事、大日本人名辭書)

傀儡子の起源はなかくに古し。大江匡房の『傀儡子記』に、本文は大本日本史料所載のもの

「傀儡子者、無定居、無常家、穹廬氈帳、逐水草以移徙、頗類北狄之俗、男則皆便弓馬、以狩獵爲

平安朝時代既に傀儡子あり

按するに

「或雙劍弄七九」「或跳雙劍弄七九」なるべし、

「曼延之戲」「曼延之戲」なるべき歟

「能人自」「能眩人目」を作すべきが如し

「父母夫知不誠」「父母夫婦知不誠之」なるべき歟

室町時代の日記に散見せる操の記事

永祿天正の頃度々大内へ夷舁參る

醍醐の花見の餘興に操り土偶

事或雙劍弄七九或舞木人鬪桃梗能生人之態殆近魚龍曼延之戲變沙石爲金錢花草爲鳥獸能人自女則爲愁眉啼粧折腰步齟齒咲施朱傅粉唱歌淫樂以求妖媚父母夫知不誠口丞雖逢行人旅客不嫌一宵之佳會徵嬖之餘自獻千金繡服錦衣金釵鈿匣之具莫不異有之不耕一畝田不採一枝桑故不屬縣官皆非土民自限浪人上不知王公傍不怕牧宰以無課役爲一生之樂夜則祭百神鼓舞喧嘩以祈福助東國美濃參川遠江等黨爲豪貴山陽播州山陰馬州等黨次之西海黨爲下其名偏則小三日百三千載萬歲小君孫君等也動韓娥之塵餘音繞梁聞者霑纓不能自休今樣古川樣足柄竹下催馬樂里鳥子田歌神歌棹歌辻歌滿固風俗咒師別法士之類不可勝計卽是天下之一物也誰不哀憐者哉

とあるより稽考するも古く平安朝時代既に此の戲を業とする一部の賤民ありしことは明かである。

『看聞日記』には、「永享四年八月七日晴自内裏アヤツリ燈爐一被下原註雖燈爐如花臺一皆人形等作物也谷合戰鶉越馬追下風情也殊勝アヤツリ言語道斷驚目畢自室町殿被進」エ々とあり、『滿濟准後日記』にも、「永享五年七月十二日晴自大乘院燈爐二送賜了内々依所望也アヤツリ以下驚目細工法師被相副之若燈爐損事在は爲直エ々」と記しあるより見れば室町時代の初め既に操り燈爐などの仕かけ細工も出来るほどの巧者もありしなるべく、『御湯殿上記』には永祿天正の頃度々大内へ夷舁參り御車寄等にて人形を舞はし時には能の所作なども演じ御覽に入れたる事ある由を記し小瀬『太閤記』醍醐の花見文祿三年三月なりの條には、「殿下此處註三番小川土佐守受持の茶屋也にしばしおはしましてくる坊の上手あやつりの名人

を長谷河宗仁を以召て、色々風流を盡すべしと宣ひつゝ、各を慰めたまふ」と記しあるより見るも、操作の伎倆も次第に發達し來り、目貫屋長三郎が淨瑠璃に和することを工夫し出した當時には、既に相應に見るべきものありしことは勿論である。

源順の『和名抄』には、傀儡師、でくつ、ひく、い、つと附訓せるが、でくつと訓する語源は詳かならず、恐らくは土偶の二字の音轉なるべく、往々出狂の坊などと書けるもあれど當らざるべし。遊女を傀儡と呼び慣はしたるは、攝州西の宮より出し人形舞の輩世間を廻りて人形を舞はすに、遊女の木偶を第一番に立て遣ひしより、轉じ來れるものなりと云へるもあれど、和歌雜題信じ難し。齋藤月岑は「いにしへは、遊女にさへ此の伎をならはして酒宴の興とし、遊女をさして傀儡とはよびならはせり」云々と云つて居るも、此亦俄に首肯し難し。恐らくは野上の里、鏡山などの傀儡舞しの女等が次第に墮落し、藝はただいさゝかの名のみにして、けいせい、やほちとかはらぬありさまとなり、枕席にも侍して色を鬻ぐを専らとするに至りたるより、はては轉じて一種の稱呼となり、くづつと云へば直に遊女の別名と合點せらるゝまでに至りたるものなるべし。

『賤者考』には、

「さてくづつといふも同じさまながら、傀儡をまはして興をそへたるが一轉して珍らしどもてはやしけるより、又一種の如くなりたるなり、『詞花集』にくづつなひき、『新續古今集』にくづつ阿古侍従とみね散木集などにもくづつのことあり、くづつといふ葛藟の綱は、つよくして、きれざる故に、傀儡につけて、此綱をひきて舞はすより、やがてく

源「でく」「くづつ」の語

遊女を「くづつ」と呼んだ淵由

『詞花集』卷の六に
東へまかりける人のやさ
り侍けるかあかつきにた
ちけるによめる。
くづつなひきはかなく
もけさのわかれのをし
き哉いつかは人をな
らへてみし。

『新續古今集』卷の九に
尾張の國に京よりくたり
ける男のかたらひつき侍
けるか、あすのほりなん
さしける時、しぬばかり
おほゆれば、しくへき心
ちせぬよしいびけるに。

傀儡阿古

しぬばかり誠になけく
道ならば命さともとの
ひよそおもふ
同じく『新續古今集』卷の十

あつまのかたよりのほり
けるに、あなほかいふ
所にさまりて侍けるに、
あるしの心あるさまにみ
ねければ、あかつきにた
つさて、堪覺法師、
しるらめや都を旅にな
しはてく猶あつまらに
さまる心な。

返し傀儡侍從

東路に君の心はさまれ
さも我も都のかたをな
かめむ。

装 傀儡子の手振りど行

くつといひ、文字をもあてたるなり、畢竟俗にいはず人形つかひといふ事なり、後は此
わざ男に轉じて釣人形となり、又一轉して淨瑠璃にあはせてあやつりといひ、又轉じ
ては釣人形などいふわざも出來たりぬ、遊女傀儡どもに、其はじめこそ前にいふ如く
なりけれ、後々は藝はたぶいさふか名のみにて、けいせいやほちさかはらぬありさま
になりもてゆきつゝ、枕席を專とせしもあるべし、略中又前にいふ傀儡師の類は、元は女
の傀儡と業等しけれど、女の方は色をもて淫を嚮ぎしよりこれにうつり、彼は其業す
すみて遂に操人形とはなれり、又右のものは別にて、いとをこなる昔風なる人形を、
おのが首にかけたる函よりかはるく、出してつかふ者を傀儡師とは呼なれ、俗に首か
ふ、是等はいかなる故にか、津國西宮の支配をうけ、世に夷下などいひて賤まるゝ者な
り、此夷下さいふものくさくあるよし、何々なるか、他日たつれて注すべし、サハラ淡路國に一座あ
り、與次郎などいふも此類か、浪花わたりのあやつり師も此命をうくるかしらす、察するに、も西宮の社家にたち
りて諸國をも廻り、操戲場をする者も此屬なるよしなり、いる奴僕などのさる業をし、そめ
て、諸國を勸進せし事など有しならむ、その類鹿島神社の事」
觸などいふものもありて、實の社家ならぬたぐひなりぬ」
と云つて居る。此の説最も稽ふべし。古き作歌にも美濃の野上、近江の鏡の宿など
の遊女をくゞつと咏めるが見ぬ、俊頼の『散木奇歌集』には「うからめはうかれて宿も定
めぬか」「くゞつまはしはまはり來て居り」と附けたるが見ゆ。

『よたれかけ』には、

「手工の坊―世の過はひはおかしきものかな、山また山にめぐりし、しつたんく―と鶏
旦の内祝ひして、出たつしやの紗の衣手も、はるく―きぬる京の町、うるはしげなる友

しつたんくの大鼓
にちよの小鼓

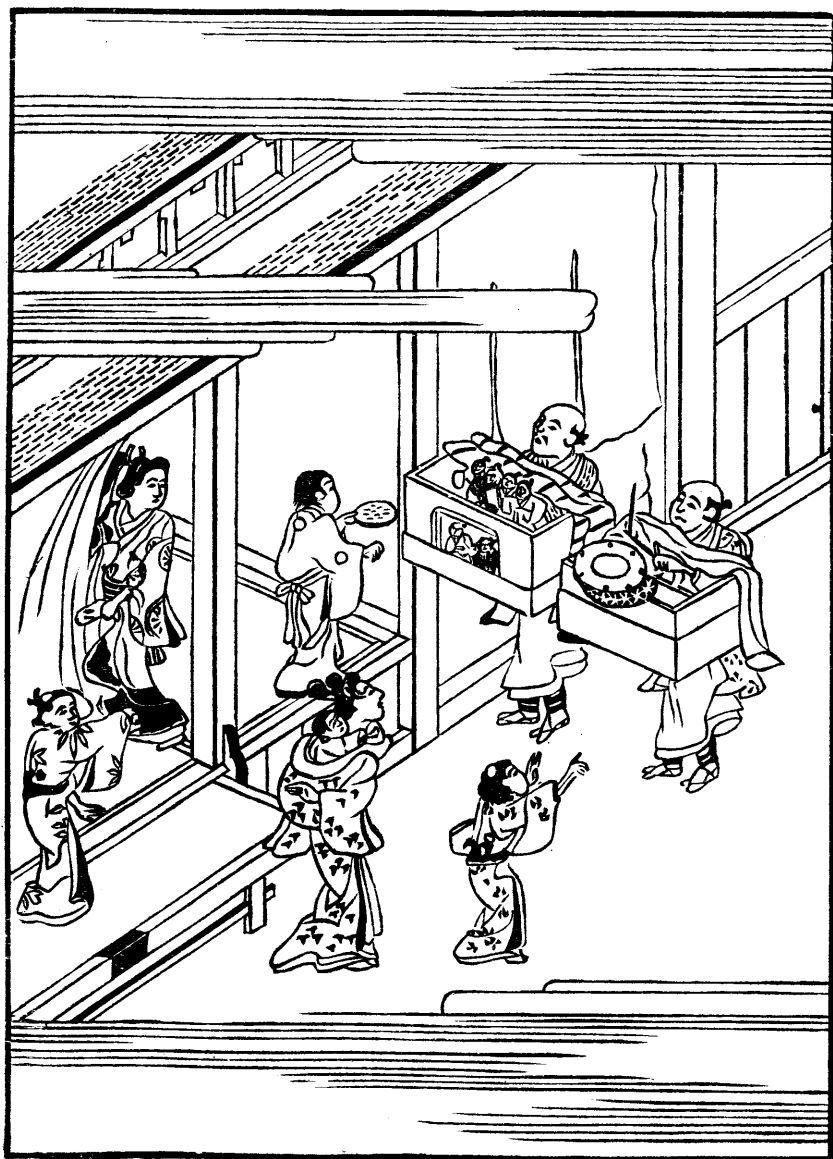
茶のく衣に赤の赤
の髪

なひには、あかぬよはひの萬歳樂、うたひてまはす人形の、手くどつめける手工の坊主
のすゑくは、
欲あかづける
木綿わんぼう
に引かへ、紗の
紗のころもを、
茶の茶の衣に
きかへ、あるひ
は赤のく髪
をあたまには
やし、ちいさき
櫃をせおひ、銅
鉛も中におひ
やなしやど、あ
やしき奥島の
おほひを打か
ぶせ、正面にふ
なぶりをたむるの藥となれば、地黄煎のあたひにかへて、御乳めのごもみどり子をい



たつの人形をあや
つり、まづ大鼓をし
つたんく、どうて
ば、小鼓をちふ、どう
ちはやすもいと鹽
らしき手もとなれ
ば、がむしやいふお
さなひの心をもや
はらげ、たけき成人
の小娘むす子ごも
のなぐさみ草とな
る、まして竹馬の童
子は是にあつまり、
物ぐさげなる海瀧
まはしの手癖をな
をし、穴市をする土

だきつれ、「ちよとなれば乳ぶさならねど人形をすひて機嫌のなをるはこの子」と



はな哥にのせて、ゆぶりたゝすめば、家ごとの門前に市をなす、世のにぎはひいとめで

たし、略中根本傀儡師の所在は、野上の里鏡山などなるを、中古大内よりのめしにしたがひてのぼり、紫宸殿の前にして、人形を舞しめてよりこのかた、ちかき比は事くしくもてなさせ給ふて、今受領の身とさへなり侍れば、花のみやこの住居をなし、百のつかさのかたはづれにもはざまりぬるをやといへば、手工の坊がいはいく、おほよそ鳥の證哥耳を取鼻をかむに似たり、野上のさと、かづみ山大井川などを、古郷といへるよりおもへば、そなたはくわつ蟲のながれとみへたり、その傀儡子といふは遊女の事なり、略中我元祖の傀儡子といふは、津乃國芥川よりはじまれり、又人形を愛道の具とばかり覺給ふや」

とあり、『塵塚談』文化十一年の奥書ありには、

「傀儡師を江戸の方言山ねこといふ、人形まはしなり、一人して小袖櫃のやうの箱に人形を入背負て、手に腰鼓をたふきながら歩行なり、小童其音を聞て呼入、人形を歌舞せしめ遊観す、浄瑠璃は義太夫ふしにして、三絃はなく、蘆屋道満の葛の葉の段、時頼記の雷の段の類を語りながら人形を舞したん、好みも終り是切といふ處に至りて、山ねこといふ、魺のごとき物を出して、チ、ク、ワ、イ、ハ、とわめきて仕舞也、我等十四五歳寶曆頃までは一箇月に七八度づつも來りしが、今は絶てなし、」

と記し、『唯今御笑草』文化九年の奥書ありには、

「山猫まはし本名傀儡師、傀儡往昔稱遊女、木偶坊唱名愚噓茶武々坊無理屈、山猫爲號賣婦、歟、寶曆齋の句に、春雨や樂屋をかふるくわいらいし、其の出立は能人の知れる者、英一

寶曆明和の頃の江戸の傀儡子

浄瑠璃は義太夫節

塵塚談 (二卷)

小川顚道の著。著者の見聞と實驗とに係れる雑話百二十餘條を記せる筆なり。端書に「今隨茲文化十一年甲戌七十八歳に至れり。其間の世の風俗を思ひ出すにまかせて書つられ、其時々に行するこそ、都鄙これ一なりといへど、久しからずして跡かたもなくなり侍る事、水の泡のごとくにし

くる事をも載す醫をしら
て世の常なり且保生にか
ぬ人の道しるべになりな
んこ次に記す。とあり。
顯道は町醫なり。又右衛
門と通稱し、世々小石川
養生所の肝煎を勤む。元
文二年丁巳十一月に生
る。其の祖父笹船は小石
川の町醫なりしが。享保
年中に施薬院設置の事を
幕府に建白して採用する
所となり、笹船は其の肝
煎を命ぜられしも來世職
となれり。(國書解題)

ヤンマンチツコにカ
ンマンシヨ

蝶の畫に見へて寸分違はぬもの也。明和の末の頃迄は折節に町々を修行せしを見受
けし、多くは山猫廻しと唱へ、呼び入れて舞すれば古へより攝津國西の宮に傳へし伊
吹山おろし杯云唱歌に、時のはやり事をまじへ、庵末なるおやま奴などの人形を廻し、
果にはいつとでもちやんく坊主とて、手袋の如きものに人形の頭を付け、ちやんき
りてふもの持たるを、おのが左右の手に一ツづつはめ、中指に頭、大指と小指に、右のち
やんきりを付て、こつちの子、向ふの子、隣の子もござれ、中よしこよし、中よく遊べとい
へるを癖にして、人形二つおもしろくつかひ、扱例の山猫てふものはいちちやらん、む
じなやらん、毛皮にてこしらへたる小猫程の異物を箱の底より出し、ヤンマンチツコ
にカンマンシヨと子供を追ひあるき、興する事にぞ有ける。」

と記されて居る。以て當時のさまを偲ぶべし。明治の初め頃までは、尙ほ此の原始
的、あやしげな風貌行装して、市中を彷徨した傀儡子の姿も見受けたやうに記憶する
のであるが、現下は全く其の影を絶つた。

左は『聲曲類纂』に載せたる齋藤月岑の所説である。

傀儡の戲は我朝にもいさ古くよりあり、後頼朝臣の散木集にも傀儡舞しは廻り來て居り、見わた
れど、いかなるさまにやありけん知りがたし、いにしへは遊女にさへ此伎をならはして酒宴の興と
し、遊女をさして傀儡さはよびならはせり、東國美濃三河遠江等を盛さし、山陽播州山陰馬州等これ
に次ぎ、西海を下黨とせり、こなんぼるか後三味線渡り來り、小唄に和し、それより説經或は上るりに
和して彈すさびしより、人形に合せ次第に其態たくみになりて、今世の如き壯觀さはなりけん。
唐土には漢の高祖平城に圍れし時、陣平訪ふて冒頓單于が妻閼氏が妬忌あるを知り、木偶人を造り
て機關を運らし、埒間に舞せしに、閼氏城下に慮りて單于をすくめ、軍を退しめし事、書言故事雜戲の

部及詩學大成傀儡の部に見たり、これらにおこりて懸絲傀儡の戲あり、我國の糸あやつりの始なるべし、よりにてこれを南京あやつりといへり。

傀儡子昔は西の宮竝に淡路島よりも出しなり、ゆびすの鯛を釣りたもふ所を仕形にして、善の始に出ける故に、ゆびす廻しゆびすかきさもいへり。後には能をまはし又義太夫節の上るりをもかたり、人形を廻し出たるよし也。江戸の方言には山猫といへり、人形を廻して末に山猫さなづけ、鼯の如き獸の皮を出して小兒をおごせしといへり。

一般の傳説に依れば土偶操りの元祖は西の宮の百太夫にして、其の後淡路に傳へ、雙方ともに盛んになり、椽號さへ受領するほどの名手も輩出するに至つたのであると云はれて居る。百太夫の傳記、淡路座の起源に就いては、

攝津武庫郡西之宮

祭神蛭子命

の神官に道薫

訓音詳かならずみちかならんか

と云へるがありし。不思議に

も祭神の靈慮に叶ひしなるべし、海荒れ漁無き際など、道薫参りて神樂を奏で神慮を慰め奉れば、倏ち海瀟ぎ風波治まり、舟棹漁獲常の如くなりければ、村人舉て道薫を徳とした。然るに道薫死しての後は、之を繼ぎて神慮を慰め奉るものもなく、舟師漁人の歎き一方ならざりければ、神官中の一人百太夫なる者、さまざまに心を勞し、人形を以て道薫の容を作り、自己は黒き麻布の頭巾を被りて神前に出で、「某は道薫にて候、神慮を慰め奉らんとて参りて候」とて、言葉おかしく云ひなして人形を舞はしけるに、此の遊戯めきたる事の如何に靈慮にや適ひけん、風波治まり靜まること道薫在時の折と同様なりしと也。

然るに同じ宮の社家に、森を苗字とするものに丹後と兼太夫との兩家ありしが、争ひ起りて兼太夫の敗訴となりしより、西の宮を退去し、此時山本と改姓わづかなる知己を

土偶操りの祖百太夫
百太夫の傳記、淡路
座の起源

道薫の人形、百太夫
の伎

兼太夫の工夫、漁祭
りの人形舞

京阪までも上ぼりて
好評を取る

百太夫と改名、淡路
に移る

引田源之丞

淡路座の始め

頼りて尼ヶ崎なる稱念寺に寄食せる中、ふと百太夫が神慰めの人形舞しの事に想ひ及び、小さき人形を造りて、経箱に納め、紐を付けて首に懸け、平家やうの歌章を自作して、譜節を附け、人形に合せて歌ひつゝ踊らせ、漁祭りと稱して、近き村々を經廻りあるき、僅かの合力を得て世すぎのたつきともなしたるに、珍らしとて人氣に叶ひ、果ては京、大阪へまで上ぼりて好評を取り、折柄禁裏炎上にて、東宮殿下東山の行宮に在ませしに、築地の隙より御覽せられ、お召しを蒙りて、其伎を演じたるより、噂は一層高くなり、貴き方々の御前にても屢々其伎を演じ、諸々（つづも）纏頭をも賜り、日本は神國なれば、神慮を慰むるを以て、諸伎藝の首とす、宜しく諸國諸社に於ける神慰めには、此の伎を用ふべしとの口宣をも拜するに至り、其後百太夫と改名し、淡路三原郡三條（所産）村に移り住み、近村の窮民を門人として、木偶の伎を授け、年々諸方へ出して、生計の道を立てしめて居た。

淡路に下つた百太夫は、引田源太夫の家に逗留し、源太夫の娘と契り、男子を擧げた、此即ち源之丞にして、百太夫歿後父の伎を相續し、更に工夫を積んで評判いよゝ高まり、遂には藩主の聞く所となり、召されて、徳島城内に演じ、褒賞として、帶刀を許され、棒役十本を免除せられ、其後許を得て、人形座を組立て、（之れ淡路座の始めである）昇格、誕生、袴着、元服、婚儀、國入等國君の御慶事には、召されて、其伎を演ずること殆ど式例同様になり、元龜元年には、後陽成天皇の叡覽に供し、（一座二十五人、打連れて上京）御感を蒙り、敍從四位下、任引田淡路大椽の榮譽を頂戴し、（引田家にて稱する薄墨の御繪旨此れなり）後又、日本一冠諸藝衆能從四位引田淡路の誕命を

拜し、慶安四年改めて引田日向大椽に任ずるの恩命に接し、藤原正清と稱せりと傳へられて居る。

他の一説、引田重太夫

然るに他の一説には、淡路に引田重太夫なるものがあつた。『圓機活法』の傀儡の註解を讀み、「糸を穿ち、木を刻み、巧なること神の如く、限り無き機關は此の身に在り」云々とあるより勘考し、百太夫の工夫は尙ほ太だ幼稚なりと看破し、男女老幼を容貌にて區別し、喜怒哀樂の情を使ひ分つ工夫を凝らし、追次精巧となり、京、伏見、大阪あたりまでも遍歴し、其伎を諸侯の覽に供し、尋で豊太閤の前に演じたるに、日本開山諸藝司しよげんのつかさなりと稱讚され、召されて天覽に供し奉り、御感に預かり、淡路大椽を受領し、豊太閤よりは四條積に於ける陣屋一箇所を頂戴し、此處にて其伎を演じて諸人に觀覽せしむることを許され、子孫相受けて七十餘年も興行し、寛文の頃には宇治加賀、井上播磨などの淨瑠璃をも併せて此の芝居にて興行したものだとも云はれて居る。

参考すべき各書の記事

されど此等の傳説たる『淡路座祕書』『音曲道智論』『淨瑠璃大系圖』竝に源之丞座の配付本等に依るの外別に考徴すべき資料とてもなく、眞非俄かに定め難し。『賤者考』には「是等はいかなる故にか津國西宮の支配を受け、世に夷下などいひて賤まるゝ者なり此夷下さいふものくさくあるよし何々なるか他日たづねて註すべし、サイラ淡路國に一座あり與次郎などいふも此類か浪花わたりのあやつり師も此命をうくるかしらすて諸國をも廻り、操戲場をする者も此屬なるよしなり察するにも西宮の社家にたちいる奴京せし事なご有しならむ、その頃、鹿島神社の事觸なと云ひ、『東海道名所記』には「その頃註、慶長の京ごいふものありて實の社家ならぬたぐひありぬの次郎兵衛とかやいふ者、後には淡路丞に受領せし西の宮の夷かきをかたらひ、

四條川原にして、鎌田の政清かことをかたりてにんぎやうをあやつり云々」とあり、『淡路草』には「往昔國君南崇院殿註、隆須賀光隆なり御巡國の時、註、光隆は寛文六年に卒したれば、萬治か寛文の始めならん日光寺へ入らせらる、時に上村座より操上覽に備ふ、淡路椽と云しを此時より日向椽に改む、日光寺は舊日向寺とかきしゆへ也、又同君市村の法藏寺へ入らせられし時、六之亟操を上覽に備ふ、以來、兩座共に、御祝儀の事有る時は、必兩座に命じて操芝居興行させらる御例と成、各一刀を帶る事を許され、日向椽は年始に拜謁をも免し給ふ、云々農家の古諷に、三條の者は脇指やさせど、あれは院内門こじき云々と記し、『人訓蒙圖彙』には「津國西宮より出る故に夷舞しと號す、西宮のさしむかひ海をへだて淡路島にも此流有むかしはるびすの鯛を釣給ひし所を仕形にして、春の始に出けるとなり、今の能のまね、踊のまね、色々をつくす、浮沈あり、音聲一風ありてかくれなし、世に傀儡子といふは是なり」と記し、『攝陽落穂集』には「西の宮惠比須の北に小宮あり、内にまつる像は、三歳計りなる小兒座し居たる人形なり、是は神にあらず、毎年正月に白粉を以て厚さ三四部計顔へぬり置也、是れほうそうの病症を除るといふ云々」とあるより見れば、

人形操りの端を發したるは西の宮にして、目貫屋長三郎の相談相手たりし傀儡師某の如きも亦西の宮の産なりしと云へば、當時傀儡遣ひを以て家職とするものも多かりしなるべく、一方淡路にも盛んに流行し、京、伏見、大阪にまでも出でて其の出來榮を誇り得るほどの天晴のものとなり、寛文より貞享、元祿となりては、お山次郎、三郎、五郎兵衛、五郎右衛門、大藏善右衛門等の名手も輩出するに至りしものなることは明かである。

傀儡子の唱歌『伊吹山嵐』

其の頃の傀儡舞しの所謂『伊吹山嵐』の唱歌と云ふは、

「伊吹山嵐」「サア不破の關守」「ハンヤ扉びざさぬ御代こそ目出度けれ」「戀しき」「ヤレ思ひ」「サア故郷近づき」「ハンヤ山城の井出の里」「ハア朝の嵐に誘はれござれ」「サンヤぼんちは潜ひそり能う潜ひそるかたくかけときよハア背戸せどは八重垣大扉おほとは潜ひそり開てたもれば閨洩ひまる月よ心が心破れて苦しや」「ヒヨツクリヤツクリヤツクリヒヨイト」「サンテ目出度けれ

如何にも雅味に富んだものである。

尙ほ左記兩書の摘録を参照すべし。

『淡路座祕書』『南水漫遊』所載

攝州西宮に道薫といふ人、よく御神乃御心をなぐさめけるによりて海上風波靜にして獵船多くの魚を得る事久し、時に道薫しばらくいたつきてみまかりければ、復風起り波高うして更に漁獵なかりしかば、百太夫と云人、木偶人を作りて神の御前なる箱のかたはらに身をひそめ、木偶人を持って生るがごとく操なし、道薫尊の御機嫌を伺奉ん爲參りて候とて御心をなぐさめけるに、是よりまた波風鎮り漁獵多かりしかば、時の帝此事を聞し召れ、棟庭に召れければ、百太夫都に登り木偶人を廻して叡覽に備ふ、これによつて諸伎藝首といふ號を下され、諸國諸社の神いさめの事を勅免ありしより、胸に箱をかけ木偶人をつかひ神いさめをしけり、是傀儡子の始也。

百太夫は諸國を巡りて淡州三原郡三條村といふ所にて身まかりけるに、何某の四人百太夫に傳りて傀儡子の業をなせり、是淡路座操の權輿なり、右淡路座の操四十餘座あり、當時諸國に聞わて名高きは上村日向様を最上とす、芝居の表口に大日本諸藝首といふ額を懸る、近世寛延寶曆の頃まで西宮より傀儡子來りしが今は絶て見えず、當時の首かけ芝居といふもの其の餘風なるべし、百太夫の社は武庫郡西宮夷宮の北に小祠あり、内に收る像は三歳許なる小兒の坐したる木偶人也、これ神にあらず、百太夫の遣ひし木偶人なるべし毎年正月には白粉を以て厚三四分程に面に塗り置、此邊の輩其年生たる小兒を詣しめ、此白粉をとりて小兒の面にぬる也、これ疱瘡諸疾を除くのまじなひと云々。

『音曲道智論』

攝州西宮惠比須大神宮の神主に森丹後といふものあり同社家に森兼太夫といふもの兩家争論の事ありしに公事の兼太夫負になりて男子一人同所へ養子に遣し其の身は同國尼ヶ崎稱念寺といふに便り渡世のために工夫のうへ古き經箱をしつらひ少き人形を拵へ自作の文句に平家に似よりし節をつけ人形を舞しけり町在どもに見物賞しけり夫より京都に登り渡世せしに大内炎上の節抵板築土のひまより此の箱芝居を 若宮様御叡覽あり堂上堂下御見物なされいろく御ほふびをいたゞき其の上日本諸藝操座宗匠諸能冠

勅免

上村兼太夫

淡路國三原郡三條村住人

山本こも

當時元太 後受領して上村日向少椽藤原百太夫淡州産所村に所縁あつて立越
 困窮の百姓へ人形を拵おしへ城主御免にて四十八座操取立これあり云々。

傳三曰爰に淡路國の産夫引田重太夫と云者あり生得達才多能にして風流糸竹の樂しみをなし世を可笑
 過せしがふこ以前過られし山本菊太夫の事を思ひ出し匂會にいふ機關木偶は人に象るこまた活法にい
 ぬらく糸をうち木を刻みて巧神の如く限りなし機關此身に有さ云へるに基き操人形を巧なし男女老
 幼顔容形勢をつかひなし喜怒哀樂を真似べるにさながら生るがごとく實に珍らげき慰みなりさて後
 は大名高家へも召出され終に太閤秀吉公聞し召れ御上覽遊ばせられ甚御感心有其さまたわふれに似
 て意中に勸善懲惡をしめし君臣父子の禮讓人倫を正し直すの一助たり是や日本開山諸藝の司なるべし
 さ御稱讚有けるなり其後大内へ召出され觀覽に備へしかば則引田淡路大椽と受領を下し置れぬ(中略)
 其折柄四條川原に一廈の陣屋有是は諸國の軍勢御さいそく有時是に集めて眞數人并を斗り其役々を指
 揮し給へる所なり庭中に小芝を敷正面に座床を補構へ其奉行是に居て下知す左右に高床をもふけ經津
 主命武甕槌命蒼龍白虎朱雀玄武四神相應の勸請なし御簾をかくげ幣白取て清淨なり太閤此もこへ渡ら
 せられ國々より歩兵雜り來る時は爰に於てそらくを試見んと相撲力量をためし御覽じ給ふ所なり當時
 無用にして空敷有ければやがて重太夫に下しおかれ此處にて操藝をなし諸人に見せて下々の心を慰め
 ると有ければ引田自身に餘り此業にこころざす者なからひ集め前に埒を結びうしろに色彩る襖を
 立陣幕を引れば山野館家の有さまなうつし既に藝事始んとする時は櫓に登りて陣太鼓を打狼藉亂妨を
 しめさんさ鎗をつられ城戸を開きて見物を入れ尊卑をゑりて棧鋪を構へたり先猿樂能にかたざりて三
 番叟を舞式を踏事は天八春の三神を崇め天下太平五穀豐饒を祈る三番叟伶人家傳云第一奏一曰神第
 二奏在吉神第三奏吹吹神諸人庭中小芝の上に居ながら見るを以て是を芝居藝と號せり城廓に順し
 て大切なる名目なり後世城の字を恐れて木戸と書せり櫓の上にもさひの梵天を立則梵帝釋を勸請し障
 碍災難を拂ふ祈さてされば此引田淡路が一族共なば四條河原遠兵聚隅の屋鋪へ引移らせ彼所に住せら
 れ太閤御つれづれの折柄には河原者を呼んで人影を舞させよと宣ひしより惣じて此藝者共を河原者と
 いへり云々。(増補淨瑠璃大系圖)

第四章 創始時代の淨瑠璃と操り芝居

淨瑠璃の詞章 舞曲やお伽草紙の詞章を其の儘移して語る 評判

第一の『梵天國』と『阿彌陀の胸割』 『梵天國に就ての還魂紙料』の考證 梵天國の構想

一筆致 『阿彌陀の胸割』の梗概 桑門緇徒の手に在りし當時の文權

文事の荒廢 想ふべし 佛家の因果談—緣起物語めいた當時の淨瑠璃 「平家」

「謠」「能」「說經」「祭文」 俗樂の變遷に就ての「獨語」の記事

操りの上覽 太夫號下賜の始 慶長末年の金澤の操り興行 京都

の操り芝居 四條河原の芝居の古畫 人形操りの進歩の徑路

淨瑠璃の詞章

舞曲やお伽草紙の詞章を其儘移して語る

『用捨箱』(柳亭種彦著、天保十二年刊行)に云。

昔は正月吉書（吉書）の次に、冊子の讀初（讀初）として、女子は文正草紙（文正草紙）を讀（讀）しとなり、今

淨瑠璃創發當時の語り物は其の數太だ少かりし。無論其の初めは、唯一の『淨瑠璃姫物語』ばかり、中の一齣（一齣）、二齣（二齣）を取り出しては語り、此の期間は餘程長夫れさへ珍らしいとて好評歡呼されて居たりしなるべしと雖、時も經ち度重りては次第に厭（あ）かれて、左までに珍重されざることとなりしより、やがて舞曲の『大職冠』『八鳥』『高館』、お伽草子の『文正草紙』『酒顛童子』『鉢かつぎ』『物臭太郎』『梵天國』などの類を、其の儘この節に移して語り廣むることとなり來りたるものにして、元和の頃京都と云へる座頭が、『熊谷』『先陣問答』『贅』『かん羅』の四曲と、道行もの十二齣許をおぼわて居たのでさへも、珍らしいとて持（も）離（はな）され、非常に稱揚されて居る所より見るも、當時の語り物の程度も、概略想察する

ことが出来るのである。

『古郷歸江戸咄』貞享三 年板には、

「京田舎遠國端島まではやりける程に、四條川原にて芝居をたて、六字南無右衛門といへる女太夫かたりけると、十二段ばかりははや人の聞ふれてめづらしからざる」とて、舞にまふ、やしま、高館、曾我などを彼ふしにかたりける」

と記し、『東海道名所記』には、

「淨瑠璃は京の次郎兵衛とかやいふ者、後には淡路丞と受領せし西の宮の夷かきをかたらひ、四條川原にして鎌田政清が事をかたりて人形をあやつり、其後、ごうの姫、阿彌陀の胸割などいふ事をかたりける。次に河内左内といふ者出たり。女にも南無右衛門、左門、よしたかなごとて淨瑠璃をかたりける」

と記して居る。

創始時代の淨瑠璃中、評判のよかつたのは、『梵天國』『阿彌陀の胸割』である。就中『梵天國』は、貞享元祿の頃までも、淨瑠璃の祝言として之を語り、恰も長唄に於ける『菊慈童』の如く、納局なごめの淨瑠璃としては、必ず此の淨瑠璃の一節を語ることを常例としたほど、評判歡呼されたるものにして、物の終りはれぎりを梵天國と稱する俚諺も、蓋し此の意味に胚胎して居るのである。

『遠魂紙料』には、左の如くに云つて居る。

むかしの淨瑠璃に梵天國と題するあり、梵天國の冊子によりて作れるものな

もある大家にその古例殘りてあり、此さうし今多く傳り、大本小本摺板の數あるも、昔は家々になくてかなほざりし冊子なりしが故なり、標題にいはいひの草紙と書たるあり是の證なりと古老の記にみえたり、按るに此説さもあらん歟、俳諧のほり鶴といふ集に、
書初に 文章の文にあやかれ姫小松 女(原註、章は正の假字なるべし)
さあり、是實永元年の印本なり、當時までは彼草紙の讀初といふ事ありし故、句躰により初春の季を持しならん、さて此草紙おこなほれし事は、淨瑠璃に作りたるは土佐椽正勝がかり、小歌についでたるは松の落葉に載たるにても知らる、*

評判第一の『梵天國』と『阿彌陀の胸割』

*踊り歌の安宅に、常陸國のつのをかに金の花が咲たさあるも、文正の事も角阿、天正の古寫本に角なりとあり今は角をなれ村と云ふ今筑前國柳川にて、手繰つく歌にうたふと聞けり、此草紙廢れてその歌も絶、却て遠に残りしなるべし。

梵天國に就ての
『還魂紙料』の考證

り。梵天國御伽ざうしのうちにあり足利の末の代に作れる書歟 この淨瑠璃は、慶長元和の頃、河内左内、南無右衛

門等がかたり出しゝが傳りて、近く眞享元祿のころまでも、虎屋永閑、天滿八太

夫なんど淨瑠璃の祝言にはかならず此梵天國をかたりけるとぞ。今長唄を、たふものを、

はりに菊戀童を祝言とするかごとし そのゆゑに、何にもあれ是ぎりといふ程のことを、梵天國をう

たふといひ、又うたふといふを略て、梵天國とばかりいひし、諺は今ありて淨瑠

璃は絶たり。さて此諺いつのころいひそめし歟、延寶中の冊子にはたま〜

見わたり。たきつけもわくひ延寶五年印本「人の身をいため苦しめおのれがよろこ

びとすること人たるものゝ仁の道にはづれたり、かゝる男のくせとしてしん

だいは風待空のいかのぼりよりなほぼんでんを急ぐものなり云々」とあり。

こゝには國の字を略、風まつそらの紙齋に比て、身帶の滅却するをいふなり。

又浪花鉦延寶八年著六の卷新町の遊女の詞に、「くせつといふものはすゐなどの

することではござんせぬ、みな〜ぼんでんごくの下地ぢやとおもはんせ云

云」これはその遊女の許へ、客の來らぬやうになれるを云。も、わくひは京師の作、浪花鉦は大阪の

作な吉原三茶三幅一對延寶九年印本定家といふ遊女を評する詞に、「容顔なるほど

よし、床のうちしつぼりしてぬるゝときは、かへるさを忘れぼんでん國と出る

もののみ云々」下に見ゆる松の葉の小唄に合てみるべし又古郷歸江戸咄眞享三年印本六の卷に、借錢の淵

に首だけつかり、主親をたふし、いつせきをたふきあげて桶伏になり、やう〜

友だちのかげにて逃れ歸りても、主のかたへはかへりねず、すぐにはんでんご

くをうたふ云々」是は亡命のこをいへり。又松の葉元祿十六年印本に載たる一夜かきみ、といふ小唄に、「げにさまぐのたはふれにつれてくるわの、のんやほ、中略かつかぶどのをじめのきんちやくきんぎんの、たとひこのみはぼんでんごくになるとても、ものびくはむにせまい」元祿は梓刻なりし年號にて延寶天和ころの小唄なるべし

こゝにいふ意は、三幅對と同。かゝれば其原は淨瑠璃より出で花街の流言にありしなるべし。上に抄出せし冊子はみな遊里のこをいふ條に見たり又團扇會我座敷狂言元祿十四年印本ト者の詞に、「二月三月はやりくりのくせつがあらう、その節は、わがしんだいも、ぼんでんごくをうたはうがな云々」此の冊子と江戸咄にうたふとあるを見るべし。淨瑠璃をうたふといふこふるし前の宗長が日記に見たり今ぼんでん國をくふといふは、其の原を知らずして訛れるなり。借。今たまぐ傳はる梵天國の淨瑠璃本を見るに、細字にてどころぐへ繪を加へたり。是初にいふ永閑八太夫等が正本と稱しものなり。彼淨瑠璃の六段目の終に、

それよりもひとぐは、あしはらこゝにかへらせ給ひ、五でうのやかたにうつらせ給ひて、それよりも中なごんごのは、ぼんでんわうのじひつのごはんを、みかごへさしあげ給へば、みかごわいらんましぐて、日本のためしにせんとて、父大じんごのをくわんじやうおろしたてまつり、ぼんでん王のじひつのごはんを相そへ、五でうの西のとういんに、てんしの宮といはひたてまつる。こくごををさめ、ぶつくわをまもり給ふとかや。さればにや、てんし

『梵天國』の構想

とはてんのつかひとかくとかや。そのち中なごんどのたんごたじまは本國なれば、あんどのごはんを給はりて、ありがたしくと三度ちやうだいなされつゝ、やかたへかへり、とも人あまためしつれ、本國さしてかへらるゝ。國にもなれば、みねにみね、かごにかごをたてならべ、ふつきの家とさかへ給ふ、ためしすくなきしだいなり。そのち中なごんどのをば、きれものもんじゆといはひ、天女ごせんをば、なれあひの觀音とくわんじやうし奉る。いまのよまでもしゆじやうさいごし、こくごをまもり給ふなり。まことにじやうこも、すゑのよにも、ためしすくなきおんことと、上下ばんみんおしなべて、たつとかりともなかくに、申ばかりはなかりけり。」

とあるが、彼祝言にかたりし文章なり。百年のむかしまでは流行し淨瑠璃とおぼしく、かぶき狂言にもせしことあり。元祿十四年森田座の狂言本、梵天國寶船」と題せしを見るに、彼梵天國の淨瑠璃にならひて、宮崎傳吉がつくりし狂言なり。

西鶴が俗つれ、江戸ふきや町のさまを畫て、今日よりぼん天國、市村宇左衛門、玉川吉彌、市川團十郎といふ看板をかけし圖あり。この冊子は元祿八年の印本なれば、森田座よりさきに、この狂言のありしなるべし。

『梵天國』の構想の概要は、

淳和天皇の御代に、右大臣の一子に玉若とて孝心ふかき若殿あり、兩親歿りてのちは、

常に笛を吹いて供養して居た。その音梵天國に聞え、天女降つて玉若の妻となる。玉若帝みかみの命せにより梵天國につかひせしが、其の間に妻女はらせつ。國の王に奪はる。玉若悲みて清水寺に祈誓せしに、夢に老僧來りて枕邊に立ち、姫を取返すべきすべを教ふ。玉若教に従ひ筑紫より便船してらせつ。國にわたり、姫をわて歸る。其の間此の世にては幾年をや經にけむ、歸りて見れば、五條の館は廂傾き庭荒れて昔の面影尋ぬべくもあらず。玉若世をはかなみて丹後の國に隠れ、やがてみづからは文珠となり、姫は觀音となりて終る。

と云筋にして、其の本文の筆致は左の如くである。

『梵天國』の一節『聲曲類纂所載』

さて中納言わが御所へ歸り御覽すれば、たゞその儘にて、もしや中納言降り來たり給ふとて女房たち走りまはる。はくもん王が入りたるあともさながら、女房たち御乳母中納言を見つけて、彌悲しくして伏ししづみてぞなき給ふ。姫君のおはしましたる御座に、いまだ御枕もふるき衾もさながらあり、夢かうつゝか夢なればさめてのけとふししづみ給ひけり。ころは八月なかばのころなれば、いづしか庭の落葉もそよめきて、松ふく風も聞寒く聞わつゝ、さらぬだにあきはいかなる色、さればと申しつたへたるかなしさに、わが身ひとりたぐひぞと、涙の露も所せくまでうくばかりなり。よなくもまごろみ給ふ事なければ夢にだにもみたまはず。さる程に篠のをざゝの一ふしも、あくかるとおぼしくて、やも

『阿彌陀の胸割』の作意は左の如し。

めがらすのうかれごゑ森をはなるふけしきにてほのふとみわければ、御もどゆひ切り給ひて清水へ參られける。さもいとけなき時よりも、月ごとに七日のあゆみをはこび奉りつる御利生に、今一度今生にて姫にあはせてたび給へ、逆も對面叶はずば、命をめして後生の縁となしてたべと涙と共に祈られけり。曉がたのことなるに、八十ばかりの老僧の中納言の枕に立ち給ひて、汝姫君の行くへ聞きたく思はゞ、是より修行をして筑紫の博多へ行き、便船こふて千日と申すには、必ず聞ね候ふべしとあり。夢ともうつゝともおぼえず、則ちくわんおんの御つげぞと思ひ、すぐにつくしへゆくたうせんぶねにびんせんして、蒼海萬里の波路を経て、いづくをばかりともなくおもひ給ふ御心のうちこそあはれなれ。此土をはなれて十三日と申すに、大かせ吹き波あらく、光もの飛びわたたり、二十四艘の舟の帆あひの綱も吹き切りてちりふになりけれども、中納言のめされたる船をば吹きも切らずしてらせつ國へぞ吹きつたり。ある湊に上り心ぼそくも笛をぞ吹き給ふ。折ふし此の世の人とも覺えず、頭は空へおひのぼり、いろ黒くせい高き者あまた集りて吹きける物はおもしろやと感にたへぞ聞きにける。いか様これは葦原國の人にて有るらんなどといふ。此の土はいづくと問ひ給へば、是れこそらせつこく、此の國の御ぬしははくもんわうとぞ申しける。云々

『阿彌陀の胸割』の梗概

天竺毘舍利國にかんし兵衛と云へる長者ありき。七つのいみじき寶を持ちぬ。一は黄金の湧く山、二は白銀の湧く山、三は除魔の劔、四は不老の松、五は邯鄲の枕、六は泉の湧く壺、七は麝香の犬である。長者には二人の子女があつた。姉は天壽姫とて七歳、弟はていれいとて五歳也。何不足もなき果報の身なるより後生を願ふなどの念つゆほごもなく、或は堂塔伽藍を焼拂ひ、或は河に渡せる船橋を毀つなど、不善さまゝを行ひ、之を快事として喜んで居た。釋尊其の由を聞いて歎かせたまひ、此の儘に捨て置きなば、衆生は悉く魔道に入るべしとて第六天の魔王を遣し、長者が館に障礙して、懲らさしめ玉ひけるも、除魔の劔には敵し兼ねて、魔王は敗ぶれて逃げ歸りける。

然るに其の後地獄より、大火と云へる鬼來り、火焰の手にて劔を鎔し、長者を征服して之を懲らし、残りの六寶も亦悉く消去りければ、長者は魔道に墮ち、二人の子供のみは、釋尊の慈悲に助けられ、こゝかしことさまよひ歩き、やがて慙れに落ちぶれ果て、長滿長者の夢の城へと辿りついた。

折しも夢の城には長者の一子松若と云へるが、不思議の病に罹り、命旦夕にせまり、博士に占はせけるに、松若と同じ生れの女の生膽を取り、酒にて與ふれば、平癒疑ひなかるべしとの言なりしより、八方に人を派しさまゝに求めたれども得ず、松若の病はいよゝ急を告げ、長者の一族は失望の眉をひそめ、途方にくれ居たる際に

てありし。

さまよひ來れる子供の生れを問へば、姉の天壽は寸刻違はぬ松若と相生なり、いはれを話せば納得し、命を棄てて父母の菩提を弔はんとて、七間四面の黄金の堂を建て、阿彌陀如來を祭り玉はれと請ふ。

やがて御堂も成り、如來も安置されければ、姉は如來を伏し拜み、縦令罪障深くとも、父母諸共救はせたまへと、願を上げてなくくも、麓の方へ牽かれ行き、胸腹を割れて死しにける。

松若の病も忽ち平癒なしければ、長者の喜び喩へんに物なく、亡骸なりとも厚く葬り得させんと、麓に至りて尋ぬれど、其れらしき跡もなし、長者も不思議のおもひして御堂へ尋ね來て見れば、姉は弟に手を持たせ、弟は姉を枕とし、前後も知らず寝入りてあり、御扉を開き見れば、如來の胸より御膝まで、朱の血ちじゆを流れける。さては身替りに立せ給ひしか、勿體なやと伏し拜み、やがて姉をば松若に配し、弟のていれいは出家して佛に仕へ奉りぬ。

以て當時の語り物の構想筆致の一般を知るべきである。

願ふに徳川時代の初期、元祿の交に至るまでは、文筆の業は主として桑門緇衣の徒の掌るところに屬し、天正の頃京洛中にて四書の素讀の出來得る人は、僅に公家の山科殿ぐらゐのものにして、それさへ孟子の素讀となりては往き詰まり、言を左右にして教へて呉れざりしとは、江村專齋永祿八年に生れ、寛文四年に歿すの述懐談として書き殘されて居る所で、太閤

桑門緇衣の手に在りし當時の文權

江村專齋
儒醫なり、名は宗具、專*

文事の荒廢想ふべし

*齋は其の號、又以て通稱さす。別に倚松庵の號あり。別所氏の族、夙に學を好みて閩洛の書を修む、又曲直瀬宗巴に従ひて醫を學び、儒醫を以て肥後侯加藤清正に仕ふ。加藤氏亡びて京師に歸す。

因果談―縁起物語的臭味を帯びた當時の淨瑠璃

×る。美作侯森忠繼を以て* 祿し待つに賓禮を以て*

平家

*す、而して京師に居ること舊の如し。年一百視聽衰へず、後水尾上皇召見して修養の術を問ふ、專齋對て曰く、臣平生唯一の些の字を持す、飲食些し、思慮些し、此の他豈術あらんやと、上皇聞て之を喜みし、鳩杖錢帛及酒茶を賜ふ。子孫之を榮さす。遂に賜杖の字を以て講堂の名とす。專齋此歳二月二十六日を以て歿す。專齋傍ら和學を好て和歌を善す、細川幽齋木下長嘯子等と交り善し。二子あり、長は好庵、×

謠―能

の祐筆にして醍醐の醍の字が思ひ出せず、「秀吉指をもて大、字を畫し、かくこそ」と云つて教へたと云へる、一場の笑話さへ残つて居る位である。當時文事の荒廢せる想ふべし。されば謠曲を始めとし、舞曲、お伽草紙、説教、祭文等の章句に至るまで、多くは此等緇徒僧人の手に成り、從て佛家因果の理、神佛さまの縁起などを綴り、一つは俗を化し風を修むるの方便にも供して居たのであつて、此等謠曲、説教、祭文、平家琵琶等の節調より變化した創始時代の淨瑠璃の詞章も、亦勢ひ佛家の因果談、縁起物語的臭味を脱することの出来なかつたも、自然の數であり、已むを得ざる成行に屬したのである。

因に云。

平家物語の作者は信濃前司行長なりといはれたれど、其正本には入坂本、鎌倉本、長門本、嵯峨本などの異本あり、作者に就きても異説多く、あながち行長を眞の作者とも認めがたし。此の物語に節譜を施し、琵琶に合してうたふべく工夫したのは、叡山の僧生佛なりと二三の書に見ゆ。

平家には引句語句の別がある。琵琶に合してうたふ所が引句にして、素讀する如くかたる所が語句である。淨瑠璃にも三味線に合してかたる所と、單に拍子に用ゐる所とあり、平家の引句語句の面影を止めたるものなるべし。淨瑠璃物語を十二段にかきわけけるは、平家十二卷にならひての作意なりとも云はる。

謠曲は室町時代に至つて大成したるものにして、足利義滿のときには既に觀世、金春、保生、金剛の四座あり。

×次は剛齋。專齋の友伊藤垣庵專齋平日の語を録して老人雑話と曰ふ。世に行はる。『近世叢語』、『皇國名醫傳』、『先哲叢談』、『大日本人名辭書』

『本朝世事談綺』には、

諷^{うたひ} 東山慈照院殿にはじまる。諷と云は詩經の大序に曰、風、風也、教也、風以動^{カシ}之、教以化^ス之上は字のごとし、下は福鳳^{ふくほう}の切即諷^{かへし}の字也、風のおよぶがごとく自然に徳化ひろまると心を付て諷諭の兩義なり。又謠の字を用、歌謠とつゞきて哥^{うた}うたふ也。此の作は多く佛者也、江口山姥は一休の作といひつたへ、そとは小町は高野山寶性院宥快^{ゆうくわい}の作なりといへり。山本春帳の所持。諷の作者付の書に云、諷は四座の太夫作りて當座^{あたうざ}に能^{のう}にしたる也。よき人の作もある也。」「能^{のう} 東山殿の時、諷と同じうはじまる。觀世觀阿彌始てこれをなせり。此の觀世は秦川勝の末流にして俳優なれば、渠^{かみ}に命じて此の技をなさしむ。能は神樂をやはらぎたるものなれば、すゝしめのため神事の砌執行ひ、これを神事能^{かみ}と云。神事を奉により大社に屬す。太神宮には、和屋勝田、主同^{しゅどう}の三座伊勢にあり。日吉には、山階下坂、比叡三座近江にあり。賀茂住吉には本座^{ほんざ}波丹^{はに}、新座^{にいざ}河内、法隆寺津^つ、是三座春日には、外山^{ぐまやま}生寶^{なまぼく}、結崎^{ゆづき}、坂戸^{さかど}剛^{ごう}、圓滿^{えんまん}井^い、今^{いま}此の春日の四座は就中名譽を得たり、よつて東山殿へもたびくめされしと也。今春は秦氏安二十九世也、山州竹田に住居す、因て竹田共云、寶生は伊賀國服部の産也、故に服部と稱す。喜多は攝陽群談に云、喜多長能^{ながよし}字は七太夫、泉州堺の産、父は醫師願慶と云、家に武勇のほまれあり、當津勘太夫に習ひて踏舞の妙を得たり、長能は喜多の始祖也、堺櫻町に長能の舊屋あり。

と云つて居る。室町將軍は之を將門の式樂となし、爾來徳川家に至るもその則をあらためず、苟も武門武士たらむものはその心掛なくてはならぬものとせられて居たのでありし。

説經は少納言藤原信西の子澄憲の作り初めたるものなりと云はる。澄憲は叡山の僧にして、經を讀むに巧みな所より、弘法の方便として説經節を按出した。寛元の頃園城寺の僧定圓また説經を善くし、此の人出てより二派に別る。由來說經の眞意は佛の緣記を唱へ、俗を化し、風を敦ふし、徳行を修めしむるを本義としたのであるが、何時のころよりか鄙俚のものとなつた。説經に次いで起つたのが祭文である。神の由來若くば死者を弔ふの意をあらはしたものにして、説經の鉦を叩きて拍子をとりたるがごとく、祭文は錫杖を振りて拍子をとするのである。

太宰純の『獨語』には、俗樂變遷の徑路に就いて左の如くに記されて居る

我國の古に催馬樂と云ふは、馬子の馬を逐ふにうたふ歌なるを取りあげて、是を絲竹に合せて、朝廷の神事にも、御遊にも用ひらる。是我國のうたひものゝ始まりとかや。貫之が土佐の日記にかけるふな人の歌に「春の野にてぞねをばなく、わかすときにて、手をきるくつんだる菜を、おやまほるらん、しうとめやくふらん、かへらや、よんべのうなゐもがな、世にこはんそらことをして、おぎのりわざをして、錢ももてこす、おのれだにこす」と云へるが如き、昔は賤しき者の歌も、詞やさしくきよくからず。それより後は朗詠ありて、雲の上人の樂なり。又

其後今様と云ふこと起りて、さかもりなどの興を催しけるに、是もいつとなくとなへ失せて、今の世には跡かたもなくなれり。白拍子の歌の詞は、平家物語などに少しのこれり、是も詞やさしくきくからず。琵琶法師の平家物語は、天臺の聲明のふしを移して、生佛と云ふめくら法師のおのが生れつきの聲にて語りはじめたりといふ。今の世まで傳れり。詞は本より平家物語なれば云ふに及ばず、ふしも昔の習なればきふにくからず、琵琶を合はすれば、其の聲も淫ならず、玩ぶ人に損なし。鎌倉の時の田樂にはいかなるうたひものゝありけん、今知れる者無し。夫より下りては猿樂なり。近き世に幸若の舞と云ふもの、室町の末とかや、桃井氏の子孫に比叡の山の兒にて、幸若麿と云ふものまひ始めけると云ひ傳ふ。琵琶法師の物語に似たる處もあり、猿樂のうたひに似たる處もあり、何にもあれ、少しも淫聲なきものなり。舞とはいへど、起ちてまふことはなく、たゞ扇にて手を打ち拍子を取るのみなり。詞は定りたる數ありて、皆昔物語を演べたり。新しきことをば作り出ださず、士大夫の中に玩びても淫佚を進むる恐なし。寛文延寶の頃までは、諸侯貴人の宴饗にも是を用ひて心をなぐさめ、酒を進めけるに、元祿の比より猿樂さかになりて、幸若の舞世にすられたり。説經と云ふ者はもと法師の中に、本説經師と云ふ者有りて、佛法の尊きことどもを詞に綴り、浮世の無常の哀に悲しき昔物語を演じ、善惡因果のむくいあることどもを物語に作りて、是にふしを付けて、哀なるやうに語りしなり。鉦鼓をならして拍

子取り、世の婦女に聞かせて、惡を戒しめ善を勧めて、菩提心を起さしめんとするなり。昔より法師の説法に因果物語するたぐひなり。其の物語は俗説に任せ、慥ならぬ事も多けれども、詞は昔の詞にて、賤しき俗語をまじへたる中に、やさしきことも少からず。其の上幸若の舞の詞の如く、昔より定まれる數ありて、いつも古きことのみを語りて、今の世の新しきことを作り出ださず、其の聲も唯悲しき聲のみなれば、婦女これをきくは、そぞろ涙を流して泣くばかりにて、淨瑠璃の如く淫聲には非らず。三線ありてよりこのかたは、三線を合はする故に、鉦鼓を打つよりも少しうきたつやうなれども、甚しき淫聲には非らず、云はゞ哀みて傷ると云ふ聲なり。淨瑠璃に比ぶれば少しまされる方ならん。目くら法師、妓女などのうたふ歌も、寛文延寶の比までは長歌らうさいなど云ふ曲ありて、俗調ながら詞やさしくふしもゆるやかに、いとしをらしきことども多かり。かりそめのそぞろ歌も、小倉吉野など云ふは詞やさしくて、よき人の前にてうたひてもきくにくからず、昔の今様にも少しにたるべきか。俗中の雅とも云ふべき物なり。三線も是に合はする時は調子ひくく手も間どほにて、聞く者耳にかしましからず、筑紫箏にも近きやうにて、いやしげすくなし。今は目くら法師も昔の曲をば聊しらず、調子高くかしましきことのみを習ふて、三線はいつもかくの如くなる物ぞと思へり。うたふ歌も、唯さわがしく賤しくかしましきのみにて、昔のやうなるやさしきことは露ばかりもきこねず、我等が一生の中五十年の間に、

操りの上覧、太夫號
下賜の始

和漢三才圖會(百〇五卷)
寺島良安の著。和漢古今凡百の事實を網羅して考證圖説せる一大雜書なり。玉峰顧秉謙の「三才圖會」に倣ひて編輯せるなり。正徳三年大學頭林信篤の序中に「上自天文、下至地理、中及人物、旁逮器用、時令、宮室、身體、衣服、人事、文史、珍寶、禮制、細而天喬、蠢而羽毛、鱗介、經史子集、及稗官小史所載、靡不旁搜、悉覽、字櫛句比、區分臚列、務極其耳目之所加神識之所詣也」云々といへり。能く此の書を要約せり。次に同前大醫令和氣伯雄の序、次に同二年の自序凡例あり。凡て百五卷八十一冊に發行す。近年活版に附して發行せるものあり。(國書解題)
寺島良安は浪華の醫者なり、字は尙順杏林堂と號す、學和漢を兼り、別に『濟生寶』の著あり。

俗樂さへかくいやしくなり下れるは、そもいかなることぞや。云々

尙ほ我國歌樂の變遷沿革の徑路に就いては、小中村清矩氏の『歌舞音樂略史』あり簡にして要を得たり、參照すべし

永祿天正の頃度々大内へ夷舁參り、其伎を上覧に供へた事は、『御湯殿上記』に書かれて居る所にして、慶長の末年には、數々院の御所後陽成天皇は慶長十六年讓位院の御所に在らせらるに召され、操りの伎を御前に演じ一座の主立たる者には、受領の御沙汰もありたることも各種の記録に散見するところである。『和漢三才圖會』には、「後陽成帝召於庭因任引田淡路椽八位相當受領也」と記し、『役者五雜俎』には、「慶長十八年丑正月十五日、監物口宣頂戴して河内といへり」云々、『鸚鵡か袖』の序には、「かけまくも賢き慶長の帝是を興させ給ひて人形にかけさせ、叡覽度々有しより淨瑠璃太夫受領に拜し、世に行はれて」云々と記し、

『言緒卿記』には、

「慶長十九年九月二十一日辛未雨、院參阿彌陀、ム、ネ、ハリ、其外種々、ハ、ア、ツ、リ、アリ、參衆之輩西洞院時慶、

宰相、同少納言、予、北島侍從、五條少納言、土御門等也、御振舞アリ、」親顯、「二十二日壬申、天晴、

院參ツカマツリ、アヤツリ見物之衆、通村朝臣、予、永慶朝臣、種忠、公福、親顯、爲適、泰重等也、爲適、

泰重同道、私宅晚滄振舞之」云々。中院

西洞院宰相
時慶卿記にも、

「九月二十一日、雨天、院參、飯後、阿彌陀、胸、切、ト、云、曲、ヲ、仕、夷舁、ノ、類、ノ、者、推、參、ト、メ、於、御、庭、緞、子、幕、等、ヲ、引、廻、メ、有、曲、奇、意、ノ、事、也、又、賀、茂、大、佛、供、養、高、砂、等、ノ、能、ヲ、モ、仕、候、堂、上、衆、ニ、ハ、山

科、土御門重泰等、時直註、西洞院少納言なり被召候」云々。「二十二日、天晴、院御所へ、宮御方被成申候、申刻還御也、如昨日ノ曲在之」

の記事あり、以て徴すべし。『三壺聞書』慶長十九年六月前田利長の逝去に依り、其母芳春院江戸より加州へ歸り、高岡に逗留し、墓參なごすませ後ち金澤に入

其の當時の記事也には、

御本丸ニテハ御前様、二丸ニテハ芳春院殿、西ノ丸ニテハ玉泉院殿入セ玉へハ、御城内ノ賑成事不及云、町方ナト御用多ク、別而繁昌ス、才川淺野川ニハ芝居ヲ立、踊子ア、ヤツリ様々ノ見物場アリ、御城へモ折々被召、吉松カ立舞、阿彌陀ノ胸割、午王姫ナト云、ヘル上、瑠璃アリ、中ニモ牛若丸、十二段ノ淨瑠璃、専ラハヤリタリ、此ノ時ノ小歌ニ、ツリシ椿ハ山ノ端ヲ照ス、城ノ女郎衆ハ極樂橋ヲ照スト諷シナリ、是ニテ金澤ノ城ノ繁花ナリシヲ知ヘシ」

京都の操り芝居

と記せるより見れば、京、大阪、江戸に於ては更に一層の流行をなし居りし事は云ふまでもなき所にして、『歌舞伎事始』には、慶長の比、二代目國女、五條にて芝居興行せし時、島田萬吉女名代といふ事を始め、又淨瑠璃操をなし、切幕を始めたりと記し、『山城名跡志』にも、島田萬吉といふ名代にて西京北野又は祇園のもり、四條五條にて淨瑠璃歌舞伎をも二十日、三十日程づく勤めけると記せるより見ても、當時既に可なりの流行を作つて居たことは、概略想定することが出来るのである。

四條磧に於て操り芝居を興行したのは、古き比よりの事にして、『京雀』には、「五條の大橋通もとは六條坊門通といふ、此大橋は、東の川端に、人形操の芝居を構へ、細き假橋

京雀（七卷）
淺井了意の著。京都の詳細地誌なり。第一卷の京都以來の沿革より總て皇

城に關する歴史地誌を掲げ、第二卷以下東西南北各街諸小路に至る。所々に挿畫あり。寛文五年乙巳正月山田市郎兵衛出版す。

淺井了意は京都の人にして黒谷に住す。子右と字し、靜齋、如曇子、松雲、瓢水子等の號あり。戯著を以て業とし、本書の外に、月見の友、本朝女鑑、伊勢物語勝海、大平記首書、源氏雲隱抄、新語*

四條河原の芝居の古畫

*圖、日本二十四孝、連歌初心抄、安部清明物語、北條九代記、太子備考、犬はりこ、御伽婢子、淨世物語、かなめいし、將軍記、むさしあぶみ、堪忍記、曾呂利狂歌噺、三井寺物語、葛城物語、武家一統根元、百人一首頭書、可笑記、孝行物語、江戸名所記、東海道名所記、百八町記等を著せり。寛永六年己丑九月二十七日、年七十にて歿す。

人形操りの進歩の徑路

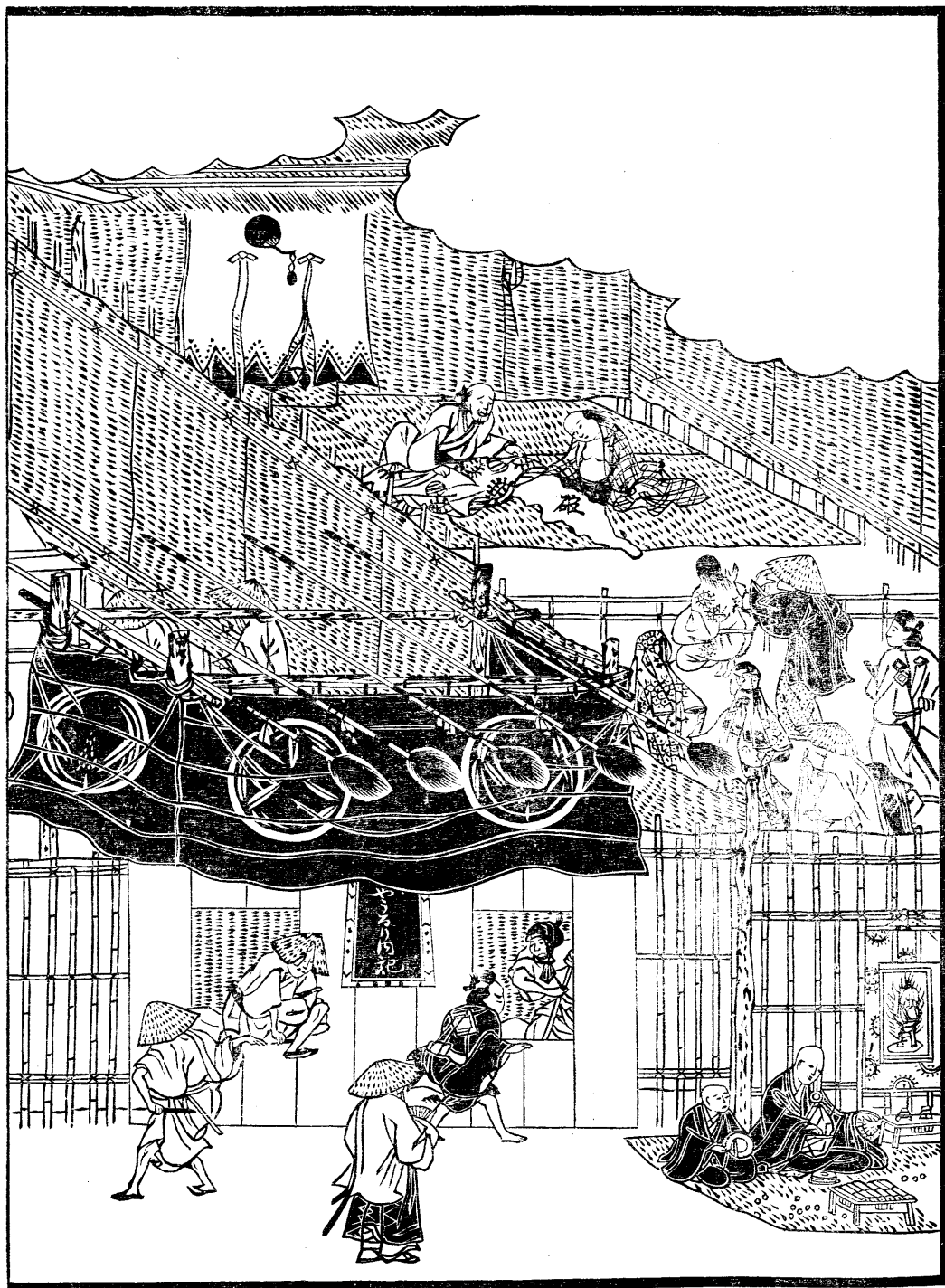
をかけて侍りしに、太閤秀吉公の時、伏見より禁中へ參内し給ふ道筋なりとて、此大橋をかけかへられ、人形あやつり芝居をば、今の四條河原へうつされたり」とあり、彼此稽考すべし。

『聲曲類纂』には、

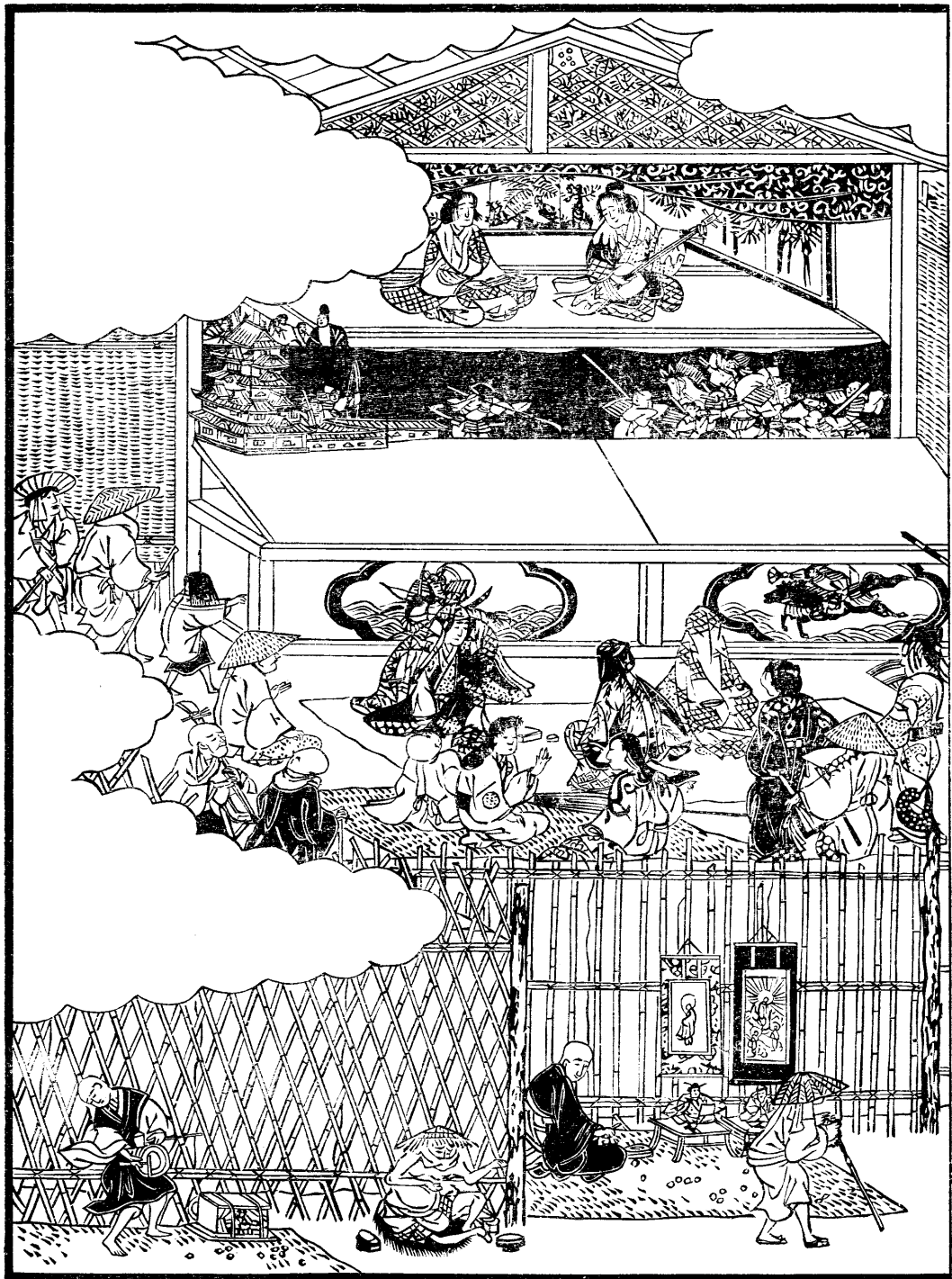
「其頃の三味線は、琵琶の手のごとくにして、今の世に行るふ如く、手のしげきものには、あらざりし、淨るりも平家の節にて少し和らげ、謠に似たるもの故に、淨瑠璃に師匠なし、謠をもつて師と心得よと、中古の名人井上播磨其門弟へ傳へしことなむ」と云つて居るが、同書に載せた正保慶安頃の古畫、『嬉遊笑覽』には慶長年間四條河原の芝居の繪に、女太夫の淨瑠璃の圖あり、太夫も三味彈も女にて出語りなり、正面の一段高き所にかしこまり、其下にて人形を遣ふて居る。人形の足はなく、遣ひ人の手も首も見へず、表櫓の下には黒塗朱縁滅金のかな物を打つたる札をかけ、中に金粉にてじやうるり内記と記したるが見ゆ。以て草創當時の操り芝居の狀を想ふべし。

『南水漫游拾遺』には、

「往古のあやつりは人形は首計にて著作物を打著せ、手も足も遣ひ人の手にて仕たる事にて、近世まで子供の翫びに、デクのボウといへるもの是なり。當代のごとき木偶を用ゆるその權輿は、大阪の細工人石井飛驒といわるもの、おとなの手を人形の袖へさし込み遣ふ事、甚見苦敷とて工夫なし、人形に手を拵へ付たり。夫より是れにならひて足を付、或は手の指を動かし、眼を遣ひ、眉を働かすなど、近世さまく、自



正保慶安頃の四條河原の芝居の図



由に作る。是石井氏の工夫なれば、あやつり芝居に而、尊み申さねばならぬ人なり。外題年鑑に云、松本治太夫座にて、源氏烏帽子折といふあやつりに、藤九郎盛長、澁谷金丸、二ツの、人形に初めて、足を付たり、其の後宇治加賀椽のあやつりにて、世繼會我のとき朝比奈の人形に足を付る、夫より諸流共に立者の人形計りに足を付る事ども成りぬ」

と記し、『雲錦隨筆』には、

「操芝居の木偶も、往昔は今の如く委からず、足などは無りしを、山本土佐椽角太夫の時代、源氏烏帽子折の狂言に、藤九郎盛長、澁谷金丸等の二の人形に初めて、足を付たり、註、外題年鑑には松本治太夫座の事とせり爾後宇治加賀椽嘉太夫の時、世繼會我の淨瑠璃に朝比奈の人形に足を付しより、諸流ともに擧つて立者の木偶には足を付る事となれり、寶永

二年乙酉三月、竹本筑後椽義太夫の芝居にて、用明天皇職人鑑近松門左衛門作の鐘入の段出

語りにて、太夫筑後椽三絃竹澤權右衛門、おやま人形辰松八郎兵衛、今度出つかひを仕始し也、正徳中までは、淨瑠璃短くして、間の物にのろま人形の道外、あるひはからくりなどを加へて勤めしが、正徳五年乙未十一月朔日より、近松門左衛門の作せし國性爺合戦竹本座に於て興行せしよりのろまの道外機關などは加へざるやうに成たりとぞ、此の國性爺は古今無雙の大當にて、未年十一月より三年越十七箇月興行せしと也、享保辛丑八月、信州川中島合戦、竹本座にて興行此の時山簾を張ぬきの本山に作り始む、是迄はすべて山の段は、すだれに山を畫きたるを用ゆる也享保十八年四月、車返合戦櫻、大森彦七の木偶に、

『後はむかし物語』は手柄岡持の作である。岡持は佐竹家の留守居平澤平格、名は常富。安永天明の頃盛んに小説草紙類を作せり。文化五年歿、歳七十九。本書は其の少年時代よりの見聞録とも云ふべきもの也。

指先の動くことを仕はじむ、同十九年十月、蘆屋道満大内鑑に、與勘平の人形の腹のふくるゝやうに仕初む、延享二年乙丑七月、夏祭浪花鑑に、木偶に帷子衣装を着せはじむ、享保十九年甲寅正月、豊竹越前少椽若太夫の芝居にて、北條時頼記西澤一鳳の作也、二度目の興行此の時正面の床を横床に仕はじむ、斯のごとく年々歳々に工夫を凝し、今は眼中の動き、口をひらき舌を出し、髪逆立腹動き、琴三絃を調ぶる指先まで動けり」と記して居る。

以て人形操作の進歩の徑路を知るべきである。

『後はむかし物語』に、

我父の友に小久保萍也といふ老人あり、是も乙卯註、延寶三年の生にて、我に六十とし上にて、十歳より十三の年まで、此老人の咄を聞たることあれども、今おもしろしと思ふほどの咄も覺侍らず、土佐節を好みて常にかたりき、定家といふ淨瑠璃なご、よほど聞覺わき、親土佐は上手なりなごいひしは、元祖にてもや有けむ、憲廟註、五代の時あやつり上覽有しと也と、酒呑童子と現在松風といふ淨瑠璃二流れき代綱かせ給ふといへり、最あやつりなり、御操といふ庵り看板は、其時よりなごいひし、誠なるや、土佐節の人形は、裾より手を入れてつかひて、足といふ物はなく、手摺すの下より人形計見せて、つかふ人の容は、あらはに見せざりしと見たり、素よりさしかねにて、左を別人のつかふ事もなかりしと也、後に至りて臺事とて碁盤人形の如く出遣ひも有て、其の時は足を遣ひしと也、あまり動かぬ人形をば胴串とて、今

の手あそびの如く如此にて遣ひてしと也、働く人形ばかりつまみとて、是も短くしてつかひしといふ、且淨るりの間々に、間の狂言といふ有、是近來とり出たるのろまなり、のろま米平など人形の名にて、のろまは治兵衛といふ男の人形、米平は甚右衛門といふ男の人形也とぞ、

とあり、されば江戸の土佐の芝居も、元祿の頃小久保津也と云へる老人は、延寶三乙卯の生れに相當すれば、元祿元年は十四歳、其の末年は二十九歳に當る譯なれば、老人の見たま云ふは、尙ほ未だ「裙より手を入れてつかひて、足といふ物は、即ち元祿の土佐の芝居の事なるべし。」は、はなく、手摺の下より人形計見せて、つかふ人の容は、あらはに見せざりし」と云ふやうな、舊態依然たるものであつたかど、知らるゝのである。

江戸和泉太夫座に勤むる野呂松勘兵衛と云し人形遣ひ有、頭平めにして青黒き顔色の賤しけなる人形を遣ひて是をのろま人形といふ。のろまは野呂松の略語なり。又鎌齊佐兵衛と云ふはかしこきかたちの人形をつかひ、相共に賢きと愚なるとの體を狂言に仕始めし也。其頃の人愚に鈍き者を賤しめてのろまといふ異名を付、痴漢に比したり。此野呂松氏を祖として、京大阪操り芝居に野呂間、麗呂間、麗呂七夢間等の名を付道外たる詞色をなし、淨瑠璃段物の間の狂言をなしたり。近來はかよふなる事は捨つたり又知る人も稀に成しなり云々。増補淨瑠璃大系圖

第五章 杉山丹後と薩摩浄雲

杉山丹後

江戸最初の浄瑠璃 浄雲に先たつ事約十年杉山丹後江戸に下る 江戸に於ける新しき浄瑠璃の最初の宣傳者 傳記的考證資料とし丹後を浄雲の高弟なりとするの説は謬つて居る 参考すべき各書の記事 丹後は數一たび薩摩侯の眷寵を得たる事あるのみ 少くとも丹後の格式聲望は、浄雲以下のものにあらざるを知るべし 浄雲が噴々の名を成したのは畢竟興行上の成功である

薩摩浄雲

浄雲の傳記 父祖二代の遺傳を受けた浄雲の聲曲的賦才 聲曲に趣味を有した彼の天稟 『大薩摩杵屋系圖』に書かれた浄雲の系統 元和寛永頃の江戸の芝居街 芝居町柴井 浄雲の人氣 島津薩州の眷寵 投獄の厄に逢ひ芝居は禁止せらる 林羅山の觀た浄雲の芝居 別處に

師の名人小平 段浄瑠璃は浄雲に始まる 六段型 浄瑠璃 太ありこの説

江戸最初の浄瑠璃

元和以前に於ける江戸の浄瑠璃と操り人形の事歴は、確と記録の徴すべきものなし。雖然、元和の初め既に薩摩の如き偏僻の地方にまで、相應の伎倆ある操り興行師の徘徊しつゝ在りし證據の徴すべきものあるより推想するも、『南浦文集』傀儡子之詩序に、「是歲元戲動者乘馬從徒來而徘徊於我薩州矣、匪啻有木偶之面目機發、而太似人而已、主客相搏、兵刃伏尸、流血漂處、立有興廢而使人嗟傷者、不可勝言、加之有一老婆之影、我君之隱者、有一幼女之救、我主之命者、何哉、老婆幼女之冰炭、其

心者、若是其大甚乎、是亦命之所致也、一傀儡之藝、誰敢京都の流行ものは相次で江戸に傳はり、説經稱述之乎、觀者駭肩、累跡無不、發惑之、發動之矣、さありあり、節もあれば、祭文もあり、扇拍子の淨瑠璃もあれば、傀儡舞の戲もあり、普通の流行を作りひんぎやうばしつゝありし事は、想察するに難からざるのである。されど新らしき形式淨瑠璃と人形つたの操り芝居三味線と提携した淨瑠璃らしき淨瑠璃の流行を見るに至つたのは、實に元和二年杉山丹後の江戸下りの時に始まる。

竹豊故事 (三卷)
 浪華山人一樂の著。操芝居淨瑠璃來由、太夫故人の噂に當時名人の評、三味線來由、故實、操人形古事來歴等を詳記したるもの。竹本、豊竹に關する事實なるより、竹豊とは名けたるなり。桃園天皇の寶曆六年丙子の自序あり。(國書解題)

淨雲開祖説は當を得ざるべし

淨雲に先だつこと約十年杉山七郎左衛門江戸に下る

在來一般の傳説に依れば、江戸に於ける淨瑠璃最初の宣傳者は、薩摩淨雲なりと云はれて居る。されど淨雲が江戸に下つたのは、寛永の初めなれば、「竹豊故事」の「慶長年中の末より江戸に淨瑠璃繁昌して油屋茂兵衛烏屋治郎吉四郎與吉等の太夫有別して泉州堺の住薩摩次郎右衛門江戸に立越、大に名譽を顯はし繁榮し後に法體して淨雲と云へり此の淨瑠璃太夫の根元也」とあるより推して、淨雲の江戸下りも慶長の末年なりと考證する者もあれば、「慶長年中の末より」の文句は左までの用意あつて書き下したる慶長の末思はれず、單に慶長の末頃より繁昌するに至りしこの意味を言ひ現はしたるまでに止り後の「江戸に立越」の文句にまでかゝり淨雲江戸下り淨雲開祖説は當を得ざるが如し。淨雲に先だつこと約十年、杉山七郎左衛門後受領して杉山丹後椽京より下り、元和二年より操り芝居を始め、淨瑠璃を語つて居る。「色道大鑑」には

「抑淨るりは瀧野勾當ふしを付て、文祿三年甲午の年よりかたりはじめたり、此のじやうるりに本ふしとてあり、此の本ふしに表裏とて秘傳あり、奥に杉山七郎左衛門といふもの世に出て、瀧野直傳の本ふしをかたり、最淨るりにおいて、中興の開基たり、杉山江戸に至り、元和二年、丙辰の年より、芝居をたて、操をして、淨るりをかたる、其の後杉山氏承應元年の夏、江戸より京都に上り、忝も口宣を頂戴して、天下一杉山丹後椽藤原の清澄となゆる、入道しては、寶山高智といへり、忝子も又受領して、肥前椽といふ、淨るり

『江戸節根元記』は三代目河東藤十郎門人柳雅の著なるも、開卷の三條は『奈良柴』に見ゆると全く同文なれば、其れまでは原武太夫の筆にして、柳雅は其後を承けて筆を續けたるものなるべき歟。

江戸に於ける新しき淨瑠璃の最初の宣傳者

傳記的考證資料としての『色道大鑑』の價值

の最初に序を付始たるは是清雲雲は澄なが作也丹後はじめて是を語る。」

と記し、又、原武太夫名は富五郎三絃の名手にして、別に斷絃の餘論の著あり、一見識を有したる人也の『奈良柴』には、「杉山七郎左衛

門と云町人瀧野の妙曲にくわんきし、深く望で師弟となり、伎藝を覺へ得て東都の一風

とす。又小平太といふ者、瀧野の弟子にて京都よりしたひ來りて、七郎左衛門の助、音を

語る。」とあり、『江戸節根元記』にも亦、小平太助音を語る云々の事を云へり此等の所説より推考すれば、杉山丹後こそ江

戸に於ける新しき淨瑠璃の最初の宣傳者にして、丹後自身は淨雲よりは寧ろ一步上位

にあり、云はゞ兄弟子とも云ふべき關係の位置に在りしものと考定すべし。

『色道大鑑』は延寶六年の序文あり、元和二年よりは六十三年目の著述なれば、歴史的傳

説に關する考證の資料としては、後の淨雲開祖説、淨雲の四天王説を祖述せる『本朝世

事談綺』享保十九年の開板なれば元和二年より『竹豊故事』寶曆六年の序文あれば元和二年よりは

るかにまさり、『奈良柴』は享保年中の著述なれば、殊に『色道大鑑』の著者箕山、畠山氏又は

氏京部の俳人にして、名は成康七郎左衛門と稱し、吞舟軒、幻々齋、述莫堂、了因居士等の號あり、貞徳の門人也、好て戯作を爲す、投節の歌に其作多し、晩年有益の著書あり、寶永元年六月七十七歳にして歿。は、六

十餘州の花街を巡遊し、三十餘年を経て其の著、色道を成したるほどの熱心家にして、

寶永五年に生れ、親しく勃興時代の淨瑠璃、操り芝居の現狀を目睹し、研究したる人な

れば、夫の純乎たる傳聞餘録に過ぎざる、「竹豊故事」「本朝世事談綺」等とは自ら其

の選を異にし、著者が丹後、喜太夫、出羽播磨等と往來し、何角と注意して好事的研究を

積んで居たと云ふことは、『色道大鑑』の本文に「淨るりに序を付始めたは是清雲(澄)

が作也、丹後はじめて之を語る、予情おもふに、序を付たるは淨るり奥深して聞よきが、

淨瑠璃の初段の發端に、さても其の後と云ふ事聊不審なり、二段目よりは最ときこゆ、いかにしても此の道理きこわがたさに、丹後椽竝喜太夫、大阪の出羽播磨、ことごとくかれらにあひて是を尋ぬれども、終に理をわかつたずして曰、此の扱も其の後といふに家くのふしあり、息繼音聲さまく仔細あり、調子をうかどふに祕術ありて、一子一弟に相傳することなれば、たとひ誤りにても候へ、今又改めがたしといひてやみぬ云々と記して居るより見るも明かにして、書中丹後と云へるは七郎左衛門の丹後椽なることも亦明かなれば、「元和三年丙辰の年より芝居を立て、操をして淨るりをかたる」と書いた根據も、恐らく丹後の直話にて聽きたるものなるべし。丹後は元和に江戸に下り、承應に京に上ぼり、四條河原にて興行し、父子共に椽號を受領し、名譽を輝かして居れば、著者箕山が丹後に會ふたのは、多分此の入京當時の事なるべしと思料せらる。承應元年より延寶六年(色道大鑑著作の時)までは十五箇年也。

杉山丹後を淨雲の高弟なりとするの説は蓋し『竹豊故事』に始まる。されど其の考證は謬つて居る。先づ左の各書の摘録を参考すべし。

もしほや子云戯場の表に天下一とあるは淨瑠璃の受領の名なり、中こふに薩摩とあるは右に云ふ丹後椽が弟子などにやあらん。『篇額』
 正保のころ薩摩太夫治郎右衛門と云、江戸淨瑠璃の祖也、法體して淨雲と云、子を又さつま太夫治郎右衛門と云、淨雲弟子丹後太夫長門太夫、丹波太夫、源太夫の四人あり、これそのころの四天王の太夫と云、今の淨るり太夫淨雲が血脈ならざるはなし

丹後を淨雲の高弟なりとするの説は謬つて居る
 参考すべき各書の記事

篇額 北川春成の著。京都清水、祇園に掲げたる古來の額面を繪圖して、其の由來を記したるものなり。最初一卷に文政二年巳卯傑亭季魚の序あり、次の一卷以下四卷を第二編と稱

し、速水春曉齋輯として、北野、清和院等のを加へ、一層由縁を詳記す、文政四年辛巳湯淺經邦の序を附せり。本書は合川珉和と合編するところなり。北川春成は京都の畫師にして明溪と號せり。諸流に涉りて最も模寫を能くせり。

『本朝世
事談綺』

慶長年中の末より江戸に淨瑠璃繁昌して、油屋茂兵衛、烏屋治郎吉、四郎與吉等の太夫有別して泉州堺の住薩摩次郎右衛門、江戸に立越大に名譽を顯はし繁昌し、後に法體して淨雲と云り、是淨瑠璃太夫の根元也、此の淨雲の子も又薩摩治郎右衛門と號し、相續きて名人也、淨雲弟子丹後太夫、丹波太夫、源太夫、長門太夫、右の四人何れも虎屋と號せり、正保、慶安の比、四天王と稱美せし名人也。『竹豐
故事』

京都に小平太と云者、瀧野檢校の弟子と成御當地へ下り、七郎左衛門の助音をかたる、是より關の東に普く弘まりければ、清玄といへる人六段物の文作を與ふ、七郎左衛門、小平太是に節を付て語り、工夫して人形に合て興行す、七郎左衛門上京して丹後椽と受領し、小平太は薩摩椽と受領すとかや『江戸節
根元記』

其後瀧野諸侯につかへて東武に下る。瀧野勤の隙々に士家商家にも交りける。あるが中に、杉山七郎左衛門と云ふ町人瀧野の妙曲にくわんきし、深く望で師弟となり、技藝を覺へ得て、東都の一風とす。又小平太と云ふ者瀧野の弟子にて、京都よりしたひ來りて、七郎左衛門の助音を語る。是より關のひんがしにあまねくひろまりければ、清玄といへる人六段ものゝかへ作をあたふ。七郎左衛門、小平太、是に節を付てかたる。又小平太、西の宮の傀儡師にならつて、初めて操と云ふ者を工夫して、人形に合て興行す。七郎左衛門上京して、丹後椽と受領して、小平太は薩摩の椽と受領すとかや。『奈良
柴』

紀州の浪人小平太といふもの、原註淨運と云土佐椽師匠なり京都に於て淨瑠璃といふ一ふしを語り出し、澤住勾當といふ琵琶法師の三味線に合せ、西の宮の傀儡師源之丞といふものに人形をまはせしより、しきりに京都にもてはやされ、終に江城下に下り、中橋廣小路、其の比はいまだ葦原なる所に芝居を立て、此の一曲を諸人に見せたり、是、寛永年中、の事なり、「事跡合考」

右に由つて観るも、丹後を以て淨雲直系の高弟なりとするの説は、僅に『竹豊故事』『本朝世事談綺』の二つにして、「聲曲類纂」は、此の兩書の説に依り、同じく四天王の一人として數へ居れり『江戸節根元記』は『奈良柴』と同じく、淨雲が丹後の助音を語つたことを記して居る。

丹後は數々其の伎を將軍の前に演じ、淨雲は一たび薩摩侯の眷寵を得たることあるのみ

少くとも丹後の格式聲望は淨雲以下のものにあらざりしを知るべし

『聲曲類纂』には、「傳に云、七郎左衛門寛永の比、高貴の御前にて淨るり二段を語り大猷院三代將軍堀田加賀守邸へ御成の時、歌舞伎踊と七郎左衛門の淨瑠璃を台覽に供す齋藤月峯著「百戲述略」其の後又々仰事ありて生贄といふ淨るりを語る、四代將軍伊井掃部頭邸へ御成の時、亦七郎左衛門親子の淨瑠璃を台覽に供す「百戲述略」後、紫の幕に蕪の紋を染てたまはりしか、世家紋とすと云へり」と記せるも、淨雲に就いては、島津侯の眷寵を得たりとの『事跡合考』の記事はあるも、將軍の前に演じたりとの事は傳へられたるものなし。丹後、淨雲兩者の伎倆の優劣、曲風の如何は徵すべきものなし。されば、七郎左衛門親子の者が、數々其の伎を將軍の前に演ずるの光榮に浴することが出来たと云ふのも、淨雲の盛望を以てして、尙且つ一回だも其の光榮に預ることが出来なかつたと云ふのも、いかなる譯あつてのことなるかは推定し難しと雖、少くとも丹後、其の人の格式聲望が、淨雲より一段下のもの、にあらざりしことは、推斷するに難からざるべし。丹後を以て淨雲の門弟な

淨雲が嘖々の名を成したの**は畢竟興行上の成功である**

りとすれば、弟子は數々召されて台覽の光榮に浴したれど、其の師は一回だも之に與ることを得なかつたと云ふ、條理の合はぬ現象となるのである。

されば、江戸に於ける淨瑠璃最初の宣傳者を淨雲なりとするの説も誤りである。丹後を以て淨雲門下の四天王なりとするの説も亦謬りである。淨雲が嘖々の名を成したの、主として彼が芝居興行上の成功に由來するものなるべし。此の成功よりして丹後以上の評判を取り、幾多の秀才は其の門下より輩出し、後の江戸淨瑠璃の太夫は、多くは彼が系統を引きたるものなりしより、勢ひ淨雲を以て江戸淨瑠璃の總祖なりと誇稱するに至り、遂には事實化したる傳説となり、『竹豊故事』『本朝世事談綺』等の四天王説まで、胚胎すこととなつたものであらうと思料せらる。

京都に呱呱の聲を上げた操り淨瑠璃が、江戸に入つて倏忽驚くべき急速の成育を遂げたのは、實に薩摩淨雲の操り芝居興行の人氣に由る所多いのである。淨雲は江戸淨瑠璃最初の宣傳者ではない、されど、之が流布興隆に盡した偉勳者である。事實的の開祖である。

淨雲の傳記

淨雲は文祿四年和泉堺に生る。『事跡合考』には紀州の浪人とあり、色道大鑑には洛の人と記せり。通稱は虎屋治郎左衛門、又熊野と稱し、小平太とも稱せりと傳へらる。澤住檢校の門人と云ひ『竹豊故事』瀧野檢校の門人も云はる。『江戸節根元記』祖父は淨見と稱し、水無瀬流の琵琶を學び平家語りの巧者にして、父は淨慶と云ひ薩摩一流の謠物に長じ、操り人形をも興行した人である。

父祖二代の遺傳を受

淨雲の聲曲的賦才は、父祖二代の遺傳を受けて由來する所深く、初め薩摩太夫と名乗

けた淨雲の聲曲的賦才

り、薙髪して後、淨雲と號した。彼が江戸に下りし年次は確かでないが、寛永のはじめ、家光將軍治世の後半期の始め頃であらうと推定せられて居る。曾て淨瑠璃操りの伎を豊太閤の前に演じ、太夫號を許されたのは父淨慶なるか、はた淨雲自身なるか、兩説ありて定め難し。

聲曲に興味を有した彼の天稟

『大薩摩杵屋系圖』に書かれた淨雲の系統

『色道大鑑』に「書たる始は草紙註、十二段草紙の事也、なりしを瀧野勾當といふ者、平家をやつして是にたりけるに、おなじく、洛人熊野小平太といふ者、是をきふならひ、是をたのしみて、夜毎に洛中をかたりありきけるを、京わらべ聞て、これよりじやうるりといふ事をしれり、小平戸にまかりて此の淨瑠璃をかたる、即江戸薩摩と云ひしは此の小平太の事也、尤後に入道して淨雲と云へり」とあり、左様の事もありしなるべし。之より推すも彼が聲曲に興味を有する天稟なりし事は、想像するを得べし。

大薩摩 杵屋系圖 『音曲叢書』第一編參照 には、淨雲の系統を左の如くに記して居る。這は代目十二杵屋勤三郎の所藏せる筆寫本なりと云はるゝものなるが、記載の事項は悉くは信じ難し。

大凡各家元の系圖なるものは、多くは其の始祖の傳記に有難味を附けんが爲めに、初代、二三代位のごころまでは牽強的の傳説を附會せるもの多し。本系圖に就いては未だ精しき考證を加へたるに非らざるに、り、之が眞價は俄かに判じ難しと雖、亦其の嫌なしとせず。爰には單に參考的に掲載するに止む。

本朝謠物淨瑠璃始祖

薩摩家譜竝系圖

○彦火々出見尊

○末孫薩摩隼人 舞樂の始祖也風俗の哥舞又俗伎の始也

先祖彦火々出見尊御兄神火酢芹命と御位を争ひ給ひ海上に惱され玉ひし體を舞樂に作り右隼人門弟等を打連れ薩摩大隅より都ね度々登り於禁庭舞ふ右の事は續日本記第七第三十四に在り亦大酢芹命緒と云て赤土を掌に塗り顔に塗る是則今の世に紅粉を塗る歌舞伎役者の始め也右は神代の卷に在り。

子孫 薩摩一流謠物始祖

○初代 薩摩小源太藤原直元 淨見と號す

日向の國臼杵大縣の産元龜三年申正月京に住す水無瀬流岩橋の門弟と成り天正三年亥七月和泉の國境に住す平家一流を定め水無瀬の門を出て一派の流儀を立長男小平太に傳ふ。

長男

○二代 薩摩小平太藤原直貞 淨慶と號す

幼名父の名を嗣小次郎と云慶長二丁酉年入道して淨慶と號す父の立たる薩摩一流の謠物を傳へ受て語る又西の宮の傀儡師に習ひ操人形を工夫して興行す 延寶三乙卯年十月三日八十九歳歿す

○二男 警中小路

水無瀬流の琵琶を彈文祿二癸巳年琉球國より二絃の樂器渡る同人是を持遊所二弦故に音律備わらず是に依て同人考へ工夫を以て猶一糸を相加へて三絃となす所是にて音律備はる依て琵琶の手より工夫を成し彈初む是則本朝三絃の根元也同人彈弘め澤住檢校、虎澤檢校に傳ふ亦於郡通女が祕曲舞の小哥十六番を作す右を右村檢校に傳ふ。

本朝淨瑠璃太夫元祖

○三代

薩摩淨雲太夫藤原直嗣

初名薩摩治郎右衛門
幼名源太

泉州左海に父の跡を嗣薩摩一流の謠物を讓受て十六歳の時出勤し治郎右衛門と改名して京都に住す亦此頃小野の通女と云ふ者故有て舍那王九淨瑠璃姫の戯れて源氏十二段と云草紙に作るさる御方の望に依り當治郎右衛門右草紙の文へ薩摩一流の節を附て語る又澤住檢校中小路より傳へ受たる三絃を文句の切口へ彈後には節にも合せて彈慶長二丁酉年豊臣家ね被召右源氏十二段を語り候所御褒美として太夫の官名を賜はり薩摩淨雲太夫と號す是則淨瑠璃語り太夫號の始め也亦た謠物を世上の人淨瑠璃と云ならわす故は淨瑠璃姫の事を語る故にかく云ふ右が惣名となり入門の輩種々に流儀を立今の世に流行となれ共惣名淨瑠璃と唱ふ亦澤住檢校、虎

澤檢校、瀧野檢校、淺妻檢校、岩船檢校、小關勾當、柳川城秀、八ッ橋加賀一等右淨瑠璃之三絃の妙手を加へ、彈依て世上に流行と成、追々新淨瑠璃數番に相成り、太夫門弟多く出來、それぞれの流儀を立て語る、右次郎右衛門一度入道して淨雲と號す所故有て再勤し、淨雲太夫と改む、嗣子なきに依て祖父小源太の累孫力彌是を嗣寛文十二壬子四月三日七十八歳にて歿す

○江戸大薩摩三絃元祖杵屋勘五郎

下江戸大薩摩始祖

天下一

○四代薩摩淨雲太夫藤原直壽始名二代薩摩治郎右衛門幼名力彌虎屋と號

初代小源太の累孫力彌又二代薩摩治郎右衛門と改む、寛永二十癸未年江戸に下り、淨雲太夫を嗣て慶安四辛卯年堺町に於て櫓を上げ操を興行致す、右に付是迄の三絃彈盲人を改め男哥舞妓三味線の元祖杵屋勘五郎を頼み、三絃彈と致す、同人工夫を以て新淨瑠璃數番作す、是江戸大薩摩淨瑠璃節の始め也、是より江戸に流行し、江戸の謠物の様に相なる門弟太夫三絃數人出來所々に於て修行す、右を世俗に小薩摩と云、當師家を大薩摩と云、子細有て休座致す元祿三庚年十月二十九日終二代目薩摩淨雲太夫力彌

○五代 薩摩外記大椽藤原直政始名兼太郎惣右衛門又薩摩太夫

淨瑠璃の元祖淨雲の門弟惣右衛門後薩摩太夫と改め京都に於て操座を興行す正保元甲申年後光明院様御叡覽の時外記大椽の授領を賜ふ番組世續物語業平小舞星合右三番也其後江戸に下り四代淨雲太夫の跡を嗣延寶年中に操座を再興す三絃勘五郎六左衛門出勤す亦同年右座に於て男歌舞伎を興行す中村座の役者出勤す長門太夫甥也正徳六丙申年正月十一日大火の爲死行年四十五歳

(以下略之)

元和、寛永頃の江戸の芝居街—芝居町(柴井町)と中橋

『増補江戸名所咄』には、「扱江戸にても、そのかみは芝居町にて座をはりかたり、そのうち中橋に移り、又堺町に移り語る也」とあるより見れば、江戸最初の操り、狂言踊などの興行地は、芝居町即ち今の柴井町にして、其の中橋に移つた年次は明かでない。されど中村勘三郎が江戸に下り、御免を得て猿若座を創め、猿若狂言の興行を始めたのは寛永の元年にして、猿若座は江戸歌舞伎御免の初發と云はる。勘三郎が江戸に下つたのは元和の八年にして芝居創立の免許を得たのは翌九年である。其の場所は中橋であり、元和三年五月の奥書ある『徳永種久紀行』ふごくに

「いとまをこうてたち出て、今こそわたれいまばしを、年々わたしかゝけるや、しんばしとやらんうちわたり、みやこの人のかけつらん、そのなばかりは京ばしを、人も共にくちわたり、みればなにを、なかなばしの、きやうげんおどり上るりを、木にて作りしで、このぼういどであやつるおもしろや、げにもこのごはむかしより、日をかたごれるし

淨雲の人氣

まどてや、日本ばしこそゆゑしけれ」云々
とあるより見れば、元和の當時は、既に此れ等の興行ものは、悉く中橋に集中して居たことは明かにして、丹後の七郎左衛門が初めて下つて淨瑠璃を語つたのも此の中橋なれば、淨雲が江戸に入り、操り芝居の興行を始めたのも、亦此の中橋廣小路なることは明かである。

淨雲の人氣は非常にして、島津薩州も散策の途次之を看て興に入り、館に招いて其伎を演せしむるに至つた。『事跡合考』には其事を記して、

「紀州の浪人小平太といふもの淨運註、運は雲の誤りなるべしと云、土佐権師匠なり 京都に於て淨るりといふ一ふしを語り出し、澤住勾當といふ琵琶法師の三味線に合せ、西の宮の傀儡師源之丞といふものに人形をまはせしより、しきりに京都にもてはやされ終に、江城下に入り、中橋廣小路、其頃は、いまだ藪原なる所に、芝居を立て、此一曲を諸人に見せたり、是れ寛永年中の事なり。然るに或諸侯御在府の日、氣晴らしながら、馬を率せて、此の邊徘徊ありし砌、此の芝居に入て、見物し、入興のあまり、後日居館に招きて興行せしめられたり。其の時此の小平太が人形ごとく、く土偶なり、これによりて大身の興として、通四丁目に京都より下りて江戸中夫迄唯一人のみ渡世とする人形師鶴屋といひしものありしに申付て、残らずかの人形を木偶にせられたり、元より小平太紙の幕を用ひたりしが、かの御館にては、紫の絹の幕及び布の幕に家の紋付たるを出してかけさせられたり。其の時、淨るりは、曾我物語なりけり、紋盡の段に

いたりて〇〇〇と某侯の紋と語るべきを御家の御紋とかたりしを、輿に入らせたまひ、褒美としてその木偶も幕も小平太にたまはりしとなり。その後薩摩太夫とあらため永くさつまぶしの俗唱なり。淨るりに木の人形を用る事こゝにはじま
れり」云々

と云つて居る。されど「徳永種久紀行」には、「木にて作りしでこのぼう」とあり、元和の比既に木偶ありしこと明かなれば之を以て淨雲に始まることする本書の記事には與し難し。

薩州召演の噂は忽ちにして喧傳せられ、淨雲の人氣はいよゝゝ高まり丸に十字の絹幕を引き廻らした木戸櫓は時人の評判の種となつた。されど此の好況は却て彼が身に災し、淨雲自身も不謹慎となり、驕奢となり、人形の衣裳其他萬事に綺羅を飾りたるより、遂に當路者の忌諱に觸れ、投獄の厄に逢ひ、其の淨瑠璃は禁止されたのでありし。『玉露叢』には、

「寛永中江戸堺町において、天下一下り薩摩太夫、鼠木戸の上に幕を絹の紫に染、十文字の紋を付、且又淨瑠璃人形の衣裳、其外歌舞伎役者の衣類等、結構をつくし奢りけり、然る處に、御歩行目付の小泉源右衛門見とがめられ、其後喜多見久太夫改められ、薩摩太夫を始、彦作勘三郎等籠舎を仰せ付られし」

と云つて居る。「武江年表」には、此事を寛永十二年にせり。此に勘三郎とあるは猿若勘三郎にして、彦作とあるは猿若彦作猿若座の舞人役者也の事なるべし。

儒者林羅山は其の文集卷七十、隨筆六十に、

今茲註正保四年也五月二十八日、被賓友誘導。且應其主人招。而携向陽讀畊二子往赴

羅山が觀た淨雲の芝居

焉。堂内假構棚層々。疊氈張帷高。二丈許長數丈。爲傀儡之戲技也。其木偶或男
女僧俗或天仙神女或介士武夫或騎馬擔夫。有舞蹈者。有擧扇打鼓者。有踊躍者。
有盪舟掉歌者。有戰死而身首異處者。有衣冠者。有放矢者。振棒者。擧旗捧蓋傘者。
或爲龍蛇或爲飛物或爲狐且擧火干尾。見者皆恠之。始自巳午之交至于晡。其隱
在棚底歌者聲有上有下有細有巨。有鼓吹蠻琴應於木偶之動而有曲節。且操之引
之。且踏板以喚者與木偶相得不異殆如生矣。今日所爲者江戸第一之偃師號小平
太。近世傀儡子此爲巧手云々。

と云つて、淨雲の芝居の妙伎を嘆稱して居るより觀るも、一般の時人が如何に驚倒感
嘆して取沙汰評判して居たかは、大概推定することが出来るのである。但し「今日所
爲者江戸第一之偃師號小平太、近世傀儡師此爲巧手」と云つて居るのは、聊か疑なき
を得ず。這是想ふに傀儡が表面の藝となり、淨瑠璃語りは隠れて棚底に在り、人形主、淨
瑠璃従の關係に在りしより誤解し、傀儡子中の尤者即ち評判の薩摩小平太なるべしと
輕斷し、此の文を作したるものならんと思料せらるゝのであるが、それとも一座の人形
遣中、別に小平太なる尤者が居たのであらうか明かに考へ難し。

『繪入淨瑠璃史』には、

薩摩太夫の名の下に
小平太(人形遣)次郎
衛門(淨瑠璃太夫)の
二人の名人ありたり
とするの説

「次郎右衛門と小平太とは、同一人の如く諸書に見へたれど、恐らく別人なるべし。蓋
し小平太は人形遣の名に多く用ひられ、虎屋次郎右衛門は淨瑠璃太夫の名に用ひら
るより考ふるに、薩摩太夫といふ名題の下に、小平太と次郎右衛門との二人の名人あ

りしが如し。然るを薩摩太夫の事を記するものゝ其の孰れかを代表者として擧げたるにぞ、後人之を混同するに至りしなるべし」

と云はれ、『竹豊故事』には、全然小平太を傀儡師なりとし、

「寛文の頃江戸に小平太と云人形遣ひの名人有羅山文集に曰く、鼓吹蠻琴有て木偶の動くに應じ曲節有り、且是を操り是を引、板を踏んで呼者と木偶の相得たる事殆ど生るが如し、今日の爲所の者江都第一偃師小平太と號す、近世傀儡の巧手たりと云々、此小平太おやま男人形共に能遣ひし名人のよし傳へ聞わたり」云々。
と云つて居る。ともに一説として考ふべし。

淨雲が投獄の厄に遭ひ淨瑠璃の興行を禁せられたのは寛永の十二年なるが、同二十年の印行本には、薩摩虎屋が操淨瑠璃江戸の禰宜町に於て興行云々の記事あり、寛永二十年の印本『色音論』一名「東めぐり」されば程なく解禁せられたるものなるべし。彼が歿年は詳ならず。一説には、『大薩摩杵屋系圖』寛文十二年四月三日七十八歳にして歿したりと記せるも疑はし。若し此の正なるべし。慶長二年より寛文十二年までは七十六年也。前掲大薩摩系圖参照

段淨瑠璃は淨雲に始まる

六段型淨瑠璃

×別に書記したるなり。
寛永二年乙丑の版なり。
本書の事につきて、柳亭種彦の端書あり。今其の全文を擧ぐ。蜀山人藏書に、晋妻めぐりと題する冊子あり、下巻(八葉右)

淨雲の淨瑠璃は、主として北條宮内の文作になつたものだと云はれて居る。段淨瑠璃を始めたのは淨雲である。丹後、淨雲等の爲めにはじめて六段淨瑠璃を書いたのは清玄と云ふ人なりと云はる。『奈良』扇柏子の時代よりして行はれたのは、何れも短き端淨瑠璃であつたが、『十二段草紙』は長篇なりしと雖も實際は、僅かに其一淨雲が始めた段淨瑠璃は全篇を六段に分つたもので、江戸淨瑠璃を始めとし、京阪の淨瑠璃も永く六段の形をと

ひらく事なはいふ條に、しきおんるんの板ぎなば、二條烏丸あきののに名字ないへばふたつ橋、いへ名ははんや清兵衛、是れをひらいて世に出す云々さあり、予考ふるに、是れ此の書の事なはいひして、原、色音論さいひしな、後にあつまめぐりて外題を改めしなるべしと類りに尋れもさめてこの一冊を得たり。思ひし如く彼の書と同本なり、下の卷は蜀山の書をもて補寫す。後人上下の卷の外題のたがひしなはいふかることなけれ。さて此の書を色音論と名づけしは橋と鶴の論あるよりの名なり。下の卷たうたい人のすかれしは、鶴を數多うかけならべ、椿を數多うふならべ、鳥のなく聲花の色、聲と色との争ひに云々さあり。色は椿の花の色なり、音は鶴の鳥の音なり、論は争ひなり、それを標題によびたるが、江戸地名の事を多く載せられ、後に、あづまめぐりさよびかへしなるべし。寛永二十年の作にして、江戸名所記、江戸雀等の原本なり」といへり。其の沿革等をも窺ふべし

(國書解題)

つて居たのであつて、寛永年間木下甚右衛門が、土佐少椽橋正勝の正本數十種を刊行したのを見るも、いづれも六段物で、近松門左が筆を五段淨瑠璃に染むるに至る迄の淨瑠璃の型式は、先づ六段ものであつたと概定するも差支ないのである。

『還魂紙料』には左の如くに云つて居る。

むかしの淨瑠璃は總て六段なり十二段なきもの歟京都にては井上播磨より五段につどめたりといふ江戸にては寶永正徳の頃までもなほ古風をうしなはず土佐椽和泉太夫等が淨瑠璃みな六段なりしゆゑに何にもあれ是ざりといふ程の事を、六段目ぢやなどいふ諺今もまれくくにいふものありて彼梵天國の意に通ずるもあり又末一段といふもおなじ。

前句 對決の場かたへすゞしき 來雪

附句 六段目日も西山に傾きて 青雲

五十番句合 延寶三年糠塚翁判 藤簾子

むしの聲末一段のゆふべかな 藤簾子

俳諧二番船 延寶八年印本宗圓撰 榮親

前句 さ湯をものます兄弟あけくれ 榮親

附句 かの敵末一段にかたり詰 榮親

俳諧富士石 延寶七年印本調和撰 素白

人形や末一段の夏ばらへ 素白

第五章 杉山丹後と薩摩淨雲

柳亭曰人形を木偶にとりなし末一段にて六月を聞せし利口なり

三茶三幅一對延寶九年藤枝といふ遊女を評する詞に「容顔ずるぶんよし御年もはや五
六段目までかたりつけ給へば嫁入のやうだいあるべし」云々。

又近く俳諧に見わたるは

前句附歌がるた元祿十三年印本一名馬だらひ

前句 編笠ぬいでやすむ纏

六阿彌陀末一段に廻り詰

是等の冊子をてらしあはせて見るに、梵天國六段目末一段の諺は淨瑠璃より出た
り。云々

猿若勘三郎道順 寛永元甲子年二月十五日江戸中橋に於て櫓を上げ、始
めて今様男歌舞伎狂言を興行す。元來猿樂より工夫せし狂言故に若猿と
號す。亦夢に不二の頂より鶴一羽、銀杏の葉をくはへて家に舞込む、右を方
しきにのせ、神前に備へ候と夢はさめぬ。右を工夫なし、角切角に一枚銀杏
を定紋と致し、舞鶴を替紋とす。明曆四年六月九日歿す。六十一歳。〔中村、杵
屋家譜竝系圖〕
杵屋勘五郎道廣 兄勘三郎と俱に今様歌舞伎狂言を工夫して勤む。杵は
元來氣根と云事にて人體をかたどりし物なれば、猿樂の初め翁、三番叟、千
歳の三神の體となし、三本杵を定紋と致し、杵屋と號す。又丸に三ツ柏を替
紋とす。(同上)

第六章 江戸浄瑠璃の前半期

(純江戸節浄瑠璃時代)

武人濶歩の江戸 金平節の流行

丹波親子の曲風

て聽客腕を扼し拳を握て歡呼喝采した元

祖團十郎の荒事も丹波の豪快な語り風に學ぶ所多し 父に劣らぬ和泉太夫

金平節の始め

金平節の前身酒呑童子の浄瑠璃

金平

節の盛時 京阪兩地の金平節 されど其の流行は倏忽にして熄んだ

弘化の比尙ほ越後の片ほとりに残つて居た金平節

金平節以外の各派 孰れも灑洒にして滋味ある曲風

真面目なる構想の規式正しき人形の

拵式三番より人寄せ浄瑠璃次で本浄瑠璃と云ふ順序

主なる太夫の略歴

江戸肥前椽 近江大椽 土佐少椽 薩摩外記 虎屋永閑 江戸半太夫 十寸見河東 優れたる河東節浄瑠璃の詞

章 說經節

堺町葺屋町の各座

延寶貞享の兩町の圖面

操り芝居興行事歴の一般

江戸歌舞伎と操り芝居興行年表

元和元年杉山丹後が操り芝居を開いて、浄瑠璃らしき浄瑠璃に江戸人の聲曲趣味をそより始めてより、享保十五年宮古路豊後が江戸に下り、彼一流の浮華輕佻の豊後節を以て、江戸浄瑠璃界を席捲するに至るまで、大約百十五年間を江戸浄瑠璃の前半期——純江戸節浄瑠璃時代——とする。而して元和、寛永の二十年は之が準備時代に屬し、正保より萬治に至る十七年は之が勃興時代に屬する。寛文よりして盛隆時代に入

り、貞享元祿はまさに江戸浄瑠璃各派の研を競ふて煥發した最盛時なりし。浄雲は薰陶の才に富んで居たと見ゆる。彼の流れは如何にも多士濟々なりし。江戸浄瑠璃の勃興時代と盛隆時代の前半は實に浄雲系諸秀才の活躍飛動の天地であつた。されど盛隆時代の後半期に入り、丹後系の江戸半太夫出でて一派の樂風を成し、次で十寸見河東出でて江戸浄瑠璃統一の功を大成するや、浄雲系の各派は聲息を潜め、榮枯其所を更ふるに至つたのでありし。

江戸前半期の浄瑠璃中特に傳ふべきは金平節と河東節である。金平節は勃興時代の江戸人の氣風に激成せられた時代産物の一ツにして、河東節は今に於て純江戸節浄瑠璃のゆかしさを偲ぶべき唯一の代表曲である。

顧ふに元和偃武後の江戸はまさしく武人の天地なりし。八萬の旗下衆は勝ちほこつたる面構へして大道狹ましと横行し、扶持離れの浪人共は將軍を見ること恰も一夜富限の成上り者を見るが如く、大言壯言、昂然として市中を濶歩し、見やう見まねの町人小僮の輩に至るまでが、おしなべて武張りたることを譽れとし、日常の話柄に上るものは、戰場往來譚か怪奇的な武勇談にして、萬事が武辨一方と云ふ時代の風潮なりし。されば浄瑠璃の流行も亦此の渦中を出てず、『金平法問答』、『金平天狗問答』、『金平兜論』、『金平千人切』等、殺伐豪壯荒唐無稽、唯強がり一方の金平節が、忽ち非常の勢を以て流行を見るに至つたのであつた。

金平節は浄雲の高弟櫻井丹波初め和泉太夫が工夫して語り創めた一流の節調にして、其の

純江戸節浄瑠璃開發
當時の江戸、武人濶
歩の天地

金平節の流行

櫻井丹波の曲風

豪壯痛快聽客をして腕を扼し拳を握り唯譯もなく歡呼喝采させた

元祖市川團十郎の荒事も丹波の豪快な語り風に學ぶ所多し

正本は多くは岡清兵衛の作なりと云はれて居る。坂田金時の子金平きんぺいなる剛勇無雙の男を捉へ來り、怪力亂神的なさまじくの脚色を加へ、色彩を施したるものにして、丹波が場に上ぼるや、二尺許りほがもあらむ鐵の棒にて拍子を取り、人形の首を引抜いたり、道具建の張り岩、張り石を叩き割つたり、豪壯痛快、奇を好み武に誇る當時の人々をして、腕を扼し拳を握り、唯譯もなく歡呼喝采させたのであつた。

『關東血氣物語』には、

「櫻井和泉平の正信は、生得強勇にして勝れて大力なりしが、中略勇力有るにまかせ淨瑠璃も強き事を好みて語り、鐵の二尺許りもあらん太き棒にて拍子を取る。よつてはるか後俳諧の宗匠貞佐が代々蠶中略と云集に「親丹波毎日岩をたぐわり」と云附合の句あるは此の太夫が事なり。中略元祖市川團十郎は荒事師の開山なりしが、此の太夫の有様を深く用ひ、今の海老藏迄も其の形を殘せしなり。丹波かかりそめにも弱き事を嫌ひて、木戸の者迄も、一器量あるものを集めけり。中略此の太夫生得の如く淨瑠璃も古今奇妙なる坂田金平と云ふ事を語りはじめ、若々敷事此の上なし。此の外にも大薩摩、丹後、近江語齋伊之助、肥前、土佐、外記、半太夫、式部、皆名人にて語り候へども是ばかりはおよばず」

と記し、『江戸名所咄』には、

「和泉太夫の淨瑠璃は岡清兵衛と云もの作る、いつぞの程より金時が子をきんひらなりと云ひひろめ、渡邊の綱が子をたけつなといひはやらしてより、昔がなりに云

傳へたる辨慶時宗朝比奈などは、彼金平の片手にも足らぬ様に聞ければ、怪力亂神好むをこの者どもは、金平を語るを聞ては、そばにてこぶしをにぎり、きばをかみて、よろこぶ程に、金平といふ事を、三才のわらべ迄も知りて、日本國へ弘まったり」云々。

と云ひ、『譚海』には、

「和泉太夫は式部太夫の親と同時代なり、坂田公平の上るりばかり語りて和泉太夫節とて土佐外記ふしに似て、夫よりあら、敷聞ゆるものなり、殊の外子供杯好み、て流行たる物なりしが、後に金平地獄廻りとて死したる事を作りて語りしより、すたれてはやらす芝居つぶれたり、老後に人形町にて金平の人形こしらふる所にかかり居てうせたりと」云々。

『聲曲類纂』には、

「岡清兵衛の作は金平鬼をとりひしぐ等の事を専らにあらはし、金平節とてもてはやしけるとかや、享保の頃金平さいごと題し金平死して地獄廻りせし事をつどりしより評判あしくすたりしを、又金平蘇生と作り直してよりふたよびはやりけるとかや、余が見るところの和泉太夫の上るりは、

『金平法問諍』『金平天狗問答』『金平兜論』『金平黒熊』『金平千人切』『金平大酒編』『金平最期』『金平化粧問答』『鎌倉管領結城合戦』『采女正平庭訓』

此の外上方の古上るりを和泉太夫の語りし本をも見たり、中古金平本とて小兒の

父に劣らぬ和泉太夫

金平節の始め

金平節淨瑠璃の前身
『酒呑童子』

金平節の盛時

京阪兩地の金平節

もて遊びし草紙は肥前節の上るりを繪入にせしより始めりと、此の時代の正本皆繪入にして、享保の頃にいたりても板本多く近藤助五郎清春、奥村政信、羽川珍重等が畫多し」云々。

と云つて居る。

丹波の子、和泉太夫初め長太夫も亦父丹波に劣らざる金平節の語り人なりし。『關東血氣物語』に、「二代目、和泉太夫迄、人形の損るも厭はず、人形の首を抜き、打割、打つぶすを更に構はず喜んで語る」と云つて居るより見るも、其の語り振りも大概観察されるのである。性質父に似て暴戻、或時田舎待と争ひ刃傷し、處刑せられたとも云はれて居るが、關東血氣物語』果して事實なるか、他に稽ふべきものなし。

櫻井丹波が金平節を語り始めたのは慶安、承應の頃なるべしと思料せらるゝのであるが、金平節以前の江戸淨瑠璃も、等しく武辨一方にして、怪奇談、武勇物語的のものが流行し、金平淨瑠璃の前身とも云はるゝ、『酒呑童子』の如きは、非常の歡呼喝采を取り、當時此の淨瑠璃を上場せざる芝居なしとまで云はれて居る位にして、金平節は畢竟、『酒呑童子』の趣向より轉化し、偶々丹波親子の如き豪壯痛快な語り人あり、岡清兵衛の如き作者あり、相倚り相俟つて一時の流行を激成するに至つたものに外ならないのである。

承應、明暦、萬治、寛文通じて二十一年は金平節の盛時であつた、萬治の頃よりして京阪兩地にも盛んに流行し、就中大阪の伊藤出羽椽の芝居、京都の虎屋喜太夫の芝居の如きは、一時殆ど金平節の興行にて持ち切りの有様となり、

『秀衡三代記』『頼光勇力争』『渡邊岩石割』『箱根山合戦』『酒吞童子若壯』わかざかり、『景政雷問答』
以上孰れも 江戸浄瑠璃 『天狗羽討』『綱金時最期』『四天王最期』『義經地獄破』『頼光蜘蛛切』『朝夷
 島渡り』『金時洛陽入』『頼光跡目論』『金剛山合戦』『鎌西八郎』以上孰れも 大阪浄瑠璃 等、

金平節と類型、同趣の各種の武勇物語的脚色の正本までも續々上場さるゝに至り、時
 人の熱狂的歡呼に迎へられて盛況を極めて居たのでありし。されど寶永の初めとな
 りては、さしにも流行を極めた金平節もかき消す如くに形影を没し、其の流行は倏忽に
 して熄んだ、享保の頃までは、たゞながらも尙其の名残りを止めて居たりしが如し
 と雖、爾來杳として全く其の跡を絶ちし。

『聲曲類纂』には、

ことし弘化丙午註、三年なりの春、日尾荆山先生奥羽より越後の邊へ遊歴せられしに、
 越後蒲原郡水原の町に瞽者ありて、和泉太夫が金平節の淨るりを覺わて語る、凡
 三十段も記憶せり、一席に五段六段のものを續けてかたる、それが師何某座頭は
 凡七十段も覺わたりしが故人となり、今の弟子某座頭に傳ふ、其の弟子もあれど
 多く覺わたるものもなく、また盲人の事故院本も所持する事なく、唯記憶のみな
 りと語られき。

とあり、されば弘化の頃尙ほ越後あたりの山村僻陬には、此の古浄瑠璃の面影を留め
 て居たりしものとおぼし。由是觀るも其の昔金平節が如何に盛んに流行し、傳へ傳
 へて此等僻村俚落にまで及んで居たかゞ想はるゝのである。

弘化の比越後の片は
 どりに残つて居た金
 平節

されど其の流行は倏
 忽にして熄んだ

水谷不倒氏の『繪入淨瑠璃史』には、

「金平節の發達については、和泉太夫の豪快なる曲節が江戸の人氣に投じたりといふ單純なる理由の外に、此の種の淨瑠璃には、徳川家の武運長久を祝福せる寓意の籠れる事も、此の淨瑠璃を助長せし一理由なるが如し。蓋し『酒吞童子』をはじめ、四天王を立物とせし淨瑠璃は、いづれも頼光、頼義等源家の正統にして、徳川家に取りては先祖也。或は序詞に武將の仁政を述べ、或は「源家の御代こそめでたけれ」と結び、只管に源氏の徳風を稱へたるは、頼光、頼義を徳川將軍家に擬して、當代を祝ひたるものにあらずして何ぞ。これらが如何に上下の間に好感を以て迎へられしか。金平の流行は、實に隱然たる此の力によらずんばあらず」云々。

金平節の正本に付いての研究は、『繪入淨瑠璃史』に詳悉されて居る。就て参照すべし。

金平節以外の各派

金平節以外の江戸淨瑠璃には、丹後椽の子肥前椽藤原清政の創めた肥前節がある。二代目薩摩太夫の門より出た土佐椽橋正勝の始めた土佐節がある。源太夫の弟子虎屋永閑が創めた永閑節がある。薩摩外記直政の創めた外記節がある。丹後椽の弟子近江語齋^{近江大椽}が創めた語齋節がある。其の他手品市左衛門の創めた手品節廣瀬式部太夫の創めた式部節若山五郎兵衛の創めた若山節江戸半太夫の創めた半太夫節、半太夫に學んで更に一派をなした河東節等別れて幾多の流派をなし、承應より明暦、萬治、寛文、延寶、天和、貞享、元祿、寶永、正徳、享保に涉り、大約八十年、交るゝ流行を盛んにし、時代の



江戸操り芝居之圖



孰れも灑洒として滋味ある曲風

眞面目な構想―規式正しき人形の拵

式三番より人寄せ浄瑠璃次で本浄瑠璃と云ふ順序

主なる太夫の略歴

移るに従ひ、曲風も次第に軟調となり、伎巧もますます加はり來りしと雖、尙ほ淡雅清婉を旨とした純江戸節浄瑠璃本來の特色を失はず、如何にも灑洒きつぱりとして滋味のあるものでありし。その面影は今尙ほ河東節に於て之を偲ぶを得可し。

『昔々物語』には、

「昔は境町の操、薩摩太夫、筑後、丹後、近江、肥前、永閑、あやつりの淨るりは酒顛童子あるひは生贄花車等、其の外浄瑠璃の仕組、初は富貴にさかへ、中は世に落、良等忠をはげみ義を立、親主兄の身替りに立、孝を盡し義を専らにしてあはれなる事を交へ、末には世に出、又富貴になつて位を作り、誠に勇をみがく事も有り、あはれなる事もありて、少しは身のたしなみ心付の爲にもなる、第一規式正しく、人形の拵様も先大將人形はわぼしひたふれを著せて、郎黨には立わぼしを著せ、ひたふれすあうを著せ、女の主人には髪をすべらかしかつら帯をかけて、召仕の者まで髪すべらかしかつら帯ひたいにかけ、御臺は十二一重の小袖きせ、男女共儀式正しく拵上也、始る前に、先式三番を能のごとく濟まし、其次に人寄せとて和田酒盛一ながれ前上るりにして濟まし、其の後に、其の日の本上るりを、何にても初る。道理至極したる多く、又あはれなる所は泪とぶめがたき程の義理つまりたる所は働かひく敷、智仁勇の良等さんけん等にて不慮の所にては覺す齒をかむ、是を太夫も役者も手柄とす」云々。

と云つて居る。當時の操り浄瑠璃の一般を知るべきである。

主なる太夫の略歴は左の如し。

江戸肥前椽

江戸肥前椽藤原清澄 杉山丹後椽の倅である。

『世事談續』江戸節根元記には、淨雲の元
第子長門太夫の門人の如くに記せり

大阪町に住居し、境町に父丹後椽の
あさなり操芝居を興行す。寛文の頃一派を語り出し肥前節とて世に行はる。其の子半之丞後二代の肥前となる。門人には江戸半太夫を始め初太夫、吉太夫等あり。

寛文八年の頃江戸の流行物を集し短歌有

當世はやりもの

肥前本おし やりがんな 人くひ馬に 源五兵衛 缺 けいあ

んや き船道行 三谷うた 河崎いなり 大明神 鎌倉道心 日参や

古作ぼとけに おんすゝめ いつも絶せぬ 觀世音 三谷へ通ふは 駄

賃馬 八文もりの けんごんや 淺草町は米饅頭云々『還魂
紙料』

以て寛文當時に於ける肥前節の流行の状を想ふべし。

近江大椽語齋

近江大椽語齋 杉山丹後椽の門人にして通稱は岡島吉左衛門、『異本洞房語園』に
は勘兵衛とあり 薙髮

して語齋と稱せり。四郎與吉の曲風などを交へて一派を語り出し、承應、明暦の頃語齋節とて世に行はる。『異本洞房語園』には、

「京町二丁目に勘兵衛といふ者ありて其の頃時はみり花し丹後が淨瑠璃を聞取て語り

しが、甚之丞が森甚之丞とて
三絃の名手也すゝめて云様、其方が淨瑠璃器用なれば丹後がしり

まひせんも口惜し、一流語りかへ然るべし。此の前、四郎與吉といふ者が語りし

淨るりの風面白かりしとて語り聞せければ、勘兵衛は彼、四郎與吉と、丹後をか、ね

異本洞房語園 三卷

江戸吉原町の開祖土司甚左衛門の六代の孫勝富が其の家傳を編輯したるものなり。即ち古の遊女白拍子の事、遊女數奇を嗜みし事、京都江戸遊女の名目の事、吉原開基の事等より、大門口御高札の事、新吉原の圖辻駕籠の

事等七十一項に分けて記述せり。編者は其の自序中に云へり。我がすむ里は往し慶長元和より以*

土佐少椽

*來、三たび所をかへ、三たび名を改め、既に百餘年を経て、實錄微言あり、又、巷説笑語多し。古き諺に曰く、鹿著の山は獵師知り、魚著の浦は網人知るさへば予が子孫をして爲に此の里の來由と昔物語をも知らせん、猥に筆を採て此の一冊を綴り、始に燕石私集と標題しけるを、同邑の同志、其之、之れを隨して燕石の名もこそとし、唯洞房語園とせよといひしまく之れに隨ふと云爾」とあり、其の趣意を知るべし。享保五年庚子の著なり。本書には類似本いと多ければ殊に異本とに名けたり。洞房語園異本考異と名くるものとは同物なり。庄司勝富は西田屋又右衛門と稱し、其の第一祖庄司甚左衛門以來累世吉原町の名主なり。文章、俳諧等にも趣味を有したりと云ふ。(國書解題)

合、一流に語りかへ、後に近江太夫語齋とて世上へ名を弘めけり」云々、と云つて居る。

土佐少椽橋正勝

二代目薩摩次郎右衛門の門人にして、

或は長門椽の門人なりと云ひ、伊勢椽の門弟なりとも稱し、『江戸

惣庵子』には外記が流れと記し、『譚海』内匠虎之介と云ふ。自ら一流を語り出し、受領してには外記より分れたりと記せり。土佐少椽と稱す。堺町に住し、操座を設けて芝居を興行せり。『昔々物語』には、土佐のて上るりを作り語始し橋本筑後といへるものゝ未なるよし記したれど詳ならず。

寛文延寶の頃より土佐節とて熾んに世に行れ、享保の比には尙ほ盛んに流行して居たのであつたが、寶曆の比には、乞食のわざなりといやしめられるまでに衰廢した。寛永二十年板行の『吾妻めぐり』には、彌宜町に土佐が能芝居のありしことを記し、山東京傳の『近世奇跡考』には、

家翁曰、操芝居牛若の人形、歌舞伎芝居牛若に扮する衣裳など、鳥居、玉垣、三本杉の模様を付ざれば、牛若と見えず、今にならばしとなれど、其の本據を知る人まれ也、昔土佐の芝居は、人形を以て能を舞せ、其の間に浄瑠璃をかたりけるが、其頃牛若の人形に、かの模様をつけし、これ幸若のうたひもの、烏帽子折といふものゝ文にもとづきて付たる模様のよし、予がをさなかりし時、八十餘の老人のかたるをきくと、家翁椿壽齋信明寛政十一年没 享年七十八存生の日ものがたりき、家翁は享保七年の生なれば、かの八十餘の老人といへるは、寛永中の事をも近くききたる人なるべし、これ等の物語もせめてのかたみとおもへばかきつけおき

つ、しかるに頃日かの烏帽子折の印本を得て見るに、牛若のいでたちをいふ所に、左のごとくあり

「著たるひたふれば、からきぬをもつて、地をは山鳩いろに、一はけさつとはいて、十八五しきのいをもつて、ものゝ上手が、ぬひものを、あり／＼とぬふて候、まづゆんでのひもつけには、井垣、烏居、社壇をぬひ、めてのひもつけには、たけくらべに、杉を三本ぬふて、云々略下

かふれば家翁がいへるにたがはず、右の文によりてつけたるもやうなる事あきらけし、かばかりのものも、昔のものすきには必よりごころあり、かりそめに見すごしがたし。

と記せるより見れば、寛永の頃既に土佐の芝居の興行ありしことも知るべく、おぼろげながらも當時の面影の一端をも偲ぶを得べし。

土佐の語り物は多くは六段續きの段物なりし。男は内匠源太夫、後、土佐少門人には内匠小太夫、同長太夫、吉太夫、萬太夫、後、廣瀬式部太夫庄太夫等あり。

『聲曲類纂』に載せたる、土佐節六段物淨瑠璃の目錄は左の如し。

酒顛童子 和田酒盛 名護屋山三 鹽屋文正 現在松風 大職冠二代玉取
紅葉狩 楠湊川 艶色櫻小町 光源氏袖鏡 難波物語 源氏十二段 當世
薄雪 融大臣 遊覽揃 定家 土佐日記 一の谷八島 女眉間尺 三世二
河白道 中將姫 小野道風記 全盛くらべ せみ丸 大塔宮熊野落 花鳥

薩摩外記

虎屋永閑

江戸半太夫

大全 周防美人櫻 殿飾難波鏡 萬歳頼政 京四條お國歌舞伎 洛陽壽 蓬
萊源氏 源氏六條通 同續源氏 柏木右衛門 泰平篁 芳野内裏 皐月十
二段 相生源氏 對面曾我 牧狩曾我 兵揃 養老 平假名大全 通傾城三
國志 續三國志 鈴鹿山大獄丸 今川かづら 一心二河白道 金山左衛門
岩屋城 坂東安房國立山城攻 博多露左衛門色傳授 京太郎 末廣昌源氏
薩摩外記藤原直政 土佐椽と同じく二代目薩摩次郎右衛門の門人にして、長門太夫
の甥に當れり。初名小太夫一流を語り出し外記節とて世に行はる。境町にて操芝居を
興行す。此の人の語り物は土佐椽とは違ひ、一段つゝの端浄瑠璃なり。其の曲風
は土佐に似て強く、其の中に品位あり、又別種の趣ありて大に流行せり。門人には
源次郎左源太、左平太、薩摩左内後剃髪して調翁薩摩宮内、清五郎、平太夫等あり。
虎屋永閑 源太夫の門人である。貞享元祿の頃一派を爲し、永閑節とて行はる。吳
服町に住居して境町に操芝居を興行した。座元は薩摩三郎兵衛にて小源太夫等
脇を語れり。門人には、大源太夫、小源太夫等あり。小源太夫は延寶の頃木挽町にてあやつり芝居を興行せり。
江戸半太夫 幼名は半之丞。『世事談綺』『江戸節根元記』には、修験者何院とかやの子
なりと云へり。俄に信じ難しと雖、彼が門下より意教、雙笠の如き僧侶出の高弟二
人までも出して居る點より見るも、將又其の始め説經祭文の上手なりしと云はれ
て居る所より考ふるも、何等か佛者に關係ありしかの如くに思惟せらる。或は此
の説當れるが如し。肥前太夫のすゝめにより浄るりに轉じ、一家をなし、貞享元祿

の頃より熾んに行はる。甚左衛門町に住し、境町に操芝居を興行す。正徳の頃薙髮して坂本梁雲と稱せり。梁雲の稱は蓋過行雲、動、梁、藤の意、味より取りたるもの歟。西澤一鳳は彼を評して、淨雲以後の名人なりと嘆稱して居る。男宮内は早世し、半次郎後に二代目半太夫となる。梁根と云へり、元文よ門人天満屋藤十郎一派をなして河東節を始め。其の他、意教譚海に初め淨土宗某寺の『雙笠』亦僧也。等其の名高し。鎌倉屋豊芥の筆記に、「半太夫は操の座元なりしが、一度退轉に及んとせし頃、紀伊國屋文左衛門歎かはしく思ひ半太夫が、放埒をいまして、金子二千兩を貸あたわて興行せしむ、此のときの名題、淺黄帷子黒小袖といふ六だんつゞきの狂言にて、殊の外大入をなせり」と云つて居る。『聲曲類纂』放縱の性なりしと見ゆ。

半太夫座興行の淨瑠璃外題として『聲曲類纂』に載する所のもの左の如し。

- 源氏十二段 二段目に六檢見物語四段目妻見 生贄 三段目道行の段 和泉城 二段目調伏
- 文同勝 日蓮記 五段目山入の段 黒小袖淺黄帷子 三段目初瀬前道 丹波興作 三段目道
- 頁分ケ 行同馬駕籠の段、五段目たる 夜目遠目笠の内 四段目大和之助道行同大 女庭訓 初段
- 井おせん道行同物狂ひ 角力物語三段目髪す 參會和會我 四段目袂の前道行 本朝勇士鑑 三段目花賣五
- き五段目虎少將道行 名の遺恨放下僧 初段温泉揃三段目道行附わにの段、四段 出世盛久 四段目法正覺道行五
- 平安城都定 四段目草花靈附天皇忍びの段、 全盛櫻狩 三段目清玄新、四段目櫻ひめ道行
- 季の景清雷問答 四段目景清道行 聖代時津風 初段金輪の段、三段目逢坂山附琵琶の段
- 舞の段笠のだん鐘のだ 可の段替り名代蟬丸紅葉傘 神力小鍛冶初午參 三段目名劔の巻同約 繪合源氏色安宅 三段

目十二段並笛の段踏躰、禁中綱引合二段目鬼神揃四段目臺の前道行、愛著鳴神上人三段目七夕父
 六段目女郎名寄祭文、母道、古今七人男三段目木曾の花子、忠信京土産三段目黒木賣四段目牛若丸千
 中橋お萬紅、關東小六道行六段目小間物うり、少將があした、嫁入五人會我二
 風流嫁さくら、目紋づくし三段目元服帯引五段目禪師房談儀中村座にて、西行はむかし、傾城旅衣
 かたる柄原市左衛門作にて大あたりをなせりさ云り、の今の長はむかし、江戸、傾城旅衣
 三段目六百姫道、百日會我五段目虎少將扇賣、吉日袖留會我初段織紋づくし、三段目
 行江口の道行、對面同棍原軍、貞任責伊達、好色與之助此の節より虎屋庄太夫脇を動る、名古
 屋三段目、つ、山階右大將色遊び、弘徽殿主上道行六段目晴明のり、鍋冠り日親、即身猫股
 三段目小袖横機、五段目天狗揃、三段目公家の段行、平須磨へ流罪の段

その外一段淨るりは枚擧に違あらず。

十寸見河東

十寸見河東。品川町一説には、江戸の豪家魚商、天満屋藤左衛門の男にして、藤十郎と

いひ、伊藤氏なり。母方の姓を河邊と云。其の家に同居して居たりしより、河邊の

河と藤十郎の藤の一字を取り、之を東にかへ、河東と號した。十寸見と名乗るは眞

澄の鏡のくもりなく、いさゝかもたがはずかたり傳ふといふ意味より來りたるも

のなりと云はる。『三養雜記』放縱にして酒をたしむ遊樂を事とし、つひに産を破り、江戸

半太夫が門に入つて淨瑠璃節を學び、手品市左衛門、廣瀬式部太夫の節調を交へて

別に一家の風をなし、河東節とて江戸名物の一と持もて囃はなされるまでに大に流行し

た。歌舞伎芝居の相方として數々出場せしも出語りをし

たる事なし、毎時も簾の内にて語つたと云はれて居る。

『奈良柴』には、「半之丞弟子、後半太夫弟子と成、元祖河東、本苗河部藤十郎」とし、「河東は小田原町に住、天満屋藤左衛門とて、魚販者の子に藤十郎といひし、本苗河部といふ故河藤とよびしを、堺町に佳風といふはいかい師有りしに、藤の字をひがしと書改て遣せしより、河東と改たり」と云つて居る。享保十年七月二十日四十二歳にして歿す。築地本願寺塔中成勝寺に葬る。棺を送りて寺にいたる者千を以てかぞふ『近世奇跡考』門人夕丈を養ふて家をつがしめ藤十郎と改む、後剃髪して榮軒といへり。二代目となし、河東の名は門人河丈に與へた。此の時より二派に分れ、藤十郎の三味線は山彦源四郎、河東の三味線は十寸見東古が弾くことくなつた。門人中十寸見蘭洲江戸町二丁目の娼家、葛島屋庄次郎で同意教、同忠右衛門等其の名高し。

築地成勝寺に在りし河東墓碑の文として傳はるものは左の如し。

其の石碑は文政十二年の火災に罹つて燹損したので、更に碑文を假名に和らげ、天保四年四月に再建したが、此れ亦翌五年の火災に逢ふて缺損した。

河東居士 氏伊藤又稱十寸見武州江戸品川坊之豪家也其稟跌宕不羈嗜酒遊嬉脫然破産口灑口威武不能屈富貴不得淫恰有天子呼來不上船之氣象嗜輒花號十寸見堂故以氏焉後遁世遊梁雲門而極青於藍矣花樓月殿一開口邊行雲動梁塵水則舞蛟虬山則泣麋鹿日高門豪家見寵月爲花街章臺見貴寔絕代之望君也行年四十有二享保乙巳秋七月廿日以病卒葬筑地本願寺塔成勝寺卽喪者以千數孝男夕丈君前學于門後養于家善承紹其業成二代之美家聲日月彩色已而一紀之辰立碑於本堂階側友人謹書陰焉

享保十年乙巳七月二十日

優れたる河東節浄瑠璃の詞章

河東代々の墓は牛島長命寺にあり、寛政中六代目河東の建立したものである。河東節の浄瑠璃の詞章には優れたるもの多し。『唐團扇』は白居易の琵琶行を模して書かれたものであるが、意をとりて文をとりぬあり、文をとりて意をとりぬあり、錯綜の妙言外に存せり。太田南畝の『俗耳鼓吹』にも「まことに一唱三嘆と云べし。白氏が琵琶行をうつつして斧鑿の痕なし。本文と離れて合ひ、合て離る、何等の筆力ぞや。意は琵琶行の詩を主として、調は謠曲の趣を得たり」とまで激賞して居る。左に其の全文を載する。

唐團扇

大夫元祖河東三絃初代源四郎初代三浦屋高尾の事になぞらへての作なり

「じんやうのほごりこう上

江

の秋秋風客を送つて一葉かろく、あしまをわくる

船のうち酒をすくめて白居易は、月にうそぶくあまの原、八重のしほぢの末遠く、千さとの外もくまなくて、水のよごみもふかき江や、みぎはの霧のたねまより、なほ下もゆるいざり火の、ほの見ねそめし苦のうち、浦ふきかよふ秋風のかすかにそれと、琵琶のねか、おぼつかなみのしらべかも、「四絃一聲すれば、どもにうらみを語る、まれにだに、みぬめの浦のあまを舟、いかなる風によるべ定めん、「船こぞり居て聞もなほ、秋の哀も身にしれて、袖に涙のおもほへず、たぞやと聞ふも浪の上、「こたふる人もなくか、もめ、び、わ、聲、や、んで、おともせず、「なほしき浪のうつつなく、千こゑよびも、う、聲、よ、ば、ふ、船、の内、「忍

ぶとすれどあり明の、さやけき月に色もれて、苦ふくかげの花すゝき、ほのめく袖に露かゝる、^{シテ}「時に樂天こと葉をやはらげ、いかでかく波にうきねの船よせて、妙なるびわのいとゞなほ、おぼつかなしや、さるにても、御身はいかなる御事ぞ、^{シテ}「あまのかる磯の玉藻下のみ藻だれ、うき言の葉もしらいとの、びわをいだきておもはゆく、なかばかくせしかほばせば、卯月に残る葉ざくらや、木の間の花の露おもく、打たれがみをそのまゝの、すがたもよしやにくからず、^{ワキ}「樂天いとゞあやしくて、たれかひもくの浪枕、かたねの夢をうらみや、いぶかしさよといひければ、^{シテ}「くちなしの色にそむてふ山吹の、花もあだなる身のむかし、^{ツレ}「かたるもさすがはづかし^{羽束師}のもりてうき世の定めなき、いく宵々のかり枕、かはすちぎりも河竹の、ながれのすべと御らんせよ、^{ワキ}「扱はあだなる河竹の、ながれの水の末とほく、なごてや爰にすむ月の、行衛をかたりましませど、^{ツレ}「なほさしよする船のうち、つなでかはして、^{シテ}「花と見し昔のはるは夢なれや芙蓉帳のうち、せし手枕のかすゆるく、^{ツレ}「ひしのたまきは、てしなき、思ひにやせてとぶ螢、ながるゝ水の影うすき、あやのうちはのおひ風は、かふろが袖の香にゝほふ、けしきもよしや里わけて、片日夕だつ空もすずしき小村雨、かさの長柄をさしかけさせて、伽羅のあしだにこぼるゝ露の、つゆにぬれゝぬれてほす、きくの盃ゆらぐ手も、はでな心かくれなるの、もすそにすそにしたみ酒、^{シテ}「また待宵にふけて廊のもゝ羽がき、^{ツレ}「まぶな男の

かすり歌、聞くに心のまよならぬ、つとめのきやくに下ひもを、とくくしばる露泪、「そよや浮身をふざんの雲の、行衛とはれてぬるよいに、たれか身うけのかねごとも、かしこはまよ此の人の、泪ほくろもうるさしと、「男ねらみに今年も過つ、またくる春も、「あだにちるすがたのはなもうつろひて、今はねびきのまつ人も、たれにすがらんよるべも浪に、身をうき草の根をたわて、さそふ水とて行ふねの、ともにこがれてくこくに、茶をめせく小うり茶うりて世をわたる、その人にさへわすられて、やがてといふて出船の、片帆なみ間のよすかなく、こと浦かせのおとづれを、いそ山松のよそにして、心にふくる有明の、つれなく残る身はひとり、なみだの外にとふ人も、なくねをびわのもろこゑに、ふしづみてぞいたりける、「げにや商人は利をおもんじて、別離をかるんず、今樂天が身のうへも、都を出てはるくど、かゝる邊土に、謫居して、古郷の秋のなつかしく、しちくのこゑもまれなるに、いと珍らしきびわのねの、ひなにはあらぬ思ひでに、今またかゝるうきなみだ、むかしにかへす花の袖、都の春もあだ夢と、おもひくらべてげにまこと、ともに天涯淪落の、「あひ合ひたりし身の上と、其のたんそくのことのはに、なほぬれまさるくれなるの、なごりの袖にびわとりて、いとかきならしさうくと、「むら雨つとふこすゑより、くだけて落る玉水の、岩にせかる瀧川や、ながれもあへずせきとめて、たちまちさくる銀瓶の水ほどはしる一きよくも、是迄な

りと夕しほの、さしてわかれのこゑくも、どほざかり行く船のあと、月ぞた
ゆたふなみだの袖しぼらぬ者こそなかりけれ。

丹後及び浄雲系統の浄瑠璃以外には、尙ほ説経節一派の浄瑠璃がある。「聲曲類纂」
には左の如くに記し、

説経 結城孫三郎 葺屋町にて操座興行す 譚海に江戸浄瑠璃の始は、結城孫三郎と云、説経節を葺屋町にて太鼓矢倉を上し、始

あなりさいへり。
系圖詳ならず。

同 天満八太夫 操座町 脇 武藏權太夫、天満重太夫 太夫元也

同 天下 石見椽藤原重信 操座町

同 佐渡七太夫豊孝 操座町

同 吾妻新四郎 靈岸島操座

同 江戸孫四郎 操座町 脇 長太夫 圖鑑綱目には江戸孫三郎とあり

無座説経太夫 村上金太夫 因幡町住 大阪七郎太夫 南鍋町住、寛文頃木挽町に説経座興行す、後境町に芝居取建る云

右の輩傳系詳ならずと附記して居る。曳尾庵の『我衣』には、江戸各芝居の始りを記し

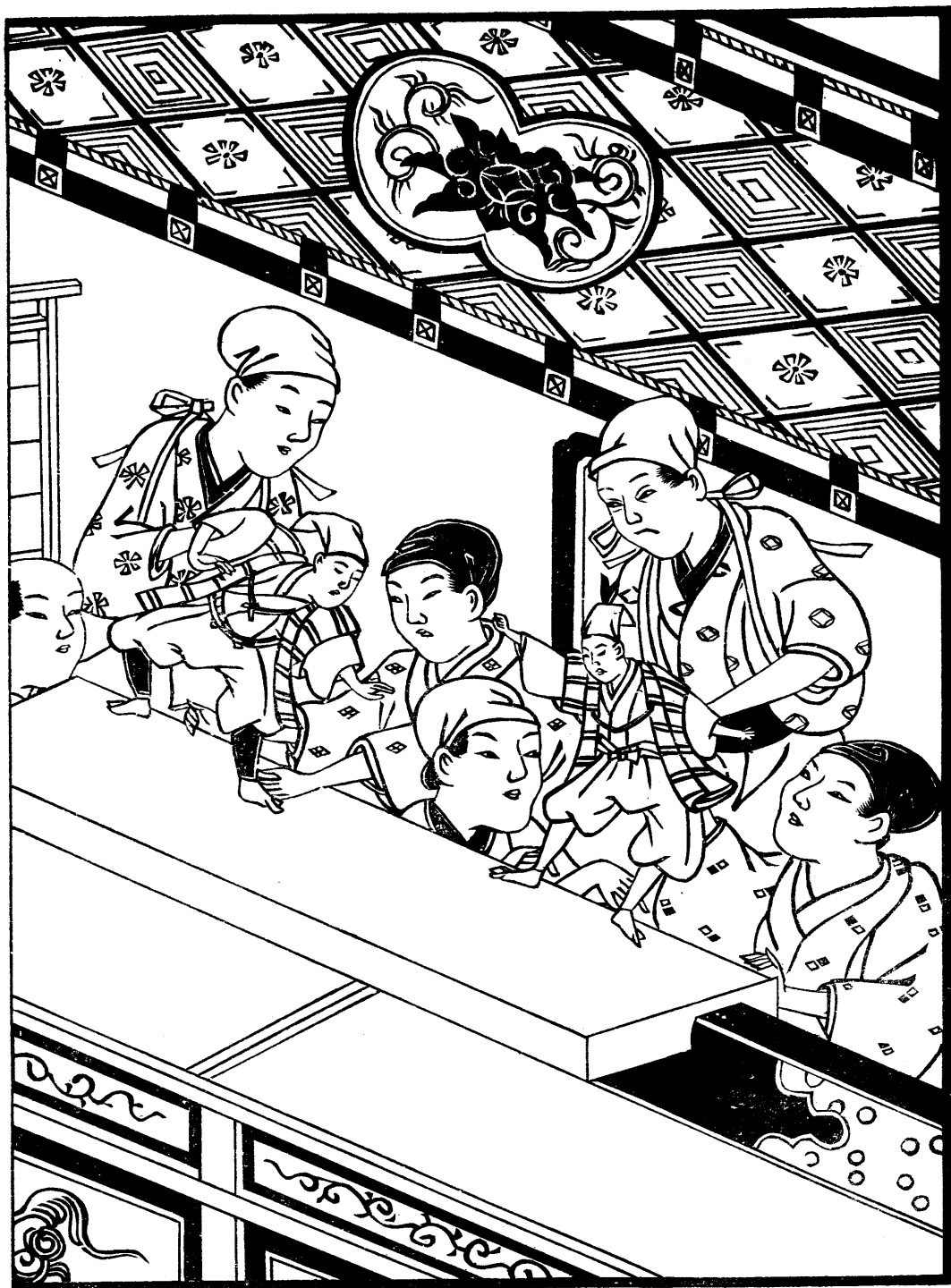
て、「寛永元甲子年勘三郎芝居濫觴ハサシオク、夫ヨリ二十年後ニ市村竹之允芝居初ル、

山村長太夫 元森田勘彌 断皆々勘三芝居ヨリ出ルナリ、又都傳内 寶延 河原崎權之助 天和 等芝

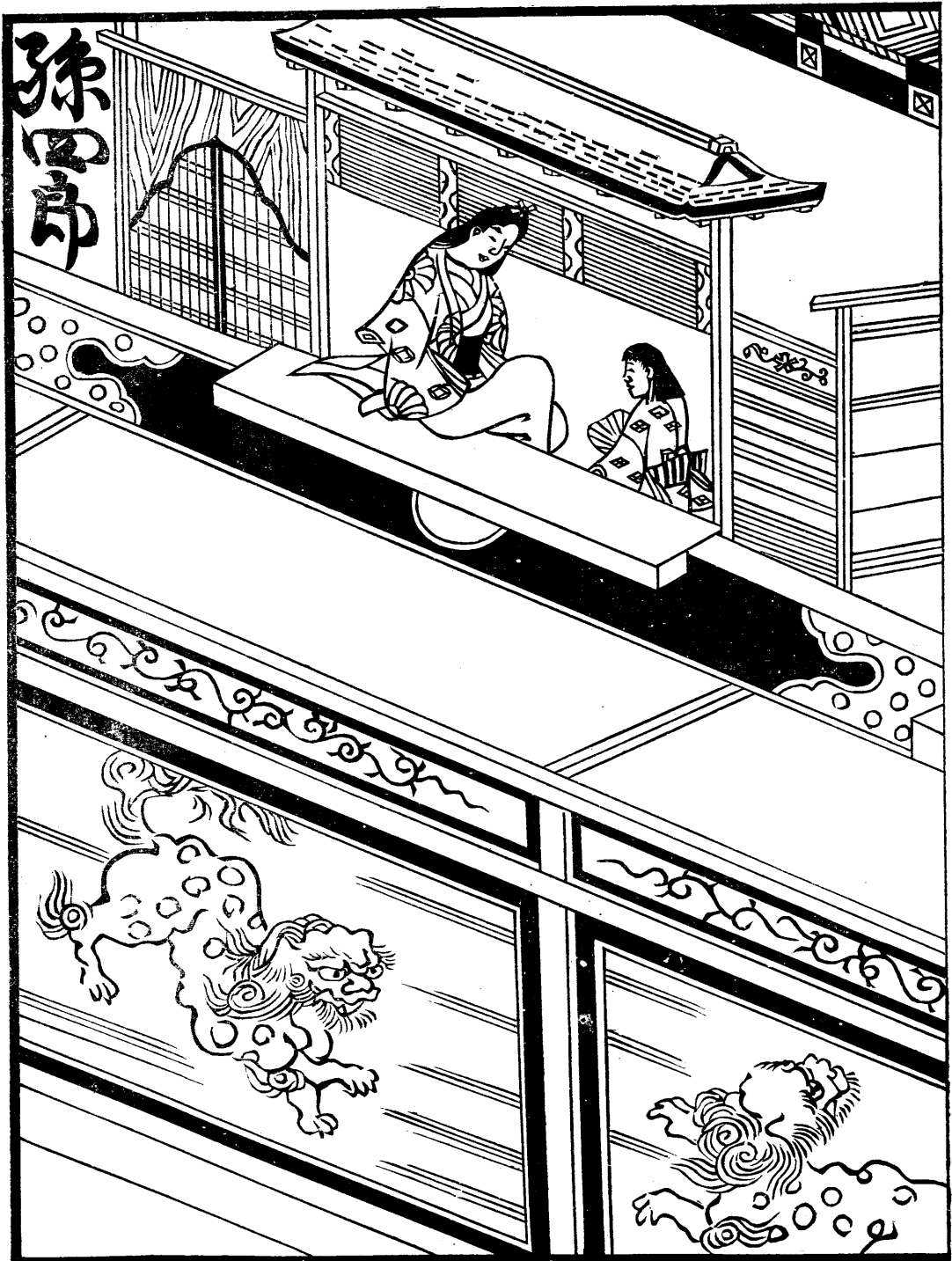
居始ル、浄瑠璃芝居ハ天満八郎太夫 天和、セツキヤウ 佐渡七太夫 寶永、セツキヤウ 武藏孫太夫、結城孫三

郎 セツキヤウ、浄瑠璃元祿」云々、とあるより見れば、江戸説経座の始りは、天満八郎太夫の芝居は天和、

佐渡七太夫の芝居は寶永、武藏孫太夫、結城孫三郎の芝居は元祿年代なるを知るべし。



圖之居芝郎四孫戶江節經說



孫四郎

第六章 江戸淨瑠璃の前半期

一〇九

(し 珍様模繪の摺手さひ遣人三形人)

説経節の芝居中特に聞わたるは天満八太夫即ち八郎太夫 結城孫三郎の兩座である。

大宰純の『獨語』に、

「説経と云ふ者はもと法師の中に、本説経師と云ふ者ありて、佛法の尊きことどもを詞に綴り、浮世の無常の哀に悲しき昔物語を演じ、善惡因果のむくいあることどもを物語に作りて、是にふしを付けて哀なるやうに語りしなり。鉦鼓をならして拍子取り、世の婦女に聞かせて、惡を戒しめ善を勸めて、菩提心を起さしめんとするなり。昔より法師の説法に因果物語するたぐひなり。其の物語は俗説に任せて、慥ならぬ事も多けれども、詞は昔の詞にて、賤しき俗語をまじへたる中に、やさしき事も少からず、——其の聲も唯悲しき聲のみなれば、婦女これをきくには、そゝる涙を流して泣くばかりにて、浄瑠璃の如く淫聲には非らず。三線ありてよりこのかたは、三線を合はする故に、鉦鼓を打つよりも少しうきたつやうなれども、甚しき淫聲には非らず、云はゞ哀みて傷ると云ふ聲なり」云々

とあり、以て其の曲調の如何を知るべきである。寶曆十年 尺龍撰『風俗陀羅尼』に「冠いたはしや

浮世のすみに天満ぶし」と咏めるが見ゆ。されば寶曆の比は既に殆ど衰敗し、僅に一縷の命脈を存して居た位の有様なるべし。『天和笑委集』の堺町の條に、「くるゝ日かげを思ひ忘るゝ是ぞ大阪七太夫、おなじく天満小糸が地黄煎」天満小糸は地黄煎の菊屋小糸と天満八太夫とを懸け合せたるなりとあるより見れば、天和當時の盛況想ふべし。説経節の曲風は今尚ほ残つて居る。若松若左太夫と云へるが當今の家元なりと聞くに其の浄瑠璃正本中の一二節を抄出して参考に供する。

『石童丸』の一節

加藤左衛門重氏入道菫萱は、其日は如何なる吉日やら、又悪日に候やら、我子に逢ふさは夢しらす、數多法師のある中に、御當山の御開山、大師の御廟へ花立替の御役目、身に墨染の袈裟衣、右手に花籠たづさへて、左手に珠數を爪繰りて、口に大師の教なる、光明眞言讀誦なし、萱の御堂を立出でて、奥山内へ登らるゝ、三古の松や五古の杉、善惡二つの蛇柳や、汗かき地蔵を伏拜み、山八合目が女人堂、たごらせ給へば程もなく、無明の橋になりぬるが、左手の墓原見てあれば、まだ新らしき廟所に、古き塔婆の建てあるを、菫萱つくづく御覽じて、扱世の中に、古き廟所に新らしき、塔婆の建てあるこそならひなれ、これなる廟所は新しきに、古き塔婆の建てあるは、ハツア合點の行かす立寄つて、塔婆の文字を讀み給ふ、ナニく奉納大乘明典日本遍國六十六部、天下和順日月清淨、大和の國、さて塔婆にあらずや、六十六部の眞佛の扉押へにありけるや、家名姓名印さすに、大和さばかり印せしは、扱此人は大和にて、一ヶ國をも領したる、主の末にもありつるや、若き人か、又老體かは知られども、定めて古郷の大和には、若き人にもあるならば、父母兄弟あるべけれ、また老體の人ならば、妻や子供も有るべきに、何を菩提の爲として、諸國行脚の身ともなり、御當山へ分登り、かく無縁となつたるか、一樹の陰一河の流、袖すり合ふも他生の縁、同向致して通らん、さ花籠傍へにおるされて、草花折取り手向られ、珠數さらさらおしもんで、暫らく御同向なされしが、同向の内に菫萱は、故郷の空を思出し、ハツア六部の無縁を見るにつけ、昔が思ひ出さるゝ、我も筑紫に有る時は、六ヶ國の主にて、御大將の我君のま、敬まれたる身の果が、今にも空しくなれば、逆、故郷の空で誰一人、今日は重氏命日ぞ、明日は、大將忌日ぞ、弔ふものさてもあるまじ、さすれば我も當山の、無縁の佛さ成るべきか、ハツア味氣なき浮世ぢやのま、悟りに入つたる菫萱も、悲歎の涙に御衣の、袖も絞れるばかりなり、やく有つて心付き、ハツア我ながら愚なりたさひ、妻子があるさても、冥途の供に

なるでなし、所領知行があればさて、來世の土産に持たればせぬ、只冥途の土産と云へば、經念佛より外はない、昔の榮華を思出し、かく落涙に及びしは、未だ凡俗心の失せざる所、オ、師の手前も面目なし、免させ給へ南無大師遍照金剛と、氣を取直し、萱萱は、御花籠を取上げて、大師の御廟へ急がる、かゝる向ふの方よりも、物の哀れや石童丸、生れぬ先に別れたる、見もせぬ父に憧れて、高野山へ分登り、二夜三日の其間、父の行衛を尋れしが、流石に廣き御山にて、父の有家も知れざれば、力なくなく石童は、麗をさして下らる、萱萱僧は登り坂、身をかき分けたる親と子の、行合なれど、それぞさは、親も知られば子も知られど、ア、ラ不思議や、其日に限り高野山、そよ吹く風もなかりしに、石童丸の振袖と、萱萱召されし御衣の、袖と袂が上よ下へさ縫れ合ひ、むすばれ合はぬばかりにて、すれ違うて行すぎる、心なられば萱萱は、立止つて石童の後姿を見おくりて、ハテ心得ぬアノ小人、御山に見馴れぬ兒なるが、麗あたりの者にもあらず、オ、夫よ、髪は筑紫のかつらわけ、扱は諸國をわたる巡禮ならん、年の頃は十二か三、賤しからざる身の生立、供をも連れず只一人、御山禪上致すこそ、扱々殊勝の、小人と、猶さりなりに氣をつくる、扱も不思議や、アノ稚兒が、上著に附たる紋所、竹の丸輪に向ひ鳩あはれこの身が、筑紫にて、加藤左衛門重氏と、名乗りし時の定紋ぞ、浮世は廣しと云ひながら、同じ紋とあるべきか、加藤の家の定紋を見れば、見るほど何となく、古里の事案じられ、悟りを得たる萱萱も、思はず花籠下に置き、又も落涙なし給ふ、ハツア迷ふたり、出家氣質にあるまじき、我ながら未練の歎き、今佛門に傾いて、受界門に入る時は、子は三界の首枷ぞ、かやうの事を思出しては、師の手前も憚りあり、免させ給へ、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛と、一心無我に、陀念佛、唯大切なる御花の御番、さうぢやくと湧出る、涙ながらに萱萱は、花籠取上げて出でけるが、血筋の縁に引かれてや、行きつ戻りつやうくと、登らせ給ふ折からに麗へ下る石童丸親子の奇縁思はずも、跡ふり返り父御さは夢にも知らず見されしが、ハテ心得ぬアノお聖、われを見返り立止り、何やら獨言をのたまうて、涙の體に見おけるが、御慈悲ありげな御出家様、昨日までも

今日迄も御山法師に逢ふ度に、今道心と尋ねても、御山の様子を尋ねても、いつれも知らぬ存せぬと、少しも教へて下さらぬ御山法師は世にも邪見と思ひしが、アノ御僧はごこやりに情ありげな御方ぞ、さらばこれより呼戻し、御山の様子二つには、父の有所を尋ねんと、思ふは親子の縁のはし、只しほく立歸り、聲もかすかに哀れげに、登らせ給ふ御僧様、卒爾ながら旅の者問ひ度き事の候ふと、聲かけられて、蒨萱は、跡振返り打詠め、只今そこへ下られし小人なるか、愚僧を呼さめ何の御用に候ふぞと、尋ねに石童手もちく、もうし御出家様、私は御當山の其内に、戀しき人の候うて、國許より遙々と、さまよひこがれて参りし者、御山法師の其内に、今道心のお聖は、いつれのお寺に在しますぞ、今日で三日尋ねれど、いまだ御行衛知れませぬ、あなた御存じますすなら、何うぞ教へて下されと、涙をあやに尋ねれば、これはしたり旅の小人、如何に年齒が行ければとて、あまりと云へば、鹿相な物の尋ねやう、ハ、ア聞わた、そなたは新参の僧達を、今道心と思すのか、左様な譯にて候はず、御當山の習ひにて、昨日剃つたも、今道心、一昨日剃つたも、今道心、或は去年一昨年剃つたのも、又は今月今日、今其寺で剃つたのも、皆おしなべて今道心と申すなり、左様にお尋ねなされては、二夜三日はおろかなこと、三年三月尋ねてもなかく、戀しき人に逢ふことならず、去ながら折角愚僧を呼止め、教へ呉れとあるからは、せはしき身には候へども、お前の戀しき其人に、逢はれるか、逢はれぬか、二つに一つの證據になることを教へ呉れん、此方へ來やしやれ、小人と、我子と知らず手を取れば、父とも知らずいざなはれ、小高き所へ登られて、蒨萱は、遙向ふへ指をさし、ア、レ見られよ、あれなる大木は、奥山内の杉林、まつた此方なる樅のしげりしあの谷は、昔より親知らず子知らずの世捨の谷と申すなり、其の世捨の谷の因縁を語つてお聞かせ申さん、そなたのやうに諸國から御當山へ迷ひ來て、二夜三日も尋ねつく、廻り逢はざる其時は、戀しき人の俗の時の、國郡家名姓名尋ぬる人の姓名迄、懇ろに書記し、其世捨の谷の一筋道の傍に、彼建札を置くらば、御山法師は残りなく、大師の御廟へ言經修行の通ひ道、其今道心が行掛り、逢はうと思ふ人ならば、建札

の其裏へ、何れの寺何處の學庵に、何の誰と名乗つて住居候はゞ、夫へ尋ね參られよと、建札へ裏書なして通るなり譬へ又現在尋ぬる今道心が行きかくり、札を讀んであればさて、此世を捨てたる名僧は、逢うては菩提の妨げと、思ふ出家は夜に紛れ、世捨の谷へ忍び行き、其建札を引抜きて、彼の谷底へ捨つるなり、建札がないならば、かつて逢ふこと叶ふまじ、近頃建札あるさて、皆投捨つる人ばかり、それぢやに依つてアノ谷を、昔は親知らず子知らずの、世捨の谷と云つたれど、近頃改めあの谷を、札捨谷と申すなり、そなたも戀しき人あらば、建札書いて置かつしやれ、逢ふも逢はぬも二夜三日の其内に、我子と知らればれんごろに、語り聞かすも道理なり、石童丸は悦んで、よき事教へて下さつた、逆もの御恩に御僧様、建札書いて下さらば、生々世々の御厚恩偏に頼み上ますと、涙ながらに申しける、菫萱僧は聞給ひ安き事には候へど、爰は途中の事なれば、矢立の持參も候はず、墨筆なければ及ばぬこと、殊に愚僧は御開山の御廟所へ、花立替の役目未だ終らず、去ながらたつて頼みたいとおぼすなら、愚僧と共に是よりも、奥山内迄お戻りあれ、此御花を御廟へ手向け奉り、それより直ぐに愚僧が住居萱の御堂へお連れ申し、書記して參らせん、まつた日もたけ候へば、見苦しくとも愚僧が堂へお泊申さん、戀しき人に逢ふ迄は、譬ひ三日が五日でも、逗留すること大事なし、あまりそのみ苦にやんで、煩はぬやうにせよ、たゞ此の度逢はずとも、まめでさへだにあるならば、又逢はれまいものでもない、氣をうきうきと持たしやれと、木石ならぬ菫萱が、情の詞に石童丸、有難涙はらゝと、戀しき人に逢はれます建札書いて下さる上、行きくれますればお住居へ、お泊成されて下さる、此の上もなき御情、建札書いて下さらば、萱の御堂はさて置いて、たゞひ野の末山の奥、虎伏す野邊の果までも、阿方の御供仕る、放ればせじと附纏ふ菫萱實にも、ご手を取つて、其所立出でて奥山内、大師の御廟へ急がる。

『小栗判官』の一節

常陸の小萩と世を忍ぶ、小栗の妻の照手姫夫の菩提の其の爲に、餓鬼病車虜げやと、主人に五日の

暇を乞ひ、心は物に狂はれど、狂女姿に身をやつし、さも美しき御顔を、わざと醜く化粧して、御身に烏帽子狩衣や、笹の小枝に幣切かけて振擡げ、女綱男綱を取分て、これく如何に道者衆みづからこそは父母兄弟の其の爲に、一引曳けば先祖供養、二引曳けばまんそ供養、三引四引は夫の爲、上下五日の施主に立ち、小萩が音頭で曳かすなり、萬屋長が門先に、兩輪が大地にめり込んで、數多の小坊主手を揃へ、押せども曳けども動かねば、照手の音頭で曳かすれば、妹脊の縁の引綱や、ぐるりくるりと廻り出す、姫が涙のはらく、垂井の宿を引出し、わづか五日の旅の空、いさ心は關ヶ原、不破の關屋の板庇、月洩れとてや疎なる、ハツアそれく大中臣朝臣親盛公の御歌に、吹かれては月こそ洩られ板庇、さく住荒れぬ不破の關守、昔にかはる今津の宿、美濃と近江の國境、姫も相模に在りし時、乾の御殿の奥の間で、錦の衾打重れ、伽羅の枕の睦言に、かはらせ給ふな夫上様、なにかはるべき照手やと、寢物語も早むかし、せめて一夜は柏原枕に結ぶ夢さへも、はや醒ヶ井の宿を越ぬ、嵐小あらし番場吹くさて風寒く、摺針峠の細道を、ふいさらふいと引おろし、あれ鳥居本の鳴く音さへ、空に一聲高宮の市川渡れば千鳥たつ、御代もめでたく武佐の宿、鏡山へさ著にける、チ、その昔大伴の黒主卿の御歌に、鏡山いざ立よつて見て行かん、年經ぬる身の老やしぬるさ、妻はさのみうつられど、鏡山とはなづかしや、ふいさらく引く程に、雨はふられどもり山の、かの餓鬼病の胸札に、露さて更に浮めれど、草津の宿はこれさかや、頃しも皐月の半にて、山田澤田を眺むれば、さも美しき五月女が、紺のはゞきに玉露、早苗さりにさ打つれて、田唄の節も面白く、植ゑや早乙女田を植ゑや、小草若を植ゑや、笠を買うてたもるなら、何畝なりとも植ゑまじょう、植ゑや早乙女田を植ゑや、小草若草踏分けて、ふいさらくさ力なく、猶も思ひは近江路や、瀬田のから橋しきんさるさ曳上げて、橋の中央に車を留め、ハツア面白の景色よな遙に見ゆるは其のむかし、倭藤太秀郷が乙矢を以て射止め給ひし百足山、此方に高きは石山寺、秋の夜いかに澄みぬらん、月の影には引かへて、姫の心はさぬやらず、堅田に落つる雁の音を聞くにつけても、夫のこき、叶ふこきならみづからも、冥途さ

やらに尋れ行き、逢ひたい見たいと思へども、あは津に歸るあの舟が、名に負ふ矢走の歸帆とや、比
夏の高嶺にあらねども、心に暮雪を積るなり、あれ三井寺の鐘の音も、いさゝ哀れな唐崎の、姫は浮
世の一つ松、心はしぐれ夜の雨、滋賀の浦和に舟をめて、湖廣く見渡せば、數多の漁船往きかよひ、櫓
權の音に驚いて、ばつと鷗の立つにさへ、あらいたはしの照手姫、あれ鳥さへもあのやうに、つがひ
放れぬ女、夫仲夫に別れてみづからは、婿定めぬやもめ、鳥思へばく悲しやと、涙に聲も打しめり、
ぬいさらくさ曳く車、粟津松本膳所の城、赤前垂の姥ヶ茶屋、右手に高きが源氏庵、關の明神伏拜
み、既に三日の暮つ方登る、大津や關寺の、玉屋が門にさ著きにけり。

堺町葺屋町の各座

隨筆『牟藝古雅志』に延寶九年天和元年なりの堺町葺屋町の繪圖面あり、貞享二年印行の『野良
三座記』役者評判記なりにも亦堺町葺屋町の繪圖面を載せて居る。延寶九年と貞享二年とは
其の間僅に四箇年なるに、兩圖各座の位置に相違あるは、想ふに天和二年のお七火事に
て中村、市村兩座を始め焼失し、彼此れ異動を來たしたるものなるべし。兎にも角にも
此の兩圖によつて、當時の芝居街しばゐまちの盛況を想見することが出来るのである。
左に其圖面を轉載する。

尙ほ參照に便するため、初めに堺町葺屋町附近の一目圖を添へた。

屋 跡

大屋 大郎兵衛	市之丞	傳六	庄兵衛
------------	-----	----	-----

七太夫	たばこや善六	みびや市六	本屋八郎右衛門	和泉太夫	太田屋忠兵衛	つたや市右衛門	おつま小太夫	おしほ	しほ	吉兵衛	たばこや吉六	おしほや勘六
-----	--------	-------	---------	------	--------	---------	--------	-----	----	-----	--------	--------

見世もの	見世もの	見世もの	見世もの
------	------	------	------

市村竹之丞	芝居	竹之丞	あづき	宇次
-------	----	-----	-----	----

和泉十道	茶屋	庄左衛門	出左衛門	久右衛門	虎之助	淺之丞
------	----	------	------	------	-----	-----

虎土之丞	跡	見世もの
------	---	------

花才三郎	大和利兵衛	見世もの	傳内
------	-------	------	----

天籟八太夫	芝居	見世もの	中村善五郎	見世もの
-------	----	------	-------	------

三郎屋七左衛門	芝居	見世もの
---------	----	------

牛	伊兵衛	市郎兵衛	七郎左衛門	市郎左衛門	豊近道中	入人	入人	入人
---	-----	------	-------	-------	------	----	----	----

大木頭 おのちのち のちのち	木門之助 金五郎 兵衛	たげん 九右衛門
----------------------	-------------------	-------------

屋敷

清左衛門 つづみ	茂兵衛	そめ之丞 長三郎	竹松
-------------	-----	-------------	----

大屋	丞之丞 之助	おしん おはひら おふみや傳内
----	-----------	-----------------------

見世 の	水小	屋敷之丞 市村	屋敷 宇影
---------	----	------------	----------

政之介 ふもん とよ介 八郎兵衛 かんの介 清右衛門	ものゝ木や 都傳内 ものゝ木や あふらや はな紙ふくらや 同
---	---

たげん くわしや かんの介	市十郎 その介 市十郎 おの介	清右衛門 清三郎 瀧右衛門	平右衛門 清三郎 瀧右衛門
---------------------	--------------------------	---------------------	---------------------

新材木町へゆくかし

しせんもく町へゆく

貞享二年印行『野郎三座記』所載堺町葺屋町の圖(其の一、堺町の圖)

東 道 解 圖 町 東 野 郎 三 座 記 所 載 堺 町 葺 屋 町 の 圖

七郎 三郎 中松 松源 村之 之介 之介 入重 之村 梅津 喜四 郎 喜四 郎 松 三保 之介 上村 勘之 介	松尾 小次 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎	松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎 松 尾 三 郎
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

<p>中 おばし御五景村</p>	<p>たばこや</p> <p>江戸次郎右衛門上るりしばる</p>
<p>天 おばしおきうせおきうせおきうせ</p>	<p>たばこや</p> <p>まふもびこや</p> <p>丹波和泉上るりしばる</p>
<p>田 おきうせおきうせおきうせ</p>	<p>木田屋</p> <p>つるや</p> <p>土佐木上るりしばる</p>
<p>孫四郎 おきうせおきうせおきうせ</p>	<p>たばこや</p> <p>たばしおや</p> <p>さうま三郎兵衛</p>
<p>興平次 中山 小源次 同 作左衛門 おきうせおきうせ</p>	<p>大工 仁左衛門 瀬之丞 上村 長太夫 藤井 傳之介</p>

東

5242~5247(2)

市村字左衛門

中山
小ざくら

中山
兵衛

中山
兵衛

上門之丞
上政之介
上村之丞

東

市村字左衛門

市村字左衛門
小川源次

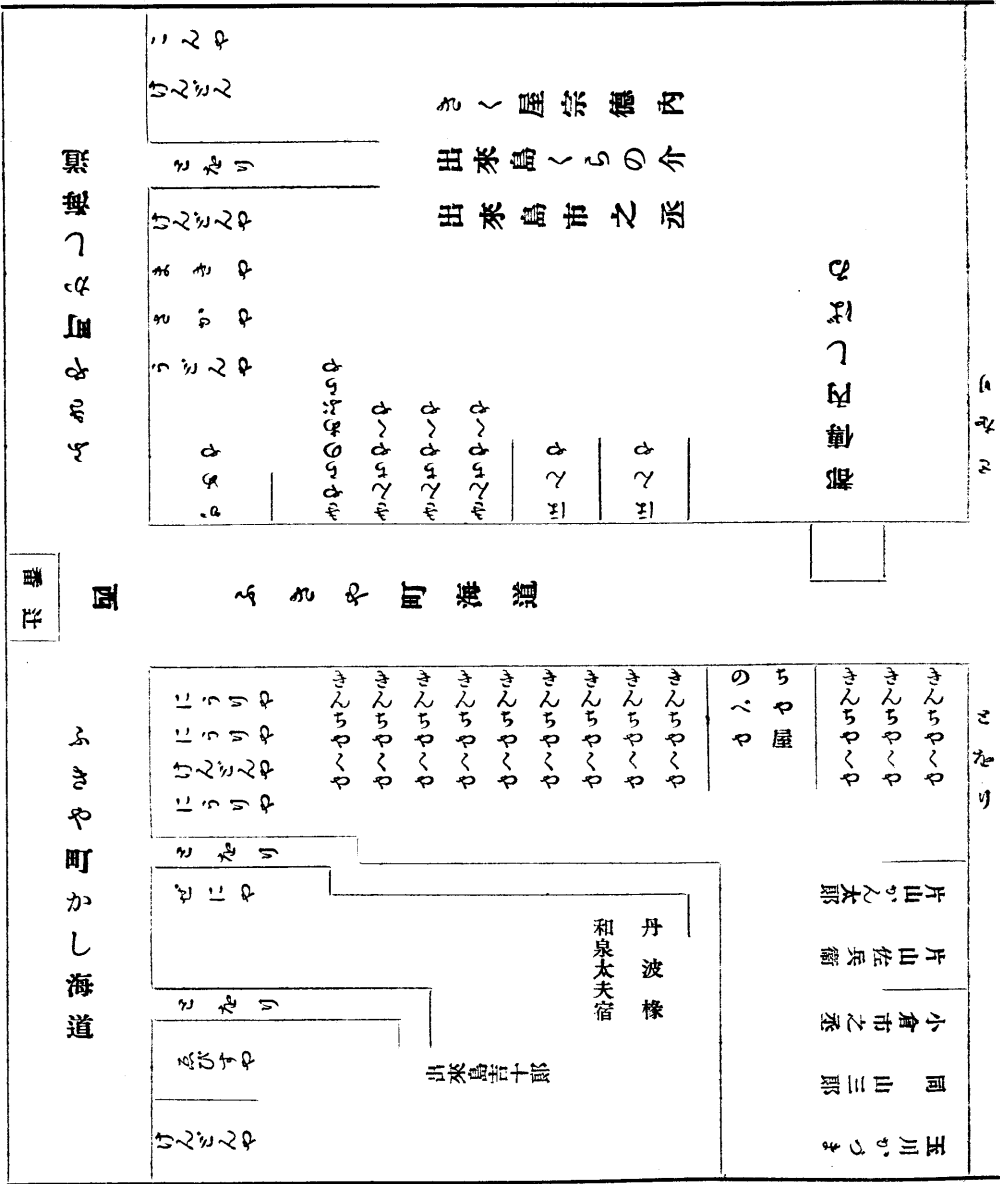
中山
兵衛
中山
兵衛
中山
兵衛

中山
兵衛
中山
兵衛
中山
兵衛

中山
兵衛
中山
兵衛
中山
兵衛

中山
兵衛
中山
兵衛
中山
兵衛

中山
兵衛
中山
兵衛
中山
兵衛



しやう 区 線

ふたや町海道

しやう 区 線

しやう 区 線

しやう 区 線

しやう 区 線

しやう 区 線

しやう 区 線

しやう 区 線

『劇場新話』の選者は不詳、
年中大小の行事より各座の
規約、之れに關する一切の
人物等細大漏さず繕集した
り、筆を寛政享和の極盛時
に止め居るより見れば文化
の初に成りしものなるべ
し。

『劇場新話』には芝居町の變遷に就いて左の如くに記して居る。

御當地歌舞伎芝居の始りは、猿若勘三郎也、元祖勘三郎といふものは、生國山城にて、幼年より此の道を修行し、御當地御繁昌に付、元和年中御當地へ下り、かぶき芝居を御願ひ申上候處、寛永元年甲子年二月十五日、忝も天下泰平國家長久の御吉例として、中橋に於て初て歌舞伎芝居太鼓櫓御高免あり、其後中橋は御城近くに依りて、引地を被下置芝居引移りしなり、其節の地所は禰宜町といふ所也。

禰宜町は、長谷川町横町也といふ、一説に今の人形町なり共いへり。

又堺町へ移る、上堺町といふは今の葺屋町の事也、昔は上下と二町ありし下堺町は今の堺町也、上堺町は猿若勘三郎村山又三郎と芝居二軒兩側にありて、下堺町には彌之助操、又は小芝居のみにて、上堺町程は賑ひ兼しにより、兩町ともに同支配の事故、町内相談の上、大芝居一軒づゝ上下へわけ度旨御願申上、猿若と村山と鬪取にて、勘三郎下堺町の鬪に取當り、今の所へ引移る。

此の時堺町名主は帶刀にて、近藤喜兵衛といひし由云々

『洞房語園』異本には、

元和三年に至り、甚右衛門を御評定所へ被召出、御願申上候通り、傾城町の事御免許あり、葺屋町の下にて、二町四方の場所を被下候、此節甚右衛門に遊女町總名主被仰附、五箇條の御書付御法式あり。

元吉原の舊宅、和泉町、高砂町、住吉町、難波町、是にて方四町の内なり、曲突、河岸の小

堀は曲輪の外堀也、今大門通りといふは其の時の大門の通りなり。

葭茅の生茂りたるを刈捨、地形を築立、町作りしたるゆへ、葭原と名づけしを祝ひて吉原と書替たり、爰に葭屋町の下とある、これ元誓願寺前のこと也、禰宜町、雪駄町など町並に見ゆ、此の折からは未だ芝居は中橋にて興行ありて、葭屋町の邊は葭沼なりしを築立、二町四方の廓を造立せし也、當時江戸橋の方より葭屋町へ渡る橋を思案橋といふ、本名親父橋といふ、これ庄司甚右衛門廓への都合よき様にとて懸たる橋也、されば諸人廓へや行ん、宿へや歸らんと案ずるとて、俗に思案橋と呼來れりとかや、當世は傳馬町二丁目、三丁目の通りを、大門通りと云ひ、古名を殘すこと世人の知る所也、元祿年中の江戸繪圖には、堺町の邊にいまだ吉原町の古名残りて記しありける。

思案橋一名親父橋は此の書の誤りならんか、思案橋は小あみ町一丁目に掛けたる橋也、親父橋は照降町よりふし町へかけし橋也。

とあり、彼此綜合して葭屋町附近の沿革一般を稽ふべきである。

操り芝居興行事歴の一般

東海道名所記六卷に淺井了意の選なりと云はる。本書の成りしは萬治年間にして寛文中に刊行したるもの如し。

淨瑠璃各派の興行事歴は、詳かに考證し難し。『東海道名所記』には、

それよりこびき町の方へ行たれば、喜太夫が淨瑠璃、それより又さかひ町のかたへ人あまた、其外實かうそ、異類異形のものを見する申略ゆくほどに、あとに付て行て見れば、こゝは猶おびたゞしく、大薩摩小ざつまなど、とて、鼠戸をならべて太鼓をうつ、又勘三郎とかや聞ねし、だうけものが女形とやらん、ことくしきしばあ、さんじきをかまへて歌舞伎がましきことをいたせり、鼠戸に立よりてみれば、ねこせなかなになりて、はい入者もあり、うはひげを松蟲の

曳尾庵は文化の頃江戸の四谷に住せし醫師也。俳諧を嗜み召水又は南竹と號せり。云へど通稱は不詳。『我衣』は古老のもの語、古寫本中の珍らしきおもしろく節を抜寫したるものに係る。

こゑにひねりあげて、面のかぶりかまきりの如くにやせたるをどこなげづきを、鑓おとがひまで引かぶりて、げんくわを買に来れるやつこもあり、老たる若き男女、伊勢あみがさ、あふみすげがさをきたるもあり、かづきわたぼうし、おくじまのはをり、さまざまなる人々あつまりたり。

と記し、曳尾庵の『我衣』には、江戸の芝居に關する聞書の廉を、左の如くに記して居る。

寛永元甲子年勘三郎芝居濫觴ハサシオク、夫ヨリ二十年後ニ市村竹之允芝居初

ル、山村長太夫元森田勘彌斷同皆々勘三芝居ヨリ出ルナリ、又都傳内寶延河原崎權之

助天和等芝居始ル、淨瑠璃芝居ハ天滿八郎太夫天和セツ佐渡七太夫寶永セツ武藏

權太夫結城孫三郎淨瑠璃、元祿和泉太夫大サツ、元祿永閑サツマ外記寶永同土佐皆々天和

肥前太夫門弟ナリ、後享保末ヨリ上方ヨリ義太夫節門弟ドモ多ク來ル。

元文比ヨリ宮古路豊後ト云上方ブシ來リハヤル。

南京芝居和上ニテ糸ヲ以テツカフ。

元祿ノ比迄裏新道ハ紺屋ノ干場タリ、正徳比ハ人家間ニアリ、享保年中ニ至テ茶

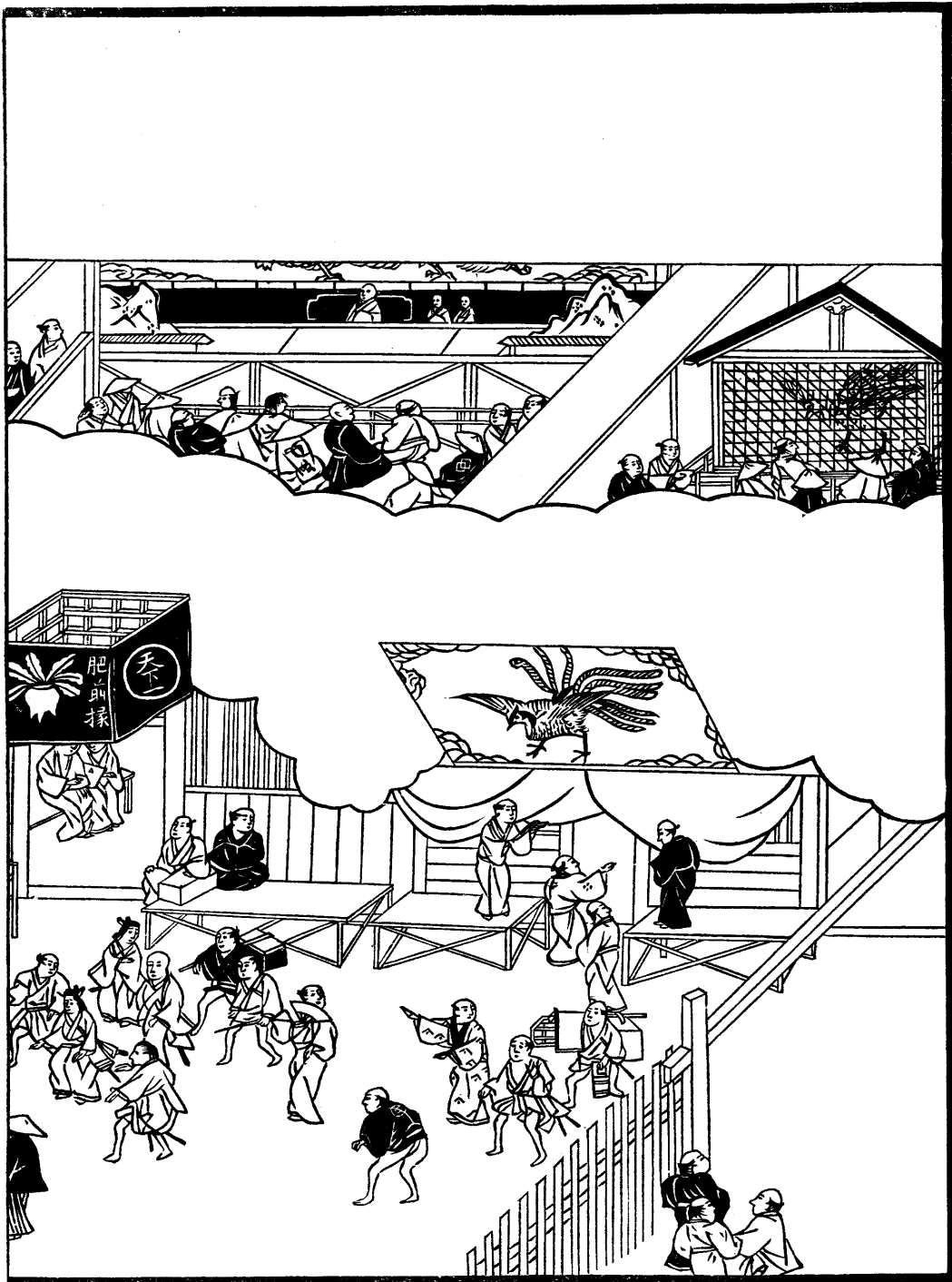
屋野郎屋立竝ブ。

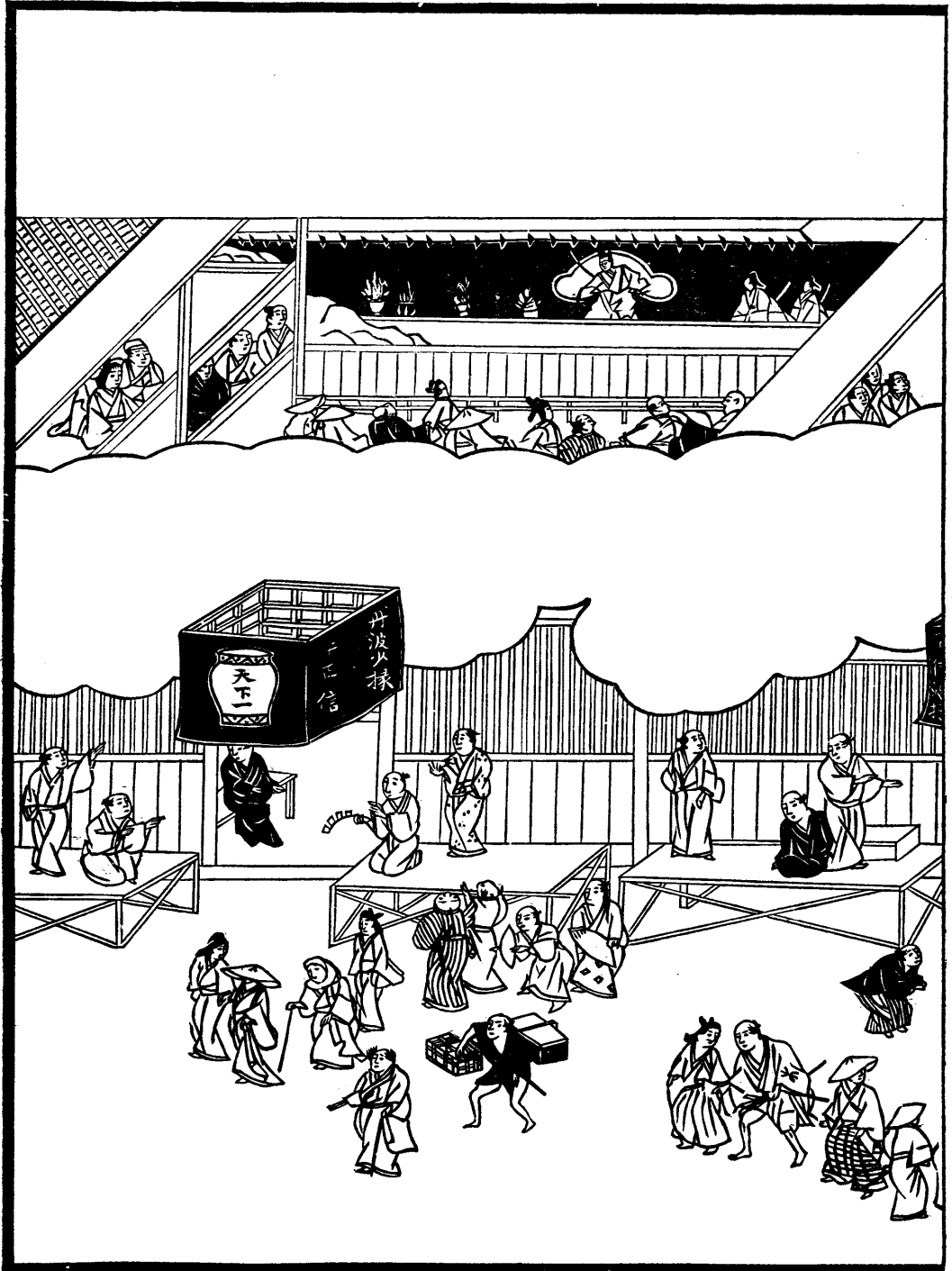
江戸半太夫ト云淨瑠璃、元祿年中宇左衛門芝居ノ向へ操芝居出シタリ、是ハ元肥

前太夫門弟ニテ永閑ニ續キタル門弟ナリ、外記土佐ヨリモ古キ弟子ナリ、又享保

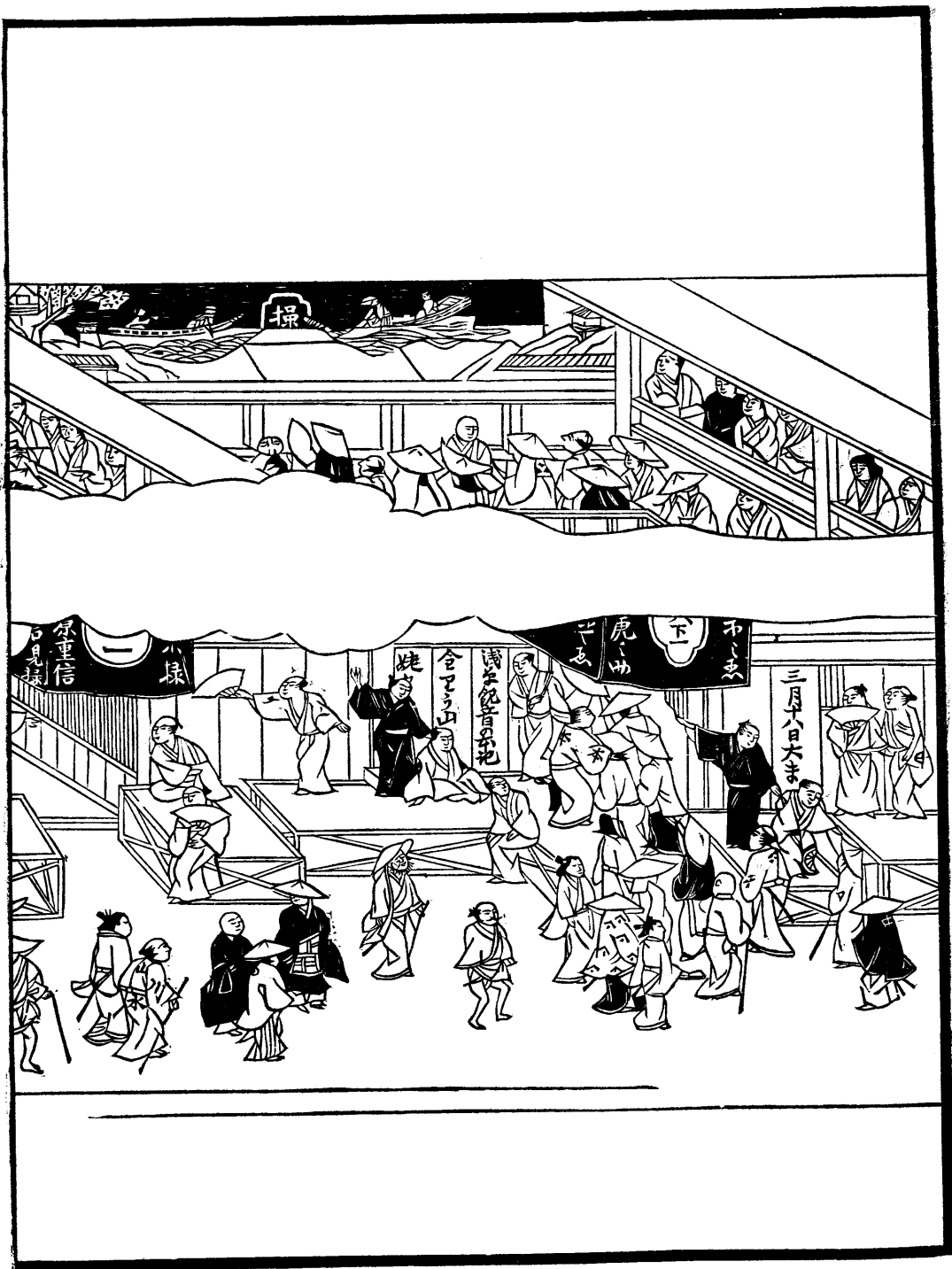
年中河東トイヘル淨瑠璃出タリ、半太夫ガ弟子ナリ、此ノ河東ハ元品川町出生ニ

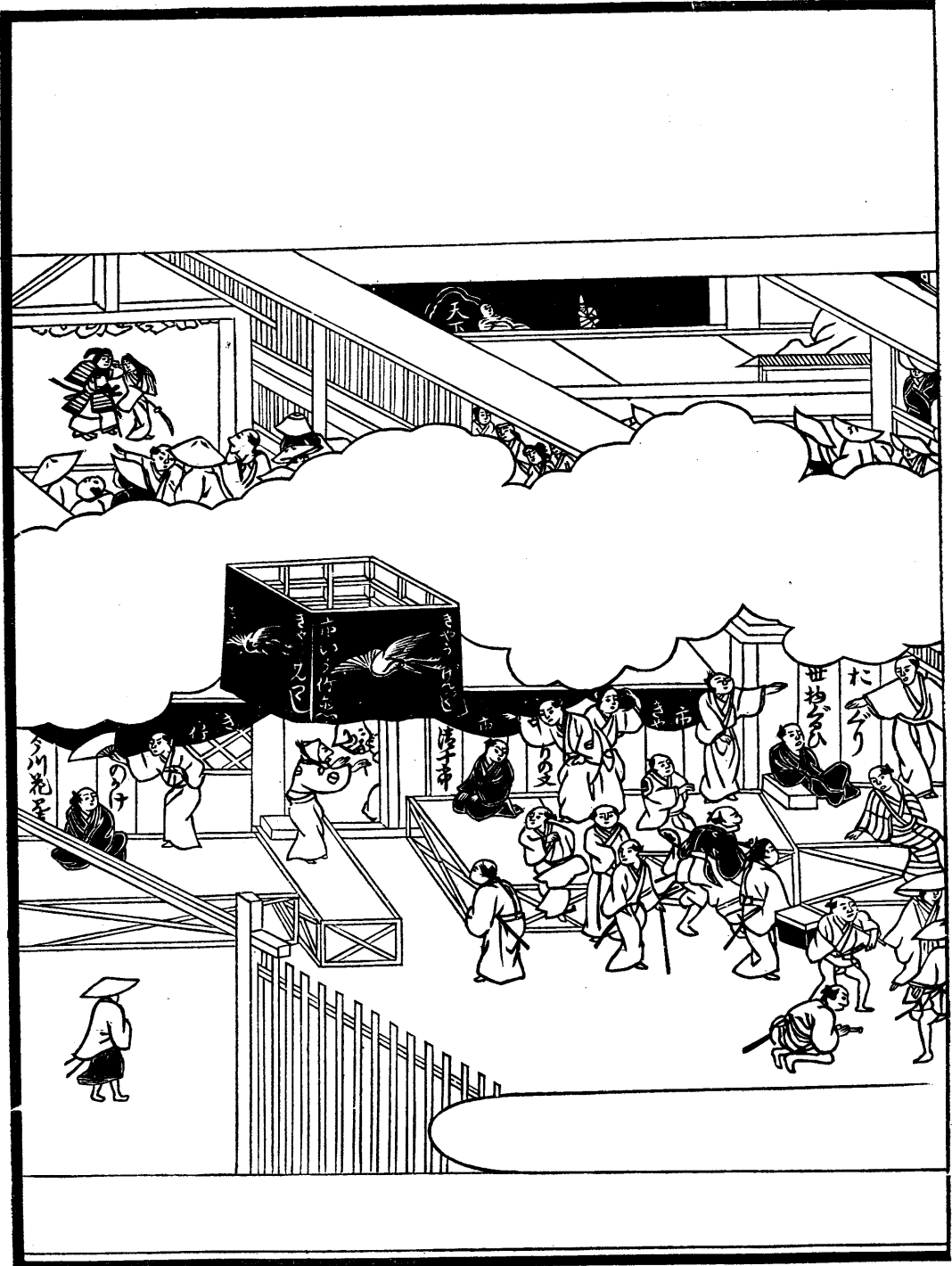
テ親ハ天滿屋市十郎ト云備前ノ松平大炊頭様魚御用相勤メタル町人ナリ、河東





(一の其) 圖の居芝町屋葺町堺





ハ俳名ニテ本名藤十郎、又名字ヲ加藤ト云ヘリ、是モ一派ノ祖ナリ、元文ノ比死ス、寺ハ築地本願寺中ニ墓アリ。

貞享ノ比手品ブシトテアリ、本小田原町手品市左衛門ト云者ノ子ナリ。

寶永ノ比小山次郎ト云人形ツカイ有、ヤグラヲ半太夫芝居跡へ上テ年久シク芝居シタリ。

貞享マデ淨瑠璃ト云事ナシ、加賀ブシ又朗齋ト云大ニハヤル、後肥前太夫出ル、依之肥前淨瑠璃ニハ加賀ブシ多ク交ルナリ。

寛保元酉三月ヨリ九月比マデ、大坂竹田近江大塚、堺町勘三郎芝居ノ向ニテ、カラクリ竝ニ子供狂言令見之。

表ノ方左右ニ竹二本植額ヲ正面ニカケル、番附子供狂言住吉ヲドリ。

カラクリ三歳計ノ子供人形指人カブリヲス、指ヲ折テ歳ヲ云フ、小便ヲ放ス、○五歳計ノ子供人形三味線ヲ弾ク、大ツツミ小鼓ヲウツ○狂言三條小鍛冶四方髪ノ人形楊弓ヲ射ルカラクリ○狂言化物屋敷クワイノ師ノ人形カラクリ舟辨慶ニカハル○狂言鼠ノ穩里道成寺カラクリ人形○狂言セワゴト○春日ノ宮殿燈籠ニ火ヲオホゾカラ燈スカラクリ○狂言大塔宮○船ノカラクリ蟻通ノカラクリ、右貴賤老若群集ス、初日ヨリ三日之間アマリ人多キ故、木戸ヲ閉テ不入。

以て其の一般を推すべきである。左は元和八年より元祿八年十寸見河東死去の年に至る、七

十四年間ノ江戸歌舞伎と操り芝居ノ重要事項ノ略年表である。

江戸歌舞伎と操り芝居年表

重要事項にして各書に散見するも、確と其年次の明かならざるものは本年表には之を省きたり。例之ば元和八年以前の記事、若しくは浄雲の東下り、又は丹後親子の浄瑠璃將軍上覽の記事の如し。

元和八年 中村勘三郎江戸に下る。

同 九年 能狂言を歌舞伎に仕組み興行の事を出願し許さる。

寛永元年 二月十五日中橋に櫓を上げ、名を猿若座と名づけ、三月より開場す。小供二三人自ら唄ひつゝ踊り、一切にて追出す、宛も能の間の狂言の如しとなり。

同 二年 八月京都より生島丹後下り、同じく中橋に櫓を上ぐ、是れを若衆歌舞伎と云へり。

同 四年 鎌倉河岸の原へむしろ張の小屋にて念佛踊始る。——間もなく御拂ひとなる。

同 五年 各所に女歌舞伎起る。

同 六年 女舞、女歌、舞伎等禁せらる。

同 七年 十二月男女混交の興行嚴禁せらる。

同 九年 中村勘三郎の芝居移轉を命せられ、在座の場所御城禰宜町へ、移り興行。

同 十年 中村座にて猿若小舞に所作の振りを附け、杵屋喜三郎三絃

の合方を入れて踊る 歌舞伎に三味線を用ゐたる始なり。

寛永十一年 五月村山又三郎 名こや山の弟子 泉州堺より下り、上堺町にて櫓を上げ、子供五六人にて地唄手踊の興行を始む。是れ市村座の祖なり。

鎌倉河岸の小芝居、残らず芝居町 今の柴井町なり へ引移りを命せらる。

同 十二年 薩摩淨雲の淨瑠璃差止めらる。

同 十三年 衣裳に華美を盡したりとの廉にて、座元勘三郎彦作等咎めを受く。

同 十四年 杵屋喜三郎勘五郎と改め、猿若座の狂言に酒呑童子七段、獅子狂ひの曲を演じ、好評にて大に流行し、市中の婦女子其弟子となりて學ぶ者多し。

同 十五年 虎屋喜太夫堺町に説教淨瑠璃を興行す。

同 十六年 三月中村座にて、若衆今川百之助、村山十平次、千之丞等横笛貴船の道行所作事を演じ大當り。

同 十九年 山本長太夫 始め小 木挽町四町目に操り芝居興行。

同 二十年 芝居座元一同より、男女仕形區別相立狂言仕度旨嘆願し、許可せらる。以來興行中男形女形と肩書致し紛敷義無之様との申渡しあり。役者を立役女形と區別することは之に始まる。

正保元年 狂言中に現在の名前を用うることを禁せらる。

同 二年 市村宇左衛門作者都傳内此人後に座元となると謀り、二番續の狂言を

仕組み、一と切毎に上より黒幕を下すことを始む。

笠屋三勝・芝明神社内に櫓を上ぐ。宮芝居の始めなり。

同 三年 五月中村座にて上棧敷を作る。

同 四年 山村座にて狂言踊と云ふことを始め、踊の間に臺詞ゴトを入れ
ることを工夫し、又幕毎に此處何々と書き出すこととせり。

慶安元年 瓦崎權之助筑前人江戸に下る。京村山左近太夫の弟子練絹の一

重を著し、帽子を冠り、女の眞似を能く寫せりとなり。

同 三年 九月又三郎彦作等召されて狂言貴船今川七福神等を將軍

の覽に供す、鳥目二百貫文を下さる。

同 四年 中村座堺町に移る。

將軍病氣に付き中村勘三郎屢城内に召され、種々上覽に供す。青地

金襴の衣裳、鳥目六百貫文を下さる。

彦作勘三郎等歌舞伎役者へ鳥目三百貫文宛下さる。

右は將軍病中諸藝上覽に付ての下賜也。

承應元年 芝居停止。

同 二年 解禁。此時若衆美少年の前髪を剃らしめ、女形は前髪跡へ

染色の習を巻かしむることとなる。

承應三年 市村座にて二番三番續の狂言を始む。此時始めて鬘を附けて演せしに、珍しかりければ大評判なり。此れより他座の役者も之れに倣ひ、鬘を付けることを始む。

明暦元年 山村座、曾我十番切の狂言。

同 二年 八月各芝居の棧敷取崩し申付けらる。

萬治元年 六月勘三郎死。悴明石二代目勘三郎を相續す。

此人より猿若を改め申

村氏さなる、時歳十二。

同 二年 役者評判野良蟲刻成る。

同 三年 うなぎ太郎兵衛木挽町五丁目に芝居を建つ。此れ森田座

勘彌の祖也。

寛文元年

桐大藏

相州小田原の人なるべし、寛永六年小田原にて男女打交り芝居を興行し禁止せられたるこそ歌舞伎年代記に見ゆ江戸

に來り木挽町五丁目に芝居を建つ。地所割坪敷等の事より訴訟と

なり、結局間口七間奥行十間と定めらる。

此れより推すも當時の芝居の規模は大概想察さるゝのである。

十二月、江戸町觸「諸見物芝居仕候者堺町葺屋町木挽町五丁目此處

にて可仕候自今以後他所にて堅仕間敷事」この達しなり。

同 三年 中村座にて四季總踊を演ず。長唄八兵衛三弦杵屋六左衛

門、同喜三郎にして、噺方舞臺へ並び、花やかなる所作事とて好評なり。

同 四年 市村座に續狂言、引幕、大道具立始まる。作者都傳内、今川忍車と云ふ續狂言を作る。

桐座にて續狂言、引幕を始む。

正月江戸町觸——「狂言盡は不及申、淨瑠璃芝居、其の外諸芝居にて島原狂言仕組、傾城の眞似一切仕間敷事」との達なり。

同 五年 森田座にて曾我四番續の狂言を演ず。七月結城孫三郎葺屋町に操人形の櫓を上ぐ。是れ太鼓櫓を上げし始なり。劇場年表

同 六年十月江戸肥前様杉山丹後様の男なり、尤も肥前様と受領したるは延寶元年なり葺屋町に操芝居の櫓を上ぐ。

近江語齋堺町に人形芝居興行。

同 七年 元祖中村傳九郎初舞臺。五月中村座上棧敷許され簾を懸く。

同 八年 初めて舞臺に花道を付く。

九月河原崎權之助櫓を免さる。

同 九年 玉川彦十郎堺町に櫓を上ぐ。

附舞臺出来る。

天満入太夫堺町に説教節操芝居興行。

同 十一年 和泉太夫堺町に操芝居興行。願人野呂松勘兵衛なり。

江戸孫三郎堺町にて興行。

延寶元年 狂言名題始る。

中村座にて市川段十郎祖元初舞臺。四歳十顔を塗り荒事を勤む。

杉山丹後太夫口宣を拜して丹後椽藤原清澄と稱し其子又受領して

江戸肥前椽藤原清政と稱す。

同 二年 土佐虎之助二代目薩摩次郎右衛門受領して土佐少椽橘正勝と

稱す。

同 三年 五月山村座にて勝鬨譽會我——段十郎五郎を勤む。會我

續狂言の始めなり。

同 六年 古今役者物語刊行。

六月二十七日大久保加賀守二の丸にて虎屋源太夫の操りを將軍の覽に

供す。天日記

同 八年 段十郎不破伴左衛門の狂言大當り。

四月十日土佐少椽の淨瑠璃操り二の丸にて上覽。外題は酒呑童子也。同二十七日永閑の淨瑠璃操り上覽。人形は岡才次郎勤めたり。

一一 言話

女形玉川千之丞始て黒帽子を冠る。

天和二年 十二月中村市村兩座焼失。お七火事

同 三年 薩摩座堺町にて興行。一本には貞享二年の條に薩摩外記堺町に操り芝居興行と記せり。

貞享元年 段十郎鳴神の狂言大當り。

同 二年 操り芝居其外天下一の號を付けることを禁せらる。

劇場年表には貞享四年の條に歌舞伎狂言並操座大夫役名主附添南奉行北條安房守殿へ罷出以來看板に天下一の號書認候儀不相成旨申渡さるゝ記せり。因に受領の證として樽幕に天下一と記すこと延寶の頃より盛に行はれたりし也。

野良三座記刊行。

同 三年 中村座段十郎伊左衛門化身の場大評判なり。是の狂言より本舞臺となる。

同 四年 四座評林刊行。

元祿元年 春狂言中村傳九郎四代目勘三郎奴朝比奈の役大當り。

同 二年 不破名古屋の狂言始て興行。

同 四年 三月水木辰之助下る。四季御所櫻狂言本刻成る。

同 五年 荻野八重桐元祖下る。

同 六年 市川段十郎上京此時より段を團に改めたり。

同 十年 市川團十郎江戸に歸る。市川九藏初舞臺。八歳

寶永元年 二月十一日杉山半六市川團十郎を刺す。七月九藏二世團十郎と相續す。

同 六年 嵐三十郎元祖下る。

正徳元年 五月森田座、傾城逆澤瀉―景清傳九郎三保谷坂東又九郎にて鑢引大當り。

同 二年 江戸半太夫堺町に操座興行。

同 三年 山村座團十郎助六大當り。元祖中村傳九郎死。

同 四年 二月山村座斷絶。

三階棧敷禁せらる。

江戸宮芝居禁せらる。

同 五年 都一中・市村玉柏市村座へ下る。

享保二年 澤村宗十郎下る。

同 三年 三芝居屋根瓦葺となる。

二代目市川九藏元祖澤村惣十郎森田座へ下る。

同 七年 正中中村座河東淨瑠璃神樂獅子に團十郎助十郎狂ひの舞

大當りにて、獅子の玩具まで出来て大に賣れ行きたりと云ふ。

同 八年 二月中村座開座百年の壽興行。

同 九年 四月三芝居下棧敷願之通御免塗家造仰付けらる。近き比

まで芝居表懸りをすべてなまこ壁にしたるは此時の形の残りたる

ものなりと云はる。

同 十年 七月二十日河東節の祖十寸見河東殘。

第七章 義太夫節以前の京阪浄瑠璃

京阪浄瑠璃の勃興時代

源太夫上京以前の京都の浄瑠璃 源太夫の高弟

期せずして師の入京の露拂の役目を勤めた宮

内と喜太夫 師に優れたる伎倆の逸足播磨と角太夫

京阪浄瑠璃の恩人偉勳者としての源太夫の

位置 源太夫が傳へた曲風

京阪兩地に流行した金平節

其の流行の渦外に超然

たりし山本土佐と宇治加賀 著しく金平節化する井上播磨の曲風

山本土佐 宇治加賀 井上播磨

源太夫上京以前の京都の浄瑠璃

京都は浄瑠璃發祥の地であつたに拘はらず、其の發達は遅々として太た振はざりし。『竹豊故事』には「京都に昔は浄瑠璃はやらす、説經與八郎、歌念佛日暮林清、同林故、林達等を玩べり。寛文年中に江戸虎屋源太夫上京有つてより浄瑠璃繁昌し、常芝居も出來せり。」と記して居るが、這是餘りに不詮索なる斷定である。『山城名跡志』には寛永十二年に、島田萬吉と云ふ名代にて京の四條五條北野祇園に於て浄瑠璃及歌舞伎を興行し、二十三日間程づつ勤めたる由を記し、『歌舞伎事始』には「二代目の國女、五條にて芝居興行せし時、島田萬吉と云ふ女あり、才智あるものにて共に之を計り、女名代といふことを始め、浄瑠璃操りをなし、切まくをも始めたり。其の比六字南無右衛門と云ふ女太夫、同じく操りを興行す」云々と記せることは、既に前にも述べたる所の如し。

『東海道名所記』には、

又浄瑠璃は、そのころ京の次郎兵衛とかやいふ者、後に淡路丞と受領せし西の宮の夷かきをかたらひ、四條川原にして鎌田の政清が事をかたりて、にんぎやうをあやつり、そのうち、がうの姫、あみだのむねわりなどいふ事をかたりける。次に河内左内といふもの出たり、女にもなむゑもん、左門、よしたかなごよて浄瑠璃をかたりけるを、歌舞伎と一同に女はとどめられぬ、ちかきころ江戸より宮内といふもの上りて左内とせり合ひ、いろ／＼めづらしき操をいたしける。ほどなく宮内は死けり、左内もなくなれり、今は其の子とも打續きて操をいたし、面々受領せし内に喜太夫といふもの上總椽になりて太平記を語る。其曲節平家とも舞とも謠とも知れぬ島ものなり。」

と記して居る。由是觀之、源太夫上京以前の京浄瑠璃の一般は想察することが出来るのであつて、喜太夫が上京したのは明暦三年なるも、其の以前既に承應元年の夏には、杉山七郎左衛門親子が上京して、四條河原に興行し、口宣を拜して丹後椽藤原清澄と名乗り、其の子亦肥前椽藤原清政と受領して居る。伊勢島宮内が入京の年次は明かならずと雖、『東海道名所記』は萬治元年の板行なれば、近き頃と云へば承應明暦の頃なるべく、喜太夫と殆ど前後して入京したるものと見るべし。されば源太夫の上京以前既に相應の流行を見つゝありし事は明かである。

源太夫の門下生中指を屈すべきは、虎屋永閑、虎屋喜太夫

上總少椽
藤原正信

伊勢島宮内、井上播

期せずして其の師の入京の露拂の役目を勤めた宮内と喜太夫
師に優れたる伎倆の逸足播磨と角太夫

京阪淨瑠璃の功勞者としての源太夫の位置

源太夫が傳へた曲風

磨、山本角太夫の五人である。永閑は江戸を出でず、喜太夫、宮内の兩人は源太夫に先だちて京に上り、期せずして其の師の入京の露拂の役目を勤めた。源太夫の上京の動機は此の兩人の勳に動かされの事にはあらず。播磨と角太夫とは源太夫が入京以後の弟子にして、師に優れたる伎倆の逸足なりし。

源太夫の上京は寛文年間の事ではあるが、其の年次は明でない。彼は淨雲門下の高弟にして、伎能に於て見るべきものありしは勿論なりと雖、別に特技を發揮して一派を立てたと云ふのではない。何處までも其の師淨雲の曲風の忠實なる宣傳者なりし。思ふに京阪淨瑠璃の革新作興の功業は、彼れ源太夫の力と云はんよりは、寧ろ門下の秀才播磨、角太夫竝に伊勢島宮内の門下より出た宇治嘉太夫、此の三人の力に由るもの多しと云はねばならぬのである。角太夫、播磨、嘉太夫は實に京阪淨瑠璃勃興時代の三雄なりし。されど久しく沈滞せる京阪淨瑠璃界の空氣を攪震して一道の生氣を注いだのは實に源太夫である。澤住瀧野の兩檢校が斯道の端を啓いて以來さしたる面目も改めず、遅々として伸びざりし京阪淨瑠璃の前途に對し、生氣潑瀾たる勃興の機運を促進するの動機を作つたのは源太夫である。源太夫は實に關西淨瑠璃道の大恩人、布教開傳の偉勳者にして、同時に現代江戸節淨瑠璃各派の遠祖である。

源太夫が傳へた曲風は、雄勁粗淡な、淨雲譲りの曲節、其の儘のものにして、淨瑠璃の正本とても亦、淨雲又は淨雲の高弟等が語り古した、在來正本其儘のものを踏用して居たのであつたらうと想はるゝのであるが、之を上方風の優婉濃厚の節調に語り易へたの

が山本土佐角太夫にして、之を大阪式の摯實な、平民的な曲風に語り變へたのが井上播磨である。

源太夫は金平節の語り人には非ざりし。但、武勇物語的淨瑠璃の總てを擧げて、金平節と汎稱す。一種の分類の仕方より觀れば、源太夫も亦金平節の語り人なりと稱するに彼が傳へた曲風は、粗淡は粗淡なり、雄勁は雄勁であつたにしても、金の出來ないでもない。彼が傳へた曲風は、粗淡は粗淡なり、雄勁は雄勁であつたにしても、金平節の如き、單に武辨一方、殺伐粗放なものではなかつたのである。

萬治の初め比よりして江戸の金平節は京阪兩地に入り、京都にては虎屋喜太夫、大阪にては伊藤出羽椽、虎屋源太夫大阪源太夫と呼べり等の操り座は、盛んに金平張りの淨瑠璃を上演し、複刻の金平本をも頻發し、井上播磨の如き亦、多少此の渦中に捲き込まれたるの感あり、一時は京阪淨瑠璃界を席捲するほどの勢を呈したのでありし。されど此の流行は須叟にして止み、寛永三、四年頃を之れが流行の最盛時代として、倏ち閉息して仕舞つたのであつた。

金平節の流行は無論源太夫の傳唱したものでなければ、又其の鼓吹したものでもないのである。畢竟江戸に於ける流行の餘波を受けた一時的の現象にして、按ふに其頃の技術は太だ幼稚にして、大阪も亦爾り淨瑠璃の正本はいづれも京に上ほせて彫刻板行して居たりしもの如し、されば金平節の正本も等しく京都にて板行せられ、新作出づる毎に直に京都人の手に傳はり、大阪に傳はり、讀本として先づ其構想、内容が紹介せられ、一方江戸に於ける金平節盛況の噂は、夫れより夫れ、京阪人士の間に傳はり評判となり、倏忽にして盛んなる流行を見るに至りたるものなるべし。其の流行の期間たる太だ短期にして瞬間的なりし。されど此の短き流行の期間に於てさへ、金平節淨瑠璃正本の板行せられたるもの、『天狗の羽打』、『四天王最後』、『頼光蜘蛛切』、『朝夷島渡り』、『朝夷かたき論』、『公平關破り』、『公平法問諍』、『公平化生論』、『金時洛陽入』等

金平節流行の渦外に超然たりし山本土佐と宇治加賀

著しく金平節化せる井上播磨の曲風

山本土佐

數十種に及んで居るのを見て、如何にさまざまいき勢を以て一時の流行を極めたかど、想はるゝのである。

金平節流行の渦中に處して、飽まで超然として其の渦外に立ち、濃婉巧緻の曲風を維持して渝らざりしものは、山本土佐と宇治加賀の兩人である。

井上播磨の莊重遒勁の曲風は、此の時よりして著しく金平節化せるものとなり、莊重はいよゝゝ莊重となり、遒勁はますゝ遒勁となり、土佐、加賀兩流の濃婉纖巧な曲風とは、全然其の選を異にするものとなつたのでありし。播磨は一時、金平節類型の淨瑠璃正本さへ新作して、彼の芝居に上場奏演したるほどであつた。

左に山本土佐、宇治加賀、井上播磨の略傳を敍する。

山本角太夫は大阪の人、源太夫に學び、或は伊藤出羽椽の門人なりとも云はれ、又伊勢島宮内の弟子なりとも云はる。角太夫節の

一派を爲して世に行はる。一時大阪の出羽椽座に在りしが如し。京都に上ぼりて操り芝居を始め、寛文の比より元祿年代まで興行し、南京操を用ゐしを以て聞ゆ。『聲

曲類纂』には、延寶五年十二月十一日受領して土佐椽藤原房正と稱したと云つて居る

が、此の時の受領號は相模椽藤原吉勝にして、土佐の椽號は再度の受領なるが如し。繪入淨瑠璃史

参考嘉太夫と並び稱せられたる語り人にして、『人訓蒙圖彙』には「今みやこには、嘉太

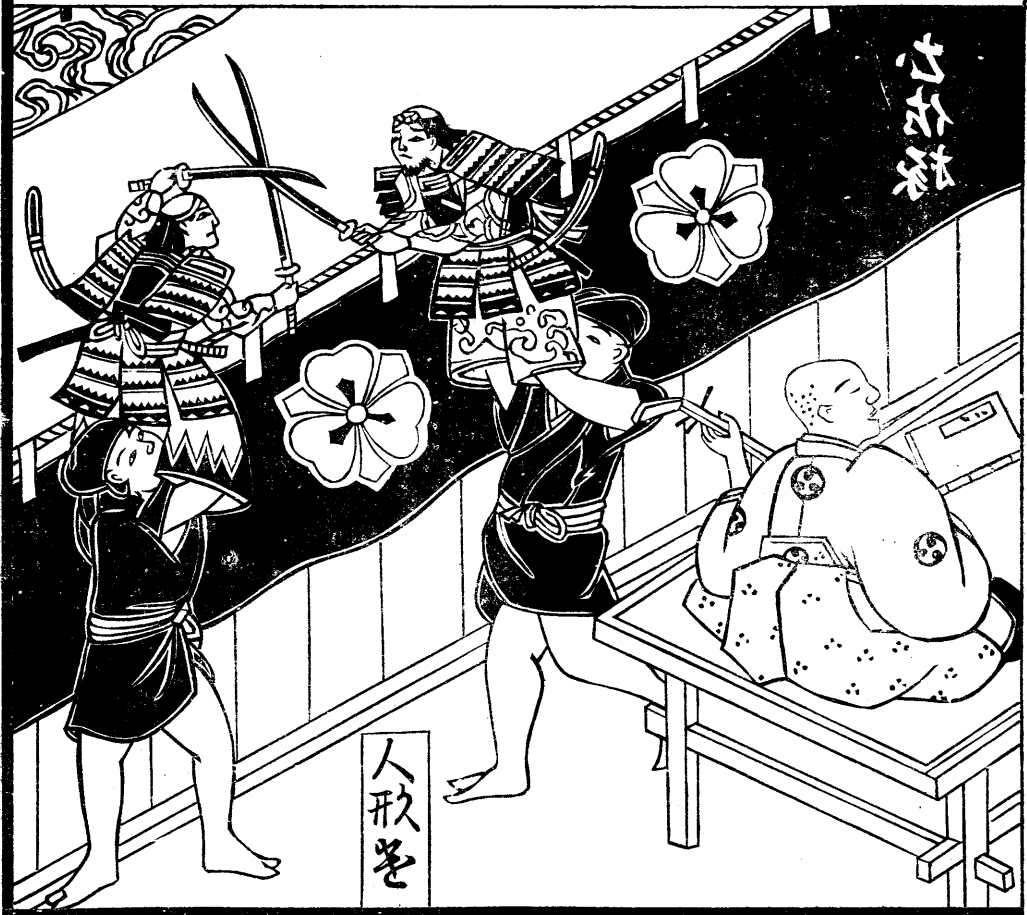
夫、角太夫とて其名四方にきこゑたる名人ありて、兩流を田舎までもてはやせり」と云つて居る。彼の門下よりは治太夫節を創めた松本治太夫、文彌節の祖岡本文彌を出した。

此の圖は元祿三年七月開板の『人訓蒙圖彙』七卷の挿畫にして土佐山本角太夫の芝居の樂屋を描いたものである。三絃彈は座頭にして太夫と差向ひに座し涼臺すずだいの床几の如きものを土間にすゑて其の上にて浄瑠璃を語れり、いづれも足のない人形にして裾より手を差しこんで遣ふて居る。浄瑠璃語る所は人形のうしろ後方



幕の内なれば看客には見
 えず、太夫が威儀を正し一
 刀を傍かたへに置きて語れるさ
 まもゆかしく、彼が従僕と
 もおぼしきが、くはへ煙管
 して聽きほれて居る様も
 をかし。元祿の初年土佐
 の芝居は尙且此の如き状
 態であつたのである。形人

を淨瑠璃に和はして操ることを
 工夫し始めたのを假りに慶長の
 末年なりとするも、元祿三年ま
 では尙且七十六年の差がある。



角太夫の淨瑠璃外題は大要左の如し。

角田川。小野篁。天親菩薩。愛護若。阿漕平次。傳教大師記。王照君。源氏蓬萊三つ物。久米仙人。三條小鍛冶。都志王丸。女人往生記。飛驒内匠。善光寺開帳。信田妻。天王寺彼岸中日。浦島太郎。四十八願記。石童丸。日蓮上人德行記。酒顛童子。眉間尺物語。小栗判官。三世二河白道。鉢かつぎ。信田小太郎。小敦盛。逆髮王子横車。入鹿大臣。平親王將門。因幡堂開帳。袈裟御前物語。西教寺七萬日回向。熊井太郎孝行の巻。花山法皇巡禮記。

宇治加賀

宇治嘉太夫は紀州和歌山宇治の生れである。姓は徳田氏、生來音曲を嗜み謠に長じた。十七歳にして志を立て、諸藝の家に出入して研鑽年あり、四十一歳延寶三年京に上り、竹屋庄兵衛を銀主として操芝居を興行し、其の師伊勢島宮内の名代を以て、淨瑠璃宇治嘉太夫と大看板を上げ、新大磯虎遁世記を語つて大評判を取つた。『聲曲類纂』には、嘉太夫の旗揚を寛文の頃なりとし、『竹豊故事』には天和、貞享の比なりとして居る。されど元祿十年彼が歳六十三の時に板行した『紫竹集』嘉太夫當時加賀條の淨瑠璃集也、紫竹は即ち七九にして六十三歳の意を寓するべし。の序文には、

一生夢のごとしといへども修業の間を思へば年久し、既に我十七歳の春、あはれ世上に名を發する藝をあたへてたべと、三十番神へ祈誓をかけ、年來諸藝の家へ出入し云々、四十一歳にして京都に出芝居を取立、今年二十四年つゝがなく相勤む云々。

とあり、之れより推せば、元祿十年より遡ること二十四年は即ち延寶二年に相當すべしと雖、延寶二年彼歳四十一とすれば、紫竹集板行の元祿十年は六十四歳となり、紫竹即ち七九と名題した意味と符合せず。『竹豊故事』には、「寶永八年註、正徳元年也卯の正月二十一日に死去せられぬ、法名は自證院本淨道融居士と稱し行年七十七歳也」とあり、旁々延寶三年四十一歳との考證當を得たりとすべし。山本角太夫と同日、延寶五年閏十二月十一日受領して、宇治加賀椽藤原好澄と稱す。其の曲風は、「播磨風を表とし、節配り細かに、よはくたよくうつくしく語り出せば、京の見物頭から氣に入りて思の外評判よく、段々新作の淨瑠璃を出し、人形衣裳迄きれいに拵へ云々」『操年代記』と云はれたるほどにして、京都人の風尙に投合し、其後四十年、京都淨瑠璃界の雄者として其の名を馳せて居たのでありし。近松門左衛門亦彼の爲めに二三の語りものを作して居る。『世繼會我』は其の一である。正徳元年即ち寶永八年正月二十一日七十七歳にして歿す。一説には八月十日とも傳ふ謠本になぞらへて正本に節章をさしたのは加賀椽である。『操年代記』に「けいこ本八行を、四條小橋つばやといへるに板行させ、淨瑠璃本に謠の如くふし章をさしはじめしは、此太夫ぞかし」と云へり。淨瑠璃本の刊行は極めて古くより元和の頃既に刊行したるものありと思はるのことなりしと雖、節章をさした大字稽古本八行は、實に加賀椽の創意に成つたものである。

『聲曲類纂』には左の如く記して居る。

宇治加賀椽藤原好澄。紀州和歌山

宇治と云所なりと云

の産なり、伊勢島宮内が弟子にして

宇治嘉太夫と號す、元來謠にくはしく其の頃、井上播磨が、音曲世に流行ける故、自工夫をこらして、別に一流の曲節を語り出す、寛文の頃宮内が名代を以て芝居を興行し、延寶五年巳十二月十一日宇治加賀椽と受領を拜し、新作の淨るりを作らせ、稽古本大字八行の正本を始めて梓に上せ、謠本の如く節章をさし初しは此の加賀椽より起れり。貞享二巳年七ツ、いろはの上るり五段を四條小橋靈屋に與へて刻せしむ、則しめ、はじめて節を配りしはつれ、草といふ本なり、此の時板行上せしといへり。

此の人謠の音節を和らげて語りしかば、呂律甲乙連續して今の世までも嘉太夫節又加賀節とて其の遺風残れりとかや。貞享の頃、大阪へも下り、後又京へ歸り、始終三十年の餘京にて宇治の一流をはやらせ、寶永八年卯正月二十一日或八月十一日

も七十七歳にして終れり。其の子宮内同八月二十一日嘉太夫と改、相續で芝居を勤む。加賀椽芝居へ竹本筑後未だ理太夫といひし頃、脇にかいへられ、西行物語の二段、目藤澤入道夜盜の修羅をかたりしとき、元來大音にて甲乙といひのひ座中へ聞へわたりて音聲

鮮なりしかば、加賀椽深く感じ、以後此の道に名譽をあらはすべし、此の人なり、賞美しける、や、貞享三寅年加賀椽難波に下りて、井原西鶴が作りたる曆といへる淨るりをかたる、そのとき、義太夫が方には賢女の手習新曆を題して、兩座甲乙を争ひしとなり、又加賀椽自ら作りし上るりもあり、いろは物語其の外にもありとぞ。人偏訓蒙圖彙淨るり太夫の條下に、中の頃部の宮内左内とて上手のあり、御代御長久なればいやまし上手も出来て、いなかや、こにては、嘉太夫角太夫とて、其名四方に聞いたる名人ありて、兩流を圧合迄もては、やせり云々、こくに角太夫とあるは末に記せし山本土佐がはじめの名なり。 門人多き中にも宇治伊太夫事竹本若狹が芝居を繼で野田若狹と改め、後竹本彦太夫へゆづる。富松薩摩延寶六年十一月二十八日受領す立花河内宇治相模同若太夫同甚太夫等何れも譽れ高し。富まつさつま其の師の跡を繼で芝居繁昌せり、是實永正徳門り享保のはじめなりとぞ。若狹は北野七本松糸屋伊右衛門

定芝居にて久しく興行せり。

加賀様の興行曲目は左の如し。

大磯虎遁世記 小晒物語 百人一首萬年寶 西王母 一心五戒魂 身代り
問答 融大臣 今川了俊 柿本人麿 大佛供養 西行物語 染殿の后 吉
備大臣 淨藏貴所八阪塔 俵藤太 和田軍 中將姫 柏崎 弓削道鏡 當
流小栗判官近松 元服會我 融通大念佛 阿部宗任東大全 日本武尊 小袖
會我 衣通姫和光玉 三井寺狂女 十六夜物語 夜討會我 晴明道滿行力
爭 摩耶山開帳 小野道風額揃 法隆寺開帳 弘徽殿嫉妬打近松 源賴家鞠
始 神武天皇閏正月 薩摩守忠度一名千載集 門出八島 惟高惟仁位爭 三社誌
宣由來 須磨寺青葉笛 富貴會我 浦島太郎七世縁 遊行上人名香記 曆
西鶴 蒲冠者鞠始 賢女相生松 伏見常盤 弱法師 徒然草近松 いろは物語
加賀椽 天神御本地 鳥羽戀塚物語 世繼會我 葵の上 藍染川 凱陣八島
東山殿子日遊 關東小六東六法 本領會我 辨慶京土産 平安城都遷 頼
朝由井濱出おなつ清十郎 歌念佛 桑原女之助 吳羽中將二十三夜待 會我七つい
ろは 遊君三世相 津戸三郎往生要集 源三位頼政 葛葉道心物語 主馬
判官盛久近松 團扇會我近松 義經懷中硯 壽永忠則 刈萱道心物語 結城七
郎小袖賣 大江山 傾城反魂香 東山殿追善能 和州三部經 靜法樂舞
猫魔達物語 飛驒内匠 新豐饒御祭 會我美男草 忠信二十日正月 梅花

垣 巴太鼓 寝物語 牛若武勇始 和氣清麿 源氏三代記 佛舍利 源海
上人 八はな形 榮花物語 五百羅漢 粟島御縁記 熊野開帳 婚禮祝言
記 伊勢物語 源氏供養 祕密護摩 遊や物語

井上播磨

井上播磨は通稱市郎兵衛、京都の人。本業は大内の御簾作りなりし。音聲遅くして謠に長ず、源太夫の門に入つて學び、古流の節譜に心を配り、フシ、オクリ、三重、オン、ハル、ギン等に至る迄一譜半節も苟もせず、研鑽年あり、不圖江戸の萬歳を聽いて悟るところあり、一流を創めて浪花に下り寛文十操り芝居を興行して大に世評を博し、爾來浪花を天地として其覇を唱へ前後二遙に京都の嘉太夫と對立して聲名を馳せて居たのであつた。受領して井上大和椽藤原と稱し、後また播磨椽と受領した。貞享二年五月十九日京都四條の芝居に興行中外題頼光病を得、五十四歳にして俄に彼の地に沒した。

播磨の曲風は「景事、道行を語るに長じ、就中うれひ修羅を第一として語りけるに、聽く者眞似んと欲して遂に能はざりき」『操年代記』「古今の妙音なれども語り出したしかならず、後程面白きはならびなき娘子の新枕ともいひつべし」『倒冠雜誌』と評せられて居る。當時加賀椽は上手と云はれ、播磨は名人と讃へられたほどである。播磨が獨特の節調は播磨地と稱して今に残り、後の義太夫節、竹豊兩派ともに、其の遺風を汲んで居るのである。『操年代記』に、

「其頃は寛文以前床本かたく閉て、弟子たらんにもむざと許さず、勿論稽古本といふ事

なく、漸く聞書にして一行二行づゝおぼへ、夜あるきの友となしぬ、いまだ大阪に
淨瑠璃本屋なく、つてを以て替り、淨瑠璃出れば、前の淨瑠璃を、懇望して京にて、是
を、板行する、雖も、しらみ、本といふに、五段を書き、其間々に、一段、の、繪を、さし、
込、童子の、弄びとして、弘むるも、全く、稽古人の、助けならず、やうやく播磨太夫手筋
より、心齋橋筋三津寺邊に、書本を商賣する井上彌兵衛といふ人、太夫のゆるしを
請け、道行四季神落かみろしなどを、書本にして、稽古人の助となしぬ」

と云つて居る。初めて節付の本を公開し、之を書寫して販賣することを許し、稽古人
の助けとしたのは實に井上播磨である。其後加賀椽は、一步を進めて之を開板し、更
に一層の利便を圖つたのでありし。『遠魂紙料』には、「むかしの淨瑠璃は總て六段な
り、京都にては井上播磨より五段につぐめたりといふ」とあれど、寛永、正保の正本に
も五段ものあり、播磨の淨瑠璃は多くは六段ものにして、其の五段ものとても、心あつ
てしかと段數を一定して掛つたものとも思はれないのである。近松門左衛門も彼
の爲に二、三の正本を供給して居る。『天鼓』は其一つである。彼及び彼の門人市郎太
夫、清水理兵衛等の興行したる曲目は左の如し。

新十二段 二王の本地 日本廻り 舟遺恨 女袖鏡 都女商人 二親孝
行 金平法問諍 白旗の由來 敵討の遺恨 五天竺 祇園精舎 天鼓近松作
大友真鳥 日本王代記 荏柄の平太 神道蟻通 百合若麿 甲賀の三郎
源平戀の遺恨 道釋禪師傳 長谷寺利生記 土蜘蛛退治 二代の敵討

金剛兵衛左文字刀 田村將軍初觀音 兵庫の築島 利屈物語 一休物語
頼光跡目論 源氏築紫合戦 根元曾我物語 聖德太子傳記 業平一代記
源氏熱田合戦 頼義北國落 頼朝七騎落近松作 花山院物語 金剛山合戦
菅原親王行狀記 蒲御曹司東踏歌 大曾我富士牧狩 賢女手習鑑 日向
景清 大念佛由來 信濃源氏木曾軍記 大職冠知略玉取 三浦北條軍法
競 楠千早合戦 河津相撲の遺恨 東大寺大佛緣記 佐々木藤戸先陣
三浦大助老後譽

源氏十五段 五大力菩薩市郎太夫待宵物語 源氏東の門出 上東門院 松浦

五郎旅日記清水理兵衛

竹豊故事に云。

寛文中大阪に井上市郎兵衛と云人有、生得音聲強敷、古流の節譜に心を付淨瑠璃の道に工夫を凝し、風與江戸萬歳の音に意を付て體となし、自然と珍敷一流を語り出し、終に芝居を興行し、程無受領して井上播磨椽藤原の要榮と號し、名譽を顯はし、世に播磨流と稱美せり。此の、人、色、々、に、音、聲、を、遣、ひ、分、品、々、の、節、を、編、出、さ、れ、し、遺、風、今、の、代、に、傳、り、竹、本、豊、竹、共、に、此、の、流、を、用、ひ、ら、れ、し、上、其、の、流、を、汲、太、夫、達、井、上、氏、の、節、事、を、稽、古、せ、ず、と、云、事、な、し。其の景事數多有中に掛物揃歌仙の段、宮島八景鹽釜の段、晴明神風跡目論の馬の段、屏風八景七夕祭、五天竺長生殿四季の段、是等の類ひ員ふるに暇なし。此の芝居の繁昌を浦山敷思ひ、京都の銀主井上

氏の一座を買切、四條の芝居を勤め居られし内風與病氣付、五十四歳にて死去し、都の土と成られぬ。貞享二年丑の五月十九日、法名は夏月了音日弘とかや傳へ聞し。

播磨椽門人多き中、別して井上市郎太夫、清水の理兵衛等は芝居をも興行し、名高き太夫也。就中理兵衛と云し人は、安居天神の邊に住居せる料理茶屋成しが、此の道に熱心深く、聲柄能、然も功者に能語られ井上氏の奥義を能呑込れし。右播磨椽死後に花香失す、諸人、今播磨とぞ持流しける。後に剃髮して伴西と號せり。聲曲類纂に云。

井上播磨椽藤原要榮。通稱市郎兵衛といふ、京師に住して大内の御簾を作りてたてまつる事を世態とす。謠を學びて音聲生れ得て自由なりければ、虎屋源太夫が門に入て、淨瑠璃を學び、古流の節譜に心を付、工夫を凝し、風斗、江戸、萬歳の音に意を付て、體となし、自然と珍敷一流を語り出し、浪花に下り、寛文の頃より世上に流布せしかば、あやつり人形に合せ芝居免許を蒙り、井上大和椽藤原要榮と受領を拜し、後又播磨椽と受領す。貞享二年乙丑五月十九日五十四歳にて京師に終れり。法華宗長明寺に葬す。播磨が餘風、今に傳り、播磨地など號し、竹本、豊竹ともに此の流を汲む事藝道の規模といふべし。播磨の時代淨るりけいこ本堅く祕して他見をゆるさすたまここれを得て京にて梓行すさいへども小冊にして細字に書し一段くのさし繪をくはへ幼童の戯びとせり。故に其道を學ぶ人は寫本を以てけいこせしといへり。門人多き中にも井上市郎太夫初名石屋三右衛門と云、播磨死後尾崎權左衛門と共に芝居なつこむ。清水理兵衛等最名人なり。理兵衛は

大阪安居の天神の南に住居せる徳屋といへる柏戸成しが、此の道に熱心深く、終に上達して芝居を興行す。延寶天和の頃也。此の時上東門院さいふ上るりを語り其門人竹本筑後様いまだ五郎兵衛たりし時脇を勤め始めて床に於てかたりし播磨死後にも今播磨と賞譽せられしが、後に薙髪して伴西と號せり。市郎太夫も段々世に行れて、自ら櫓を上げて興行し、新淨瑠璃もありしが、其の後何方へ趣きしや終りを知らずと。

柳亭主人云。昔の淨るりは都で六段なり、十二段を裂しもの歟。京都にては井上はりまより五段につめたりさいふ。江戸にては寶永正徳のころまでも尙古風を失はず土佐棟和泉太夫等か淨るりみな六だんなりと云々。

義太夫節創發前後の京阪淨瑠璃と操り芝居

義太夫出づる迄の京阪の操り芝居 大阪に於ける大勢力伊藤出羽の

芝居

京の御内裏様と併せ敷へられたほどの出羽の芝居 文彌節と山本飛騨等の木偶

出羽の芝居の金平節

木偶の伎巧と趣向で持った景氣 當時の木偶操りの伎巧

糸あやつり手妻つかり

水からくり 南京あやつり 淨瑠璃三分木偶七分の人氣

淨瑠璃本位の義太夫の興行方針「三五の十八」で算盤あはぬ不成績

義太夫の失望 出雲の人氣取り改良案

京都を掩有した宇治加賀山本土佐の人氣 歎ばれざりし義太夫節 加賀と土佐と

を喪ふた後の京都 遂に義太夫節の附庸の地となつて滅ぶ

義太夫出づるまでの
京阪兩地の操り芝居

播磨の死が義太夫節の興隆
に伴じたかは疑問である

竹本義太夫が道頓堀の芝居に名乗りを上げ、其の創案に成つた義太夫節の宣傳を始めたのは貞享二年二月朔日であるが、其の歳五月井上播磨は京都に死んだ。史には義太夫の旗揚を貞享二年とするには疑ありとし、八行本『藍染川』の正本に「貞享元年七月中旬……竹本義太夫の奥書あり、宇治加賀との對抗戦に上場した賢女手習並新磨の繪入本にも、「貞享二年正月」の奥書あるより見れば、大西芝居を借り受け、竹本義太夫と改名して打つて出たのは、貞享元年七月以前の事にして、加賀椽の出陣は同年の暮なるべしと云はれて居る。洵に有力なる考證なりと雖、爰には姑く從來一般の傳説に従ひ貞享二年二月朔日の旗揚とした。

義太夫出づるまでの京阪兩地の操り芝居は、京都に宇治加賀、山本土佐、虎屋上總喜太夫の芝居あり、大阪に井上播磨、虎屋源太夫大阪源太夫、伊藤出羽椽、竹田近江の芝居あり、中にも山本土佐、伊藤出羽の芝居は木偶じんぎやう操作の優れたるを以て評判を取り、宇治加賀、井上播磨の芝居は太夫の淨瑠璃を誇りとして人氣を集め、よわくたよくの加賀一流の巧緻なる曲節が、京都人の趣味好尚と協合して愈其の盛を致せば、うれい修羅を第一とした播磨獨特の譜節は、大阪人の嗜好氣風と適合して嘖々たる好評を擅にして居たのでありし。

播磨の死は義太夫節の勃興に伴したるなるべし。されど、播磨が存命して居たとしても、義太夫節の興隆に何程の支障的影響を與へたかと云ふ事は疑問である。義太夫が竹本座に旗幟を樹てた翌年、宇治加賀京都より來り、此の新興の強敵に對し、一舉之を屠らんとして、決戰的對抗競伎を試みたりしと雖、僅に二た興行にて打切り、散々の體にて遁げ還つたほどの不成績を示して居る點から考へて見ても、播磨對義太夫の勢力競争戰の結果も大概想定することが出来るのである。

大阪に於ける大勢力
伊藤出羽椽の芝居

當時大阪に於ける操り芝居の大勢力は伊藤出羽椽なりし。播磨は大阪に在る事前
後二十年、「加賀は上手、播磨は名人」と云はれたほどの伎倆を以てして、尙且出羽の芝
居には壓され勝にして、出羽の芝居は京都のお内裏さまと並せ數へられ、難波名物の尤
として評判遠近に傳はり居たりしと雖、播磨の名はさまざまに揚つて居なかつたのであ
る。されば播磨にして尙長く存命して居たとしても、竹本座の敵手は、彼に非ずして寧
ろ伊藤出羽椽であつたらうと想察せらる。

伊藤出羽椽の系統は詳らかでない。西京の人にして虎屋源太夫の門人となり、一流
を工夫して大阪に下り、道頓堀に芝居を建て、座元となり、石井飛驒椽と共に檣幕をあ
げて興行す。門弟には岡本文彌の如き美音の太夫もあり、山本河内椽山本飛驒椽等の
如き人形の名手もあり、義太夫の如きも、理太夫の當時には此の芝居にも出勤し、其他名
ある太夫も此の芝居を勤めたることあり、濱側に在りし故俗に濱芝居と云ひ、大阪中に
持て囃されたものだと傳へられて居るのであるが、源太夫の門人と云ふ説は確かなら
ず。岡本文彌を以て彼の直系なりとするの説も亦首肯し難し。詳しくは、後に豊後系流派
を論ずるに方ッて之を説 雖然、出羽椽なる名代は、大阪に於ける操り常芝居中の最古のものにして、出羽の芝
居と云へば其名都鄙に響きわたり、『竹豊故事』にも、

京の御内裏様と併せ數へら
れたほどの出羽の芝居

古代に流布せし江戸の薩摩、土佐、外記半太夫等の流、京都の山本、宇治、都一中杯の
節、大阪には、伊藤、出羽、椽座の文彌、節は、諸國の浦々、隅々迄も、葉流、遠國邊土の西國、
順禮の衆中、京都にては、御内裏様、大阪へ來ては、出羽椽の芝居を見て、歸らねば、西

文彌節と山本飛驒等の木偶

國したる、甲斐もなく、死ては閻魔大王の前にて云譯の無様に有難がつて持賞しける云々。

「大阪表には前々虎屋源太夫、表具又四郎道具屋吉左衛門等の太夫達語られしか共、指て繁昌と云程の事もなかりしに、元祿年中の比、京都山本土佐椽の門人岡本文彌、伊藤出羽椽芝居にて一流を語り弘められ、大阪中文彌節とて持流しぬ。殊に山本飛驒椽手妻人形の所作事、繰杯取雜へ見せられし故、其時代の見物衆大に悦び繁昌し、大阪中は云に及ばず、遠國迄も名譽を顯はされたり。此人聲柄と云甲乙共に揃ひ上手成しか共、時移り年變りて一向當時は用ひず、惜き藝を埋もれ仕廻に終られたり云々。

と云へるが如く、出羽の芝居の文彌節と山本飛驒椽等の人形からくりは、非常なる評判を取つて持囃されて居たのでありし。

出羽椽がどれ程の語り人であり、名譽の太夫であつたかと云ふに、一向に傳つて居ない。山本河内椽、山本飛驒椽即ち山本彌三郎也を以て彼の門弟なりと傳ふるものもあれど、孰れも太夫ではなく人形遣である。恐らく彼は、恰も京都の都萬太夫の如く、單に淨瑠璃の名代たるに止まり、實際の語り人ではなかりしなるべし。されば出羽椽の淨瑠璃外題として『操年鑑』などに載せたる所のものも、出羽の芝居の正本として書かれたものには相違なかるべく、又其の芝居で語つたものには相違なかるべしと雖、出羽椽自身之を語つたと云ふには非ずして、彼が芝居に出勤した、岡本文彌其他の太夫等の語つたものでな

出羽椽は實際の語り人には非ざりしなるべし

出羽の芝居で語つた
金平節

あらうと想像されるのである。金平節流行の當時は熾んに之を上場し、殆ど夫れにて持ち切りの有様なりし。『繪入淨瑠璃史』には、彼の名代ある金平節正本なりとして左の如くに擧げられて居る。

天狗羽討	<small>天下一出羽 椽藤原信勝</small>	萬治三年三月
綱金時最後	<small>出羽 正本</small>	寛文閏八月
四天王最後	<small>天下一出羽 椽藤原信勝</small>	同年九月
頼光蜘蛛切	同	同二年正月
<small>あさ ひな</small> 島渡り	同	同年六月
金時洛陽入	同	同四年正月

出羽椽の芝居が京のお内裏様と並び數へられ、一度は見物して冥途の語り草にせよとまで云はるゝほどの評判を取つて居たと云ふには、岡本文彌の艶にやさしき淨瑠璃が呼物となり、人氣を集めて居たのに由るもの多かりしことは勿論なりと雖、一方、山本河内・山本飛驒の妙手あり、木偶操りの伎巧のすぐれて人目を驚かすものありしに職由するものなることをも想はねばならぬのである。

按ずるに當時の操り芝居の人氣の七分通りは、木偶操りの伎巧と巧妙なる趣向とによつて、牽き附けられた景氣にして、各座の興行振りも、淨瑠璃太夫の聲によつて客を呼ぶと云ふことの考へよりは、人形の伎巧、舞臺面の工夫により評判を取ると云ふことの考案が先となつて居たのでありし。されば淨瑠璃正本の作意も、亦従て人形本位なり

木偶の伎巧と趣向と
で持つた當時の操り
芝居の人氣

巧當時の木偶操りの伎

し。糸あやつりに恰好な『しのだ妻』山本角太が出れば、水からくりと、糸操りを極端まで應用した『和氣清磨』加賀椽『雁金文七』山本飛驒の如きも出て、唯譯もなく時人をして歡呼喝采させたのであつた。

『江南氣色の森』錦文流著、實永二年板行には、

「からくり細工はおやま五郎兵衛、山本彌三五郎、是を傳へて無雙の名人となす。一筋の糸をもつて大山をうごかせ、小刀一本を以て形ある物を作りて是をはたらかしむ。別而水學術を得、水中に入て水中より出るに衣服をぬらさず、纒なるはさみ箱にふねを仕込、川水に浮て用を達す。此儀ゑいふんに達し、禁庭において細工の術をゑいらんに備、則細工人に仰付られ、山本飛驒椽清賢と受領し、翌年兩龍の細工をさしあげ、河内椽に重任せらる、せんまいどけいからくりは竹田近江椽、鳥を作つて空中をとばす、はさみ箱より乗物を出し、人を乗せて人形にかゝす事をなす、よろづ今比にくらべて昔をおもへば、あま茶な事なり。」と云つて居る。

當時の木偶には糸あやつりもあつた。手妻づかひもあつた。水からくりもあれば、せんまいからくりもあり、京都の加賀の座には南京あやつりもあり、其の座々により各特色あり、孰れも工夫を凝らして其の伎を競ふて居たのでありし。とりわけせんまいからくり、水からくりには奇抜な趣向を凝らし、時人を驚かしたるものにして、せんまいからくりでは、鳥に仕かけて空を飛ばし、はさみ箱に仕かけて人形を出し、乗物を出し、人形自身が之をかいて動き出すと云ふやうな眼先きの變つた工夫を凝らせば、水からくり、南京操り

糸あやつり、手妻づかひ、水からくり、せんまいからくり、南京操り

りでは眞水ほんみづを使ふて瀧たきとなし、川かわとなし、海うみとなし、龍りゆうも出せば鯉こいも泳がせ、人形遣の太夫は水より出でて水に入ると云ふ、水藝的放れ業を示せて喝采を取ると云ふやうな趣向を案出するなど、人氣の吸集策に付いては、各座ともなか／＼と通りならぬ苦心を重ねたものであつた。

手妻は即ち手品にして、手づかひの事なるべきも、加賀椽座の南京ななあやつりあやと云ふのは由來する所詳ならず。『竹豊故事』には、「手妻人形は山本彌三五郎飛驒椽に始まる、南京なな糸操いとは寛文延寶の比より遣ひ始めし由、京都山本角太夫芝居に專げら遣ひし也」と云つて居る。按ふに其實質は糸いとあやつりあやにして、南京ななと云へるは「珍らしき意」又は「小さき義」なるべき歟

『繪入淨瑠璃史』には、

南京操と云ひ、手妻人形といふも、共に其の由來は詳でない。按ふに竹田芝居の水機巧が範を示し、種々の發達をなしたるものなるべし。寛文二年竹田出雲椽清房が道頓堀に芝居を建て、種々珍奇なる機巧かいく人形の趣向を運らし、大いに喝采を博して居るのであるが、是等の機關しかげものの動力は道頓堀の河水を利用したるより、世人之を稱して竹田水機巧みづかいくと云つて居る。山本角太夫が大阪に在りし間、何れの芝居に在りしかは詳でない、されど彼を以て出羽椽の門人なりとする人もあるほどなれば、出羽の芝居に在りし事は疑ひなく、手妻人形の山本飛驒椽も亦出羽の芝居の人なるより推定すれば、操芝居しかげものに機關しかげものを應用したるは、伊藤出羽椽が本元なるべし。彼の手妻太夫の山本彌三五郎なる者も、其の以前或は竹田芝居に勤めて居たものならんか。但し南京操を以て一概に竹田流とはいふべからざるも、此等流行の源は

道頓堀で、之を用ひし角太夫と手妻人形の飛驒椽とは、同じ山本姓を名乗るを見れば多少の關係ある事疑ひなし云々。角太夫の南京操とは恐らく在來の操を基礎とし、之に手妻式の機巧かいくもを仕掛け、又絲操は殊に神佛の出現、或は鳥獸龍蛇等人間以外のものに應用せられたるが如し。

と考證してある。

繪入淨瑠璃史は實に有益多趣味なる著述にして、斯道の研究者に取りては、こよなき參考資料である。原板の儘にあらすさも、せめて活字に付してなりき正本の全文をも拾録し、斯道研究家のために提供せられたならば、より一層裨益多き完璧のものたりしならんと思はる。同書には人形操りの伎巧の状態を徴すべき幾多の挿畫がある、就きて見るべし。

されど角太夫の芝居にあれ、加賀椽の芝居にあれ、出羽の芝居にあれ、竹田の芝居にあれ、彼は手妻此れは絲操り、彼はからくり、此れはせんまいからくり、と孰れかの一方に偏し、一方と限り、劃然區別されて居たと云ふには非ざること勿論である。其の座の座附の人形遣ひの長所もあれば短所もあり、手妻に長じたるもあれば、絲操りに優れたるもあり、水からくりを得意とするもあれば、せんまいからくりを誇りとするもあり、各座夫々特色あり、異彩あり、夫れが又一種の呼物となり、人氣をそふる材料ともなりて、いよ／＼流行を熾ならしめて居たのであらうと想察されるのである。

淨瑠璃三分人形七分
の人氣
淨瑠璃本位の義太夫
興行の方針

按ずるに義太夫節以前の操り芝居の繁昌は、淨瑠璃三分人形七分ぐらゐの人氣なりし。義太夫出でて竹本座を創立し、古今の美調と近松の正本とを以て義太夫節の宣傳を始め見たりしと雖、根が淨瑠璃七分人形三分の興行方針なれば、さしたる大入りも

「三五の十八」で算盤
あはぬ不成績

三五の十八にてあはぬそろばん、胸さんあうてあはぬは世間なみ、次のかはりの請合一盃、庄兵衛のばくさま云々(操年代記)

義太夫の失望

出雲の人氣取り改良案

取れず、出羽の芝居は依然として盛況を保ち、竹田のからくり芝居は相變らずの人氣にして、當時道頓堀には出羽椽座の外竹田近江の芝居ありし。『操年代記』西澤一に「其頃はかぶき芝居あたり多く、殊に出羽にはさまざまのからくりなどし、見物諸方にわかれば、さのみ大入大あたりといふ事なし」。「三五の十八にてあはぬそろばん」と評したやうな、洵につまらない興行成績をつづけて居たのでありし。

貞享二年の創發以來元祿の十六年に至る、十九箇年間の竹本座の興行の不成績は、座主兼頭取たりし義太夫をして殆ど失望の嘆聲を漏さしめたるものゝ如く、元祿十六年五月『曾根崎心中』近松世話淨瑠璃の初めを出し、初めて當りらしき大當を取り、積年の負債も銷却し、一息吐くことも出来たりしより、之を機會に退隱し、興行師生活の煩累と苦患より免れんと決心したのであつた。竹田出雲の勸奨すゝめもありやうやくに思ひ止まり、座元を出雲に譲りて太夫専門となり、主ら藝道の上のみ盡すこととなり、出雲代りて興行方針を一變し、在來の如き淨瑠璃本位の興行を續けて居た所で、到底立ちゆくべきものにあらずとし、俄かに人形の衣裳舞臺の粧飾、道具立に至るまで改良し、寛永二年三月の『用明天皇職人鑑』の興行には、出語り出遣ひを始め、竹田の水機巧からくりを應用する等、眼先を變へて趣向を凝らしたるより、忽ち評判となつて大入を取り、爾來専ら工夫を舞臺面の變化、木偶の趣向の上に凝らし、芝居も繁昌すれば、義太夫節も盛隆となり、赫々たる後の最盛時代を現出するに至つたのでありし。由是觀るも、如何に當時の操り芝居の景氣が、著しく木偶本位のものであつたかゞ、想察されるのである。

京都を掩有した宇治
加賀、山本土佐の人
氣

京都人に歎げれざりし義太
夫節

加賀と土佐とを喪ふ
た後の京都

京都の淨瑠璃界は、殆ど宇治加賀、山本土佐の人氣の掩有するところなりし。播磨の曲風が左までに京都人に歎げれざりしが如く、義太夫の曲風も亦餘りに京都の人氣には投せざりし。竹本座の一連も幾回か出興行として京都に入り、漸次に義太夫節の趣味を都人士の間に鼓吹したりしと雖、土佐、加賀の兩人存命中の京都は、依然としてよはくたよくの加賀節、土佐節の崇拜者を以て充たされて居たのでありし。

雖然、さしにも流行を極めて居た加賀節も、加賀椽が死するや其の勢力は俄然として失墜した。加賀椽は正徳元年正月二十日に死んだ。竹本義太夫が道頓堀に旗揚げを爲してより二十六年目である。加賀の門下には富松薩摩あり、野田若狭あり、宇治相模あり、立花河内ありしと雖、孰れも似たり寄つたりの伎倆にして、富松薩摩は其の師の芝居を繼いで興行し、一説には加賀椽の子宮内、父の名を嗣ぎ二代目嘉太夫となり、薩摩若狭相模河内等の四天王之を助け芝居を興行せるが如くにも云へり野田若狭は、北野七本松邊の芝居に出て興行して居たのであるが、加賀椽在時の人氣の半分だもなく、次第に凋落して遂に滅んだのである。

土佐節の末路も亦殆ど其の趣を同ふして居る。山本土佐の歿時は詳ならざれど、殆ど加賀椽と前後して逝けるが如し。多分は加賀椽より前に歿したりと思はる。高弟には松本治太夫あり、治太夫眞享、元祿の頃行はれたり、別に芝居を立て興行せりと云はる。都太夫一中あり、治太夫は正徳の頃尙ほ存命したりしや否明ならざれど、都太夫一中は享保の比まで存命し、元祿、寶永、正徳の比は、一中節の盛時なりしと云はれて居る。土佐の芝居の繼續者は何人なりしか判明せず、又、一中の流れから出た中が出動した芝居は何の座であつたか判明しない。豊後節は江戸に入つて隆々の名を成したのでありし。されば京都にて死んだ土佐節

は江戸に活き、更に其の流れを大にして榮ねたものとても云ふべきなるべし矣。

宇治加賀、山本土佐の兩巨頭を失ふた京都の淨瑠璃界は、俄かに寂寞を感ぜざるを得なかつたのでありし。江戸、大阪と相對し、三權對立の狀勢を形くつて居た京都も、幾くならずして斯界の勢力圏域より引退するの外なき有様となつた。三權對立の狀勢は變じて江戸、大阪の二大勢力の對立となりし。曾ては淨瑠璃發祥の地であり、次には京阪淨瑠璃宣傳の根據地であり、角太夫節と云ひ、加賀節と云ひ、京都風の優婉濃調の特色を以て一旗幟を樹てゝ居た京都も、やがて義太夫節の附庸地として、出稼興行地として、はかなき末路を止むることとなつたのでありし矣。

遂に義太夫節の附庸
の地となつて滅ぶ

嘉太夫の先師伊勢島宮内淨るりも江戸の大さつま杯と同前に五段續の外題を聞及ばず、宮内門人佐太夫後に節齋と云し人、京都北野にて芝居を興行し、久々勤められしか共、數年の間、加賀椽と井上氏との淨るりを語られし也。又加賀椽弟子野田若狭、北野七本松、京屋伊右衛門定芝居の太夫にて久々勤められしか共、新作の淨るり多からず、此外に富松さつま、宇治さびみ立花河内等右に同じ。就中富松氏は四條宇治嘉太夫定芝居にて宇治宮内等と同座にて永々勤められし中は、大坂竹本豊竹兩座の新淨るり共を替るゝ語られし故自分の新作すくなし、今昔操淨瑠璃外題年鑑

第八章 近松門左衛門

近松の傳記

文筆趣味に富んだ近松の一族 彼が系統生地に就いての傳説

斯界の本傳

せられた長州萩説―唐津近松寺縁故説―されど此の説は孰れも年代若し古きは京都説―近江三井の近松寺説である 京都説―近江三井近松寺説ははるかに萩説―唐津近松寺説に優る 京都説の祖述者たる『竹豊故事』の著者―斯界の通人―一樂山人 京都説の考證資料として『近松傑作全集』に引用された『寶藏』の近松一家の俳句『聲曲類纂』

『竹豊故事』の「音曲道智論」の一節

近松が奉仕した公家 彼が初歩時代の作者生活

放浪生活當時の作物

義太夫

と相識りたる初め 兩者の默契

近松の健康と著作 墳墓の地

谷町妙法寺の廻向塔や

うの空墓 久々 智廣濟寺の墓

彼が辭世と自撰の法號 水谷不倒氏の唐津近松寺の

遺跡に付いての考證

義太夫節淨瑠璃正本の作者としての近松門左衛門の功は、流祖としての竹本義太夫の功業と匹儔する。もとく正本あつての太夫であり、三絃であり、人形でありとすれば、門左衛門は此の三者を舞臺に踊らせた原動力としての關係の地位に居るのである。

義太夫、權右衛門竹澤、八郎兵衛辰松の三人は義太夫節開發の三祖と稱せらる。されど

義太夫の美調も、八郎兵衛の絶伎も、權右衛門の妙曲も、彼れ近松門左衛門の、至文妙

趣の淨瑠璃正本あつての上の事である。近松以後には出雲田千四長谷和吉田松松洛三好小出雲等が出た。東、豊竹座の座附作者としては、海音あり、海音の後には文流錦一風西千柳田中宗輔並木蛙文田安丈輔並木等が出た。されど淨瑠璃正本の構想、筆致の軌範を垂れたのは彼れ近松門左衛門にして、門左衛門は實に義太夫節淨瑠璃なる人生詩文の師表である。されば義太夫節淨瑠璃の沿革興衰の跡を究めんとするには、先づ其の前提として、彼れ門左衛門の傳記、彼の想、彼の文、彼が觀た人生、彼が捕へた作意の急所を研究して懸ることの必要を感ずるのである。

文筆趣味に富んだ近松の一族

岡本一抱、通稱は爲竹、一得齋と號す、本性は梶森、出でて國本家を嗣げり、京都に居り味岡三伯に從ひて『素雜』を講ず初め京都の醫家にして*

近松の系統生地に就いては傳説區々である

*『素雜經』を講ずるもの饗庭東庵を嚆矢とし、門人味岡三伯に至り業方に盛にして學徒群集せり、一抱は實に門下の高足なりき、唯細行を修めずして、屢三伯の意を失し遂に師弟の義を絶たる、因て獨立して一家を張り、諺解を作りまら初學を訓誨

近松門左衛門、姓は梶森、名は信盛、通稱平馬、平安堂、菓林子、不移山人などの號あり。兄は京都相國寺の宗長老にして、弟は岡本一抱と稱する儒醫である。通俗醫書の著述多し。四十一種二百二十餘卷外に演義的小説北條時頼記十卷の著作あり、理義精數行文明暢にして筆力健達せり。寛文十一年門左衛門十九歳山岡元隣の著せる俳書『寶藏』の追加に載せたる杉森一家の俳句を見るに、彼の一族孰れも文筆の趣味に富めることを想見し得べし。慶安二年の出生なるが、其の父母、祖先、生地に、つきては傳説區々である。「長州萩の人にして、毛利家の士、杉森某の兒なり」と傳ふるものもある。「周防吉敷郡山口村の人にして、父を松村八兵衛といひ、彼が小字を藤四郎といへり」と傳ふるものもある。「長門大津郡深川村に生る、父は梶森主殿助といひ、鎌倉八奉行の一人なる三善康連の後にして、康連、下野國鹽原郡太田莊を領して太田氏を稱し、其の五世信濃守時直、周防國玖珂郡楢杜郷蓮花山に居りて楢杜と稱し、更に五世にして房康に至り、初め大内氏に屬し、大内氏滅びて毛利氏に仕へ、移て長門深川村に住せり、是れ門左

するは自家の任となせり、其書大に行はる。著す所運氣論諺解(七卷)原病式首書(四卷)醫學三藏辨解(六卷)醫學講談發端辨(二卷)子四經緒詳解七卷(衆方規矩指南(七卷)修治藥要秘訣圖緯(七卷)病因指南(五卷)妙藥集大全薛氏醫察和解(五卷)和語本草綱目(二十二卷)脈法指南(六卷)醫療指南(五卷)和語醫療指南(五卷)本朝古今醫統(十卷)萬病治法指南大全(八卷)方意辨疑(二卷)藥性記辨解(三卷)醫學切要指南(三卷)同續(三卷)正傳政問諺解(七卷)大成論和語抄(七卷)古今養生論和解*

斯界の本傳とせられた長州萩説―唐津近松寺説

阿是要釋(五卷)經穴密語集(三卷)鍼灸拔萃大成(七卷)萬病回春指南(五卷)醫學至要抄(四卷)格致論諺解大成(七卷)素

されど萩説―唐津近松寺説は年代孰れも若し

*問諺解(十八卷)灸諺口譯指南(五卷)針法口譯指南(一卷)年中運氣指南

衛門が五世の祖なり」と傳ふるものもある。其の他、越前の人なりと云ひ、三河の人なりと稱し、近江の人なりと傳ふるものもあれば、出雲の人にして、大原郡加茂村には今尚近松の稱を里落に冠せしむる所ありと唱道するものもあり、所説紛々、眞否俄に辨じ難し。世説の多くは長州萩の産となし、年少肥前唐津の近松禪寺に入つて僧となり、後ち京都に上ばりて弟、一抱の家に寓し、遠俗して一條家に仕へたりとの傳説に一致して居るのであるが、此の説とても信じ難し。恐らくは京都の産にして、何等かの所縁にて近江三井の近松寺に遊びたることあり、其れに因みて、近松とも名乗るに至りたるものなるべし。

近松門左衛門の生地においての異説中最も有力なるは、長州萩説と京都説との二つである。其の他は顧みるほどの價值もない。長州萩説は、從來斯界に於ける本傳として一般に尊信せられたるところのものにして、『聲曲類纂』の如きも亦之を以て本傳とし、他は異説として單に參考に供する位の程度に止めて居るのであるが、茲に考證上特に注意を要するのは、不思議にも萩説―唐津の近松寺に在りたりとの説は、多くは近松歿後、餘程後れて出たる著作に散見するところにして、馬琴の『篋笠雨談』には、「越前の人一説に三少して肥前唐津近松寺に遊學し、後洛に住す」と記し、太田南畝が梅園主人野里氏の爲めに撰みたる近松の碑文這は碑石に刻まるゝに至らずしには、「長門萩人父某、母某氏、以慶安四年辛卯生、中翁幼遊唐津近松寺、入京事一縉紳家爲雜掌」云々と記し、『假名世説』文政七年之著にも、

(一卷)北條時頼記(十卷)
百味主能諺解(五卷)局方
發揮諺解(五卷)藏册經絡
詳解(五卷)雷真君活人方
(二卷)十四經和語抄等あり。

『假名世説』は太田南畝の未定稿にして、其の門人文寶、山崎美成と謀り若干條を補ふて完稿上梓せる者也、美成の序文に云、翁老罷疎懶、未能脱稿、頃者書實請上之木、縱與不已、其門人文寶與校寫、曰世説猶有補、況此未定册子、豈得不補乎、來即我謀、予與翁交情特厚、豈可以無陋以辭乎、因抄所臆記者若干條與之云々。

年代古き著作は京都説——近江三井の近松寺説である

第八章 近松門左衛門

一七〇

先のとし浪花にありて、銅吹屋熊野屋にてみし事ありしが、これと同文なりしや。近頃浪花の梅園主人のために、近松の碑文を書きし事ありしが、近松は長門萩の生れにて、兄は名譽の醫師なり、門左衛門近松寺と云ふに遊學して、其の寺の僧罪ありて寺門の側にて刑せられしをみて、自らいましめの爲に近松門左衛門と稱せしとぞ。ある時兄の醫師近松がよしなき淨瑠璃を作る事をいましめし時、そこには和語の藥名の書などを作りて、一字一畫の誤りあれば人の性命にかゝる大事の事なり、我らが作る所は狂言綺語にして人の害にならずといひしかば、あにも其の理に服し、さあらば中直りのため伴ひて大和めぐりせんとて、つれだちためぐり、世に傳ふる寺子供の手本の、龍田詣といふものを書きしと盧橘菴の物語なり。中操年代記に十一月二十二日とするものあやまれり、僅に残る所に如此



と記せるも、『音曲道智論』明和の頃の著作に係る『戲財録』並木五瓶の著『今昔操年代記』近松と時代を同ふし、豊竹座の軍師たり兼、れて作者たりし西澤一風の著述に係る。等年代古き著作ものには、其の生地、唐津遊學等の事歴に就いて言及する所なし。偶々此れあるものは、京都説——近江三井の近松寺説にして、『竹豊故事』には、「元來は京都の産にて、去る堂上の御家に仕へ、本性は杉森氏にして由緒正しき人成しが、故有て浪人と成る」云々と記し、『音曲道智論』には、「天和の頃近松門左衛門といひし人出で新作を書り、元來は京都の産にて、姓は杉本氏なり。始めは堂上方に仕官し

京都説―近江三井近
松寺説ははるかに萩
説―唐津近松寺説に
優る

京都説の最初の祖述者たる
『竹豊故事』の著者、斯界の
通人一樂山人

て、其の後、近江の近松寺に遊ぶゆゑ、此の苗字を呼けり」と記して居る。『諸事聞書往來』
瑠璃譜一名浄瑠璃譜も亦近江近松寺説である。「名人の作者近松門左衛門出生は近江國高觀音近松
寺御坊にて出家をきらひ京都にくらし居られしを」云々と記せり。「諸事聞書往來」の選者は
不詳。太田蜀山人大阪
に干役せし砌、其の寫本一部を獲て歸り、命題の雅ならざるを惜みて、あらためて『浄瑠璃譜』と題し、世に紹介し
たものである。竹本豊竹兩座の開發より没落退轉の時に至るまで、即ち貞享に起りて明和に至る凡八十年
間の兩座の興行事項の重なる廉々を詳説し、其の盛衰の跡を明にしたもので、蜀山人の序に云、「享和とあ
らたまりぬるさし、蘆がちる難波にありて此の書ふたまきを得たり、竹本豊竹ふたつの園にかたりものせし、
戯れ文の名を書つられて、笠翁傳奇の種より、僱師舞木の態にいたるまで、見あつめ聞あつめて諸事聞書往來
さしるせり、今その名の雅ならざるを惜みてあらためて竹本豊竹浄瑠璃譜と題す、世に浄瑠璃年代記などい
ふものあれど、擇びて情からず語りて詳ならざりけらし。」
と、斯道に關する參考資料中の最も優れたるものである。

考證の資料としては、其の書かれたる年代よりすれば、京都説―近江三井の近松寺
説の記録は、はるかに萩説―唐津近松寺説の記録類に優つて居る。殊に京都説の最
初の祖述者たる『道智論』は、蓋し『竹豊故事』に『竹豊故事』の著者浪華山人一樂の經歷より推せ
ば、一層此の説の價值多く有力なるが認めらるゝのである。『竹豊故事』は寶曆六年の著
にして、著者一樂は何人なるか稽へ難し。此の人別に『今昔操浄瑠璃』の著ありされど著者自身が書いた
序文に、

「爰繁榮の大湊、深き恵や道廣き道頓堀の片邊に、住居する老人有、年壯き砌りより、竹
本豊竹の浄瑠璃を好で、語る事は不得手なれど、聞事は好者也、幾年か東西の淨るり操
の替りを見放したる事もなし、住家より程近ければ、芝居の木戸口へ成共毎日通ひ、外
題看板にても見て歸らねば、氣分勝れず、餘り此の道を好る故、知れる友達異名して、筑
後越前の頭字を取、筑越翁と稱したる」云々

と云へるより見れば、所謂斯界の通人にして、別著『今昔操淨瑠璃外題年鑑』の序文に「寶曆七年八十翁一樂」とあるより推せば延寶六年の生れに當り、東西兩座の對立となりし元祿十五年は、彼歳二十五、近松門左衛門が歿した享保の九年は、彼歳四十七、而も寶曆七年の比尙ほ健在し、竹豊兩座の勃興時代より、盛隆時代、漸衰時代に涉り、親しく實況を觀察、睹聞し、其の著を成したるほどなれば、何等かの機會に、近松の生國の事なども耳にしたることもありしなるべく、長州萩説、唐津遊學説にして事實なりとせば、此の老人の耳にせざる筈もなかるべしと思料せらるゝのである。

『近松傑作全集』の編者水谷不倒氏は、山岡元隣の著せる俳書『寶藏』寛文七年板行の追加に載せたる、杉森一家の俳句を引いて、京都説考證資料の一として數へたり、頗る傾聽に値する。『寶藏』の序文によれば、著者山岡元隣は、豫て萬句興行を思ひ立ち、知己友人等に徴して、其の句を募つて居たのであるが、其の數未だ充たざるに方ツて病に罹り、志を成す能はざるを察し、既集の句のみを板行し、『寶藏』の卷尾に附して之を頌つたのである。元隣は翌十二年に死んだ。左に其の所説の要旨を摘録して參考に供すべし。詳しくは博文館發行『近松傑作全集』卷の一、序文を参照すべし。

長州萩説には、原來確かなる根柢なし。俳書『寶藏』の追加に載せたる杉森一家の俳句は、京都説を確むべき資料の一ツである。今右句集中より、順次に杉森一族の句を抜き來れば、

- | | | |
|-----------------|----------|----|
| かへるにも時正たがへぬ雁字かな | 杉森 | 信親 |
| しら雲やはななき山の耻かくし | 同 | 信盛 |
| 花をさかせ又ちらするは異風かな | 同 | 信義 |
| 花にいやな風は空ふげ月の雲 | 杉森五郎助十一歳 | 信義 |
| 糸ざくらながめこまじにかは哉 | 同 | 信義 |

京都説の參考資料として『近松傑作全集』に引用された『寶藏』の近松一家の俳句

あふひかつらかくるゝ宮居はかもし哉

同 信義

稻の露はまづそのまくのほたる哉

同 信義

あした見ば月もや不足けふの月

同 信義

さかりいかにちるはもてなす雪の花

同 喜里

信親、信盛、信義、信秀、喜里の五人は孰れも杉森氏の一族にして、信盛の門左衛門とは父子兄弟の關係ありし人々なるべし。杉森氏と元隣とは同門、季吟門の友なりしか、然らざれば元隣に就て學びしものなることは想像するに難からず。信親は父もしくは兄なるべく信義は弟なるべし。殊に十一歳の五郎助は弟なることいふまでもなし。喜里といふは女らしく、恐らくは妹なるべし。當時門左衛門の信盛は十九歳、其の比尙ほ京都にあり、一家團樂の中に俳句などを口吟くちまんで、樂しき青年時代を過して居たものだと思すれば、唐津遊學の事受取り難し。殊に父子兄弟五人までも俳句を嗜むなど、都育ちの優良に、かてく加へて文學の嗜ありしことも思ひやられ、長州萩邊りの草深く磯臭き所に成長せし人にあらざることを證すべし云々。

萩説——唐津近松寺説は左まで有力根柢あるものに非ざるを知るべし

彼此綜合し來れば、萩説——唐津近松寺説の、左まで有力根柢あるものにあらざるを知るべし。恐らくは近松と云ふ名乗りより牽及し、唐津となし、萩と結び付け、萩と唐津と程近ければ一應尤らしき傳説をも構成するに至りたるものなるべし。三河説、出雲説等に至つてはもとより取るに足らず、兎角偉人の傳記となれば、何やかやと因縁を附け、附會の説を作り、尤もらしき好事的傳説を産み出し來る事、有り勝ちの次第なれば、うかど此等の浮説に乗せられざるの用意が肝要である。されどかく異説もあり、傳説の區々たるだけ、それだけ近松の偉なるを觀るべし。

參照として、左に『聲曲類纂』『竹豊故事』『音曲道智論』の一節を抄録する。

『聲曲類纂』に云。

近松門左衛門信盛 長州萩の産にして同藩臣杉森某の男なり。卯花園漫録には少

して肥前唐津近松寺に遊學し、或近江國高觀音後京師に登り、或堂上方に仕へ奉り

て爵六位を賜ふと。錦小路頼庸朝臣の五五記に一條禪閣に仕るよしあり、又江戸柳島法性寺境

なり、記してあり、兼良公は文明中薨去ありて近松より二百餘年の昔元祿の頃仕官を退て浪人

し、近松門左衛門と名乗り、歌舞伎芝居都萬太夫萬太夫が芝居にて藤壺の後の怨靈藤の

者大全に見ゆ、古今役又宇治加賀椽井上播磨椽等が爲に淨瑠璃を作る。世繼會我は加賀

行はる。其の後元祿三年庚午正月京都より浪花へ下り、竹本筑後椽が爲に淨瑠璃

數多著述し、其の名を世上にあらはせぬ。貞享二寅年筑後椽義太夫たりし時、これが爲に作

始さす。元祿十六末年あらはせるおはつ徳兵衛會元より和漢の書籍を學び、博識にして、

しかもよく時世の人情を察し、下情を穿ちて百餘番の淨瑠璃狂言を作れり。中

にも國姓爺合戰、雪女五枚羽子板、會我會稽山等最其の妙を得しとぞ。國性爺の上る

居にて正徳五年未十一月より。享保九年甲辰十一月二十一日七十二歳にて身まかり

ぬ。大阪八丁目寺町法妙寺に葬す。云々

門左衛門の兄は相國寺の宗長老、弟は岡本一抱子名爲竹字といへる名醫にして

京師に住す、妹は錦江といふ、俳僧に長じ大阪に住す、兄弟皆世に名高し。云々

『竹豊故事』に云。

淨瑠璃の作者と極まりたる人昔古はなし、俳諧師或ひは遊人杯の慰みに作れり、

中昔曆と云淨瑠璃は西鶴翁の作也とかや、是を産業うきわざとなせる人は近松門左衛門に始る。此の人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察し、世間の世話を能呑込て百餘番の淨瑠璃を作られり。其の文句玄妙不思議を綴る。元來は京都の産にて去る堂上の御家に仕へ、本姓は杉森氏にして由緒正敷人成しが、故有て浪人と成、元祿年中の始め歌舞伎芝居都萬太夫座の狂言作者と成、又宇治加賀椽の淨瑠璃をも作られたり。此の人世上作者の元祖也。

『音曲道智論』に云。

淨瑠璃作者と極しは昔は俳諧師遊人などの慰に作れり。中昔専ら作せしは西鶴翁なり。然ども文勢筆力うすく感情も少なかりけり、依てすたれり。爰に天和の頃近松門左衛門といふし人出て新作を書り。元來京都の産にて、姓は杉本氏なり。始めは堂上方に仕官して其の後近江のちか松寺に遊ぶゆへ、此の苗字を呼けり。作する始は都萬太夫といふ歌舞伎芝居の狂言などを書やり、又宇治流の淨瑠璃井上播磨にも綴りてかたらせ、夫より竹本座のさくを百餘番作りけり。義太夫が妙音にうつしければ聞人感心す。全體文柄拙からず、儒佛神に能渡り、字相たとへことを引にも耳にかゝらず、貴賤のわかち都鄙の國ふり、品位ともさこそあらめと滑稽をつくし、道行ふし事かけ事も伊勢源氏の係を文につけ、しかも俗間の流言おかしく、自然と貴人高位の御耳にふれさせ給ひしより、打續て數の趣向をうみいだせり。中にもおはつ徳兵衛が道行の文には智識も耳

近松が奉仕した公家

初歩時代の作者生活
—彼が放浪時代—

をそばたて、其の外佳言妙文あげて算へがたし。云々

近松門左衛門が奉仕したのは一條家なりとも云ひ、錦小路卿の『五五記』正親町家なりとも云はれ、『翁草』一説には阿野家の雜掌なりともあり、奉仕の年次とても亦詳でない。されど、とにかく某公家に仕へたと云ふ事だけは疑のない所にして、彼自身も「三槐九卿につかへて——寸爵なく」云々と記して居る。間もなく致仕して芝居道に投じ、道具方などを手傳ひ、傍ら淨瑠璃なども作して、往々此種天才の壯年時代に有勝な、放浪的生活に耽けりつゝありたるが如し。『野郎立役舞臺大鏡』貞享四年の評判記なりには、「萬太夫座の道具直しにも出たまひ、堺の夷子島で榮宅と組でつれづれの講釋も致されけるなり」とあり。榮宅とは何人なるか詳ならざれど、同氣相求むる一二の者等と組んで、學者然して、徒然草の講筵なども催して居たりしものと思はる。『翁草』には、

「正親町從一位は名におふ狂歌の達人にして、若かりし頃は戯に、宇治加太夫の爲めに、新作淨瑠璃をも作り與へられしことあり、近松は其の使をなし、加太夫方へ往返し、折々は其の作にも手傳ひ、夫れより次第に斯道に入り、加太夫が高弟義太夫をそゝのかし、新たに義太夫節の一流を語り出させ、己れ其の作者になりし。」

と云つて居るのであるが、一説として稽ふべし。

延寶五年彼歳二都萬太夫座の爲めに作り、古今の趣向藤壺の後の怨靈が藤の花なりとてより大蛇に變する趣向

人氣を博し、評判を取つた『藤壺の怨靈』の如きも、公家奉仕中の餘業なるか、將又致仕後の所作なるかは判明せずと雖、兎に角彼が公家奉仕の期間は左まで長きにあらざりしな

るべし。彼は井上播磨の爲めに『天鼓』を作り、宇治加賀の爲めには『徒然草』、『世繼會我』を始めとし、『當流小栗判官』、『弘徽殿嫉妬打』、『主馬判官盛久』、『團扇會我』、『加増會我』の如き幾多の作物を供給して居る。山本土佐の淨瑠璃、源氏烏帽子折、井上播磨の淨瑠璃、頼朝七騎落等亦近松の作なりと稱せらる。孰れも彼が作者生活の初歩時代、修業時代の試作的作物である。

門左衛門が義太夫と相識りたる初め

門左衛門が義太夫と相識りたるの初めは、義太夫が京都に上り、清水理太夫の名に於て宇治加賀椽當時嘉太夫の脇語りとなり、『西行物語』の二段目藤澤入道夜盜の場を語り、喝采を博し

兩者の默契

たる比の事にして、當時義太夫は二十三歳門左衛門は二十五歳、洋々たる前途を有する斯界の二大天才は、ゆくりなく邂逅默契し、因縁始めて結ばれたのであらうと想察される。義太夫が宮島より歸り、獨立の旗幟を竹本座に樹つるや、彼れ門左衛門は、『出世景清』を新作して其の前途を祝福し、次で矢繼早に、『佐々木大鑑』、『多田滿仲記』等を新作供給して、遂に彼に勢援して居るのである。

元祿三年彼は其の居を大阪に移して竹本座の專屬作者となつた。竹本座に上場せられた近松の新作淨瑠璃中、義太夫の爲めに演せられたるもの大約六十番、其の間三十年。彼の作と義太夫の伎、彼の文と義太夫の曲、兩々相倚り相俟つて斯道百年の基礎を固め、範を後人に垂れたのでありし。

彼の健康と著作

彼は義太夫に遅くるゝこと十年、享保九年十一月二十三日、七十二歳にして彼の第二の故郷たる大阪に没した。想ふに彼は非常の健康體なりしなるべし。竹本座の作者

として通じて四十年間、其の上場の正本は殆ど擧て彼一人の作になり、竹本座創立の當時古淨瑠璃を上場したることもあり、晩年に至つては松田和吉多きは一年六種にも及び、而も其の文竹田出雲等も出でて、一二の新作を上ほせたることもあれど、其の想、絶わて凝滞の痕を止めざるより見れば、彼が絶倫なる根氣のほども思ひやられるのである。七十歳の秋頃よりは起居例ならざりしものゝ如く、七十一歳なる享保八年には一の新作なく、翌年正月僅に『關八州繫馬』を著したるを最後とし、遽焉として逝いた。

彼の述作中最も時好に投じ大當りを取つた外題は、正徳五年彼れ歳六十三十一月に上場した『國性爺合戦』である。享保元、二とかけて三年越し十七箇月間打通し、古今の大當りを取り、京都の都萬太夫座享保元年上場大阪の歌舞伎各座享保二年上場江戸の三芝居同上共、孰れも『國性爺』で持ち切り、三都の觀客を驚喜せしむるほどの盛況を呈した、彼が當時の満足如何ばかりなりしか、想ひやるだに餘りあるのである。

近松の墳墓は、攝津河邊郡久々智村神崎の隣村の廣濟寺、大阪谷町法妙寺、肥前唐津近松寺の三箇所に在り。唐津近松寺の墳墓は、一旦久々智の廣濟寺に葬りたるを、遺言に由り翌享保十年に改葬したるものゝ如くに云はれて居るのであるが、信じ難し。谷町法妙寺のものは、廣濟寺模うしろ形の廻向塔やうの空墓にして、後の篤志家の建立に係るものなるべしと思料せらる。太田南畝の『假名世説』には、大阪谷町法妙寺に近松の墓あるも、墓碑の裏かけて僅に残る所辰年十一月二十一日とありたりと記し、馬琴の『簗笠雨談』には「享保九年十一月二十二日歿、墳墓しれず、攝州久々智の廣濟寺過去帳に法名あり」と記し

谷町法妙寺の廻向塔やうの空墓

近松墳墓の地

たり。現形いまの兩寺法妙廣濟の墳墓は百五十回忌に際し、自ら稱して門左衛門の曾孫と名乗れる、狂言堂近松門三郎春の家繼月の改修したものである。

廣濟寺には過去帳もあれば位牌もあり、寺記中には門左衛門及俗縁の人々の名を記したるものもあり、楳森氏の菩提所なりと信すべき憑據多しと雖、法妙寺には墓石の外資料たるべきものを存せず。唐津近松寺の墳墓に就きては水谷不倒氏の詳なる考證あり、傳説の妄謬を辯じて剩す所なきまでに細論されて居る。阿禰院穆矣日一具足居士なる法號は死に先ち、彼が病薨の中に自撰したものである。

左は『聲曲類纂』に載せたる彼が辭世である。

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九鼎につかへ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂て商賣知らず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず、ものしりに似て何もしらず、世のまがひもの、唐の大和のなしへある道に伎能雜藝滑稽の類まで知らぬ事なげに、口にかかせ筆にはしらせ、一生を囀りちらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑、こころに心の恥をおほひて七十餘りの光陰、おもへばおほつかなき我世經畢、もし辭世はこそ人あらば、

それ辭世去ほどに扱もその後へのこるさくらの花しにはほゝ

享保九年中冬上旬

入寂名阿禰院穆矣日一具足居士不俟終焉期豫自記春秋七十二歳

のこれとぞ思ふもおろかうつみ火のけぬまあだなる、くち木かきしき
一週年の追福にあたり、彼が友油煙貞柳は、

近松巢林子翁一周忌追福に

さつするに今は安樂國性爺

扱も其の後びんぎなければ

同はるか向ふの百回忌追善の心を

さまざまに作りし枝の面白や

古ふなるほど根あがりの松

と吟んで手向けて居る。

左に水谷不倒氏の近松墳墓の考證中、唐津近松寺の遺跡に就きての所説の大要を紹

介すべし。詳しくは博文館版行近松傑作全集序論を参照すべし。

肥前唐津近松寺は近松門左衛門といかなる關係を有するかといふに、殆ど捕捉すべ

き證跡を認めがたし。岡本撫山氏の著書名を忘れたり稿本に、明治二十四年七月六日の大

阪毎日新聞に、

肥前國松浦郡唐津の有志者は、今回近松門左衛門が遺骸を葬りしといふ同地

の近松の墓所を穿ち、其の眞偽を確めし處地伏石にて左の如き文鐫附ありし

といふ。

卯海祖門上座者、長門深川人也、從當山第四世遠室禪師、而授業得度、學識共卓

絶、後遊京師變姓名稱近松門左衛門、以著作淨瑠璃爲業、享保九年甲辰年十一

月二十三日、卒於浪華、以遺言歸葬於寺墓地

享保十年乙巳六月二十二日

當山六世現住

鏡堂識之

水谷不倒氏の唐津近
松寺の遺跡に就きて
の考證

この記事ありしより、七月八日近松寺に照會して之が虚實を問ひしに、同月十一日附を以て同寺より、

碑文は相違なし、卯海の卯は印の誤りなりと。該寺舊記には、四世遠室禪師の法弟にして名は祖門古澗と號し、道學兼備に因り遂に禪師の法席を續ぎしが、延寶六年京阪地方を遊訪し、淨瑠璃著作をなせし也とは一々明了記載せりと。義門は祖門の誤りなるべし。

この回答に接したこの事が記されて在る。

雖然寛文十一年には近松京都に在りしことは其の證あり、延寶六年前既に、都萬太夫座の狂言作者たりしことも亦其の證あり。岡本氏は篤實の學者にして、右の筆記に私見を挿むが如き事なきは云ふまでもなき次第なれば、前記唐津近松寺の住職との問答は、一字一句相違なかるべしと雖も、果して此の記事の如しとすれば事實に反する所少なからず。予が水谷不倒氏なり明治三十九年七月九日同寺に就て、親しく其の遺跡記録等を尋ねたる時には、舊記といふものもなく、住僧の答へも先きに岡本氏が受取りたるものとは全く異つて居た。

近松寺は唐津西寺町にある臨濟宗の名刹にして、舊唐津藩主小笠原家に由緒ある寺なり寺内には近松の墓あり。又其の墓より發掘したりといふ碑文あり前の岡本氏稿本に載せたるものいへども、其の碑文は後人の作爲せしものなるべく、墓石また何等の記文なければ、これを近松の墓といひ得ると同時に、また他の者の墓ともいひ得べし。同寺には、近

松の遺物は勿論、これに關する記録前の岡本氏の質問せし
時にはありと答へたるも存せず、たゞあるものは、いかがはしきものゝみにして、近松が曾て遊學せしといふ事實には何等有利なる事を證明せず云々。其の碑文といふものに、長門深川の産とあるより見れば、後の近松の遠孫と稱せし者註、狂言堂近松門
三郎を指せる也の作爲せし系圖及び大阪四天王寺畔に建設されたる碑銘にあるものと一致しをれば、碑文の出來た時代も之を刻作した人も、物色する事難しとせず、所詮唐津の近松寺には、近松の遺跡も遺物も何も無き事を斷言するに憚らず云々。

如何にも有力有益なる考證にして、唐津近松寺遊學説の如きは、根柢よりして憑據を失ふこととなるのである。

近松の作物と文章

作者生活の最初の十年 修業時代
練習時代 古淨瑠璃の舊慣故習を脱せざりし

淨瑠璃の型式 此の期の卒業論文としての『出世景清』 純乎たる古淨
瑠璃の筆致

研究期、實修時代に屬する元祿の十六箇年 凡ゆる研究工夫は此の間に成つた

構想行文の祕訣を語つた近松の直話 彼が人生詩人としての卒業論文『曾根崎心中』

心中物淨瑠璃の流行

圓熟大成せる晩年時代の二十年 此の間に成つた
幾多の傑作 世話淨瑠璃の最終作

唐津近松寺遊學説は
全然根據を失するに
至る

『心中宵庚申』

近松獨創の雅俗折衷文

豐富なる文藻と自在なる筆致、忙中閑ある餘裕、口を衝いて出る輕妙なる滑稽、景情併せ敘した自在なる用

筆其の例として『壽の門』

馬琴と西鶴と近松

慾を描いた西鶴、自我的處生觀、道義的長談義の小説化した馬琴

松『夕霧阿波鳴渡』の一節
物性を描き、時代を描き、周圍を描き、活きた人生を描き、實世間を描いた近松

た近松

作者生活の最初の十年—修業期、練習時代

古淨瑠璃の舊慣故習を脱せざりし淨瑠璃の型式

近松が都萬太夫の爲めに『藤壺の怨靈』を書いたのを、假りに彼が齡二十五歳の時であつたとすれば、其の前、尙ほ一二の著作あるが如し、されど確と考證し七十二歳『關八州繫馬』を絶筆として逝けるまで、『關八州繫馬』は享保九年正月十五日の上場なれば、其の執筆は前年彼歳七十一に彼が病臥中の事なるべしと愚料せらる。彼が詩人的生涯は實に四十八年にして、萬太夫、宇治加賀、井上播磨等の爲めに作れる最初の十箇年は、修業期練習時代に屬し、修辭構想ともに未だ古淨瑠璃の舊套を脱するに至らず、「扱も其の後」「斯くて」「去る程に」などと、古淨瑠璃常用の唱破辭轉換語を使ひ、一段の結びとなれば、「感せぬものこそなかりけり」「恐れぬものこそなかりけれ」などと、千調一律の筆法を踏襲し、構想亦單純にして、戯曲と云はんより寧ろ物語りと云ふに近く、貞享三年二月義太夫の爲めに初作せる『出世景清』は、彼が修業期の卒業論文とも稱すべき作物なれど、夫れにさへ尙且つ依然として古淨瑠璃の舊慣故型を襲ひ、「扱も其の後」「斯て其の後」と無意味なる唱破辭を以て起り、「恐れぬものこそなかりけれ」「感せぬものこそなかりけれ」と、同一結語を繰返して居るやうな有様である。されど此の平凡單調の中にも、何處やらに彼が天賦の詩才のひらめきもほの見ゆるのであつて、流石は近松

なりと頷かるゝ節も多し。

修業時代の卒業論文
としての『出世景清』

左に『出世景清』全章五段の内、二三四の三段を抄出し、修業時代の彼が構想筆致の一端を稽考するの資料とする。

出世景清 第二

地 去程に誠や猛き武士も、戀に寢るゝ習ひ有り、薪を買へる山人も、立よる花の景清も、常に清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片ほりに、阿古屋あぐらといへる遊君に、フシカリそめぶしの假枕かりまくら、いつしか馴れて今ははや、二人の若をぞまうける。兄のいやいし六歳弟のいや若四歳にて、世におさなしくぞ見ぬにける。阿古屋はもさより遊女なれども、妹脊の情こまやかに、世になき景清をいさおしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家業をつがせんと習はぬ女の身ながらも、兵法の打太刀うちたかち、武道を教ゆる心ざしたぐひ稀にぞ聞ぬける。フシかる所へ悪七兵衛景清は、重忠を討損じ、やうくとして清水や、フシ阿古屋が庵に著給ふ。地 女房子供を引つれば、こは珍しや何として御のぼり候ぞ、先此方へと請じける。景清申しけるは、内々御身も知る如く、我平家の御恩を報ぜん爲め、鎌倉殿を狙へども、其の甲斐なくて一兩年は、尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此度こたび島山重忠、東大寺再興の奉行に上るをよきしほぞ、先重忠を狙はん爲め、我身を賤しき下郎にしなし、既に間近く付寄せしが、運強き重忠にて、地 我等が智略あらばれ、本意なくも討損じ、一向に重忠と刺違へ死なんぞは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顔をも見まはしく、無念ながらもなからへて、倍只今の仕合なり、地 誠に久しく逢はぬ間に、子供もいさう成人し、御身もすんご女房をしあげたり、地 何でも今宵はしつばりも、積る辛さを語らんぞ、しこく寄れば、よく榮耀らしい、斯く涙人のうき身さいひ、殊更敵をもつたる身が、せめて一年に一度の便をもし給はず、チ、夫もこさわりよ、地 此の頃聞ば、大宮司の姫おのゝ姫さやらんに深い事

純乎たる古浄瑠璃の筆致

と承はる、尤かなみづからは、子持筵のうらふれて、見る目にいやと思すれども、子に絆されて御出か、
情氣するではなけれども、浮世狂ひも年による、しやほんにおかしい迄、フシ能い機嫌ぢやと有けれ
ば、謂景清打笑ひ、是は迷惑、其の大宮司の娘おのゝ姫おのゝ姫には、しかゝ物をも云はゞこそ、八幡ノゝさ
うした事で更になし、地そちならで世の中に、いさしいものが有るべきかさ、なほももたる袖枕、
阿古屋も心打解けて思ふ餘りの戀いさかひ、犬が喰ふさまは是ならん。(中略) 謂然る所へ熱田大宮
司よりの飛脚なり、景清様の御旅宿所は是にてや候やらん、やがて文箱を出しける、十藏出合ひ、
いかにも、是は景清殿の旅宿にて候が、宿願有て兵衛殿は清水參詣致され候御文を預かり置歸
らん次第見せ申さん、明日御出候へ、飛脚を返し、兄弟文をひらいて見れば、おのゝ姫の文にて有り、
かりそめに御上りましゝて、いなせの便もし給はぬは、かれゝ聞し阿古屋さいへる遊女に御し
たしみ候か、未來を掛けし我が契り、いかゞ忘れ給ふかさ、こまゝこそ書れける、地阿古屋讀も果
給はず、ばつとせきたる氣色にて、恨めしや腹立や、口惜や妬ましや、戀に隔はなきものを遊女さは何
事ぞ、子の有る中こそ誠の妻よ、斯さはしらではかなくも、大切がりいさしがり、心をつくせし悔しさ
は、人に恨みはなきものを、男畜生いたづらもの、アゝうらめしや無念や、文ずんゝに引裂きて、か
ちち怨みて泣給ふ、フシこさわりとこそ聞けけれ、地十藏悦びそれ見たか、謂此の上は片時も早
く訴人せん、もはや思ひ切たか、と云へば、チ、何しに心残るべき、せめて訴人してなりとも、此の恨を
晴してたべ、實によき合點と立出れば、又しばらくと引さゝめ、さは云ながら、いかに恨はあればとて、
夫の訴人はなるまいか、地イヤ又思へば腹も立、憎いは女め、エ、是非もなやと、或はさゝめ或はす
すめ、身を闊へてぞ歎かるゝ、地十藏袂を振り切て、エ、輪廻したる女かな、そこ退けと突のけて、六
波羅さして急ぎしは、了簡もなき、三五次第なり。(中略)景清縁端に突立て、今宵の訴人は妻の阿古屋、
同く兄の十藏と覺わたり、おのれ數年の恩愛を振り棄て、大慾にふける愚人ども、勿體なくも此の御

寺に、血をあやす奇怪さよ、逆も世になき某が、おのれらが身の爲ならば、何條命惜からん、人多く討たせんより、女房兄弟おり合て、搦め取れさぞ喚きける。十藏が下人二三太といふもの、分別もなく飛でかゝる、景清莞爾さ打笑ひ、傍にありける雙六盤、片手に取て投付くれば、二三太が真向に、響きわたつてはつしとあたれば、首は胴にぞにへ込みける。(中略) 地景清今は是迄さ、首羽の山の峰をこじ、棺を踏み分け殿をおこし飛こへ、跳こへ飛越、刹那が間に飛ぶが如くに、東路さして落行しは、誠に稀代の武夫や、懃感ぜぬものこそなかりけれ。

同

第三

地かくて其の後悪七兵衛景清行方知れず成たれば、尤天下の御大事さ、諸國の由縁を詮議ある。申にも熱田の大宮司は現在の舅さて、千葉の小太郎堀め取て、警護嚴く打つれさせ六波羅に引すゆる。梶原源太大宮司に對面し、汝は當家の大敵平氏の落人景清を、聳に取のみならず、剩へ行方もなく落しける、罪科甚だ輕からず、何方へ落しけるぞ真直に申せ、少も陳せば拷問せんさ、はつたさ怒つて申ける。大宮司聞給ひ、仰の如く景清さは縁を結び候へども、去年の春國許を立出、今に便も候はず、土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すさて隠し送られ申すべきか、聳に取りしを曲事さて誅せられんは力なく候、行方に於ては存せぬさ、詞清しく申さるゝ、重忠仰せけるは、尤々、たさへ行方を知つればさて、聳の訴人は致されまじ、達ては此方の不調法、いかに梶原殿彼の景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を牢舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲め、己れさ名乗て出ん事は目前に見候、此の儀はいかにさ有ければ、地おのゝ評定尤もさ、六波羅の北の殿に新造の牢を建て、大宮司をおしこめさせ嚴しく番をぞ、三重させせる。フ人につらくはあたられど、何の報いや袖の露、枯れも果なで小野の姫、いたはしや、去年の春夫は都へ去にしより、阿古屋の松の夕時雨、染つけられて若紅葉、こひやちらんさあけくれに、フショリ人目つくみのくひゝ、案じ煩ふ身の上に、父

道行の文は殊に近松の長所とするところなるに、此の道行の筆致は餘りに拙なり、されど未熟ながら、又さすがに近松ならではさ思はるる節も多し。

は都の六波羅へ捕まなりて淺ましかや、憂目にあはせ給ふその、其のおこづれを聞きしより、思ひに思ひつみ重れ、せめては憂にかはらんき、乳母ばかりを力にて、小ナリ旅の衣、手涙冷たきく、れなかに、紅絹裏濡れて夕ざれし、フシ空飛ぶ雁のかへるさに、物忘れせぬ古郷の風も、我身に吹きかへて、今の門出を、なほりぞき國の名残も、つくましく、身の種蒔し産の神、熱田の宮居伏し拜み、父と夫とを安穩にあくまばらへと取る弓の、桑名の舟に、梶枕敷敷の筥の、荒筵肌にあれて、つらけれど、戀する海士が鶯鶯の、フシ夜の姿さみるめかや、かづく菫藻は何々ぞ、小ナリ歌によまれしひじき藻やか、だめ甘海苔春も、又若布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見、はておきな鶯ねをぞ鳴く、花にまがひの櫻のり、天をひたせば雲のりに、月をつくみて別るさ、はすれど、手には取られぬ、桂男のあくいぶりさ、はいつ青海苔も、かだのりき、身の相良布をなのりぞや、あらめづらしき、荒布かる、二見の浦は、遙々、松の村立色の、濱蒔繪によくも似たるよな、跡は白雲さばかりを、故郷の夢さそらさめて、庄野に續く、龜山は、誰爲ながき、萬代も、啣つ涙は、せきもせて、フシ何をか、關の地藏堂、せめて未來を頼まばや、上り下りて、阪の下谷の川瀬に、かりりころり、フシころころなるは、河鹿の鳴く聲か、小石流れて行く音か、いや水の泡散る、玉でないよの、馬駒のひざぶし、ちんからが、ちんからからの鈴鹿、山賤が草鞋の營みに、ふけて、藁打つつち山やだての、旅路に行くならば、買ふてもたもれ、水口のつづらおがきに、露漏りて、をのがまくなる、鬢水は、櫛にたまらぬ、亂れ髪、さくく、行けば、洛陽や、フシ六波羅にこそ、三蓋者かれけれ。(中略)地梶原親子が奉行にて、方一町に垣を結び、突棒刺又鐵の棒兵具、ひつしと竝べしは、さながら、修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を、フシ奇責にかくる如くなり。地いたはしや、小野の姫、荒き風にもあてぬ身を、裸體になして、繩をかけ、十二子の階梯に、胴中を縛り付け、あはれも知らぬ、雜人共、湯桶に水をつぎかけ、落よよと責めけるは、只瀧つ瀬の如くにて、フシ目もあてられぬけしきなり。地むさんや、小野の姫息も、はや絶ゆくに、心も亂れくるめき、既に最後さ見ぬけれど

も、いや／＼武士の妻も成り、心弱くてはかなげにさあならぬ體にもてなし、いかにかた／＼、夫の景清常に清水寺の觀世音を信仰し、我にも信じ奉れど、深く教へ給ふゆゑ、今とても尊號を絶す唱へ奉つれば、此の水は觀音の甘露法雨と覺ゆたり、今此の水にて死する命は惜からじ、夫の行方は知らぬぞや、千日千夜も責給へ、南無や大悲觀世音と、苦しき體をおしかくし、潔くはの給へども、さすが強き栲間に、聲も濁りて身も顛ひ、よわ／＼となり給ふは、借も悲しき次第なり、此の分にては落まじきぞ、やれ枯木責にせよやきて、細首に繩を付け、松の枝に打かけて、地ゑいやくと引あぐる、おろせば少し息をつぎ、引き上れば息たゆる、フあはれさいふも餘あり、地たさへいかなる鬼神も是にてはおつべしと、二三度四五度責ければ、今はかうよと見ゆるが、又目を閉きなふ梶原殿、此此の木の上に釣り上られ、世界を一目に見下せども、夫の行方は見ぬ申さず、かた／＼も慰みに、ちつと上て見給はぬが、フ是へ／＼と有ければ、景時腹にすへかれ、借借々しぶこき女かな、此の上は引下し火責にせよと炭薪を積み重ね、團扇をもつて煽ぎ立／＼、天をすすめし黒煙、焦熱地獄と謂つべし。
(中略)景清も涙をおさへ頼もしの心底や、人は素性が耻しく、子中をなせし阿古屋めは、男の訴人をしたりしに、御身は命にかはらんとは頼もしや嬉しやな、去ながら父大宮司の御事心元なう覺ゆれば、御身は是よりさう／＼歸り、菩提を弔ふてたび給へど、鬼を欺むく景清も、不覺の涙を流しける、フこまばりせめて哀なり。此此の事六波羅へ聞ゆしかば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に走せ來り、借借も景清人の難儀を救ひ、御身を名乗て出らるゝ段、近頃神妙、尤も斯うこそ有べけれ、此の上は小野の姫大宮司共に御赦免なさるゝ候、景清に繩よこひしめければ、景清悦び夫こそ望む所よと、已れど千筋の繩をかり、先に進めば小野の姫、なふみづからも諸共と、駈け出取付給ふを大勢中を押隔て、あたりを拂つて引立行く、景清が心底勇あり義あり誠あり、前代未聞の男なりとて、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

同 第四

六波羅牢舎の段は實に『出世景清』全篇中の最高頂である。修業時代の近松の伎倆は此の一段に徴すべし。

地斯くて其の後げにや猛將勇士も運盡きぬれば力なし、不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南表に始めて牢を立させらる。樸、白櫻、楠の木、長さ一丈にさらせ、地へは七尺掘り入れ、上三尺の詰牢にし、この木をもつて蜘蛛格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打たれば、劍を植ゑたる如くなり、七尺ゆたかの景清をふたへに取て押し入れ、髪を七はに束れて、七方へこそつたりける。足を牢より引出し、ゆんでめてへ取ちがへ、山出し七十五人して、ひいたる楠木にてあげほだしを打たせ、しつ錠詰金たうくぐるく、千引の石材木を積み重ね、首には根掘りの大筒を、三本まで擔がせたり、諸人に見せて恥かくせよと、番も警固も付ざれども、中々五體働かず、されば文王は羨里に囚はれ、公治長は刑戮にかけり、君が爲名の爲なんぞかつて憂へんを、觀音經讀誦の外、世言口を閉たれば、聲聞耳に閉せり、働く物は兩眼のみ、フシ見る目も悲しくあはれなり。(中略) フシは借置、地阿古屋の前いや石いや若もる共に、山崎山の谷陰に、深く隠れておはせしが、地景清牢舎と聞くよりも、我身も有るにあらばこそ、六波羅に走りつき、此の體を一目見て、なふ淺まししの風情やなやれあれこそ父よ我夫と、牢の格子に縋りつき、フシ泣くより外の事ぞなき。詞景清大の眼に角を立、やれ物しらすめ、人間らしく詞をかくるも無益ながら、斯程の恩愛を振り捨て、夫の訴人をして、何の生面さげて今此所へ來たりしぞ、地己れ指一つかなひなば、掴み挫いで棄てんものを、齒がみをしてぞ居られける。地實にお恨はこそはりなれども、妾が事をも聞き給へ、兄にて候十藏、訴人せんと申せしを、再三止めて候所に、大宮司の娘おのゝ姫さやらんより、親しき御文参りしゆへ、女心の淺ましき嫉妬の恨に取亂れ、あささきのふまへもなく、當座の腹立、フシやるかたなく、地兎も角もさ申しつる、後悔先に立ばこそ、左は去ながら嫉妬は殿御のいささしゆゑ、女の習ひ誰身の上にも候ぞや、申譯いたす程皆云落にて候へども、今迄のよしみにば、道理一つを聞分て、只何事も御免

あり、今生にて今一度、詞をかけてたゞ給はゞ、それを力に自害して、我身の云譯立申さん、地にひれふしてぞ泣ぬたる。地むざんやな彌石父が姿をつくぐ見て、調なふ父上程の剛の者が、なげやみやみさは捕はれ給ふぞ、いで押破つて助け奉つらんぞ、地柱に手をかけぬいやぬいやと、押せども引けどもゆるかばこそ、フ不便なりける所存なり。地弟の彌若は、ほだしの足に抱きつき、調いたいかや父上様なふいたむかき撫であげ撫下げ、さすり上、兄弟わつと叫びければ、思ひ切たる景清も、不覺の涙せきあへず、地やくあつて涙を押へ、やれ子供よ、調父が斯様になりたるは、皆あの母が悪心にて、繩をも母がかげさせ、牢にも母が入けるぞ、地邪慳の女が胎内より出たるものと思へば、汝等までが憎いぞや、父さと思ふな子さと思はじ、はやく歸れと叱るにぞ、子供は母にすがりつき、なふ父をかへしや、父上かへせと、れだけ歎きし有様は、目もあてられぬ次第なり。地阿古屋はあまり堪へかれて、よし此の上は自らは死も角も、かはいやな兄弟に、やさしき詞を唯一言、さりてはかけてたゞ、なふ子はかはやふはおぼさぬかき、又せき上てぞなげかる。調景清かされて、おこきやうなる悪人に返答もせじと思へども、今の悔をなご最前には思はざりしぞ、左れば天竺に獅々さいふ獸有り、身は畜生にてありながら、智恵人間にこゑたれ、獵人にも取られず、却て人を取り喰ふ、されども腹中に蠱毒さいへる蟲ありて、此の蠱毒を吐くゆゑに、體を破つて自滅すなり、されば女の嫉妬のあだ人を恨むと思へども、夫婦は同じ體なれば、皆是我身を責るこそわり、わごぜがやうなる我慢愚痴の猿智恵を、獅子身中の蟲にたさへて、佛も戒め給ふぞや、汝が心一つにて、本望遂げず刺さへ、耻辱を取り、今云わけて、妻子が歎くを不便よとて、日本一の景清が二たび心をかへすべきか、何程いふても、汝が腹より出たる子なれば、景清が敵なり、妻さも子さも思はぬと、思ひ切てぞ居たりける。地借はいか程申しても、御承引あるまじきか、調チよくごい、見苦しきに早やはや歸れ、思ひ切つたぞ、地なふ最早ながらへて何方へ歸らうぞ、やれ子供よ、母があやまりたればこ

そ、かく詫言いたせども、つれなき父御の詞を聞いたか、親や夫に敵と思はれ、お主らとても生甲斐なし、此の上は父親持たし思ふな母ばかりが子なるぞや、自もながらへて、非道のうき名ながさんこそ、未來をかけて情なや、いざ諸共に死出の山にて言譯せよ、いかに景清殿妾が心底地是まで、彌石を引寄せ、守刀をすばさぬき、南無阿彌陀佛と刺通せば、彌若驚るき聲を立て、いや、我は母様の子ではなし、父上助け給へやと、半の格子に顔をさし入れ、迷あるく、エ、卑怯なりと引よすれば、わつと云て手を合せ、ゆるしてたべこらへてたべ、明日からはおさなしう、さかやきも刺り申さん、突をもすゑませう、借も邪慳の母上様や、助けてたべ父上様と、息をばかりに泣わめく。地ナ、こさはりよさりながら、地殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝぞ、あれ見よ、兄もおさなしう死したれば、おこさや母も死なでは父への言譯なし、いさしいものよ能う聞けと、すゑ給へば聞入つて、あくそれならば死にませう、父上さらばと云捨て、兄が死骸によりかくり、打あをのきし顔を見て、いづくに刀を立べきぞと、阿古屋は目もくれ手もなへて、フシ轉ふしてぞなげきしが、エ、今はかなふまじ、必ず前世の約束と思ひ母をばし恨むるな、おつとけ行くぞ南無阿彌陀と、心元を刺通し、さあ今は恨を晴し給へ、迎へ給へ御佛と、刀を咽喉におしあて、兄弟が死骸の上にかつばさふし、共にむなしくなり給ふ借も是非なきふぜいななり。景清は身をもたへ、泣げど叫べどかひぞなき、神や佛はなき世かの、さりさては許して呉れよ、やれ兄弟よ、我妻よと、鬼を欺く景清も、聲を上てぞ泣居たり、フシ物のあはれのかぎりなり。(中略)景清腹にすへ兼れ、いで物見せんよと云もあへず。地南無千年千眼生々世世一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力と、金剛力を出し、えいやつと身ぶるひすれば、大釘大繩ばらばらすんときれてのいた、貫木取て押歪め、扉をかつばと踏倒し、大手を廣げ躍り出、八方に追ひ廻すは暴れたる夜叉の三重如くなり。(中略)地さあ爲すまじたり此の上は、關東へや落ち行かん、いや西國へや立のかんよ、ゆきつ戻りつ、戻りつ行きつ、一町計り走りしが、いや、此の度落失せなば、又大宮

司やおのゝ姫、憂目を見んは治定ちぢぢと思ひ定めて立歸り、もこの牢屋に走り入り、内より貫木しこくしめ、千筋の繩を身に纏ひ、左あらめ體にて普門品、讀誦の聲をおのづから、即身菩薩の變化ならんを、皆感ぜぬものこそなかりける。

研究期—實修時代に屬する元祿の十六箇年

凡ゆる研究工夫は此の間に成つた

構想行文の秘訣を語つた近松の直話

元祿の十六箇年は、實に近松が人生詩人としての研究期、淨瑠璃作者としての實修時代に屬する。彼の構想、彼の筆致は此の間に於て次第に暢達練熟し來り、元祿十六年五齡一初めて世話淨瑠璃に筆を染め、『曾根崎心中』を出すに至つて形質ともに完成し、其の想其の文併せ至れる、淨瑠璃正本の典型を形づくるに至つたのでありし。

此の間に於て彼は淨瑠璃の體裁を一定した。在來の淨瑠璃型を變じて新たなる型式を定めた。戯曲の題目、取材の範圍を擴張し、廣く活世間の活事情に求め、描いて人情の機微に觸るゝの呼吸をも呑み込んだのであつた。虚にして虚にあらす、實にして實にあらす、虚實の間を行くべき呼吸をも了悟したのであつた。『難波土産』の著者穗積蘭阜が、近松の直話として記して居る、

往年某近松が許に訪らひけるに、近松翁の云ひけるは、總じて淨るりは人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて文句皆働きを肝要とする活物なり。殊に歌舞妓の生身の藝と戯場の軒をならべてなす業なるに、性根なき人形にさまゝの情を持たせて見物の感賞を取らんとする事なれば、大抵にては妙作といふにいたりがたし。予若きとき大内の草紙を見る中に、節會の折柄雪いたう降りつもりけるに、衛士に命せて橘の雪拂はせられければ、傍へなる松の枝もたは、ふなるがうらめ

しげにはね返りて云々と記けり。是れ無意草木むごうさくもくを活物開眼したる筆勢なり。其の故は、橘の雪を拂はせらるるを松がうらやみて、おのれと枝を跳返して、たはふなる雪をはね落して恨みたる氣色、さながら活て働く心地ならずや。是を手本として、我が淨瑠璃の性念を入る事を悟れり。爾れば地文句せりふは云ふに及ばず、道行なんどの風景を述る文句も、情を込ること肝要とせざれば必ず感心薄き物なり。詩人の興象といへるも同じ事にて、たとへば松島嚴島の絶景を詩に賦しても、打詠めて賞するの情を基ゐとすと心得べし。文句に手爾葉多ければ何となく賤しき物なり。然るに無力なる作者は、文句をかならず和歌或は俳諧などのごとく心得て、五字七字等の字配りを合さんとする故に、自圖おのづかと無用の手爾葉多くなるなり。譬ば年も行ぬ娘をと云ふべきを、年端も行ぬ娘をばと云ふごとくになる事は、字割にかゝはるより發りて自然と詞列ことばらいやくしく聞ゆ。爾れば大體は文句の長短を揃へて書べき事なれど、淨瑠璃は元音曲なれば語る所の長短は節に有り、然るを作者より字配りを信耀と詰れば、却て口にかゝらぬ事有るものなり。此の故に、我が作にはかゝはりなきやうに仕組る事ゆる手爾葉おのづから少ない。昔の謳曲は今の祭文同然にて、花も實もなきものなりしを、小生出て加賀椽より筑後椽に移りて作文せしより、文句に心を用ゆる事は昔に替りて一等高く、譬ふれば公家武家より以下夫れくの格式をわかち、威儀の別よりして詞遣ひ迄其の移容を專一とす。此の故に同じ武家なりといへ共、或は大名或は家老と、其の外祿の高下に付て其の

程々の格をもつて差別をなす、是れ語り人に夫れ、の情の能くうつらん事を肝要とするゆゑなり。淨瑠璃の文句皆實事を有りの儘にうつすものなれど、其の内には藝になつて實事になき事も有り、近くは女形の口上多く實の女の口上には得いはぬ事を打出していふ、故に其の實情が顯はるゝなり。此の類は實の女の情に基著てつゝみたる時は、女の底意なんどが顯はれずして、却て慰みにならぬ故なり。然るに依て藝といふ所へ氣を付ずして見る時は、女に不相應なるけうどき詞など多しとおそらくは譏るべし。然れ共此の類は藝なりと見るべし。此の外敵役は餘りに臆病なる體や道外やらのをかしみを取る所、實事の外の藝に見なすべき所多し。此の故に是を見る人其の斟酌有べきなり。淨るりは愁ひが肝要なりとて、多く「哀れなり」なんど云ふ文句を書き、又は語るに文彌節やうのごとくに泣くが如く語る事、我作のいき方にはなき事なり。小生が憂ひは皆義理を専らとす、藝が義理に詰りて哀れなれば、節も文句も倍といたる程いよく哀れなる物なり。此の故に哀れを「哀れなり」と云ふ時は含蓄の意なうして結句其の情薄し、「哀れなり」と云はずしてひとり哀れなるが肝要なり。譬へば松島なんどの風景にても、ア、よき景かなと譽る時は一口にて天景象が云ひ盡されて何の詮なし。其の景を譽んと思はゞ、其の景の模様どもを餘所ながら數々云ひ立れば、好き景と云はずして其の景の面白さがおのづからしるゝ事なり。此の類萬事に渡る事なるべし。或人の曰く今時の人はよく／＼理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ

世の中、むかし語りにも有る事に當世受とらぬ事多し。爾ればこそ歌舞伎の役者なども、兎角其の所作が實事に似るを上手とするなれ、立役の家老職は本の家老に似せ、大名が大名に似るをとつて第一とす、昔の様なるわらべだましのじや、らけたる事はとらざるべしと。近松答て曰く、此の論道理のやうなれども、藝といふ物は、實と虚との皮膜の間をなすに有るものなり。成ほど今の實事に能くうつすを好む故、家老は眞の家老身ぶり口上をうつすといへども、さらばとて眞の大名の家老なごが立役の如く顔に紅粉おしろいをぬる事ありや、又眞の家老職は顔をかざらぬとて、立役が髭はむしや／＼と生へなり、頭部ははげなりに舞臺へ出て藝をせば、慰みに成るべきや、皮膜の間といふは、爰なり、虚にして、虚にあらす、實にして、實にあらす、此の間に、慰みが有た物なり。是に付て爾る御所方の女中一人の戀男有りて互ひに情をあつく通はしけるが、女中は金殿の奥深く居りて男は奥へ參る事も叶はず、只だ御簾の隙より男を見るもたまさかなれば、餘りに戀ひ詫びて其の男の肖像を木像に刻ませ、面體なども常の人形にかはりて其の男にうぶけほども違はさず、色つやの彩色は云ふに及ばず毛穴迄も寫させ、耳鼻の穴も口の内齒の數まで寸分も違はず作り立させたり、誠に其の男を傍に置て是を作りたる故、其の男と此の木像とは神魂の有りとなきとの違ふのみなりしが、彼の女中は是を近付て見れば、さりとては生身を直に寫しては興のさめたる物にて、ほろきたなく剛氣の立つ物なり、さしもの女中の戀もさめて傍に置くもうるさしと頓て捨たりとかや。是を思へば

生身の通りを直に寫すは、たとひ楊貴妃なりとも愛想のつきたる所有るべし。夫故に晝空事とて、其の姿を畫かくにも又木に刻むにも、正實の形を似する内に又異なる所あるが結句人の愛する種とはなるなり。文作趣向藝業身ぶりも此のごとく、本の事に似る内に又大異おほまなる所有るが、結局藝に成て人の心の慰みとなるなり云々。

と云へる呼吸も、亦此の研究期—實修時代に於て工夫し、會得し、修練して、妙境に悟入したのであつた。

近松が人生詩人としての卒業論文は、『曾根崎心中』である。『曾根崎心中』は實に近松世話淨瑠璃心中物の初めにして、創立以來十九年、「三五の十八ではぬそろばん」の下に、覺束なき興行を續けて來た竹本座も、此の興行にて始めて大入りらしき大入りを取り、累年の負債もやうやく皆済が出来たと云はるゝほどの當り外題にして、四月七日一説に、四月二十三の出來事なるを、近松の才筆に上ぼせて潤色し、五月七日より前、日本王代記にて日云へりの出語り出遣ひ、太夫竹本筑後椽、ツレ竹本頼母、三絃竹澤權右衛門、人形辰松八郎兵衛にて勤めて居る。

『曾根崎心中』の大入り以來、近松は荐りに心中物若くは心中物類似の世話淨瑠璃に筆を染めた。豊竹座の作者も亦之れに倣ふて、此等心中物世話淨瑠璃を新作上場するに至り、寶永元年より正徳元年迄僅々八箇年間に、竹豊兩座に上場したる此の種世話淨瑠璃の數は、二十一種の多きに上ぼつたのでありし。即ち左の如し。

心中物淨瑠璃の流行

人生詩人としての卒業論文『曾根崎心中』

竹 本 座 豊 竹 座

寶永元年

源五兵衛 薩摩 歌門左衛門作

德兵衛 心中重井筒門左衛門作

八百屋お七歌祭文(海音作)

同 二年

おなつ 清十郎 笠物 狂(未詳)

同 三年

心中二枚繪雙紙門左衛門作

茂兵衛 大經師昔曆門左衛門作

お彌 高市 梅田 心中(未詳)

同 四年

堀川波の鼓門左衛門作

興兵衛 卯月の紅葉門左衛門作

後日卯月の色上門左衛門作

同 五年

おむめ 久米之助 心中萬年草門左衛門作

椀久末の松山(未詳)

同 六年

おなつ 清十郎 五十年忌歌念佛門左衛門作

上卷 助六 千日寺心中(未詳)

おまん 源五兵衛 蘆 分

舟(未詳)

笠屋三勝二十五回忌(未詳)

寶永七年

おきさ 次郎兵衛 掛 鯛 心 中(門左衛門作)

心中 及は氷の朔日(門左衛門作)

夕霧 阿波の鳴 渡門(左衛門作)

心中戀の中 道(未詳)

正徳元年

梅川 忠兵衛 冥 途 飛 脚(門左衛門作)

油屋 袂 の 白 絞(海音作)

『曾根心中』の道行「此の世の名残り、夜もなごり、死にゆく身をたどれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えてゆく、夢の夢こそあはれなれ、あれ敷ふれば曉の七ツの時が六ツなりて、残る一つが今生の鐘の響の聞をさめ、寂滅爲樂と響くなり」云々の名文は、時の文學眼あるものを驚倒せしめたるものにして、徂徠や南畝に至るまでが、案を拍つて激賞し、「近松の妙こゝにあり」とまで嘆賞して居るのである。尤も此の道行の所作なるか否かに付きては異説あり、水谷不倒氏は近松傑作全集の解題に於て、『曾根崎心中』以前に出たる『辛崎心中』(作者不明に既に其の文ありされば之を近松の創意なりとするは誤りにして、何さなく拍子抜の感なきを得ずと断じ居れり。

左に此の淨瑠璃の一部を抄録すべし。修業期練習時代の卒業論文たる『出世景清』の筆致、構想と對照し來れば、文體の變化練熟せる筆致の歴々たるを見るべきである。

曾根崎心中 附タリ觀音巡り

作者 近松門左衛門
おやま 辰松八郎兵衛

眞實にや安樂世界より、今此の娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、あなぐもたかし、フシ高き家に登

りて民の賑はひを契りきてし難波津や、三ツづきをさ三ツのさき、札所くゝの靈地靈佛、オクリ
巡れば罪もなつのくもあつくるしめて駕籠をはやおりはのこいあ三六の十八九なるかほ花、
フシオクリ今咲出しの初花に、フシ笠は著すとも召さずとも、照日の神も男神、よけて日まげはよもあら
じ、頼み有りける巡禮道、西國三十三所にも、オクリ向ふさ聞くぞ有りがたき、照日一番に天滿の大ゆふ
寺、此の御寺の名もふりし、フシ昔の人もきのさなるの、大臣の君が、鹽がまの浦を都にほり江こぐ鹽
汲船の、フシあさ絶す、今も弘誓の櫓びやうしに、のりの玉ぼこ、歌ふいゝ、大阪巡禮胸に木札の普
陀落や、大江の岸に打波に、フシしらむ夜明の鳥も二番に長福寺、地空にまばゆき久かたの、光りに
映る我が影の、あれくゝ走れば走る、これくゝ又止れば止る、ふりの善惡、フシ見るごまぐ、心もさぞや
神佛、照す鏡の神明宮、拜み巡りて法住寺、人の願ひも我がごまぐ、誰をか戀のいのりぞと、仇の悋氣や
フシ法海寺、地東は如何に大教寺、草の若芽も春過て、おくれ咲なる菜種や畚粟の、露に慄る夏の虫、お
のが妻戀ひやさしやすしや、あちへ飛つれこちへ飛つれ、あちやこち風ひたくくゝ、羽さくゝをあ
はせの袖の、染た模様を花かさて、肩に留ればおのづから、紋に上羽のてうせん寺、扱ぜんだう寺りつ
たう寺、天滿の札所残りなく、そなたに巡る夕立の雲の羽衣蟬の羽の、薄き手拭あつき日に、つらぬく
汗の玉つくり、稻荷の宮に迷ふさの、闇は理り御佛も、衆生のための親なれば、是ぞおぼせの廣徳寺、四
方に眺めのはてしなく、西に船路の海深く、地波の淡路にきぬすも通ふ、沖の汐風身に染鷗、なれも
無常の煙にむせぶ、色に憧れて死なふなら、しんぞ此の身はなりしだい、扱實によいけいでん寺、縁に
引かれて又いつか、こゝくに高津のへんめう院、菩提の種や上寺町の、長安寺より清安寺、登りやすなす
な下りやちよこゝ、登りつ下つ谷町筋な、歩みならはす行きならば、しよていくづなれア、恥
かしの、森で裾がはらくゝ、はつと返るをうち掻合せ、弛みし帯を引縮く、締てまつはれ藤の櫛
十七ばんに住願寺、是からいくつ生玉の、本誓寺ぞ、伏拜む、數珠につながん菩提寺や、早天王寺に六

じ堂、オウリ七千「余卷の經堂に、經讀む鳥の時ぞきて、よその待宵きのくぐも思はでつらき鐘の聲、こん金堂に講堂や、萬燈院にさもす火は、影も輝く蠟燭の、しん清水に」暫さて、やがてやすらふ蓬坂の、關の清水を汲あげつ、手にむすびあげ口すくぎ、無明の酒の酔きます、木々の下風ひやく、右の袖口左の袖へ、通る煙管にくゆる火も、道の慰みあつからず、オウリ吹て亂る薄煙、フシ空に消ては是も又、行衛も知らぬ相思ひ草、フシ人忍草道草に、日も傾きの急がんと、又立出る雲の足、時雨の松の下寺、町に、信心深きしんかう寺、悟らぬ身さへ大覺寺扱こんだい寺大蓮寺、巡りく、て是ぞはや、三十番の三寺の、大慈大悲の頼にて、かくる佛の御手の糸白髮寺さよ黒髮は、戀に亂る妄執の、夢を覺さんばぐらうの、爰も稻荷の神社、佛神すいはのしるしさて、靈ならべし新御靈に、拜み納るさしもぐさ、草のはすはなよに交り、三十三に御身をかへ、色で道引情で教へ、戀を菩提のはしこなし、渡して救ふ觀世音、ちかいはたへに、三重有りがたし、立まよふ、フシ浮名をよそに漏さじと、包む心のうち本町、こがるく胸のひらのやに、春を重しひな男、一ツ成口もくのさけ、柳のかみもさくく、さ、フシ呼れてすいのなまり川、地今は手代と埋木の生醬油のそでしたくるき、戀の奴に荷はせて、得意を巡り生玉の、オウリ社に「こそは著にけれ。出茶屋の床より、地女の聲。ありや徳様ではないかいの、コレ徳様く、と手を拍けば、徳兵衛、合點して打うなづき、註コレ長藏、おれは跡から往の程に、其方は寺町のくほん寺様長久寺様上町から屋敷方廻つてさうして内へ往にや、徳兵衛も早戻ると云や、それ忘れず共安土町の紺屋へ寄て錢さりやく、地道頓堀へ寄りやんなやと、影見ゆる迄見送りく、簾をあけて、コレお初じやないか、是はごふじやと編笠を、ぬがんとすれば、ア、先やはり著て居さんせ、註今日は田舎の客で、三十三番の觀音様を巡りまし、爰で晚迄日暮に、酒にするじやとせいで云て、物まれ聞きにそれそこへ戻つて見ればむつかしい、駕籠も皆知んした衆、やつぱり笠を著て居さんせ、夫はそふじやが此頃は梨もつぶても打たんせぬ、氣遣なれど内方の、首尾を知られば便宜もならず、丹波屋迄は

の頃より熾んに行はる。甚左衛門町に住し、境町に操芝居を興行す。正徳の頃薙髮して坂本梁雲と稱せり。梁雲の稱は蓋過行雲、動、梁、藤の意、味より取りたるもの歟。西澤一鳳は彼を評して、淨雲以後の名人なりと嘆稱して居る。男宮内は早世し、半次郎後に二代目半太夫となる。梁根と云へり、元文よ門人天満屋藤十郎一派をなして河東節を始め。其の他、意教譚海に初め淨土宗某寺の『雙笠』亦僧也。等其の名高し。鎌倉屋豊芥の筆記に、「半太夫は操の座元なりしが、一度退轉に及んとせし頃、紀伊國屋文左衛門歎かはしく思ひ半太夫が、放埒をいまして、金子二千兩を貸あたわて興行せしむ、此のときの名題、淺黄帷子黒小袖といふ六だんつゞきの狂言にて、殊の外大入をなせり」と云つて居る。『聲曲類纂』放縱の性なりしと見ゆ。

半太夫座興行の淨瑠璃外題として『聲曲類纂』に載する所のもの左の如し。

- 源氏十二段 二段目に六檢見物語四段目妻見 生贄 三段目道行の段 和泉城 二段目調伏
- 文同勝 日蓮記 五段目山入の段 黒小袖淺黄帷子 三段目初瀬前道 丹波興作 三段目道
- 頁分ケ 行同馬駕籠の段、五段目たる 夜目遠目笠の内 四段目大和之助道行同大 女庭訓 初段
- 井おせん道行同物狂ひ 角力物語三段目髪す 參會和會我 四段目袂の前道行 本朝勇士鑑 三段目花賣五
- き五段目虎少將道行 名の遺恨放下僧 初段温泉揃三段目道行附わにの段、四段 出世盛久 四段目法正覺道行五
- 平安城都定 四段目草花靈附天皇忍びの段、 全盛櫻狩 三段目清玄新、四段目櫻ひめ道行
- 季の 景清雷問答 四段目景清道行 聖代時津風 初段金輪の段、三段目逢坂山附琵琶の段
- 舞の 可の段笠のだん鐘のた 神力小鍛冶初午參 三段目名劔の巻同約 繪合源氏色安宅 三
- ん替り名代蟬丸紅葉傘

『奈良柴』には、「半之丞弟子、後半太夫弟子と成、元祖河東、本苗河部藤十郎」とし、「河東は小田原町に住、天満屋藤左衛門とて、魚販者の子に藤十郎といひし、本苗河部といふ故河藤とよびしを、堺町に佳風といふはいかい師有りしに、藤の字をひがしと書改て遣せしより、河東と改たり」と云つて居る。享保十年七月二十日四十二歳にして歿す。築地本願寺塔中成勝寺に葬る。棺を送りて寺にいたる者千を以てかぞふ『近世奇跡考』門人夕丈を養ふて家をつがしめ藤十郎と改む、後剃髪して榮軒といへり。二代目となし、河東の名は門人河丈に與へた。此の時より二派に分れ、藤十郎の三味線は山彦源四郎、河東の三味線は十寸見東古が弾くことくなつた。門人中十寸見蘭洲江戸町二丁目の娼家、葛島屋庄次郎で同意教、同忠右衛門等其の名高し。

築地成勝寺に在りし河東墓碑の文として傳はるものは左の如し。

其の石碑は文政十二年の火災に罹つて燹損したので、更に碑文を假名に和らげ、天保四年四月に再建したが、此れ亦翌五年の火災に逢ふて缺損した。

河東居士 氏伊藤又稱十寸見武州江戸品川坊之豪家也其稟跌宕不羈嗜酒遊嬉脫然破産口灑口威武不能屈富貴不得淫恰有天子呼來不上船之氣象嗜輒花號十寸見堂故以氏焉後遁世遊梁雲門而極青於藍矣花樓月殿一開口邊行雲動梁塵水則舞較虬山則泣麋鹿日高門豪家見寵月爲花街章臺見貴寔絕代之望君也行年四十有二享保乙巳秋七月廿日以病卒葬筑地本願寺塔成勝寺卽喪者以千數孝男夕丈君前學于門後養于家善承紹其業成二代之美家聲日月彩色已而一紀之辰立碑於本堂階側友人謹書陰焉

ぶとすれどあり明の、さやけき月に色もれて、苦ふくかげの花すゝき、ほのめく袖に露かゝる、^{シテ}「時に樂天こと葉をやはらげ、いかでかく波にうきねの船よせて、妙なるびわのいとゞなほ、おぼつかなしや、さるにても、御身はいかなる御事ぞ、^{シテ}「あまのかる磯の玉藻下のみ藻だれ、うき言の葉もしらいとの、びわをいだきておもはゆく、なかばかくせしかほばせば、卯月に残る葉ざくらや、木の間の花の露おもく、打たれがみをそのまゝの、すがたもよしやにくからず、^{ワキ}「樂天いとゞあやしくて、たれかひもくの浪枕、かたねの夢をうらみてや、いぶかしさよといひければ、^{シテ}「くちなしの色にそむてふ山吹の、花もあだなる身のむかし、^{ツレ}「かたるもさすがはづかし^{羽束師}のもりてうき世の定めなき、いく宵々のかり枕、かはすちぎりも河竹の、ながれのすべと御らんせよ、^{ワキ}「扱はあだなる河竹の、ながれの水の末とほく、なごてや爰にすむ月の、行衛をかたりましませど、^{ツレ}「なほさしよする船のうち、つなでかはして、^{シテ}「花と見し昔のはるは夢なれや芙蓉帳のうち、せし手枕のかすゆるく、^{ツレ}「ひしのたまきは、てしなき、思ひにやせてとぶ螢、ながるゝ水の影うすき、あやのうちはのおひ風は、かふろが袖の香にゝほふ、けしきもよしや里わけて、片日夕だつ空もすずしき小村雨、かさの長柄をさしかけさせて、伽羅のあしだにこぼるゝ露の、つゆにぬれゝぬれてほす、きくの盃ゆらぐ手も、はでな心かくれなるの、もすそにすそにしたみ酒、^{シテ}「また待宵にふけて廊のもゝ羽がき、^{ツレ}「まぶな男の

かすり歌、聞くに心のまよならぬ、つとめのきやくに下ひもを、とくくしばる露泪、^{シテ}「そよや浮身をふざんの雲の、行衛とはれてぬる^寐よい^背に、たれか身うけのかねごとも、かしこはまよ此の人の、泪ほくろもうるさしと、^{シテ}「男ねらみに今年も過つ、またくる春も、^{ツレ}「あだにちるすがたのはなもうつろひて、今はねびきのまつ人も、たれにすがらんよるべも浪に、身をうき草の根をたわて、さそふ水とて行ふねの、ともにこがれてくこくに、茶をめせく小うり茶うりて世をわたる、その人にさへわすられて、やがてといふて出船の、片帆なみ間のよすかなく、こと浦かせのおとづれを、いそ山松のよそにして、心にふくる有明の、つれなく残る身はひとり、なみだの外にとふ人も、なくねをびわのもろこゑに、ふしづみてぞいたりける、^{ワキ}「げにや商人は利をおもんじて、別離をかるんず、今樂天が身のうへも、都を出てはるく、と、かゝる邊土に謫居して、古郷の秋のなつかしく、^{糸竹}しちくのこゑもまれなるに、いと珍らしきびわのねの、ひなにはあらぬ思ひでに、今またかゝるうきなみだ、むかしにかへす花の袖、都の春もあだ夢と、おもひくらべてげにまこと、ともに天涯淪落の、^{ツレ}「あひ合ひたりし身の上と、其のたんそくのことのはに、なほぬれまさるくれなるの、なごりの袖にびわとりて、いとかきならしさう^嘈く^{シテ}と、^{シテ}「むら雨つとふこすゑより、くだけて落る玉水の、岩にせかる瀧川や、ながれもあへずせきとめて、たちまちさくる銀瓶の水ほどはしる一きよくも、是迄な

りと夕しほの、さしてわかれのこゑくも、どほざかり行く船のあと、月ぞた
ゆたふなみだの袖しぼらぬ者こそなかりけれ。

丹後及び浄雲系統の浄瑠璃以外には、尙ほ説経節一派の浄瑠璃がある。『聲曲類纂』
には左の如くに記し、

説経 結城孫三郎 葺屋町にて操座興行す 譚海に江戸浄瑠璃の始は、結城孫三郎と云、説経節を葺屋町にて太鼓矢倉を上し、始

あなりさいへり。
系圖詳ならず。

同 天満八太夫 堺町操座 脇 武藏權太夫、天満重太夫 太夫元也

同 天下 石見椽藤原重信 堺町操座

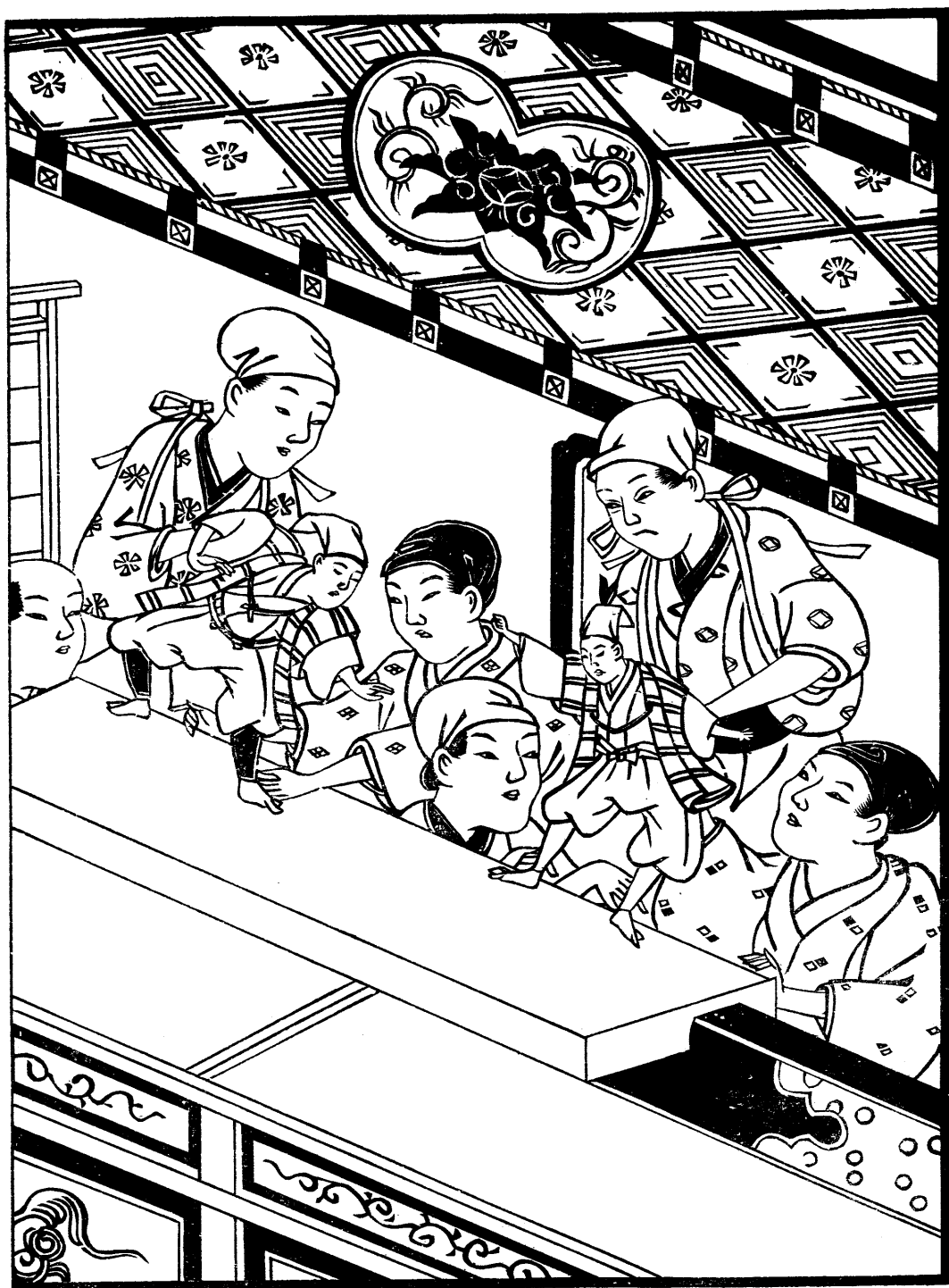
同 佐渡七太夫豊孝 堺町操座

同 吾妻新四郎 靈岸島操座

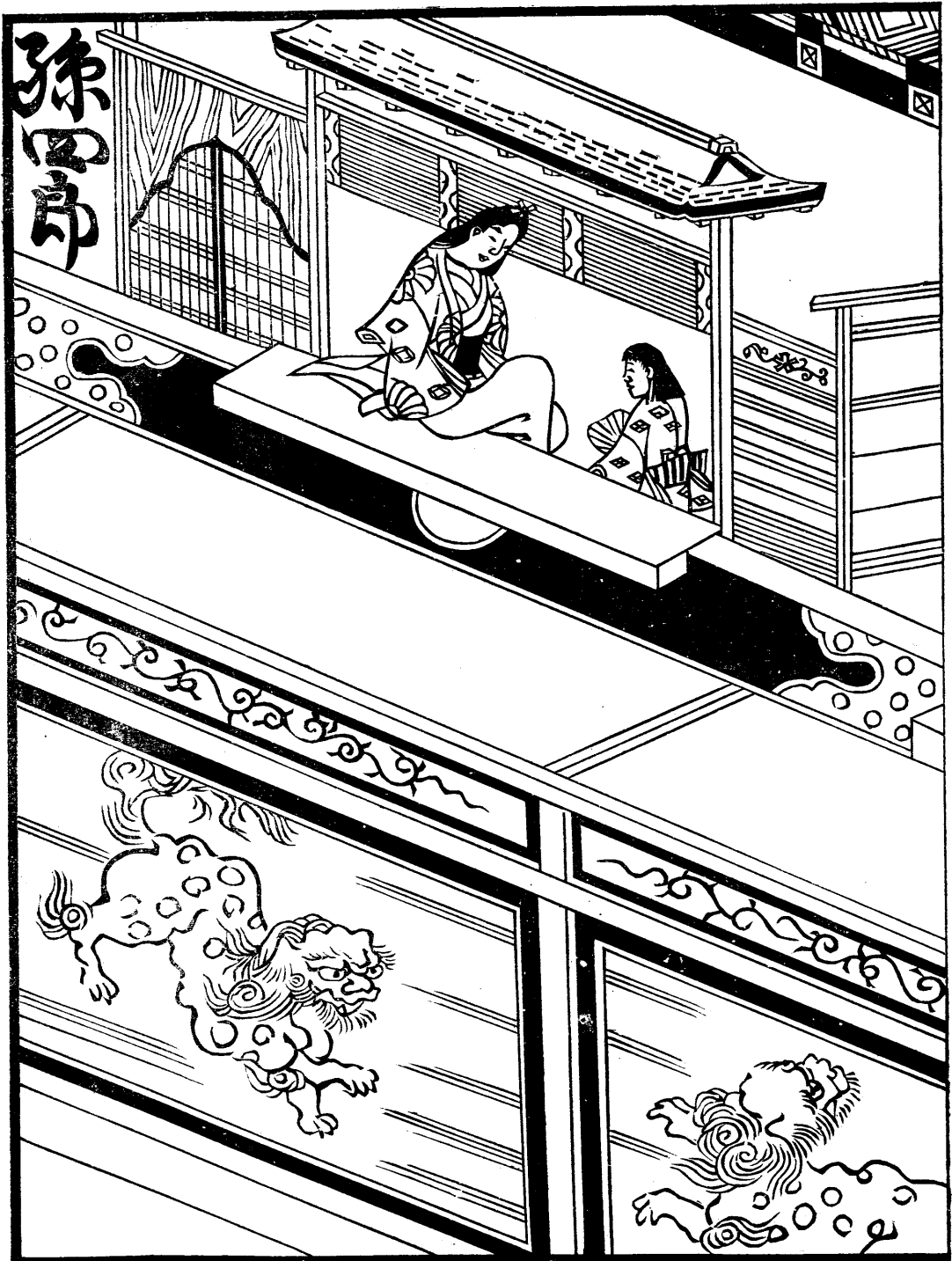
同 江戸孫四郎 堺町操座 脇 長太夫 圖鑑綱目には江戸孫三郎とあり

無座説経太夫 村上金太夫 因幡町住 大阪七郎太夫 南鍋町住、寛文頃木挽町に説経座興行す、後境町に芝居取建る云

右の輩傳系詳ならずと附記して居る。曳尾庵の『我衣』には、江戸各芝居の始りを記して、「寛永元甲子年勘三郎芝居濫觴ハサシオク、夫ヨリ二十年後ニ市村竹之允芝居初ル、山村長太夫 元森田勘彌同断 皆々勘三芝居ヨリ出ルナリ、又都傳内 寶延 河原崎權之助 天和 等芝居始ル、浄瑠璃芝居ハ天満八郎太夫 天和、セツキヤウ 佐渡七太夫 寶永、セツキヤウ 武藏孫太夫、結城孫三郎 セツキヤウ、浄瑠璃元祿」云々、とあるより見れば、江戸説経座の始りは、天満八郎太夫の芝居は天和、佐渡七太夫の芝居は寶永、武藏孫太夫、結城孫三郎の芝居は元祿年代なるを知るべし。



圖之居芝郎四孫戶江節經說



(し 珍 様 模 繪 の 摺 手 さ ひ 遣 人 三 形 人)

説経節の芝居中特に聞わたるは天満八太夫即ち八郎太夫 結城孫三郎の兩座である。

大宰純の『獨語』に、

「説経と云ふ者はもと法師の中に、本説経師と云ふ者ありて、佛法の尊きことどもを詞に綴り、浮世の無常の哀に悲しき昔物語を演じ、善惡因果のむくいあることどもを物語に作りて、是にふしを付けて哀なるやうに語りしなり。鉦鼓をならして拍子取り、世の婦女に聞かせて、惡を戒しめ善を勸めて、菩提心を起さしめんとするなり。昔より法師の説法に因果物語するたぐひなり。其の物語は俗説に任せて、慥ならぬ事も多けれども、詞は昔の詞にて、賤しき俗語をまじへたる中に、やさしき事も少からず、——其の聲も唯悲しき聲のみなれば、婦女これをきくては、そゝる涙を流して泣くばかりにて、浄瑠璃の如く淫聲には非らず。三線ありてよりこのかたは、三線を合はする故に、鉦鼓を打つよりも少しうきたつやうなれども、甚しき淫聲には非らず、云はゞ哀みて傷ると云ふ聲なり」云々

とあり、以て其の曲調の如何を知るべきである。寶曆十年 尺龍撰『風俗陀羅尼』に「冠いたはしや

浮世のすみに天満ぶし」と咏めるが見ゆ。されば寶曆の比は既に殆ど衰敗し、僅に一縷の命脈を存して居た位の有様なるべし。『天和笑委集』の堺町の條に、「くるゝ日かげを思ひ忘るゝ是ぞ大阪七太夫、おなじく天満小糸が地黄煎」天満小糸は地黄煎の菊屋小糸と天満八太夫とを懸け合せたるなりとあるより見れば、天和當時の盛況想ふべし。説経節の曲風は今尙ほ残つて居る。若松若左太夫と云へるが當今の家元なりと聞くに其の浄瑠璃正本中の一二節を抄出して参考に供する。

『石童丸』の一節

加藤左衛門重氏入道菫萱は、其日は如何なる吉日やら、又悪日に候やら、我子に逢ふさは夢しらす、數多法師のある中に、御當山の御開山、大師の御廟へ花立替の御役目、身に墨染の袈裟衣、右手に花籠たづさへて、左手に珠數を爪繰りて、口に大師の教なる、光明眞言讀誦なし、萱の御堂を立出でて、奥山内へ登らるゝ、三古の松や五古の杉、善惡二つの蛇柳や、汗かき地蔵を伏拜み、山八合目が女人堂、たごらせ給へば程もなく、無明の橋になりぬるが、左手の墓原見てあれば、まだ新らしき廟所に、古き塔婆の建てあるを、菫萱つくづく御覽じて、扱世の中に、古き廟所に新らしき、塔婆の建てあるこそならひなれ、これなる廟所は新しきに、古き塔婆の建てあるは、ハツア合點の行かす立寄つて、塔婆の文字を讀み給ふ、ナニく奉納大乘明典日本遍國六十六部、天下和順日月清淨、大和の國、さて塔婆にあらすや、六十六部の眞佛の扉押へにありけるや、家名姓名印さすに、大和さばかり印せしは、扱此人は大和にて、一ヶ國をも領したる、主の末にもありつるや、若き人か、又老體かは知られども、定めて古郷の大和には、若き人にもあるならば、父母兄弟あるべけれ、また老體の人ならば、妻や子供も有るべきに、何を菩提の爲として、諸國行脚の身ともなり、御當山へ分登り、かく無縁となつたるか、一樹の陰一河の流、袖すり合ふも他生の縁、同向致して通らん、さ花籠傍へにおるされて、草花折取り手向られ、珠數さらさらおしもんで、暫らく御同向なされしが、同向の内に菫萱は、故郷の空を思出し、ハツア六部の無縁を見るにつけ、昔が思ひ出さるゝ、我も筑紫に有る時は、六ヶ國の主にて、御大將の我君のま、敬まれたる身の果が、今にも空しくなれば、逆故郷の空で誰一人、今日は重氏命日ぞ、明日は大將忌日ぞ、弔ふものさてもあるまじ、さすれば我も當山の、無縁の佛さ成るべきか、ハツア味氣なき浮世ぢやのま、悟りに入つたる菫萱も、悲歎の涙に御衣の、袖も絞れるばかりなり、やく有つて心付き、ハツア我ながら愚なりたさひ、妻子があるさても、冥途の供に

なるでなし、所領知行があればさて、來世の土産に持たればせぬ、只冥途の土産と云へば、經念佛より外はない、昔の榮華を思出し、かく落涙に及びしは、未だ凡俗心の失せざる所、オ、師の手前も面目なし、免させ給へ南無大師遍照金剛と、氣を取直し、萱萱は、御花籠を取上げて、大師の御廟へ急がる、かゝる向ふの方よりも、物の哀れや石童丸、生れぬ先に別れたる、見もせぬ父に憧れて、高野山へ分登り、二夜三日の其間、父の行衛を尋れしが、流石に廣き御山にて、父の有家も知れざれば、力なくなく石童は、麗をさして下らるゝ、萱萱僧は登り坂、身をかき分けたる親と子の、行合なれど、それぞさは、親も知られば子も知られど、ア、ラ不思議や、其日に限り高野山、そよ吹く風もなかりしに、石童丸の振袖と、萱萱召されし御衣の、袖と袂が上よ下へと縫れ合ひ、むすばれ合はぬばかりにて、すれ違うて行すぎる、心なられば萱萱は、立止つて石童の後姿を見おくりて、ハテ心得ぬアノ小人、御山に見馴れぬ兒なるが、麗あたりの者にもあらず、オ、夫よ、髪は筑紫のかつらわけ、扱は諸國をわたる巡禮ならん、年の頃は十二か三、賤しからざる身の生立、供をも連れず只一人、御山禪上致すこそ、扱々殊勝の、小人と、猶さりなりに氣をつくる、扱も不思議や、アノ稚兒が、上著に附たる紋所、竹の丸輪に向ひ鳩あはれこの身が、筑紫にて、加藤左衛門重氏と、名乗りし時の定紋ぞ、浮世は廣しと云ひながら、同じ紋とあるべきか、加藤の家の定紋を見れば、見るほど何となく、古里の事案じられ、悟りを得たる萱萱も、思はず花籠下に置き、又も落涙なし給ふ、ハツア迷ふたり、出家氣質にあるまじき、我ながら未練の歎き、今佛門に傾いて、受界門に入る時は、子は三界の首枷ぞ、かやうの事を思出しては、師の手前も憚りあり、免させ給へ、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛と、一心無我に、陀念佛、唯大切なる御花の御番さうぢや、と湧出る、涙ながらに萱萱は、花籠取上げて出でけるが、血筋の縁に引かれてや、行きつ戻りつやうくと、登らせ給ふ折からに麗へ下る石童丸親子の奇縁思はずも、跡ふり返り父御さは夢にも知らず見されしが、ハテ心得ぬアノお聖、われを見返り立止り、何やら獨言をのたまうて、涙の體に見おけるが、御慈悲ありげな御出家様、昨日までも

今日迄も御山法師に逢ふ度に、今道心と尋ねても、御山の様子を尋ねても、いつれも知らぬ存せぬと、少しも教へて下さらぬ御山法師は世にも邪見と思ひしが、アノ御僧はごこやりに情ありげな御方ぞ、さらばこれより呼戻し、御山の様子二つには、父の有所を尋ねんと、思ふは親子の縁のはし、只しほく立歸り、聲もかすかに哀れげに、登らせ給ふ御僧様、卒爾ながら旅の者問ひ度き事の候ふと、聲かけられて、蒨萱は、跡振返り打詠め、只今そこへ下られし小人なるか、愚僧を呼さめ何の御用に候ふぞと、尋ねに石童手もちく、もうし御出家様、私は御當山の其内に、戀しき人の候うて、國許より遙々と、さまよひこがれて参りし者、御山法師の其内に、今道心のお聖は、いつれのお寺に在しますぞ、今日で三日尋ねれど、いまだ御行衛知れませぬ、あなた御存じますすなら、何うぞ教へて下されと、涙をあやに尋ねれば、これはしたり旅の小人、如何に年齒が行ければとて、あまりと云へば、鹿相な物の尋ねやう、ハ、ア聞わた、そなたは新参の僧達を、今道心と思すのか、左様な譯にて候はず、御當山の習ひにて、昨日剃つたも、今道心、一昨日剃つたも、今道心、或は去年一昨年剃つたのも、又は今月今日、今其寺で剃つたのも、皆おしなべて今道心と申すなり、左様にお尋ねなされては、二夜三日はおろかなこと、三年三月尋ねてもなかく、戀しき人に逢ふことならず、去ながら折角愚僧を呼止め、教へ呉れとあるからは、せはしき身には候へども、お前の戀しき其人に、逢はれるか、逢はれぬか、二つに一つの證據になることを教へ呉れん、此方へ來やしやれ、小人と、我子と知らず手を取れば、父とも知らずいざなはれ、小高き所へ登られて、蒨萱は、遙向ふへ指をさし、ア、レ見られよ、あれなる大木は、奥山内の杉林、まつた此方なる樅のしげりしあの谷は、昔より親知らず子知らずの世捨の谷と申すなり、其の世捨の谷の因縁を語つてお聞かせ申さん、そなたのやうに諸國から御當山へ迷ひ來て、二夜三日も尋ねつく、廻り逢はざる其時は、戀しき人の俗の時の、國郡家名姓名尋ぬる人の姓名迄、懇ろに書記し、其世捨の谷の一筋道の傍に、彼建札を置くらば、御山法師は残りなく、大師の御廟へ言經修行の通ひ道、其今道心が、行掛り、逢はうと思ふ人ならば、建札

の其裏へ、何れの寺何處の學庵に、何の誰と名乗つて住居候はゞ、夫へ尋ね參られよと、建札へ裏書なして通るなり譬へ又現在尋ぬる今道心が行きかくり、札を讀んであればさて、此世を捨てたる名僧は、逢うては菩提の妨げと、思ふ出家は夜に紛れ、世捨の谷へ忍び行き、其建札を引抜きて、彼の谷底へ捨つるなり、建札がないならば、かつて逢ふこと叶ふまじ、近頃建札あるさて、皆投捨つる人ばかり、それぢやに依つてアノ谷を、昔は親知らず子知らずの、世捨の谷と云つたれど、近頃改めあの谷を、札捨谷と申すなり、そなたも戀しき人あらば、建札書いて置かつしやれ、逢ふも逢はぬも二夜三日の其内に、我子と知らればれんころに、語り聞かすも道理なり、石童丸は悦んで、よき事教へて下さつた、逆もの御恩に御僧様、建札書いて下さらば、生々世々の御厚恩偏に頼み上ますと、涙ながらに申しける、菫僧は聞給ひ安き事には候へど、爰は途中の事なれば、矢立の持參も候はず、墨筆なければ及ばぬこと、殊に愚僧は御開山の御廟所へ、花立替の役目未だ終らず、去ながらたつて頼みたいとおぼすなら、愚僧と共に是よりも、奥山内迄お戻りあれ、此御花を御廟へ手向け奉り、それより直ぐに愚僧が住居、萱の御堂へお連れ申し、書記して參らせん、まつた日もたけ候へば、見苦しくとも、愚僧が堂へお泊申さん、戀しき人に逢ふ迄は、譬ひ三日が五日でも、逗留すること大事なし、あまりそのみ苦にやんで、煩はぬやうにせよ、たごひ此の度逢はずとも、まめでさへだにあるならば、又逢はれまいものでもない、氣をうきくと持たしやれと、木石ならぬ菫僧が、情の詞に石童丸、有難涙はらと、戀しき人に逢はれます、建札書いて下さる上、行きくればお住居へ、お泊成されて下さるご、此の上もなき御情、建札書いて下さらば、萱の御堂はさて置いて、たごひ野の末山の奥、虎伏す野邊の果までも、阿方の御供仕る、放ればせじと附纏ふ、菫僧實にもご手を取つて、其所立出でて奥山内、大師の御廟へ急がる。

『小栗判官』の一節

常陸の小萩と世を忍ぶ、小栗の妻の照手姫夫の菩提の其の爲に、餓鬼病車虜げやと、主人に五日の

暇を乞ひ、心は物に狂はれど、狂女姿に身をやつし、さも美しき御顔を、わざと醜く化粧して、御身に烏帽子狩衣や、笹の小枝に幣切かけて振擡げ、女綱男綱を取分て、これく如何に道者衆みづからこそは父母兄弟の其の爲に、一引曳けば先祖供養、二引曳けばまんそ供養、三引四引は夫の爲、上下五日の施主に立ち、小萩が音頭で曳かすなり、萬屋長が門先に、兩輪が大地にめり込んで、數多の小坊主手を揃へ、押せども曳けども動かねば、照手の音頭で曳かすれば、妹脊の縁の引綱や、ぐるりくるりと廻り出す、姫が涙のはらく、垂井の宿を引出し、わづか五日の旅の空、いさ心は關ヶ原、不破の關屋の板庇、月洩れとてや疎なる、ハツアそれく大中臣朝臣親盛公の御歌に、吹かれては月こそ洩られ板庇、さく住荒れぬ不破の關守、昔にかはる今津の宿、美濃と近江の國境、姫も相模に在りし時、乾の御殿の奥の間で、錦の衾打重れ、伽羅の枕の睦言に、かはらせ給ふな夫上様、なにかはるべき照手やと、寢物語も早むかし、せめて一夜は柏原枕に結ぶ夢さへも、はや醒ヶ井の宿を越ぬ、嵐小あらし番場吹くさて風寒く、摺針峠の細道を、ふいさらふいと引おろし、あれ鳥居本の鳴く音さへ、空に一聲高宮の、市川渡れば千鳥たつ、御代もめでたく、武佐の宿、鏡山へさ著にける、チ、その昔大伴の黒主卿の御歌に、鏡山いざ立よつて見て行かん、年經ぬる身の老やしぬるさ、妻はさのみうつられど、鏡山とはなづかしや、ふいさらく引く程に、雨はふられどもり山の、かの餓鬼病の胸札に、露さて更に浮めれど、草津の宿はこれさかや、頃しも皁月の半にて、山田澤田を眺むれば、さも美しき五月女が、紺のはゞきに玉露、早苗さりにさ打つれて、田唄の節も面白く、植ゑや早乙女田を植ゑや、小草若を植ゑや、笠を買うてたもるなら、何畝なりとも植ゑまんしよう、植ゑや早乙女田を植ゑや、小草若草踏分けて、ふいさらくさ力なく、猶も思ひは近江路や、瀬田のから橋しきんさるさ曳上げて、橋の中央に車を留め、ハツア面白の景色よな遙に見ゆるは其のむかし、倭藤太秀郷が乙矢を以て射止め給ひし百足山、此方に高きは石山寺、秋の夜いかに澄みぬらん、月の影には引かへて、姫の心はさぬやらず、堅田に落つる雁の音を聞くにつけても、夫のこき、叶ふこきならみづからも、冥途さ

やらに尋れ行き、逢ひたい見たいと思へども、あは津に歸るあの舟が、名に負ふ矢走の歸帆とや、比
夏の高嶺にあらねども、心に暮雪を積るなり、あれ三井寺の鐘の音も、いさゝ哀れな唐崎の、姫は浮
世の一つ松、心はしぐれ夜の雨、滋賀の浦和に舟をめて、湖廣く見渡せば、數多の漁船往きかよひ、櫓
權の音に驚いて、ばつと鷗の立つにさへ、あらいたはしの照手姫、あれ鳥さへもあのやうに、つがひ
放れぬ女、夫仲夫に別れてみづからは、婿定めぬやもめ、鳥思へばく悲しやと、涙に聲も打しめり、
ぬいさらくさ曳く車、粟津松本膳所の城、赤前垂の姥ヶ茶屋、右手に高きが源氏庵、關の明神伏拜
み、既に三日の暮つ方、登る大津や關寺の、玉屋が門にさ著きにけり。

堺町葺屋町の各座

隨筆『牟藝古雅志』に延寶九年天和元年なりの堺町葺屋町の繪圖面あり、貞享二年印行の『野良
三座記』役者評判記なりにも亦堺町葺屋町の繪圖面を載せて居る。延寶九年と貞享二年とは
其の間僅に四箇年なるに、兩圖各座の位置に相違あるは、想ふに天和二年のお七火事に
て中村、市村兩座を始め焼失し、彼此れ異動を來たしたるものなるべし。兎にも角にも
此の兩圖によつて、當時の芝居街しばゐまちの盛況を想見することが出来るのである。
左に其圖面を轉載する。

尙ほ参照に便するため、初めに堺町葺屋町附近の一目圖を添へた。

屋 跡

大屋 大郎兵衛	市之丞	傳六	庄兵衛
------------	-----	----	-----

七太夫	たばこや善六	あびや市六	本屋八郎右衛門	和泉太夫	太田屋忠兵衛	つたや市右衛門	おしま太夫
-----	--------	-------	---------	------	--------	---------	-------

見世もの	見世もの	見世もの	見世もの
------	------	------	------

芝居	芝居	芝居	芝居
----	----	----	----

市村竹之丞	居	竹之丞
-------	---	-----

字	の源	次
---	----	---

和泉十郎	庄左衛門	茶屋
------	------	----

見世もの	見世もの
------	------

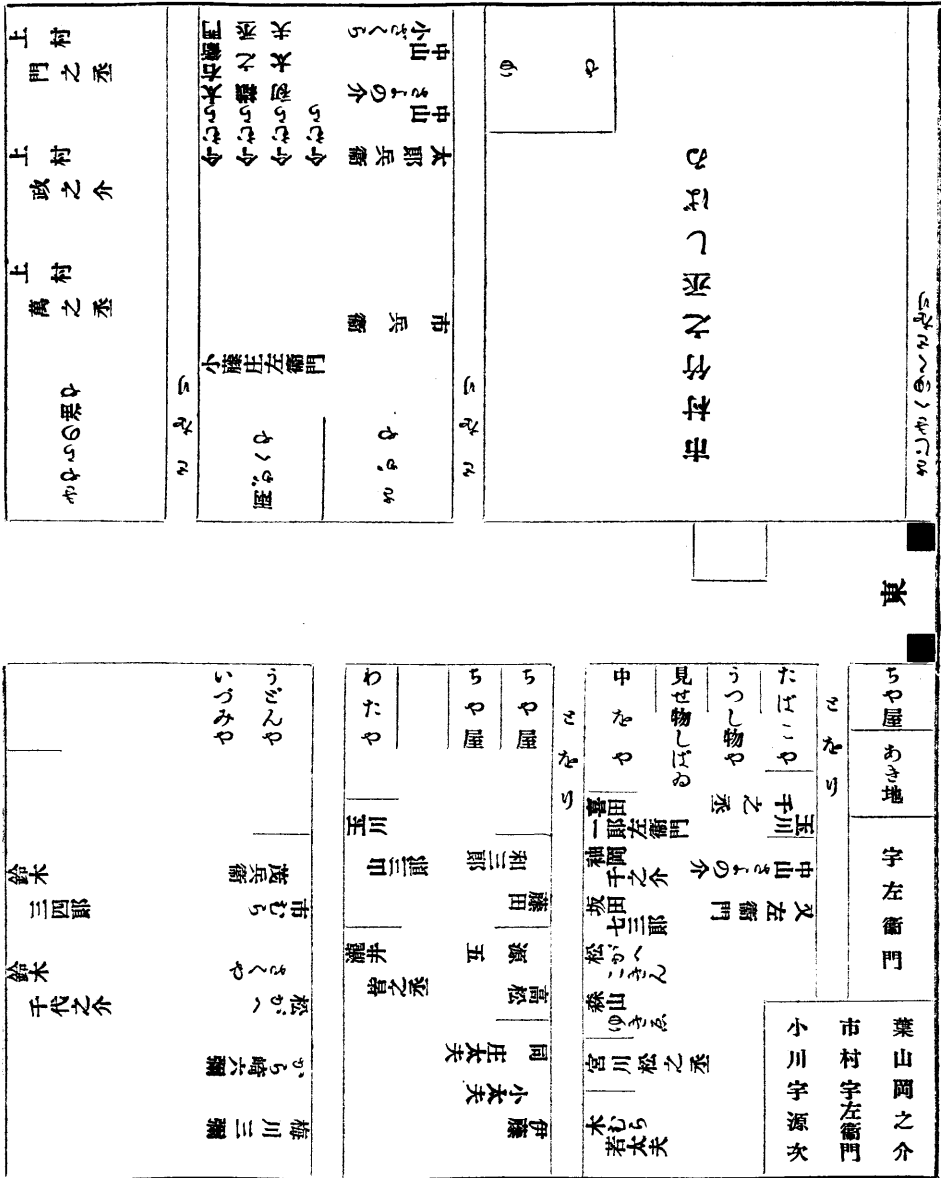
大和利兵衛	花才三郎	見世もの	傳内
-------	------	------	----

天羅八太夫	芝居	見世もの	中村善五郎
-------	----	------	-------

芝居	芝居
----	----

伊兵衛	市郎兵衛	七郎左衛門	市郎左衛門	豊近道中	半
-----	------	-------	-------	------	---

(其の二) 菅屋町の圖



『劇場新話』の選者は不詳、
年中大小の行事より各座の
規約、之れに關する一切の
人物等細大漏さず繕集した
り、筆を寛政享和の極盛時
に止め居るより見れば文化
の初に成りしものなるべ
し。

『劇場新話』には芝居町の變遷に就いて左の如くに記して居る。

御當地歌舞伎芝居の始りは、猿若勘三郎也、元祖勘三郎といふものは、生國山城にて、幼年より此の道を修行し、御當地御繁昌に付、元和年中御當地へ下り、かぶき芝居を御願ひ申上候處、寛永元年甲子年二月十五日、忝も天下泰平國家長久の御吉例として、中橋に於て初て歌舞伎芝居太鼓櫓御高免あり、其後中橋は御城近くに依りて、引地を被下置芝居引移りしなり、其節の地所は禰宜町といふ所也。

禰宜町は、長谷川町横町也といふ、一説に今の人形町なり共いへり。

又堺町へ移る、上堺町といふは今の葺屋町の事也、昔は上下と二町ありし下堺町は今の堺町也、上堺町は猿若勘三郎村山又三郎と芝居二軒兩側にありて、下堺町には彌之助操、又は小芝居のみにて、上堺町程は賑ひ兼しにより、兩町ともに同支配の事故、町内相談の上、大芝居一軒づゝ上下へわけ度旨御願申上、猿若と村山と鬪取にて、勘三郎下堺町の鬪に取當り、今の所へ引移る。

此の時堺町名主は帶刀にて、近藤喜兵衛といひし由。云々

『洞房語園』異本には、

元和三年に至り、甚右衛門を御評定所へ被召出、御願申上候通り、傾城町の事御免許あり、葺屋町の下にて、二町四方の場所を被下候、此節甚右衛門に遊女町總名主被仰附、五箇條の御書付御法式あり。

元吉原の舊宅、和泉町、高砂町、住吉町、難波町、是にて方四町の内なり、曲突、河岸の小

堀は曲輪の外堀也、今大門通りといふは其の時の大門の通りなり。

葭茅の生茂りたるを刈捨、地形を築立、町作りしたるゆへ、葭原と名づけしを祝ひて吉原と書替たり、爰に葭屋町の下とある、これ元誓願寺前のこと也、禰宜町、雪駄町など町並に見ゆ、此の折からは未だ芝居は中橋にて興行ありて、葭屋町の邊は葭沼なりしを築立、二町四方の廓を造立せし也、當時江戸橋の方より葭屋町へ渡る橋を思案橋といふ、本名親父橋といふ、これ庄司甚右衛門廓への都合よき様にとて懸たる橋也、されば諸人廓へや行ん、宿へや歸らんと案ずるとて、俗に思案橋と呼來れりとかや、當世は傳馬町二丁目、三丁目の通りを、大門通りと云ひ、古名を殘すこと世人の知る所也、元祿年中の江戸繪圖には、堺町の邊に、いまだ吉原町の古名残りて記しありける。

思案橋一名親父橋は此の書の誤りならんか、思案橋は小あみ町一丁目に掛けたる橋也、親父橋は照降町よりふし町へかけし橋也。

とあり、彼此綜合して葭屋町附近の沿革一般を稽ふべきである。

操り芝居興行事歴の一般

東海道名所記六卷に淺井了意の選なりと云はる。本書の成りしは萬治年間にして寛文中に刊行したるもの如し。

淨瑠璃各派の興行事歴は、詳かに考證し難し。『東海道名所記』には、

それよりこびき町の方へ行たれば、喜太夫が淨瑠璃、それより又さかひ町のかたへ人あまた、其外實かうそ、異類異形のものを見する申略ゆくほどに、あとに付て行て見れば、こゝは猶おびたゞしく、大薩摩小ざつまなど、とて、鼠戸をならべて太鼓をうつ、又勘三郎とかや聞ねし、だうけものが女形とやらん、ことくしきしばあ、さんじきをかまへて歌舞伎がましきことをいたせり、鼠戸に立よりてみれば、ねこせなかなになりて、はい入者もあり、うはひげを松蟲の

曳尾庵は文化の頃江戸の四谷に住せし醫師也。俳諧を嗜み召水又は南竹と號せり云へど通稱は不詳。『我衣』は古老のもの語、古寫本中の珍らしきおもしろく節を抜寫したるものに係る。

こゑにひねりあげて、面のかぶりかまきりの如くにやせたるをどこなげづきを、鑓おとがひまで引かぶりて、げんくわを買に来れるやつこもあり、老たる若き男女、伊勢あみがさ、あふみすげがさをきたるもあり、かづきわたぼうし、おくじまのはをり、さまざまなる人々あつまりたり。

と記し、曳尾庵の『我衣』には、江戸の芝居に關する聞書の廉を、左の如くに記して居る。

寛永元甲子年勘三郎芝居濫觴ハサシオク、夫ヨリ二十年後ニ市村竹之允芝居初

ル、山村長太夫元森田勘彌斷皆々勘三芝居ヨリ出ルナリ、又都傳内延河原崎權之

助天和等芝居始ル、淨瑠璃芝居ハ天滿八郎太夫天和セツ佐渡七太夫寶永セツ武藏

權太夫結城孫三郎淨瑠璃、元祿和泉太夫大サツ、元永閑サツマ外記寶永同土佐皆々和天

肥前太夫門弟ナリ、後享保末ヨリ上方ヨリ義太夫節門弟ドモ多ク來ル。

元文比ヨリ宮古路豊後ト云上方ブシ來リハヤル。

南京芝居和上ニテ糸ヲ以テツカフ。

元祿ノ比迄裏新道ハ紺屋ノ干場タリ、正徳比ハ人家間ニアリ、享保年中ニ至テ茶

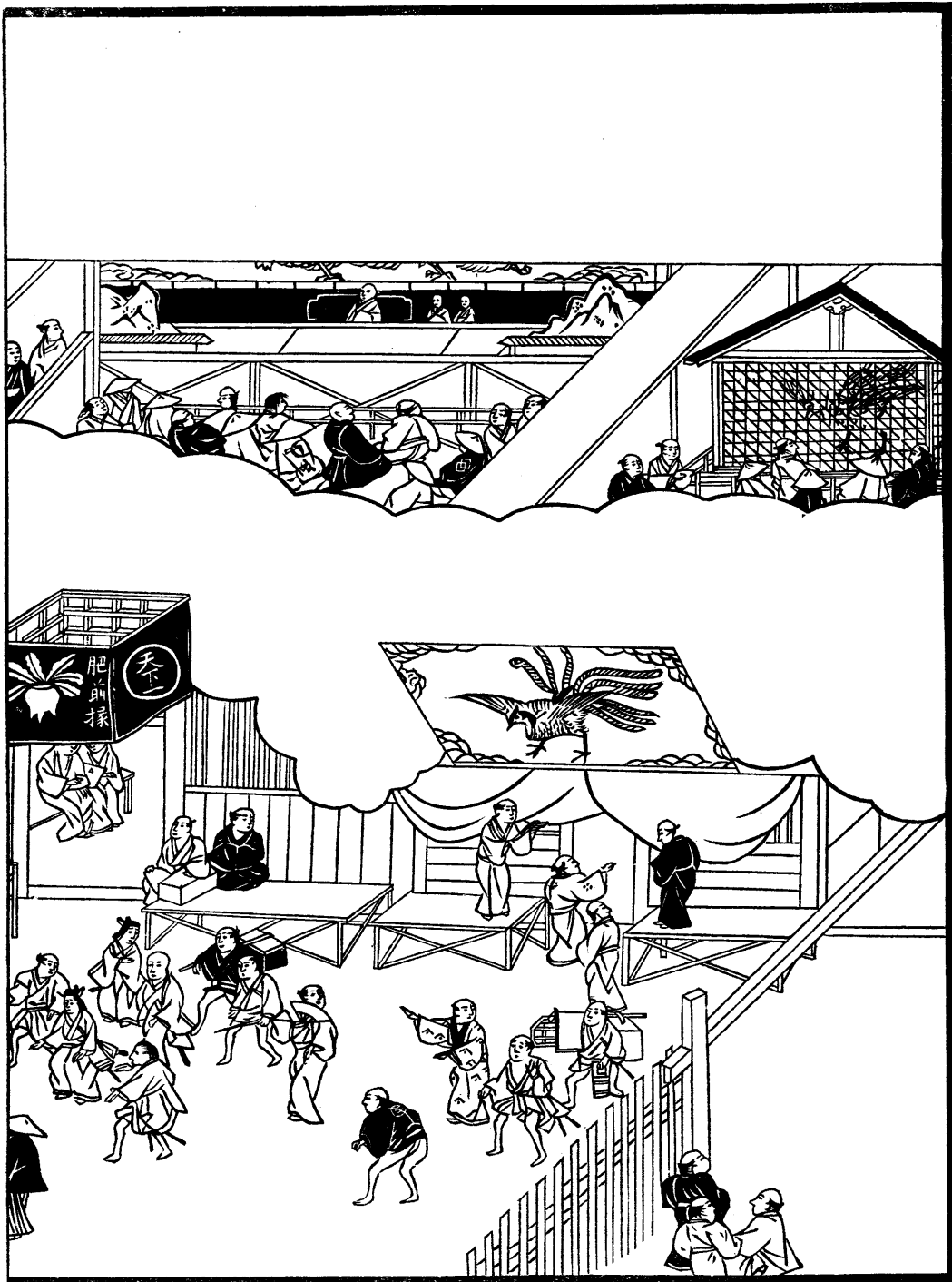
屋野郎屋立竝ブ。

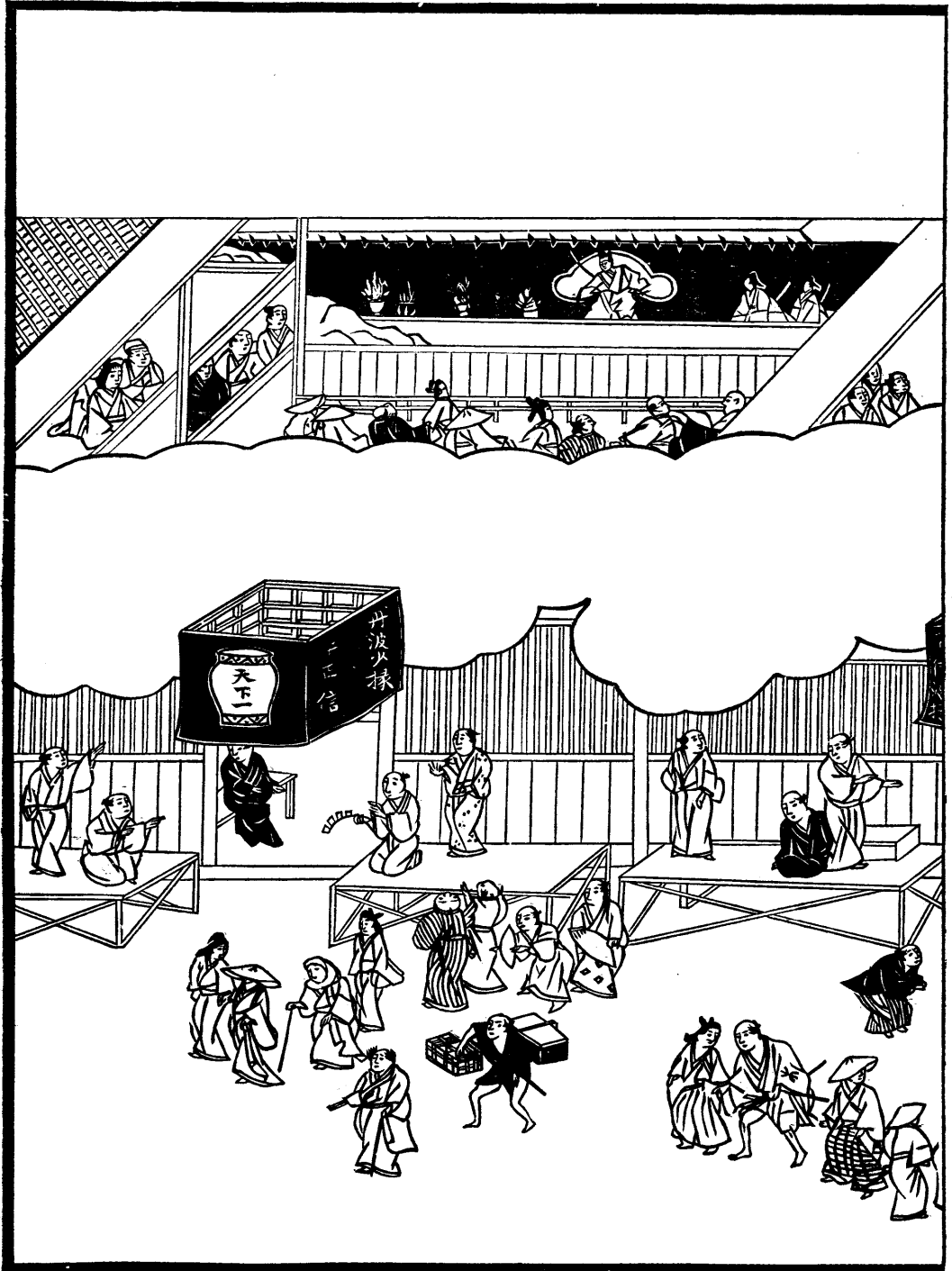
江戸半太夫ト云淨瑠璃、元祿年中宇左衛門芝居ノ向へ操芝居出シタリ、是ハ元肥

前太夫門弟ニテ永閑ニ續キタル門弟ナリ、外記土佐ヨリモ古キ弟子ナリ、又享保

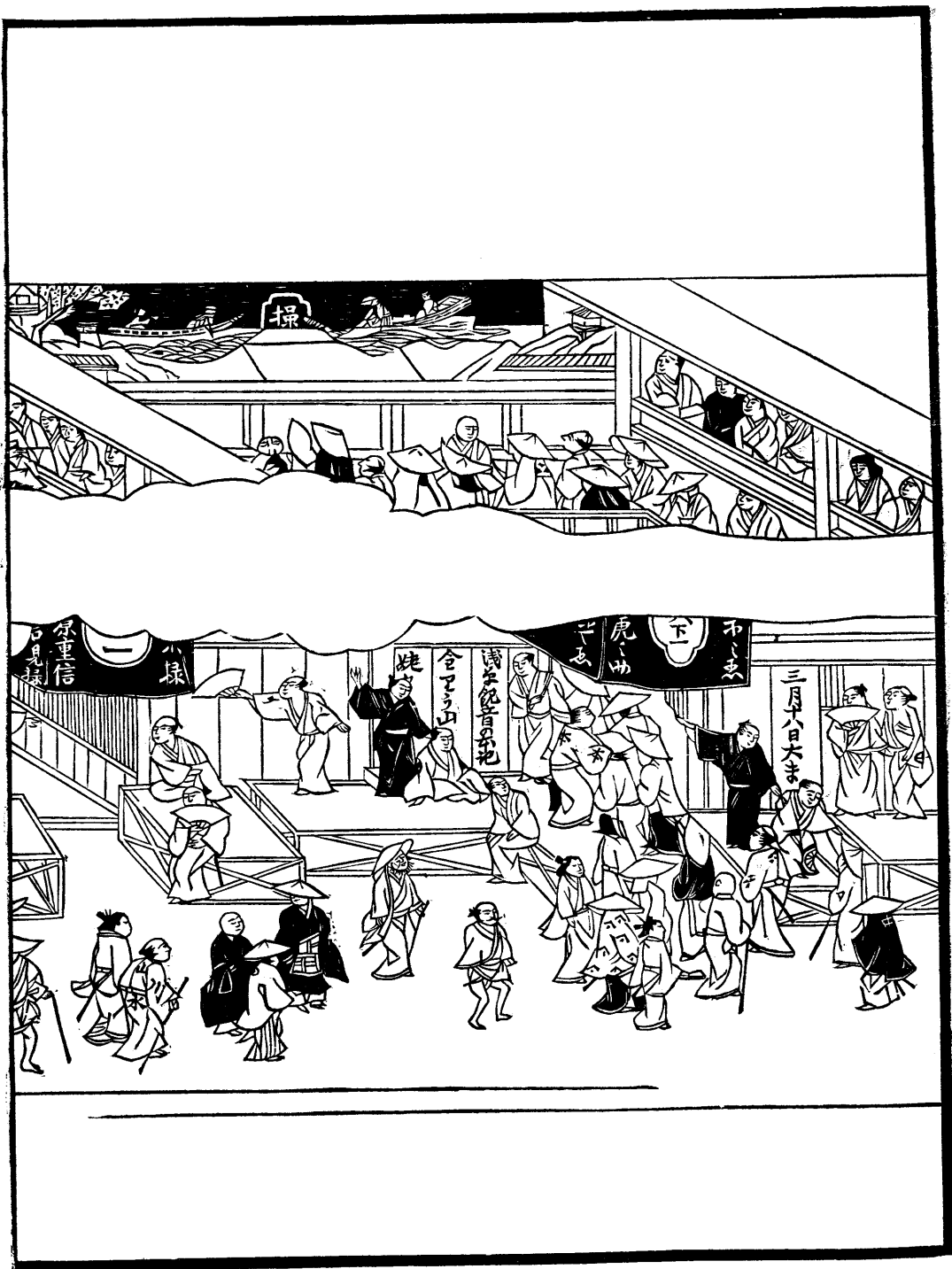
年中河東トイヘル淨瑠璃出タリ、半太夫ガ弟子ナリ、此ノ河東ハ元品川町出生ニ

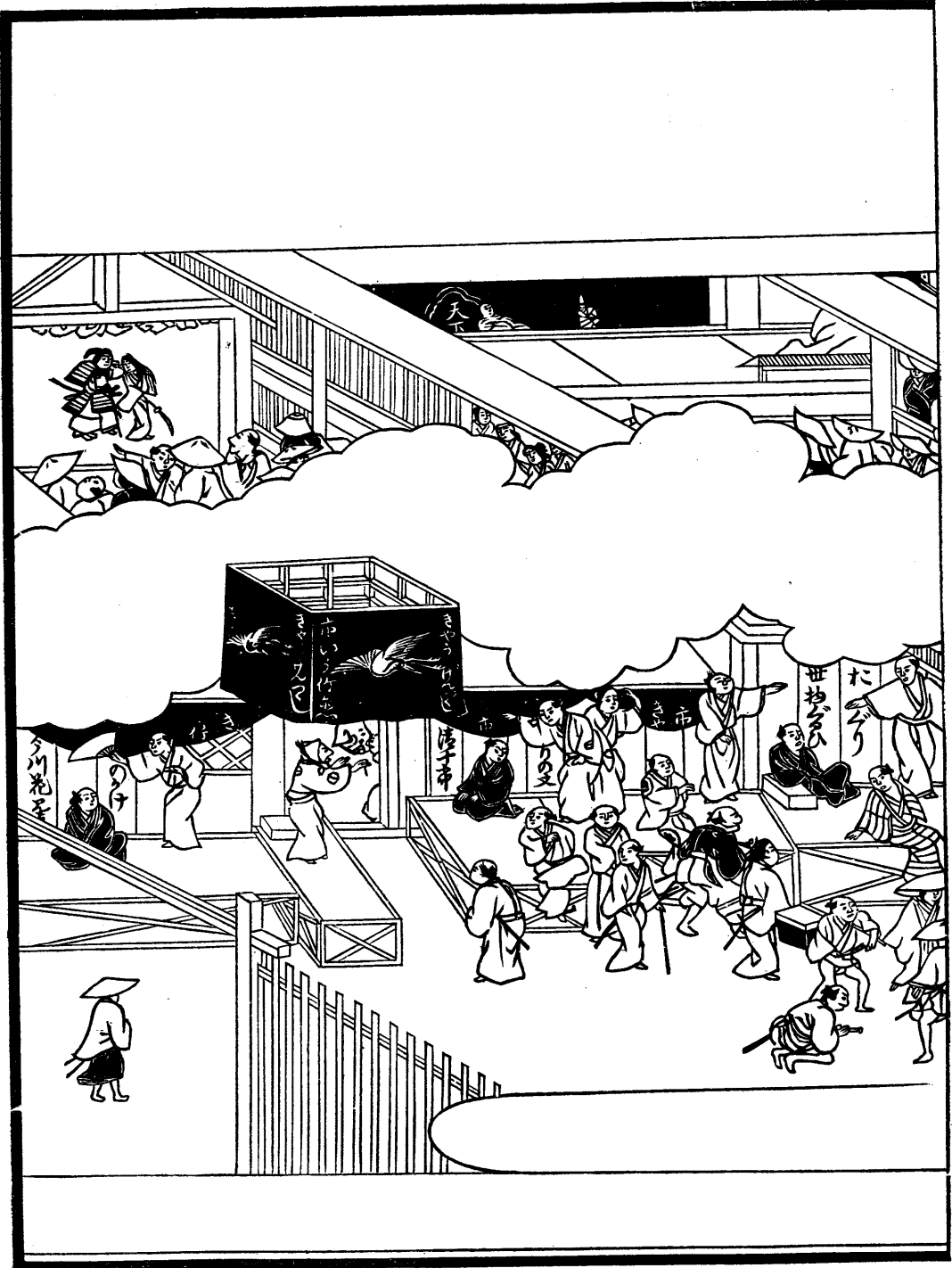
テ親ハ天滿屋市十郎ト云備前ノ松平大炊頭様魚御用相勤メタル町人ナリ、河東





(一の其) 圖の居芝町屋葺町堺





ハ俳名ニテ本名藤十郎、又名字ヲ加藤ト云ヘリ、是モ一派ノ祖ナリ、元文ノ比死ス、寺ハ築地本願寺中ニ墓アリ。

貞享ノ比手品ブシトテアリ、本小田原町手品市左衛門ト云者ノ子ナリ。

寶永ノ比小山次郎ト云人形ツカイ有、ヤグラヲ半太夫芝居跡へ上テ年久シク芝居シタリ。

貞享マデ淨瑠璃ト云事ナシ、加賀ブシ又朗齋ト云大ニハヤル、後肥前太夫出ル、依之肥前淨瑠璃ニハ加賀ブシ多ク交ルナリ。

寛保元酉三月ヨリ九月比マデ、大坂竹田近江大椽、堺町勘三郎芝居ノ向ニテ、カラクリ竝ニ子供狂言、令見之。

表ノ方左右ニ竹二本植額ヲ正面ニカケル、番附子供狂言住吉ヲドリ。

カラクリ三歳計ノ子供人形指人カブリヲス、指ヲ折テ歳ヲ云フ、小便ヲ放ス、○五歳計ノ子供人形三味線ヲ弾ク、大ツツミ小鼓ヲウツ○狂言三條小鍛冶四方髪ノ人形楊弓ヲ射ルカラクリ○狂言化物屋敷クワイノ師ノ人形カラクリ舟辨慶ニカハル○狂言鼠ノ穩里道成寺カラクリ人形○狂言セワゴト○春日ノ宮殿燈籠ニ火ヲオノヅカラ燈スカラクリ○狂言大塔宮○船ノカラクリ蟻通ノカラクリ、右貴賤老若群集ス、初日ヨリ三日之間アマリ人多キ故、木戸ヲ閉テ不入。

以て其の一般を推すべきである。左は元和八年より元祿八年十寸見河東死去の年に至る、七

十四年間ノ江戸歌舞伎と操り芝居ノ重要事項ノ略年表である。

江戸歌舞伎と操り芝居年表

重要事項にして各書に散見するも、確と其年次の明かならざるものは本年表には之を省きたり。例之ば元和八年以前の記事、若しくは浄雲の東下り、又は丹後親子の浄瑠璃將軍上覽の記事の如し。

元和八年 中村勘三郎江戸に下る。

同 九年 能狂言を歌舞伎に仕組み興行の事を出願し許さる。

寛永元年 二月十五日中橋に櫓を上げ、名を猿若座と名づけ、三月より開場す。小供二三人自ら唄ひつゝ踊り、一切にて追出す、宛も能の間の狂言の如しとなり。

同 二年 八月京都より生島丹後下り、同じく中橋に櫓を上げ、是れを若衆歌舞伎と云へり。

同 四年 鎌倉河岸の原へむしろ張の小屋にて念佛踊始る。——間もなく御拂ひとなる。

同 五年 各所に女歌舞伎起る。

同 六年 女舞、女歌、舞伎等禁せらる。

同 七年 十二月男女混交の興行嚴禁せらる。

同 九年 中村勘三郎の芝居移轉を命せられ、在座の場所御城禰宜町へ、移り興行。

同 十年 中村座にて猿若小舞に所作の振りを附け、杵屋喜三郎三絃

の合方を入れて踊る 歌舞伎に三味線を用ゐたる始なり。

寛永十一年 五月村山又三郎 名こや山の弟子 泉州堺より下り、上堺町にて櫓を上げ、子供五六人にて地唄手踊の興行を始む。是れ市村座の祖なり。

鎌倉河岸の小芝居、残らず芝居町 今の柴井町なり へ引移りを命せらる。

同 十二年 薩摩淨雲の淨瑠璃差止めらる。

同 十三年 衣裳に華美を盡したりとの廉にて、座元勘三郎彦作等咎めを受く。

同 十四年 杵屋喜三郎勘五郎と改め、猿若座の狂言に酒呑童子七段、獅子狂ひの曲を演じ、好評にて大に流行し、市中の婦女子其弟子となりて學ぶ者多し。

同 十五年 虎屋喜太夫堺町に説教淨瑠璃を興行す。

同 十六年 三月中村座にて、若衆今川百之助、村山十平次、千之丞等横笛貴船の道行所作事を演じ大當り。

同 十九年 山本長太夫 始め小 木挽町四町目に操り芝居興行。

同 二十年 芝居座元一同より、男女仕形區別相立狂言仕度旨嘆願し、許可せらる。以來興行中男形女形と肩書致し紛敷義無之様との申渡しあり。役者を立役女形と區別することは之に始まる。

正保元年 狂言中に現在の名前を用うることを禁せらる。

同 二年 市村宇左衛門作者都傳内此人後に座元となると謀り、二番續の狂言を

仕組み、一と切毎に上より黒幕を下すことを始む。

笠屋三勝・芝明神社内に櫓を上ぐ。宮芝居の始めなり。

同 三年 五月中村座にて上棧敷を作る。

同 四年 山村座にて狂言踊と云ふことを始め、踊の間に臺詞ゴトを入れ、
ることを工夫し、又幕毎に此處何々と書き出すこととせり。

慶安元年 瓦崎權之助筑前人江戸に下る。京村山左近太夫の弟子練絹の一

重を著し、帽子を冠り、女の眞似を能く寫せりとなり。

同 三年 九月又三郎彦作等召されて狂言貴船今川七福神等を將軍

の覽に供す、鳥目二百貫文を下さる。

同 四年 中村座堺町に移る。

將軍病氣に付き中村勘三郎屢城内に召され、種々上覽に供す。青地

金襴の衣裳、鳥目六百貫文を下さる。

彦作勘三郎等歌舞伎役者へ鳥目三百貫文宛下さる。

右は將軍病中諸藝上覽に付ての下賜也。

承應元年 芝居停止。

同 二年 解禁。此時若衆美少年の前髪を剃らしめ、女形は前髪跡へ

染色の習を卷かしむることとなる。

承應三年 市村座にて二番三番續の狂言を始む。此時始めて鬘を附けて演せしに、珍しかりければ大評判なり。此れより他座の役者も之れに倣ひ、鬘を付けることを始む。

明暦元年 山村座、曾我十番切の狂言。

同 二年 八月各芝居の棧敷取崩し申付けらる。

萬治元年 六月勘三郎死。悴明石二代目勘三郎を相續す。

此人より猿若を改め申

村氏さなる、時歳十二。

同 二年 役者評判野良蟲刻成る。

同 三年 うなぎ太郎兵衛木挽町五丁目に芝居を建つ。此れ森田座

勘彌の祖也。

寛文元年

桐大藏

相州小田原の人なるべし、寛永六年小田原にて男女打交り芝居を興行し禁止せられたるこそ歌舞伎年代記に見ゆ江戸

に來り木挽町五丁目に芝居を建つ。地所割坪敷等の事より訴訟と

なり、結局間口七間奥行十間と定めらる。

此れより推すも當時の芝居の規模は大概想察さるゝのである。

十二月、江戸町觸「諸見物芝居仕候者堺町葺屋町木挽町五丁目此處

にて可仕候自今以後他所にて堅仕間敷事」この達しなり。

同 三年 中村座にて四季總踊を演ず。長唄八兵衛三弦杵屋六左衛

門、同喜三郎にして、噺方舞臺へ並び、花やかなる所作事とて好評なり。

同 四年 市村座に續狂言、引幕、大道具立始まる。作者都傳内、今川忍車と云ふ續狂言を作る。

桐座にて續狂言、引幕を始む。

正月江戸町觸——「狂言盡は不及申、淨瑠璃芝居、其の外諸芝居にて島原狂言仕組、傾城の眞似一切仕間敷事」との達なり。

同 五年 森田座にて曾我四番續の狂言を演ず。七月結城孫三郎葺屋町に操人形の櫓を上ぐ。是れ太鼓櫓を上げし始なり。劇場年表

同 六年十月江戸肥前様杉山丹後様の男なり、尤も肥前様と受領したるは延寶元年なり葺屋町に操芝居の櫓を上ぐ。

近江語齋堺町に人形芝居興行。

同 七年 元祖中村傳九郎初舞臺。五月中村座上棧敷許され簾を懸く。

同 八年 初めて舞臺に花道を付く。

九月河原崎權之助櫓を免さる。

同 九年 玉川彦十郎堺町に櫓を上ぐ。

附舞臺出来る。

天満入太夫堺町に説教節操芝居興行。

同 十一年 和泉太夫堺町に操芝居興行。願人野呂松勘兵衛なり。

江戸孫三郎堺町にて興行。

延寶元年 狂言名題始る。

中村座にて市川段十郎祖元初舞臺。四歳十顔を塗り荒事を勤む。

杉山丹後太夫口宣を拜して丹後椽藤原清澄と稱し其子又受領して

江戸肥前椽藤原清政と稱す。

同 二年 土佐虎之助二代目薩摩次郎右衛門受領して土佐少椽橘正勝と

稱す。

同 三年 五月山村座にて勝鬨譽會我——段十郎五郎を勤む。會我

續狂言の始めなり。

同 六年 古今役者物語刊行。

六月二十七日大久保加賀守二の丸にて虎屋源太夫の操りを將軍の覽に

供す。天日記

同 八年 段十郎不破伴左衛門の狂言大當り。

四月十日土佐少椽の淨瑠璃操り二の丸にて上覽。外題は酒呑童子也。同二十七日永閑の淨瑠璃操り上覽。人形は岡才次郎勤めたり。

一一 言話

女形玉川千之丞始て黒帽子を冠る。

天和二年 十二月中村市村兩座焼失。お七火事

同 三年 薩摩座堺町にて興行。一本には貞享二年の條に薩摩外記堺町に操り芝居興行と記せり。

貞享元年 段十郎鳴神の狂言大當り。

同 二年 操り芝居其外天下一の號を付けることを禁せらる。

劇場年表には貞享四年の條に歌舞伎狂言並操座大夫役名主附添南奉行北條安房守殿へ罷出以來看板に天下一の號書認候儀不相成旨申渡さるゝ記せり。因に受領の證として樽幕に天下一と記すこと延寶の頃より盛に行はれたりし也。

野良三座記刊行。

同 三年 中村座段十郎伊左衛門化身の場大評判なり。是の狂言よ

り本舞臺となる。

同 四年 四座評林刊行。

元祿元年 春狂言中村傳九郎四代目勘三郎奴朝比奈の役大當り。

同 二年 不破名古屋の狂言始て興行。

同 四年 三月水木辰之助下る。四季御所櫻狂言本刻成る。

同 五年 荻野八重桐元祖下る。

同 六年 市川段十郎上京此時より段を團に改めたり。

同 十年 市川團十郎江戸に歸る。市川九藏初舞臺。八歳

寶永元年 二月十一日杉山半六市川團十郎を刺す。七月九藏二世團十郎と相續す。

同 六年 嵐三十郎元祖下る。

正徳元年 五月森田座、傾城逆澤瀉―景清傳九郎三保谷坂東又九郎にて鑢引大當り。

同 二年 江戸半太夫堺町に操座興行。

同 三年 山村座團十郎助六大當り。元祖中村傳九郎死。

同 四年 二月山村座斷絶。

三階棧敷禁せらる。

江戸宮芝居禁せらる。

同 五年 都一中・市村玉柏市村座へ下る。

享保二年 澤村宗十郎下る。

同 三年 三芝居屋根瓦葺となる。

二代目市川九藏元祖澤村惣十郎森田座へ下る。

同 七年 正中中村座河東淨瑠璃神樂獅子に團十郎助十郎狂ひの舞

大當りにて、獅子の玩具まで出来て大に賣れ行きたりと云ふ。

同 八年 二月中村座開座百年の壽興行。

同 九年 四月三芝居下棧敷願之通御免塗家造仰付けらる。近き比

まで芝居表懸りをすべてなまこ壁にしたるは此時の形の残りたるものなりと云はる。

同 十年 七月二十日河東節の祖十寸見河東殘。

第七章 義太夫節以前の京阪浄瑠璃

京阪浄瑠璃の勃興時代

源太夫上京以前の京都の浄瑠璃 源太夫の高弟

期せずして師の入京の露拂の役目を勤めた宮

内と喜太夫 師に優れたる伎倆の逸足播磨と角太夫

京阪浄瑠璃の恩人偉勳者としての源太夫の

位置 源太夫が傳へた曲風

京阪兩地に流行した金平節

其の流行の渦外に超然

たりし山本土佐と宇治加賀 著しく金平節化する井上播磨の曲風

山本土佐 宇治加賀 井上播磨

源太夫上京以前の京都の浄瑠璃

京都は浄瑠璃發祥の地であつたに拘はらず、其の發達は遅々として太た振はざりし。『竹豊故事』には「京都に昔は浄瑠璃はやらす、説經與八郎、歌念佛日暮林清、同林故、林達等を玩べり。寛文年中に江戸虎屋源太夫上京有つてより浄瑠璃繁昌し、常芝居も出來せり。」と記して居るが、這是餘りに不詮索なる斷定である。『山城名跡志』には寛永十二年に、島田萬吉と云ふ名代にて京の四條五條北野祇園に於て浄瑠璃及歌舞伎を興行し、三十日間程づつ勤めたる由を記し、『歌舞伎事始』には「二代目の國女、五條にて芝居興行せし時、島田萬吉と云ふ女あり、才智あるものにて共に之を計り、女名代といふことを始め、浄瑠璃操りをなし、切まくをも始めたり。其の比六字南無右衛門と云ふ女太夫、同じく操りを興行す」云々と記せることは、既に前にも述べたる所の如し。

『東海道名所記』には、

又浄瑠璃は、そのころ京の次郎兵衛とかやいふ者、後に淡路丞と受領せし西の宮の夷かきをかたらひ、四條川原にして鎌田の政清が事をかたりて、にんぎやうをあやつり、そのうち、がうの姫、あみだのむねわりなどいふ事をかたりける。次に河内左内といふもの出たり、女にもなむゑもん、左門、よしたかなごよて浄瑠璃をかたりけるを、歌舞伎と一同に女はとどめられぬ、ちかきころ江戸より宮内といふもの上りて左内とせり合ひ、いろ／＼めづらしき操をいたしける。ほどなく宮内は死けり、左内もなくなれり、今は其の子とも打續きて操をいたし、面々受領せし内に喜太夫といふもの上總椽になりて太平記を語る。其曲節平家とも舞とも謠とも知れぬ島ものなり。」

と記して居る。由是觀之、源太夫上京以前の京浄瑠璃の一般は想察することが出来るのであつて、喜太夫が上京したのは明暦三年なるも、其の以前既に承應元年の夏には、杉山七郎左衛門親子が上京して、四條河原に興行し、口宣を拜して丹後椽藤原清澄と名乗り、其の子亦肥前椽藤原清政と受領して居る。伊勢島宮内が入京の年次は明かならずと雖、『東海道名所記』は萬治元年の板行なれば、近き頃と云へば承應明暦の頃なるべく、喜太夫と殆ど前後して入京したるものと見るべし。されば源太夫の上京以前既に相應の流行を見つゝありし事は明かである。

源太夫の門下生中指を屈すべきは、虎屋永閑、虎屋喜太夫

上總少椽
藤原正信

伊勢島宮内、井上播

期せずして其の師の入京の露拂の役目を勤めた宮内と喜太夫
師に優れたる伎倆の逸足播磨と角太夫

京阪淨瑠璃の功勞者としての源太夫の位置

源太夫が傳へた曲風

磨、山本角太夫の五人である。永閑は江戸を出でず、喜太夫、宮内の兩人は源太夫に先だちて京に上り、期せずして其の師の入京の露拂の役目を勤めた。源太夫の上京の動機は此の兩人の勳に動かされの事にはあらず。播磨と角太夫とは源太夫が入京以後の弟子にして、師に優れたる伎倆の逸足なりし。

源太夫の上京は寛文年間の事ではあるが、其の年次は明でない。彼は淨雲門下の高弟にして、伎能に於て見るべきものありしは勿論なりと雖、別に特技を發揮して一派を立てたと云ふのではない。何處までも其の師淨雲の曲風の忠實なる宣傳者なりし。思ふに京阪淨瑠璃の革新作興の功業は、彼れ源太夫の力と云はんよりは、寧ろ門下の秀才播磨、角太夫竝に伊勢島宮内の門下より出た宇治嘉太夫、此の三人の力に由るもの多しと云はねばならぬのである。角太夫、播磨、嘉太夫は實に京阪淨瑠璃勃興時代の三雄なりし。されど久しく沈滞せる京阪淨瑠璃界の空氣を攪震して一道の生氣を注いだのは實に源太夫である。澤住瀧野の兩檢校が斯道の端を啓いて以來さしたる面目も改めず、遅々として伸びざりし京阪淨瑠璃の前途に對し、生氣潑瀾たる勃興の機運を促進するの動機を作つたのは源太夫である。源太夫は實に關西淨瑠璃道の大恩人、布教開傳の偉勳者にして、同時に現代江戸節淨瑠璃各派の遠祖である。

源太夫が傳へた曲風は、雄勁粗淡な、淨雲譲りの曲節、其の儘のものにして、淨瑠璃の正本とても亦、淨雲又は淨雲の高弟等が語り古した、在來正本其儘のものを踏用して居たのであつたらうと想はるゝのであるが、之を上方風の優婉濃厚の節調に語り易へたの

が山本土佐角太夫にして、之を大阪式の摯實な、平民的な曲風に語り變へたのが井上播磨である。

源太夫は金平節の語り人には非ざりし。但、武勇物語的淨瑠璃の總てを擧げて、金平節と汎稱す。一種の分類の仕方より觀れば、源太夫も亦金平節の語り人なりと稱するに彼が傳へた曲風は、粗淡は粗淡なり、雄勁は雄勁であつたにしても、金の出來ないでもない。彼が傳へた曲風は、粗淡は粗淡なり、雄勁は雄勁であつたにしても、金平節の如き、單に武辨一方、殺伐粗放なものではなかつたのである。

萬治の初め比よりして江戸の金平節は京阪兩地に入り、京都にては虎屋喜太夫、大阪にては伊藤出羽椽、虎屋源太夫大阪源太夫と呼べり等の操り座は、盛んに金平張りの淨瑠璃を上げ、複刻の金平本をも頻發し、井上播磨の如き亦、多少此の渦中に捲き込まれたるの感あり、一時は京阪淨瑠璃界を席捲するほどの勢を呈したのでありし。されど此の流行は須叟にして止み、寛永三、四年頃を之れが流行の最盛時代として、倏ち閉息して仕舞つたのであつた。

金平節の流行は無論源太夫の傳唱したものでなければ、又其の鼓吹したものでないのである。畢竟江戸に於ける流行の餘波を受けた一時的の現象にして、按ふに其頃の技術は太だ幼稚にして、大阪も亦爾り淨瑠璃の正本はいづれも京に上ほせて彫刻板行して居たりしもの如し、されば金平節の正本も等しく京都にて板行せられ、新作出づる毎に直に京都人の手に傳はり、大阪に傳はり、讀本として先づ其構想、内容が紹介せられ、一方江戸に於ける金平節盛況の噂は、夫れより夫れ、京阪人士の間に傳はり評判となり、倏忽にして盛んなる流行を見るに至りたるものなるべし。其の流行の期間たる太だ短期にして瞬間的なりし。されど此の短き流行の期間に於てさへ、金平節淨瑠璃正本の板行せられたるもの、『天狗の羽打』、『四天王最後』、『頼光蜘蛛切』、『朝夷島渡り』、『朝夷かたき論』、『公平關破り』、『公平法問諍』、『公平化生論』、『金時洛陽入』等

金平節流行の渦外に超然たりし山本土佐と宇治加賀

著しく金平節化せる井上播磨の曲風

山本土佐

數十種に及んで居るのを見て、如何にさまざまいき勢を以て一時の流行を極めたかど、想はるゝのである。

金平節流行の渦中に處して、飽まで超然として其の渦外に立ち、濃婉巧緻の曲風を維持して渝らざりしものは、山本土佐と宇治加賀の兩人である。

井上播磨の莊重遒勁の曲風は、此の時よりして著しく金平節化せるものとなり、莊重はいよゝゝ莊重となり、遒勁はますゝ遒勁となり、土佐、加賀兩流の濃婉纖巧な曲風とは、全然其の選を異にするものとなつたのでありし。播磨は一時、金平節類型の淨瑠璃正本さへ新作して、彼の芝居に上場奏演したるほどであつた。

左に山本土佐、宇治加賀、井上播磨の略傳を敘する。

山本角太夫は大阪の人、源太夫に學び、或は伊藤出羽椽の門人なりとも云はれ、又伊勢島宮内の弟子なりとも云はる。角太夫節の

一派を爲して世に行はる。一時大阪の出羽椽座に在りしが如し。京都に上ぼりて操り芝居を始め、寛文の比より元祿年代まで興行し、南京操を用ゐしを以て聞ゆ。『聲

曲類纂』には、延寶五年十二月十一日受領して土佐椽藤原房正と稱したと云つて居る

が、此の時の受領號は相模椽藤原吉勝にして、土佐の椽號は再度の受領なるが如し。繪入淨瑠璃史

参考嘉太夫と並び稱せられたる語り人にして、『人訓蒙圖彙』には「今みやこには、嘉太

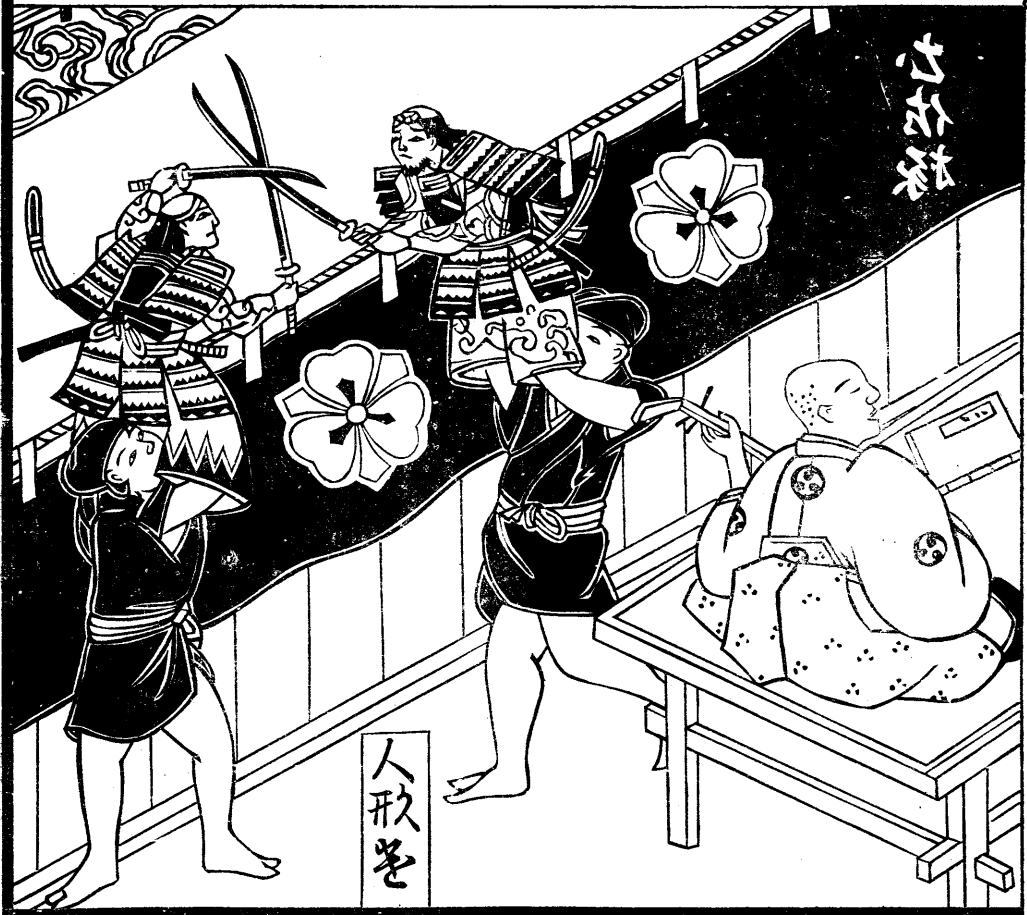
夫、角太夫とて其名四方にきこゑたる名人ありて、兩流を田舎までもてはやせり」と云つて居る。彼の門下よりは治太夫節を創めた松本治太夫、文彌節の祖岡本文彌を出した。

此の圖は元祿三年七月開板の『人訓蒙圖彙』七卷の挿畫にして土佐山本角太夫の芝居の樂屋を描いたものである。三絃彈は座頭にして太夫と差向ひに座し涼臺すずだいの床几の如きものを土間にすゑて其の上にて浄瑠璃を語れり、いづれも足のない人形にして裾より手を差しこんで遣ふて居る。浄瑠璃語る所は人形のうしろ後方



幕の内なれば看客には見
 えず、太夫が威儀を正し一
 刀を傍かたへに置きて語れるさ
 まもゆかしく、彼が従僕と
 もおぼしきが、くはへ煙管
 して聽きほれて居る様も
 をかし。元祿の初年土佐
 の芝居は尙且此の如き状
 態であつたのである。形人

を淨瑠璃に和はして操ること
 工夫し始めたのを假りに慶長の
 末年なりとするも、元祿三年ま
 では尙且七十六年の差がある。



角太夫の淨瑠璃外題は大要左の如し。

角田川。小野篁。天親菩薩。愛護若。阿漕平次。傳教大師記。王照君。源氏蓬萊三つ物。久米仙人。三條小鍛冶。都志王丸。女人往生記。飛驒内匠。善光寺開帳。信田妻。天王寺彼岸中日。浦島太郎。四十八願記。石童丸。日蓮上人德行記。酒顛童子。眉間尺物語。小栗判官。三世二河白道。鉢かつぎ。信田小太郎。小敦盛。逆髮王子横車。入鹿大臣。平親王將門。因幡堂開帳。袈裟御前物語。西教寺七萬日回向。熊井太郎孝行の巻。花山法皇巡禮記。

宇治加賀

宇治嘉太夫は紀州和歌山宇治の生れである。姓は徳田氏、生來音曲を嗜み謠に長じた。十七歳にして志を立て、諸藝の家に出入して研鑽年あり、四十一歳延寶三年京に上り、竹屋庄兵衛を銀主として操芝居を興行し、其の師伊勢島宮内の名代を以て、淨瑠璃宇治嘉太夫と大看板を上げ、新大磯虎遁世記を語つて大評判を取つた。『聲曲類纂』には、嘉太夫の旗揚を寛文の頃なりとし、『竹豊故事』には天和、貞享の比なりとして居る。されど元祿十年彼が歳六十三の時に板行した『紫竹集』嘉太夫當時加賀條の淨瑠璃集也。紫竹は即ち七九にして六十三歳の意を寓するべし。の序文には、

一生夢のごとしといへども修業の間を思へば年久し、既に我十七歳の春、あはれ世上に名を發する藝をあたへてたべと、三十番神へ祈誓をかけ、年來諸藝の家へ出入し云々、四十一歳にして京都に出芝居を取立、今年二十四年つゝがなく相勤む云々。

とあり、之れより推せば、元祿十年より遡ること二十四年は即ち延寶二年に相當すべしと雖、延寶二年彼歳四十一とすれば、紫竹集板行の元祿十年は六十四歳となり、紫竹即ち七九と名題した意味と符合せず。『竹豊故事』には、「寶永八年註、正徳元年也卯の正月二十一日に死去せられぬ、法名は自證院本淨道融居士と稱し行年七十七歳也」とあり、旁々延寶三年四十一歳との考證當を得たりとすべし。山本角太夫と同日、延寶五年閏十二月十一日受領して、宇治加賀椽藤原好澄と稱す。其の曲風は、「播磨風を表とし、節配り細かに、よはくたよくうつくしく語り出せば、京の見物頭から氣に入りて思の外評判よく、段々新作の淨瑠璃を出し、人形衣裳迄きれいに拵へ云々」『操年代記』と云はれたるほどにして、京都人の風尙に投合し、其後四十年、京都淨瑠璃界の雄者として其の名を馳せて居たのでありし。近松門左衛門亦彼の爲めに二三の語りものを作して居る。『世繼會我』は其の一である。正徳元年即ち寶永八年正月二十一日七十七歳にして歿す。一説には八月十日謠本になぞらへて正本に節章をさしたのは加賀椽である。

『操年代記』に「けいこ本八行を、四條小橋つばやといへるに板行させ、淨瑠璃本に謠の如くふし章をさしはじめしは、此太夫ぞかし」と云へり。淨瑠璃本の刊行は極めて古くより元和の頃既に刊行したるものありと思はるのことなりしと雖、節章をさした大字稽古本八行は、實に加賀椽の創意に成つたものである。

『聲曲類纂』には左の如く記して居る。

宇治加賀椽藤原好澄。

紀州和歌山

宇治と云所なりと云

の産なり、伊勢島宮内が弟子にして

宇治嘉太夫と號す、元來謠にくはしく其の頃、井上播磨が、音曲世に流行ける故、自工夫をこらして、別に一流の曲節を語り出す、寛文の頃宮内が名代を以て芝居を興行し、延寶五年巳十二月十一日宇治加賀椽と受領を拜し、新作の淨るりを作らせ、稽古本大字八行の正本を始めて梓に上せ、謠本の如く節章をさし初しは此の加賀椽より起れり。貞享二巳年七ツ、いろはの上るり五段を四條小橋壺屋に與へて刻せしむ、則しめ、はじめて節を配りしはつれ、草といふ本なり、此の時板行上せしといへり。

此の人謠の音節を和らげて語りしかば、呂律甲乙連續して今の世までも嘉太夫節又加賀節とて其の遺風残れりとかや。貞享の頃、大阪へも下り、後又京へ歸り、始終三十年の餘京にて宇治の一流をはやらせ、寶永八年卯正月二十一日或八月十一日

も七十七歳にして終れり。其の子宮内同八月二十一日嘉太夫と改、相續で芝居を勤む。加賀椽芝居へ竹本筑後未だ理太夫といひし頃、脇にかいへられ、西行物語の二段、目藤澤入道夜盜の修羅をかたりしとき、元來大音にて甲乙といひのひ座中へ聞へわたりて音聲

鮮なりしかば、加賀椽深く感じ、以後此の道に名譽をあらはすべし、此の人なり、賞美しける、や、貞享三寅年加賀椽難波に下りて、井原西鶴が作りたる曆といへる淨るりをかたる、そのとき、義太夫が方には賢女の手習新曆を題して、兩座甲乙を争ひしとなり、又加賀椽自ら作りし上るりもあり、いろは物語其の外にもありとぞ。人偏訓蒙圖彙淨るり太夫の條下に、中の頃部の宮内左内とて上手のあり、御代御長久なればいやまし上手も出来て、いよみやこにては、嘉太夫角太夫とて、其名四方に聞いたる名人ありて、兩流を圧合迄もては、やせり云々、こゝに角太夫とあるは末に記せし山本土佐がはじめの名なり。 門人多き中にも宇治伊太夫事竹本若狹が芝居を繼で野田若狹と改め、後竹本彦太夫へゆづる。富松薩摩延寶六年十一月二十八日受領す立花河内宇治相模同若太夫同甚太夫等何れも譽れ高し。富まつさつま其の師の跡を繼で芝居繁昌せり、是實永正徳門り享保のはじめなりとぞ。若狹は北野七本松糸屋伊右衛門

定芝居にて久しく興行せり。

加賀様の興行曲目は左の如し。

大磯虎遁世記 小晒物語 百人一首萬年寶 西王母 一心五戒魂 身代り
問答 融大臣 今川了俊 柿本人麿 大佛供養 西行物語 染殿の后 吉
備大臣 淨藏貴所八阪塔 倭藤太 和田軍 中將姫 柏崎 弓削道鏡 當
流小栗判官近松 元服會我 融通大念佛 阿部宗任東大全 日本武尊 小袖
會我 衣通姫和光玉 三井寺狂女 十六夜物語 夜討會我 晴明道滿行力
爭 摩耶山開帳 小野道風額揃 法隆寺開帳 弘徽殿嫉妬打近松 源賴家鞠
始 神武天皇閏正月 薩摩守忠度一名千載集 門出八島 惟高惟仁位爭 三社誌
宣由來 須磨寺青葉笛 富貴會我 浦島太郎七世縁 遊行上人名香記 曆
西鶴 蒲冠者鞠始 賢女相生松 伏見常盤 弱法師 徒然草近松 いろは物語
加賀椽 天神御本地 鳥羽戀塚物語 世繼會我 葵の上 藍染川 凱陣八島
東山殿子日遊 關東小六東六法 本領會我 辨慶京土産 平安城都遷 頼
朝由井濱出おなつ清十郎 歌念佛 桑原女之助 吳羽中將二十三夜待 會我七つい
ろは 遊君三世相 津戸三郎往生要集 源三位頼政 葛葉道心物語 主馬
判官盛久近松 團扇會我近松 義經懷中硯 壽永忠則 刈萱道心物語 結城七
郎小袖賣 大江山 傾城反魂香 東山殿追善能 和州三部經 靜法樂舞
猫魔達物語 飛驒内匠 新豐饒御祭 會我美男草 忠信二十日正月 梅花

垣 巴太鼓 寝物語 牛若武勇始 和氣清麿 源氏三代記 佛舍利 源海
上人 八はな形 榮花物語 五百羅漢 粟島御縁記 熊野開帳 婚禮祝言
記 伊勢物語 源氏供養 祕密護摩 遊や物語

井上播磨

井上播磨は通稱市郎兵衛、京都の人。本業は大内の御簾作りなりし。音聲遅くして謠に長ず、源太夫の門に入つて學び、古流の節譜に心を配り、フシ、オクリ、三重、オン、ハル、ギン等に至る迄一譜半節も苟もせず、研鑽年あり、不圖江戸の萬歳を聽いて悟るところあり、一流を創めて浪花に下り寛文十操り芝居を興行して大に世評を博し、爾來浪花を天地として其覇を唱へ前後二遙に京都の嘉太夫と對立して聲名を馳せて居たのであつた。受領して井上大和椽藤原と稱し、後また播磨椽と受領した。貞享二年五月十九日京都四條の芝居に興行中外題頼光病を得、五十四歳にして俄に彼の地に没した。

播磨の曲風は「景事、道行を語るに長じ、就中うれひ修羅を第一として語りけるに、聽く者真似んと欲して遂に能はざりき」『操年代記』「古今の妙音なれども語り出したしかならず、後程面白きはならびなき娘子の新枕ともいひつべし」『倒冠雜誌』と評せられて居る。當時加賀椽は上手と云はれ、播磨は名人と讃へられたほどである。播磨が獨特の節調は播磨地と稱して今に残り、後の義太夫節、竹豊兩派ともに、其の遺風を汲んで居るのである。『操年代記』に、

「其頃は寛文以前床本かたく閉て、弟子たらんにもむざと許さず、勿論稽古本といふ事

なく、漸く聞書にして一行二行づゝおぼへ、夜あるきの友となしぬ、いまだ大阪に
淨瑠璃本屋なく、つてを以て替り、淨瑠璃出れば、前の淨瑠璃を、懇望して京にて、是
を、板行する、雖も、しらみ、本といふに、五段を書き、其間々に、一段、の、繪を、さし、
込、童子の、弄びとして、弘むるも、全く、稽古人の、助けならず、やうやく播磨太夫手筋
より、心齋橋筋三津寺邊に、書本を商賣する井上彌兵衛といふ人、太夫のゆるしを
請け、道行四季神落かみろしなどを、書本にして、稽古人の助となしぬ」

と云つて居る。初めて節付の本を公開し、之を書寫して販賣することを許し、稽古人
の助けとしたのは實に井上播磨である。其後加賀椽は、一步を進めて之を開板し、更
に一層の利便を圖つたのでありし。『遠魂紙料』には、「むかしの淨瑠璃は總て六段な
り、京都にては井上播磨より五段につゞめたりといふ」とあれど、寛永、正保の正本に
も五段ものあり、播磨の淨瑠璃は多くは六段ものにして、其の五段ものとても、心あつ
てしかと段數を一定して掛つたものとも思はれないのである。近松門左衛門も彼
の爲に二、三の正本を供給して居る。『天鼓』は其一つである。彼及び彼の門人市郎太
夫、清水理兵衛等の興行したる曲目は左の如し。

新十二段 二王の本地 日本廻り 舟遺恨 女袖鏡 都女商人 二親孝
行 金平法問諍 白旗の由來 敵討の遺恨 五天竺 祇園精舎 天鼓近松作
大友真鳥 日本王代記 荏柄の平太 神道蟻通 百合若麿 甲賀の三郎
源平戀の遺恨 道釋禪師傳 長谷寺利生記 土蜘蛛退治 二代の敵討

金剛兵衛左文字刀 田村將軍初觀音 兵庫の築島 利屈物語 一休物語
頼光跡目論 源氏築紫合戦 根元曾我物語 聖德太子傳記 業平一代記
源氏熱田合戦 頼義北國落 頼朝七騎落近松作 花山院物語 金剛山合戦
菅原親王行狀記 蒲御曹司東踏歌 大曾我富士牧狩 賢女手習鑑 日向
景清 大念佛由來 信濃源氏木曾軍記 大職冠知略玉取 三浦北條軍法
競 楠千早合戦 河津相撲の遺恨 東大寺大佛緣記 佐々木藤戸先陣
三浦大助老後譽

源氏十五段 五大力菩薩市郎太夫待宵物語 源氏東の門出 上東門院 松浦

五郎旅日記清水理兵衛

竹豊故事に云。

寛文中大阪に井上市郎兵衛と云人有、生得音聲強敷、古流の節譜に心を付淨瑠璃の道に工夫を凝し、風與江戸萬歳の音に意を付て體となし、自然と珍敷一流を語り出し、終に芝居を興行し、程無受領して井上播磨椽藤原の要榮と號し、名譽を顯はし、世に播磨流と稱美せり。此の、人、色、々、に、音、聲、を、遣、ひ、分、品、々、の、節、を、編、出、さ、れ、し、遺、風、今、の、代、に、傳、り、竹、本、豊、竹、共、に、此、の、流、を、用、ひ、ら、れ、し、上、其、の、流、を、汲、太、夫、達、井、上、氏、の、節、事、を、稽、古、せ、ず、と、云、事、な、し。其の景事數多有中に掛物揃歌仙の段、宮島八景鹽釜の段、晴明神風跡目論の馬の段、屏風八景七夕祭、五天竺長生殿四季の段、是等の類ひ員ふるに暇なし。此の芝居の繁昌を浦山敷思ひ、京都の銀主井上

氏の一座を買切、四條の芝居を勤め居られし内風與病氣付、五十四歳にて死去し、都の土と成られぬ。貞享二年丑の五月十九日、法名は夏月了音日弘とかや傳へ聞し。

播磨椽門人多き中、別して井上市郎太夫、清水の理兵衛等は芝居をも興行し、名高き太夫也。就中理兵衛と云し人は、安居天神の邊に住居せる料理茶屋成しが、此の道に熱心深く、聲柄能、然も功者に能語られ井上氏の奥義を能呑込れし。右播磨椽死後に花香失す、諸人、今播磨とぞ持流しける。後に剃髮して伴西と號せり。聲曲類纂に云。

井上播磨椽藤原要榮。通稱市郎兵衛といふ、京師に住して大内の御簾を作りてたてまつる事を世態とす。謠を學びて音聲生れ得て自由なりければ、虎屋源太夫が門に入て、淨瑠璃を學び、古流の節譜に心を付、工夫を凝し、風斗、江戸、萬歳の音に意を付て、體となし、自然と珍敷一流を語り出し、浪花に下り、寛文の頃より世上に流布せしかば、あやつり人形に合せ芝居免許を蒙り、井上大和椽藤原要榮と受領を拜し、後又播磨椽と受領す。貞享二年乙丑五月十九日五十四歳にて京師に終れり。法華宗長明寺に葬す。播磨が餘風、今に傳り、播磨地など號し、竹本、豊竹ともに此の流を汲む事藝道の規模といふべし。播磨の時代淨るりけいこ本堅く祕して他見をゆるさず、たまここれを得て京にて梓行すといへども、小冊にして細字に書し、一段くのさし繪をくはへ、幼童の戯びとせり。故に其道を學ぶ人は寫本を以てけいこせしといへり。門人多き中にも井上市郎太夫初名石屋三右衛門と云、播磨死後尾崎權左衛門と共に芝居なつこむ。清水理兵衛等最名人なり。理兵衛は

大阪安居の天神の南に住居せる徳屋といへる柏戸成しが、此の道に熱心深く、終に上達して芝居を興行す。延寶天和の頃也。此の時上東門院さいふ上るりを語り其門人竹本筑後様いまだ五郎兵衛たりし時脇を勤め始めて床に於てかたりし播磨死後にも今播磨と賞譽せられしが、後に薙髪して伴西と號せり。市郎太夫も段々世に行れて、自ら櫓を上げて興行し、新淨瑠璃もありしが、其の後何方へ趣きしや終りを知らずと。

柳亭主人云。昔の淨るりは都で六段なり、十二段を裂しもの歟。京都にては井上はりまより五段につめたりさいふ。江戸にては寶永正徳のころまでも尙古風を失はず土佐様和泉太夫等か淨るりみな六だんなりと云々。

義太夫節創發前後の京阪淨瑠璃と操り芝居

義太夫出づる迄の京阪の操り芝居 大阪に於ける大勢力伊藤出羽の

芝居

京の御内裏様と併せ敷へられたほどの出羽の芝居 文彌節と山本飛騨等の木偶

出羽の芝居の金平節

木偶の伎巧と趣向で持った景氣 當時の木偶操りの伎巧

糸あやつり手妻つかり

水からくり 南京あやつり 淨瑠璃三分木偶七分の人氣

淨瑠璃本位の義太夫の興行方針「三五の十八」で算盤あはぬ不成績

義太夫の失望 出雲の人氣取り改良案

京都を掩有した宇治加賀山本土佐の人氣 歎ばれざりし義太夫節 加賀と土佐と

を喪ふた後の京都 遂に義太夫節の附庸の地となつて滅ぶ

義太夫出づるまでの
京阪兩地の操り芝居

播磨の死が義太夫節の興隆
に伴じたかは疑問である

竹本義太夫が道頓堀の芝居に名乗りを上げ、其の創案に成つた義太夫節の宣傳を始めたのは貞享二年二月朔日であるが、其の歳五月井上播磨は京都に死んだ。史には義太夫の旗揚を貞享二年とするには疑ありとし、八行本『藍染川』の正本に「貞享元年七月中旬……竹本義太夫の奥書あり、宇治加賀との對抗戦に上場した賢女手習並新磨の繪入本にも、「貞享二年正月」の奥書あるより見れば、大西芝居を借り受け、竹本義太夫と改名して打つて出たのは、貞享元年七月以前の事にして、加賀椽の出陣は同年の暮なるべしと云はれて居る。洵に有力なる考證なりと雖、爰には姑く從來一般の傳説に従ひ貞享二年二月朔日の旗揚とした。

義太夫出づるまでの京阪兩地の操り芝居は、京都に宇治加賀、山本土佐、虎屋上總喜太夫の芝居あり、大阪に井上播磨、虎屋源太夫大阪源太夫、伊藤出羽椽、竹田近江の芝居あり、中にも山本土佐、伊藤出羽の芝居は木偶じんぎやう操作の優れたるを以て評判を取り、宇治加賀、井上播磨の芝居は太夫の淨瑠璃を誇りとして人氣を集め、よわくたよくの加賀一流の巧緻なる曲節が、京都人の趣味好尚と協合して愈其の盛を致せば、うれい修羅を第一とした播磨獨特の譜節は、大阪人の嗜好氣風と適合して嘖々たる好評を擅にして居たのでありし。

播磨の死は義太夫節の勃興に伴したるなるべし。されど、播磨が存命して居たとしても、義太夫節の興隆に何程の支障的影響を與へたかと云ふ事は疑問である。義太夫が竹本座に旗幟を樹てた翌年、宇治加賀京都より來り、此の新興の強敵に對し、一舉之を屠らんとして、決戰的對抗競伎を試みたりしと雖、僅に二た興行にて打切り、散々の體にて遁げ還つたほどの不成績を示して居る點から考へて見ても、播磨對義太夫の勢力競争戰の結果も大概想定することが出来るのである。

大阪に於ける大勢力
伊藤出羽椽の芝居

當時大阪に於ける操り芝居の大勢力は伊藤出羽椽なりし。播磨は大阪に在る事前
後二十年、「加賀は上手、播磨は名人」と云はれたほどの伎倆を以てして、尙且出羽の芝
居には壓され勝にして、出羽の芝居は京都のお内裏さまと並せ數へられ、難波名物の尤
として評判遠近に傳はり居たりしと雖、播磨の名はさまざまに揚つて居なかつたのであ
る。されば播磨にして尙長く存命して居たとしても、竹本座の敵手は、彼に非ずして寧
ろ伊藤出羽椽であつたらうと想察せらる。

伊藤出羽椽の系統は詳らかでない。西京の人にして虎屋源太夫の門人となり、一流
を工夫して大阪に下り、道頓堀に芝居を建て、座元となり、石井飛驒椽と共に檣幕をあ
げて興行す。門弟には岡本文彌の如き美音の太夫もあり、山本河内椽山本飛驒椽等の
如き人形の名手もあり、義太夫の如きも、理太夫の當時には此の芝居にも出勤し、其他名
ある太夫も此の芝居を勤めたることあり、濱側に在りし故俗に濱芝居と云ひ、大阪中に
持て囃されたものだと傳へられて居るのであるが、源太夫の門人と云ふ説は確かなら
ず。岡本文彌を以て彼の直系なりとするの説も亦首肯し難し。詳しくは、後に豊後系流派
を論ずるに方つて之を説 雖然、出羽椽なる名代は、大阪に於ける操り常芝居中の最古のものにして、出羽の芝
居と云へば其名都鄙に響きわたり、『竹豊故事』にも、

京の御内裏様と併せ數へら
れたほどの出羽の芝居

古代に流布せし江戸の薩摩、土佐、外記半太夫等の流、京都の山本、宇治、都一中杯の
節、大阪には、伊藤、出羽、椽、座、の、文、彌、節、は、諸、國、の、浦、々、隅、々、迄、も、葉、流、遠、國、邊、土、の、西、國、
順、禮、の、衆、中、京、都、に、て、は、御、内、裏、様、大、阪、へ、來、て、は、出、羽、椽、の、芝、居、を、見、て、歸、ら、ね、ば、西、

文彌節と山本飛驒等の木偶

國したる、甲斐もなく、死ては閻魔大王の前にて云譯の無様に有難がつて持賞しける云々。

「大阪表には前々虎屋源太夫、表具又四郎道具屋吉左衛門等の太夫達語られしか共、指て繁昌と云程の事もなかりしに、元祿年中の比、京都山本土佐椽の門人岡本文彌、伊藤出羽椽芝居にて一流を語り弘められ、大阪中文彌節とて持流しぬ。殊に山本飛驒椽手妻人形の所作事、繰杯取雜へ見せられし故、其時代の見物衆大に悦び繁昌し、大阪中は云に及ばず、遠國迄も名譽を顯はされたり。此人聲柄と云甲乙共に揃ひ上手成しか共、時移り年變りて一向當時は用ひず、惜き藝を埋もれ仕廻に終られたり云々。

と云へるが如く、出羽の芝居の文彌節と山本飛驒椽等の人形からくりは、非常なる評判を取つて持囃されて居たのでありし。

出羽椽がどれ程の語り人であり、名譽の太夫であつたかと云ふに、一向に傳つて居ない。山本河内椽、山本飛驒椽即ち山本彌三郎也を以て彼の門弟なりと傳ふるものもあれど、孰れも太夫ではなく人形遣である。恐らく彼は、恰も京都の都萬太夫の如く、單に淨瑠璃の名代たるに止まり、實際の語り人ではなかりしなるべし。されば出羽椽の淨瑠璃外題として『操年鑑』などに載せたる所のものも、出羽の芝居の正本として書かれたものには相違なかるべく、又其の芝居で語つたものには相違なかるべしと雖、出羽椽自身之を語つたと云ふには非ずして、彼が芝居に出勤した、岡本文彌其他の太夫等の語つたものでな

出羽椽は實際の語り人には非ざりしなるべし

出羽の芝居で語つた
金平節

あらうと想像されるのである。金平節流行の當時は熾んに之を上場し、殆ど夫れにて持ち切りの有様なりし。『繪入淨瑠璃史』には、彼の名代ある金平節正本なりとして左の如くに擧げられて居る。

天狗羽討	<small>天下一出羽 椽藤原信勝</small>	萬治三年三月
綱金時最後	<small>出羽 正本</small>	寛文閏八月
四天王最後	<small>天下一出羽 椽藤原信勝</small>	同年九月
頼光蜘蛛切	同	同二年正月
<small>あさ ひな</small> 島渡り	同	同年六月
金時洛陽入	同	同四年正月

出羽椽の芝居が京のお内裏様と並び數へられ、一度は見物して冥途の語り草にせよとまで云はるゝほどの評判を取つて居たと云ふには、岡本文彌の艶にやさしき淨瑠璃が呼物となり、人氣を集めて居たのに由るもの多かりしことは勿論なりと雖、一方、山本河内・山本飛驒の妙手あり、木偶操りの伎巧のすぐれて人目を驚かすものありしに職由するものなることをも想はねばならぬのである。

按ずるに當時の操り芝居の人氣の七分通りは、木偶操りの伎巧と巧妙なる趣向とによつて、牽き附けられた景氣にして、各座の興行振りも、淨瑠璃太夫の聲によつて客を呼ぶと云ふことの考へよりは、人形の伎巧、舞臺面の工夫により評判を取ると云ふことの考案が先となつて居たのでありし。されば淨瑠璃正本の作意も、亦従て人形本位なり

木偶の伎巧と趣向と
で持つた當時の操り
芝居の人氣

巧當時の木偶操りの伎

し。糸あやつりに恰好な『しのだ妻』山本角太が出れば、水からくりと糸操りを極端まで應用した『和氣清磨』加賀椽『雁金文七』山本飛驒の如きも出て、唯譯もなく時人をして歡呼喝采させたのであつた。

『江南氣色の森』錦文流著、實永二年板行には、

「からくり細工はおやま五郎兵衛、山本彌三五郎、是を傳へて無雙の名人となす。一筋の糸をもつて大山をうごかせ、小刀一本を以て形ある物を作りて是をはたらかしむ。別而水學術を得、水中に入て水中より出るに衣服をぬらさず、纒なるはさみ箱にふねを仕込、川水に浮て用を達す。此儀ゑいぶんに達し、禁庭において細工の術をゑいらんに備、則細工人に仰付られ、山本飛驒椽清賢と受領し、翌年兩龍の細工をさしあげ、河内椽に重任せらる、せんまいどけいからくりは竹田近江椽、鳥を作つて空中をとばす、はさみ箱より乗物を出し、人を乗せて人形にかゝす事をなす、よろづ今比にくらべて昔をおもへば、あま茶な事なり。」と云つて居る。

當時の木偶には糸あやつりもあつた。手妻づかひもあつた。水からくりもあれば、せんまいからくりもあり、京都の加賀の座には南京あやつりもあり、其の座々により各特色あり、孰れも工夫を凝らして其の伎を競ふて居たのでありし。とりわけせんまいからくり、水からくりには奇抜な趣向を凝らし、時人を驚かしたるものにして、せんまいからくりでは、鳥に仕かけて空を飛ばし、はさみ箱に仕かけて人形を出し、乗物を出し、人形自身が之をかいて動き出すと云ふやうな眼先きの變つた工夫を凝らせば、水からくり、南京操り

糸あやつり、手妻づかひ、水からくり、せんまいからくり、南京操り

りでは眞水ほんみづを使ふて瀧たきとなし、川かわとなし、海うみとなし、龍りゆうも出せば鯉こいも泳がせ、人形遣の太夫は水より出でて水に入ると云ふ、水藝的放れ業を示せて喝采を取ると云ふやうな趣向を案出するなど、人氣の吸集策に付いては、各座ともなか／＼一と通りならぬ苦心を重ねたものであつた。

手妻は即ち手品にして、手づかひの事なるべきも、加賀椽座の南京ななあやつりあやと云ふのは由來する所詳ならず。『竹豊故事』には、「手妻人形は山本彌三五郎飛驒椽に始まる、南京なな糸操いとは寛文延寶の比より遣ひ始めし由、京都山本角太夫芝居に専げら遣ひし也」と云つて居る。按ふに其實質は糸いとあやつりあやにして、南京ななと云へるは「珍らしき意」又は「小さき義」なるべき歟

『繪入淨瑠璃史』には、

南京操と云ひ、手妻人形といふも、共に其の由來は詳でない。按ふに竹田芝居の水機巧が範を示し、種々の發達をなしたるものなるべし。寛文二年竹田出雲椽清房が道頓堀に芝居を建て、種々珍奇なる機巧かいく人形の趣向を運らし、大いに喝采を博して居るのであるが、是等の機關しかげの動力は道頓堀の河水を利用したるより、世人之を稱して竹田水機巧みづかいくと云つて居る。山本角太夫が大阪に在りし間、何れの芝居に在りしかは詳でない、されど彼を以て出羽椽の門人なりとする人もあるほどなれば、出羽の芝居に在りし事は疑ひなく、手妻人形の山本飛驒椽も亦出羽の芝居の人なるより推定すれば、操芝居しかげに機關しかげを應用したるは、伊藤出羽椽が本元なるべし。彼の手妻太夫の山本彌三五郎なる者も、其の以前或は竹田芝居に勤めて居たものならんか。但し南京操を以て一概に竹田流とはいふべからざるも、此等流行の源は

道頓堀で、之を用ひし角太夫と手妻人形の飛驒椽とは、同じ山本姓を名乗るを見れば多少の關係ある事疑ひなし云々。角太夫の南京操とは恐らく在來の操を基礎とし、之に手妻式の機巧かいくもを仕掛け、又絲操は殊に神佛の出現、或は鳥獸龍蛇等人間以外のものに應用せられたるが如し。

と考證してある。

繪入淨瑠璃史は實に有益多趣味なる著述にして、斯道の研究者に取りては、こよなき參考資料である。原板の儘にあらすさも、せめて活字に付してなりと正本の全文をも拾録し、斯道研究家のために提供せられたならば、より一層裨益多き完璧のものたりしならんと思はる。同書には人形操りの伎巧の状態を徴すべき幾多の挿畫がある、就きて見るべし。

されど角太夫の芝居にあれ、加賀椽の芝居にあれ、出羽の芝居にあれ、竹田の芝居にあれ、彼は手妻此れは絲操り、彼はからくり、此れはせんまいからくり、と孰れかの一方に偏し、一方と限り、劃然區別されて居たと云ふには非ざること勿論である。其の座の座附の人形遣ひの長所もあれば短所もあり、手妻に長じたるもあれば、絲操りに優れたるもあり、水からくりを得意とするもあれば、せんまいからくりを誇りとするもあり、各座夫々特色あり、異彩あり、夫れが又一種の呼物となり、人氣をそふる材料ともなりて、いよ／＼流行を熾ならしめて居たのであらうと想察されるのである。

淨瑠璃三分人形七分
の人氣
淨瑠璃本位の義太夫
興行の方針

按ずるに義太夫節以前の操り芝居の繁昌は、淨瑠璃三分人形七分ぐらゐの人氣なりし。義太夫出でて竹本座を創立し、古今の美調と近松の正本とを以て義太夫節の宣傳を始め見たりしと雖、根が淨瑠璃七分人形三分の興行方針なれば、さしたる大入りも

「三五の十八」で算盤
あはぬ不成績

三五の十八にてあはぬそろばん、胸さんあうてあはぬは世間なみ、次のかはりの請合一盃、庄兵衛のばくさま云々(操年代記)

義太夫の失望

出雲の人氣取り改良案

取れず、出羽の芝居は依然として盛況を保ち、竹田のからくり芝居は相變らずの人氣にして、當時道頓堀には出羽椽座の外竹田近江の芝居ありし。『操年代記』西澤一に「其頃はかぶき芝居あたり多く、殊に出羽にはさまざまのからくりなどし、見物諸方にわかれれば、さのみ大入大あたりといふ事なし」。「三五の十八にてあはぬそろばん」と評したやうな、洵につまらない興行成績をつづけて居たのでありし。

貞享二年の創發以來元祿の十六年に至る、十九箇年間の竹本座の興行の不成績は、座主兼頭取たりし義太夫をして殆ど失望の嘆聲を漏さしめたるものゝ如く、元祿十六年五月『曾根崎心中』近松世話瑠璃の初めを出し、初めて當りらしき大當を取り、積年の負債も銷却し、一息吐くことも出來たりしより、之を機會に退隱し、興行師生活の煩累と苦患より免れんと決心したのであつた。竹田出雲の勸奨すすめもありやうやくに思ひ止まり、座元を出雲に譲りて太夫専門となり、主ら藝道の上のみ盡すこととなり、出雲代りて興行方針を一變し、在來の如き淨瑠璃本位の興行を續けて居た所で、到底立ちゆくべきものにあらずとし、俄かに人形の衣裳舞臺の粧飾、道具立に至るまで改良し、寛永二年三月の『用明天皇職人鑑』の興行には、出語り出遣ひを始め、竹田の水機巧からくりを應用する等、眼先を變へて趣向を凝らしたるより、忽ち評判となつて大入を取り、爾來専ら工夫を舞臺面の變化、木偶の趣向の上に凝らし、芝居も繁昌すれば、義太夫節も盛隆となり、赫々たる後の最盛時代を現出するに至つたのでありし。由是觀るも、如何に當時の操り芝居の景氣が、著しく木偶本位のものであつたかゞ、想察されるのである。

京都を掩有した宇治
加賀、山本土佐の人
氣

京都人に歎げれざりし義太
夫節

加賀と土佐とを喪ふ
た後の京都

京都の淨瑠璃界は、殆ど宇治加賀、山本土佐の人氣の掩有するところなりし。播磨の曲風が左までに京都人に歎げれざりしが如く、義太夫の曲風も亦餘りに京都の人氣には投せざりし。竹本座の一連も幾回か出興行として京都に入り、漸次に義太夫節の趣味を都人士の間に鼓吹したりしと雖、土佐、加賀の兩人存命中の京都は、依然としてよはくたよくの加賀節、土佐節の崇拜者を以て充たされて居たのでありし。

雖然、さしにも流行を極めて居た加賀節も、加賀椽が死するや其の勢力は俄然として失墜した。加賀椽は正徳元年正月二十日に死んだ。竹本義太夫が道頓堀に旗揚げを爲してより二十六年目である。加賀の門下には富松薩摩あり、野田若狹あり、宇治相模あり、立花河内ありしと雖、孰れも似たり寄つたりの伎倆にして、富松薩摩は其の師の芝居を繼いで興行し、一説には加賀椽の子宮内、父の名を嗣ぎ二代目嘉太夫となり、薩摩若狹相模河内等の四天王之を助け芝居を興行せるが如くにも云へり野田若狹は、北野七本松邊の芝居に出て興行して居たのであるが、加賀椽在時の人氣の半分だもなく、次第に凋落して遂に滅んだのである。

土佐節の末路も亦殆ど其の趣を同ふして居る。山本土佐の歿時は詳ならざれど、殆ど加賀椽と前後して逝けるが如し。多分は加賀椽より前に歿したりと思はる。高弟には松本治太夫あり、節まで眞享、元祿の頃行はれたり、別に芝居を立て興行せりと云はる。都太夫一中あり、治太夫は正徳の頃尙ほ存命したりしや否明ならざれど、都太夫一中は享保の比まで存命し、元祿、寶永、正徳の比は、一中節の盛時なりしと云はれて居る。土佐の芝居の繼續者は何人なりしか判明せず、又、一中の流れから出た中が出動した芝居は何の座であつたか判明しない。豊後節は江戸に入つて隆々の名を成したのでありし。されば京都にて死んだ土佐節

は江戸に活き、更に其の流れを大にして榮ねたものとても云ふべきなるべし矣。

宇治加賀、山本土佐の兩巨頭を失ふた京都の淨瑠璃界は、俄かに寂寞を感ぜざるを得なかつたのでありし。江戸、大阪と相對し、三權對立の狀勢を形くつて居た京都も、幾くならずして斯界の勢力圏域より引退するの外なき有様となつた。三權對立の狀勢は變じて江戸、大阪の二大勢力の對立となりし。曾ては淨瑠璃發祥の地であり、次には京阪淨瑠璃宣傳の根據地であり、角太夫節と云ひ、加賀節と云ひ、京都風の優婉濃調の特色を以て一旗幟を樹てゝ居た京都も、やがて義太夫節の附庸地として、出稼興行地として、はかなき末路を止むることとなつたのでありし矣。

遂に義太夫節の附庸
の地となつて滅ぶ

嘉太夫の先師伊勢島宮内淨るりも江戸の大さつま杯と同前に五段續の外題を聞及ばず、宮内門人佐太夫後に節齋と云し人、京都北野にて芝居を興行し、久々勤められしか共、數年の間、加賀椽と井上氏との淨るりを語られし也。又加賀椽弟子野田若狭、北野七本松、京屋伊右衛門定芝居の太夫にて久々勤められしか共、新作の淨るり多からず、此外に富松さつま、宇治さびみ立花河内等右に同じ。就中富松氏は四條宇治嘉太夫定芝居にて宇治宮内等と同座にて永々勤められし中は、大坂竹本豊竹兩座の新淨るり共を替るゝ語られし故自分の新作すくなし、今昔操淨瑠璃外題年鑑

第八章 近松門左衛門

近松の傳記

文筆趣味に富んだ近松の一族 彼が系統生地に就いての傳説

斯界の本傳

せられた長州萩説―唐津近松寺縁故説―されど此の説は孰れも年代若し古きは京都説―近江三井の近松寺説である 京都説―近江三井近松寺説ははるかに萩説―唐津近松寺説に優る 京都説の祖述者たる『竹豊故事』の著者―斯界の通人―一樂山人 京都説の考證資料として『近松傑作全集』に引用された『寶藏』の近松一家の俳句『聲曲類纂』

『竹豊故事』の「音曲道智論」の一節

近松が奉仕した公家 彼が初歩時代の作者生活

放浪生活當時の作物

義太夫

と相識りたる初め

兩者の默契

近松の健康と著作 墳墓の地

谷町妙法寺の廻向塔や

うの空墓 久々 智廣濟寺の墓

彼が辭世と自撰の法號 水谷不倒氏の唐津近松寺の

遺跡に付いての考證

義太夫節淨瑠璃正本の作者としての近松門左衛門の功は、流祖としての竹本義太夫の功業と匹儔する。もとく正本あつての太夫であり、三絃であり、人形でありとすれば、門左衛門は此の三者を舞臺に踊らせた原動力としての關係の地位に居るのである。

義太夫、權右衛門竹澤、八郎兵衛辰松の三人は義太夫節開發の三祖と稱せらる。されど

義太夫の美調も、八郎兵衛の絶伎も、權右衛門の妙曲も、彼れ近松門左衛門の、至文妙

趣の淨瑠璃正本あつての上の事である。近松以後には出雲田千四長谷和吉田松松洛三好小出雲等が出た。東、豊竹座の座附作者としては、海音あり、海音の後には文流錦一風西千柳田中宗輔並木蛙文田安丈輔並木等が出た。されど淨瑠璃正本の構想、筆致の軌範を垂れたのは彼れ近松門左衛門にして、門左衛門は實に義太夫節淨瑠璃なる人生詩文の師表である。されば義太夫節淨瑠璃の沿革興衰の跡を究めんとするには、先づ其の前提として、彼れ門左衛門の傳記、彼の想、彼の文、彼が觀た人生、彼が捕へた作意の急所を研究して懸ることの必要を感ずるのである。

文筆趣味に富んだ近松の一族

岡本一抱、通稱は爲竹、一得齋と號す、本性は梶森、出でて國本家を嗣げり、京都に居り味岡三伯に從ひて『素雜』を講ず初め京都の醫家にして*

*『素雜經』を講ずるもの饗庭東庵を嚆矢とし、門人味岡三伯に至り業方に盛にして學徒群集せり、一抱は實に門下の高足なりき、唯細行を修めずして、屢三伯の意を失し遂に師弟の義を絶たる、因て獨立して一家を張り、諺解を作り自ら初學を訓誨

近松門左衛門、姓は梶森、名は信盛、通稱平馬、平安堂、菓林子、不移山人などの號あり。兄は京都相國寺の宗長老にして、弟は岡本一抱と稱する儒醫である。通俗醫書の著述多し。四十一種二百二十餘卷外に演義的小説北條時頼記十卷の著作あり、理義精數行文明暢にして筆力健達せり。寛文十一年門左衛門十九歳山岡元隣の著せる俳書『寶藏』の追加に載せたる杉森一家の俳句を見るに、彼の一族孰れも文筆の趣味に富めることを想見し得べし。慶安二年の出生なるが、其の父母、祖先、生地につきては、傳説區々である。「長州萩の人にして、毛利家の士、杉森某の兒なり」と傳ふるものもある。「周防吉敷郡山口村の人にして、父を松村八兵衛といひ、彼が小字を藤四郎といへり」と傳ふるものもある。「長門大津郡深川村に生る、父は梶森主殿助といひ、鎌倉八奉行の一人なる三善康連の後にして、康連、下野國鹽原郡太田莊を領して太田氏を稱し、其の五世信濃守時直、周防國玖珂郡楢杜郷蓮花山に居りて楢杜と稱し、更に五世にして房康に至り、初め大内氏に屬し、大内氏滅びて毛利氏に仕へ、移て長門深川村に住せり、是れ門左

するは自家の任こなせり、其書大に行はる。著す所運氣論諺解(七卷)原病式首書(四卷)醫學三藏辨解(六卷)醫學講談發端辨(二卷)子四經緒詳解七卷(衆方規矩指南(七卷)修治要訣訣圖緯(七卷)病因指南(五卷)妙藥集大全薛氏醫察和解(五卷)和語本草綱目(二十二卷)脈法指南(六卷)醫療指南(五卷)和語醫療指南(五卷)本朝古今醫統(十卷)萬病治法指南大全(八卷)方意辨疑(二卷)藥性記辨解(三卷)醫學切要指南(三卷)同續(三卷)正傳政問諺解(七卷)大成論和語抄(七卷)古今養生論和解*

斯界の本傳とせられた長州萩説―唐津近松寺説

阿是要釋(五卷)經穴密語集(三卷)鍼灸拔萃大成(七卷)萬病回春指南(五卷)醫學至要抄(四卷)格致論諺解大成(七卷)素

されど萩説―唐津近松寺説は年代孰れも若し

*問諺解(十八卷)灸諺口譯指南(五卷)針法口譯指南(一卷)年中運氣指南

衛門が五世の祖なり」と傳ふるものもある。其の他、越前の人なりと云ひ、三河の人なりと稱し、近江の人なりと傳ふるものもあれば、出雲の人にして、大原郡加茂村には今尚近松の稱を里落に冠せしむる所ありと唱道するものもあり、所説紛々、眞否俄に辨じ難し。世説の多くは長州萩の産となし、年少肥前唐津の近松禪寺に入つて僧となり、後ち京都に上ばりて弟、一抱の家に寓し、遠俗して一條家に仕へたりとの傳説に一致して居るのであるが、此の説とても信じ難し。恐らくは京都の産にして、何等かの所縁にて近江三井の近松寺に遊びたることあり、其れに因みて、近松とも名乗るに至りたるものなるべし。

近松門左衛門の生地においての異説中最も有力なるは、長州萩説と京都説との二つである。其の他は顧みるほどの價值もない。長州萩説は、從來斯界に於ける本傳として一般に尊信せられたるところのものにして、『聲曲類纂』の如きも亦之を以て本傳とし、他は異説として單に參考に供する位の程度に止めて居るのであるが、茲に考證上特に注意を要するのは、不思議にも萩説―唐津の近松寺に在りたりとの説は、多くは近松歿後、餘程後れて出たる著作に散見するところにして、馬琴の『篋笠雨談』には、「越前の人一説に三少して肥前唐津近松寺に遊學し、後洛に住す」と記し、太田南畝が梅園主人野里氏の爲めに撰みたる近松の碑文這は碑石に刻まるゝに至らずしには、「長門萩人父某、母某氏、以慶安四年辛卯生、中翁幼遊唐津近松寺、入京事一縉紳家爲雜掌」云々と記し、『假名世説』文政七年之著にも、

(一)卷)北條時頼記(十卷)
百味主能諺解(五卷)局方
發揮諺解(五卷)藏册經絡
詳解(五卷)雷真君活人方
(二)卷)十四經和語抄等あり。

『假名世説』は太田南畝の未定稿にして、其の門人文寶、山崎美成と謀り若干條を補ふて完稿上梓せる者也、美成の序文に云、翁老罷疎懶、未能脱稿、頃者書實請上之木、縱與不已、其門人文寶與校焉、曰世説猶有補、況此未定册子、豈得不補乎、來即我謀、予與翁交情特厚、豈可以無陋以辭乎、因抄所臆記者若干條與之云々。

年代古き著作は京都説——近江三井の近松寺説である

第八章 近松門左衛門

一七〇

先のとし浪花にありて、銅吹屋熊野屋にてみし事ありしが、これと同文なりしや。近頃浪花の梅園主人のために、近松の碑文を書きし事ありしが、近松は長門萩の生れにて、兄は名譽の醫師なり、門左衛門近松寺と云ふに遊學して、其の寺の僧罪ありて寺門の側にて刑せられしをみて、自らいましめの爲に近松門左衛門と稱せしとぞ。ある時兄の醫師、近松がよしなき淨瑠璃を作る事をいましめし時、そこには和語の藥名の書などを作りて、一字一畫の誤りあれば人の性命にかゝる大事の事なり、我らが作る所は狂言綺語にして人の害にならずといひしかば、あにも其の理に服し、さあらば中直りのため伴ひて大和めぐりせんとて、つれだちためぐり、世に傳ふる寺子供の手本の、龍田詣といふものを書きしと、盧橘菴の物語なり。中操年代記に十一月二十二日とするものあやまれり、僅に残る所に如此



と記せるも、『音曲道智論』明和の頃の著作に係る『戲財録』並木五瓶の著『今昔操年代記』近松と時代を同ふし、豊竹座の軍師たり兼、れて作者たりし西澤一風の著述に係る。等年代古き著作ものには、其の生地、唐津遊學等の事歴に就いて言及する所なし。偶々此れあるものは、京都説——近江三井の近松寺説にして、『竹豊故事』には、「元來は京都の産にて、去る堂上の御家に仕へ、本性は杉森氏にして由緒正しき人成しが、故有て浪人と成る」云々と記し、『音曲道智論』には、「天和の頃近松門左衛門といひし人出で新作を書り、元來は京都の産にて、姓は杉本氏なり。始めは堂上方に仕官し

京都説―近江三井近
松寺説ははるかに萩
説―唐津近松寺説に
優る

京都説の最初の祖述者たる
『竹豊故事』の著者、斯界の
通人一樂山人

て、其の後、近江の近松寺に遊ぶゆゑ、此の苗字を呼けり」と記して居る。『諸事聞書往來』
瑠璃譜一名浄瑠璃譜も亦近江近松寺説である。「名人の作者近松門左衛門出生は近江國高觀音近松
寺御坊にて出家をきらひ京都にくらし居られしを」云々と記せり。「諸事聞書往來」の選者は
不詳。太田蜀山人大阪
に干役せし砌、其の寫本一部を獲て歸り、命題の雅ならざるを惜みて、あらためて『浄瑠璃譜』と題し、世に紹介し
たものである。竹本豊竹兩座の開發より、没落退轉の時に至るまで、即ち貞享に起りて明和に至る凡八十年
間の兩座の興行事項の重なる廉々を詳説し、其の盛衰の跡を明にしたもので、蜀山人の序に云、「享和とあ
らたまりぬるさし、蘆がちる難波にありて此の書ふたまきを得たり、竹本豊竹ふたつの園にかたりものせし、
戯れ文の名を書つられて、笠翁傳奇の種より、僱師舞木の態にいたるまで、見あつめ聞あつめて諸事聞書往來
さしるせり、今その名の雅ならざるを惜みてあらためて竹本豊竹浄瑠璃譜と題す、世に浄瑠璃年代記などい
ふものあれど、擇びて情からず語りて詳ならざりけらし。」
と、斯道に關する參考資料中の最も優れたるものである。

考證の資料としては、其の書かれたる年代よりすれば、京都説―近江三井の近松寺
説の記録は、はるかに萩説―唐津近松寺説の記録類に優つて居る。殊に京都説の最
初の祖述者たる『道智論』は、蓋し『竹豊故事』に『竹豊故事』の著者浪華山人一樂の經歷より推せ
ば、一層此の説の價值多く有力なるが認めらるゝのである。『竹豊故事』は實曆六年の著
にして、著者一樂は何人なるか稽へ難し。此の人別に『今昔操浄瑠璃』の著ありされど著者自身が書いた
序文に、

「爰繁榮の大湊、深き恵や道廣き道頓堀の片邊に、住居する老人有、年壯き砌りより、竹
本豊竹の浄瑠璃を好で、語る事は不得手なれど、聞事は好者也、幾年か東西の淨るり操
の替りを見放したる事もなし、住家より程近ければ、芝居の木戸口へ成共毎日通ひ、外
題看板にても見て歸らねば、氣分勝れず、餘り此の道を好る故、知れる友達異名して、筑
後越前の頭字を取、筑越翁と稱したる」云々

と云へるより見れば、所謂斯界の通人にして、別著『今昔操淨瑠璃外題年鑑』の序文に「寶曆七年八十翁一樂」とあるより推せば、延寶六年の生れに當り、東西兩座の對立となりし元祿十五年は、彼歳二十五、近松門左衛門が歿した享保の九年は、彼歳四十七、而も寶曆七年の比尙ほ健在し、竹豐兩座の勃興時代より、盛隆時代、漸衰時代に涉り、親しく實況を觀察、睹聞し、其の著を成したるほどなれば、何等かの機會に、近松の生國の事なども耳にしたることもありしなるべく、長州萩説、唐津遊學説にして事實なりとせば、此の老人の耳にせざる筈もなかるべしと思料せらるゝのである。

『近松傑作全集』の編者水谷不倒氏は、山岡元隣の著せる俳書『寶藏』寛文七年板行の追加に載せたる、杉森一家の俳句を引いて、京都説考證資料の一として數へたり、頗る傾聽に値する。『寶藏』の序文によれば、著者山岡元隣は、豫て萬句興行を思ひ立ち、知己友人等に徵して、其の句を募つて居たのであるが、其の數未だ充たざるに方ツて病に罹り、志を成す能はざるを察し、既集の句のみを板行し、『寶藏』の卷尾に附して之を頌つたのである。元隣は翌十二年に死んだ。左に其の所説の要旨を摘録して、參考に供すべし。詳しくは博文館發行『近松傑作全集』卷の一、序文を参照すべし。

長州萩説には、原來確かなる根柢なし。俳書『寶藏』の追加に載せたる杉森一家の俳句は、京都説を確むべき資料の一ツである。今右句集中より、順次に杉森一族の句を抜き來れば、

- | | | |
|-----------------|----------|----|
| かへるにも時正たがへぬ雁字かな | 杉森 | 信親 |
| しら雲やはななき山の耻かくし | 同 | 信盛 |
| 花をさかせ又ちらするは異風かな | 同 | 信義 |
| 花にいやな風は空ふげ月の雲 | 杉森五郎助十一歳 | 信義 |
| 糸ざくらながめこまじにかは哉 | 同 | 信義 |

京都説の參考資料として『近松傑作全集』に引用された『寶藏』の近松一家の俳句

あふひかつらかくるゝ宮居はかもし哉

同 信義

稻の露はまづそのまくのほたる哉

同 信義

あした見ば月もや不足けふの月

同 信義

さかりいかにちるはもてなす雪の花

同 喜里

信親、信盛、信義、信秀、喜里の五人は孰れも杉森氏の一族にして、信盛の門左衛門とは父子兄弟の關係ありし人々なるべし。杉森氏と元隣とは同門、季吟門の友なりしか、然らざれば元隣に就て學びしものなることは想像するに難からず。信親は父もしくは兄なるべく信義は弟なるべし。殊に十一歳の五郎助は弟なることいふまでもなし。喜里といふは女らしく、恐らくは妹なるべし。當時門左衛門の信盛は十九歳、其の比尙ほ京都にあり、一家團樂の中に俳句などを口吟くちまんで、樂しき青年時代を過して居たものだと思すれば、唐津遊學の事受取り難し。殊に父子兄弟五人までも俳句を嗜むなど、都育ちの優良に、かてく加へて文學の嗜ありしことも思ひやられ、長州萩邊りの草深く磯臭き所に成長せし人にあらざることを證すべし云々。

萩説——唐津近松寺説は左まで有力根柢あるものに非ざるを知るべし

彼此綜合し來れば、萩説——唐津近松寺説の、左まで有力根柢あるものにあらざるを知るべし。恐らくは近松と云ふ名乗りより牽及し、唐津となし、萩と結び付け、萩と唐津と程近ければ一應尤らしき傳説をも構成するに至りたるものなるべし。三河説、出雲説等に至つてはもとより取るに足らず、兎角偉人の傳記となれば、何やかやと因縁を附け、附會の説を作り、尤もらしき好事的傳説を産み出し來る事、有り勝ちの次第なれば、うかど此等の浮説に乗せられざるの用意が肝要である。されどかく異説もあり、傳説の區々たるだけ、それだけ近松の偉なるを觀るべし。

參照として、左に『聲曲類纂』『竹豊故事』『音曲道智論』の一節を抄録する。

『聲曲類纂』に云。

近松門左衛門信盛 長州萩の産にして同藩臣杉森某の男なり。卯花園漫録には少 越前の人とす。して肥前唐津近松寺に遊學し、或近江國高觀音 後京師に登り、或堂上方に仕へ奉りて爵六位を賜ふと。錦小路頼庸朝臣の五五記に一條禪閣に仕るよしあり、又江戸柳島法性寺境内に建たる近松翁が事跡を記したる碑名にも、一條禪閣兼良公に仕ふるよし記してあり、兼良公は文明中薨去ありて近松より二百餘年の昔なり、もしくは此の公に仕へ奉りし人の子孫にやあらんいふかし。 元祿の頃仕官を退て浪人し、近松門左衛門と名乗り、歌舞伎芝居都萬太夫萬太夫が芝居にて藤壺の後の怨靈藤の花より大蛇になる所を作りて世に賞せ 者大全に見むたり。古今役 又宇治加賀椽井上播磨椽等が爲に淨瑠璃を作る。世繼曾我は加賀椽が爲に作れる 内分て。其の後元祿三年庚午正月京都より浪花へ下り、竹本筑後椽が爲に淨瑠璃數多著述し、其の名を世上にあらはせぬ。貞享二寅年筑後椽義太夫たりし時、これが爲に作 始さす。元祿十六未年あらはせるおはつ徳兵衛曾 根崎心中さいへるな世話淨るりのはじめとせり。元より和漢の書籍を學び、博識にして、しかもよく時世の人情を察し、下情を穿ちて百餘番の淨瑠璃狂言を作れり。中にも國姓爺合戰、雪女五枚羽子板、曾我會稽山等最其の妙を得しとぞ。國性爺の上る 居にて正徳五年未十一月より。享保九年甲辰十一月二十一日七十二歳にて身まかり三年越十七箇月續て興行せり。 云々

大阪八丁目寺町法妙寺に葬す。 云々

門左衛門の兄は相國寺の宗長老、弟は岡本一抱子名爲竹字一抱子といへる名醫にして京師に住す、妹は錦江といふ、俳僧に長じ大阪に住す、兄弟皆世に名高し。 云々

『竹豊故事』に云。

淨瑠璃の作者と極まりたる人昔古はなし、俳諧師或ひは遊人杯の慰みに作れり、

中昔曆と云淨瑠璃は西鶴翁の作也とかや、是を産業うきわざとなせる人は近松門左衛門に始る。此の人博學碩才にしてしかも當世の人氣を察し、世間の世話を能呑込て百餘番の淨瑠璃を作られり。其の文句玄妙不思議を綴る。元來は京都の産にて去る堂上の御家に仕へ、本姓は杉森氏にして由緒正敷人成しが、故有て浪人と成、元祿年中の始め歌舞伎芝居都萬太夫座の狂言作者と成、又宇治加賀椽の淨瑠璃をも作られたり。此の人世上作者の元祖也。

『音曲道智論』に云。

淨瑠璃作者と極しは昔は俳諧師遊人などの慰に作れり。中昔専ら作せしは西鶴翁なり。然ども文勢筆力うすく感情も少なかりけり、依てすたれり。爰に天和の頃近松門左衛門といふし人出て新作を書り。元來京都の産にて、姓は杉本氏なり。始めは堂上方に仕官して其の後近江のちか松寺に遊ぶゆへ此の苗字を呼びけり。作する始は都萬太夫といふ歌舞伎芝居の狂言などを書やり、又宇治流の淨瑠璃井上播磨にも綴りてかたらせ、夫より竹本座のさくを百餘番作りけり。義太夫が妙音にうつしければ聞人感心す。全體文柄拙からず、儒佛神に能渡り、字相たとへことを引にも耳にかゝらず、貴賤のわかち都鄙の國ふり、品位ともさこそあらめと滑稽をつくし、道行ふし事かけ事も伊勢源氏の係を文につけ、しかも俗間の流言おかしく、自然と貴人高位の御耳にふれさせ給ひしより、打續て數の趣向をうみいだせり。中にもおはつ徳兵衛が道行の文には智識も耳

近松が奉仕した公家

初歩時代の作者生活
—彼が放浪時代—

をそばたて、其の外佳言妙文あげて算へがたし。云々

近松門左衛門が奉仕したのは一條家なりとも云ひ、錦小路卿の『五五記』正親町家なりとも云はれ、『翁』一説には阿野家の雜掌なりともあり、奉仕の年次とても亦詳でない。されど、とにかく某公家に仕へたと云ふ事だけは疑のない所にして、彼自身も「三槐九卿につかへて——寸爵なく」云々と記して居る。間もなく致仕して芝居道に投じ、道具方などを手傳ひ、傍ら淨瑠璃なども作して、往々此種天才の壯年時代に有勝な、放浪的生活に耽けりつゝありたるが如し。『野郎立役舞臺大鏡』貞享四年の評判記なりには、「萬太夫座の道具直しにも出たまひ、堺の夷子島で榮宅と組でつれづれの講釋も致されけるなり」とあり。榮宅とは何人なるか詳ならざれど、同氣相求むる一二の者等と組んで、學者然して、徒然草の講筵なども催して居たりしものと思はる。『翁草』には、

「正親町從一位は名におふ狂歌の達人にして、若かりし頃は戯に、宇治加太夫の爲めに、新作淨瑠璃をも作り與へられしことあり、近松は其の使をなし、加太夫方へ往返し、折々は其の作にも手傳ひ、夫れより次第に斯道に入り、加太夫が高弟義太夫をそゝのかし、新たに義太夫節の一流を語り出させ、己れ其の作者になりし。」

と云つて居るのであるが、一説として稽ふべし。

延寶五年彼歳二都萬太夫座の爲めに作り、古今の趣向藤壺の後の怨靈が藤の花なりとてより大蛇に變する趣向

人氣を博し、評判を取つた『藤壺の怨靈』の如きも、公家奉仕中の餘業なるか、將又致仕後の所作なるかは判明せずと雖、兎に角彼が公家奉仕の期間は左まで長きにあらざりしな

るべし。彼は井上播磨の爲めに「天鼓」を作り、宇治加賀の爲めには「徒然草」「世繼會我」を始めとし、「當流小栗判官」「弘徽殿嫉妬打」「主馬判官盛久」「團扇會我」「加増會我」の如き幾多の作物を供給して居る。山本土佐の淨瑠璃「源氏烏帽子折」井上播磨の淨瑠璃「頼朝七騎落」等亦近松の作なりと稱せらる。孰れも彼が作者生活の初歩時代、修業時代の試作的作物である。

門左衛門が義太夫と相識りたる初め

門左衛門が義太夫と相識りたるの初めは、義太夫が京都に上り、清水理太夫の名に於て宇治加賀椽當時嘉太夫の脇語りとなり、「西行物語」の二段目藤澤入道夜盜の場を語り、喝采を博し

兩者の默契

たる比の事にして、當時義太夫は二十三歳門左衛門は二十五歳、洋々たる前途を有する斯界の二大天才は、ゆくりなく邂逅默契し、因縁始めて結ばれたのであらうと想察される。義太夫が宮島より歸り、獨立の旗幟を竹本座に樹つるや、彼れ門左衛門は「出世景清」を新作して其の前途を祝福し、次で矢繼早に「佐々木大鑑」「多田滿仲記」等を新作供給して、遂に彼に勢援して居るのである。

元祿三年彼は其の居を大阪に移して竹本座の專屬作者となつた。竹本座に上場せられた近松の新作淨瑠璃中、義太夫の爲めに演せられたるもの大約六十番、其の間三十年。彼の作と義太夫の伎、彼の文と義太夫の曲、兩々相倚り相俟つて斯道百年の基礎を固め、範を後人に垂れたのでありし。

彼の健康と著作

彼は義太夫に遅くるゝこと十年、享保九年十一月二十三日、七十二歳にして彼の第二の故郷たる大阪に没した。想ふに彼は非常の健康體なりしなるべし。竹本座の作者

として通じて四十年間、其の上場の正本は殆ど擧て彼一人の作になり、竹本座創立の當時古淨瑠璃を上場したることもあり、晩年に至つては松田和吉多きは一年六種にも及び、而も其の文竹田出雲等も出でて、一二の新作を上ほせたることもあれど、其の想、絶わて凝滞の痕を止めざるより見れば、彼が絶倫なる根氣のほども思ひやられるのである。七十歳の秋頃よりは起居例ならざりしものゝ如く、七十一歳なる享保八年には一の新作なく、翌年正月僅に『關八州繫馬』を著したるを最後とし、遽焉として逝いた。

彼の述作中最も時好に投じ大當りを取つた外題は、正徳五年彼れ歳六十三十一月に上場した『國性爺合戦』である。享保元、二とかけて三年越し十七箇月間打通し、古今の大當りを取り、京都の都萬太夫座享保元年上場大阪の歌舞伎各座享保二年上場江戸の三芝居同上共、孰れも『國性爺』で持ち切り、三都の觀客を驚喜せしむるほどの盛況を呈した、彼が當時の満足如何ばかりなりしか、想ひやるだに餘りあるのである。

近松墳墓の地

谷町法妙寺の廻向塔やうの
空墓

近松の墳墓は、攝津河邊郡久々智村神崎の隣村の廣濟寺、大阪谷町法妙寺、肥前唐津近松寺の三箇所に在り。唐津近松寺の墳墓は、一旦久々智の廣濟寺に葬りたるを、遺言に由り翌享保十年に改葬したるものゝ如くに云はれて居るのであるが、信じ難し。谷町法妙寺のものは、廣濟寺模うしろ形の廻向塔やうの空墓にして、後の篤志家の建立に係るものなるべしと思料せらる。太田南畝の『假名世説』には、大阪谷町法妙寺に近松の墓あるも、墓碑の裏かけて僅に残る所辰年十一月二十一日とありたりと記し、馬琴の『簗笠雨談』には「享保九年十一月二十二日歿、墳墓しれず、攝州久々智の廣濟寺過去帳に法名あり」と記し

たり。現形いまの兩寺法妙廣濟の墳墓は百五十回忌に際し、自ら稱して門左衛門の曾孫と名乗れる、狂言堂近松門三郎春の家繼月の改修したものである。

廣濟寺には過去帳もあれば位牌もあり、寺記中には門左衛門及俗縁の人々の名を記したるものもあり、楳森氏の菩提所なりと信すべき憑據多しと雖、法妙寺には墓石の外資料たるべきものを存せず。唐津近松寺の墳墓に就きては水谷不倒氏の詳なる考證あり、傳説の妄謬を辯じて剩す所なきまでに細論されて居る。阿禰院穆矣日一具足居士なる法號は死に先ち、彼が病褥の中に自撰したものである。

左は『聲曲類纂』に載せたる彼が辭世である。

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九鼎につかへ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂て商賣知らず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず、ものしりに似て何もしらず、世のまがひもの、唐の大和のなしへある道に伎能雜藝滑稽の類まで知らぬ事なげに、口にかかせ筆にはしらせ、一生を囀りちらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑、こころに心の恥をおほひて七十餘りの光陰、おもへばおほつかなき我世經畢、もし辭世はこそ人あらば、

それ辭世去ほどに扱もその後へのこるさくらの花しにははは

享保九年中冬上旬

入寂名阿禰院穆矣日一具足居士不俟終焉期豫自記春秋七十二歲

のこれとぞ思ふもおろかうつみ火のけぬまあだなる、くち木かきしき

一週年の追福にあたり、彼が友油煙貞柳は、

近松巢林子翁一周忌追福に

さつするに今は安樂國性爺

扱も其の後びんぎなければ

同はるか向ふの百回忌追善の心を

さまざまに作りし枝の面白や

古ふなるほど根あがりの松

と吟んで手向けて居る。

左に水谷不倒氏の近松墳墓の考證中、唐津近松寺の遺跡に就きての所説の大要を紹

介すべし。詳しくは博文館版行近松傑作全集序論を参照すべし。

肥前唐津近松寺は近松門左衛門といかなる關係を有するかといふに、殆ど捕捉すべ

き證跡を認めがたし。岡本撫山氏の著書名を忘れたり稿本に、明治二十四年七月六日の大

阪毎日新聞に、

肥前國松浦郡唐津の有志者は、今回近松門左衛門が遺骸を葬りしといふ同地

の近松の墓所を穿ち、其の眞偽を確めし處地伏石にて左の如き文鐫附ありし

といふ。

卯海祖門上座者、長門深川人也、從當山第四世遠室禪師、而授業得度、學識共卓

絶、後遊京師變姓名稱近松門左衛門、以著作淨瑠璃爲業、享保九年甲辰年十一

月二十三日、卒於浪華、以遺言歸葬於寺墓地

享保十年乙巳六月二十二日

當山六世現住

鏡堂識之

水谷不倒氏の唐津近松寺の遺跡に就きての考證

この記事ありしより、七月八日近松寺に照會して之が虚實を問ひしに、同月十一日附を以て同寺より、

碑文は相違なし、卯海の卯は印の誤りなりと。該寺舊記には、四世遠室禪師の法弟にして名は祖門古澗と號し、道學兼備に因り遂に禪師の法席を續ぎしが、延寶六年京阪地方を遊訪し、淨瑠璃著作をなせし也とは一々明了記載せりと。義門は祖門の誤りなるべし。

この回答に接したこの事が記されて在る。

雖然寛文十一年には近松京都に在りしことは其の證あり、延寶六年前既に、都萬太夫座の狂言作者たりしことも亦其の證あり。岡本氏は篤實の學者にして、右の筆記に私見を挿むが如き事なきは云ふまでもなき次第なれば、前記唐津近松寺の住職との問答は、一字一句相違なかるべしと雖も、果して此の記事の如しとすれば事實に反する所少なからず。予が水谷不倒氏なり明治三十九年七月九日同寺に就て、親しく其の遺跡記録等を尋ねたる時には、舊記といふものもなく、住僧の答へも先きに岡本氏が受取りたるものとは全く異つて居た。

近松寺は唐津西寺町にある臨濟宗の名刹にして、舊唐津藩主小笠原家に由緒ある寺なり寺内には近松の墓あり。又其の墓より發掘したりといふ碑文あり前の岡本氏稿本に載せたるものいへども、其の碑文は後人の作爲せしものなるべく、墓石また何等の記文なければ、これを近松の墓といひ得ると同時に、また他の者の墓ともいひ得べし。同寺には、近

松の遺物は勿論、これに關する記録前の岡本氏の質問せし
時にはありと答へたるも存せず、たゞあるものは、いかがはしきものゝみにして、近松が曾て遊學せしといふ事實には何等有利なる事を證明せず云々。其の碑文といふものに、長門深川の産とあるより見れば、後の近松の遠孫と稱せし者註、狂言堂近松門
三郎を指せる也の作爲せし系圖及び大阪四天王寺畔に建設されたる碑銘にあるものと一致しをれば、碑文の出來た時代も之を刻作した人も、物色する事難しとせず、所詮唐津の近松寺には、近松の遺跡も遺物も何も無き事を斷言するに憚らず云々。

如何にも有力有益なる考證にして、唐津近松寺遊學説の如きは、根柢よりして憑據を失ふこととなるのである。

近松の作物と文章

作者生活の最初の十年 修業時代
練習時代 古淨瑠璃の舊慣故習を脱せざりし

淨瑠璃の型式 此の期の卒業論文としての『出世景清』 純乎たる古淨
瑠璃の筆致

研究期、實修時代に屬する元祿の十六箇年 凡ゆる研究工夫は此の間に成つた

構想行文の祕訣を語つた近松の直話 彼が人生詩人としての卒業論文『曾根崎心中』

心中物淨瑠璃の流行

圓熟大成せる晩年時代の二十年 此の間に成つた
幾多の傑作 世話淨瑠璃の最終作

唐津近松寺遊學説は
全然根據を失するに
至る

『心中宵庚申』

近松獨創の雅俗折衷文

豐富なる文藻と自在なる筆致、忙中閑ある餘裕、口を衝いて出る輕妙なる滑稽、景情併せ敘した自在なる用

筆其の例として『壽の門』
松『夕霧阿波鳴渡』の一節

馬琴と西鶴と近松

慾を描いた西鶴、自我的處生觀、道義的長談義の小説化した馬琴

物性を描き、時代を描き、周圍を描き、活きた人生を描き、實世間を描いた近松

た近松

作者生活の最初の十年—修業期、練習時代

古淨瑠璃の舊慣故習を脱せざりし淨瑠璃の型式

近松が都萬太夫の爲めに『藤壺の怨靈』を書いたのを、假りに彼が齡二十五歳の時であつたとすれば、其の前、尙ほ一二の著作あるが如し、されど確と考證し七十二歳『關八州繫馬』を絶筆として逝けるまで、『關八州繫馬』は享保九年正月十五日の上場なれば、其の執筆は前年彼歳七十一に彼が病臥中の事なるべしと愚料せらる。彼が詩人的生涯は實に四十八年にして、萬太夫、宇治加賀、井上播磨等の爲めに作れる最初の十箇年は、修業期練習時代に屬し、修辭構想ともに未だ古淨瑠璃の舊套を脱するに至らず、「扱も其の後」「斯くて」「去る程に」などと、古淨瑠璃常用の唱破辭轉換語を使ひ、一段の結びとなれば、「感せぬものこそなかりけり」「恐れぬものこそなかりけれ」などと、千調一律の筆法を踏襲し、構想亦單純にして、戯曲と云はんより寧ろ物語りと云ふに近く、貞享三年二月義太夫の爲めに初作せる『出世景清』は、彼が修業期の卒業論文とも稱すべき作物なれど、夫れにさへ尙且つ依然として古淨瑠璃の舊慣故型を襲ひ、「扱も其の後」「斯て其の後」と無意味なる唱破辭を以て起り、「恐れぬものこそなかりけれ」「感せぬものこそなかりけれ」と、同一結語を繰返して居るやうな有様である。されど此の平凡單調の中にも、何處やらに彼が天賦の詩才のひらめきもほの見ゆるのであつて、流石は近松

なりと頷かるゝ節も多し。

修業時代の卒業論文
としての『出世景清』

左に『出世景清』全章五段の内、二三四の三段を抄出し、修業時代の彼が構想筆致の一端を稽考するの資料とする。

出世景清 第二

地 去程に誠や猛き武士も、戀に寢るゝ習ひ有り、薪を買へる山人も、立よる花の景清も、常に清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片ほりに、阿古屋あぐらといへる遊君に、フシカリそめぶしの假枕かりまくら、いつしか馴れて今ははや、二人の若をぞまうける。兄のいやいし六歳弟のいや若四歳にて、世におさなしくぞ見ぬにける。阿古屋はもさより遊女なれども、妹脊の情こまやかに、世になき景清をいさおしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家業をつがせんと習はぬ女の身ながらも、兵法の打太刀うちたかち、武道を教ゆる心ざしたぐひ稀にぞ聞ぬける。フシがる所へ悪七兵衛景清は、重忠を討損じ、やうくとして清水や、フシ阿古屋が庵に著給ふ。地 女房子供を引つれば、こは珍しや何として御のぼり候ぞ、先此方へと請じける。景清申しけるは、内々御身も知る如く、我平家の御恩を報ぜん爲め、鎌倉殿を狙へども、其の甲斐なくて一兩年は、尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此度こたび島山重忠、東大寺再興の奉行に上るをよきしほぞ、先重忠を狙はん爲め、我身を賤しき下郎にしなし、既に間近く付寄せしが、運強き重忠にて、地 我等が智略あらばれ、本意なくも討損じ、一向に重忠と刺違へ死なんぞは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顔をも見まはしく、無念ながらもなからへて、倍只今の仕合なり、地 誠に久しく逢はぬ間に、子供もいさう成人し、御身もすんご女房をしあげたり、地 何でも今宵はしつばりこ、積る辛さを語らんぞ、しこく寄れば、よく榮耀らしい、斯く涙人のうき身さいひ、殊更敵をもつたる身が、せめて一年に一度の便をもし給はず、チ、夫もこさわりよ、地 此の頃聞ば、大宮司の姫おのゝ姫さやらんに深い事

純乎たる古淨瑠璃の筆致

と承はる、尤かなみづからは、子持筵のうらふれて、見る目にいやと思すれども、子に絆されて御出か、
情氣するではなけれども、浮世狂ひも年による、しやほんにおかしい迄、フシ能い機嫌ぢやと有けれ
ば、謂景清打笑ひ、是は迷惑、其の大宮司の娘おのゝ姫おのゝ姫には、しかゝ物をも云はゞこそ、八幡ノゝさ
うした事で更になし、地そちならで世の中に、いさしいものが有るべきかさ、なほももたる袖枕、
阿古屋も心打解けて思ふ餘りの戀いさかひ、犬が喰ふさまは是ならん。(中略) 謂然る所へ熱田大宮
司よりの飛脚なり、景清様の御旅宿所は是にてや候やらん、やがて文箱を出しける、十藏出合ひ、
いかにも、是は景清殿の旅宿にて候が、宿願有て兵衛殿は清水參詣致され候御文を預かり置歸
らん次第見せ申さん、明日御出候へ、飛脚を返し、兄弟文をひらいて見れば、おのゝ姫の文にて有り、
かりそめに御上りましゝて、いなせの便もし給はぬは、かれゝ聞し阿古屋さいへる遊女に御し
たしみ候か、未來を掛けし我が契り、いかゞ忘れ給ふかさ、こまゝこそ書れける。地阿古屋讀も果
給はず、ばつとせきたる氣色にて、恨めしや腹立や、口惜や妬ましや、戀に隔はなきものを遊女とは何
事ぞ、子の有る中こそ誠の妻よ、斯さはしらではかなくも、大切がりいさしがり、心をつくせし悔しさ
は、人に恨みはなきものを、男畜生いたづらもの、アゝうらめしや無念や、文ずんゝに引裂きて、か
ちち怨みて泣給ふ、フシこさわりとこそ聞けけれ。地十藏悦びそれ見たか、謂此の上は片時も早
く訴人せん、もはや思ひ切たか、と云へば、チ、何しに心残るべき、せめて訴人してなりとも、此の恨を
晴してたべ、實によき合點と立出れば、又しばらくと引さゝめ、さは云ながら、いかに恨はあればとて、
夫の訴人はなるまいか、地イヤ又思へば腹も立、憎いは女め、エ、是非もなやと、或はさゝめ或はす
すめ、身を闊へてぞ歎かるゝ。地十藏袂を振り切て、エ、輪廻したる女かな、そこ退けと突のけて、六
波羅さして急ぎしは、了簡もなき 三五次第なり。(中略)景清縁端に突立て、今宵の訴人は妻の阿古屋、
同く兄の十藏と覺わたり、おのれ數年の恩愛を振り棄て、大慾にふける愚人ども、勿體なくも此の御

寺に、血をあやす奇怪さよ、逆も世になき某が、おのれらが身の爲ならば、何條命惜からん、人多く討たせんより、女房兄弟おり合て、搦め取れさぞ喚きける。十藏が下人二三太といふもの、分別もなく飛でかゝる、景清莞爾と打笑ひ、傍にありける雙六盤、片手に取て投付くれば、二三太が真向に、響きわたつてはつしとあたれば、首は胴にぞにへ込みける。(中略) 地景清今は是迄と、首羽の山の峰をこぼ、棺を踏み分け殿をおこし飛こへ、跳こへ飛越、刹那が間に飛ぶが如くに、東路さして落行しは、誠に稀代の武夫やと、偕感ぜぬものこそなかりけれ。

同

第三

地かくて其の後悪七兵衛景清行方知れず成たれば、尤天下の御大事と、諸國の由縁を詮議ある。申にも熱田の大宮司は現在の舅とて、千葉の小太郎堀め取て、警護嚴く打つれさせ六波羅に引すゆる。梶原源太大宮司に對面し、汝は當家の大敵平氏の落人景清を、聳に取のみならず、剩へ行方もなく落しける、罪科甚だ輕からず、何方へ落しけるぞ真直に申せ、少も陳せば拷問せんとはつたさ怒つて申ける。大宮司聞給ひ、仰の如く景清さは縁を結び候へども、去年の春國許を立出、今に便も候はず、土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すこと隠し送られ申すべきか、聳に取りしを曲事とて誅せられんは力なく候、行方に於ては存せぬと、詞清しく申さるゝ、重忠仰せけるは、尤々、たさへ行方を知つればとて、聳の訴人は致されまじ、達ては此方の不調法、いかに梶原殿彼の景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を牢舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲め、己れと名乗て出ん事は目前に見候、此の儀はいかにと有ければ、地おのゝ評定尤もと、六波羅の北の殿に新造の牢を建て、大宮司をおしこめさせ嚴しく番をぞ、三重させせる。フシ人につらくはあたられど、何の報いや袖の露、枯れも果なで小野の姫、いたはしや、去年の春夫は都へ去にしより、阿古屋の松の夕時雨、染つけられて若紅葉、こひやちらんさあけくれに、フシオッリ人目つくみのくひゝと、案じ煩ふ身の上に、父

道行の文は殊に近松の長所とするところなるに、此の道行の筆致は餘りに拙なり、されど未熟ながら、又さすがに近松ならではさ思はるる節も多し。

は都の六波羅へ捕まなりて淺ましかや、憂目にあはせ給ふその、其のおこづれを聞きしより、思ひに思ひつみ重れ、せめては憂にかはらんき、乳母ばかりを力にて、小ナリ旅の衣、手涙冷たきく、れなかに、紅絹裏濡れて夕ざれし、フ空飛ぶ雁のかへるさに、物忘れせぬ古郷の風も、我身に吹きかへて、今の門出を、なほりぞき國の名残も、つくましく、身の種蒔し産の神、熱田の宮居伏し拜み、父と夫とを安穩にあくまばらへと取る弓の、桑名の舟に、梶枕敷敷の筥の、荒筵肌にあれて、つらけれど、戀する海士が、鶯の、フ夜の姿さみるめかや、かづく菫藻は何々ぞ、小ナリ歌によまれしひじき藻やか、だめ甘海苔春も、又若布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見、はておきな鶯ねをぞ鳴く、花にまがひの櫻のり、天をひたせば雲のりに、月をつくみて別るさはすれど、手には取られぬ桂男の、あくいぶりさば、いつ青海苔も、かだのりき、身の相良布をなのりぞや、あらめづらしき、荒布かる、二見の浦は、遙々、松の村立色の、濱蒔繪によくも似たるよな、跡は白雲さばかりを、故郷の夢さそらさめて、庄野に續く、龜山は誰爲ながき、萬代も、啣つ涙はせきもせて、フ何をか關の地藏堂、せめて未來を頼まばや、上り下りて、阪の下谷の川瀬に、かりりころり、フころころなるは、河鹿の鳴く聲か、小石流れて行く音か、いや水の泡散る、玉でないよの、馬駒のひざぶし、ちんからが、ちんからからの鈴鹿、山賤が草鞋の營みに、ふけて、藁打つつち山やだての、旅路に行くならば、買ふてもたもれ、水口のつづらおがきに、露漏りて、をのがまくなる、鬢水は、櫛にたまらぬ、亂れ髪、さくく、行けば、洛陽や、フ六波羅にこそ、三蓋者かれけれ。（中略）地梶原親子が奉行にて、方一町に垣を結び、突棒刺又鐵の棒兵具、ひつしと竝べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を、フ奇責にかくる如くなり。地いたはしや、小野の姫、荒き風にもあてぬ身を、裸體になして、繩をかけ、十二子の階梯に、胴中を縛り付け、あはれも知らぬ、雑人共、湯桶に水をつぎかけ、く落よ、くさ責めけるは、只瀧つ瀬の如くにて、フ目もあてられぬけしきなり。地むさんや、小野の姫息も、はや絶ぬに、心も亂れくるめき、既に最後さ見ぬけれど

も、いや／＼武士の妻も成り、心弱くてはかなげにさあらぬ體にもてなし、いかにかた／＼、夫の景清常に清水寺の觀世音を信仰し、我にも信じ奉れど、深く教へ給ふゆゑ、今までも尊號を絶す唱へ奉つれば、此の水は觀音の甘露法雨と覺ゆたり、今此の水にて死する命は惜からじ、夫の行方は知らぬぞや、千日千夜も責給へ、南無や大悲觀世音と、苦しき體をおしかくし、潔くはの給へども、さすが強き栲間に、聲も濁りて身も顛ひ、よわ／＼となり給ふは、借も悲しき次第なり、此の分にては落まじきぞ、やれ枯木責にせよやきて、細首に繩を付け、松の枝に打かけて、地ゑいやくと引あぐる、おろせば少し息をつぎ、引き上れば息たゆる、フあはれさいふも餘あり、地たさへいかなる鬼神も是にてはおつべしと、二三度四五度責ければ、今はかうよと見ゆるが、又目を閉きなふ梶原殿、此此の木の上に釣り上られ、世界を一目に見下せども、夫の行方は見ぬ申さず、かた／＼も慰みに、ちつこ上て見給はぬが、フ是へ／＼と有ければ、景時腹にすへかれ、借借々しぶこき女かな、此の上は引下し火責にせよと炭薪を積み重ね、團扇をもつて煽ぎ立／＼、天をすすめし黒煙、焦熱地獄と謂つべし。
(中略)景清も涙をおさへ頼もしの心底や、人は素性が耻しく、子中をなせし阿古屋めは、男の訴人をしたりしに、御身は命にかはらんとは頼もしや嬉しやな、去ながら父大宮司の御事心元なう覺ゆれば、御身は是よりさう／＼歸り、菩提を弔ふてたび給へど、鬼を欺むく景清も、不覺の涙を流しける、フこまばりせめて哀なり。此此の事六波羅へ聞わしかば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に走せ來り、借借も景清人の難儀を救ひ、御身を名乗て出らるゝ段、近頃神妙、尤も斯うこそ有べけれ、此の上は小野の姫大宮司共に御赦免なさるゝ候、景清に繩よこひしめければ、景清悦び夫こそ望む所よと、已れど千筋の繩をかくり、先に進めば小野の姫、なふみづからも諸共と、駈け出取付給ふを大勢中を押隔て、あたりを拂つて引立行く、景清が心底勇あり義あり誠あり、前代未聞の男なりきて、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

同 第四

六波羅牢舎の段は實に『出世景清』全篇中の最高頂である。修業時代の近松の伎倆は此の一段に徴すべし。

地斯くて其の後げにや猛將勇士も運盡きぬれば力なし、不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南表に始めて牢を立させらる。櫓、白檜、楠の木、長さ一丈にさらせ、地へは七尺掘り入れ、上、三尺の詰牢にし、この木をもつて蜘蛛手格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打たれば、劍を植ゑたる如くなり、七尺ゆたかの景清をふたへに取て押し入れ、髪を七はに束れて、七方へこそつたりける。足を牢より引出し、ゆんでめてへ取ちがへ、山出し七十五人して、ひいたる楠木にてあげほだしを打たせ、しつ錠詰金たうくぐるく、千引の石材木を積み重ね、首には根掘りの大筒を、三本まで擔がせたり、諸人に見せて恥かくせよと、番も警固も付ざれども、中々五體働かず、されば文王は羨里に囚はれ、公治長は刑戮にかくれり、君が爲名の爲なんぞかつて憂へんを、觀音經讀誦の外、世言口を閉たれば、聲聞耳に閉せり、働く物は兩眼のみ、フシ見る目も悲しくあはれなり。(中略) フシは借置、地阿古屋の前いや石いや若もる共に、山崎山の谷陰に、深く隠れておはせしが、地景清牢舎と聞くよりも、我身も有るにあらばこそ、六波羅に走りつき、此の體を一目見て、なふ淺まししの風情やなやれあれこそ父よ我夫と、牢の格子に縋りつき、フシ泣くより外の事ぞなき。詞景清大の眼に角を立、やれ物しらすめ、人間らしく詞をかくるも無益ながら、斯程の恩愛を振り捨て、夫の訴人をして、何の生面さげて今此所へ來たりしぞ、地己れ指一つかなひなば、掴み挫いで棄てんものを、齒がみをしてぞ居られける。地實にお恨はこそはりなれども、妾が事をも聞き給へ、兄にて候十藏、訴人せんと申せしを、再三止めて候所に、大宮司の娘おのゝ姫さやらんより、親しき御文参りしゆへ、女心の淺ましき嫉妬の恨に取亂れ、あささきのふまへもなく、當座の腹立、フシやるかたなく、地兎も角もさ申しつる、後悔先に立ばこそ、左は去ながら嫉妬は殿御のいささしゆゑ、女の習ひ誰身の上にも候ぞや、申譯いたす程皆云落にて候へども、今迄のよしみにば、道理一つを聞分て、只何事も御免

あり、今生にて今一度、詞をかけてたゞ給はゞ、それを力に自害して、我身の云譯立申さん、地にひれふしてぞ泣ぬたる。地むざんや彌石父が妾をつくぐ見て、彌なふ父上程の剛の者が、なげやみやみさは捕はれ給ふぞ、いで押破つて助け奉つらんぞ、地柱に手をかけぬいやぬいや、押せども引けどもゆるかばこそ、フ不便なりける所存なり。地弟の彌若は、ほだしの足に抱きつき、調いたいかや父上様なふいたむかき撫であげ撫下げ、さすり上、兄弟わつこ叫びければ、思ひ切たる景清も、不覺の涙せきあへず、地やくあつて涙を押へ、やれ子供よ、調父が斯様になりたるは、皆あの母が悪心にて、繩をも母がかげさせ、牢にも母が入けるぞ、地邪慳の女が胎内より出たるものと思へば、汝等までが憎いぞや、父さと思ふな子さと思はじ、はやく歸れと叱るにぞ、子供は母にすがりつき、なふ父をかへしや、父上かへせと、れだれ歎きし有様は、目もあてられぬ次第なり。地阿古屋はあまり堪へかれて、よし此の上は自らは死も角も、かはいやな兄弟に、やさしき詞を唯一言、さりてはかけてたゞ、なふ子はかほゆふはおぼさぬかき、又せき上てぞなげかる。調景清かされて、おこきやうなる悪人に返答もせじと思へども、今の悔をなご最前には思はざりしぞ、左れば天竺に獅々さいふ獸有り、身は畜生にてありながら、智恵人間にこゑたれ、獵人にも取られず、却て人を取り喰ふ、されども腹中に蠱毒さいへる蟲ありて、此の蠱毒を吐くゆゑに、體を破つて自滅すなり、されば女の嫉妬のあだ人を恨むと思へども、夫婦は同じ體なれば、皆是我身を責るこそわり、わごぜがやうなる我慢愚痴の猿智恵を、獅子身中の蟲にたさへて、佛も戒め給ふぞや、汝が心一つにて、本望遂げず刺さへ、耻辱を取り、今云わけて、妻子が歎くを不便よとて、日本一の景清が二たび心をかへすべきか、何程いふても、汝が腹より出たる子なれば、景清が敵なり、妻さも子さも思はぬぞ、思ひ切てぞ居たりける。地借はいか程申しても、御承引あるまじきか、調チよくごい、見苦しきに早やはや歸れ、思ひ切つたぞ、地なふ最早ながらへて何方へ歸らうぞ、やれ子供よ、母があやまりたればこ

そ、かく詫言いたせども、つれなき父御の詞を聞いたか、親や夫に敵と思はれ、お主らとても生甲斐なし、此の上は父親持たし思ふな母ばかりが子なるぞや、自もながらへて、非道のうき名なごさんこそ、未來をかけて情なや、いざ諸共に死出の山にて言譯せよ、いかに景清殿妾が心底地是まで、彌石を引寄せ、守刀をすばさぬき、南無阿彌陀佛と刺通せば、彌若驚るき聲を立て、いや、我は母様の子ではなし、父上助け給へやと、半の格子に顔をさし入れ、迷あるく、エ、卑怯なりと引よすれば、わつと云て手を合せ、ゆるしてたべこらへてたべ、明日からはおさなしう、さかやきも刺り申さん、突をもすゑませう、借も邪慳の母上様や、助けてたべ父上様と、息をばかりに泣わめく。地ナ、こさはりよさりながら、地殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝぞ、あれ見よ、兄もおさなしう死したれば、おこさや母も死なでは父への言譯なし、いさしいものよ能う聞けと、すゑめ給へば聞入つて、あくそれならば死にませう、父上さらばと云捨て、兄が死骸によりかくり、打あをのきし顔を見て、いづくに刀を立べきぞと、阿古屋は目もくれ手もなへて、フシ轉ふしてぞなげきしが、エ、今はかなふまじ、必ず前世の約束と思ひ母をばし恨むるな、おつとけ行くぞ南無阿彌陀と、心元を刺通し、さあ今は恨を晴し給へ、迎へ給へ御佛と、刀を咽喉におしあて、兄弟が死骸の上にかつばさふし、共にむなしくなり給ふ借も是非なきふぜいなり。景清は身をもたへ、泣げど叫べどかひぞなき、神や佛はなき世かの、さりさては許して呉れよ、やれ兄弟よ、我妻よと、鬼を欺く景清も、聲を上てぞ泣居たり、フシ物のあはれのかぎりなり。(中略)景清腹にすへ兼れ、いで物見せんよと云もあへず。地南無千年千眼生々世世一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力と、金剛力を出し、えいやつと身ぶるひすれば、大釘大繩ばらばらすんときれてのいた、貫木取て押歪め、扉をかつばと踏倒し、大手を廣げ躍り出、八方に追ひ廻すは暴れたる夜叉の三重如くなり。(中略)地さあ爲すまじたり此の上は、關東へや落ち行かん、いや西國へや立のかんよ、ゆきつ戻りつ、戻りつ行きつ、一町計り走りしが、いや、此の度落失せなば、又大宮

司やおのゝ姫、憂目を見んば治定ちぢぢぢと思ひ定めて立歸り、もこの牢屋に走り入り、内より貫木しこくしめ、千筋の繩を身に纏ひ、左あらめ體にて普門品、讀誦の聲をおのづから、即身菩薩の變化ならんを、皆感ぜぬものこそなかりける。

研究期—實修時代に屬する元祿の十六箇年

凡ゆる研究工夫は此の間に成つた

構想行文の秘訣を語つた近松の直話

元祿の十六箇年は、實に近松が人生詩人としての研究期、淨瑠璃作者としての實修時代に屬する。彼の構想、彼の筆致は此の間に於て次第に暢達練熟し來り、元祿十六年五齡一初めて世話淨瑠璃に筆を染め、『曾根崎心中』を出すに至つて形質ともに完成し、其の想其の文併せ至れる、淨瑠璃正本の典型を形づくるに至つたのでありし。

此の間に於て彼は淨瑠璃の體裁を一定した。在來の淨瑠璃型を變じて新たなる型式を定めた。戯曲の題目、取材の範圍を擴張し、廣く活世間の活事情に求め、描いて人情の機微に觸るゝの呼吸をも呑み込んだのであつた。虚にして虚にあらす、實にして實にあらす、虚實の間を行くべき呼吸をも了悟したのであつた。『難波土産』の著者穗積蘭阜が、近松の直話として記して居る、

往年某近松が許に訪らひけるに、近松翁の云ひけるは、總じて淨るりは人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて文句皆働きを肝要とする活物なり。殊に歌舞妓の生身の藝と戯場の軒をならべてなす業なるに、性根なき人形にさまざまの情を持たせて見物の感賞を取らんとする事なれば、大抵にては妙作といふにいたりがたし。予若きとき大内の草紙を見る中に、節會の折柄雪いたう降りつもりけるに、衛士に命せて橘の雪拂はせられければ、傍へなる松の枝もたは、ふなるがうらめ

しげにはね返りて云々と記けり。是れ無意草木むごうさくもくを活物開眼したる筆勢なり。其の故は、橘の雪を拂はせらるゝを松がうらやみて、おのれと枝を跳返して、たはふなる雪をはね落して恨みたる氣色、さながら活て働く心地ならずや。是を手本として、我が淨瑠璃の性念を入る事を悟れり。爾れば地文句せりふは云ふに及ばず、道行なんどの風景を述る文句も、情を込ること肝要とせざれば必ず感心薄き物なり。詩人の興象といへるも同じ事にて、たとへば松島嚴島の絶景を詩に賦しても、打詠めて賞するの情を基ゐとすと心得べし。文句に手爾葉多ければ何となく賤しき物なり。然るに無力なる作者は、文句をかならず和歌或は俳諧などのごとく心得て、五字七字等の字配りを合さんとする故に、自圖おのづかと無用の手爾葉多くなるなり。譬ば年も行ぬ娘をと云ふべきを、年端も行ぬ娘をばと云ふごとくになる事は、字割にかゝはるより發りて自然と詞列ことばらいやくしく聞ゆ。爾れば大體は文句の長短を揃へて書べき事なれど、淨瑠璃は元音曲なれば語る所の長短は節に有り、然るを作者より字配りを信耀と詰れば、却て口にかゝらぬ事有るものなり。此の故に、我が作にはかゝはりなきやうに仕組る事ゆる手爾葉おのづから少ない。昔の謳曲は今の祭文同然にて、花も實もなきものなりしを、小生出て加賀椽より筑後椽に移りて作文せしより、文句に心を用ゆる事は昔に替りて一等高く、譬ふれば公家武家より以下夫れくの格式をわかち、威儀の別よりして詞遣ひ迄其の移容を專一とす。此の故に同じ武家なりといへ共、或は大名或は家老と、其の外祿の高下に付て其の

程々の格をもつて差別をなす、是れ語り人に夫れ、の情の能くうつらん事を肝要とするゆゑなり。淨瑠璃の文句皆實事を有りの儘にうつすものなれど、其の内には藝になつて實事になき事も有り、近くは女形の口上多く實の女の口上には得いはぬ事を打出していふ、故に其の實情が顯はるゝなり。此の類は實の女の情に基著てつゝみたる時は、女の底意なんどが顯はれずして、却て慰みにならぬ故なり。然るに依て藝といふ所へ氣を付ずして見る時は、女に不相應なるけうどき詞など多しとおそらくは譏るべし。然れ共此の類は藝なりと見るべし。此の外敵役は餘りに臆病なる體や道外やらのをかしみを取る所、實事の外の藝に見なすべき所多し。此の故に是を見る人其の斟酌有べきなり。淨るりは愁ひが肝要なりとて、多く「哀れなり」なんど云ふ文句を書き、又は語るに文彌節やうのごとくに泣くが如く語る事、我作のいき方にはなき事なり。小生が憂ひは皆義理を専らとす、藝が義理に詰りて哀れなれば節も文句も倍といたる程いよく哀れなる物なり。此の故に哀れを「哀れなり」と云ふ時は含蓄の意なうして結句其の情薄し、「哀れなり」と云はずしてひとり哀れなるが肝要なり。譬へば松島なんどの風景にても、ア、よき景かなと譽る時は一口にて天景象が云ひ盡されて何の詮なし。其の景を譽んと思はゞ、其の景の模様どもを餘所ながら數々云ひ立れば、好き景と云はずして其の景の面白さがおのづからしるゝ事なり。此の類萬事に渡る事なるべし。或人の曰く今時の人はよく／＼理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ

世の中、むかし語りにも有る事に當世受とらぬ事多し。爾ればこそ歌舞伎の役者なども、兎角其の所作が實事に似るを上手とするなれ、立役の家老職は本の家老に似せ、大名が大名に似るをとつて第一とす、昔の様なるわらべだましのじや、らけたる事はとらざるべしと。近松答て曰く、此の論道理のやうなれども、藝といふ物は、實と虚との皮膜の間をなすに有るものなり。成ほど今の實事に能くうつすを好む故、家老は眞の家老身ぶり口上をうつすといへども、さらばとて眞の大名の家老なごが立役の如く顔に紅粉おしろいをぬる事ありや、又眞の家老職は顔をかざらぬとて、立役が髭はむしや／＼と生へなり、頭部ははげなりに舞臺へ出て藝をせば、慰みに成るべきや、皮膜の間といふは、爰なり、虚にして、虚にあらす、實にして、實にあらす、此の間に慰みが有た物なり。是に付て爾る御所方の女中一人の戀男有りて互ひに情をあつく通はしけるが、女中は金殿の奥深く居りて男は奥へ參る事も叶はず、只だ御簾の隙より男を見るもたまさかなれば、餘りに戀ひ詫びて其の男の肖像を木像に刻ませ、面體なども常の人形にかはりて其の男にうぶけほども違はさず、色つやの彩色は云ふに及ばず毛穴迄も寫させ、耳鼻の穴も口の内齒の數まで寸分も違はず作り立させたり、誠に其の男を傍に置て是を作りたる故、其の男と此の木像とは神魂の有りとなきとの違ふのみなりしが、彼の女中は是を近付て見れば、さりとては生身を直に寫しては興のさめたる物にて、ほろきたなく剛氣の立つ物なり、さしもの女中の戀もさめて傍に置くもうるさしと頓て捨たりとかや。是を思へば

生身の通りを直に寫すは、たとひ楊貴妃なりとも愛想のつきたる所有るべし。夫故に晝空事とて、其の姿を畫かくにも又木に刻むにも、正實の形を似する内に又異なる所あるが結句人の愛する種とはなるなり。文作趣向藝業身ぶりも此のごとく、本の事に似る内に又大異おほまなる所有るが、結局藝に成て人の心の慰みとなるなり云々。

と云へる呼吸も、亦此の研究期—實修時代に於て工夫し、會得し、修練して、妙境に悟入したのであつた。

近松が人生詩人としての卒業論文は、『曾根崎心中』である。『曾根崎心中』は實に近松世話淨瑠璃心中物の初めにして、創立以來十九年、「三五の十八ではぬそろばん」の下に、覺束なき興行を續けて來た竹本座も、此の興行にて始めて大入りらしき大入りを取り、累年の負債もやうやく皆済が出来たと云はるゝほどの當り外題にして、四月七日一説に、四月二十三の出來事なるを、近松の才筆に上ぼせて潤色し、五月七日より前、日本王代記にて日云へりの出語り出遣ひ、太夫竹本筑後椽、ツレ竹本頼母、三絃竹澤權右衛門、人形辰松八郎兵衛にて勤めて居る。

『曾根崎心中』の大入り以來、近松は荐りに心中物若くは心中物類似の世話淨瑠璃に筆を染めた。豊竹座の作者も亦之れに倣ふて、此等心中物世話淨瑠璃を新作上場するに至り、寶永元年より正徳元年迄僅々八箇年間に、竹豊兩座に上場したる此の種世話淨瑠璃の數は、二十一種の多きに上ぼつたのでありし。即ち左の如し。

心中物淨瑠璃の流行

人生詩人としての卒業論文『曾根崎心中』

竹 本 座 豊 竹 座

寶永元年

源五兵衛 薩摩 歌門左衛門作

德兵衛 心中重井筒門左衛門作

八百屋お七歌祭文(海音作)

同 二年

おなつ 清十郎 笠物 狂(未詳)

同 三年

心中二枚繪雙紙門左衛門作

茂兵衛 大經師昔曆門左衛門作

お彌 高市 梅田 心中(未詳)

同 四年

堀川波の鼓門左衛門作

興兵衛 卯月の紅葉門左衛門作

後日卯月の色上門左衛門作

同 五年

おむめ 久米之助 心中萬年草門左衛門作

椀 久末の松山(未詳)

同 六年

おなつ 清十郎 五十年忌歌念佛門左衛門作

上卷 助六 千日寺心中(未詳)

第八章 近松門左衛門

おまん 蘆 分

舟(未詳)

笠屋三勝二十五回忌(未詳)

寶永七年

おきさ 掛 鯛 心 中(門左衛門作)

次郎兵衛 心中 及は氷の朔日(門左衛門作)

夕霧 阿波の鳴 渡門(左衛門作)

心中戀の中(道未詳)

正徳元年

梅川 冥 途 飛 脚(門左衛門作)

油屋 袂 の 白 絞(海音作)

『曾根心中』の道行「此の世の名残り、夜もなごり、死にゆく身をたどれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えてゆく、夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふれば曉の七ツの時が六ツなりて、残る一つが今生の鐘の響の聞をさめ、寂滅爲樂と響くなり」云々の名文は、時の文學眼あるものを驚倒せしめたるものにして、徂徠や南畝に至るまでが、案を拍つて激賞し、「近松の妙こゝにあり」とまで嘆賞して居るのである。尤も此の道行の所作なるか否かに付きては異説あり、水谷不倒氏は近松傑作全集の解題に於て、『曾根崎心中』以前に出たる『辛崎心中』(作者不明に既に其の文ありされば之を近松の創意なりとするは誤りにして、何さなく拍子拔の感なきを得ずと斷じ居れり。

左に此の淨瑠璃の一部を抄録すべし。修業期練習時代の卒業論文たる『出世景清』の筆致、構想と對照し來れば、文體の變化練熟せる筆致の歴々たるを見るべきである。

曾根崎心中 附タリ觀音巡り

作者 近松門左衛門
おやま 辰松八郎兵衛

眞實にや安樂世界より、今此の娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、あなぐもたかし、フシ高き家に登

りて民の賑はひを契りきてし難波津や、三ツづきをさ三ツのさき、札所くゝの靈地靈佛、オクリ
巡れば罪もなつのくもあつくるしめて駕籠をはやおりはのこいあ三六の十八九なるかほ花、
フシオクリ今咲出しの初花に、フシ笠は著すとも召さずとも、照日の神も男神、よけて日まげはよもあら
じ、頼み有りける巡禮道、西國三十三所にも、オクリ向ふさ聞くぞ有りがたき、照日一番に天滿の大ゆふ
寺、此の御寺の名もふりし、フシ昔の人もきのさなるの、大臣の君が、鹽がまの浦を都にほり江こぐ鹽
汲船の、フシあさ絶す、今も弘誓の櫓びやうしに、のりの玉ぼこ、歌ふいゝ、大阪巡禮胸に木札の普
陀落や、大江の岸に打波に、フシしらむ夜明の鳥も二番に長福寺、地空にまばゆき久かたの、光りに
映る我が影の、あれくゝ走れば走る、これくゝ又止れば止る、ふりの善惡、フシ見るごまぐ、心もさぞや
神佛、照す鏡の神明宮、拜み巡りて法住寺、人の願ひも我がごまぐ、誰をか戀のいのりぞと、仇の悋氣や
フシ法海寺、地東は如何に大教寺、草の若芽も春過て、おくれ咲なる菜種や、罌粟の、露に憐る夏の虫、お
のが妻戀ひやさしやすしや、あちへ飛つれ、こちへ飛つれ、あちやこち風ひたくく、羽さくゝをあ
はせの袖の、染た模様を花かさて、肩に留ればおのづから、紋に上羽のてうせん寺、扱ぜんだう寺りつ
たう寺、天滿の札所残りなく、そなたに巡る夕立の雲の、羽衣蟬の羽の、薄き手拭あつき日に、つらぬく
汗の玉つくり、稻荷の宮に迷ふさの、闇は理り御佛も、衆生のための親なれば、是ぞおぼせの廣徳寺、四
方に眺めのはてしなく、西に船路の海深く、地波の淡路にきぬすも通ふ、沖の汐風身に染鷗、なれも
無常の煙にむせぶ、色に憧れて死なふなら、しんぞ此の身はなりしだい、扱實によいけいでん寺、縁に
引かれて又いつか、こゝくに高津のへんめう院、菩提の種や上寺町の、長安寺より清安寺、登りやすなす
な下りやちよこゝ、登りつ下つ谷町筋な、歩みならはす行きならば、しよていくづなれア、恥
かしの、森で裾がはらくゝ、はつと返るをうち掻合せ、弛みし帯を引縮く、締てまつはれ藤の櫛
十七ばんに住願寺、是からいくつ生玉の、本誓寺ぞ、伏拜む、數珠につながん菩提寺や、早天王寺に六

じ堂、オクリ七千「余卷の經堂に、經讀む鳥の時ぞきて、よその待宵きのくぐも思はでつらき鐘の聲、こん金堂に講堂や、萬燈院にさもす火は、影も輝く蠟燭の、しん清水に」暫さて、やがてやすらふ蓬坂の關の清水を汲あげつ、手にむすびあげ口すくぎ、無明の酒の酔きます、木々の下風ひやく、右の袖口左の袖へ、通る煙管にくゆる火も、道の慰みあつからず、オクリ吹て亂る薄煙、フシ空に消ては是も又、行衛も知らぬ相思ひ草、フシ人忍草道草に、日も傾きの急がんと、又立出る雲の足、時雨の松の下寺、町に、信心深きしんかう寺、悟らぬ身さへ大覺寺扱こんだい寺大蓮寺、巡りく、て是ぞはや、三十番の三寺の、大慈大悲の頼にて、かくる佛の御手の糸白髮寺さよ黒髮は、戀に亂る妄執の、夢を覺さんばぐらうの、爰も稻荷の神社、佛神すいはのしるしさて、靈ならべし新御靈に、拜み納るさしもぐさ、草のはすはなよに交り、三十三に御身をかへ、色で道引情で教へ、戀を菩提のはしこなし、渡して救ふ觀世音、ちかいはたへに、三有りがたし、立まよふ、フシ浮名をよそに漏さじと、包む心のうち本町、こがる胸のひらのやに、春を重しひな男、一ツ成口もくのさけ、柳のかみもさくくさ、フシ呼れてすいのなまり川、地今は手代と埋木の生醬油のそでしたくるき、戀の奴に荷はせて、得意を巡り生玉の、オクリ社に「こそは著にけれ。出茶屋の床より、地女の聲。ありや徳様ではないかいの、コレ徳様く」と手を拍けば、徳兵衛、合點して打うなづき、註コレ長藏、おれは跡から往の程に、其方は寺町のくほん寺様長久寺様上町から屋敷方廻つてさうして内へ往にや、徳兵衛も早戻ると云や、それ忘れず共安土町の紺屋へ寄て錢さりやく、地道頓堀へ寄りやんなやと、影見ゆる迄見送りく、簾をあけて、コレお初じやないか、是はごふじやと編笠を、ぬがんとすれば、ア、先やはり著て居さんせ、註今日は田舎の客で、三十三番の觀音様を巡りまし、爰で晚迄日暮に、酒にするじやとせいで云て、物まれ聞きにそれそこへ戻つて見ればむつかしい、駕籠も皆知んした衆、やつぱり笠を著て居さんせ、夫はそふじやが此頃は梨もつぶても打たんせぬ、氣遣なれど内方の、首尾を知られば便宜もならず、丹波屋迄は

お百度程尋ねれど、あそこへも音信もないと有る、譯ハア誰やらがチ、夫よ、座頭の太市が友立衆に聞けば、在所へいかんしたと云へどもつんざ誠にならず、地ほんに又あんまりな、私ほごふなるふとも聞たうもないかいの、こな様それでも濟もぞいの、私は病になるわいの、虚なら是此のつかへを見さんせと、手を取て懐の、うち恨みたるくどき泣ほんの夫婦にかはらじな、地男もないてチ、道理く、(中略)そなたと云ふ人持て、なんの心がうつるふぞ、取りあへもせぬ其の内に、在所の母は繼母なるが、我に祕して親方と談合極め、二貫目の銀を握つて歸られしを、此のうつそりが夢にも知らず、後の月からもやくり出し、押して祝言させふと有る、そこでをれもむつとして、詞やあら聞こへぬ、旦那殿、私合點致さぬを、老母をだましたくき付、あんまりななされ様お内儀様も聞へませぬ、今迄様に様を付あがまへた娘御に、銀をつけて申しあげ、一生女房の氣嫌取り、此の徳兵衛が立もの、かいやと云ふからは、死だ親父が生かへり申すと有ても、いでや、御座ると言葉を過す返答に、親方も立腹せられ、おれが夫も知て居る、蜷川の天満屋の初めとやらとくさり合女房がめいを嫌ふよな、地よ此の上はもふ娘はやらぬ、遣らぬから銀を立、四月七日までにきつと立、あきなひの勘定せよ、まくり出して大阪の地は踏ませぬと怒らるゝ、それがしも男の我、チ畏まつたと在所へ走る、又此の母と云ふ人が、此の世が彼世へかへつても握つた銀を放さば、こそ京の五條の醬油問屋、常々銀の取り遣りすれば、是を頼みに上つて見ても、折しも悪ふ銀もなし、引返して在所へ行き、一在所の詫言にて、母より銀を請取たり、追つけ返し勘定仕まひ、さらりと増が明くは明く、去れども大阪に置れまい時には何様して逢れふぞ、譬へば骨を碎かれて、身はしやれ貝の蜷川、底の水屑と爲らば成れ、我身に離れ何様せふと咽び入てぞ泣き居たる。フお初も共にせく涙、地力をつけて押し止め、扱々いかひ御苦勞、みな私ゆへと存すれば、嬉し悲しう忝けなし、去ながら心確かに思召せ、大阪をせかれさんしても、盗みかやきの身ではなし、何様してなりとも置く分は、私が心にある事なり、逢ふに逢はれぬ其の時

為祿海公伴付り 親吉あまみの
他者 近松門左衛門
 辰松節言書



松 辰 中 心 崎 根 曾

は、此の世ばかりの約束で、さうした例のないではなし、死るなたかの死出の山、三津の川はせく人も、愈るゝ人も有るまいと、氣強う勇む詞の中、涙に咽て言させり。(中略) 地 徳兵衛くはつごむれせいで大聲あげ、扱たくんだり、一ばい喰ふたか無念やな、ハテなんこそせふ此の銀をのめ、と只己にさられふか、斯たくんだ事なれば、でんごへ出てもおれが負け、腕さきで取て見せふ、コレヤイ、調平野屋徳兵衛じや、男じやが合點か、おのれ斯様に友達をかたつてたなす男じやない、サアこいさ、地つかみつく、ヤアしやらな丁稚あがりめ、投てくれんさ胸ぐら取り、打合捻合たきあふおはつははだして飛んで下り、あれ皆様頼みます、私が知つたお人じやが、駕籠の衆は居やらぬか、あれ徳様じやと身をもがく、フせんかたなくも哀なり。地客は固より田舎者、負傷が有てはならぬぞと、無體に駕籠を押し入れる、いや先待て下さんせ、なふ悲しやと泣聲ばかり、急げ、と一さんに、フ駕籠を早めて歸りけり。地徳兵衛は只一人、九平次は五人づれ、あたりの茶屋よりばうすくめ蓮池迄追出し、誰が踏やら殿くやら フ更に別ちばなかりけり。地髪も解かれ帯もさけ、彼處此處へ伏しまるび、やれ九平次め、畜生め、なのれ生ておかふかと、よるばい尋れまばれども、逃て行衛も見へばこそ其の儘そこにござとすばり、大聲上て涙を流し、調いづれものてまへも面目なし、耻かし、全く此の徳兵衛が云ひかけしたるで更になし、日頃兄弟同然に、語りし奴が事と云ひ、一生の恩と歎きし故明る七日此の銀がなければ我等も死なればならぬ、命替りの銀なれども、互の事とやくにたち、地手形を我等が手で書せ、印判すへて其の判を、前方に落せしと町内へ披露して、かへつて今の逆れだれ、口惜や無念やな、此の如く踏殿かれ、男も立す身も立す、エ、最前に摺付、喰付て成さも死なんものをと、大地を殿き齒がみをなし、拳を握り歎きしは、道理とも笑止とも、フ思ひやられて哀なり。地ハアか、ふいふても無益の事、此の徳兵衛が正直の心の底のすゞしさは、三日をすごさず大阪中へ申し分はして見せふと、後に知らるゝ言葉のはし、いづれも御苦勞かけました、御免あれと一禮のべ、破れ

いあみ笠拾いきて、顔もかたふく日かげさへくもる涙にかきくれ、すく、返る有様は、目も當らぬ。戀風の身にしいみ川流れては、其のうつせがいついなき色の闇路を照せさて、夜毎に灯す燈火は四季の螢よ、雨夜の星か、夏も花見る梅田橋旅のひなびさ地の思ひ人心、小オツリ心の分、道知るも迷へば知らぬも通ひ、フシ新色里さ賑はしい。無惨やな天満屋のお初は家へ歸りても、今日の事のみ氣にかゝり、酒も吞れず氣も濟す、しく、泣いて居る所へ、隣の米や傍輩のちよつと来てはなふ初様、何も聞んせぬか、徳様は何やら譚の悪い事有つて、地たんさ擲れさんしたと聞たが眞かと云ふも有り、イヤ私が客様の話じやが、踏れて死んしたげなと云ふもあり、偽りを云ふて縛られての、似判してくらられての、碌な事は一つも言はず、フシふにつらさの見舞なり。地あくいやもふ云ふてくだんすな、聞けば聞く程胸痛み、私から先へ死そふな、いつそ死んでのけたいと、泣くより外の事ぞなき。フシ涙片手に、地表を見れば夜の編笠徳兵衛、思ひ詫たる忍び姿、ちらと見るより飛立ばかり、走り出んと思へども、おくには亭主夫婦、上り口に料理人庭では下女がやくだいの、フシ目が繁ければ左もならず、調ア、いかう氣が盡きた、地門見てこふとそつと出で、なふ是は何様ぞいの、こな様の評判いるいろに聞たゆへ、其の氣遣さく、氣遣の様になつて居たはいのふと、笠の内に顔さし入れ、聲を立すの隠し泣、哀切なき涙なり。地男も涙にくれながら、地聞きやる通りの巧なれば、云ふ程己が非に落ち、地其の内四方八方の首尾はぐわらりと違ふてくる、最早今宵は過されず、さんさ覺悟を極めたと、囁けば内よりも、地世間に悪ひ取沙汰ある、初様内へ這入んせと、地聲々に呼入る、オウ、あれじや何も話されぬ、私かする様にならんせと、襦袢の裾に隠し入れ、這々、オツリ、中戸の香脱より、フシ忍ばせて、地縁の下屋にそつと入れ、上り口に腰打かけ、煙草引寄せ吸つけて、シラそ知らぬ顔して居たりけり。地斯る所へ九平次は悪口仲間二三人、さとうまじくらどつと來り、地ヤア米様達寂しさふに御座る、何と客に成つて遣ふかい、なんと亭主

久しいのさ、地のさばり揚れば夫煙草盆お盃さありべかりに立騒ぐ、調イヤ酒は置や呑んで來た、扱嘯す事がある、是の初が一客平野屋の徳兵衛めが、身を落した印判拾い、二貫目の似手形で騙ふとしたれども、理窟に詰つた揚句には、しなすかひなめに遇ふて、一分は廢つた、向後爰らへ來ることも油断しやるな、皆に斯ふ語るのも徳兵衛めがうせ、まつかい様に云ふさても、地必す實にしやるなや、寄せる事もいらぬもの、ごぶでのべがさびたものと、フ誠しやかに云ひ散す、地縁の下には齒を喰しぱり、身を慄はして腹を立るを、初はこれを知らせじさ、足の先にて押鎖め、押へ鎖めし神妙さ、亭主は久しい客の事、善惡の返答なく、さらば何んぞお吸物さ、フ紛らかしてぞ立にける。地初は涙にくれながら、然のみ利根に云わぬもの、調徳様の御事幾年馴染み、心根を明し明せし申なるが、夫はくいとしぼげに、みぢん譯は惡ふなし、地頼母しだてか身のひしで、欺されさんしたものでなれども、證據なければ理もたゝす、此の上は徳様も、死ればならぬしなるが、死る覺悟が聞きたいさ、獨言になぞらへて、足で問へば、打領き、足首取つて喉笛撫で、フ自害するさぞ知らせける。チ、その答く、調いつまで生ても同じ事、地死んで耻を雪いではさ、云へば九平次ぎよつとして、お初は何を云はるゝぞ、なんの徳兵衛が死ぬるものぞ、若し又死んだら其の跡は、己が念比して遣ふ、和女も己に惚てじやげなま云へば、こりや忝けなかるはいの、私さ念比さあんすさ、此方も殺すが合點か、地徳様に離れて片時も生ていふか、調そこな九平次のごふすりめ、阿呆口を叩いて、人が聞いても不審が立つ、地どうで徳様一所に死ぬる、私も一所に死ぬるぞやいのさ、足にて突けば縁の下には涙を流し、足を取つて押戴き、膝に抱つき、慄れ泣き、女も色に包みかれ、互ひに物は言はれども、肝と肝さにこたへつゝ、フ瀧り泣にぞ泣き居たる、地人知らぬこそ哀なれ、九平次も氣味悪く、相場が惡いおじやいの、爰な米來はいなことで、己らが様に銀遣ふ大盡は嫌ひさうなあさやへ、いつて一杯して、ぐはらぐ、一步を撒散らし、そしていんだら、寝よからふ、ア、い、懐中が重たうて、歩きにくひ

悪口だらけ云ひ散し、フシ喚いてこそは歸りけれ。亭主夫婦、今宵ははや火さしまへ、泊りの衆は寢せませひ、初も二階へ上つて寢や、早う寢やと云ひければ、誰そんなら旦那様内儀様もふお目に懸りますまい、去らばでござんす、誰内衆も去らばと他ながら、暇乞して聞に入る、これ一生の別れさは、後にこそ知れ氣もつかぬ、悪の心不憫さま。誰それ蓋の下に念を入れ、着を鼠に引するなと見世をあげつ門さしつ寝るより早く高軒、オウ如何なる夢も短夜の、フシツになるのは程もなし、誰初は白無垢死出立、變路の闇黒小袖、上に打かけ差足し、二階の口より指覗けば、男は下家に顔出し、招き領き指さして、心に物を云はすれば、梯子の下に下女寝たり、釣行燈の火は明し、如何はせん、と案ぜしが、樓欄箒に扇をつけ、箱梯子の二ツめより、煽ぎ消せども消へかぬ、身も伸しはた消せば、梯子よりどうと落ち、行燈消へて暗りに、下女はうんと寢返りし、二人は扇を懐はして、フ尋ね廻る危さま、誰亭主奥にて目を寢し、誰今のはなんじや女子ども、有明の火も消へた、誰起て灯せと起されて、下女は眠そに目をすり、丸裸にて起出で、火打箱が見へぬと探り、歩くと觸じと、彼方此方へ這まつはるゝ玉かづら、苦しき闇の現なや、漸二人手を取り、合ひ門口まで、その出で、鏢は外せしが、車戸の音いぶかしく、明かれし折から、下女は火打をはたし、打つ音に紛らかし、丁と打てば、そのつと明けかち、打てば、そのつと明け合せ、合せて身を締め、袖と袖をまきの戸や、虎の尾を踏む心地して、二人ついでつと出で、顔を見合せ、誰嬉しと死に行く身を喜びし、哀さつらさ、淺間し、跡に火打の石の火の命の末こそ、三短かけれ。

曾根崎心中の道行

徳兵衛おはつ

此の世の名残夜も名残死に行く身を譬ふれば、あたしが原の道の霜、一足づくりに消へて行く夢の夢こそ哀なれ、あれ數ふれば曉の七ツの時が六ツ鳴りて、残る一ツが今生の鐘の響の聞をさめ、寂滅爲樂と響くなり、フ鐘ばかりか、草も木も空も名残と見上れば、くも心なき水の音、北斗は、牙て影

映る星の妹脊の銀河梅田の橋を鳥鶯の橋と契りていつ迄も我れと和女は女夫星、地必すさうと
縫り寄り二人が中に降る、フ涙川の水嵩も増るべし。フ向ふの二階は何屋ともおぼつか情最中
にて、まだ庭の火影聲高く、オッ今年の心中善惡の言の葉ぐさや茂るらん。地聞くに心も吳羽鳥
あやなや昨日今日迄も他に云しが明日よりは、我も噂の數に入り世に誑はれん誑はゞ誑へ、フ誑
ふを聞けば、オッどうで女房にや持やさんすまいいらぬものじやと思へども、地實に思へども歎
げども身も思ふ儘ならずいつな今日さて今日が日まで心の伸し夜半もなく思はぬ色に苦み
に、オッどうした事の縁じややら忘るゝ隙はないわいなそれに振捨て行かふとは遣やしませぬぞ
手にかけて殺して置て行かんせな放ちは遣じと泣きければ歌も多きにあの歌を、時こそあれ今宵
しも誑ふは誰そや聞くは我れ過にし人も我れくも、一ツ思ひさ縫りつき、聲も惜ます泣き居たり、
いつは左もあれ此夜半は、せめて暫しは永からで、心も夏の夜の慣ひ、命をおはゆる鳥の聲明なばう
しや天神の森で死んぞ手を引て、オッ梅田堤の小夜鳥明日は我が身を餌食ぞや實に今年は此方
様も二十五歳の厄の年、私も十九の厄年さて思ひ合ふたる厄、崇り縁の深さのしるかや、神や佛に
懸けおきし現世の願を今爰で、未來へ廻向し後の世も猶しも一ツ蓮ぞやと、つまぐる珠數の百八に、
涙の玉の數添ひて、盡せぬ哀つきる道心も空もかけくらぐ風しんくたる曾根崎の森にぞ迎り着
にける。彼處にか此處にか、き、拂へど草に散る露の、我より先に先消へて、定めなき世は稻妻が、
オッそれが、あらぬかア、怖は、今のは何と云ふ物やらん、チ、あれこそは人魂よ、今宵死するは我れの
みそこそ思ひしに、先立つ人も有りしよな、地誰にもせよ死出の山の伴ひぞや、南無阿彌陀佛く
の聲の中、あはれ悲しや又こそ魂の世を去しは、南無阿彌陀佛と云ひければ、女はおろかに涙ぐみ、今
宵は人の死ぬる夜かや、淺間しさと涙ぐむ男涙をばら／＼と流し、一ツ二ツ連れ飛ぶ人魂を他の
上と思ふかや、正しう御身と我が魂よ、地になふ二人の魂とや、ばや我々は死したる身か、チ、常

ならば結び留め、繋ぎ留んと歎かまじ、今は最後を急ぐ身の、魂の在かを一ツに住ん、道を迷ふな違ふ
なき、抱き寄せ肌を寄せ、かつはさ伏して泣き居たる、フシ二人の心ぞ可憐なる、涙の糸の結びまつ、樓
栢の一本の相生を、連理の契りに擬へ、露の浮身の置どころ、サア爰に極めん、上著の帯を徳兵衛も、
初も涙の染小袖脱でかけたる樓栢の葉の、オリ其の玉は、き今ぞ實に、フシ浮世の塵を、地拂ふ
らん、初が袖より剃刀出し、若も道にて追手のかくり、割れくになる、フシも、浮名は捨じ、心がけ、剃
刀用意致せしが、望みの通り一所で死る、此の嬉しさ云ひければ、同チ、神妙頼もしく、左程に心
落つくからは、最期も案する事はなし、去りながら臨終の時の苦患にて、死姿見苦しと云はれん、口
惜し、地此の兩本の連理の木に、身體をきつと結びつけ、潔よう死ぬまいか、世に類なき死様の、手本
さならん如何にも、淺間しや淺黄染、かくれさてやは抱帶、兩方へ引はりて、剃刀取つてさらく、
帯はさけても主さま、私が問はよも裂じと、どうぞ座をくみ二重三重、揺がぬ様に、確かと締め、同
能ふ締つたか、チ、締めましたと、地女は夫の姿を見、男は女の體を見て、こは情なき身の果てぞや
と、わつと泣き入るばかりなり、ア、歎かじと徳兵衛、顔振り上げて手を合せ、我れ幼少にて實の父母
に離れ、伯父と云ひ親方の苦勞となりて人となり、恩も送らず此の儘に、亡き跡までも兎や角と、御難
儀かけん、フシ勿體なや罪を免して下されかし、冥土にまします父母には、追つけ御目に懸るべし、迎
へ給へと泣きければ、お初も同じく手を合せ、こな様は美山しや、冥土の親御に逢はん、とある、我らが、
父様母様は、息災で此の世の人なれば、いつ逢ふ事の有るべきぞ、使りは此の春聞いたれど、逢ふたは、
去年の初秋の初が、心中取沙汰の明日は在所へ聞へなば、如何ばかりかは、歎きをかけん、親達へも兄
弟へも、是から此の世の暇乞、切て心が通じなば、夢にも見へてくれよかし、懐しの母様や、名残惜しの、
父様や、しやくりあげく、聲も惜まず泣きければ、夫もわつと叫びり、流涕、憧るゝ心意、氣理りせ
めて哀なれ。地いつ迄云ふて詮もなし、早やく殺してく、最期を急げば心得たりと、脇差する

りと抜放し、サア只今ぞ南無阿彌陀く、と云へども流石此の年月、いさし可愛と締て寝し、肌にも及が當てられふかき、眼も眩み手も慄ひ、弱る心を引直し、取直しても猶慄ひ、突くはすれど切先は、彼方へはづれ此方へそれ、二三度ひらめく劔の刃、あつと斗に喉笛に、ぐつとほるが南無阿彌陀く、南無阿彌陀佛と繰まほし、刮とほす腕先も、弱るを見れば兩手を伸べ、斷末間の四苦八苦、オッ、哀さ云ふも餘りあり、我までも遅れふか、息は一度に引取らん、と剃刀取つて喉に突立て、柄もおれも刃も砕け、廻りくりくり目も瞑き、苦む息も曉の、知死期につれて絶果たり。誰が告るは曾根崎の、森の下風音に聞へ取傳へ、貴賤群衆の廻向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手本となりけり。

圓熟大成せる晩年時代の二十年

此の間に成つた幾多の傑作

實永以後近松の伎倆はいよゝゝ銑練し、彼の詩才は益々成熟し、彼の文章は渾然として圓熟の極に達し、縦横周匝の構想と豊艶壯美の筆致とは、凝つて玉成せる幾多の傑作となつて現はれたのでありし。『薩摩歌』『重井筒』『淀鯉出世瀧徳』『冥途の飛脚』『博多小女郎浪枕』『天網島』『女殺油地獄』等は、皆な此の間に成つた彼が世話浄瑠璃の傑作である。時代物浄瑠璃の三傑作と稱せらるゝ雪女五枚羽子板』『國性爺合戦』『曾我會稽山』等も亦此の間に成つたのである。今左に近松世話浄瑠璃の最終作たる『心中宵庚申』の一部を抄出し、銑練の極に達した彼が晩年の筆致を窺ふこととする。

『心中宵庚申』に書いたお千代半兵衛の心中は、享保七年四月五日宵庚申の夜、即ち六日の朝の出来事にして、豊竹座は即日『心中二つ腹帯』と外題を掲げ、中間一日を置いて八日より興行して居る。『二つ腹帯』は海音一代の傑作にして、近松作、心中天網島と併せ稱して、走筆の二名作と云はれて居る。されど、心中天網島を一夜作りの名作と云ひ傳へて來たのは、其網島の大長寺に男女の情死あり、何卒速に大阪へ歸り、淨瑠璃に遊びて在し時俄に大阪より芝居者來り、昨夜網島の大長寺に男女の情死あり、何卒速に大阪へ歸り、淨瑠璃に作りてたまはらば、一日の稽古にし

世話淨瑠璃の最終作
たる『心中宵庚申』

て、明後日より興行せんぞ、只管に頼み入りければ、早駕に乗りて大阪へ歸り、駕より下りて其の儘に筆をとり「云々」あるの由來するのであるが、此の所説は何等かの誤傳か、但は好事家の拵へ事なるべし。小はる治兵衛の心中は、享保五年十月十四日、十夜同向の夜の出來事にして、竹本座が『心中宵庚申』を上近松作『天網島』の上場は、同年十二月六日なれば、走筆なりとは稱し難し。竹本座が『心中宵庚申』を上場したのは二十二日である。近松が晩年時代の傑作としては、『心中天網島』享保五年十二月上がある。『女殺油の地獄』享保六年七月上場がある。『心中宵庚申』は構想筆致ともに必ずしも傑作とは稱し難し。唯爰には主として、彼が世話淨瑠璃の最終作たるの意味に於て、之れを探ることよしたのである。

心中宵庚申 中之巻

五月雨ほど戀慕はれて、今は秋田のおさし水軒の玉水さくくごされ、繁くごされば名の立つに、ナラス玉水近き山城の村は上田に家富て庄屋に竝ぶ茅屋根も、内温かに下女竝んでつむぐ綿車、地手廻りもよくいくはへか、庭に五つのたなつ物、積む蓬萊の島田氏、平右衛門と云ふ大百姓妻は去年の秋霧さきへても残る娘二人、惣領輕に入婿を、鳥飼より呼迎へ、妹千代も大阪に、れつきとしたる婿さつて、身の入まひは上田の、田島の世話をやきやめば、萬事限りの俄病ひ姉のお輕は側離れず、臺所にば女子共、なんと今朝から仕事のはかもいたではないか、些休まふ、お竹お鍋と呼つれて、フ思ひ思ひに立出る、地親のすやく假寐の隙を窺ひ女房は、心忙く奥より立出で、地是々臺所に人が獨もない、連合平六殿は淀川筋、新田開の御訴訟に、大事の病人振捨ての京登り、男共は皆野へ行く、エ惜い女子共我見る前ではちよひかはして、一寸立ば早何所へ、大切な主の煩ひ、藥一ツ温めふ共せぬ、地地下々には何が成圍爐裏の下焚付ぬか、次郎よくと呼廻す門の口、駕籠昇擲て申々、地大阪の新軌、八百屋伊右衛門様からと、地駕籠の戸明れば打濁れ、フ目元しぼるゝ縮顏の、二重廻りの抱帯、フ涙の色に染かへて、地なくなく出れば駕籠の者、儘に御届け申したと、フ言ひ捨歸るも

足早なる。親の家さへ女氣の敷居も高く越かれて、佇立む有様姉は見つけ、「ヤアお千代おじやつたか、定めて御病氣の見廻ならぬ、よふこそ、何故駕籠の衆留やらぬ、他外でもあるやうに客人がましい、酒一ツ進んで去しやいの、それ呼戻しやよ、言へ共妹は差俯むき、歎けば共に歎かれて、「調子、道理、疾知らせんと思ひしに、此の病では死なぬ氣のさりにくい舅姑持たお千代婿半兵衛も忙しい時分、聞たり共自由に来る事は成まい、案じさするも不便沙汰するなこの病人の氣にもさからはれず、高麗橋の伯母様常磐町へも知らせぬ、氣遣しやんな京の御典薬に換てから、めつきり薬も廻り、今朝も粥を中がさに三よそひ、病は請取て癒すこのお醫者様の請合は、本復もおなじ事、和女の顔御覽なされたら、いよゝゝ父様の病ひはすつべり癒らふ、嬉しいゝ、お目にかゝりやよ有ければ、「調子、父様はお煩ひか、知らなんだ、何時からの事でござんする、や何じやお煩ひ知らぬか、そんなら和女何しに來た、何處しうて泣ぞ、「耻かしや又去られても顔押隠しむせび入る、姉も驚く顔に血を上げ、「なふお千代、五度三度の駕入嫁入も、世に有る慣こは、云ひながら、悪い事は手本にならぬ、耻かしいゝ、口で云ふ斗りが、耻を知つた言れ、ふか、和女も、かかる三度の嫁入、尤始めの男道修町伏見屋の太兵衛殿、心ぶしやうに、身體を持、くづした、すみも、な、い様に、成果あかぬ、別れ、其の次は、死、別れ、互に、難は、な、けれ、共、「人は、和女の辛抱がない、ゆへに、去ら、れたゝ、「批難付、此の度の嫁入も、追出さるゝに、間はあるまい、忘れても、島田、平右衛門が、願の、風下、に、居るな、「娘持た人々、「寄合茶、呑、囃にも、和女の、囃、ま一度戻つては、親兄弟、人中へ、顔が出されぬ、こは、知りぬいて、火に入骨を碎かるゝこそ、歸るまい、「チ、必ず去られて戻るな、念に念をつがふ、た、今度の嫁入、よふ戻りやつた、父様お聞なされたら、お悦びなされうぞ、お顔見せる折が有ふ、必ず聲高に物しやんな、「調子、半兵衛が、暇の狀取て戻りやつたか、いや、跡の月半兵衛殿、父御の十七年の、甲ひの爲、生れ故郷、遠州の濱松へ、戻り次第、道具に、濡、暇の狀は、跡から、先去れ、譯も、言はず、「お腹に四

月唯もない身を、姑御が手を取て駕籠に引すりのせ、むごいつらいと斗りにて、歎くを見ればいたいた敷、子のある物を夫の留主、暇くれる姑心に一物有はいの、伯母婿ながら和女の親分、高麗橋二丁目川崎屋源兵衛殿、指置て直に爰へ突付る仕方も憎し、い、此方の人が京からの歸りを待て詰開かせ、容易で暇はさらぬ、是は言へ世上の夫婦申去るさいふ事誰こしらへ、憂目なさせる可愛やと、歎けばわつと泣出す聲高い、障子の那方、父様の寝入ばな泣なくと、言ひつゝも、つとふ涙の血筋さて、しんは泣寄、フ、憐さよ。平右殿御氣色、今日は如何とつと入る、おなじ村の金藏、お千代はちやつと姉の影、見付られじと身を隠せば、ア、隠れまい、只今堤の茶屋で、大阪へ戻り駕籠の咄で聞た、お千代殿、目出度い、去られて戻らしやつたげなき、口も氣儘の、さほうなし、お輕ははつと餘所よりも、親の聞く耳、憚りて、金藏様嗜ましまんせ、聲はなし、聲低に言ふても、濟こ、千代は去られは致しませぬ、親の病氣を見廻のもどり、奥には父様すやくと寝てござる、目を醒して下さんすな、ひくう、おなじくば去んで貰ひたいと、氣の毒がるほど猶聲高、親仁寢て、か面白、なんぼ隠しても、慥な事聞てぬます、お千代殿、幾度でも去られさつしやれ、彼是の婿達、が踏擴げた田地でも、百姓の女房には、大事ない、おれが持て一夜、さも淋しいめはさせまい、去れて、戻つた悲しいと、氣をくさらし、必ず女房ぶり損れて、貰ふまい、去春貰ひかけた時、おれが方へござれば、よいに、惚か、つた一念、他に足は留らぬ、答居まい、戻る、と云ふも、此の鼻に、縁が、深い、からじや、親仁殿に云ひ込で、今日からでも我ら請込む、姉御大事にかけて貰ひましましよと、喚けば二人は死入斗り、冷す心の奥に手を打、かるよ、あ、い、南無三親仁、おきられた、金藏が見廻ふた、と云ふて下され、又明日御見廻申そふと、歸れば、かるは、腹も立、是々去す、と千代をお貰ひなされぬか、い、云ふても、大事の縁組、日を見て申し出、そう、フ、へらす口して立歸る。

(中略)折こそあれ、地門に物もう頼みませう、何方と答へ入を見れば、千代が夫の半兵衛、扱こそ縁を

身の上、その清盛が心變つて追出す、憎や清盛去年婿入せし折から、不調法な娘を進上致した、氣に入らぬ事あらば、打殿き縛り括ても直させ、未々までも見捨す添て下されかし、此の度共に三度の嫁入在所は、一ツ所ごころにて、又歸つては、平右衛門二度人中へ顔が出されぬ、娘は氣に入らず共我を不便さ面倒見て、必ず去て給はるな、チ、去まい、御臨終の折からは、前奥は平六殿、後奥は此の牛兵衛、眞實の子を持たさ思召せ、今こそ町人八百屋の牛兵衛、元は遠州濱松にて、山脇三左衛門が、伴武士名利商賣名利千代は、去ぬ氣遣するな、ア、忝ないさ手を束ね、地頭代官の、其の外に、一生下ぬ頭を下し互の契約、物忘れする老の身にも、其の時の嬉しさは、骨身に染て忘れぬ物、若い形して忘れしか、忘れぬ證據、其の身は實父の甲ひにかこつけ、遠州へ出かはし、其の跡で姑に追出させ、養子の親に我がつみを塗付る不孝者、義理も法も知た奴が、彼が何の武士の果體節の削り屑人でなしめに縁組で、あたふ娘を捨たなるくに、吟味も爲なんだか、死んだ母が彼世から、恨み召れふ口惜い、慎み深き堅親仁、惡口交の口説泣、二人の娘も正だいな涙、冤かく男に縁のない、生れじやうか、さ斗りにて、聲も惜ます泣居たる。扱は女房去られて、爰へ戻つたか、始めて驚く牛兵衛、胸に磐石据たる如く、呆れ返つて涙も出ず、暫時詞もなかりしが、詞エ、情ない女房、假令一言一宿のつき合にも、人の心は知るゝ物、況て足かけ二年の馴染子までなしたる夫の心、知ても言譯してくれぬか、親仁様の御立腹、申し開くは知つたれ共、我罪を養親に塗付る、不孝者その一言からは、ゆめ、存せぬ我ら去りは致さぬと、申し分る程、不孝の上塗、親仁様につがひし詞、違へぬ武士の性根を見せる、地見疑ひをばれ玉へ、と、すばと引ぬく脇差より、おかるは早く纏り付く、千代も驚きなふ悲しや、こな様に恨みはないと、障子引あけ走りより、留ても留らぬ男の力、父權頼み上ます、騒げど騒がぬ平右衛門、お身が居るさは知つての當事、耳にこまつての自害か、チ、よい分別、自害して死んだらば、あ

れ見よ八百屋伊右衛門夫婦嫁を憎んで去りしゆへ、子はつらうち自害せしき、養子に悪名難を付口々に取沙汰せば手がらく、●留るな娘、ぞんぶんに自害めされ、見物せんとの一言に、孝心深き肝をひしがれ、ハアそうじや過つた、眞平と額を擦付身を悔み、●然らば御暇、千代も同道いざお立やれ、エイやつぱり私を女房に持つて下さんすか、チ、假令死んでも身體も戻さぬ、ちん未來まで女丈夫、ア、忝い、父様姉さまも悦んで下さんせよ、ばや締直す抱帯、さきをたぐつてにじりより、父ははらく、涙にむせび、●半兵衛、是見や、此のしごなき、歸らん、と云ふ、嬉しさに、親の病ひを何共云はず、●悦ぶ顔を見る親の、内の心の嬉しさを、叶は、見せて、禮云、たし、取締のない愚者伊右殿夫婦の氣には成まい、頼むは其許の心一ツ、親は老病明日知らず、黄泉の底のそこ迄も、心にかゝるは千代一人、明日が日眼塞ぐとも、姉夫婦にきつと云付、二十の金の取やり、いつ何時でも事缺せぬ、随分商賈手擴くして、娘が事を、●頼み入る契約の盃せん、饒子く、姉よ酒をきらせしか、親子の中に遠慮はない、酒さ思ふ心が、酒燗鍋に水持て、こい盃の出る間も、こがるくは子故の闇引うけく、すつと乾し、●半兵衛差ふ、親子夫婦が水盃、●さいつさくれつ、涙ども盡す、飲ども酔はぬ水酒盛、不憫と思ふ親の氣は、餘りて色に出にける。(下略)

同

下之卷

夏も来て青物見世に水かわく、筵庇に除られし、日影の千代が舅の家は、新うつば油かけ町八百屋伊右衛門、浄土宗の願人、了海坊の談義に打込、開帳廻向の世話やき仲間、見世は半兵衛に打任せ、大坂中の寺狂ひ、女房は内外の世話に五ツも年ふけて、朝から晩迄氣は苛だ、●此半兵衛は藏にべらべら何して居やる、見世の賣物しなびるヤイ松め、きりく、と水打おる、コリヤさんよ、のりかい物がひあがるが、なごりへてたくんで打盤出して、ちよきく、さうて、ヤ其のちよきく、で夕飯のおればきざめ、コリヤ松よ、今日は五日宵庚申、甲子が近い、二また大根のけておけ、●ソレさんよ、茶盞の下が

燃出るも、商賣が八百屋まで八百色程言付る、口せか、忙しきは、大晦日の生れかや。伯母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ、はしりの竹の子片荷には猶活生姜、青山椒、白瓜二ツ、これらは扱も早い事でごさんすよのおれが戻るは、でも遅い事でごさんすよの、コリヤのらつば、今朝卯の刻から内を出て、何時じやと思ふ晝下り、どこで鼻毛をよまれて居た、旦那しゆの注文もの、日覆してさへ傷む時、高い物をてんさぼし、商賣のおうこくらはせ、魂に覺へさせんと取付ば、半兵衛走りいで、母者人のがこりや尤、コレ太兵衛、何處にのらくやつて居た、おくび町の笹屋から竹の子取に矢の使ひ、阿波座堀の丹波屋から、粟おこせと云ふてくる、朝倉屋からは青山椒、内にはきれる返事に困つた、太義ながら母者人の機嫌なをし、つい一走り廻つておぢや。ハテ私じやまで何の惡ひ所に這入て居ましよ、横町の山城屋から呼びこまれ、二ツ三ツ咄したばかり、其れも外の事でござらぬ、此方に誰やら逢たいとて、今朝から茲に待て居るさ、いふてくれその傳言、私や花主を廻つてこよう、此方も一寸往しやれよ、注文物を取揃へ、荷拵へして出てゆく、半兵衛は山城屋と聞よりお千代が来たである、氣さられまいと空さぼけ、ア山城屋からは何の用、ごりや一寸いてかふまはしり出るなむすこ執へ、息子どののこりやごこへイヤやましる屋から逢たいと、チ、その山城屋合點なりませぬ、アハぬつけりさした顔はいの、ちま夫婦は何にも知らぬと思ふて、氣にいらいで、去なした、嫁、遠州戻りに在所へより、能くはへて戻つたな、常盤町の従弟が所に預けて、おき、商賣に假託間が、隙がない、女夫こつてり、おれが知らいで、おこいの、嘘おれが、事、譏りや、つくる、十五年、世話にした、親の嫌ふ、女房に、随分と孝行つくし、親には不孝つくしや、地恩知らずめと盛たくいて喚き居る所へ、青布子の西念坊案内なしに、つと通り、熊野屋の權右様から先達てのお約束、宗味が石かれの、かいげん、廬相な非時致します、講中皆お揃ひ、旦那寺もさぶお出で、御夫婦ながら唯今と云ひ捨歸るそくくさ坊主、未來頼むはあぶな者、アレ親仁殿、熊野屋から呼に來た、早よ往かしやれおりや

往ぬ、地きりくさしやれまつこうぞ聲、親伊右衛門は後生一へん、ハレ女房何を置しい、又しても又しても、半兵衛さへ見れば敵の様にいふ人じや、世間する若い者呼に來まい物でもない、少々の事は聞のがしにしゃいの、ソレ其の結構過だから、親を阿呆にしおるわいの、現在おれが甥の太兵衛を差置き、あかの他人の此ののら殿に、家邸遣る此の母、邪は少ない。コレ女房、それは誰も知つた事、今更調べる事か、いの、そのよな腹のたつ時は念佛が樂じや、兎角如來の御方便、修羅燃す和女を、呼に來るも彌陀如來參る此方連も彌陀如來機嫌直しや、宥むれば、イヤこち夫婦が出ておて跡へお千代を呼入れ、留主の間でほたへさす事は成ませぬ、此方一人參つて、私は俄に目が舞た、成さ、頓死した成之間に合に遣つしやれ。コレ女房たつた今西念坊が見て去だはいの、此の伊右衛門に虚つけか、ア、勿體ない妄語界、此の中さるお寺で、五戒の割口説聽聞した、三百戒五百戒も約る所は赤貝に留るぞのお談義、半兵衛が叱るも貝のわざ、和女に己が意見するも貝のわざ、一蓮託生の圍のお同行さ、フじやれて機嫌を取れば、アそんならマア此方參らしやれ、此の様な嘆悲の燃る時に念佛申せば、地咽にすくく立やうな、心鎮めて跡から參らふ、エ、かてくはへてあたごんな念佛講、ごんな時はめかり聞して延したがよいはいの、ほんにく、此方の同行に、氣轉の利たがひつさりもないと、恐いめ知らぬ我儘たらん。チ、そんなら先へ行く跡からおじや、佛法さかやくの雨は出て聞さ、外へ出れば又有難い事も聞、此の度生玉大法事の開帳に、築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事じやげな、ごんな事も出にや聞れぬ、地ア、有難い南無阿彌陀佛さ、フわ珠數くりく、出にけり。半兵衛一言の答もせず涙にくれて居たりしが、顔ふり上、阿申し母者人、今めかしい申事ながら、武士の釜の水で育ちし此の半兵衛、二十二の年からお面倒に預り、一人の甥御を差置、家邸商賣さも私へお譲りなさる、御厚恩肝にこたへて空にも存せぬ、御恩の母の氣に入らぬ女房なれば、私が離別致してこそ孝行も立、世間もたつ、所に此の度國元の留主の

間に、八百屋半兵衛が母が嫁を憎んで姑去にしたと沙汰あつては、まん／＼千代めが悪いになされませうか、親仁様にも面目失はする、爰が一ツの御訴訟少の間と願召し虫を殺し、美しう千代めをお入なされ、其の上にて私が物の見事に去状書て暇やります、ホ、そこが男のかうけん貴人高位の娘でも、夫が去るになんぞ申す時には千代めが姑への恨みもなく、お前を慈悲じやと云はせたい、十六年此の方たつた一度の御訴訟、是老少不定の世の中、誓私が先だつても、如何なる跡のこひ用ひ、百萬遍の御回向より、聞入れたこの御一言、智識長老のお十念を授る心と斗りにて、女房の親と我親と、世間の義理と恩愛と、三すぢ四すぢの涙の糸、たぐり出すがごとくなり。母はいやりと笑顔して、△思ひ合た夫婦合、誠らしうは思はれど、虚に涙は出ぬ物、眞實去るがぢやうじやの。ハテお前をだます程なれば、此の御訴訟は申しませぬ。ナ、嬉しい／＼、己も鬼にはなりさむない、必ず去りやく、間に合言て欺しやれば、コレ此の母が咽笛を出双庖丁でちよいじやぞや、母殺すか女房去か、夫からは其方の勝手次第、ア、いさらりと穢土の苦が脱た、此の世からの生佛さはおれが事、足輕ふ、非時に参りましよ、是地、こちや、未來までのきざりせぬ、聞の同行が、さこそ待や焦れて、是南無阿彌陀佛、さんふ其の姿でつい供せい、是南無阿彌陀佛、松ふ又見世のつるし喰ふな、是南無阿彌陀佛に取しまで、是オ、りぶつ／＼云ふてぞ出にける。お千代が重なる五ツ月の、重き身ながら足元も、手もかる／＼と帯の下、小袷引あげちよ／＼走り、ハア久し振で家を見た、半兵衛様、今日といふ今日、町内廣ふ民たはいの、ア、嬉しやと、是フ、抱つけば、半兵衛ぎよつと何として戻つた、是たつた今母が出られた道で逢ひはせなんだか、さればい、母様の山城屋へよろしやんして、いつにない門口からに／＼と、いさしやく、おれが些の思ひ違ひで苦勞させた、今からいなそのいのじも云ふまいと心誓文たてた、娘は持す、天にも地にもたつた一人の花嫁末期の水取る／＼も、骨捨わる／＼も和女、

随分孝行にしてたも、和女もおれがいさがる、今お念佛に參る其の内に、早ふ戻つて後に違ふ、早う
早うと頼ま桶な物打あげた様なお心、皆此方様の云ひなしゆへに、ほんに男の御恩は戴いて居ても
あきはない、松よ久しいな、最早ごも蚊があるに、女房主人がなければ、未だ蚊帳の釣手もなし、アノ
さんが居眠りでは、裕ごもの洗濯もできまい、此の戸棚のほこりは、いとの奥の疵もまだ塞す、かうの物
も見廻たし、何何からせうやら氣がうるつく、居つけた所に居て見よ、さんと坐りし茶釜のまへ、
湯を沸して水になる、フフ未知らぬこそ果敢なけれ。半兵衛兎角の挨拶せず、ココリヤ松よ、只の
すこも藏へぬて、椎椎茸よれと人をのけ、お千代の顔をつくく、見見せて、涙ぐみ、ココエ、可哀や利
發なやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか、云やる事が皆虚じや、然りながら昨日もくれぐいふ通
り、佛法の端も聞入れ、物の慈悲も知つた人、我甥をさしのけ他人の身共に跡式讓る心からは、根から
いがまぬ、是證據人には相縁奇縁、血を分た親子でも中の悪いが有る物、乗合舟の見ず知らずにも、可
愛らしいと思ふ人もある、人界の習慣斯した物いさしほなげに根からの悪人でもない母を、和女故
に邪見者と言せては、女夫の者が後生も悪い、母の機嫌よふ一人呼び返し、改めて己が手から去る
筈じや。エ、イすりやごふでも去らるか。ハテ肝潰すことかいの、死るは二人が豫ての覺悟養
ひ親にさんもつかず、在所の親の意恨もなく、エ、流石じや、見事に死んだと未練者の名を取まい爲、
母に向ひなんぼの詞を盡したと思やるぞ、書置も認め死裝束、脇差もあらめの荷へ捲込み、此の世の
心がかりは、微塵程もなければ、金に詰つて死ぬる心中と、一口に言はれふか、是是が一ツの氣
がかりと、わつと泣ばわつと泣、こなさんの孝行の、道さへ立ば私も心は残らぬと、夫婦手を取、離寄り、
伏し沈むこそ道理なれ。母は念佛の、同、向、より、嫁、女、夫の、願、意、此、功、徳、氣、が、かり、餘、所、に、ゆる、り、居、る、
空も、見、世、鎖、比、に、よ、つ、と、歸、り、何何なふお千代戻りやつたか、さつきにも云ふ通り、些としたりやう
げ違ひで、物思はせたいさしやの、ほんの生如來が見たくばおれじやと思や、承うもない浮世に、酷い

つらいめ見て何にせう、喃否やの、コリヤ半兵衛はしりの出刃庖丁ふ磨して置たぞや、ちよいと隔つても劍じやぞ、ア南無阿彌陀佛、地半兵衛に合圖の詞、嫁は知らぬと思ひこむ、フ是ばかりは佛なり、女夫は母の機嫌顔見れば此の世の本望と思へど、じやくは雨さふる、フ涙隠すぞ哀れる。コレ半兵衛何も忘れたことないか、日の永い時は得て物忘れするものじや、ふ思ひ出しやお千代泣すぞ爰へおじやいの、未己が恐いッ、地爰へくぞ猫撫ごは、アイくお側へ参りますぞ、立寄んとする所を半兵衛取て突退、女房斗りは親の儘にもならぬ、身が氣に入らぬ、去たく出てうせい、コリヤさんも丁稚も能聞け、半兵衛が女房去たぞ向ひ隣町内でも、母の浮名を立たらば聞事でない、地うるくせす出てうせいと、眞顔に睨む目に涙。コレ嫁御おりや去ぬぞや、親の儘にもならぬは女夫、是非がない、地おれを恨みと思やるなと、云へども何の返答も、泣入くしやくり泣。地、其の涙はまだ母に恨みが有さうな、有なら言や聞ませう、イ、エくお慈悲深い姑御に、地何のくそ斗りにて、かつはと伏して泣居たり。地チ、おのれが云ふまでもない、母者人に何の恨み、地口手間入れる面倒なと小腕取て門口に、引出す此の身も終に行く、後にくそ囁きて、目ませに宿の名残の涙、弱る心を見られじと、門口びつしやり、見世ぐはつたり、鳴るは六ツかはや初夜か、時間もじぶんも六々に、胸はわけなき五々八々、フ血死期近づく斗りなり。あかね夫婦の生別れ、流石の母も挨拶なく、おうゑを立て奥の間の罪ほろぼしの鐘の聲、善惡照す御燈の、火を見るよりも居眠る下女、外に見る目も荒布の束、中に隠せし一尺四寸、是が冥途の案内者、魂こむる書置箱、地獄へ落るか極樂か、末は白茶の死装束、くるく包む毛氈も、はや紅の血を見れば、死損いはせまいぞと、一心はすはれ共、暖簾一重彼方には、するごき母の鐘の聲、胸にこたへて身も慄ひ、踏所覺へぬ差足に、鉦外す手もわなく、密さ出たる門口に、地イヤアお千代か、おいの、サア鰐の口を脱れた、地サアおじやと手を引ば、マア待て下さんせ、生申一度戻つて、此方様の口から退ぞ去ぞと言はれては、未來迄の氣

掛此の門口で唯一言去ぬと云て下さんぜ。ハテ愚痴な事斗り、今宵は五日宵庚申、夫婦連で此の家を去ると思へば能わいの。ほんにそうじや、手に手を取て此の世を去る輪廻を去る迷を去る、

今日最後の羊の歩、足に任せて三三

近松獨創の雅俗折衷文

豊富なる文藻と自在なる筆致

近松の淨瑠璃は單り操り芝居なる戯曲の正本として構想、變化の妙趣を極めて居るのみではなく、彼の文章はまさしく人生の機微を歌ふた一大詩文なりし。彼の豊富なる文藻と自在なる筆致とは、前に引例した『曾根崎心中』、『心中宵庚申』に於て具に之を見るを得べし。彼は其の非凡なる詩才を以て新に雅俗折衷の文體を創案し、淨瑠璃正本の格法を一定し、範を後人に垂れたのである。彼が創めた新文體は、彼の縦横自在なる用筆上の手腕と相協ふて、何ものをも消化し、又何ものをも詩化し、雅言俗語俚謠方言、一たび彼が筆に入れば、瑰麗婉雅の詞章となつて、克く渾熟せる一大人生詩篇を成したのであつた。

彼が文藻の豊富なる、彼が用筆の自在なる、行くとして可ならざるはなく、或は情緒纏綿、或は婉麗裊々、死を描けば悽慘、戀を寫せば綿々、情中景あり、景中情あり、其の一章一節を取つて之を讀むも、句々皆玉を綴るが如く、其の一編一段を通じて之を見れば、羨んど美文の粹を集めて織りなせる大和錦の絢爛を呈したのでありし。而も彼の筆致の暢達せる一點晦澁阻滯の跡を印せず、間々輕妙なる滑稽を寓し、讀來つて微笑を禁せざらしむるの餘裕がある。

彼が『最明寺殿百人上臈』の一節に、石曼卿の「蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未轉」の句

より翻案し來りて「蝶の翼のおしろいを、草にこぼして梢には、鶴の霜毛をぬきかくる」といはせたる手腕には、時の文學眼あるものゝ孰れも驚倒したる所にして、靈元上皇にも彼の作をめで給ひ「斯る才智を以て和歌を詠じなば秀逸定めて多かるべし」と宣のたまはせ玉ひしと傳へられて居る。

『翁草』に云。

近松が文勢には人を寒むからしむる言葉多し、元祿十六年未の三月最明寺殿百人上臈といへる院本に、最明寺が道行ふりに、蝶の羽索のおしろいを草にこぼして梢には鶴の霜毛をぬぎかへる雪は花より花多きと書けり、是なん圓機活法雪の都に、鶴毛蝶粉といふ四字を出して書る處に、石曼卿が雪を詠せし詩を出せり、蝶遺粉翼、輕難拾鶴墜霜毛散未轉といふ、此の句を和語にうつせり、かゝる才智を以て和哥を詠じなば秀逸數多ありしよしへり。或時竹田出雲、穗積以貫などいふ人近松が方に越きし時、淀屋辰五郎が事跡を記したる草稿に、かれが驕奢のさまをいふとて、金の冠著ぬ斗りと書るを、町人の事をいわるには餘り似合しからぬ様に覺へて、翌日行て尙其の稿を見しに、金の冠著ぬばかりといへる次に、しやくは持病にありとかやと書つづけたるを見て、各愷然たりしとかや、又享保五年の冬近松翁住吉新家の酒樓に遊びて有し時、俄に大坂より芝居者來り、ゆふべ網じま大長寺に男女の情死あり、何卒速に大阪へ歸り、淨瑠璃に作りて給はらば、あすにても稽古にして明後日より興行せんとしてひたすらに頼みければ、早駕にて大阪に歸り、駕よりおりて其

の儘に筆をとり、かごにて走りかへりしまゝ書付しとて、走り書とかき出し、直に謔の本は近衛流野良帽子は紫のと書つゞけ、道行の外題は思ひの橋づくしと名づけしは、大阪にはいくらかも橋あるをもつてしか名付しといへり。都て近松翁が趣向の頓に出る事おほよそ此の類なりしとて、浪花の尾崎雅嘉生存の日、高島千春ぬしへ語りたりし由、高島氏物語のまゝしるしつけぬ。

忙中閑ありてふ餘裕は近松が行文の上に見るべし、彼の文章には孰れの時にでものんびりとした餘裕がある。燃ゆるが如く熱した場面の最潮時に於ても、糸の如く紛糾した葛藤の最中に於ても、些の窘蹙をも感じないのである。此處ぞと云ふ間際まで引き付けて置いて、楮此邊で一服……と出る所が、近松の得意とする壇場なりし。

近松が筆致の特色として見るべきは、口を衝いて出る輕妙なる彼の滑稽である。「お菊は漸胸ひらけ、袖引留めてこれ吾妻殿。義理にも命捨ふとは、僞りにはならぬ事、心底がいとしい、主も定めし逢たからふ、沙汰なしにそつと逢せましょ。」ア、有難い、了簡深いお菊様。」と云ふ下から、「大事の殿御を、澤山に抱ておました堪へてや。」ハテ、取返されは、せまいし、夫だけ御身の仕合せ。」山崎與壽の門松 次兵衛とさらりと書きつゞけて行く所などは、彼の得意の景情轉換の慣用手段にして、『雪女五枚羽子板』の、

「ホ、ウお家程ありて好い目利、我等はちやうど疵なしに二十六、羽は疾につき仕舞ひ、是は又女共が名代に突く羽なるが、なふ此の女が私に、六十二の老女房、當年八十八歳、顔の皴は漣や、志賀の山越、頭は雪、それでも八十八じやとて、我手に米とやられま

忙中閑ある餘裕

口を衝いて出る輕妙なる滑稽

す、此の米の八十八、一日には、突れまい、數取る計りで、仕舞ましよ。二十三十四十五、十六十七十八十、五六七八、なふ草臥やといふければ、姫は羽を引たくり、お内儀様はあ
るまいが、いかい嘘を言しやんす、羽突く事も上手なり、嘘つく事も上手なり、抱付く事
も上手である、此の抱付の上手めに、抱かれて見たいと抱付けば、有繫さすげの藤内しよげに
なり、扇の骨で、白壁に、小坊主書て、ぞ居たりけり。」
の如き如何にも洒落な筆致である。

人生詩人としての彼の眞骨頭は、情中景を描き、景中情を寄せた自在なる用筆の跡に
於て初めて之を見るべし。例之ば『壽の門松』の將基くどの條、『夕霧阿波鳴渡』の吉田屋の條
の如し。彼が獨特の壇場は實に此に存し、他の作者輩の企及し得ざる異色も亦此に存
するのである。

『山崎與次兵衛 壽の門松』の一節

いふてたもるなく、一天下の人よりも和女一人に耻かしい、去ながら石清水八幡宮も照覽あれ、身
は切らぬなれ共彦介めが、與次兵衛やらぬ覺へたか、さ仕掛た喧嘩、身が切つたも同然殊に其の切手
さは男同士の義理ある中、奈落の底迄此與次兵衛が切たに成て、相手が死んだら切るゝ覺悟、さは云
へ彦介め、左程の疵では無けれども、れだつて金にする、訴師さば鏡にかけたこと、みすゝ金で買
る命、此方の藏の金銀では買れぬ、そんな預けられたは母の命日、皆是親に不孝の罰さ、投首するぞ不
便なる。されば私が父様も夫をいふて、淨閑が聞へぬ、音いも事による、千兩貳千兩いれば、さて、獨子
の命に替らるか、慾をさへ離るねば、つめ埒の明く事口惜い、此の治部右衛門、浪人の身でなくば、こへ
いへいふて恨こも、多分今日も見へませう、父様の袖引て耻しめて言せたら、なんば音い親仁様も、

得心なふて何させう、アレ父様の聲がする聽て能こそ聞ませしよ、もういにやるか、又後に見廻ふても、いさしや淋しからふのミ、女夫の顔も打憎れ、涙隔てゝ引立る明る障子の燈にも、暗む心ぞ哀なる。與次兵衛見廻として毎日淀の渡し舟、梶田治部右衛門は相親家の婿を思ふも、娘の爲、老の心を醫せども、父淨閑はさもなく、ヤ治部殿お出、昨日の差かけの將棊勝負付ましよ、サアござれはは餘な淨閑老拙者が毎日老足を運ぶも、與次兵衛こそ氣遣ひき、將棊差には參らぬ、昨日の勝負は何方へなりと、つけてお仕廻〜と、言ども、いや〜馬鹿めが事は運次第、昨日の駒動せず置きました、サアござれ〜、然らば勝ても負ても、是一番、夕部から盤の上とつく見定め、工夫した相手さ、さすはこは物お手は御身かサアあそばせ、先飛車さきの歩をつきませう、ヤ此なり金してやらふでの斯うよ、りませう、淨閑天窓を叩いて、ハア、南無三此の馬落た、深田に馬を駈落し、引けども上らず打てども、行かぬ望月の駒の頭も見へばこそ、難しゆなつたさ案じけるお、菊盤の傍に寄り、是父様あちらの方が落れば、此方も落る、兩方の睨合でいつ迄も埒明ぬ迷惑する駒は、たつた一枚、淨閑様のお手には、金銀が、澤山ある、怒を離れて、金銀さへお打なさるれば、是此の父様の向ふの淨閑様の此の馬は助かる、ごふぞ手にある金銀を打出させます様に、思案して見さしやんせ、合點〜と、袖を引、治部右衛門打領き、チ〜、チ〜、ふ智恵つけた吞込だ、と云へども、淨閑氣も注す、親じやと思ふて、助言云ふまい、云ふまい、又ちよこりさ歩であい致そ、ハ、シテお手に何々、淨閑が手には、金三枚、銀三枚、歩もござる、此歩でまはしたら、まだ金銀殖やしよ、いかひ金持浦山しいか、金持さば此の角が、腕んでゐる、斯よつたらば、金銀出して、打すばなるまいぞ、でも、金銀は、放さぬ、桂馬をあがる、治部右衛門堪へかね、ハテ、いかひ、奇ん坊、澤山な金銀握詰て、何になさるる、來世へ持て往るゝか、是御覽なされ、此の飛車を、斯ひけば、天にも地にも、唯だ一枚の、此身の、此の、玉が、片隅へ、座敷牢の如く、追込められ、今の間に、落るが、金でも、銀でも、打散して、圍ふて、見る氣は、ござらぬか、我等が、奇いは、知れたこそ、座敷牢へ、入るふが、都詰

にならふが、金銀は手放さぬ、歩あしらひで見しらせう、此方も歩をもつてぶに首をさげらるが悔みはないか、構はぬ、先逃て居ませう、コレ其の内に香車のやりを以て鎗玉に上らるが、夫でも金銀出すまいか、勿體ないこと鎗に上られうが、獄門にあがらうが、手前の金銀は放さぬ、と、兩馬つき怒の皮、傍でお菊は氣を揉て、包む涙も手見せ、禁命手詰と見へにけり、治部右衛門腹立顔盤中の駒搔よせ、引摺み淨閑が眉間にぐはらりつと投付たり、お菊はつと驚けども、淨閑はびくともせず、治部右衛門膝立直し、耻を知れ、淨閑相親家はもと他人駒を頼へ投付られ、咎めもせぬ耻知らずに、云ふも國土の費ながら、將菜に事よせ、金銀出して、暖ひ與次兵衛命助けよと云ふ當言、合點せぬお主でなし、ぶに首を提られ、鎗玉に上られても、金銀さては出さぬとば、治部右衛門に氣をいらせ、面白いが可笑か、其方も一人子、此方も一人娘、兩方共に掛替なし、婿を子と思ふてゐるが、嫁を娘と思はずか、與次兵衛が切れたら可愛や、菊が歎かふと、願ひ遣てたらぬば、エト去さては恨めしい、縁組の時婆々が留めて、小身なりとも侍に縁組たい、何ぼう富限者金持でも、町人とは馬があふまいと、くれくれ留たい、いやや名にふれた山崎淨閑、武士交りもする仁と、我一人情ばつて、此の比婆が恨言、お主が昔い無慈悲から、五十年添ふ祖父祖母の女夫合まで不和になる、我子の命に替ぬ金銀、嘘や親類縁者が飢死するとも構ふまい、我こそ牢人主人持た一家も有り物、知す縁を組、一門の名を汚す、無念至極と身にて、せきあげ、泣ければ、淨閑もしばしば、眼侍の子は侍の親が育て、武士の道を教ゆる故に、武士となり、町人の子は町人の親が育て、商買の道を教ゆる故に、商人となる侍は、利徳を捨て、名を求め、町人は名を捨て、利徳をとり、金銀を貯る是が道と申すもの、如何なる大病、難病も病には療治様々あり、國法でさらる命には人參で行水させても、いかな、助かられど、金銀では助かる、命の買る、金銀、大事の寶といふことを、與次兵衛めが知つたれば、此の難儀は仕出さぬ、なんぼう惜み貯へても、死んでは、帷子一枚とは、此の淨閑も知たれども、死ぬる迄、金銀を神佛と尊ぶ、是が町人の天の道、金の

罰の當つた奴、まだ此の上に惜げもなふ金出して、如何なる天罰大難にかな遭おるか、可愛ひ程、出しかれる、奇い名をさる此の淨閑、金銀計り惜むでなし塵灰まで惜い物、たつた一人の世倅が命惜うなふて何させうと坊主天窓を將棊盤、さんと投伏し泣きけるが、治部右殿のお恨も、婿可愛さは存すれども、左程に思召すならば、なぜ日頃引寄せて、異見もして下さつたら、斯様のことは出来まいものさ、我子の阿房は思はず、脇がくりの恨が出る、子故には愚鈍になり、不調法申も存せぬ、奥へ参る治部右殿ア、死んだ祖母は果報じゃと、涙に咽び立ければ、舅も恨云ふ事もなく、表へ立出る跡にはおきく將棊盤、こへ取つくしまもなき。

『夕霧阿波鳴渡』の一節

冬編笠も垢ばりて、紙子の火打膝のさら、風吹堪ぐ忍ぶ草、忍ぶさすれど昔への、花は嵐の願に、今日の寒さをくひしぼるばみ出し、鏝も頭錆て、小尻つまりし師走の果、迂散らしく吉田屋の内を覗いて、喜左衛門宿にか一寸逢ふ、喜左衛門く、鼻に扇の大柄なり、男共口々に、ヤア彼奴は何者じや風の神か鳥威しの様な姿で、なんぢや喜左衛門に逢はふ、百貫目もつかふ大盡の言ふ様な棒まかれなと言ひければ、チ、百貫目が夫程貴い物でもない、喜左衛門さ云ふべき者で云ふ程に逢はせて呉い、ごりや逢せて呉れふ、此様な目にあはせて呉ふと、竹箒持て掛るを喜左衛門飛下り、れだれ者かしらぬ粗相すな誰様でござるさ笠を覗いて、ヤア伊左衛門様か、なんさ喜左、是は夢か、七ツか、扱お久しや懐かしや、京大佛の馬町に御逼塞さ承はる、霧さまよりは數通の御狀、飛脚も二三度、奈良大津まで尋させ、たつた今もお噂先お馴染の小座敷で、二年積るお物語、いざお通りと袖引けば、ア、紙子ざわりが荒ひく、是引けば破れる、掴めば跡に師走坊主、師走浪人、昔は鎗が迎ひに出る、今はやうく長刀の、草履をぬいで編笠の、中の座敷に通ししが、お寒からふと喜左衛門、縮緬に紅裏の、小袖をふはと打懸る、ア、是は言はれぬ、寒晒の伊左衛門、少しも苦しかられども、心底を著致す、頂いて著る有様、喜左衛

門熟々見て、エ、浮世じや、藤屋の伊左衛門様、此の吉田屋の喜左衛門が着せまする小袖假令蜀江の錦でも頂いて召ませふか、ほんに涙が翻れますと、目を擦るを見て、いや、是喜左此の紙子の仕合せらさら無念と存せぬ、惣じて重い俵物材木でも、牛馬が負は珍らしからぬ、犬が猫が負たらば、是は人が手を拍ふ、我等も其通り、紙子の裕一枚で、七百貫目の借錢おほてぎくともせぬは、恐らく藤屋の伊左衛門、日本に一人の男、此の身が金じや、夫で冷へて堪らぬ、ヤア、此の身が金とは忝い、喜左衛門が餅搗に、大きな金がお入なされた、是女房未だ蓬萊は飾られ共先正月の心、三寶飾つて持ておじやとて入ければ、内儀はあつと様に、穂長折しく、橙桃蜜柑や何やかや勝栗お床しや、久し振りて御無事なお顔お嬉し様やと出ければ、伊左衛門兎角の挨拶涙ぐみ、夫婦の衆が念比に、蓬萊と迄氣が注ども、夕さも霧さも言出さぬ、ほのかに聞けば夕霧が、身が事を氣病にして、命危なしと聞及しが、いかふ重いか、但無常の夕霧と消れて仕舞ふたか、歎きをかけまいとて言出さぬか、誓文で泣くまい語て聞しや、泣ぬく、と云ふ聲も氣遣涙に濁りけり。いや、是はお道理、霧様の御氣色、秋の頃はさんさんで、勤めもお引なされしが、寒に入て少御快氣、即ち阿波のお侍、正月もなさる、答で、今日、是に言ひも果ぬに、伊左衛門、ヤア、夫は眞實か、ばて詐か、誠か、隣座敷、覗いて御覽なされませ、伊左衛門はつとせいたる顔色にて、暫し詞もなかりしが、喃内儀、天地ひらけ始まりて、誠ある傾城と、迦陵頻伽の雄鳥は、繪に書たも見た者ない、惣嫁の様な傾城めに、未塵も心は残られ共、知ての通り、渠奴が腹から出た身が、悴然も男子で、明れば七歳も、この遣手玉が才覚で、里に遣たさや、今日來たば、其の悴が事について來たれ共、定めて里にやつたも、偽、捨殺してか、な捨つらん、阿波の侍と云ふは合點、此の前我と張合た、阿波の大盡平と云ふ者、つら、思へば、傾城買より紙屑買がましじや、金出して、此方へ取るものは、状文ばかり、七百貫目が、紙屑では、富士の山の張貫も、樂な事、仕合の、悪い時は、何んで、損な爲ふも知らぬ、無用の涙で、紙子の袖濡した、繼目が、離れぬ先に、罷歸ると立んとす、ア、餘まり、御短

氣、奥のお客は平様ではござりませぬ、いや、平でも靈でも、此方仕度能ふござる、立上る、夫はお前の饗食と申すもの、先夕霧様に逢せまい、いや、迎もけん、ごんなら、夕霧より、蕎麥切に致そふ、拗廻る、其中に、奥座敷より手を拍く、あれ禿衆は、那處にぞと、言つゝ出る、内儀に連れて、襖の蔭より差覗けば、二人馴にし、床柱、凭れ懸るも、形見ぞと、忘れも、やらぬ物ごしは、慥に、彼の、人何が、な、機會に、座を立て、逢たや、見たや、と、心も、せき、背けて、對ふ、客の、顔、然も、大名の、小姓、立、風よしの、衣裳つき、げつばの、鯨鞘、象眼、鍔、若業の、法祿、頭巾、懷中より、香包、名木、火鉢に、薫らせ、かく、是へ、來やれ、身、なんぞ、が、様な、奉公人は、殿の、御前に、相詰め、偶さか、遊興所へ、參るも、氣晴しと、云ふ、内に、第一は、夕霧殿に、戀有る、故、君の、機嫌の、よい、様にお身を、頼む、一ツ、呑やれ、肴せん、ご、ひらり、紙花、七九寸、木枕に、打敷て、横になる、戸の、阿波大盡、夕霧が、打掛に、兩足、ぐつと、入れば、扱も、なめたり、なめたり、此の、夕霧に、足、凭すは、こりや、些と、慮外そふ、な、夫程、足が、苦にならば、打折て、捨て、が、よいと、言捨て、つゝ、立ち、次へ、出れば、伊左衛門、ちやつと、寢轉ぶ、肱枕、空、寢入して、高、軒は、つと、斗に、夕霧、我身を、俱に、打掛に、引纏ひ、寄せ、さんと、寢て、抱つき、締よせ泣ける、が、な、伊左衛門、様、目、を、寢して、下、ん、せ、私、し、や、煩ら、ふて、疾に、死、ぬる、筈、な、れ、ご、今日、まで、命、生存、た、は、今、一、度、逢、せて、下、さ、る、神、佛の、控、綱、是、懐、か、し、う、は、な、い、か、い、の、顔、が、見、た、ふ、は、無、い、か、い、の、目、を、明、て、下、ん、せ、と、揺、起、し、抱、き、起、せ、ば、む、つ、と、起、き、横、様、に、取、て、投、げ、是、夕、霧、殿、と、や、ら、夕、飯、ご、の、ご、や、ら、節、季、師、走、其、方、の、様、に、隙、で、は、な、い、七、百、貫、目、の、借、錢、買、て、夜、晝、祿、ぐ、伊、左、衛、門、此、様、な、時、寢、れ、ば、な、らぬ、邪、覺、な、さ、れ、な、惣、嫁、殿、と、こ、ろ、り、と、臥、し、て、又、ご、う、と、空、軒、ム、ウ、身、に、覺、へ、は、な、け、れ、ご、も、恨、み、が、あ、ら、ば、聞、ま、せ、ふ、寢、さ、せ、は、せ、ぬ、と、引、起、す、是、何、と、す、る、此、の、體、で、も、藤、屋、の、伊、左、衛、門、今、の、如、く、奥、座、敷、の、侍、に、踏、れ、たり、蹴、ら、れ、たり、す、る、女、郎、に、近、附、は、持、ぬ、並、な、萬、歳、傾、城、萬、歳、な、ら、ば、春、お、じ、や、通、り、や、と、言、け、れ、ば、ム、ウ、カ、此、の、夕、霧、を、萬、歳、と、は、チ、ウ、萬、歳、傾、城、の、因、縁、知、ら、ず、か、侍、の、足、に、か、けて、蹴、ら、る、を、萬、歳、傾、城、と、言、ふ、ぞ、や、誠、に、目、出、度、ふ、待、け、る、然、足、駄、は、い、て、蹴、る、や、ら、年、立、か、へ、る、足、駄、に、て、誠、に、目、出、度、ふ、

馬琴と西鶴と近松

慾を描いた西鶴

侍蹴る、聞へたか、去乍ら何も身すぎ彼の様なよい衆には蹴られても損は行かぬ、慾を知られば、身が立ぬ、慾若に御萬歳や、年立かへるあしだにて、誠に目出度ふ侍蹴る、町人もける、伊左衛門も蹴る、蹴る蹴るけるさ蹴散かし、是喜左、餅でも米でもやつてやりや、煙草引寄吹く煙管の、さらぬ體にてゐたりけり。夕霧わつさ咽返り、エ、こなさんさも覺へぬ此の夕霧をまだ傾城さ思ふてか、ほんの女夫ぢやないかいの、明れば私も二十五の暮からあひかり、何年に成る事ぞ、設けた子さへまちつさで早七ツ、誠を言は、今頃は一門中の狀文にも、伊左衛門内より書ても人の咎めぬ事、私に恨があるならば、主様にも恨がある、去年の暮から丸一年二年越に音信なく、夫は、幾瀬の物案じ、夫故に、此病瘡衰へが目に見へぬか、煎薬と練薬と針と按摩で漸く、命繋いで遇さかに達て、主様にあまようと思ふ所な、逆様なこりや酷らしいさうぞいの、私しか心變つたら、踏んでばかり置かんすか、叩いてばかり置かんすか、是死掛つてゐる夕霧じや、笑ひ顔見せて下んせ、拜んます、エ、心強い、胴慾な憎や、膝を引寄て、た、い、つ、さ、す、つ、く、聲をあげ、涙亂れて、髪ほごけ、わけも性根もなかりけり。伊左衛門も涙に暮れ、チ、誤つた、外にさして恨みはなけれども、命に替ぬ大事の女房奥座敷の若い者、我物づらが憤として、思はぬ腹立堪へてたも、我さても浮身の體、誠の正體見玉へさ、小袖くるりと脱ぎければ、肌に着衣の破れ紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、膾深ふこそ憐なれ。

世人の多くは近松を以て馬琴、西鶴の二人と併せ稱して、日本の三大文豪として推賞して居るのであるが、彼の行き方は、他の二人とは全く其の類を異にして居る。

西鶴は慾を描いて居るが、近松は性を描いて居る。西鶴の『五人女』は一箇の物語と云はんより、寧ろ五箇の女性を直寫した、傳記的評論の寄せ集めものとても云ふべきである。

馬琴の『八犬傳』『美少年録』は、馬琴其の人の自我的處生觀、道義的長談義の小説化したのである。博覽強記を以て自ら矜り、偏固世に下らざりし彼れ自身の書窓漫筆の稗史化したのである。書齋の窓より觀察し、了解した人物の再現であり、光景の描寫である。西鶴には理想もなければ誇張もなし。『五人女』にあれ、『五人男』にあれ、唯有のまゝに肉慾的歡樂の現代を直寫した、人生一部の寫實的記録である。一大隨筆である。文章の艶麗絢爛は見るべし、されど人生の有意義を歌ふた彼れ近松の作曲と對比し來れば、這是餘りに單調である。

史的戯曲時代のは畢竟想像的事實の潤色である。されば馬琴の作中の主人公も想像なれば、近松の時代もの淨瑠璃中の主人公も想像である。馬琴の描いた人物も理想的なれば、近松の描いた主人公も理想的である。されど馬琴の描いた主人公は、彼の自我的理想の代表者にして、近松の描いた主人公は彼が元祿時代の活世間より學び得た武士の性格の代表者である。馬琴の描いた武人氣質は常に馬琴的道義論の範疇を出ない變形的人物であるが、近松の描いた時代物淨瑠璃中の人物は、まさしく元祿武士の性情より歸納し、演繹された、現代化する理想の變形である。

西鶴の描いたのは慾である。馬琴の描いたのは自我である。されど近松の描いたのは性である。自己の周圍である。時代である。活きたる人生である。現實的世態である。斯くして近松は直に人生の機微に接倒して居るのである。

性を描き時代を描き
周圍を描き活きた人
生を描き實世間を描
いた近松

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

流祖竹本義太夫

理太夫時代

嘉太夫の芝居に入る一
座を組織し宮島に下る

竹本座の初興行

義太夫傳記中の疑
問宮島に下るまで

息の消 竹本義太夫なる名乗りの緣由

義太夫の曲風 彼の聲曲的所見と遺訓

竹本義太夫は通稱五郎兵衛、攝津東成郡四天王寺村字南の農である。生來淨瑠璃を好み、聲量に富み、甲乙かんごつ自然に兼ね備はり、如何なる場所で語つても、語頭語尾ともに座中に透き徹りて聞ゆるほどの美音なりしと云はれて居る。井上播磨の風を慕ひ、播磨の高弟清水理兵衛に師事して研鑽し、理太夫と名乗り、師理兵衛の芝居にも出勤して居たのであるが、間もなく其の芝居も没落したと覺おぼしく去つて京都に上ぼつた。

理太夫時代

嘉太夫の芝居に入る

京都に上ぼつた年次は詳でない、されど延寶の初めなることは大凡推想することが出来る。宇治嘉太夫が、其の師伊勢島宮内の名代を以て操り芝居の興行を始めたのは延寶の三年なれば、義太夫の入京と殆ど時を同ふして居る。嘉太夫の芝居も開座草創のことゝて無人なり、彼を脇語りとして抱へたしとの相談もありたるなるべし、間もなく嘉太夫の座に入り、其の非凡の聲調を以て『西行物語』の二段目、藤澤入道夜盜の修羅を語り、喝采を博し、一座を驚かして居るのであるが、開は延寶の五年である。然るに偶々

一座を組織して宮島へ下る。

嘉太夫の仕打竹屋庄兵衛と嘉太夫との間に争ひ起り、庄兵衛自ら銀主となり、理太夫の一座を組織し、彼を提げて宮島興行へと西下したのであつた。

宮島興行中彼は、一流を創唱し、一座を創立して其の宣傳を始めんとその決心を固めたるものと覺し。間もなく大阪に歸り、道頓堀に芝居を立て、鞠挾まひはさまの内に篠きよの丸まるの紋所打つたる櫓幕を上げ、初めて竹本義太夫と名乗り、貞享二年二月朔日今次大正六年を距るこゝ實に二百三十二年なりを以て華々しく開場し、『世繼曾我』此の正本は近松門左衛門が加賀様を爲めに書き下したるものなりを上場した。此れ即ち彼が竹本座大西の芝居に於ける初興行である。

義太夫傳記中の疑問
宮島に下るまでの消息

彼が宮島興行に下つた年次も、大阪に歸つた年次も、共に詳でない。『西行物語』の興行後わげば幾許もなく嘉太夫座を去り、直に宮島にと西下したものだとするれば、延寶年中の事となり、貞享二年の竹本座の旗揚げまでには、少くも五箇年の間隔があり、其の間消息辻褄の合はざる事となるべし。但、竹本座の開場年月には相違あるが如し、一般に傳説に従ひ、貞享二年の開場となせるも、事實は天和の末年の開場なるべしと想はる嘉太夫座を去つて直に西下したるものとも信じ難き節あり。按ずるに彼は竹屋庄兵衛の尻押しあるにまかせ、一旦嘉太夫座を去り、四條あたりの芝居に出勤し、『日本王代記』松浦五郎等を語つた『操年代記』に所云、「出たり引込んだり、半年づゝかぬ芝居」を興行して居たりしものなるべきも、成績はかゞしからざるより宮島興行に下り、其の間一座創立の話しも出来て大阪に歸り、先づ二、三の瀬踏みの興行をも試み、進んで竹本座の旗揚げとなつたものであらうと思はる。

『繪入淨瑠璃史』の考證に依れば、八行本『藍染川』の正本には、貞享元年七月中旬と記して竹本義太夫なる署名

竹本義太夫なる名乗
の緣由

あり、又、加賀様の『曆』に對して板行したる『賢女手習並新曆』の繪入本には、貞享二年正月の奥書あり(正月に板行したるものなれば、之を語りたるは其の前年ならざる可からず)と云へば、彼此綜合すれば、『操年代記』『外題年經』等に記せる竹本座の創立年月には、多少の誤りあるを知るべし。

彼が竹本と稱し義太夫と名乗つた緣由に就いては考證すべき資料なし。彼より以前竹本を名乗つたものには竹本若狹がある。芝居の座元をも勤めて居たものと覺しく、『聲曲類纂』には「宇治伊太夫事伊太夫は宇治加賀様の高弟なり竹本若狹が芝居を繼で野田若狹と改め、後竹本彦太夫へゆづる」と記し、又「竹本と名乗事、寛文に竹本若狹あり、これにちなみて名付しか其の故を知らじ」と記して居るのであるが、一説には、竹屋庄兵衛と義を結びしが本となり、一座創立の運命をも開くに至りしと云ふ因みより、竹本義太夫なる名乗りをも按出したるものなるべしと云はれて居る。

元來播磨の淨瑠璃は地節長く、音を表とし節を裏とし、宇治加賀の流義は地節短く、音を裏にして節を細かに語り、各々一長一短あつて完きを得なかつたのでありし。其の兩者の長を取り短を補ひ、巧みに之を折衷し又巧みに之れを調和し、節の長短を交へ、音の表裏を兼ね、宇治加賀の妖艶纖巧なる特色に加味するに、井上播磨の遒勁莊重なる長所を以てし、傍ら説經、祭文、其の他の節調をも加味參酌し、生來の美調と聲量を以て巧に融和調節し、爰に義太夫節なる一流を大成し、一派を立たのが義太夫である。『淨瑠璃祕曲抄』に「義太夫節といふものは、もと表嘉太夫裏播磨と合したるものなり、よく工夫すべし」と云ひ、『はなわらひ』享和三年笑休庵虛空坊の著にして、松屋耳鳥齋の漫筆鼻毛拔の續篇なりと稱せらる。には、

「爰に井上門弟に天王寺村徳屋利兵衛といふ人、能師傳を習らひ得て、折節芝居へ助にも出られ、今播磨と諸人譽ける。此の人の弟子同村の五兵衛、音聲勝れてよかりけるが、つらく思ひけるは、我語る所の井上氏の流は、地節長ふして音を表とし節を裏にこめて語り、又宇治氏の流は、地節短ふして音を裏に隠し節をこまかに語り、兩流ともいまだ節章句さだかならず、漸々詞、地、色、地、中など、斗り也。いでや井上の長きをちどめ、宇治の短かきをのばし、音の表裏をそなへ、節の長短をまじへ、序破急を定め一箇流を立て語るに、諸人甚だ悦ぶ。爰におひて名を竹本義太夫と改め」云々

と云つて居る。
『聲曲類纂』に云。

竹本筑後少椽藤原博教。攝州東生郡四天王寺村の農夫にして五郎兵衛といふ。生得淨瑠璃節を好みしが、其の頃井上播磨椽の門弟清水理兵衛、其の態に達し世に行れければ、これが門に入り、肺肝を碎きて晝夜學びけるが、元より音聲他に勝れ清潔にして、甲乙地合自然に備りしかば、次第に上達して、京四條河原の芝居において清水理太夫と號す。理太夫つらく思ふに、我語る所の播磨が流は、地節長うして音を表とし節を裏にこめて語り、又京都の宇治嘉太夫の流は、地節短かうして音を裏に隠し節を細に語り、兩流いまだ節章句全からじ。いでや播磨の長きを縮め宇治の短きをのばし、音の表裏を備へ、節の長短を交て序破急をさだ

め、一流を立んと日夜に工夫をこらし、終に自得る所有て語り出けるに、世舉て賞美しける。以上竹豊故事其餘の書を採擷す。延寶中大坂虎屋喜太夫が芝居を勤め、天和中京都へのほり宇治嘉太夫が芝居を勤む。此の時嘉太夫に音節の秘術をならび得、又播磨存生のさき播磨にこゝにおいて竹本義太夫と改め、竹本さ名乗事寛文に竹本若狭あり、これも學びしと云。貞享二年乙巳道頓堀に始て操芝居を興行し、此の時大西さいへる名代にて興行し、宇治の上り世繼曾我をかつたる。元祿十四年辛巳五月竹本筑後少椽と受領を拜す。其の頃近松門左衛門新作を著してより、その態世上に鳴れり。筑後が音聲芝居の外迄聞ぬしさいふも、寶永元年甲申座元を引て、翌る年より竹田出雲椽座元となり、人形道具建に至る迄美を盡せり。此の時椽幕竹龜甲にかはる。竹豊故事に、いにしへは操芝居道具も龐末成仕方にて、大方は黒幕さ山簾にてしまひぬ。人形の衣裳は餘泥の摺込模様、女人形は紅の表に淺黄裏杯にて、事足りぬ。元來足付の人形は替てな。正徳四年甲午九月十日筑後椽六十四歳にて病て身まかりぬ。天王寺念佛堂の向に葬る。貞享より正徳に至つて凡三十餘年、淨瑠璃百六十餘番を操にかけて語りたり、今にいたつて義太夫節ともてはやされ、其の枝葉諸州に及びこれり。作しは大概近松翁なり。門人多かりし内にも、豊竹越前椽、竹本播磨椽等最名人なり。筑後椽死後も右の兩人あり、並に竹本大和太夫(早世)同頼母、同難波和泉太夫、河内太夫、幾世太夫、陸奥茂太夫、内近理太夫、二ツ井彦太夫、田川源太夫、長島重太夫等ありて、上るりは彌繁昌しけるよしいへり。

『竹豊故事』に云。

攝州東成の郡天王寺村に五郎兵衛といへる農夫有、生得淨瑠璃を好み然も聲柄大音にして清潔かに、甲乙地合自然と兼備せし大丈夫の生質也。井上氏存命の間の淨瑠璃を能學び、次に清水の理兵衛に彼流の奥義を習ひ傳へ、且亦其の頃京

都に名譽を顯はされし達人宇治加賀椽に立入て音節の祕術を受て執行し、古風を仰で心の師範となし、肺肝を碎き鍛鍊を盡し、終に一流を語り出し、名を改めて竹本義太夫と號し、貞享二年乙丑の年道頓堀に芝居を興行し、鞠挾まりはさかの内に篠ささの丸まるを付たる櫓幕の紋所、是竹本氏出世の始めなり。其の上近松門左衛門新作を編出し、追々面白き趣向と云義太夫の語り盛、見聞人此の太夫ならではと持葉流しぬ。殊更竹本筑後椽藤原の博教と受領を申請繁榮の譽れ四方に輝けり。元祿年中、末竹田出雲椽竹本氏の座本となられ、人形操道具建に至る迄美を盡さるるにより、益々繁榮して流義弘まりぬ。併し定命限り有て正徳四年午九月十日行年六十四歳を一期とし、終に死去せられぬ。法名は釋の道喜とぞ稱じける。一生涯の中其の名高く、死後に至つて名譽を四方に顯はし、世舉つて義太夫節と稱美し、諸國一圓に此の流を學び繁茂せり。

近松門左衛門は義太夫の畫像に讚して、「堪能の人のいひしは、ふしにふしあり、ふしにふしなし、言葉にふしあり、ことばに節なし、語るにかたりて、ふしにかたるなど、此の六句の物は得安き様にて得がたきのみ、よく得たる人は誰そや前筑後椽藤原博教」と云つて居る。洵に知言にして、此の聲曲的偉人の入神至藝の妙趣を説明して餘りあるのである。彼が聲曲的所見を徵すべき資料としては、『鸚鵡が袖』の序文は、比較的其の委曲を竭して居る。「鸚鵡が袖は正徳元年初秋の頃板行したるものにして、義太夫の直頌をさしたる大字八行本也。主として義太夫が語りたる道行景事を集め、上巻二十七番、中巻三十一番、下巻三十二番、都合九十番のふし事を拾録したるものである。序文は其の筆致より左は其の本文の摘録で推せば近松門左の代筆になりたるものゝ如し。板元は山本九右衛門である。」

義太夫の聲曲的所見

ある。

いろはにほへとは尊圓親王の御筆も七歳の太郎松がかけるも、點畫かはる事なく、いの字はいの字にのみ、ろの字はろの字にきはまれども、よしあしの階級は千重萬段、心ことばの及ぶ所に有ず。からにしき晋元の王義之趙子昂敷島のやまとは道風佐理行成などあまたの名筆の工みに書なせる文字の形しななれど、筆法は十二點にはじまりて十二點の外を出ず。韻會字彙玉篇等二十餘萬の鳥のあとたねせぬ寶なりけりと物かく人の語り給へるにかたゑなり。萬に心得たる人の申されしは、六藝の道何れかかはる事のあるべき、文武の樂は美つくし善つくさずのたがひめこそあらめ、樂においては五音十二律にもるべからず。申樂を見侍るに上手のさし扇下手のさし扇さす所にちがひなく、引所さらにかはらず、鼓たいこまた然なり。上手の笛とて笙筆箏のこゑもふかず、ひいやひやりをよく吹おふする計り也。立出て峰の雲はたが舞ても遊谷、四海波靜にてはたがうたふても高砂、平家のふしにうたふたる名人もなければ、よしあしの雲泥なるはいかにぞや。萬の藝かくのごとし、さだまりたる事を能すべし。但その中の曲節は時にしたがひ折にふれて、臨機應變間々有べきにや。しかはあれど、利休紹鷗宗和などのかはりし物數寄目を驚かすといへども、湯のうへへ茶を入れて香煎ふるやうなる無理なる物數寄もなし。名におふ哥人のさまの狂哥雜體はあれ共、五七五七の外はよみ給はず。もろくの藝能師傅をうけて定りたる事をよく切磋琢磨

して、時に應じて略變の用捨こそ達人のわざとも名人の藝共いふなれど語り給ひしを、僕末座に有てつらくうけ給はるに、我が淨瑠璃の道におもひ合ていさゝかも違はず。淨瑠璃はじまりて百十餘年、瀧野澤角兩檢校平家にくはしく琵琶の妙手たりしより、淨瑠璃物語といふ雙番をつどりなをして、藥師の十二神をかたごり十二段といふふしを語り出せり。その時は三味線にあはするといふ事もなく、扇をひらき左にもち、右の手の爪さきにて骨と地紙とを搔ならして色々の拍子をとりにたる事なり。その十二段の目錄さへ今はしりたる淨瑠璃語りもなし。此の外に都めぐりと云もの一段有是は檢校の門弟京東の洞院目貫屋の長三郎といひし人の作なり。かけまくも賢き慶長の帝是を興せさせ給ひて、人形にかけさせ叡覽度く有しより、淨瑠璃太夫受領に拜し、世に行れて安口の判官弓繼鎧がへ戸井田五輪くたき是を五部の本ふしと傳へ侍る。岷江の濫觴たへずはびこりて音曲の海波しづかなる、時津風民やすき御代のたのしみ、淨瑠璃といふ一ふしのさだまりぬるこそ淺からぬ。何の道も古へをあふぎて今を戀ざらめやは、此の音曲も格に入て格をはなれ、格をはなれて格に入るといふ事第一の習ひなるべし。古播磨太夫は淨瑠璃の中へ謠をいるよさへまんざらの謠にきこゆるはあしと申されし。謠にても歌にても淨瑠璃に打そひて淨瑠璃の格にはづれぬよふにうたへと申されし肝要の詞なりけり。僕が門弟には淨瑠璃の文句の中ならば、謠も哥もうとふといは、おもふべからず語る、といふべしとこそをしへ侍れ。いはんや時々のはやり

うた木やり音頭のたぐひ面影はさもありなん、淨瑠璃の正體に眼をはづすべからず。世のはやり哥とて半年はやるはまれ成事にて、上方のはやりごと遠國にしらす、いなかのはやり物都路にしらす、上京のこと下京に聞えず、天滿の噂難波にしらぬ事のみおほし。異國には大きな御殿ひとつの内にさへ、一日の間氣候ひとしからずといへり、はやり事さのみ好まずともあらまほし。世間のはやり事聞出し淨瑠璃に入んより、手前の淨瑠璃世間にはやるよふに稽古有たきものなり。世繼曾我の道行に馬かたいやよとおどり歌入し事相應せず、一番の瑾今聞に汗をながすと、三十年前を後悔ある作者の心藝道の執心さも有べきなり。實にも文言章段のしなによりていかなる名人も語り得がたき事有べし。堅からんとすれば太平記のごとく、艶ならんとすれば源氏物語のごとく、端手ならんとすれば當世好色雙紙のかる口に似て、各淨瑠璃にあらず。詩人の平仄を分ち韻字を押すも律呂にかけてうたはん爲とかや。此の國のうたひ物我駒貫川伊勢の海など優なる、さわらび吉々利々々などのおかしげなるも、呂律にたがはぬこそ有がたけれ。そのごとく文句にもはこびはかせ、およぎ等程拍子有事なれば、それに心を付て文字うつり音聲開合甲乙の位を練磨すべき事なり。申も憚り有共道遙院入道内府公は、御月待の夜尺八鼓三味線などのあそびの中に、いで我も一藝せんとして箒木しなさだめの巻を素讀あそばされしに、あやしの下部まで聞入、感に堪て外の哥三味線もけをされしとかや。源氏のみ曲堂上の御傳授には、清濁文字うつりはもちろん御聲に

なまりをかけさせ給ふ所、ふしを付させ給ふ所も有とかや傳へうけたまはる。是ら、をこそ音曲の龜鑑とも申べかめれ。それ迄はおそれ有共一藝の本意を知らんとはげむべし。ましてつたなき辻藝門音曲を大事有げに語りませ、て淨瑠璃本ぶしの立所を取うしなふ下劣の甚しき本心を外にうばふる、いかなる狂人ぞやと宇治加賀様の批判尤もなるべし。若聞人外のませ事をほむるときは、扱は我淨瑠璃は是におとりたるとかわり見て、いよくたしなむべき事なり。名醫の調合ある益氣湯も、野巫醫者の合する敗毒散も、薬味はかはらねども、大きに人をそこなひ又大きに人をたすく、淨瑠璃にかはりたるふし古今なき事なり。只趣向年代せりふ風景時宜にそむかず無理ならぬよふに地、色ふし調、迄心をかへて精をふかく語りなす事かの病根、病因によりて配劑加減有がごとし。外の事まじゆるは一味二味の加薬のごとく、本方のため、の加薬にて加薬のため、の本方にあらずと知るべし。かくあればとて、本式にわきめもふらず、つくりつけたるごとく、成は佛藝とて、きらふ事なり。其の内の意味は聲とふしとの和にありて、言語道斷、天然の所なるべし。萬卷の書を暗んじても、面授口傳なくして萬の道成がたしとかや。蜂の薬師の淨瑠璃の本方相傳のうへに年をかさねて、口傳のうへに工夫をつみて加減の修行あらまほしく、四十餘年來、寤寐にも是をわすれずといへども、今に淵底をつくさず、是ぞ語り得たりとおもふ事のなきは、我身ながら、いかなる事ぞと申侍りし云々。

筑後様教訓書

凡音曲道上平去入四音四機開合假名清濁をもととする事いふに及ばず就中淨瑠璃とて藥師如來の實號を申事淨瑠璃御前の事よりおこりたるのみにもあらず平判官康頼入道平家物語を作りて生佛におしねしふし付は臺家の稱名より出たり故に稱名に二重三重あり平家に又二重三重有瀧野澤住の語り初し十二段の古きふしも三重斗りぞ今世には残りける扱こそ淨瑠璃と名付る事讚佛稱名の心もこもるよし傳へ承り候しかればおろそかに語るは藥師如來の冥感もおそれ有にあらずや予弱冠のむかし古播磨太夫の門下にしたがひ口授をうけ祕傳を得餘力有時は他人の音曲をもひそかにうかゞひ四十年來心をくだきて今一流を極むる事聊予が私にあらず體用の位長短の墨譜其の外程拍子地はこび寄字戻り響移り持合中るさはる等の違數をしらず皆皆口傳あらずしては至りがたき事なり古の本には句切斗りにて頌をさす事なし皆口傳にてならひたる事なり近年詞地色ウフシ等の頌を付る故それに任せ語りちらし或は予が正本又寫しにうつし段々傳寫し誤り多きをも吟味なく我れ習わたり顔に語る人は蛤の殻をそれと思ひて中の身を捨ると云山家者のたとへに似たり或は聞人の耳に本心をうばふれ聲を作り又はおのれが聲自慢に色を付時花哥などにかゝはりて淨瑠璃の正體をうしなふ事鶉が鶯のまねして鶉にもあらず鶯にもあらぬがごとし諸藝ともに口傳面授なく

して奥底に至る事いまだ例を聞かずが門に遊ぶ人々此の心を得て稽古修行
あらば祕傳を残さず相傳して一流を永々にとどむるにおゐては老後の思ひ
出何事かこれにしかんや口傳は師匠にあり稽古は花鳥風月に有常に神祇釋
教戀無常人倫生類山類水邊降物植物簞物述懷哀傷祝言等に心をよせおこた
りなく稽古有べく候穴かしこ。

藤原博教

右御教訓承知仕候口傳を受師恩を蒙り候上は何用の義にても相背申間舖
候然上は無懈怠修行可仕候淨瑠璃心がけなき仁に猥りに口傳授仕間敷候
尤淨瑠璃一通之儀におゐては師命之儀御座候へばそりやくに仕間敷候若
不届成義御座候へば如何様共可被遊候其の節一言之申分無之候御事。
一 他流他人の淨瑠璃をそしり自身高慢し私のふしを交へ我一流を立申
間敷候御事。

一 遠國他國は不及申於當地も門弟にて無之者門弟と申掠私に弟子を取
我儘仕候者有之候はど吟味致ともなひ申間敷候并相弟子中申合右條に相
背候はど互に異見仕急度相勤可申候爲其の銘々判形仍而如件。

寶永七寅年正月 日

喜	内印	賴	母印	喜世太夫印	宮	内印
茂太夫印		新太夫印		金太夫印		伊太夫印

有 跡印

藤 太夫印

吟 太夫印

市 左衛門印

柏 半兵衛印

治 兵衛印

八 兵衛印

長 四郎印

半 兵衛印

右 京印

三 右衛門印

武 兵衛印

半 右衛門印

伊 兵衛印

伊 關印

儀 印

小 太夫印

吉 太夫印

傳 右衛門印

利 太夫印

右 内印

左 平治印

十ノ右衛門

左 内印

文 太夫印

喜 兵衛印

九 兵衛印

夫 助印

半 右衛門印

三 右衛門印

薩 次兵衛印

宋 女印

長 太夫

佐 内印

彌 兵衛印

佐 太夫印

半 太夫印

改伊太夫佐

内印

武 太夫印

茂 兵衛印

萬 周印

九 兵衛印

主 馬印

勘 兵衛印

新 助

藤 利中

島 彌右衛門

布 喜平印

十三松 太夫印

吉 九右衛門

彦 太夫

難 波

治 右衛門印

清 太夫

采 女印

藤 兵衛

勘 太夫印

儀 彌兵衛印

左 近印

長 兵衛

下松喜 兵衛印

次 兵衛印

半 三良

大 和忠兵衛印

主 膳印

織 部

式 太夫印

近 江德兵衛印

改いろは

安 母印

加 跡

鹿 島彌兵衛印

竹本筑後椽殿

代 竹田出雲殿
同 中村喜兵衛殿

彼は元祿十四年十一歳受領して竹本筑後椽藤原博教と稱し、寶永元年座元を退きて太夫專一となり、正徳四年九月十日六十四歳にして逝いた。釋道喜居士と法號す。天王寺村土塔町、土塔山起願寺真宗辰巳の墓所に葬る。

斯流勃興時代の三十三年

其の前期―竹本座創立後の十八年 此の期の中心人物 興行年表

當時の道頓堀の各座 芝居 振はざりし筑後の芝居 錢安うても面白

其の後期―竹豊兩座對立後の十五年 竹本座の中心人物 義太夫の死、權右衛門の

退隱 竹本政太夫 政太夫の曲風―其れを傳へた西風竹本派の淨瑠璃

豊竹座の中心人物 若太夫の單身 孤闘的奮闘 豊竹若太夫 若太夫の曲風―其れを傳へた東風豊竹派の淨瑠璃

した界の興行 豊竹座の開場 意外の事故より成功した 若太夫の名譽

紀海音 海音の素養 淨瑠璃作者としてより、彼の作物に對する定評 『心中二ツ腹

帶』の一節

竹豊兩座の對立後俄に緊張した斯界の空氣 世話時代物淨瑠璃の流

斯流勃興時代の前期
の十八年
此の期の中心人物

行
の構想作意

竹豊兩座の興行年表

竹本座の創立より、東豊竹座との對立となるに至るまでの最初の十八箇年貞享三箇年、元禄十五箇年、を斯流勃興時代の前期とする。此の期間に於ける中心人物は、義太夫、八郎兵衛長權、右衛門澤竹の三人である。義太夫には陸奥茂太夫、竹本頼母、内匠理太夫、竹本采女、竹本難波等の高弟あり、權右衛門には竹澤藤四郎、鶴澤三四即ち鶴澤の元親、後友三郎となるあり、八郎兵衛には桐竹勘十郎あり、ともに其の師を助けて奮勵苦闘し、斯流百年の基礎を固めたのでありし。

近松門左衛門は此の期間に於て、幾多の新作を供給して其の勢を助成して居る。雖然、後年彼が竹本座の專屬作者として、毎年絶えず三、四の新作を供給して居るが如くには頻發的ではない、間歇的である。當時の竹本座の興行外題は、多くは宇治加賀、井上播磨、山本土佐等の古淨瑠璃、若くは作者未詳の正本にして、近松の新作ものとは、やうやく二十種位に過ぎないのである。竹本座の興行年表は左の如し。

興行年表

興行外題

作者

興行月日

世繼會我

近松門左衛門

貞享二年二月朔日

(宇治加賀古淨瑠璃)

増藍染川

(宇治加賀古淨瑠璃)

同 四月八日

い心ろは戒物魂語

(同)

同 七月十五日

頼朝七騎落

(井上播磨古淨瑠璃)

貞享三年正月二日

出世景清

近松門左衛門

同 二月四日

佐々木大鑑

同

同 七月十五日

(佐々木先陣)

多田滿仲記

同

同 九月十三日

宇治加賀源華に下り義太夫との對抗戦を試みたるは此の年である

達磨の本地

作者未詳

貞享四年正月八日

三月より中國地方へ出興行

源氏冷泉節

近松門左衛門

元祿元年正月二日

夏江洲より伊勢へ出興行

大塔官熊野落

作者未詳

同 十月十二日

定家卿小倉色紙

同

元祿二年正月二日

天智天皇

近松門左衛門

同 三月三日

夏泉州堺より紀州へ出興行

今様柏木

作者未詳

同 八月十五日

冬京都北野へ出興行

自然居士

同

元祿三年正月十四日

此の年正月、近松門左衛門源華に下る

源氏十二段

同

同 三月三日

夏秋 堺、奈良其の他へ出興行

讚談記

同

同 十月十一日

今様 柏崎

同

元祿五年正月二日

春 京都七の社へ出興行

日本西王母

近松門左衛門

同 四月八日

秋冬 西國、中國へ出興行

愛子ノ若都富士

辰松幸助

元祿六年正月二日

平假名太平記

作者未詳

同 三月三日

新本領會我

近松門左衛門

同 五月六日

秋冬 和州、美濃、尾張へ出興行

辨慶出生記

作者未詳

元祿七年正月九日

松風東帶鑑

近松門左衛門

同 三月三日

夏 京都中御靈の社内に、秋冬

北野七の社へ出興行

齋藤別當實盛

作者未詳

元祿八年正月二日

多田院開帳

同

同 三月六日

釋迦如來誕生會

近松門左衛門

同 四月八日

夏秋 堺、奈良、和州諸所へ出興行

鎌田兵衛名所盃

近松門左衛門

元祿八年十月二日

忠信二十日正月

(宇治加賀古淨瑠璃)

元祿九年正月八日

春伊勢へ出興行

當麻中將姫

作者未詳

同 四月十四日

夏讃州より宮島へ出興行

義經追善女舞

同

同 九月九日

那須與市小櫻威

同

元祿十年二月朔日

新板腰越狀

同

同 四月六日

夏泉州堺より奈良へ出興行

頼朝伊豆日記

近松門左衛門

同 七月十五日

百日會我

同

同 十月十三日

右淨瑠璃は京宇治加賀椽芝居にて、近松氏作りて、團扇會我と申す外題なりしが、大入にて百日餘りも動めし故、ふんぎを以て團扇を百日會我と改む、義太夫操り興行より、近松が新淨瑠璃凡三十番にて、又是よりの新淨瑠璃數々あり、しかし此の砌操り芝居はわづか五六十日目にて、狂言を替しとのこも也、(『諸事聞書往來』)

今様小栗判官

近松門左衛門

元祿十一年二月十四日

小野道風記

作者未詳

同 五月五日

義經東六法

同

同 六月五日

秋伏見中書院へ、夫れより伊勢へ出興行

源氏烏帽子折

(山本土佐権古淨瑠璃)

元祿十二年正月二日

春泉州堺へ出興行

北海道虎ヶ石

錦文流

同 五月六日

秋備中宮内、藝州宮島へ出興行

浦島年代記

近松門左衛門

元祿十二年正月六日

長町女腹切

同

同 同

之れ近松世話淨瑠璃の初作

夏堺奈良へ出興行、秋京都へ出興行

因幡薬師傳記

作者未詳

同 九月九日

蟬丸

近松門左衛門

元祿十四年五月六日

竹本義太夫筑後棟と受領藤原博教と稱す。十一歳其の受領披露の淨瑠璃なり

神詫栗萬石

作者未詳

同 八月朔日

前十二段長生島臺

近松門左衛門

同 九月九日

切大掛物十幅對

曾我五人兄弟

同

同 十一月朔日

前傾城八花形

同

元祿十五年正月二日

切豐年富貴萬歲

春伊勢へ出興行

竹本座の中心人物

の後期とする。

此の期に於ける竹本座の中心人物は、依然として義太夫、八郎兵衛權右衛門の三人なりし。

されど義太夫の門下には、頼母、茂太夫、理太夫、難波等の外、更に頭角を現らはし來れる文太夫あり、師の歿後二代目義太夫と相續し、更に一生面を開き、斯流中興の祖とまで仰がるゝに至りし、斯界の巨人政太夫もあり、竹本座の基礎はいよゝゝ堅實を加へ來り、まさに盛隆の機運に向はんとするに方つて、溘焉として義太夫は逝いたのである。

義太夫の死に由つて、竹本座の顔振には、多少の異動を見るに至つたのであつた。竹

竹澤權右衛門の退隱―後を襲ふた鶴澤三二

澤權右衛門は此の興行限り退隱し、其の高弟鶴澤三二大阪の人三二檢校とも云はれし盲人なり、竹澤權右衛門の門弟なれども自ら一派を立て、鶴澤を名乗る。享保五年鶴澤友次郎と改名す。後を襲ふて竹本座の立三絃たさきぎんとなり、權右衛門の高弟藤四郎東

立三絃竹座のの弟子竹澤伊左衛門將來四段目の切弾と入りて脇弾の地位に据り、遺言により政

太夫は其の師の後を襲ふて竹本座の座頭となり、難波、頼母、文太夫、理太夫等とともに、亡師の遺壘に據つて健闘し、翌正徳五年十一月には、『國性爺合戦』を出し、享保二年の正月まで三年越十七箇月間打通しの大入りを取つたのでありし。『國性爺合戦』の役割は左の如くである。當時の一座の顔振れを見るべし。

國性爺合戦役割

座元 竹田出雲椽

作者 近松門左衛門

	大序	竹本頼母			
初段	中	竹本浪花	道行 <small>ワキ</small>	竹本浪花	竹本文太夫
	切	竹本文太夫	四段目	口	豊竹萬太夫
		竹本頼母			竹本頼母
	貝盡し <small>ツレ</small>	豊竹萬太夫	久仙山景事 <small>ワキ</small>		内匠理太夫
二段目	口	竹本頼母	五段目		竹本政太夫
	切	竹本浪花	おやま人形		辰松八郎兵衛
	口	内匠理太夫	立役人形		津山助十郎
三段目	切	竹本政太夫	同	同	金七

竹本政太夫

竹本政太夫は義太夫歿後三十箇年、竹本座の重任を雙肩に荷ひ、一意其の師の遺業の恢輿に竭した斯流の偉勳者である。大阪島の内三津寺町に生れ、中紅屋長四郎と云へり。幼にし淨瑠璃を好み、義太夫に師事して其の伎大に進みしも、生來の小音とて出場を許されず、絶望の餘、偶々同門の弟子若太夫の豊竹座を創立するに遭ひ、相談らふて其の座に入り、和哥竹政太夫と名乗つて出勤したが、義太夫彼の語り口を聞いて感嘆し、召還して出場を許し、正徳二年三月、前「傾城掛物揃」切「丹波興作」目二度の興行に、道中雙六の出語りを勤めさせた。夫れより次第に評判を取り、遂に見込まれて遺言を受け、義太夫歿後竹本座の座頭となり、堅忍自重、遺命を完ふするに竭したのである。正徳四年十月「嵯峨天皇甘露雨」の興行の時、竹本政太夫と改む。享保十九年二月「應神

天皇八白幡の時、二代竹本義太夫と改め、翌二十年十一月竹本上總少椽藤原と受領し、二十一年元文元年なり二月の興行に、受領の祝儀として、切前、赤松圓心の天神記冥加の松縁陣幕なり。の出語りを勤め、三絃鶴澤友治郎なり、受領祝として、芝居表へ進物を飾る事を初めたり。元文三年再び受領して竹本播磨少椽と名乗る。此の受領の祝儀には、『天神記』を『管相丞冥加松梅』と改めて上場せり。延享元年三月興行外題は『兒源氏』なり、道中軍記なり。のなかばより病氣に罹り、七月二十五日五十四歳にして歿した。

『音曲口傳書』政太夫の門弟順四軒が、其の口傳に、

「門弟註、筑後椽の門弟なり。餘多の中に、中紅屋長四郎といふ人、よく師傳をのみこみ語りけるゆへ、我も芝居を勤めたしと望けれども、音聲小まへなればとて筑後椽その事をゆるさざれば、口惜き事かなとおもひくらしける所から、同門弟兄弟子若太夫、豊竹上野椽と受領を拜し芝居を興行す、原註、上野椽を後に越前椽とあらたむる。此の時に中紅屋長四郎事若竹政太夫と名乗此の芝居へ出る。筑後椽政太夫がかたり口を聽て感心し、我一流を殘し傳へん事、此の人より外にあるまじと後悔して急に呼かへし、苗字を竹本に改め芝居を勤む。正徳四年甲午九月十日筑後椽六十四歳にて身まかりぬ。遺言して義太夫となり、名跡相續し、猶又音節章句を正し、終に受領を拜して竹本播磨少椽といふ。其のかたるどころ音聲に深く人情をふくみけるゆへ、聽人感心して、淨瑠璃中興開基の名人なりと譽て、名を日の本の外までも輝しける事、世の人の知るところなり。時に延享元年甲子七月二十五日やみて身まかりぬ。不聞院乾外孤雲居士と號す。年五十四歳。

天王寺領の國恩寺に墓る。別に碑銘の文を書きて、四天王寺の西門、石の鳥居の傍に建て祭る。」

「播磨政太夫なり即播磨少様つね／＼申されけるは、我長四郎のむかし、小音なるゆゑ芝居はつとまるまじと筑後翁申されけるときつら／＼おもふは、音聲の大小は人の生つき也、音曲の事は世話のたごへにも、聲なふて人をよぶと云ふ事あり、生得たる調子をはづれ語れば、脾胃を損なひ調子律にかなわす、應せざれば、人感せず、音聲の師匠より遙におどりしは生れつきなれば是非もなし、音は銘々の音あり、音をもつて人情の喜怒哀樂眞實に語らば、小音なりとも人の感心せぬ事はあるまじと工夫して語りしと申されしが、成ほど人感心したると見へて、播翁師の語り出されると、手習子供の無言をまもるごさくしづまり聴入けるゆゑ、芝居の外まで聞へし也。」云々

と云つて居る。

思ふに流祖義太夫が非凡の美調を以て開き創めた義太夫節に、師匠に見離されたほどの小音を以て一生面を開拓し、「聲なふして人を呼ぶ」の工夫を積み、摯實な滋味のある竹本一派の藝風を作り、斯道の大成に偉功を樹てたのは政太夫である。しつとりと語り出して先づ場内の擾々を鎮め、歩一步と語り來り、遂に聽客をして其の情に堪へざらしむると云ふのが政太夫の本領なりし。政太夫出で、竹本派の曲風は一變した。夫の東、豊竹一派の淨瑠璃が始祖越前の語り風を傳へて、著しく聲量本位

政太夫の曲風、其れを傳へた西風(竹本派)の淨瑠璃

に傾けるに對し、竹本一派の淨瑠璃が、如何にも眞摯な、滋味のある藝風となり、彼は東風と呼ばれ、此は西風と稱せられ、各特色を有して對峙することとなつたのも、畢竟政太夫出でゝの後の事でありし。されば若太夫を以て、義太夫節、東派の流祖なりとすれば、政太夫は其の西派の流祖である。若太夫は豊竹座を創立したと云ふ事柄よりして、實際の伎倆以上、あまりに其の名聲を大にしたるの感なきを得ないのであるが、政太夫は其の師の巨名に掩はれて、比較的名聲を煥發するに至らなかつた憾みがある。小音ながらも淨瑠璃の極意を語り、鳴を鎮めて傾聽せしめたほどの伎倆なりしと、推賞せられて居る所より推想すれば、政太夫の實力は、寧ろ若太夫以上であつたらうと想像せらるゝのである。

穂積以貫が撰んだ彼の碑文は左の如し。

竹本播磨少椽浮圖

翁諱喜教、字長右衛門、幼名長四郎、號政太夫、又號文正翁、藤姓、水原氏、大阪人、生有才情、長嗜歌曲遊藝圃、而師竹本氏、廼所謂筑後椽、立一家之曲者也、翁爲其高弟、究其間奧、遂繼其緒、冒竹本氏、襲號義太夫、皆由於其遺言云、享保乙卯歲、拜任播磨少椽、英名盛行、延傳播、中華姑蘇人沈草亭氏、寓長崎、而遙聞翁之聲譽、蘭慕不置、手寫其曲帖、深嘆其妙伎、亦謂小道可觀之比耶、世之弄詞曲者、率從翁以執矩矱、及其門者、不可勝計、而親受口授者、僅數十人、各勸其名、具于跌、皆執弟子之禮、受敬親戴、殆使視者感嗟、其制行非孚、千人豈能然哉、業伍扮戲、而躬不屑與齒、躡涼々、木訥自守、

剪徹厓幅不事粧飾、相其貌則厓々然野人、蓋天賦之所使然、可以想見其爲人也
延改元甲子年七月二十五日、卒于家、享年五十有四、葬安住寺之塋、次繼嗣喜治及
門人等經紀喪事、復就天王寺竟上、擇清潔之地、建浮圖以擬墓誌、因系以銘曰

執藝孔卑 如成名何

維翁蕭室 久而有華

延享甲子年九月十四日

穗積以貫伊助甫撰

孝子喜治
門弟子等建

豊竹座の中心人物

若太夫の單身孤闘的奮闘

斯界勃興時代の後期は豊竹座に取りては其の創業時代に屬する。中心人物として
は太夫豊竹若太夫、三絃竹澤藤四郎、人形中村勘四郎東座開發當時より
立役遣ひの立者なり。藤井小三郎正徳
より入座おやま
遣ひの立者なり。等にして、作者は紀海音である。

此の期間に於ける豊竹座は、實に豊竹若太夫の單身孤闘的の時代なりし。さしたる
高弟とてもなく、名もなき太夫三四人を助として、大序、二段目切、三の切、四の切等、眼目の
場所うけもちは若太夫一人にて擔任、苦心奮闘、やうやく興隆の基礎を形るに至つたのであ
りし。昔の淨瑠璃は大概座頭の太夫一人にて眼目の場所うけもちを受持ち、爾餘の太夫は中口等を語り、至極少
人數にて入れかほり、勤めたることに、單り豊竹座に限らず、竹本座も亦同様なりし。雖も竹本座
には脇語り、助語りに可なりの太夫あり、豊竹座創業時代の三絃とて亦藤四郎の他にはさしたる
如き、少人數の懸れなる有様にてはなかつたのでありし。三絃とて亦藤四郎の他にはさしたる
助手とてもなく、唯人形ばかりは勘四郎あり、小三郎あり、竹本座に對するも遜色なく、八

豊竹若太夫

若太夫の曲風、其れを傳へた東風(豊竹派)の淨瑠璃

郎兵衛退座後の竹本座に對しては、寧ろ優るとも劣らざるの地歩を占め得て居たのであつた。

豊竹若太夫は大阪南船場の人である。河内屋勘右衛門と云ひ、義太夫に師事し、元祿八年正月初二日興行の『齋藤別當實盛』の時歳十八初めて竹本座に出座した。生得の美聲にして、殊と更ち三の聲をうるはしく、豊婉とんわんにして、ねも云はれぬ味あり。一派を立つるに方り豊竹と名乗つたのも、畢竟其の師竹本の節調を基とし、豊に華やかに語り述ると云ふことの意味より工夫し、案出したるものにして、古今マ、カ、ンの優れたる美音と云へば、若太夫に及ぶものなしとまで稱せられて居る位である。豊竹一派の淨瑠璃が東風と呼ばれ、おしなべて派手で、豊婉にして、西風竹本一派の淨瑠璃に較べて、一種の特色を存し、異彩を放つて居るのも、畢竟若太夫の特徴ある語り風よりより醇化されて来たのに外ならぬのである。

『諸事聞書往來』には

當流名人と呼ばれし豊竹越前少椽出生は堂島豊後の家敷申衆にて、河内屋勘右衛門と云ふ。貞享の頃より井上播磨、宇治加賀、竹本筑後、先師達の淨るりを能覺悟し、豊竹若太夫と改名し、國々を修業し、京都堺、南都組州にては、自身芝居を興行せしが、其の後元祿十五年壬午より道頓堀立慶町にて始めて操り淨るりを興行、初め二三番は竹本井上宇治杯の古物云々。

と記して居る。

若太夫が一派を成し、豊竹を名乗つて芝居を興行したのは元祿十二年なるも、豊竹座を創立したのは元祿十五年にして、其の年五月二十舞臺を開いたのである。

の門人である。一度和州柿本寺黄葉宗に入り、悦山和尚の弟子となつて高節と云つたが、歸俗して大阪に住し、醫を業とした。契沖阿圍梨に従ひて國學作歌を學び、契周と號した。豊竹座の創立に際し、若太夫の懇囑により、入つて座附の作者となつたのである。

海音は寛文三年の出生にして門左衛門より若き事十一歳。作者としての生活は二十五年、『心中ニッ腹帯』『八百屋お七歌祭文』等見るべし。享保八年七月十一上場せる『傾城無間鐘』は彼の最終作である。爾來閑居して再た筆を執らず、寛保二年十月四日齡八十にして歿した。

海音の文學的素養は決して淺しとせず。されど戯曲の才には乏しかりしが如し。

淨瑠璃作者としてよりは、寧ろ讀本作者
取り立てて云ふほどの傑作もなし

彼は淨瑠璃作者としてよりは、寧ろ讀本作者としてより多く適任者であつたらうと思はるゝのである。彼の構想は餘りに變化に乏しく、其の筆致は餘りに筋書的なりし。彼の作物には此れぞと取り立てて云ふほどの傑作もなく、後に傳へて嘆美せしむるほどの文章もないのである。彼の文學的素養は、後の文耕堂、一風、千柳、出雲、宗輔、千四等の作者に優るとも劣らぬのである。されど此等の作者は構想に於てはるか海音に優り、一方ならぬ苦心を積んで居るのであるが、海音は構想に於ては著しく不用意なりし。『諸事聞書往來』淨瑠璃に「新淨るり數々差出すといへ共竹本芝居作意宜敷淨るり外題も今に残りし正本ありといふは、皆近松門左衛門が作意也。豊竹は新物多しといへども、外題なじみなく、本杯も見あたらす、漸大入せしは井筒屋源六戀

『心中ニツ腹帯』の一節

の寒晒の世話淨るり」云々とあるは、やがて海音の作物に對する定評とも見るべきである。彼が作者生活の二十五年間作る所の淨瑠璃は殆ど四十番にも及んで居るが、さしたる傑作とてなし。其の正本の残れるものとても僅かに半數に過ぎない、他は散逸して尋ねるに由ないのである。元文元年夏、法橋に敍せらる。清潮院海音日法居士は彼の法號である。寺町賣樹寺紅葉寺に葬る。

左に彼が作物中の唯一の傑作とも云ふべき『心中ニツ腹帯』及び彼が最終作たる『傾城無間鐘』の一節を抄出して、彼が構想筆致の一端を窺ふべき資料とする。

心中ニツ腹帯 第二

難波津や賑ふ門も眞夜更て、軒比ぶる鐘の聲數は幾許ぞ入軒や、あまの簪を掲げたる、宿の行燈しんしん、濱松あなつ揚場に、遠近人の下り舟押並んでぞ擧り寄る、船頭眠りを呼醒し、サア／＼著たぞ揚らしやれ、置忘のない様に、諸事改めてさ云ふ所へ、泊宿の亭主、三笠屋與次兵衛出來り、待た／＼船頭乗改める事が有る、宵の内から我方に、上の衆じやが二三、人脱落者やお尋ね、島原の色じやげな、殘らず舟を吟味して頼む／＼さ舞けば、船頭ども聲々に、縹船の内やう／＼さ女中は二人ばつかり、一人の内儀様、一人は若い肥満様、それ／＼其所へ揚らる／＼、勝手次第に穿鑿ささば、めく内にし／＼さ、さ、苦漏る露も情知る、由縁に靡くなぎ袖や、小稜に色を抱へ、帯花、美な姿の女房に、ば、の、連立つ、其の風情、荒し軒端に、三日月の光こぼる／＼如くなり、與次兵衛立寄り提燈の影に見るより打領き、ハア大かた是臭い物、ぬく／＼さ脱落じやの、追手の衆が此方にじや、卒御座れいさせる所へ、次の舟より半兵衛は、遠州よりの歸り足何心なく揚場に、男女の喚く聲、立寄りて小提燈ヤア女房が、半兵衛殿是伯母様扱々さ、互に餘儀なく見へければ、與次兵衛は猶うさんげに、控へて様子を窺ひける、半兵衛は從

容に何方かは存せぬとも、誰も心のせく時は、人違はある物、正しく是は身が女房、外を御尋ねなされいさ、いへども、與次兵衛喚ぬ顔、扱は左様か、何様にも、町方の御内儀には、ばつさかうさな御風俗、御亭様なら一連か、思へば左様でも有そむないば、れやれ御鹿相申た、詞を残し歸りける、半兵衛打笑ひ、鹿相者と惡銀は、何様世間に多い物、して先お千代伯母様と、何故の上登り、お袋は御無事な、何様じや、様子が聞たいと、詞の内よりせき立て、お千代は頓て取付を、伯母は駈寄り引放し、エ、未練な、何にも云やる事はない、此方へおじやと手を取るを、半兵衛留めて興麗顔、伯母御はいかふ不機嫌な、女房に恨か身に當りか、何とも合點のゆかぬ事、お千代何様じやと尋ねれば、伯母は彌々氣を聞へ、扱しらくしい空さばけ、夫に陥つてお千代は、の、さばけ倒れに成りました、ばあ是も云ふまいさ、あ來いと急ぎ立れば、半兵衛は、猶も向ふに立隔て、夫は餘りにかたむくる、疑ひまがひも有ならひ、善惡共に何時迄も、様子を聞んさ、苛ちける、お千代涙の下よりも、問ぬもつらし問も又、むさし鎧のかけてだに、知し召れぬ事ならば、聞て哀をかけて給へ、お留守の内に思はずも、姑ざりの力なく、しやう事なさに、すごく、さ里へ戻りて、母様の、朝な夕なの煙りさへ、立てかれ給ふ、其の中に、四五日かくつて居る内に、此の伯母様が、京参り、立寄り給ふを、幸ひに、行衛定めぬ下り船、淀まぬ水の縁にて、相見る顔は變らねど、替るは今の我身の上、男の心は川の瀬に、譬へてあれど、自は、飽れた中さは、思はれど、母様や此の伯母様は、お前も一ツつらさぞ、恨みて今の執拗詞、言譯をして給はれ、口説歎くぞ、道理なる、半兵衛ハットけてんして、騒ぐ心を押録め、歎くは道理去ながら、不慮に爰にて出逢ふが、夫婦の縁の切れぬ故、思案しがくも有るべきぞ、氣遣すなと云ひ宥め、是伯母御、お腹立は聞こへたが、身共へあたりは不了簡、當月初旬よりも、参宮致し直様に、國元へ罷越、逗留は唯三日、其の外は皆旅の空、狀通致さん様もなし、留主の間の言事を、半兵衛も一ツ所さは、廻り過たるお疑ひ、機嫌直して此の上の、相談あれと、説ければ、ナウ當どのない事うらめうか、此方と兼て相談の、慥な證は見やしやれ、姑御の直筆、お千

代をば去狀夫婦の中ののきまりは誠の親でも我儘にさつぱりさならぬ物腹かさねお袋が心一ツで書れうか。是でも物が言るくかさ半兵衛に投付れば不審ながら取あげてつくく見れば暇の狀是はさ計り差俯伏き二度惘れて見へにける。伯母は恨みの詞さへ胸に餘りて目に涙聞へぬぞや半兵衛殿此方は元が由ある身仁右衛門殿もれきく千代が一家は吹ば散る此方風情は疎れても元より縁はしれない物女房さへ可愛くばそこに隔ては有ぬ筈姑御のさがなふて執悪い御機嫌に辛抱するは何故ぞ男の顔を樂みに暮す女房に口出して鼻負こそ成るまいけれ影日なたになる程の氣骨は折て遣れても左のみ人は叱るまい云ふではないが可愛そに物も美事縫いまする書出し一つする程の目は親立があけておく紡績なら人あいなら容色は此方の覺へてなり些の落目は華花なれど若い時が二度はない左のみ無理にはあらぬ筈花の盛をうるたへて京の親元三界へ居ても居られぬ貧乏を脱みあふても濟ぬ故身の片付を奉公さ思ひ定めて連て來た嘸本望で御座らうきたぐりかけく口説歎つぞ道理なる。(中略)お千代はくわつと堰上げて欺しやつたの抜やつたの其の心さは知らずして母様や伯母様の恨み誹りを云宥め半兵衛殿はいさしげに卑しい心は御座らぬと發言放つて今更に面目ない耻しい恨めしの男やと肩に咋つき膝に寄り身を闊ゆれば袂より一通の文落敷たり半兵衛ちやくと取上れば其の手に取付咬付て大事の物じや戻してたべ見せては悪いと周章しを取て突退け脱み付け去れた様子が知れかかる勿體なくも母人を邪見な心さ恨みしが却つて慈悲であつたよな暇を取たは取たれども不慮に逢ての間に合口密夫の都合宿伯母御のいっつい返禮に痴話文讀で聞さんご封押切て繰開けばコハ如何に最期の一通ハツト思へど心を鎮めて讀上る形見ながらに書置の事一我身拙ふして半兵衛殿さ夫婦に成り申上はお二人様をば誠の親より大切に思ひ參らせ候然れども足はぬ心からお氣にいらぬのみならんに今迄の御憐みあめ山奈く思ひふく一夫婦さなり申てより終に一度の詞もあらし申さぬ中に思ひもよら

の別れを致し候事、よくくゝの縁の切目と悲しき此の事に候、一高麗橋の伯母様へ歸り候事も、耻しく石町の伯母様、京の母様、何れも貧しき活計に候へば、身を寄せ候事も、勞しく候彼是思ひに迫り命の際に成り申候、残り多きは盡せぬ中、取分可愛きは宿りし我子、共に消失せ候事、別方もなき此の身の因果、夢の世の中さは申ながら、又改めて夢の様に、かへすゝも、墓なく思ひ、かしく、ハツト計りに讀終り、三人共に差俯伏し、聲も立てずに泣沈む。(中略)半兵衛は思案して、然らば今より日を切て、五日が内にさつぱり、お千代を内へ呼入ん、夫迄のお情を、了簡あれと手を擦れば、伯母もやうやう聞入て、さうさへなれば、互の爲、若も五日が過たらば、此方の内へ持込むぞや、夫迄何しにせつばして、手廣ふ迎いに遣りまする、違いはないの誓文と、互に堅め居る折ふし、駕籠遣りませふ、駕籠遣い、遣りましよいと云掛る、幸ひ東も白んだり、人目を忍ぶ夫婦連、千代をば乗せて、駕籠の戸に付しれうちも坂東聲、されもりなりと人や見ん、斯る所へ與次兵衛が、噂に寄りし亡八の者、ばたゝと駈來り、此の駕籠なほ紛者、ソレ引出せと罵れば、半兵衛駈隔て、近頃無體千萬、此内は身が女房、荒氣を出さずと通られと、斷り云へば、聞入れず、お内儀様拜みたい、くゞれば、かゝれば、チ、女房の開帳なら、先三百目持て來い、ヤア伴るまい吐すまい、夫見よと駈寄るを、ならぬと支へて、入亂れ彼方へ押合、此方へくづれ、暫時捻あふ其の隙に、一人はづして、駕籠を明け、提燈掲げ、びつくりと、是や違ふたと飛退けば、皆一同に首尾わるく、採手をして、腰屈め、ハ、ハ、ハ、結構なお内儀様、是を次手にお近付笠の御用に立ましよと、言捨て、こそ逃にけれ、半兵衛怒り押鎖め、本意なけれども、親よりの、意見の、状態、押戴き、勘忍するが、町人風、女房は又當世風、世間の人が、譏ふが、母者人が、くすべうが、此のばつとした、俵を、我等が、宿のお千代じやと、打連れてこそ歸りける。

同

第三

世の中は、いんきゝゝの新うつば、地水火風をかり、住居、光陰、早き、八百屋、見世、内證、さも、に、吉野、葛、練、れ、

た親仁は結構者ふきの姑苦口に、嫁菜の袖をひたし物千代は、徒の女松茸、二世の縁さへ、瀬にかはる、淺草海苔と身は焦れ、何さしやうかも松露にも、心計りをつくし、筆には盡ぬ憂ふしや、宵庚申を精進の出しに仕ふて半兵衛は、晝より出し留守守り、仁右衛門男に嘉兵衛まで、戀の物馴し、が、首尾をくろめる墨硯、手代利助が算盤もきのさくく、と、弾くなり、後世の元手の念佛講閣路を照す小提燈、仁右衛門夫婦奥より出、ホ、嘉兵衛、きどくに精が出る、若い間は銀すき、年寄つての談義すき、是人間の一大事、同行結びの掛錢もない袖ふつては交際れぬ、今宵の當家はいつこても、法度を背いて夜食が出る、酒も濟んだら夜が更ふ、半兵衛が追付戻る迄、見世をば明な寢まいぞ、老の繰言細やかに、詞のあさも針をもつ、姑はつと聲、半兵衛は今夜戻りやせぬ、表も裏も締て寢や、夫婦が聲でたかすば、必戸をば開まいぞ、合點がいたか、と云ければ、コレ女房さかなふ物をおいやるな、養子に來てから今日迄、夜泊をせぬ半兵衛が、庚申参りすればさて、戻るまいさは何故おしやる、サア半兵衛のまゐりやつた、庚申様は石町、伯母の所へ先度から、嫁の千代めが來て居るげな顔付合せ夜もすがら、庚申待をしなうと、女の性は嫁や子の、中もほうかい倍氣口、内外の者の聞く前も、迷惑さうに仁右衛門はばて扱夫もまくに、しや見ざる聞ざるが、庚申様の御誓願、知ぬが佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛と繰る珠數の、眩きながら打連れて、表へこそは出にけれ、續木の枝は雨露の、惠みも薄き桃櫻、半兵衛夫婦が身の上に、今こそ思ひ知れたれ、五日と限る約束の、今日さへ暮れて初夜の鐘、覺悟は胸に極まれど、同行中の扱ひを、若やと計り頼みにて、知死期待間の二人づれ、親の目ぬすむ夜歩行は、我宿ながら忍ばしく、密に寄せて、内の様子を窺へば、嘉兵衛は筆を持たながら、つくつく、物を思ひ顔ナン、ト利助お婆が先の氣相でも、寺同行の御意見で、邪見の角が折うかい、イエ、存じもよらぬ事生れついたり、勝手性、今度の起りも根が、愁から、按摩取の印可めが、跡先なしの饒舌口、去浪人の娘さやら、年は十八數銀は、大金で七十兩、氏系圖より慥なる、商人へ遣たいと、頼まれますと聞と早わくしいわ

るが小聲に成り、何様やら夫は耳よりな、兼々お主も知る通り、役に立すの嫁御察、さらりて去て其跡へ、どうぞ世話して貰ふても、燭を仕てこひ一杯と、天目酒に呑こんで、先へ言込む此方へも、返事聞せてひつそく、點頭あいの最中と、聞さへ胸も冷やりと、お千代は其所を立退ぎ、半兵衛はまだまいと、遣入たそうに覗き居る、袖口取て引戻し、扱衆の返事迄待事もない我々が、最期の衣裳も守り迄、小宿へ出して有上に、うるく其所に居給ふは、今の噂にお心が、残りやするを恨れば、ア、由ない事を云ふ人かな身己は心が残られど、去れた其方を此内へ、呼戻したる心にて、中戸口から手を引ば、夫ぞ誠の夫婦連、恨み悔みも晴ぬべし、思案こそあれ暫時と、立忍せて半兵衛は、審押あけすつこ入、兩人共に待たである、日暮ぬ先に戻らうと、思ひの外に當月は、例にかはつて大参り、仔細を聞ば去ぬる夜、音楽響き花降て、雲中に御聲を上げ、庚申の御神體、青面金剛童子とは文字も青き面と書、青きを好み給ふ故、青物賣を守らんと、新に御告有し由、言傳へ聞傳へ、市のかはから打あけて、参る程にける程に、御門前から押あふて、鰐口の緒へ取つく迄、ゆつくりと三時半、斯る尊き物語、割て内には居られない、嘉兵衛も利助も参つて来い、参れくこそやされて、常も利助は飛助で、帯もそこく、駈出れど、嘉兵衛はじろりくわんさした顔つきさへも氣味悪く、稍暫猶豫ふて、親仁や母は同行衆、兎や角と有る挨拶に、夜明でなくば歸られまい、隠れて嘉兵衛も参つておじや、いやまあ止に致しましよ、相場の悪い折節、ひよつと知れたら彼婆が、並大體じや有るまいと、取ても付ぬ挨拶に、重ねて返す詞なく、成程夫は、醜い嗜み其心から此頃は、商賣に精がいる、旦那衆から青物の御用は云ふて来なんだか、誠に忘れて居まする、平野屋殿から明日は、振舞をする半兵衛に、鳥渡参れとお使が、二三度も立ました、ム、左様であるく、往すばなるまい去ながら、殊の外なる草臥やう、名代に往て聞ておじや、エ、く先より念入て、獻立も相談する、直にこ有るの御使、御太儀ながらと動れば、半兵衛わざと腹立聲、仔細なこれる男が有、獻立一ツ書く程の、器量を持ぬ其方なら、明日が日にても半兵衛が、死だら八百屋仕ま

ふかききめ付られて是非もなく、不審顔して出て行く、影見送りて表へ出、千代が手取て引入る、跡は戸鎖に詮方も、涙先立計りなり、千代は覺へず聲を上げ、移れば、替る世の中や、二人、添寢の、諸白、髪、千年、頼む我家を、今日は冥土の旅や、ざり、手馴し、襖押入も、名残惜げに、彼處、爰見世の、先なる、小板、敷、撫つ、擦つ、く戴ひて、仁右衛門様の、折節に、爰に、座つて、おわせし、思ひ、出すも、懐しや、不調法なる、自が、悪い、所を、影になり、日向になつて、明暮に、姑御へのお取なし、數限りなき、御恩を、ば、死でも、如何で、忘るべき、去る、朝も、輪して、手づから、御膳、掬たれば、物をも、言はず、ほろりつ、泣、て、お箸を、採れたる、其、面相が、見、おさめ、成り行く、身を、悲しや、咽返る、こそ、道理なれ、友に、鳴音の、半兵衛、尤なり、去ながら、和女の、事は、數ならず、國を、離れて、十五年、誠の、親より、大切に、介抱有し、甲斐もなく、先立、我は、不孝、も、物知ず、さも、思されん、御心底、こそ、耻し、さ、しやくり、上て、ぞ、居たりける、よ、そにも、嗚な、袖の、雨、風呂、敷、包、手に、提、て、嘉兵衛、すた、立歸り、しやくれ、ぞ、明ぬ、表口、割る、計りに、打叩く、二人は、はつ、と、立上り、うろつく、内に、外よりは、開よ、と、喚く、聲、お、と、と、と、計りに、て、彼方、此方、と、這廻り、やう、と、と、と、身を、押込に、千代を、忍ばせ、半兵衛は、戸を開れ、ども、打明ぬ、胸塞りて、きよ、と、と、物をも、言ず、立まへば、嘉兵衛も、共に、隔々を、覗き廻りて、押込を、明んとするを、立隔たり、嘉兵衛、慮外な、何故、明る、ハテ、珍らしい、御咎、此、押込は、道具、入、用が、有て、開ます、る、イヤ、と、用が、有るにも、せよ、宿へ、戻つて、直様に、其上、包んで、手に、提、しは、何方で、取て、來た、ム、風呂、敷、包の、疑ひなら、是、御覽、あれ、赤毛、鹿、ハテ、似合ぬ、物を持て、居る、イヤ、様、子は、追て、申べし、夫婦の、衆の、留守の、内、櫃の、さ、ろ、く、へ、納ん、と、明にか、くれ、ば、手を取て、近頃、小氣な、男、かな、見付られたら、半兵衛が、遠州、土産、と、云て、おけ、先下、にい、商賣、の、返事が、聞たい、獻立は、何様、じや、何、様、じや、と、紛ら、か、す、詞の、はず、れ、顔の、色、心は、付、と、つか、ぬ、振、押、鎮りて、長まり、明日のお、振舞、お、客の方、から、獻立が、謎に、致して、參り、した、有、増計り、覺書、聞し、召、と、ぞ、讀、上、げ、る、先、本、汁に、大、寺や、邊に、遊ぶ、童、は、ち、しや、白、魚、と、知、れたり、有、情、非、情の、乗、合に、棹、なき、舟の、行、衛、と、は、貝、燒、杯の、事、なら、ん、木の、葉、折、敷、其、上、に、

から紅の心中さは憐みぞ見る子持縮、添に添れぬ中く、に寧々に指身さば、包めど我が吸物に、幾度肝を冷し物厭ひ直してたび給へ、折が替れば氣も替り、又面白い獻立の、出来まい物にも候はず、定めなき世は人の常、何なか恨葛餅が、後段の筈に候さ、心に餘る意見狀押當てこそ讀にける、半兵衛は左あらの顔、扱面白き獻立や、併魚類の振舞な、なぜ看やは請取ぬ、然ば夫にも話有り、お出入致す魚賣に、堀江彌兵衛と申せしは、器量は左のみ能られど、戀路の手だれ上手者、惚れたお山が三百人、忍んであふが四五十人中に取ても若松や、直と互に腐れ合、女房に持ぞ持れんぞ、契りをかはす間々に、市とやら云ふ生娘と、ちふくくり事がかふじてきて、はや五月の腹に帯隠されもせず、親も知り、つい呼入て嫁廣め、祝儀の樽を送るやら、三國一を論ふやら、其所ら近所がさめめれば、直が燃立つ胸の火に、よれ傍輩が焚付て、彌兵衛が往て居る先々へ付て廻つて恨泣、吃付嘴付しがみ付去か、死るか死るか、去か、二ツ一ツとせたられ、孕んだ女房は去されず、直は彌々勸忍せず、是非に及ばず心中し、難波の野邊の草の露名は繪雙紙に留まりぬ、色と義理とに迫つては、日頃の智恵も出ぬ物、其所が膝とも談合で、此方とが様な者にて、明して言ば何様ぞ又、死なきぬ首尾も有るべきに、聞へぬ堀江の彌兵衛やと、むしりかけたる口占に、半兵衛ぎよつと行詰り、物をも言す押込の内にお千代はわくせきと、身を悶へたる胸ふるい、襖に響き敷居迄びりくく、と鳴渡れば、女はうちらで鼠なき、男は外から猫の、真似憂が中にも可笑けれ、嘉兵衛そろりと立上り、みのづるしなどひかれては、もことが粉になる穿鑿と、つかつかと立寄るを、半兵衛あはて突倒し、嘉兵衛お主も相應の、惡所遊びもする男、ひよつと出合の初戀を、見現しては興がない、其所らは粹め氣をさほせ、さほせく、と詫にける、嘉兵衛疊打叩き、あんまり夫は曲がない、なぜ有様におつしやれぬ、私事は二三度も、追出されたる身なれども、伯父仁右衛門に色々、と詫事立て給はりし、お前の情で立て居る、嘉兵衛に何の遠慮が有る、何程隠し給ふても、聞れど、知た御心底、同行衆の扱ひが、叶へば重疊左もなくば、刺違へんその言合せ、見付た所は違ふまい、

切なふも悲しふも思召さるゝ筈なれども、死なんぞ迄は短慮の沙汰、世に心中も多けれど、銀に詰るか果ふ事の、ならぬ切迫の時にこそ、八百屋と言は軽けれど、勝手乏しい事はなし、上町邊に借屋をかり、行通ふても違給へ、假令五貫目三貫目、帳面合ぬ事あらば、嘉兵衛一人が引負て、お兩人の名は出すまい、命の替りに立たいと、思ひこんだる私が、詰らぬ異見は仕らぬ、思案をかへて下さりませ、袖付ても取付ても、申々死せはしませぬと、誠を立る男泣、優しくも又別なけれ、半兵衛も稍涙ぐみ、慈悲なる親の血筋さて、頼もしい氣を持ものかな、其心とも汲知で、隠せし所が面目ない、お千代く、こ呼かくれば、おもはゆげにも立出る、目は泣腫れて顔瘦て、見交す計り打守り、ナウお可愛やと、いふより外はなかりけり、半兵衛心に思ふ様、死ぬると言はば此者が、付纏ふて放れまじ、賺して此場を脱れんぞ、世に嬉し氣に打笑て、實に賈た子に教へられ、淺瀬を渡るこ云ふ如く、其方が異見にて、死や角思ひ頼墮し、も洗ふた様に打晴れた、借屋の事も内證も、萬端お主を頼み入、當分は先親里へ、戻しておくが能い道理、女房嘉兵衛に禮いやと、僞知す目くばせに、お千代も頓て合點して、お志の數々は、何様も詞に盡されず、夫婦が命の親様と、手を合すれば此方にも、若輩者の云ふ事を、得心有て嬉しやと、誠と嘘の笑ひ聲、夢に夢見る如くなり、仕濟したりと、半兵衛は、お千代と共に立上り、伯母の方迄背の内、送り届けて、明朝は、駕で古郷へ送るべし、親仁や母の歸られたら、未庚申から戻らぬと、ごぎく首尾を合せて、言捨行くを引留め、件の毛氈差出し、お駕の内の數物に、進上致すと申義は、慮外がましく候へども、嘉兵衛が爲の寶物、追出されたる其硯、朋友どもが指さして、臺の上では死ぬまいと、影事云ふが、無念さに、心なをしていんで見しよ、夫とも願叶はずし、辻かいても、こで死ぬることも、毛氈敷て居るならば、臺の上も同然と、意地を立たが、身の幸、二度此家へ立戻る、嘉兵衛に似り給へとの、御祝儀なりと云ければ、お千代は、ちつと笑顔して、何より嬉しいお心づけ、此毛氈で夫婦づれ、夜の花見に、参らん、詞のはづれ氣も付ぬ、流石若氣の不覺なり、然る折節、仁右衛門夫婦同行衆と高鳴、はや門近く立歸れば、半兵衛

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰
『心中ニッ腹帯』の挿畫



騒すお千代をば、小櫃のさきに雇ませて、半兵衛共に椎茸の苔を選んで居たりけり、仁右衛門戸口に立
休らひ、太郎兵衛殿五右衛門殿、七兵衛殿には取分て、遠方さいひ夜も更る、ひらにお歸り遊ばされい、
ハレヤレ云れの御遠慮、おひさをだきに三人が申合せて參るから、七兵衛一人は歸られぬ、夜食は喰
る引かける、煙草一服御亭主のお氣扱ひには成るまいと、明るる審戸我一と、せり合ひ内に入にけり、五
右衛門先へ進み出早速ながら申ましよ、御夫婦共に能聞しやれ、是の嫁御が去れても、手前に損も仕
らず、呼戻されても此方に、別に利徳もなければ、よくく懸意に思ふ故、宵から今迄三人が取付引
付額の、掻倦怠ほど詫れども、あへんとも討れぬは、侮つての義か、但し又大切な事他外で、言つてわざ
な仕方じやま、ふくればし有てか、是迄附ては來れども、云べき程は最前に、底を叩いて仕舞た故、急
に才覺成りませぬ、兩人出やれと押ささる、太郎兵衛ひげこに腰をかけ、夫婦合には別義なし、不義放
埒だに有ざれば、何を仕落何を批難に去すべき、姑去に極つたり、假令五日が十日でも、お千代の顔を
見ぬ内は、太郎兵衛が朝夕を、此内で養はれんか、たゞ如何にと詫にける、姑は、つくさ出ア、太郎兵
衛様よい推量、仁右衛門殿は佛様、夫婦の中は、ちんく、去したは、此母、お前の様なよい衆の、嫁御にし
ては、似合ふが、此方づれの内にて、飯をも焚にやならぬ身で、肌には、小袖鼻紙は、延でなければ、手に、觸
ず、私等はお寺の奉加さへ、百目の銀は、太儀な、五兩さやらの櫛をさし、鳥甲ほど、蟬鬘出して、太夫の
道中する様に、狭い所を、八文字、其所らあたりの、青物は、踏潰されて、芥になる、其ついで、でも、積つたら、
此身體は、沈みましよ、是が、八百屋のお内儀に、成り逢うか、と似笑ふ、七兵衛に、じり寄り、此方の様に、云
立れば、謔言の手は、あがれども、何所を聞ても、其様に、よい事計りは、揃わぬ物、身共が、嫁は、随分、せ、世體
は、能する歩くにも、八文字は、踏れども、一文字を得引いて、是も、又氣の毒、仁右衛門殿、其許も、些、と物、云
しやれ、女房が、恐さに、黙つて、結構者じやと、囁かれて、あんまり、自慢あそばすな、結構さは、冥加の事、
さうなんさは、とこるなり、せいなんさは、せりの事、半兵衛連、添ふお千代なら、小殿原では、御座らぬか、

若闇の夜のつれおのこ、心中杯を召れたら取返しはならぬぞや、些相談もして見給へ如何にもおしやれば其の通り若い奴等の事なれば、短氣を出すまい物でもなし、腹に物云有るに聞く、孫を愛して遊ぶなら、嫁の惜さも忘られん、ナウ女房、何と思やるを、やわらを入れて占問ば、何様此許は如来様、二三十年身の油絞り溜たる金銀が、忽ち水に成る事を見ながら、嫁が可愛くば、はて何様なりと成れませ、したが私には暇下され、短ひ浮世に氣に入ぬ、顔見て修羅を燃そより、頭剃げて未來をば、助る様に致そふと、弛む氣色はなかりけり、仁右衛門今は詮方なく、半兵衛嘉兵衛愛へ來い、様子は今聞く通りの事、いかにお千代に添たふても、母を坊主にや仕られまい、叶ぬ事と思ひ切れ、扱又嘉兵衛も能く聞け、今では心持直し、身を持そふに見ゆる故、幸男子の事なれば、家督にせんと思ひ付、嫁を追出し半兵衛も、出て行く様に仕かけるを、世間の人に諺はれては、仁右衛門が名が汚れる、一夜も足は留さくれぬ、今出て行けと云渡す、嘉兵衛驚く氣色もなく、お前の詞を請すとも、此方から出て行と思案極めてをる故に、恨には思はぬが、鬨怒なは姑御、嫁一人が憎いさて、大勢に憂目を見せ、嘉兵衛は愛を出て行くを、明日から路頭に立ますぞや、お寺参りの行戻り、鷹を冠つて附廻らば、餘りみめでも有るまいが、夫でも嫁が去たいか、堪忍がならぬかと、恨ても歎ちても心つれなく返事せず、見向もせれば、詮方なく、すつと立て行く所を半兵衛は引留め、ヤレ狼狽者何所へ行く、お隙が出たて去ます、先待て、イヤ暫さて押合へし合引撮て、コレ親仁様、早まり過た御了簡、母の云分一々に、尤至極と思ふ故、千代めは身共が去ました、誰に恨もないからは、家出を致そふ様がない、それに此の者追出せば、結局にお名が出る事、同行業にも今迄の、千代めが扱ひ拾おいて、親仁様へ嘉兵衛をば、託言頼み存るを、聞くより三人點頭合、婆は此方が手に合ぬ、仁右衛門殿は結構者、嘉兵衛事を詫ます、ハテ何様なりと御意次第、あんまり早ふて本意ないぞ、笑ふてこそは歸りけれ、母は兎角の詞なく、奥へはいれば、仁右衛門も、入らんさせしが、立戻り、半兵衛一ツ飲で寢や、酒は愁を拂ふさは、醫書にも書て有るげなき、しほく

として入にけり、親の惠は深けれど、御縁は今に限ぞ、お千代もそつと這出て、共に見送る後影嘉兵衛は何の氣も付ず、辨明にする審の月早ふくく招けども、猶も名残は鶯鶯の泣じを爲れどせきかれて、わつと叫ば漏さじと、打冠せたる毛氈の闇より闇に出て行く。

道行はしのかず

我が戀路は練なき三味よく、なんのれもせて泣明す、見れば思ひの雲の帯く、扱もみじか夜心のせくにござんせ、いやとおしやるまこちやもふ、そうさんせ、二人が中に名取川、おくそれ、ふたりさふたり名取川、濡れて涙の血に染る、田みのく島さ詠おきし、難波の事も是ならん、よしあしのや變る世の、夫も思へば夢現、うつぼを出て兩人連れ、色の外なる色毛氈、ひしき物よそ肩にかけ、つらき名残も今宵ざり、生れ變りて先の世は逆も殿御の故里の、濱松風に誘はれて、離れぬ中の睡言を空になさじと思ひ詰夜の玉ばこ道急ぐ、知死後くるく珠數のかず、煩惱菩提と聞く時は、彼世ばかりの樂に、行んとすれど卯月闇、涙にくれて道見へす、思ひ廻せば果敢なしや、かはせし事の淺からぬ、隔ての雲の重りて、二世を契りし中をさく、月にみづまさ花に風、津村の土手を仇し野の、其佛さ草深き螢かすかに飛つるく、身より思ひの餘ればや、蟲さへ胸をや焦すらん、夜も早いたく更ぬらん、わけさ啼行く杜鵑、誠冥土の鳥ならば、地極の有様語れ聞こ、聞くともいっか、かはらめや、今宵限りの憂命、留て留らぬ三瀬川岸に繫ぎし綱手こそ、弘誓の舟と觀念し、歎く心は曇れども、曇らぬ空の星月夜、あらまほしやと云ふほしも、年に一夜の契りぞや、譬ば雲の上とて、天の川を隔てなば、人のつらさに變らじな絲かけ星のほそく、と付添星や妬むらん、思ひ星さは七夕の、縁さ聞けど儘ならぬ、浮世に似たる類ぞや、光も薄く丑寅に、あれく見ゆる星様は、チ、假の現の星佛、宿星さはいつまでも、縁替らぬ夫婦合、我身の果はすばるばし、ア、思ふまい心から、假令奈落に落ちるも、後に返らじ然ながら、女は最ご罪深く、從ふ道も忘れみづ、あはれみやこのひほの星、結目解けて、濁江に、うかれし事を思ふには、普き

門に立よるも、爰ぞ一念十願寺、念彼觀音の力星、助け給へし諸共に、心をこめて願ひ星、亂れ心の亂るることも、利劔即是の誓ひにて、心易々極樂に、至り至らん此方へと、互に諫め進む身の、勸進所にぞ著にけり、捨るに極し身の上も、そゞろに心細げにて、三途の川は目の前の、夢吹く風のさゞ涙や、空淋しくも名乗てふ、死出の田長を友がれに、さいたら畠の案山子か、と見るに付、聞くに觸れ、彼の世に比ぶぞあぢきなき、半兵衛お千代に、差向い、此勸進所のお寺には、談議の絶る時もなふ、千萬人の參詣に、一遍宛の御廻向も、終に罪障消滅の、法の縁こそ頼もしき、爰ぞ最後の場所と、頓て用意を敷かくる、朱の得の毛氈や、嘉兵衛が呉し其時は、永く身上持ため、町屋住宅すへよとの、心には今引かへて、死出の門出の相むしる、未來は蓮の臺さも、變じて浮む便ぞと、二人靜に座をしめて、人間一生あざなへる、繩の如しと傳へしは、今日の身の上、八軒やで出合し時、互に書置明しあひ、危き命を夫婦共、脱るゝ上は老さきも、諸白髮迄添果ん、思へば愁の文ではなく、結ぶの神の守り札、末頼もしや、目出度やと、祝ひし事も、夢現、覺れば元の書置よな、逆も角ても、死神に、引るゝ縁は辻占の、時のぎふんも、無き物と、身を觀じてぞ居たりける、お千代はいとゞ打萎れ、心中さ云ふ二文字は、流の女に、限りしと、昨日は他に、思ひしに、今日は夫婦が身の上に、飽も飽れもせぬ中を、由ない障得に、隔てられ、空に朽行く是非なきと、平伏てこそ泣にける、半兵衛涙に、くれながら、アゝ愚なる悔み事、兎角二人がくさり合、切れぬ縁を、恨むがよい、女房去るに七つの法、去ぬに三つの教有り、中にも親の氣に入ぬ、女房に、添は不孝なり、又去所なき妻を、去るは夫の義にあらず、疾に暇を遣たらば、孝行の道は立、併其方の親里は、養ふ風情もない、實家すりや去所ない同然、去るに去れぬ教なり、此の二道に、差詰り、斯なり下る有様は、元より覺悟と詞には、言ども漏る露、涙、悼しや十藏殿常さへ、武士の突詰た、氣質ながらも半兵衛は、武士を捨よと、御異見は、我行末を安穩に、あらせん爲の教を、ば、今やみくゝと死したらば、嗚やお悔歎きの程、思ひ遣さへ勿體なや、養親の仁右衛門殿、お氣の弱い生付、此の譯を聞給は、老後の愁持病の種、彼と云ひ是と云

ひ、一方ならぬ不孝の罪、空恐しき身の上さ、くどき立ればお千代も又、ほに現れて叫び入、ア、我とても違ならぬ歎をかくるは同じ事、老たる母の手一ツに、育て上られ人となり、丁度今年が二十四の、年重なれど今日が日迄、是ぞと思ふ孝もなく、終には及に身を果し、愁を見する計りかは、入まへの程世渡る業、老の湯水は誰取て、御心を休むべき、不孝とも拙しとも、我から別ぬ身の上を、許してたべや母様と、邊も知す手を合せ、わつこ計に泣まごふ、半兵衛は顔な上げ、ハア何時まで云ても同じ事、夜明ぬ先に最期をば、心静に遂べしと、西に向ひて手を合せ、利劔即是陀彌號、南無阿彌陀佛と廻向する、お千代は沈む涙さへ、落てかほかぬ小硯を懐中より取出し、斯ならふとは知ずして、西の宮参りして、須磨や明石の名所をも、記し置んと求しが、今引替て書置の、御用意もやと差出せば、ナウよい合點去ながら、我一代の書置は、懐中の状箱、心にも文言にも、死する時節に二ツはなし、其方こそ早ふ書置しや、イヤ私とても先立て、去れた時の書置が、伯母様の手に有るからは、是ぞ末期の留め筆、あだの思ひの數は、逆にも書は盡されず、併辭世の言の葉を、殘し給へと勸むれば、半兵衛うなづき筆を取り、實に世の常に死したらば、野邊の送りの引導に、一句一偈も請べきに、此の儘行ん異敢なさま、和女も一首口ずさみ、自らは是を引導とも、經帷子のぼんげとも、廻向の種と案じつゝ、硯引寄せ書付る、文字もちらちら星月夜、讀續けたる其の歌に、ばるん、と濱松風にもまれ來て、涙に沈むさくんだの聲、お千代同く斯計り、古へを捨てや、義利も思ふまじ、朽ても消ぬ名こそ惜けれ、と兩首一所に巻納め、半兵衛は懐中より、件の状箱取出し、辭世に相添へ前に据へ、思ひ入たる體なりしが、胸押寛げ、脇差を、ずらりさ抜て脇腹より、前へ半引廻す、お千代は取付聲を上、こは情なの御事や、女は心愚にて、覺悟してさへ、狼狽るに、一人先立給ふのは、扱は我身を捨るのか、恨めしや、膺愁と、悶へ慄ひて、歎きける、半兵衛些とも、惡びれず、女心の淺はかさ、是程の手で死んとは、愚なり、と、様子有ての切腹、抱帯を二つに切り、其の一筋にて、切口を急いで捲けと、聞より早や、あはてと、解く抱帯、心は何と白縮、用意の剃刀取出し、急狂

ふ手も慄いながら、やう／＼中より押切て、夫の肌を引廻し、しつかと縛てう／＼と、顔を詠めて涙ぐむ、半兵衛詞釋かに、和女が最期の顔も見す何しに先立行くべきぞ、此の脇差は某が、此の地へ養子に来る砌、主君よりの拜領、武士の刀は忠義を旨とし、町人は又禮義にさす、大切の一腰を武道にも用ひず、禮義にも係らず、様はしき兩人が最期に計り使はん事、勿體なし冥加なし、武士の眞似して引廻すは、主君への追腹山脇氏に立戻れば、親十藏が封印も、破つて破らぬ道理なり、是からそちと死ぬるのが、今の八百屋の半兵衛ぞと、齒を咬しめて息をつき、是をお千代、其の半分の抱帯、和女が腹にしつかと縛め、四月になるかならぬ子に、切て末期の祝ひ納め、世にあるならば、來月は、帯の祝ひよお姥よと、左も勇しくあるべきに、明日をも待ぬ今の身は、五月とも産月とも、つゞめて名残を惜むぞと、そゝる涙にくれにける、お千代は帯を取上て、しやくり上／＼、前後涙に沈みしが、生れぬ先に行末を、かみかたかれと緋帯、それは世に有る人の事、是はそれとは引替て、永き別れの親子の縁、斯くなる身とは知すして、嬉しや子をば産だらば、二人が中の樂に、明暮抱つ賺しつの、愛らしい事見る度に、憂が中をも打忘れ、夫婦は猶も親みの、嫌さなり一ツには、世に子を持つ世帯染、姿形をも扮すぞや、然ば我が思はずの、伊達も自然と止である、姑御にも氣にいらう、あら嬉しやな産土様、平産させて給はれと、願ひし事は、徒に、身持ながらに消て行く、名残は我身一つにて、別れば二つ人間の、胤を斷のも同じ事、何の科なき腹な子を、共に死なする不便さよ、許してくれよと詞さへ、なく／＼帯を取上て、肌を廻し引締て、顔見ぬ母が形見ぞと、かづばと伏て泣にける、早引渡す山かつら、寺の晨鐘告渡れば、卒や最期の時こそ、座を打拂ひ身構す、お千代は覺悟の面相も、名残の花の婀娜に、露持餘る風情にて、手を合せてぞ座しにける、半兵衛莞爾と打笑ひ、ナ、出來したり潔よし、未來は一所ぞ迷ふまじ、今ぞ限りと脇差を取直せしが、流石又、永き別れの顔面に、心も腫ぎ胸たゆぐ、差付てはためらい、突んとして堪兼て、暫し時刻を移せしが、なむ三寶おくれじと、氣を取り直し一心に、南無阿彌陀佛と、双の先咽にぐつと突

通せば、あつこ計に身を闊へ、手足を伸べて苦しげな中にも、夫を打守り、打守りたる一念の、輪廻の心ぞ果しなき、然ども四ツの借物を、返し仕まへば油なき、燈火消る如くにて、がつくりと伏す有様は、哀にも又惜かりしいで追付んぞ半兵衛は、主の由縁の一尺五寸、最後の際ぞ押戴き、唯一刀に咽笛を、貫ぬかれて死したりけり、生年既に三十八、花過頃の若緑木の下閣は青物屋、町人なれど古への、ぶだうの燈掲げたる、末世に名こそ照しける。

傾城無間鐘

淺香今川道行

流れては、妹背の山の中を行く、流れの末の今川や、戀の深みに沈めども、外見ばかりは淺香の前、浮世渡のたつきとも、僧し憔悴て出給ふ、心の内こそ憐なれ、只今當町を速に進め奉るは、紀州渚の郡加田、淡島大明神様の、み御供洗米の燈明の勤なり、抑淡島大明神様の由來を詳しく尋ね奉るに、忝も天照公太神宮様の第六番目の姫宮にて、渡らせ給ふなり、姿も云ひ形も云ひ、あら美しやしほらしや、しつさりばつさり、ちよちよいくの濡者でござんすなり、御年十六歳の春の頃、祝言目出度う住吉大明神様の、一の後には備はらせ給ふこと疑ひなし、あらいたはしや、神や佛の御身にさへ、五すい三れつと申して入つの苦み候を、煩き病も思召し、榎の獨木割舟に、綾の巻物神樂の太鼓を相添へ、三月三日と申すに、堺七度の濱より押流されさせ給ふさかや、心の麻株わくせきと、絡め纏ひて藤の森、花紫の色外に、世をや厭ひて様變て、身は黒染の仇櫻枕の露に、吳竹の伏見も後に真盡刈る、夜殿の情人知らじ、ア、我までも游女の筆に云はせて書盡す、其の文月の七日の夜、君と交せし睦語の、比翼連理の言の葉も、枯々になる天の川、逢ふ夜逢はぬ夜數へくる、佐田の瑞籬神寂て、舟も魚荷と争闘も、都の手振削掛け、後は目出度う棹の歌憶るく我は捨小舟、思ひ二に三津の濱、浪花につけて身を怨む、松虫塚に音を比ぶ、右手は生駒葛城や、安部野に續く岸の松、住吉の橋の反たは、格氣からかもきからかも、きには

情氣をかけれども、情氣からかも知らぬ人、十七で嫁入初めて髻小枕落した、落したるかや忘れたるかや、夜寝よその約束か、今の世の中色になり、人の心は仇惚の、濡手で掴む淡島様、諸人愛敬祖徳神御信心ある娘御に、御縁綴よしの生よしの、殿御を持つて諸白髮妓様方は大盡が、取付吸付く月の内、一夜の暇も有らせじその、御誓願にて候と、口に出次第言ひ次第、問ふつ語りつ行く程に、女の旅路遅々、道抄行かず足掻の間近き程とも思へず、遠里小野にぞ着き給ふ、南無阿彌陀佛くく、今川可笑さ堪へかれ、コレ僕殿、意氣筋張らずと可はいの、何じや身共を僕さは、三衣を着して居るものを、近頃鹿相千萬な、爾なら蛤と云ひましょか、ヤイ非修非學の女よ、既に加來の金言にも、阿彌陀は錢程光ると有り、錢がなうては三人が、鼻の下が干上るが、何とひつとも云ふて見や、南無釋迦如來様阿彌陀様、淺香傍より笑止がり、又々短氣が起つたな、何故いとしげに云込める、ハハハハ、何の實から申しましよ、ついに新様な辛き目は、なされもつけぬお二人じや、お心細うござらうと、思へば涙が溢れます、私が泣いたら皆様の、おむづかるも存する故、あられぬてんがう申します、死にも角にも一刻も、早う旦那に逢ひたさに、人の獨語私語迄、氣を注げて聽く故に、最前新地を通行する時、今川殿が二階じやと、云ふ聲を聞きました故、ずくくと駈上り、今川様と叫んだれば、座頭が琵琶を差置いて、今川檢校是に居る、何の用じやと答められ、手持不沙汰に逃げまして、後な新家で尋れたりや、角力取の今川を教へましたと、戯れも、奉公振に夕日影、宿取るあだでもござらぬと、力落せば今川は、喃氣遣を爲給ふな、まあ牛町か一町で、我親里の氣散は、水風呂焚いて炬燵して、旅草臥も休ませましよ、奥様お出さ先立てば、廣太八勢ひて勢ひ口、天道様大日様、一蓮託生にしてくださいませ、南無阿彌陀佛くくくく、と、共に逃り行く人目さへ遠里小野の佗住居、扉框も鎖まで出歩けど、盜るゝ物も内證は、竹光らしい刀掛、是浪人の證なり、三人の人々は彼處に尋れ来りつく、今川内へすつと入り、父様私じや母様と、呼べと答ふる者もなし、淺香外より差覗き、ハアお留守ならよいはいの、又明日でも來ませう

と、呼べば茂太八不承顔、留守なら留主と先達で、飛脚に云ふてこしたが、可い武士ではなうて無縁な、念佛を棒に振らしたと、錫杖を投付くる、今川打笑ひ此方が尤じや、近所へがな行かれたもの、親子の間に遠慮はない、入つて休息んでくださんせ、ソレソレ、其で落著いた、奥様お入り遊ばせと、連立ち内に入にける、今川は已亭主顔、下差燃て釜に水、煎茶は何處に在ることか、障子を開けて、コレハ、母様爰に寝てござる、深夜業べも遊ばしたか、申し、醒せども、揺動せと答なし、被せたる衣を引除れば、襟に滴る血の雫、悲しや母様死んでじやと、驚聲に主従も、立寄り見れば、此は如何に、自害と見て咽吭を、二三寸程切割いて、消れて間の有る魂は、起回る可きやうもなし、周囲を見れど遺書も、死骸に抱附き、今川は聲を揚げ、扱あさましのお姿や、死ぬる程なるせつなさは、我身計と思ひしに、お前は何をか、くばかり、浮世の中を見限りて、空しく成らせ給ふぞや、持病に悋氣は有ながら、お年老られてさやうなる、はでな最期は爲されまじ、責しき上に我子をば、預けし故に物事が、足らばぬからのあらましか、度々毎のお文にも、孫が顔見りや一入に床しい戀しい懐しいと、穢言計遊せしが、今日來る私を待かれて、何故喃死んで下さんした、母様顔を見せに來た、唯一言物云ふて、お目をも明けて給はれと、恨み歎くぞせつなけれ、淺香も共に涙含み、別離は同じ道ながら、非業の様に思はれて、殘多きも一入に、心の内のお哀しや、チ、理や道理やと、抱き擁いて、撫擦り、慰みかれつ諸共に、傍も離れず凝視れば、死骸の上に打覆ふ、小袖に付きし紋所、抱澤瀉に二ツ引ばつと、計に驚きしが、さあらぬ體にもてなし、覺悟の上とは云ひながら、醜態もせぬ容顏は、男に勝るいさぎよき、昔は如何なる人やらん、奥床しやと尋れば、今川涙の隙よりも、憂きも辛苦も同じ身に、何かは隠し申すべき、父は近藤某とて、仙洞の上北面、母は高貴なる藤原の縁はあれど、理木のお愧しく候なり、ム、成程、くさもあらば、藤原氏も近藤も、常紋は皆藤の丸、其にあれる小袖には、變つた紋が見えます、由緒ばしさぶらうか、如何様見馴れぬ紋所、殊更今の身の上には、結構過ぎた春小袖、誰ぞやつたか知りませぬ、チ、知らしや

れぬ善の事、抱澤瀉は自が、親久國の家の紋、二ツ引は足利の、御所の御紋を拜領し、二つを一つに取合はす、此の紋所を著る者は、久國ならで外にはない、其の衣服が有るからは、親御は惡に、一味の人茂太入必ず油断をすな、敵の住家にうっかりし、足は留めて居られまいと、身拵して立行くを、今川秧に縋付き、留はしませぬ遣りましよが、何故私も參れその、お詞はかけられぬ、ム、其方に如才はなければ、大惡人の娘をば、伴侶にはならぬと振放せば、聽て向ふに立塞り、奥様何うしたお詞じや、お前も私と芥子程も、重い輕いはない身じやに、惡人呼ばくり遊すな、淺香詞に針を持ち、今川其は慮外で有らう、君傾城に成下る、性根の腐つた其の方と、臺らぬ武士の女房と、一ツ口に云はれうか、今川はつと差俯向き、エ、口惜しい無益しい、何故に浮川竹の、動の身と成つたるぞ、父は惡人母様は、思ひもよらず死別れ、二世さかけたたる我夫を、尋れ違ふべきしるべきへ、なき身の果のあさましやと、彼處へどうも臥轉び、消ぬかへりてぞ泣にける、淺香も哀催せど、心弱くて叶はじと見知らぬ態に立出づれば、又起上り手を上げて、奥様待て下さんせ、性根の腐らぬ證據には、親をば討つて見せましよと、叫べば聽て駈戻り、今やう合點が行きましたか、其の返答が聞きたさに、故と詞は荒せしぞや、見遁しにもさ言ひたいが、工の程が覺束ない、お家の大事になる時は、臣下の道が立たぬ故、此方が斬らにや、主従が手にかけて討ちますぞや、御念に及ばぬ去ながら、惡事の品も知れぬ内、はやまつて下さんすな、必うちやく斬りますぞ、互に詞固め合ふ、心悶々茂太入も、杖に仕込みし鎧提げ、二人潜るゝ障子の内、外も生死の親子の縁、今逢ふて今別るゝと、知らでや歸る平治兵衛、久振でも見忘れず、娘も能う來たな、お伴侶は何處に御座なさるゝ、イエ、伴侶はござんせぬ、ハレ他宿がなされたもの、三人などは寢らるゝに、ハア異な事を云はしやんす、何の伴侶をば誘ひましよ、ホ、爾ならば先其の通り、母が其方に寢て居るは障子を開けて逢ふて來い、イヤモウ緩と逢ひませう、何故又障子が明けさむない、其でも後に逢ひたいもの、ム、我や母に逢ふたであらうが、なアイ最前逢ひました、然であらう、こりや

お主は父が可愛か、但は又母が最愛しいか、異つた事を云はしやんす、孰に愚はござんせぬ、イヤ〜父と母とは善と悪、心に雲泥違が有る、孰に従ふ言ふて見い、今川すつと差寄つて、定めしお前が善で有る、イヤサ身共は大悪人、預り置いた茶々丸も、久國へ遣した、お主も卒れて参らうと、御契約致いたが、應こは云はぬ容貌じや、例令縛絡けても、渡さにや分が立てられぬと、徐々立つて後なる、早繩取れば今川も懸けたる刀を脇挟み、コレ父様、お年が老れば其程に、心が僻むものかいの、悪事に一味なるくを、異見しかれて母様は御自害なこそなされたもの、其にもなほらぬ此方様に、無益な諫は言ひますまい、私にや夫が御座るぞや、伊勢新三郎長氏まで、武士の女房でござんする、搦めだてなぞなされたら、親さは云はさぬ斬りますぞや、ハ、義理ばつて面白い、親を殺すは夫へ義理、子を搦めるは武士の義理、情縛つて卒れて行く、寄らつしやつたら切りますぞや、縛るぞ切るが、縛るぞさぐるり〜と附廻れば、今川堪へず、抜く太刀を、其の儘振取り踏倒し、危く見ゆし後より、障子越しなる、鑓刀、兩の脇つば刺貫され、うんこ計に反りかへる、今川見る目もいふせくて、父様怨みて下さんすな、胸の中なる悪心が、其の身を責むると諦めて、潔う死なしやんせ、天の罰さは云ひながら、餘り無殘の姿やと、髷に喰附き纏附き、闕へ歎くぞ哀なる、平次兵衛打笑ひ、娘愚なことを云ふ、障子の内に兩人を潜せしことは最前より、平次兵衛が知つて居る、男へ立つる義理の太刀、首差伸べる筈なれど、親を討つたる天罰が、報はんこの悲しさに、待設けたる他人の鑓、何程嬉しい満足な、お家の大事をお主等に、知らせたく思へども、互に言ふな言はじ、逆、固め合ふたる平次兵衛、眼の明いて在る中は、却々人に語らぬぞ、ア、鑓先が鈍いやら、膽にあたらで死難い、兩人の衆遠慮はない、まそつと剗つて剗つて、望むに任せ左右より、胸先かけて突きかへせば、流れて落つる紅葉河、下は血に泣く涙川、親は泣かれど、今川は、わつと計に號叫ぶ、ヤレめる〜と轟しい、嬉しや最期が近付いたか、人顔がもう見難い、獨言必ず傍で聞くまいぞ、某武士の其の背慰にせし畫の道が、今は渡世の種となり、自然と上手の名も高く、久國

殿へ召出され、お成座敷の繪を描きしに、狩野雪舟にも劣らぬと、御褒美の上宣ふは、何と昔の名人は、馬を描けば草を喰ひ、猫を寫せば鳴いたと云ふ、其方杯が筆先にも、奇妙が有るかと尋ねられ、烏滸がましくは候へども、皆一心の所爲なれば、有るまいものでも候はずと、御返答せしに、近くへ寄れと招寄せ、久國出世の望有り、無間の鐘を其方が、心を籠めて寫してくれ、本懐を達したら、褒美は望に任すとある、此の身は老木のこゝなれば、何の願も候はぬが、唯一人の男子の孫、お取立に與らば、兎も角もと答ふれば、幸に久國が、養子分に致さうと、證據の爲の墨附は、此の帯の中に有る、其の上當座の要用とて、金五十兩頂戴し、直に都を旅立ちて、佐夜の中山分入りしを、怪しき者と擗められ、既に御前へ召出され、今川殿の御異見は、胸に徹へて忘れぬと、武士の約諾極めし上、鐘の形は見て戻る、三日が内断食して、頭の血を取り墨に混ぜ、一念の筆先に、孫が出世を祈願して、思ひの儘に描寫し、平次兵衛は悦べど、女房は取敢へず、其の身への貧福は、神佛の力にさへ、叶はぬと聞くものを、其の上應ぜぬ幸は、子孫迷るゝ端さかや、娘が方へも言ひ遣りて、談合づくが宜からうと、異見するのも聞入れず、久國方へ傳へしに、今朝自身來られて、向後一家の證とて、御紋の時服をくれられて、孫も受取り繪も受取り、歸られて半里もはや行かれんと思ふ頃、家來に申越さるゝは、貴殿の娘今川こゝ、淺香と云へる女房と、茂太八と云ふ僕奴と、今晚か、明晩は其の邊へ參るべし、屹度擗めて出せと有る、何とも合點行かざる故、使の奴を縛りあげ、大竹以て打撲けば、あら勿體なや、恐しや、孫茶々丸を隠庇い置き、大將の子と偽つて、權威を附けて後々は、國を奪はん工との白狀を聞くよりも、南無三寶欺されたか、取戻さんと駈出しが、多勢の者に取圍かれ、犬死しては誰有つて、訴へ報す者なしと、宿へ歸れば、女房は、咽の邊を切割いて、臨終の體に見えたるが、某が手を採つて、言ふて、同らぬことながら、廉相な事を遊ばした、近藤平次兵衛こそ、反逆人の一味よと、世間の人に誦はれては、先祖末代萬々年、家名の廢る悲しさに、否々今度の惡心は、女房の所爲じやと云はれん爲、私や自害して死にますと、云はれた時の愧しと、娘

推量してくれい浮世に心は残られど、今日來る娘に逢ひたいと云ふた計で程もなう、かつたりと落
入つた母は世界の大善人世に在る限りは同向せい、平次兵衛は無道者言出しもすな泣もすな、親孝
行を思ふなら茶々丸を取戻し、反逆人の悪名を、何卒雪いでくれたらば、千僧萬僧供養より草の蔭に
て悦ばう、懺悔と云ふは是計、南無阿彌陀佛と云ふかと思へば息絶れて、彼處へかつげと臥にけり、今
川餘り堪へかれて、共に死なんぞ泣狂ふを前と後に取附いて、呵つても見つ泣いても見つ漸諫め立
出づる、行くは三人留るは二人連なる冥途の旅、又逢坂の關ならで、遠里小町油賣戀せぬ人は嬉しき
も、物の哀も知るまじき、皆人語り傳へける。

竹豊兩座の對立より
して俄に緊張し始め
た斯界の空氣

竹豊兩座の對立が斯界興隆の勢を激成するの動因となつたことは云ふまでもなし。
此の時よりして斯界の空氣は俄に緊張し始めたのでありし。太夫、三絃、人形、作者に至
るまで、一座を擧げて眞面目なる氣分となり、努力となり、門左衛門が筆を呵して、年々數
種の新作を供給して竹本座の爲めに勢援すれば、海音も全力を傾けて之れに當り、西竹
本座が竹田出雲代りて座元となり、人形の衣裳道具立を改良し、出語り出遣ひを始めて
人氣を集むるの策に汲々たれば、東豊竹座も之れに倣ふて人氣吸收策を講じ、竹本座が
一たび曾根崎心中に成效して大入り大當りを取れば、兩座の作者は争ふて世話物、心中
物、淨瑠璃に筆を執り、徳兵衛心中重井筒、清十郎笠物狂、丹波與作心中二枚繪草紙、茂兵衛大經師、
おなつ波の鼓、卯月の正月、後日卯月の色上、關小まん待夜小室節、兼之助心中萬年草、
清十郎五十年忌歌念佛、助六千日寺心中、源五兵衛蘆分舟、次郎兵衛掛鯛心中、おなつ心中及は
水の朔日、梅川冥途の飛脚、嘉平次生玉心中、以上槍權三重帷子、以上八百屋お七歌祭

心中物淨瑠璃の流行
より惹きて世話時代
物淨瑠璃の流行とな
る
構想作意の一變

文彌市「梅田心中」高「椀久末の松山」笠屋三勝二十五回忌「心中戀の中道」椀久熊谷笠「油屋お染袂の白綾今宮丸腰連理松」七枚起請吾妻雛形以上孰れ等所謂純世話まぜわ的の淨瑠璃を連發上場するに至り、此の傾向は惹いて時代物淨瑠璃の作意の上にも及び、純時代物淨瑠璃は次第に變じて半時代的となり、半世話的となり、世話時代物淨瑠璃の流行となり、かくて淨瑠璃の作意構想の上にも一轉機を作るに至つたのでありし。

按するに竹豊兩座の對立は偶然に似て必ずしも偶然ではなかつたらうと想はるゝのである。一座の創立を許した義太夫の意中は付度するに由なしと雖、一流の祖一派の開祖としての彼れ義太夫の立場より稽へ來れば、其の間何等か遠き慮の存するものありしならんと、想はるゝ節もなきにしもあらずである。彼は早くも義太夫節の前途に就いて慮る所ありしなるべし。竹本一座と限りては、多年の間には行違もあり、仲間もめもあり、何時かは分裂の運命に遭逢するの機會もあるべしと豫想もし、憂慮もしたるなるべしと思料せらる。彼は無論彼が遺風をして長へに絶わざらしむるの方策として、二座對立も可なり、三座對立も可なりとの見解を有したりしならんと想はるゝのである。されど當時彼自ら直營興行しつゝ在りし竹本一座の興行成績さへ、尙ほ且、「三五の十八」なる算盤合はぬ不成績つゞきにして、頗る焦心快惱しつゝありし際なりければ、無論別座の創立などに、思を廻らすの餘裕とては無かりしなるべし。されば采女の若太夫が別派創立の意思を懷いて彼の下を去るも、別段惡感とて有せず、寧ろ其の爲すに任せて、姑く形勢を觀望しつゝありしものゝ如く

に想はるゝのである。

豊竹若太夫は實に別座創立の首唱者としては逃へ向きの候補者なりし。生來の美音に加ふるに頗る機才あり、往々ゆぐは一家を成すべき好望の若者なりしことは、彼れ義太夫も疾くより看取したる所なりし。されば若太夫が堺の旅興行より歸り舞土心こころ中泪の玉井たまひを看板にして興行を始むるや、十分の興味を以て餘所ながら其の成功如何を觀望して居たのであつた。義太夫の本意が當初より確定的に、若太夫を以て別座創立の候補者として待望して居たのであるか否なかは疑問である。恐らく彼は其の宿志たる非一座獨占主義の見地よりして、單に好感情なる傍觀者として暫く若太夫の爲すが儘に放任し、徐ろに形勢を觀望して居た位のものであらうと想はるゝのである。

當時義太夫は竹本座の座主にして同時に一座の頭取たり、太夫をも兼ねて居たのであつた。されば座元として、將又、座附太夫としての彼れ一己の立場より見れば、豊竹座の創立は決して喜ぶべき事柄でなかつたことは勿論である。されど彼には竹本座の座主たり、竹本座附の太夫たるの外、別に斯流の開祖たり、弘通者たるの責任と苦心とがあつた。一座の盛衰、營業上の損得と云ふことも大事は大事なれど、更により以上の大事なる、斯流の普及、興隆、維持てふ根本的案件に就いて思を匝らさざるを得なかつたのでありし。されば豊竹座の創立に對しても、惡感どころか寧ろ、好意、好感情を以て迎へて居たりしことは、想像するに難からざるのであつて、斯流の開祖とし

竹豊兩座の興行年表

ての彼の偉大なる所以も亦此に存するのである。

此の期に於ける豊竹座の勢力は、無論竹本座に對して對等の地歩を占むるまでには到らざりし。されど兩座對立の勢に依つて挑發された市中の人氣は、此の期の末に至るやいよゝ興奮蒸騰し來り、斯界古今の名人と呼ばれたる吉田文三郎出で、竹本座の舞臺に上ばり、其の拔群なる伎倆と巧みなる興行方策とによつて更に時人の熱度を煽るや、俄かに沸騰して湧き返へるほどの盛況を極むるに至り、次の四十年の最盛時代を現出するに至つたのであつた。

左は竹豊兩座對立後の十五箇年間の興行年表である。

竹豊兩座興行年表 自元祿十五年七月
至享保二年

竹本座

豊竹座

外題	作者	興行月日	外題	作者	興行月日
加古教心七墓巡	近松門左衛門	元祿十五年七月十五日	末廣十二段	紀海音	元祿十五年五月二十八日
新一心五戒魂	近松門左衛門 <small>なる</small> <small>っ如し</small>	同年九月九日	心中涙の玉の井	作者未詳	
西明寺殿百人上臈	近松門左衛門	元祿十六年三月四日	源氏烏帽子折	(近松作)	同八月朔日
<small>春堺より奈良へ出興行</small>			金屋金五郎浮名額	作者未詳	
前日本王代記	同	同年五月七日	小野小町都年玉	紀海音	同九月九日
切曾根崎心中	同		新百人一首	同	同十月十五日
<small>近松世話浄瑠璃心中物の始め古今の大當り也</small>			新版兵庫築島	同	元祿十六年正月七日
前在柄平太	作者未詳	寶永元年正月十五日			
切源音兵衛薩摩歌	近松門左衛門				

前甲 賀三郎 近松門左衛門 寶永元年四月十六日

切おふさ 心中重井筒

用明天皇職人鑑 同 同年三月二日

此の興行より竹田出雲筑後縁に代りて座元となる。人形衣裳道具建等改良せらる。

大切り鐘入の段は太夫筑後縁、ソキ竹本浪花、三絃竹澤權右衛門、おやま入形辰松八郎兵衛にて出語、出遣、之れ出語出遣の始め也。

女五枚羽子板 同 同七月十四日

傾城反魂香 同 同八月十五日

前木曾軍記 作者未詳 同十一月二十一日

切おなつ笠物 狂 同十一月二十一日

義經將基經 近松門左衛門 寶永三年正月二十五日

前元服會我 同 三月二十七日

兼好法師物見車 同 同五月五日

基盤太平記 同 同六月朔日

會我扇八景 同 同七月十五日

おさん 大經師昔曆 同 九月二十一日

茂兵衛 同 寶永四年正月二十日

吉野忠信 同 同二月十五日

堀川波の鼓 同 同二月十五日

井筒屋源六戀の寒晒 紀海音 元祿十六年二月十五日

今様殺生石 海音作なるべし 同

春末 堺へ出興行。

坂上田村麿 紀海音 同 五月五日

今川青砥刀 同 同七月十五日

了後青砥刀 同 同七月十五日

信田森女占 同 同九月十一日

熊生三ツ子盃 作者未詳 同十一月朔日

佐々木大鑑 竹本座淨瑠璃の増補 寶永元年正月二日

東大全 紀海音 同二月十五日

八百屋お七歌祭文 同 同六月朔日

いろはノ始千丈ヶ瀧 作者未詳 同

女長田阜櫻 同 同七月二十日

傾城富士ヶ嶽 同 同十月二十一日

美濃寝物語 同 寶永二年正月二日

近江寝物語 同 同二月十五日

三井寺狂女 同 同四月八日

泉州枕物語 同 同七月十五日

傾城二河白道 同 同九月九日

會我二部經 同 同九月九日

前今川了俊 同 四月二十一日
 切おがめ 卯月の紅葉
 前根元會我 同 六月朔日
 切後日卯月の色上
 前源氏十二段 同 六月二十四日
 切丹波與作 待夜の 小室節
 切關小まん
 酒呑童子枕言葉 同 九月九日
 同 寶永五年
 四月十六日
 お玉女 心中萬年草 同
 黎之助心
 春 奈良及伊勢へ、秋冬 備中宮内、藝州宮島へ出興行。
 前今川制詞條目 同 寶永六年
 正月二日
 切おなつ 五十年忌歌念佛
 切清十郎
 上卷 六千日寺心中 作者未詳 同 三月三日
 前新天鼓 同 四月八日
 切おまん 蘆舟
 夏 伊勢へ出興行。
 紅葉狩劔本地 近松門左衛門 同 九月九日
 冬 伏見中書島へ出興行。
 會我虎ヶ石麿 同 寶永七年
 正月二日
 同 正月二十三日
 次郎兵衛掛鯛心中 同
 同 三月四日
 大原問答青葉笛 同
 同 五月六日
 百合若大臣野守鏡 同

播州會根松 紀海音 同 十一月十八日
 傾城躑躅岡 清水三郎兵衛 寶永三年
 正月九日
 前三井寺開帳 紀海音 同 三月四日
 切男色加茂侍 錦文流
 前元服會我 作者未詳 同 四月十二日
 切お高市梅田心中
 聖德太子舍利の都 紀海音 同 六月二日
 傾城千日鐘 作者未詳 同 七月十六日
 秋 讃州より宮島へ出興行。
 増補富貴會我 同 寶永四年
 正月二日
 増補日向景清 同 同 三月三日
 今様女袖鑑 同 同 五月五日
 同 七月十六日
 頼朝七騎落(三度目)
 秋 堺より紀州へ出興行。
 身替問答 同 同 十一月十八日
 今様西行物語 同 寶永五年
 正月二十日
 同 三月三日
 前新利屈物語
 切腕久末の松山 同
 同 七月十五日
 秦始皇帝太夫松 同
 同 七月十五日
 山榭太夫戀慕流 紀海音 同 十月十三日
 前藍深川(三度目)
 切敵打難波錦 作者未詳 寶永六年
 二月五日

心中及は氷の朔日 近松門左衛門 寶永七年六月十六日

夕霧阿波の鳴戸 同 七月二十四日

新いろは物語 同 正徳元年正月九日

梅川忠兵衛冥途飛脚 同 同 三月五日

吉野都女楠 同 同 九月十日

前傾城掛物揃(二段目まで) 正徳二年三月四日
切丹波與作待夜の小室節上中下(二度目)
切關の小人
若竹政太夫(此の時竹本を改む、後ち二代目義太夫也)始めて出座、道中雙六の出語りを爲す。

弘徽殿鶉羽産家 近松門左衛門 同 五月五日

五百番の内姫 山姥 同 同 七月十五日

傾城吉岡染 同 同 十一月二日

河内國姥ヶ火 松田和吉 正徳三年正月二日

天神記 近松門左衛門 同 二月二十五日

彦太夫(後に大和太夫)始めて出座。

孕常盤 同 同 七月十六日

新選大職冠 同 同 十一月朔日

富士親玉嵯峨錦 紀海音 寶永六年六月朔日

笠屋三勝二十五回忌 作者未詳 同 八月二十三日

赤染衛門榮化物語 (近松作) 同 十月三日

頼光新跡目論 紀海音 寶永七年正月二日

心中戀の中道 作者未詳 同 三月二十日

佐與中山夜泣石 同 同 七月十四日

椀久熊谷笠 同 同 十月十六日

前本朝五翠殿 (近松作) 正徳元年正月二十日

切淨瑠璃古今序 紀海音 同 四月八日

油屋お染袂の白綾 紀海音 同 四月八日

北國源氏金の山吹 作者未詳 同 九月九日

平安城細石 紀海音 正徳二年正月六日

前藤戸の先陣 作者未詳 同 四月八日

切心中丸腰連理松 同 同 五月十七日

前信濃源氏 同 同 五月十七日

切新艘太夫丸 同 同 五月十七日

前松浦五郎 同 同 七月十六日

切七枚起請吾妻雛形 同 同 七月十六日

八幡太郎東初梅 紀海音 正徳三年二月一日

傾城國性爺 同 同 五月六日

此の興行月日疑はし、『傾城國性爺』なる命題は、近松の『國性爺』を振りたるものなるべければ、享保以後ならざ

相模入道千匹犬 同 正徳四年四月八日

横口娥歌加留多 同 同 八月朔日

竹本筑後様八月中旬より病氣なりしが九月十日遂に歿。

嵯峨天皇甘露雨 同 同 十月十五日

此の興行後大和太夫退座。

蔡静胎内拮 同 正徳五年正月二日

春 竹本座伊勢へ行く。

前持統天皇歌軍法 同 同 八月朔日

切嘉平次生

玉心中 同 同 十一月朔日

父に唐土 母に日本 國性爺合戦 同

九仙山、竹本頼母、内匠理太夫、竹本文太夫、三段目、竹本政太夫、豊竹萬太夫、竹本難波、三絃 鶴澤三二

此れより以前は淨瑠璃短かく間の物にのろま人形さうけ

或はからくり有り、國性爺以後はかくる事もなし。

此の興行三年越十七箇月に涉り古今稀なる大入なり。

種は日本 國性爺後日合戦 同 享保二年二月十五日

此の淨瑠璃甚だ不繁昌にて、切に曾根崎心中を附けて語る此の時はじめて舞臺大幕の上に小幕を引く。

人形遣ひの名手吉田文三郎始めて出座。

曾根崎心中 (二度目) 同 同 八月朔日

鎗權三重帷子 同 同 八月二十二日

聖徳太子繪傳記 同 同 十一月十六日

竹本文太夫退座。

るべからず、恐らく享保元年ならんか、姑く聲曲類纂、外題年鑑の所載に従ひて茲に掲ぐ尙ほ稽ふべし。

秋 京都四條へ出興行。

仁徳天皇萬年車 綿文流 同 七月十五日

前播州會根松 紀海音 同 十月二日

切傾城三度笠 同 同 十二月朔日

兔鹿毛武藏鏡 同 同 正徳四年四月朔日

小敦盛花勒 作者未詳 同 同 七月十五日

夏堺へ出興行。御前會我姿富士 紀海音 同 同 十月朔日

愛護若峙箱 作者未詳 同 同 正徳五年正月二日

吉野忠臣藏錦著長 同 同 同 五月五日

傾城思升屋 紀海音 同 同 六月二日

記錄會我玉笄鬘 戸川不鱗 同 同 九月十日

天智天皇豐年秋 作者未詳 同 同 二月朔日

鎌倉尼將軍 紀海音 同 同 同 七月十六日

花山院都巽 同 同 同 五月二十二日

甲陽軍鑑時世粧 同 同 同 九月二十八日

西行法師墨染櫻 錦文流 同 同 同 五月二十二日

照日前都姿 作者未詳 同 同 同 九月二十八日

昌隆時代の四十年

其の前期の三十年——竹本座の中心人物『國性爺合戦』興行後の竹本座の大異動 在來の顔振の一新 一種の老朽淘汰 孰も有力なる後繼者 豊竹座も亦多士濟々なりし 近松の死竹本座の打撃 出遣ひ出語りど人形の工夫 竹本座に上場したる幾多の佳作『夏祭浪花鑑』に文三郎の凝らした工夫 禮拜齋戒して勤めた『菅原傳授手習鑑』當時の盛況

『假名手本忠臣藏』の紛擾 『忠臣藏』の上場 紛擾の主題 雙方の主張 紛擾の類末 東西兩座の混亂 此

太夫の後を承けた竹本大隅椽

後期の十年 斯界の最盛 爛熟時代 竹豊兩座の中心人物 空前の盛觀 吉田文三郎を中心とした前

期三十年間の人氣 太夫の聲と伎で人氣を左右するの外なき 淨瑠璃本位時代となる 歌舞伎には當れど操りには當らざ

りし『雙蝶々曲輪日記』 駒太夫と麓太夫とで呼んだ『祇園祭禮信長記』 豊

竹駒太夫

合作淨瑠璃 兩座の作者 僅々十箇年間に連發した佳作 著しく歌舞伎脚本化した淨瑠

璃正本 地の文は次第に減じ詞の部分ばますます加はる 操り芝居敗類の素因 近松作正本の改作 要するに三人寄れば

文珠の智慧』の出し合なりし 淨瑠璃の型式の一變 當時の歌舞伎芝居 當り淨瑠璃と

なれば直に歌舞伎に奪はる 木偶よりは活きた役者 合作淨瑠璃の流行 合作もの

の長所 勢ひ詞本位の淨瑠璃 千變一律の「こ」の字受けの格法 殆ど詞ばかりの淨瑠璃正本 合作淨瑠璃の長所と短所を併せ見

るべき適例『管原傳授手習鑑』

竹豊兩座の興行年表

享保二年より寶曆九年に至る大約四十年は、義太夫節淨瑠璃の昌隆時代にして、寛延元年八月『假名手本忠臣藏』のもめ事より、東西兩座の入れ替りとなるに至るまでの三十年を之が前期とし、爾後の十年間を之が後期とする。

前期の三十年 竹本座の中心人物

昌隆時代の前期三十年間に於ける西竹本座の中心人物は、太夫には初代政太夫 義太夫 二代目あり、此太夫 陸奥伊太夫なりあり、大和太夫初め彦 あり、錦太夫あり、此人初めは東、豊竹座へ出 勤豊竹和佐太夫と云へりあり、政太夫二代目 あり、三絃には鶴澤友次郎 即ち權右衛門の後を襲ふ 竹本座の立三絃となりあり、高弟鶴澤三二也、享保 五年友次郎と改名あり、友次郎の高弟平五郎あり、人形には桐竹門三郎あり、助三郎あり、おやま立役兩つながら古今の名人と云はれたる吉田文三郎あり。生氣横溢精彩煥發、斯界の盛時を飾つたのでありし。

『國性爺合戦』興行後 の竹本座の大異動

在來の顔振の一新

一種の老朽淘汰

先此『國性爺合戦』の興行後、竹本座の顔振には一大異動を來したのでありし。難波、理太夫、辰松八郎兵衛は此興行限り退座し、文太夫は十一月『聖德太子繪傳記』の興行を勤めて東、豊竹座に轉じ文太夫は、享保五年十二月、心中天の網島の時再び竹本座に還る殆んど在來の顔振を一變したのでありし。此際に於ける政太夫の苦心は察するに餘りあるのである。

とは云へ如上の變動は、或意味よりすれば一種の老朽淘汰なりし。杖と頼み柱と頼んだ義太夫に別れたるさへあるに、更に權右衛門を失ひ、八郎兵衛を失ひ、難波、理太夫、

孰れも有力なる後繼者

豊竹座も亦多士濟々
なりし

文太夫等を失ふた竹本座は、一種の寂寞を感ぜざるを得ざりしなるべし。されど八郎兵衛の後繼者としては桐竹門三郎があつた。門三郎は桐竹勘十郎の弟子にして、元禄の比より竹本座に出勤して居た。権右衛門の後を襲ふた鶴澤三二即ち鶴澤友次郎也は、寧ろ権右衛門以上の腕前を有した達人なりし。加之、彦太夫の當時暫く竹本座に在り、間もなく退座休聲して居りし大和太夫大音の美聲にして後年四段目語りの大立者となりたる人也も、再び出でて竹本座の舞臺に上ばり、享保三年正月、山崎與次兵衛の門松の時より再勤政太夫に一臂の力を假し、戮力奮闘、其の師の遺業の恢興に盡すこととなりたるより、新進の生氣は一座に横溢し、寧ろ義太夫在時にまさるの活氣を呈し來つたのであつた。

東、豊竹座も亦多士濟々なりし。若太夫の伎倆は此期に入りていよゝゝ練熟し來り、享保三年には上野少椽と受領し譽れを成したのであるが、享保十六年九月には、おほけなくも禁廷へ召されて、叙聞に具へ、再び越前少椽藤原重泰と受領するに至り、歸阪の上、十月十六日初日にて、赤澤山伊東傳記を上場し、御祝儀、蓬萊山太夫越前少椽、ワキ和泉太夫、三絃竹澤藤四郎にて、頂戴の綸旨、烏帽子裝束を白木の臺に乗せて舞臺の上段にござり、其前にて出語りなせり、此の時天満橋三右衛門と云ふ人、祝儀をて芝居の表に幟一本を立て初めたり、評判いよゝゝ高まり、門下の秀才には河内太夫後、呂太夫阿舍利場と云ふ事は、此の人の語りたる、和田合戦女舞鶴四の口、阿舍利場の好評なりしより初まれるなりあり、新太夫十九年江戸に降る、肥前椽あり、湊太夫、元文四年、江あり、要太夫元文三年死あり、柚太夫あり、元文に入つてよりは、生來の美音なるに加へて裏聲を使ふ事を工夫し、今に其遺風を残したるほどの語り人なる駒太夫も出でて之れに加はり、三絃には竹澤藤四郎の入神の伎あり、脇三絃としては野澤家の元祖となりし喜八郎藤四郎引退後、元文三年立三絃となる。野澤家濫觴に云、其頃京都に名高き檢校某と云ふ盲人あり、此の人中途より目見へ出すに付法師仲間居る事不叶何成として名を國中に上ると野澤屋喜八方へ行て弟子と成り藝道の趣向を考、道行景事種々此の人の胸中より出し物數不知、其の中にも、女鉢の木、杯名高き出來物にて、大阪にて鳴響き、野澤喜八郎と改名し、二代目なれど野澤家にては元祖と尊むべき御人なり。是より京都に追々野澤

近松の死、竹本座の
打撃

繁茂（セリ）あり。人形には、藤井小三郎、若竹東九郎の兩人に加ふるに、おやま遣ひの名手にして、兄に譲らぬ天晴の伎倆と稱せられし小三郎の實弟小八郎あり、西竹本座と相對して紅紫燎爛の光彩を放ち、市中の人氣を湧して居たのでありし。

此の期に於ける近松門左衛門の作物中には、『鎗權三重帷子』がある。享保二年八月上場。『山崎與次郎

壽の門松』享保三年正月上場。がある。『博多小女郎浪枕』同年十一月上場。がある。享保の四年には、『平家女

護島』、『島原蛙合戦』五年には、『井筒河内通』小はる治兵衛。『心中天網島』六年には、『女殺油の地獄』、『信

州川中島合戦』、七年には、『心中霄庚申』等を出して居るのであるが、夫れより健康勝れざりしものゝ如く、九年正月『關八州繫馬』を出したるを名残りとして遂に逝いた。

義太夫の死によつてはさまでの痛苦を感せざりし竹本座の面々も、近松の死によつては、尠からざる落膽と痛苦とを感せざるを得ざりしが如し。之れよりして東西兩座の

權衡はやうやく平位に復せんとしたが、角力は尙未だ互角とまでには至らざりし。西竹本座の出雲千四川長谷、文耕堂和吉松、松洛好三の筆才は東豊竹座の一風西、千柳中田、宗輔並、蛙

文安等に比し、常に多少の勝ち目があつた。享保十一年四月一風、宗輔、蛙文、合作の『北條時頼記』

近松作『西明寺殿百』を上演し、雪の段出語り、太夫豊竹上野椽、ワキ出遣ひ、松藤五郎、中村彦三郎、に

人上藺の増補也。を上演し、雪の段出語り、水太夫三絃野澤喜八郎、出遣ひ、藤井小八郎、小三郎、豊

て古今の大入りを取りてより、豊竹座の景氣も俄かに加はり、次で、『清和源氏十五段』蛙文

合作、享保十二年二月十五日上場、四段目山伏、『攝津國長柄の人柱』宗輔、蛙文合作、享保十二年八月十五日上

攝待の段出語り、出遣ひ上野少椽ツレ品太夫、『攝津國長柄の人柱』宗輔、蛙文合作、享保十四年九月十日、

野少椽ワキ、出水太夫人形、藤原秀郷倭系圖、九月十日、上場切に出語り、本朝檀特山、宗輔、蛙文合

井小三郎、三絃野澤喜八郎、藤原秀郷、倭系圖、宗輔、蛙文合作、享保十四年九月十日、上場切に出語り、本朝檀特山、宗輔、蛙文合

年五月六日上『源家七代集』宗輔、蛙文合作、享保十六年正月二日、上場切に出語り、前吉野忠信、切、お初天神記、享保十八年二月二

出遣ひ出語りと人形の工夫

竹本座に上場したる
幾多の佳作

『夏祭浪花鑑』に文三郎の凝らした工夫

等を上場し、荐りに出語り出遣ひにて人氣を集むることに腐心せりと雖も、西竹本座には、『鬼一法眼三略卷』文耕堂千四合作、享保十一年十月五日上場、『壇浦兜軍記』文耕堂千四合作、享保十七年九月九日上場、『蘆屋道滿大内鑑』出雲作、享保十九年十月五日上場等作意の優れたる淨瑠璃あり、豊竹座が、人形に眼の動くことを工夫すれば、享保十五年八月、楠正成軍法實錄の興行の時、近元竹本座は指先の動くことを考案し、四月、車返合ば、九八和田七の人形に眼の動くことを工夫し始め、戦櫻の興行の時、大森彦七の人形に指先の動くことを工夫し始めたり。操り三人懸りを始め、蘆屋道滿大内鑑の興行の時、與勘平なり、殊に與勘平の人形は腹の眉の動く事を工夫する等、元文元年二月、赤松圓心縁陣幕の興行の時に、殊に與勘平の人形は腹の眉の動く事を工夫し始め、趣向を凝らして市中の人氣を取り、豊竹座が『和田合戦女舞鶴』並木宗輔作、元文元年三月四日上場、『釜淵雙級巴』宗輔作、元文二年七月七日上場、『播州皿屋敷』爲永太郎兵衛、淺田一鳥、田村磨鈴鹿合戦、淺田一鳥、豊田正藏合、元文二年七月七日上場、『田村磨鈴鹿合戦』作、寛保二年九月九日上場等、儻かに數種の佳作を上場したるの外、其餘は殆んど見るに足らざるほどの駄作ばかりなるに比し、竹本座は、『敵討襪縷錦』文耕堂松洛合作、元文元年五月上場、『御所櫻堀川夜討』文耕堂松洛合作、元平假名盛衰記』合作、元文四年四月上場、『新薄雪物語』文耕堂松洛、牛平、小出雲、出雲作、寛保二年七月上場、『男作五雁金』出雲作、寛保二年七月上場、『夏祭浪花鑑』千柳松洛、小出雲合作、千柳小出雲、松洛合作、菅原傳授手習鑑』出雲、千柳松洛、小出雲合作、延享二年七月上場、『楠昔噺』千柳小出雲、松洛合作、延享三年正月上場、『菅原傳授手習鑑』出雲、千柳松洛、小出雲合作、延享三年正月上場、『菅原傳授手習鑑』等、幾多の大作を上場し、殊に、『平假名盛衰記』、『夏祭浪花鑑』、『菅原傳授手習鑑』は、市中の人氣を沸騰せしめたるほどの當り外題にして、人形には、前後に其人なしとまで稱せられたる吉田文三郎あり、『諸事聞書往來』一名『淨瑠璃譜』には、『夏祭浪花鑑』の興行を記して

「當芝居始まりてより世話もの九段續のはじめ也。比しも暑氣の氣をとり、四つ目より八つ目まで、始めて人形衣裳帷子を著せたり。是れ吉田文三郎趣向にて、七冊目長

禮拜齋戒して勤めた『菅原
傳授手習鑑』

當時の盛況

『假名手本忠臣藏』の
紛擾

町裏の段本ごろにて人形に水をかくることを思ひつきしは吉田文三郎也。此人操りにかけては、人形を持ち出づれば人の如く、右狂言にては團七九郎兵衛、一寸女房おたつを使ひ、おたつの姿は今に歌舞伎にても、桔梗の帷子、黒縹子の前帶、淺黄の綿帽子より外を着れば、おたつのやうに見へぬも不思議云々。

と云ひ『菅原傳授手習鑑』の興行を記して

「道具を左右へ引明れば、天満宮の宮居を正面に飾り、鳥居、玉垣、石燈籠も細工美を盡し社の内には菅丞相の人形をかざり、竹本此太夫、竹本島太夫、竹本政太夫、其外の太夫、神主の姿にて拜をなす故、數多の見物ありかたく思ひ、賽錢山の如く上しとなり云々。

文三郎菅丞相の人形遣ふには、毎朝別火を食し、水をあびて是を勤む。樂屋にて右人形は荒薦を布き、御酒を捧げ、神の如くに拜する嘉例なり。大序勤むる太夫も初日より七日は、吉田文三郎とおなじく慎む故、おのづと早朝より舞臺嚴重なり、此砌はあやつり役者五十人餘も一座にありし故、物事自由なり云々。

と云へるほどの景況にして、芝居表には最負ぐよりの進物を飾り立て、數百本の幟は朝風夕風に翻り、見るさへ心地よき盛況を極めて居たのでありし。『我經千本櫻』には、文三郎の三役を勤め、其の伎執れも神に入りて時人を驚嘆せしめて居る。夫の忠信の源氏車の紋所は文三郎、されど工夫なるが、歌舞伎にても之に倣ひ、源氏車ならでは、忠信らしく見ゆるまで行はれたのであつた。されば、斯界最盛時代の前期の三十年は、主として西竹本座の全盛時代にして、東豊竹座の勢は、當時尙未だ互角とまでには至らなかつたのであつた。

されど斯くまで順調に進んで來た竹本座の前途も、不意『假名手本忠臣藏』の紛擾より、爰

に一曲折を來たさざるを得ざることとなつたのでありし。『假名手本忠臣藏』の紛擾は實に斯界史上の一大特筆事項にして、斯道の衰頽を早めた主因も既に此に其端を發して居るのである。

先此、延享元年七月播磨少椽初代政太夫二代目義太夫なり。は逝き、此太夫其の後を襲ふて竹本座の座頭となり、『平假名盛衰記』『夏祭浪花鑑』『楠昔噺』『菅原傳授手習鑑』『義經千本櫻』等幾多の當り外題を連發して引續いての大入りを取り、竹本座の景氣は隆々として揚り、一座を舉げて樂觀的歡喜の夢をたどりつゝあるの時に際し、端なくも爰に一大紛擾を惹起すに至り、次で東西兩座の混亂となり、俄然として形勢は一變するに至つたのでありし。其の顛末は左の如し。

『忠臣藏』の上場

『義經千本櫻』に大入りを占めた竹本座は、引續いて習寛延元年の八月十四には、出雲松落千柳の合作に成れる。假名手本忠臣藏』を上場し、太夫の役割は左の如く、

假名手本忠臣藏役割

初 段	竹 本 此 太 夫	二 冊 目	竹 本 百 合 太 夫
三 冊 目	口 竹 本 信 濃 太 夫 奥 竹 本 錦 太 夫	四 冊 目	竹 本 政 太 夫
五 冊 目	竹 本 百 合 太 夫	六 冊 目	竹 本 友 太 夫 竹 本 島 太 夫 竹 本 文 太 夫 竹 本 信 濃 太 夫
七 冊 目	惣 か け 合	八 冊 目	道 行 竹 本 太 夫 口 竹 本 太 夫
九 冊 目	竹 本 此 太 夫	十 冊 目	口 竹 本 太 夫 切 竹 本 太 夫
十一 冊 目	口 竹 本 政 太 夫		

人 形 吉田文三郎等十餘人 三味線 鶴澤友次郎等四人

初日よりの大入大當りを取り、市中の人氣は湧くが如くであつたが、興行も中日過ぎとなつて、端しなく爰に一場の紛紜を惹起するに至つたのである。

紛擾の當事者は此太夫と文三郎の兩人である。此太夫は初代義太夫の門人陸奥茂太夫の門弟にして、初めは陸奥伊太夫其の業、合羽屋なりしによと云ひ、伊藤出羽の芝居杯にも出勤して居たりしと云はる。生來の小音なるよりさま／＼工夫して上達し、

元文二年十月十日太政入道兵庫岬の時より竹本座に入り、竹本美濃太夫と改め、同三年

八月十九日小栗判官車街道の時、竹本此太夫となり、爾來いよ／＼其の伎を磨き、同五年

七月朔日將門冠合戦の時には、序切の大役をも勤むるに至り、寛保二年二月十四日花衣い

ろは縁記の時は、四段目の切を語る。延享元年七月播磨少椽の後を襲ふて座頭とな

り、三段目の切語りとなる。『假名手本忠臣藏』の興行には、九つ目と七つ目掛合の由良

之助とを受持ち、由良之助の人形は、吉田文三郎の持役由良之助のニツ巴の紋は、文三郎の定紋なりしを其の儘人形に用ゐたるも

のと云はる。にして、中日も過ぎたる頃、文三郎より此太夫に對し、九つ目の「雨戸をはづす

我が工夫、仕やうを爰にて見せ申さんと、庭に折しも雪ふかく、さしものつよき大竹も」

の、「見せ申さんと庭に折しも」の間を、今少し工夫して語つて貰ひたしとの注文を

提出するに至つたのでありし。之れがそも／＼紛擾の主題である。

「日數も過ぎた今日となつては、太夫の面目上、節地合等少しにても語りかへる事相成

がたし」と云ふのが此太夫の主張なりし。「自己おのれも吉田文三郎なり、一旦云出したる

事反古となりては門弟共への聞ねもあり、面目立ち難し、殊に此れ迄の語り方にては、「見せ申さん」にて起ち、「庭に」で下駄をはかせ、折しものにて竹の傍へと運ばせる段取り、餘りに詰りすぎて手順に合はず」と云ふのが文三郎の主張なりし。雙方争ひ果てざれば血相かはり、人々の仲裁もあり一旦は立ち分れて引取りたりしと雖も、跡にての評議はまち／＼にして、結局、當時文三郎程の由良之助は有まじければ、此太夫を休ませるの外は有るまじ、倅ひ此ごろ大隅椽後、大和椽也も病氣本復なれば、此れを頼んで代りに立つる事然るべしと云ふ事に一決し、此太夫へは座元を代表して頭取より休座のことを話し、大隅椽へは、竹田出雲自身に訪門して出座の事を懇請したるより、大隅椽も餘儀なき次第なればとて承諾し、改めて此太夫方へも挨拶し、後を承けて役々を勤むることとなり、一應の梟はついたのであつた。

東西兩座の混亂

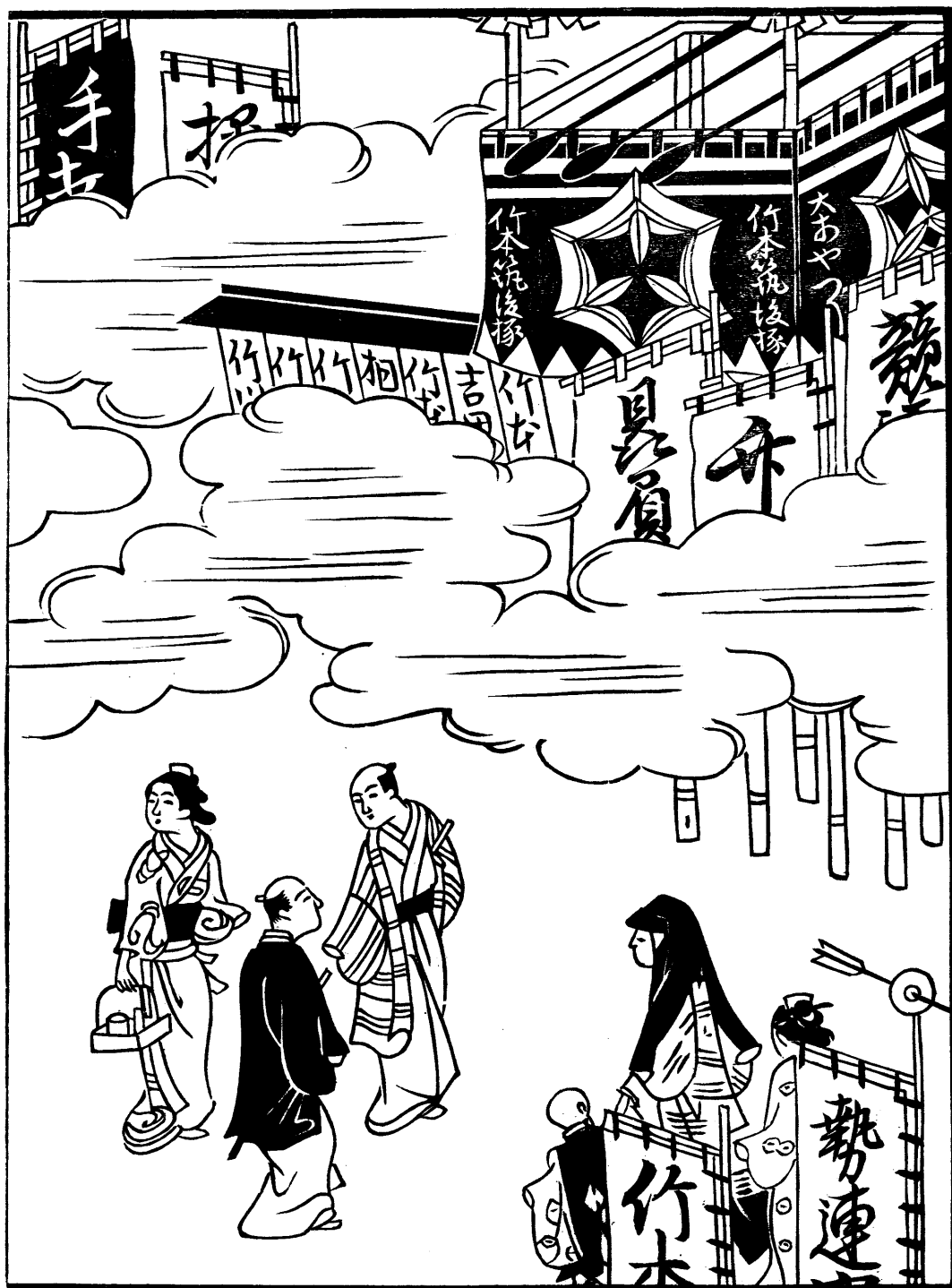
かくして一旦の落著を告ぐるとは告げたりしと雖も、此の儘にて根本的解決の付くべきやうもなく、千賀太夫、上總太夫叔太夫の改名、長門太夫等は、其師大隅椽に隨從して西座に出勤すれば、此太夫は東座に入つて座頭となり、島太夫、百合太夫の兩人は、此太夫と去就を共にして豊竹座に轉じ、島太夫は翌々寛延三年八月和田合戦女舞鶴の興行二度目に、二代目豊竹若太夫と改名相續す。友太夫も亦其の師此太夫に隨つて豊竹座に入り、春太夫、伊勢太夫、文字太夫、駒太夫等、豊竹座の名手は相次で江戸に下り、江戸に於ける義太夫節淨瑠璃は、此等太夫の江戸下りとなりたるより、勃興の機運を扶け、駒太夫は江戸に在ること僅に二年、寛延三年八月歸阪し、豊竹座に復歸す。爰に斯界未曾有の大混亂を來たすに至つたのでありし。按ふに後年斯道衰頽の素因は、早くも此に胚胎して居るのである。

此太夫の後を承けた
竹本大隅椽

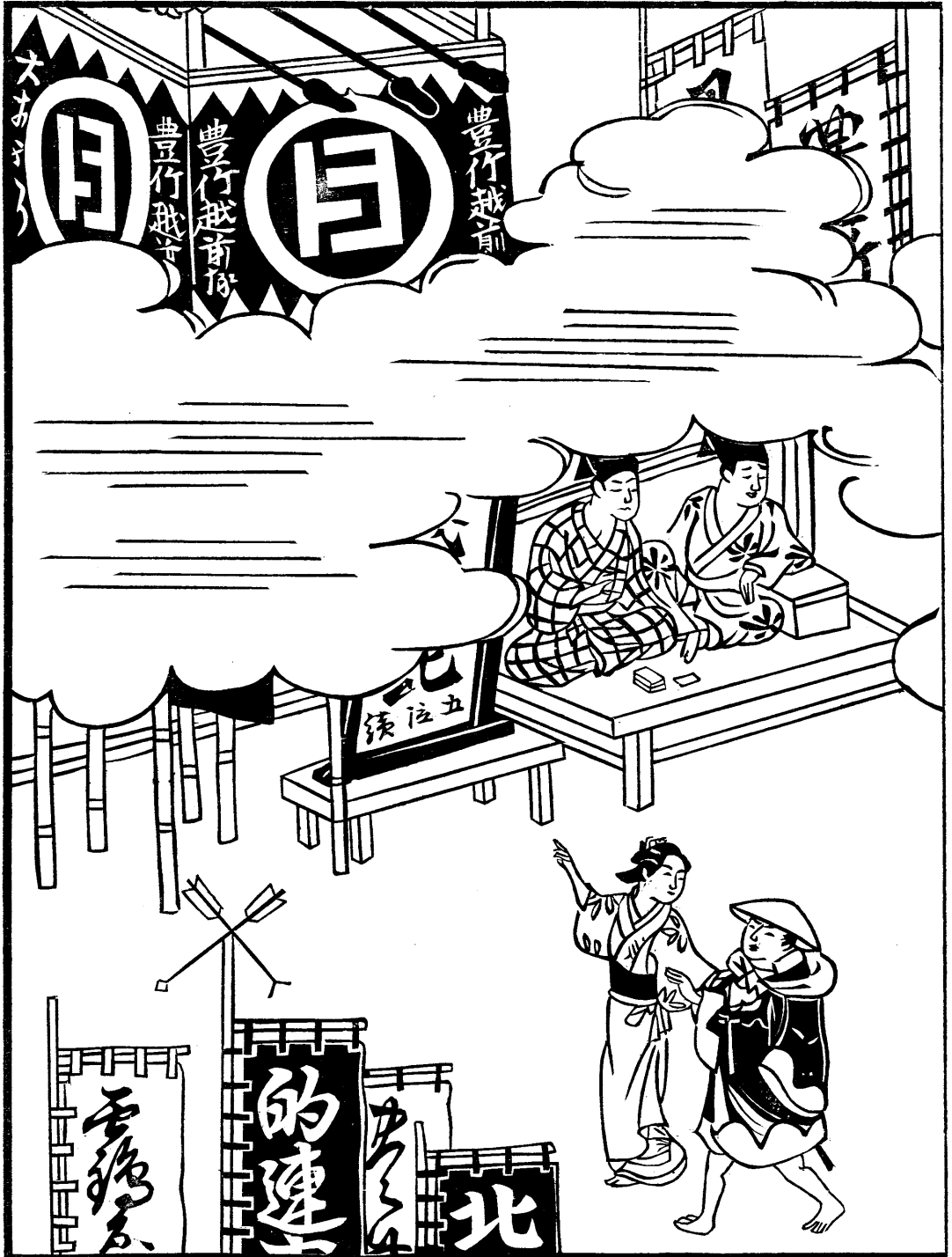
此太夫と入れ替りに竹本座の座頭となつた大隅椽は、初義太夫の門人内匠理太夫の倅にして、十六歳の頃既に相應なる伎倆を有したりしと云はる。紀州和歌山へ立越修業旁淨瑠璃を語り、段々聲柄も定まりしより大阪に歸り、伊藤出羽の芝居に出勤し、伊藤三輪太夫と稱した。若太夫上野少椽の當時入門し、享保八年十一月、建仁寺供養の時、豊竹三輪太夫にて初めて豊竹座の床に上ぼる。享保十七年一旦退座。同十九年十月、蘆屋道滿大内鑑の時、西、竹本座に入り、父の名乗り内匠を取りて竹本内匠太夫と稱したが、寛保元年再び豊竹座に入り、越前少椽、駒太夫江戸下りの留守を引受け、豊竹内匠太夫にて興行した。延享二年十一月、越前少椽一世一代の興行の時、此の時北條時頼記雪の段出語、此の時に内匠太夫は、ワキを語る。受領して豊竹上野椽と名乗る。同四年二月、裾重紅梅服を勤めて病氣にて退座。翌寛延元年八月、假名手本忠臣藏の紛擾に際し、竹田出雲の懇囑によりて西、竹本座に入つて座頭となり、再び受領して竹本大隅椽となる。寶暦元年十月、役行者大峯櫻の時、更に竹本大和椽と受領した。明和元年隠退して有隣軒と號し、筆硯に親しみしが、同三年十一月八日六十五歳にして歿す。門人中春太夫初代、長門太夫初代、内匠太夫初め彌太夫二代、等其名最も高し。

東西兩座入れ替り後の十年は、實に斯界の最盛爛熟の時代なりし。東豊竹座には積功至道鍊磨無雙と云はれたる筑前少椽此太夫を中心として、優艶妙絶音聲無類と云はれたる二代若太夫あり、幽玄至妙潤色無比と云はれたる駒太夫寛延三年江戸より歸り再入座あり、鐘太夫あり、人形には豊松藤五郎も尙健在し、藤井小八郎あり、小三郎あり、若竹東九郎あり。西、

後期の十年—斯界の
最盛爛熟時代



竹本豊竹兩座表



(載所事故豊竹) 景光のりかが

竹本座には至功美麗音節無雙と云はれたる大和椽を中心とし、成功甚深琢磨無類と云はれたる政太夫あり、風雅名譽獨歩無格と云はれたる錦太夫あり、次では春太夫東西混亂後西座に入りしが、間もなく江戸に下り、寶曆二年歸阪、西座に入る。あり、紋太夫の上總太夫あり、人形には桐竹助三郎あり、吉田文三郎あり。三絃には東に鶴澤重次郎あり、鶴澤三二後二代目友次郎あり、富澤萬五郎あり。西に大西藤藏大西一流の祖にして、初代友次郎の門人鶴澤萬三郎なり。其の大西と名乗りたる縁由は、東すさ踏み止まりしより、竹田出雲も大に其の志を悦び、大西の芝居の名よ。あり、野澤喜八郎あり、富澤藤治郎あり。兩々其の伎を競ふて空前無比の盛觀を極めたのでありし。

空前の盛觀

寶曆八年二月板行の『東西評林』延享四年二月板行の『浪華其末葉』に、當時の東西兩座の太夫人形、三絃彈の評判記を載せて居るが、左の如くである。

女大名東西評林

大阪三芝居操評判

(『浪華其末葉』所載)

- | | | | |
|----------|------------------------|--------|-----------------------------|
| 翁 | 名代 | 竹本筑後椽 | 竹本義太夫座 |
| 千歳 | 座本 | 竹田出雲椽 | 豊竹越前少椽座 |
| 三番叟 | 名代 | 豊竹越前少椽 | 陸竹小和泉座 |
| 座本 | | | |
| 千歳の真鶴 | 老若男女の見物衆を我此兩芝居 | | |
| 萬代の池龜 | より外へはやらじとおんもふ | | |
| 太夫極上品上上 | 修行の功つもあり、てほまれは四方に高砂 | 豊竹筑前少椽 | 淨るり太夫之部 |
| 太夫極上品上上 | 音せつの正風體と聲の優れば、たんに獅子の石橋 | 竹本大和椽 | 見たて扇子づくし |
| 左座上品ノ大上上 | | 竹本政太夫 | 大上上吉 |
| | | | お名は四方にやみやく檜扇子 |
| | | | 上上吉 |
| | | | 師匠の名まであげはの朝鮮扇子 |
| | | | 竹本政太夫 |
| | | | 豊竹上野少椽 <small>内匠太夫事</small> |

中央上品ノ大上上 豊竹若太夫

評判は日本一の名物世上にひびきわたる富士太鼓

右座上品ノ大上上 豊竹駒太夫

今の世の名人音せつなら程ひやうしならさへ切つた望月

上品ノ次上上 竹本錦太夫

語り方の面白さに見物業の響ける聲は百萬

上品ノ上上 豊竹鐘太夫

よし／＼この評判は四方に聞ゆる三井寺の鐘

上品ノ上上 竹本千賀太夫

はなやかにしかもすぐなるさくら川

上品ノ上 豊竹此太夫

時めきし評判はいさくりかへす三輪の山

上品ノ上 竹本紋太夫

ほんなりさしてうつくしいちつかの錦木

中品ノ上上 豊竹十七太夫

語り方のいさましさきは口にはおぼすて山

中品ノ上上 竹本組太夫

間合の仕こなしは實入のよいあきの田村

中品ノ上 竹本染太夫

程ひやうしの思入淺くは見へぬ玉の井

中品ノ上 豊竹伊豆太夫

開語のわかちよいゆへか本戸まで聲かよふ融

中品ノ上 竹本中太夫

又ある時は立物業か休むおもにくれたをかさるく山うば

中品ノ上 豊竹諏訪太夫

出世にしたがふて名もはなもたかくなるらんくらま天ぐ

上上吉 竹本島太夫

御出世は次第／＼に末廣扇子

上上吉 陸竹佐和太夫

聲がらはきやしゃで奇麗な京扇子

上上吉 豊竹駒太夫

評判に乗て来る見物を招き扇子

上上吉 豊竹陸奥太夫

御口中もまつぱり自由に廻るからくり扇子

上上吉 豊竹上總太夫竹本紋太夫事

お名を聞ても好もしひ箱入の銀扇子

上上吉 竹本錦太夫

節付の名人身内が拍子扇子

上上吉 竹本文字太夫

聞からに花やかな間拍子のよい舞扇子

上上吉 竹本百合太夫

うつくしさは粹らしい加賀扇子

上上吉 豊竹采女太夫

よい／＼と聲諸共うき立るかざしの扇子

上上吉 豊竹伊世太夫

やがて難波の指折に一つ二つ三つ扇子

上上吉 陸竹伊豆太夫

音曲行義くづれぬ中啓扇子

上上吉 豊竹元太夫

どこやらに見込のある墨繪の扇子

上上吉 陸竹富太夫

うれい事はたがひにこぼる袖扇子

上上吉 陸竹桐太夫

お聲のはつきりはいさましいちん扇子

中品ノ中 豊竹麓太夫 豊竹恒太夫

なじみはなげれどきようばだなごたれもゆふがほ

卷軸舊功の衆

中品ノ上上 竹本百合太夫

語り方の丈夫さまつてもつよいゆみ八幡

上品ノ上 竹本春太夫

浄るりの仕出しひくうはない小原御幸

上品ノ上 豊竹伊勢太夫

壁花はなずにはあられど櫻におさらぬ秋のみちがり

三味線之部

上品ノ上上 大西藤藏 竹本座

ばち音のきれいさみがき立たるこくさ

上品ノ上 富澤藤次郎 竹本座

れいろなきけば有がたさのますせいぐわんじ

上品ノ上 鶴澤十次郎 豊竹座

れじめのやさしさばうぐひすのやどる軒端の梅

竹本座中品之衆

鶴澤文藏 竹澤宗吉

大西長藏 大西音次郎

豊竹座中品之衆

鶴澤龜次郎 鶴澤名八

鶴澤千左衛門 鶴澤萬三郎

富澤豊次郎

おやま 人形之部

上 陸竹彌太夫 末たのもしき御功者追付左り扇子

上 豊竹春太夫

上 豊竹鐘太夫

上 竹本友太夫

上 陸竹美知太夫

上 陸竹常太夫

上 陸竹初太夫

惣卷軸

大上上吉 竹本此太夫

御功者に見物も耳を揃へた金屬子

三味線之部

上上吉 鶴澤友次郎

御名人の評判は今にめいらぬ調子扇子

上上吉 野澤喜八郎

お上手のうはさは光りかゞやく砂子扇子

上上吉 鶴澤平五郎

絲による鹿ならでいかな女中も色地扇子

上上吉 竹澤彌七

ひきしめるれじめはうつくしいわり骨扇子

上上吉 竹澤伊左衛門

上上吉 野澤文五郎

上 富澤正五郎

極上品ノ上上

藤井小八郎 豊竹座

女人形のふうていは今の世の楊貴妃

上品ノ上上

藤井小三郎 同座

おやまのふうぞく立のびて品のよい遊行柳

上品ノ上

田中小八 竹本座

女がたのしよていはつそりさしなやかな藤戸

上品ノ上

辰松文十郎 同座

きやしやにてかわいらしさに心はうきにうき舟

中品ノ上

藤井八十八 豊竹座
同 新十郎

名にめでてかあいらしさはおみなへし

立役人形之部

至上品ノ大上上

吉田文三郎 竹本座

西の芝居の柱礎大入蔵入金入の能道成寺

極上品ノ上上

若竹東五郎 豊竹座

當流の達人諸藝は底の知れぬ堀貫の井筒の水

上品ノ上上

桐竹門三郎 竹本座

さきかけてかついる見せしゑびらの梅

上品ノ上上

吉田文吾 同座

藝のきようさ御しんぶに似たりやにたり杜若

上品ノ上上

若竹伊三郎 豊竹座

敵役との詰合に勝色見せし源氏くやう

上品ノ上

中村勘四郎 同座

藝にせいをえて勤のすぐな竹生島

竹本座上品之衆

吉田 貫藏

桐竹 貫十郎

吉田 藤五郎

竹川 七郎次

名人衆にもまれく取廻しの能放下僧

上

竹澤音五郎

上

鶴澤本三郎

人形之部

見たて筆づくし

大極上上吉

吉田文三郎

隠れなき名人評判は大文字筆

上上吉

藤井小八郎

おやまの開山やはらかなながき筆

上上吉

豊松藤五郎

世の人のおしなべて重寶がる日記筆

上上吉

若竹東九郎

いつ見ても當りめのきく真書筆

上上吉

桐竹門三郎

身ぶり風俗いふにいはれぬ舌を巻筆

上上吉

中村勘四郎

能くの評判は幾年いふても果しなき萬年筆

上上吉

桐竹助三郎

取廻りの利口さいつでも間に合ふ矢立筆

上上吉

藤井小三郎

女のふうは其の儘うつくしい繪筆

上上吉

山本伊平治

思はくの功者誰でもひいき有馬筆

上上吉

吉田 才治

心のたけを自由におもひ入書入た焼筆

上上吉

淺田祐十郎

立役の眞行草覺へ込んだ手習筆

西ノ座 軸 上品ノ上上 桐竹助三郎

竹本座より外へはやらぬ安宅ノ關

豊竹座 上品ノ衆

若竹清五郎 若竹友五郎

豊松祐二郎 若竹三十郎

あらしの勢は得手に帆かけし舟辨慶

東ノ座 軸 上品ノ上上 豊松藤五郎

豊竹座に幾千代萬代を重ね籠めたる豊松風

以て東西兩座の顔振、世評の一般を徴すべし。

按ずるに斯界昌隆時代の前期——三十年間の盛況は、主として人形の工夫と技巧とで持った人氣にして、其の後期の十年間の景氣は、主として太夫の聲と技能とで呼んだ人氣なりし。加之其の比よりして大に流行した、趣向の奇——場面の變化を主とした、合作淨瑠璃正本の續々上場せらるゝあり、人形の妙伎、太夫の聲望と相倚り相俟つて、いよいよ市中の人氣を湧したのでありし。されば文三郎出でて竹本座の舞臺に上ぼり、絶群の妙伎を振ひ、舞臺——衣裳に至るまで眼先の變つた趣向を凝らし、文耕堂、松洛、出雲、小出雲等力を載せて合作ものに 智囊をしぼつて人氣吸收策を講ずるや、時人は驚喜して之を迎へ、『平假名盛衰記』と云ひ、『夏祭浪花鑑』と云ひ、『菅原傳授手習鑑』、『義經千本櫻』、『假名手本忠臣藏』等、孰れも湧くが如き人氣の大入を見たのであつた。されど昌隆時代の後期に入つ

上上壺 笠井藤四郎

しつほりさうつくしう角のないしんなし筆

上上壺 三浦新三郎

いつ見ても見ばへのするうは繪筆

竹本芝居

頭取 吉田文三郎

同 吉田三郎兵衛

豊竹芝居

頭取 藤井小八郎

同 豊松藤五郎

陸竹芝居

頭取 笠井藤四郎

同 芳川勘之丞

吉田文三郎を中心とした前期三十年間の人氣

太夫の聲と伎さによつて人氣を左右するの外なき淨瑠璃本位時代となる

歌舞伎には當れど操りには當らざりし『雙蝶々曲輪日記』

駒太夫と麓太夫とで呼んだ『祇園祭禮信長記』の大入り

豊竹駒太夫

ては、作者もやうやく趣向に倦めば、人形にも打ち變りたる工夫も出でず、勢ひ太夫の聲と伎さによつて、人氣を左右するの外なき淨瑠璃本位時代とはなつたのであつて、『雙蝶々曲輪日記』は、出雲、松洛兩人が智慧を絞り、工夫を凝らした佳作なりしと雖、一向に當らず、『諸事聞書往來』には、「此淨瑠璃趣向は、能、け、れ、ど、夏、祭、り、と、同、事、團、七、に、德、兵、衛、を、前、髮、に、せ、し、や、う、な、狂、言、と、は、な、は、だ、不、入、な、り、此の趣向歌舞伎にては長吉長五郎とて大入をなし、今も歌舞伎の狂言となり、操りには餘りいたさず」と云つて居る。歌舞伎には當り、操りには當らざる、這間の消息を稽ふべし。寶曆七年十二月豊竹座に上場した『祇園祭禮信長記』は、三年越打通しの大入大當りにして、曾て竹本座に上場して古今の大入りを取つた、『國姓爺合戦』に次での當り外題なりと雖、其の想其の作さして稱美するほどのものでもない。畢竟は駒太夫の『上かん屋』と『爪先き鼠』之れに加ふるに麓太夫の初舞臺と云ふ鳴物入りで呼んだ大入りにして、當時東西兩座を通じて人氣の隆々たる、駒太夫に如くものはなかつたのである。

豊竹駒太夫は島の内炭屋町に生る。大和太夫の風を慕ひ、師弟の約束まで取り結びたりしと雖、其の死によつて果さず、新太夫に師事せんとせしも、此れ亦江戸に下ることとなりしより、越前少椽へ預けられ、享保二十年八月、苧萱桑門筑紫蝶の時より出座。元文二年七月前『女蟬丸』切『釜淵雙級巴』の時、上の巻切の大役を勤む。生來の美音を以て、大和太夫の風儀を寫し、大和太夫は、筑後直門の弟子にして、竹本座四段目語りの大立者なり。自己の工夫をも、大和太夫は、筑後直門の弟子にして、竹本座四段目語りの大立者なり。自己の工夫をも、加へ、裏聲を使ふ事に妙を得たりし。調子は上へはつゝぬけにして、「古今淨瑠璃語

りの妙聲にて、一といふて二のなき事、やう／＼三番目は大和椽、大和地を殘され、四も五も續く聲なく、第六番に初代春太夫麓太夫なり」と云はれて居る位にして、其の美音のほごも想はるゝのである。暫時にして市中の評判を取り、駒太夫風とて専ら流行した。寛保元年九月越前椽と共に江戸肥前座へ下り、翌二年八月歸阪。寛延元年『忠臣藏』の紛擾より、十一月再び江戸に下り、同三年歸阪。明和二年豊竹座の退轉となり、翌三年北堀江市の側にて豊竹座新芝居興行、座元豊竹此吉、椽下は駒太夫此太夫の兩人なりし。七年九月豊竹座再興、座元豊竹此吉、椽下は島太夫駒太夫此太夫の三人。此太夫は一ト興行にて市の側に歸り、跡、座元豊竹和哥三太夫、椽下島太夫駒太夫の兩人となる。安永三年後は、市の側、曾根崎新地等の芝居にも出勤せしと雖暫時にして退隱した。實子生駒太夫二代目を繼ぎ、父に劣らぬ美音として稱せらる。門弟中最も優れたるは麓太夫なりし。

『祇園祭禮信長記』は、大序 若太夫、口 伊豆太夫、中 鐘太夫、切 此太夫、二段目口は新

太夫

此の興行に伊勢太夫と改名す

中は十七太夫、切は鐘太夫、道行新太夫、常太夫、三段目口は伊豆太夫、奥

上屋

は駒太夫、中は鐘太夫、切は若太夫、四段目口は此太夫、中は十七太夫、駒太夫の門弟寶曆三年十七歳にして

出座、突出しより序切の大役を勤めたるほごの人である。

切爪先

は駒太夫、五段目麓太夫此の時初めの出座と云ふ役割にして、今に

して、之を想ふを盛況壯觀まろあ面まりに觀るが如くである。『信長記』は實に東豊竹座が始めて西竹本座に對して其の氣を吐いた、晴れの外題なりし。

要之、昌隆時代の前期の三十年は、吉田文三郎を中心とした竹本座全盛の時代にして、

合作淨瑠璃

兩座の作者

僅々七箇年間に連發した佳作

其の後期の十箇年は、豊竹駒太夫を中心とした豊竹座全盛の時代なりとも稱するを得べし。されど文三郎の妙伎も、駒太夫の至藝も、當時流行の極に達して居た合作淨瑠璃正本の變化に富んだ、頗る奇抜な作意趣向の援けに由るもの多かりしは勿論である。

享保の中比よりして、豊竹座の作者西澤一風、田中千柳の兩人荐りに合作淨瑠璃を出して其の例を示してより、三人合作となり、四人合作となり、寛保の頃より群小の作者輩出し、正本と云ふ正本は殆んど擧げて合作ものばかりとなり、寛延以降尙ほ一層其の流行を盛にし、東豊竹座には、丈輔あり、一鳥田淺あり、珍平岡豐、蛙桂田安、正助豊、梁塵軒、三藏波難、良輔並、八州堂、三樂坊、橋平岡浪、鯨兒木並、正三木並、甚六竹豐、素柳木並、蟹藏岡浪、千箆竹豐、上野竹豐、永輔木並、飲子津、黒藏主岡浪、七才子、應律竹豐、阿契村中、笛躬竹若、以上寶曆八年等あり。西竹本座には、出雲あり、松洛あり、千柳あり、外記竹田、半二近松、文四田竹、閨助村中、景鯉近松、小出雲田竹、瀧彦田竹、後一窓北、竹土丸等あり。吉田文三郎も亦、作者としては冠子の名を以て其の中に加はり、當時の當り外題と云へば、悉く合作淨瑠璃にして、昌隆時代の後期十箇年の間に於てさへ、尙ほ且、佳作としては、竹本座に『源平布引瀧』千柳、松洛、合作、寛延二年十一月上場、小野道風、青柳硯出雲、冠子、閨助、半二、松洛、合作、寶曆四年十月上場、姫小松子の日遊冠子、景鯉、小出雲、半二、松洛、合作、寶曆七年二月上場あり、豊竹座に『玉藻前臆袂』橋平、一鳥、蛙桂、合作、寶曆元年正月上場、『日蓮上人御法海』正三、一鳥、宗輔、合作、寶曆元年十月上場、『一谷嫩軍記』宗輔、一鳥、鯨兒、正三、三藏、甚少、祇園祭、禮信、長記、後、信仰記と改めた。寶曆元年十月上場、『一鳥合作、寶曆七年二月上場』あり。改作ものには、竹本座の『戀女房染分手綱』近松作、丹波與作、後、伊達染手綱の改作、冠子、松洛、執筆、寶曆元年十二月上場あり。『名筆傾城鑑』近松作、傾城、反魂香より奪胎したるもの、冠子、閨助、松洛、執筆、寶曆二年三月上場あり、豊竹座の『義經腰越狀』宗輔作、寶曆四年七月上場あり。當時東西兩座を通じ、大略三十人にも上ぼる多數の作者あつて、こ

んな有様にては別段譽め立つるほどの出来榮なりとは稱し難しと雖、兎にも角にも僅々十箇年間に、斯ばかり佳作を連發し其の奇趣横溢的な眼先きの變つた作意構想を以て、太夫人形と相應し、相援け、湧くが如き人氣を呼んで、斯界空前恐らくは絶の盛觀を呈するに至らしめたのでありし。

されど這も亦一利一害なりし。合作淨瑠璃の流行よりして、兩座の作者が競ふて構想の奇趣向の變化を眼目として筆を執ることとなりたる以來、其の淨瑠璃正本たる孰れも太しく歌舞伎脚本的となり、文の美と音の妙と相俟つて聽者を魅殺すると云ふ淨瑠璃本來の約束よりは、人形の働作と場面の變化とを主として觀客を驚喜せしむると云ふ歌舞伎的傾向のものとなり、役者の臺詞せうごの活殺やっぱり一つで、觀客けんかくを泣かせたり、笑はせたりするが如くに、太夫の詞の遣ひ方一つで、聽者を泣かせたり、笑はせたりすると云ふやうな方面にのみ全力を注ぐこととなり、淨瑠璃本來の領域たる地の文——聲曲的美文の方面は次第に範圍を縮減し來ると云ふ傾向となれば、詞——脚本的類似の臺詞の部分は、ますます其の分量を加へ來ると云ふ趨勢となり、當り淨瑠璃そつくり其の儘移して歌舞伎芝居に上場せらるゝに至り、人形の振りを取つて役者の工夫を加へた今の舊劇、歌舞伎劇なるものをも産み出すこととなり、やがて歌舞伎に壓されて、操り芝居の敗類を來たすべき素因をもなすに至つたのでありし。されば一代の文豪近松門左衛門が、想を練り文を鍛ふて書き下した幾多苦心の正本さへ、眼先きの變化ばかりを眼目とした當時の作者の慣用筆法の下に、尠からざる改作増補を加へられて、其の名を新たに

著しく歌舞伎脚本的となりし淨瑠璃正本

地の文は次第に減じ詞の部分はますます加はる

操り芝居敗類の素因

して上場せらることゝなつたのでありし。

改作、修補の發頭人は文三郎なりしと思料せらる。彼は人形遣ひとしての自己の見地より打算し、多少の文才あるを誇りとして、紊りに改作、修補の筆を下したのであつた。『戀女房染分手綱』寶曆元年は、彼と松洛とが手を下した近松作『丹波與作』享保十七年の興し居れりの改作増補である。『名筆傾城鑑』寶曆二年は、彼と閨助松洛との三人が手を下した近松作『傾城反魂香』の改作である。

近松作にして今日尙傳へて流行せるは、『丹波與作』改作『戀女房染分手綱』の八冊目、『夕霧阿波鳴渡』の上卷改作『夕霧麻文』、『冥途の飛脚』改作『傾城戀飛』、『心中天の網島』改作『天の網島』、『博多小女郎浪枕』、『傾城反魂香』改作『名筆』、『大經師昔曆』、『國性爺合戰』、『山崎與次兵衛壽の門松』、『姫山姥』位のものにして、其の中原文の儘傳はれるは、今の『戀女房染分手綱』の十冊目原作『丹波與作』道中雙六の段、『名筆傾城鑑』の將監館『夕霧廓文章』原作『夕霧阿波』、『天網島時雨炬燵』の河庄原作『天の網島』、『山姥』、『博多小女郎浪枕』、『國性爺合戰』ぐらゐに止まり、其の他は少からざる改竄を加へられて居るのである。

按ふに淨瑠璃正本に、歌舞伎脚本的傾向の加はり來りしと云ふのは、畢竟在來の五段型淨瑠璃の千變一律な格法に飽いて、ヨリ以上複雑な構想潤色を要望することゝなつて來た、時代趣味の變遷に伴ふ自然の趨勢とも觀るべしと雖、一つは淨瑠璃作者の詩才太しく劣り、獨力能く近松ほどの佳作を連發し得るだけの伎倆ある人物無きより來る窮餘の一策とも云ふべきものにして、要するに「三人寄れば文珠」の智慧の出し合に

要するに「三人寄れば文珠」の智慧の出し合なりし

外ならないのである。

されど二人は三人となり、五人となり、七人となり、次第に大袈裟の合作ものとなり來りては、在來の如く強ひて大序、二段目修羅、三段目愁歎、四段目道行と云ふが如き舊型故慣に捉はれてばかり居ては、勝手も悪ければ窮屈にもあり、太だしく不便を感ぜざるを得ざりしよりして、はては九段ものも出れば、十一段ものも出來、作者の考へと取り合せの都合により、主として場面の變化、趣向の奇拔を本義として構想潤色することとなり、淨瑠璃の型式も亦一變するに至つたのでありし。

脚本化せる淨瑠璃正本の提供は、兎に角斯界の革新であり、又其の進歩であつたには相違ないのである。文三郎出でて以來急速非常な進歩を呈して來た人形操作の伎倆と、奇趣横溢的な此種脚本的正本と相俟つて、斯界の最盛時代、爛熟時代を現出するに至らしめたと云ふ事も亦疑ひないのである。されど之れやがて他日操り芝居が歌舞伎に壓倒せられ、衰敗殘滅の果敢なき運命に陥るべき素因となつたのである。

延享、寛延、寶曆の歌舞伎芝居は、若衆、歌舞伎や猿樂的舞踊の時代よりは既に百有餘年を経過して居る。市川家にては、三世團十郎、二世團藏、元祖八百藏、嵐にては三世三右衛門、二世勘四郎、元祖雛助、尾上にては元祖菊五郎、片岡にては二世仁左衛門、岩井にては二世半四郎、澤村にては二世宗十郎、森田にては五世及び六世勘彌、市村にては四世及び五世宇左衛門、瀬川にては元祖菊之丞、大谷にては二世廣右衛門、元祖友次、廣治等各々妙伎を振ふて三都の看客を喜ばせて居たりし時代にして、衣裳道具立に至るまで、操り芝居

當り淨瑠璃となれば直に歌舞伎に奪はる

木偶よりは活きたる役者

以上の進歩を示し、假舞臺は本舞臺となり、舞臺には花道を附け、引衣裳と云ふ事も工夫せられ、セリ上げ道具も始まり、著作にも興行權にも、何等の保護もなき時代なれば、淨瑠璃正本にあれ、歌舞伎脚本にあれ、他の座の當り外題となれば勝手に轉用し、『國性爺合戦』出でて大入り大當りを取れば、三都の劇場は争ふて之を上場し、『假名手本忠臣藏』出でて時人の喝采大評判となれば、三都の芝居は暫く『忠臣藏』で持切りの姿となると云ふ有様にして、『平假名盛衰記』も、『夏祭浪花鑑』も、『菅原傳授手習鑑』も、『一谷嫩軍記』と云ひ、『祇園祭禮信仰記』と云ひ、操り芝居の當り外題と云ふほどの外題は、擧て歌舞伎に轉用せられ、所謂、犬骨折つて鷹の餌となりし結果を見たのでありし。

元來歌舞伎にあれ、操り芝居にあれ、此等興行物の人氣は、一部少數の識者の評判よりは、一般多數の老幼婦女子の喝采を得てこそ其の盛りも見らるゝのであつて、木偶よりは活きたる役者——言はぬ木偶の所作よりは美しう化粧した言ふ役者の方が歓迎せらるゝこと、今も昔も變りのない人情である。されば淨瑠璃には淨瑠璃の特長あり、操り芝居には操り芝居の特色があつてこそ、其處に獨立の生命もあり、存在の意味も存する次第にして、歌舞伎役者の音羽次郎三郎は、「歌舞伎より操を學ぶこと歌舞伎衰微の基なり」と慨嘆して居るのであるが、操り芝居より歌舞伎を真似て、一時の當りを取らうとしたと云ふのが、そもく、不了簡の極であつたのである。

されど彼と云ひ此れと云ふも、詮じ來れば作者の文才、伎能の不足に由來するのであつて、近松、海音の當時は悉く一人一作なりし。合作ものゝ初めは、享保八年二月竹本座

淨瑠璃合作の流行

合作ものゝ長所

に上場した出雲文耕堂兩人作『大塔宮臙鏡』此の作は近松添刪云はるにして、同十一月には、豊竹座も亦一風、千柳合作の『日本建仁寺供養』を上場して居る。爾來竹本座は、享保十三年出雲、千四合作『加賀國篠原合戦』を上場するまでは、概ね出雲一人の單獨作にして、合作もの無し。されど豊竹座は、『建仁寺供養』以後連年幾多の合作ものを頻發し、享保九年二月には、一風、千柳合作の『賴政追善芝』を出し、十月には、『女蟬丸』一風、千柳合作を出し、殊に此の『蟬丸』に大入り大當りを取りてより、合作の風は一層盛んとなり、享保十一年四月一風、宗輔、蛙文三人合作の『北條時頼記』を上場して大評判を取つてよりは、單獨作の勞多くして功少きよりは、寧ろ合作ものゝ勞少くして功多きに就かんとする傾向一段劇しくなり、竹本座の作者も亦此の響みに倣ふて荐りに合作ものに没頭するに至り、元文四年四月上場の『平假名盛衰記』の如き、文耕堂、松洛、可啓、出雲、小出雲の五人懸りと云ふ合作淨瑠璃さへ出づるに至り、寛延に入りてよりは、四人懸り五人懸りの合作は左まで珍らしからざることとなり、六人懸り七人懸りのものさへ出で、持場くを定めて想を構へ、趣向を凝らすこととなりたるより、ひたすら奇に走り、前受け専門と心懸くるやうになり、近松、海音等一人一作當時の作物に比すれば、首尾の聯絡、構想の統一と云ふ點に於ては遺憾の廉々多かりしと雖も、一段く獨立した趣向あり、やまもあり、當場まきばもあり、見た所如何にも華やかにして、觀客の氣に入り、素養に於ても、實力に於ても、左までならざる群小作者の作物にして、尙且つ非常の喝采を博し、寛保、延享、寛延、寶曆に涉る、斯界の盛況を現出するに至りたる次第である。

合作ものゝ流行の結果として當然起るべき問題は、淨瑠璃正本の格法筆致の統一である。構想の統一なれば、作者相互の申合せにより、聯絡を取り、重複を去り、或る程度までの一致を計ると云ふことも、出来ない相談ではないのである。されど文體を統一し、筆致を統一し、宛も一人の筆に成つたものと同じやうな外觀を持たせて往うと云ふのは、なか／＼六ヶ敷注文にして、勢ひ地の文を減じて詞の部分を増加すると云ふ事の必要も起れば、簡易な格法を案出して、步調を揃へると云ふ事の必要も起つて來たのでありし。

範を斯界に垂れた近松の作物が、何處までも聲曲本位にして、聲曲本來の立脚點より執筆され、地合も詞も巧に按排調節せられ、格に捉はれずして格に入り、區別に拘泥せずして自ら區別あり、或は地となり、詞となり、變化の妙趣を竭せしものなることは、既に説ける所の如し。然るに後の脚本類似の合作ものと成り下りては、唯々千變一律の格法となり、例之ば、

『祇園祭禮信長記』爪先鼠の

無慚成かな雪姫は、何を科逆溺れし夫も最早最期かと思へば微き吹風も、嘔嗟夫ぞと見上れば、花の散さへ恨なる、今ぞ生死の奥座敷、調ふ調子も身にぞ染、「花を雪か」と詠むる空に散ばぞ花を雪と讀。命も花と散懸る、狩野助直信が、最期も五ツ限ぞと、軍平に追立てられ、屠所の羊の歩行兼、イむ夫婦が顔と顔、ヤア是は我夫か、雪姫か、と寄んとすれば、繩取が、引張繩の強ければ、見替す計り涙聲、斯様成ふとは思ひも寄す、お主様を奪返し、舅の敵も俱々に、尋ん物と思ひしに、無慚／＼死る口惜き、何卒和女

は存命で、慶壽院の御先途を見届くる様に頼むぞや、ナフ其のお頼は皆逆様科も無身を又に懸跡に残つて何とせん、一所に行度死度」を叫ぶを軍平嘲笑ひア、不可女の腕立から狩野の助を殺す云、其の身も繩目の憂面恥、未も頼みは大膳様、其の器量に鬱惚て、御不便が懸て有何卒最一度詫言して、抱れて寐がましで有、ア、不便ヤ」を夕間暮道立く引れ行。見送る身さへ擲れて、往も行れず伸上り、見遣ば誘ふ風に連れ、野寺の鐘の更々響きに散や櫻花梢も萎れ身も凋れ、凋れぬ物は涙なる。稍泣入し目を開キヤア那鐘は六ツか初夜か、夫の命が有中に、ホンニ夫よ、未言残した直信様、父の敵は大膳ぢやはいなふ、エ、此の事が知せ度、此の繩解て欲いなア、エ、切ぬか解ぬか」を身を急る程縮搦む、煩惱の犬我を我身を苦しむる憂思ひ、へエ那大膳の鬼と蛇と、人に報いが有物か、無物か、喰付ても此の恨み暗さいで置ふか」を悔の涙破落くく玉散露の如くなり。オ、夫よく、三井寺の頼豪法師、一念の鼠と成牙を以て經文を喰裂恨を晴せし例も有る、此の身此の儘鼠共、虎狼み共成て給、南無天道様佛様、申しくコレ拜み度ても手が叶はぬ、エ、無念口惜ヤ」を踊り上り飛上り、天に呼はり地に伏て、正體涙に暮けるが。誠に思ひ出せし事社有自らが祖父の雪舟様、備中の國井の山の寶福寺にて僧となり、學文はし玉はず、宛に角繪を好み玉ふ故師の僧是を禁止んと、堂の柱に眞此の様に、縛り付て折檻せしが、終日苦しむ涙を點じ、足を以て板縁に、畫く鼠繩を喰切助けしとや、妾も血筋を受繼で、筆は先祖に劣る共、一念力は劣らじ」を足にて花を搔寄く搔集め、筆は無共爪先を筆の代り、墨は涙の濃薄櫻、足に任せて書きたに、繪は一心に寄物凄く、すばり動くは風か有ぬか、花を毛色の白鼠、忽地爰に顯れ出、繩目の葛草の根を、月日の鼠が喰切くく機會、ばつたり倒しが勃然と起。ヤア嬉しや繩が切たか解けたか、足で鼠を書たのが喰切て呉たか」を見遣ば傍に散花の鼠の行衛も嵐吹、木の葉と俱に散失たり。姫は夢の心地も覺嬉しやく本望ヤ」を悦ぶ足も地に付ず、夫の命を助けんと、駈行後へ弟喜藤太とつこいさせぬ」を、首筋搦て引戻す、放せ遣じ

と追合中發矢と打たる手裏劍に、藤太が息は絶にけり。是はと驚愕き見返る所へ、ヤア、雪姫暫し。と止、腹巻に身を堅固、悠々立出る筑前守久吉。何事も最前より窺ひ知たる始終の様子、先祖の雪舟渡唐の時、明帝に望まれて、天滿宮の渡唐の神像、畫く稱美に取替せし、俱利伽羅丸は是爰に。と藤太が死骸の一腰を取て渡せば篤と見。オ、成程々々、家の祕藏の此の劍、祖父様が唐土で、お描成れた渡唐の天神、今日本に弘まつたも、雪舟様が始ちやと、父様の物語り、此の名劍が手に入柄は、乞踏込で、大膳を。と、駈入を押し止め。一途に逸るは道理乍ら、申さば渠は天下の敵、親の敵は又重て、慶壽院の御身の上、此の久吉が受取た、軍平に申付、直信の命の上、些少も氣遣ひ無れ共、何角の様子を知らず爲、一刻も早く舟岡へ。と、聞に心も浮立計り、其れならお主を頼ぞへ。と、劍を腰に、裙引上、小裙保羅保羅花の浪、舟岡山へと走り行。

『伊賀越道中雙六』

饅頭娘

ア、忝い、然らば今宵はこれに緩り、御酒一獻、御上り下され、追付新しい女房が参る、イヤ又其の器量のよき、雪と墨との替徳、古女房のお谷めは、不器量の上に、因果と早ふ子を孕で、正眞の河豚の横飛、飽たを無理とば思し召な。と、あいそづかしを立聞の障子に、齒形も入計、登る痞の折しも有。嫁御様早是へ、オ、待兼た早ふ通せ、女子共、夫燭臺に火を燈せ、島臺、鏡子と、駈程、五右衛門がむかつき顔、玄關より奥座敷、直に手ぐりの紙乗物、對の簞笥に、染込の覆ひも、愛持介、添女房、オ、太義、イヤ申宇美佐公、唯今カノ妻が参つたお悦び下され、ア、御目出たい義でござる、御推量下され、貴公には御退風、コリヤ、あなたに御酒上いよ、イヤ拙者御酒たべる、胸が悪くござる、是は氣の毒然ばお菓子、イヤサお構ひ御無用、ハテ堅くろしい、何がな御馳走、ヤイコリヤ新參の女、何をうろく、まいまい、其の不調法では祝言の酌は得せまい、お客人の痛瀆、ソレお脊中でも揉であげい、と、いふ程腹の立波に、音を泣千鳥、四海波、扱我等今晩の花簪、上下を著る、答なれど、あたまから打解る様に、角菱止

て此の儘見參、サア、早ふ女共の顔が見たい、オ、お心安い聳様で、嫁御様のお仕合馳かしがつてござらすさ、サアお出なされませ。乗物明れば綿帽子に、腰より上はうづもれて、七つ計のいご様御察、尺にも合ぬかい取ほらく、帯につられて座敷にさんご乳母是取て、ア、申其の帽子、御盃の濟迄召てござれ、ア、イヤ、うつさしからふ取てやりや、ドレ戀女房の御面像。帽子をらせば尺長も、しまらぬ罌粟の花嫁御、直す三寶土器を、乳母が持添戴せ、聳君様へ上まする、忝い、女子共皆見てくれ、何さちよつこりご、何處に置ても邪寃にならぬよい女房で有ふがな、ハア嬉しい、嬉しい、目出たふ一ツ、次の間より、千秋萬歳千箱の玉。諸聲襦の袖に通取乘立出る。ヤアお前は母様榮垣様。驚くお谷に目もやらず、政右衛門に打向ひ、ぐわんぜない此の娘を女房に持て下され、此の上の本望なし、聳引出の此の目錄は、主人上杉宇内様より、射志津馬に下されし、敵討御免の御書、いよ、助太刀なされて下さるお心じやな、お尋に及ばず、承知致いて罷有、コリヤ新參の女もよく聞、身共には先妻が有たれ共な、親の教さぬ密通行家殿の勳當の娘、これ合女夫の悲しさは、表立て聳舅さいふ事はならぬぞよ、今郡山の扶持を戴く政右衛門が、よしみもない他人の助太刀が成べきか、コレ此のお後は、世間晴た行家殿の忘れ篋、志津馬が妹に違ひない、此の子ご今祝言すれば、是こそ誠の聳舅、舅の敵小舅の助太刀仕るご、殿へ御願ひ申さんに、よも不届きは思されまじ、かなたこなたを思ひはかつて、科もない女房、去た謂れば此の通り、義理さいふ色に迷ふて、五年の馴染に見替た心、泣わけて五右衛門殿、御立腹の段、は、まつびらく、御免下され、我等もふ酔ました、何申すやらたわい、酒にまぎらす本性の、云譯聞て手を合せ、よふ去て下さんした、其の誠をちつこの間も、恨だ女子の廻り氣を、堪忍して下さんせ、オ、サ身共もよい年をして、疑ひの悪口面目ない、天晴武士かな、政右衛門殿此の祝言は敵討の門出、武士道も立、家も立、よい嫁を迎へられた扱、めでたい婚禮、我等もさ、お取持ご、始の腹立打てかへ、一度に顔の色直し、お心が解たれば彌替らぬ

千變一律の「こ」の字受けの
格法

殆ど詞ばかりの淨瑠璃

政右衛門が後連のお後や、二世かけてそなたの男、今夜から抱て寝るぞや、コレ女房共くさ、いへん
お後は欠交り、乳母もふいなふみやんちや聲、是は娘さした事が、嫁入早々いんでたまる物かいの、三
三九獻まだ濟ぬ、殿御の盃戴物じや、イヤあからはいや、乳母あれほしい、あれさば、ム、お饑かへ、さも
しい奥様では有るぞ、イヤく道理じやく、かわいひ女房に何惜からん、併一は過る、半分は身が預
る、是が夫婦のたためぞ、持せばはやく、饑頭、ホンニ忘れた、嫁君の御持参のお道具、筆筒の引
出し、廣蓋に、盛ならべたる持遊びの、市松人形風車。

想の奇はありと雖文の妙は無し。地と詞との繋ぎ合はせには、千變一律のどの字受
けの格法假令ば「信長記」の「一所に行度死度」も、「叫ぶを軍平嘲笑ひ」も、
「急る程締纏む」も、
「無念や口惜や」も、
「踊り上り飛び上り」も、
「つこいさせぬ」も、
「首筋
綱で引戻」を踏用し、全編殆んど詞ばかりとも云ふべき正本となり、聲曲としての淨瑠璃
本來の特色を發揮すべき地合の部分は残り少となり、人形にかけて語るも可也、され
ど「チヨボ」を入れて役者に演せて見れば更に一層可也と云はるゝやうな權威なきもの
となり下り、幸に太夫の技能と木偶ほんぎやうの妙技とに依つて、時好を繋いで喝采を博し得たり
しと雖、佳作、出れば歌舞伎の好餌となり、はては其の人氣に壓倒せられ、果敢なき末路を
止むるに至りたること、畢竟合作淨瑠璃の遺した禍累たるに外ならないのである。

『菅原傳授手習鑑』は、出雲、小出雲、千柳、松洛四人の合作にして、出雲、千柳、松洛の三人が各
自一段づつ親子の別れを書いて見んと申し合せ、松洛は道明寺に菅丞相と荊屋姫の
生別を書き、千柳は佐田村に白太夫と櫻丸の死別を書き、出雲は寺子屋に松王夫婦と
小太郎の首の別れを書き、夫々變りたる趣向面白しとて六十五日間の大入を取り、江

戸の肥前座よりも、わざ／＼人を上ぼせて人形吉田清次郎、太夫竹本伊實地に傳習せしめ、竹本座附の太夫、人形遣數人を申受けて歸り、延享四年二月より興行して空前の大入を取り、肥前椽は町屋敷を買受けて老後の計を爲し、菅原の淨瑠璃の餘慶なればとて、俗に菅原屋敷と稱せられたり。謝恩の爲めとて龜井戸天神境内に、紅梅殿を建立するに至りたるほどの好評を博した當り外題にして、一日の芝居に、二段目三段目四段目と引き續いて同じ親子の別れを仕組みながら、毎段がらりと調子が變り、どり／＼に興味を持たせて、観客を泣かせて居る所に、人を替へて書いた合作ものゝ長所が發揮せられて居るのであつて、其の筆致の統一し、調和し、個々別人の筆に成つたものとは思はれぬまでに融合疏達して居る所は、畢竟此等合作淨瑠璃の必要上から案出された一種の格法の然らしむる所に外ならないのである。されば合作淨瑠璃の長所も之に見るべく、其の短所も亦之に觀るべきである。左に其の一節を抄録して参考に資する。

菅原傳授手習鑑 道明寺の段

稍時移れば判官輝國、唯今はへ御出さ、家來が申すに老母は驚き。相丞は先程お立、誰を迎ひに、心得ぬ事ながら、此方へ通しませい、刈屋姫は奥へ行きや、こいつはまちつと苦痛をさすこ、刀を其の儘體押退け、出迎へば、輝國も早入來り、お迎ひの刻限、御用意よくば早お立と、申す詞の先折て、「イヤコレ輝國殿、何おつしやる、相丞の迎

菅原傳授手習鑑 佐田村の段

春さきは、在々の鋤鎌迄も樂々こ、遊びがちなる一農一番村で年古き人に知られし四郎九郎、律義一邇取得にて、菅丞相の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承り、松梅櫻御愛樹に、つちかひ水の養も、根が、農の鎌仕事、我身の老木厭ひなく、幹をこやしの百姓業、畑の世話より氣樂なり。堤端の十作が、鎌打たげ門口から。

菅原傳授手習鑑 手習見屋の段

夫れ皆なお暇が出た、小太郎さにも奥へ奥へこそ若君共誘せ跡先見廻し夫に向ひ。最前の顔色は常ならぬ吃相、合點のゆかぬぞ思ふた所に今又アノ子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかず、どうやら様子がありさうな氣遣な聞してと、問へば源藏。ホ、ウ氣遣ひな筈、今日村の饗應さ偽り、それがした庄屋の方へよび付け、時平

合作淨瑠璃の長所も短所も併せ見るべき適例『菅原傳授手習鑑』

ひに足下の家來が先程見は、請取つて歸られたは、もう一時も前の事。ヤアこれく伯母御、身が家來に渡したと、旁以て心得ず、鷄の聲に制限量り、唯今鳴いた旅宿の鷄、八ツに參る迎ひの約束、家來さいはふが、直に身共が參つた連、制限も來らず鷄も鳴ぬ前、渡したと云ふては濟まい、船がかりの其の間、伯母御に達すは、此の輝國が情の用捨、今日の今になつて名残も一倍、島へはやらぬ、渡したさいへば、夫で濟むと、鼻の先な女子の了間、菅相丞の怨にこそなれ爲にはならぬ、偽りな申されぞ。イヤ偽りは申さぬ、庭で鳴た鷄の聲、そこへござつた迎ひの衆、渡したに違ひはないが、請取らぬとおつしやるので、娘が最期、掣めがあのさま、思ひ合せばさつきに來たは實迎ひ。コレ伯母御、内の騒動死人のある上、實迎ひ嘘ではあるまい、譏者共の所爲であらう、一時違へば三里の後れ、ぼつ付いて取返さんさ、せきにせいてかけ出す輝國。ヤアく判官先待れよ、菅相丞は是にありさ、一間より出給ふ、覺壽は悔り、さつきに別れた菅相丞、そこにはどうしてどうしてさ、不審の立も道理也。判官輝國打たか。サイノ死んだ女房が産んだ時は、邊

四郎九郎殿内にかと、這入を見付け、こりや十作、畑へか。イヤ今仕廻うて戻つたりや、嫌がいふには、何やら目出たい祝ぢやて、大きな重箱に、眼へはいる様な餅七つ、朝茶の鹽にも喰足られど、貰はぬよりも忝い、禮もいひたし、祝さば、マア何でござる。サイノ菅相丞様のふつて湧いた御難儀お下に住むおらくが、身祝所ぢやなければ爲にやならぬさかいで爲るは爲るが、世間へも遠慮が有つて、彼岸團子程な餅七つ宛配つたは、此四郎九郎丁度七十、此春年頭のお禮に登つた時、おらが年をお尋、七十と申したりや、古來稀な長生、其上珍らしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、悴共は御所の舍人、目出たいく、産れ月産れ日、産れ出た制限違へず、七十の賀を祝へ、其の日から名も改へて、ナウ聞かしやれ、伊勢の御師が何その様に、白太夫さおつけなされた、則今日が誕生日、白黒まんだらかいは掃溜へ投て返け、今日から白太夫といふ程に、さう心得て下され。夫はめでたい、次手ながら聞ひましょ、三つ子産むと扶持下さる、其の謂も聞かしやつたか。サイノ死んだ女房が産んだ時は、邊

が家來春藤支蕃、今一人は菅相丞の御恩をきながら、時平にしたがふ松王丸、此奴病筆けながら見分の役と見は、數百人にて追取り巻き、汝ぢが方に菅相丞の一ツ子菅秀才、我が子としてかくまふよし訴人あつて明白、急ぎ首打つて出すや否や、但し踏ん込み請取ふや返答如何に退引ならぬ手づめ、是非に及ばず首討つて渡さうと請合ふた心は、數多ある寺子の内、いづれなり共身がはりさ、思ふて歸る道すがら、あれか是れか指おつても、玉簾の中の誕生と御運の未なるか、いたはしや淺間しやと居所の歩みて歸りしが、天道のひかへ強きにや、アノ寺入の子を見ればまんざら烏を驚かとも云はれぬ器量、一旦身代りて欺き其の場さへ遁れたらば、直に河内へお供する思案、今暫らくが大事の場所と語れば女房待んせや。其の松王といふ奴は三ツ子の内の悪者、若君の顔はヨウ見知つて居るぞへ。サア其處が、かばちか、生顔と死顔は格別の變るもの、面ごし似たる小太郎が首、よもや實さと思ふまじ、よし又た夫れと顯れたらば、松王めを眞二つ、残る奴原切つて

笑ひ、ぬけくさした伯母御の偽り、暫時の仰天、相丞之にましませば、輝國が安堵の安堵。見渡つた此の難儀、譯も聞きたし、力に成つて進ぜなければ私しならぬ警固の役目、早刻限も移りぬれば、いざ御立ちこ動むる所に、先程見えた警固の役人、たつた今門前迄、何ちや警固が。ハテよい所へ戻られた、嘘つかぬ覺壽が證據、是へ通し、輝國殿へ見せませう。イヤ身が名を街つた實役人、直に逢ふては悪かるべし、忍んで様子を窺はんこ、相丞諸共一間の障子、引立て内に隠れ居る。輿に先立つ警固が大聲。コレ老母、輝國の名代さけ侮づり、さでもない物身共に渡し、能くぬつけりさくれたの、是は迷惑、管相丞を請取乍ら、さでもないさは何おつしやる。アレまたぬつべり、相丞は相丞でも、木で作つたばこつちにいられぬ、肉付の管相丞、替へる氣で持つて來た木像。コリヤ此の輿に。さ云ふに覺壽も心付き。エ、忝い、扱は魂を籠められし、木像で有つたかい猶も證據を見届けんこ、心の悦び押隠し。此方の言分合點がゆかぬ、其の木像見せさつしやれ。オ、しやちこば

隣の外聞、ひよんな事ぢやと思ふたが、もつげの幸、三つ子の爺親、一代は作取の田地三反、日本計ぢやないげな、唐迄もさうぢやて、男の子なりや御所の牛飼、女郎なれば東童とやら、是も御所でつかはるゝ、法式は忝いもの、旦那殿は流罪なれど、おらは所も追立られず、下された田地は其の儘、そちの婿も若い程に、産すならおらにあやかみやさ、嘈の中道たどりくるは、櫻丸が女房八重、今日は舅の祝日逆、風呂敷包片手に掲げ、嬉しや爰ぢやと笠取れば。ホ、櫻丸が女房八重が、早かつたく、外の嫁御も揃ってくるが、マアく上つてかかへも解きや。アイくまだ皆様はお出ないか、遅からうと氣がせいで、淀堤から三十石の飛乗、船の足の早いで、草臥もせず早う來たが仕合でござんする。ヤコレ四郎九殿、お客さうな、もう往にましょ。エエ是四郎九は物覺がない十作、白太夫早忘りやつたかいの。イヤ忘れはせぬばいの餅の祝とは格別、名酒呑まれば何時迄も四郎九殿。ハレヤ盛つた酒を飲まぬさば、但はまだ呑足らぬか。エ、ぬけくささ騙い

捨て、叶はぬ時は若君諸共死出三途のお供と、胸をすへたが一つの難儀、今にも小太郎が母親迎ひに來たらば何とせん、此の義に當惑さし當つたば此の難儀。イヤ其の事は氣遣ひあるな、女同士の口先でちよつばくさ欺して見よ。イヤ其の手ではゆくまい、大事は小事より顯はるゝ、事によつたら母諸ともエ、イヤ、コリヤやい若君には變られぬ、お主の爲めを辨へよさいふに胸すへ、さうでござんす、氣弱ては仕損ぜん鬼になつてさ夫婦はつく立ち互ひに顔を見合せて弟子兒と云へば我が子も同然、サア今日に限つて寺入したは、彼の子の業か母御の因果か、報はこちが火の車、追付廻つて來ませうと、妻が歎けば夫も眼をすり、せまじき物は宮つかへと俱に涙に暮れ居たる。(中略)表は夫れさも白髮の親仁門口より聲高に、長松よくさ呼び出せば、オツこたへて出てくるは、腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪と墨、是ではないと放しやる、岩松は居ぬか、さ呼ぶ聲に祖父さん何じやとほしく出て來る子供は頑是なき、顔に丸顔木みしり茄子詮義に及ばぬ連れ

つた荒木作り。サア今見せうと開ける戸の奥に召たば木像ならぬ優美の姿、管相丞莞爾と笑ふて立出給へば、警固はきよつと呆れ顔、覺壽も違ひし心當、障子の内と今見る姿、心どぎまぎ疑ひながら。マアよう戻して下さつた、慥かに伯母が請取りました。ヤアどこへへ、そりやならぬ、さはいふ物の、連て歸つて見たのは木像、すりかへられたと氣が付いて、かへに戻つた、爰ではほんの管相丞、おれが目の悪いのか、見所に依つてかはるかい、イヤ替らうがかはるまいが、戻された管相丞、いざ此方へまゝ立寄る覺壽、ヤア笹太いと突飛し、相丞を又奥に乗せ、戸を引立て家來に向ひ、コリヤ儕輩も様子見る通り、如何にしても怪しい事共、此の分では歸られず、念の爲家捜しすると、踏込先きに宿禰太郎、半死半生のた打苦しき、南無三寶、太郎様が切られてござる、旦那とぞ呼ぶ聲に、警固の中から親兵衛、前後も更に辨へず、走り寄つて引起し、コリヤ悴、此の深手はどいつが所爲、相人を知らせと氣をせいたり。なう兵衛殿、相手は姑、ア、わしが手につけた。

ふわるよ、おらに漬いつ盛つた。オ、さつきに盛つた、コレ樽や徳利は目に立故、餅の上へ茶筌の先で、酒盪打てやつたので、二度の祝濟んだぢやないか。エ、夫で聞けた、婢が酒くさい餅ぢやさいふた、外へは遠慮でさう仕やるさ、おらは日來懇だけ、晩に來て寢酒一べい、お客是れにさ出でて行く。(中略)兄弟夫婦に引わかれ、取り残されし八重が身の、仕廻もつかぬ物思、門へ立そに待つ夫、思ひがけなき納戸口、刀片手に莞爾と笑ひ。女房共囁待ちつらんま、聲にびつくり走りより。ヤアいつの間になら、來たさもいはず、案じる女房を思はぬ仕方、兄弟衆のこゝについて、親父様のお腹立、其の場へは出もせいで、マア何んで此方様は納戸の内に、エ、これナアわけを聞かして、聞きたがるこそ道理なれ。暫く有つて白太夫、食み出し鏝の小脇指、三方に乗せしな、出づるも老の足弱車、舍人櫻が前に置き。用意能くばさく、いふに女房又忸り。ヤアコリヤ何ぢや親父様、櫻丸殿どうぞいなア、何で死ぬのぢや腹切るのぢや、切らればな

せよと睨みつけられ、オ、こわや蚤にもくはさぬ此の孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く。次は十五の漣くり、坊よ、親仁が手招き、さうよ乃公はモ、此處から懷れて去と、あまへる貌は馬顔で聲きりぎりす、オ、泣くな抱いてやらふと千鮭を、猫なで親がくわへ行く。私しが伴は器量よし、お見ちがへ下さるなと斷り云ふて呼び出すは、色白々瓜實顔、こいつ烏論と引さらへ、見れば首筋真黒々、墨か痣かは知られども此奴でないと突き放す。其の外山家奥在所の子供残らず呼び出して見せても、似ぬこそ道理、土が産した計り芋、子ばかりよつて立ち歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸涙も關をすへ、待間程なく入り來る兩人。ヤア源藏、此の支蕃、目の前で討つて渡せと請合ふた管秀才が首、サア請取らう早く渡せと手詰の催促、少も臆せず。假そめならぬ右大臣の若君、かき首捻首にもいたされず、暫らくは御用捨と立ち上るを松王丸。ヤア其の手はくはぬ、暫しの用捨と暇とらせ迷支度しても、裏道へは數百人を付け置き、蟻の這ひ出る所も

アヤ掣を手にかけ、落著き自慢、何科あつて身が悴を、ヤアこぼけさしやんな姫殿、そいつが立田を殺した時、こなたも手傳ひ仕やるがの、娘の敵切つたが何ぞ、質迎ひの棟梁殿、何も角も顯はれ時、さつぱりこいふたいふた。エ、残念く、悴奴が出世を思ひ、時平公に一味して菅相丞を殺さん爲、鷄に香鳴させ、十が九つ仕課せた兵衛が方便、腐り婆奴に鳴き出され、殺された悴が敵、覺悟ひろげさ飛びかゝるを、ヤア然はさせじと判官輝國、小蔭より顯はれ出、覺毒を圍ふて突つ立たり、ヤアごなたが出てもびく共せぬ、兵衛が奸計の破れかぶれ、死物狂ひの動き見よと、切つてかゝればかいくぐり、持たる刀踏落し、利腕つかんで引くりかへし、足下に踏付大音上げ、ヤア輝國が家來共、質物めらを片端からくくれくくれと云ふ聲に、始めの擬勢めけくけに一人も残らず逃失せたり。覺壽はさつかは奥の戸の、開くる間嘘やお氣詰りよ、内を見れば這は如何に、筐の木像又胸り、之は如何にさ立歸り、こなたの障子押開ければ、伯母御騒がせ給ふなと、菅相丞の御詞、爰

らの譯ならば、未練な根性さぎや任せぬこなさんが云はれずば、親父様の唯一言、案じる胸を休めてたべ、お慈悲くそ手を合はせ、泣くより外の事ぞなき。ヤア親人に何御苦勞、是迄馴染む夫婦の中、所存残さず言聞かさん、某が主人と申すもお畏れ多き齋世の君様、百姓の悴なれども菅相丞の御不便を加へられ、親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り、松王梅王櫻丸、憚有りや冥加なや、烏帽子子に成し下され、御恩は上なき築地の勤、三人の其の中に、櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園生の御所奉公、下々の下々たる牛飼舎人、勿體なくも身近く召れ、菅相丞の姫君と、わりなき中の御文使、仕課せたが仇となつて、讒者の舌に御身の浮名、終には謀叛といひ立てられ、菅原の御家没落、是非もなき次第なれば、宮姫君の御安堵を見届け、義心を顯はす我生害、今朝早々爰迄來て、右の段々、生きて居られぬ最期の願ひ、聞届けて切腹刀、親の手づから下されたい、女房、我にかはつてお禮も申し、死後の孝行頼むぞと、義を立て守る夫の詞。

ない、生貌と死貌は相格が變るなと、身代の質首夫れもたべぬ、古手な事をして後悔すなと、云はれてケツこせき揚げ。ヤアいらざる馬鹿念、病みぼうけた汝が目玉がでんぐり返り逆さま眼で見やうは知らず、紛れもなき菅秀才の首追付見せう、オ、其の舌の根の乾かぬ内に早く討て、さく切れと芝番が權柄、ハツミ斗りに源藏は胸をすへてぞ入にける。傍に聞き居る女房はこぞ大事と心も空、檢使は四方八方に眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し。ヤア合點のいかぬ、先だつて去んだ餓饑等は以上八人、机の數が一脚多い、其の悴は何處に居るぞと見管められて戸浪はハツミ、イヤこりや今日初めて寺、イヤ寺参りした子がござんす、ナニ馬鹿な、オ、夫れく、是れが則ち菅秀才のお机文庫と木地をかくした塗机、サツとさばいて云ひ披る。何にもせよ隙ぞらす油断の元と、芝番諸ともつく立ち上る、此方は手詰命の瀬戸際奥にはパツタリ首討つ音ハツト女房胸を抱き、ふん込む足もけしむ内、武部源藏白臺に首桶乗てしづ／＼出で目通りに差置き。是非に及ばず菅秀才の御首討ちたてまつる、

でも悔りかしこでも、悔りびつくり心の中に
迷ひ、どちらがどうちや輝國殿、目利なき
れて下されと、問はる人も問ふ人も、呆
れ果たる計りなり。相丞重れて、輝國の迎
ひ遅參故、睡む共なく暫時の間、物騒ケ數聞
はし故、窺ひ見れば兵衛が奸計、太郎が所
爲、立田の前は果敢なき最期、是非もなし、
伯母御の心底さこそ。某是へ來らずば、
斯る嘆きもあひまじと、今更悔みの御涙、
イヤ娘が命百人にも、替へ難き大事のお身、
怪我過ちのなかつたを、悦びこそすれ何の
泣う、何のくさいふ目に涙、なう輝國殿、
惡事の元は其兵衛、世の暇を早うく、太
郎も共に立寄て鬚引上げ、相丞の堅固の
有様、己れ親子に見せたが本望、娘が恨み
も嗜つらんこ、刀を抜けば息絶たり。へ
エ惜い乍らも不便な死様、有爲轉變の世の
ならひ、娘が最期も此刀、駕が最期も此刀、
母が罪業消滅の、白髪も同じく此刀。と取
直す手に鬚拂ひ、初孫を見る迄と、貯へ過
した此白髪、孫は得見いで憂目を見る、娘
が菩提逆縁乍ら、申ふ此尼、種々因縁而求
佛道、南無阿彌陀佛と唱ふれば、管相丞も

女房わつと聲を上げ、仇なる戀路のお媒介、
親王様の御惡名、相丞様の流され給ふ、其
の言わけに切る腹なら、此の八重も生きて
は居られぬ、私は残つて孝行せいと、嗣懸
にもよういはいれた、夫よりはまだむごい腹
切、禮を申せとばそれが何の禮所、無理な
事いふ手間で、いつしよに死れとコレ申、
女房の願立てきたへ、親父様の愚案はない
か、コレ俯伏ふくいてばかりござらすとも、よ
い智恵出してくださいませ、夫の命生死は、
親父様の御詞次第、御前は悲しうござりま
せぬか、親の手づから此の三方、腹切刀は
何事ぞと、恨みつ頼みつ身を投伏し、鬨か
こがる有様は、物ぐるはしき風情なり。
白太夫顔ふり上げ、子に死れさいふ腹切刀、
むごい親と思ふ、言わけではなけれどな、
此の曉は我身の悦、いつもより早く起き、
門の戸明くれば櫻丸、ヤレ早う来てくれた、
陸ならば夜通し、但は船か、サアまあ此方
へと叫入れて、様子を聞けば右の次第、白
太夫づれが悴には、驚き入つた健氣者、と
ごめても聞入れず、今日の祝儀仕廻迄、女
房が來ても逢はしはせぬぞ、おれが出いこ

云はと大切な御首性根をすへてサア松王
丸、しつかり見分せよと忍びの罎元くつ
ろげて慮と云はと切付ん、實と言はと助け
んこ、堅睡を呑んで控へ居る。ハア、
、何のこれしきに性根と云るか、今常張
の鏡にかけ、鐵札か金札か地獄極樂の境、
家來衆源藏夫婦を取り巻きめされかしこま
つたと捕手の人數、十手振つて立ちかゝる
女房戸涙も身をかため夫は元より一生懸命
サア實檢せよ見分と云ふ一と言も命がけ、
うしろに捕手向ふは曲者、芝番は始終眼を
配り、爰ぞ絶體絶命と思ふ内早や首桶引き
寄せ、蓋引き明けた首は小太郎、實と云ふ
たら一と討と早や抜きかける、戸涙は祈願、
天道様佛神様あわれみ給へと女の念力、眼
力ひからず松王が、ためつすがめつ窺ひ見
て、ウムコリヤ管秀才の首討つたばまがひ
なし相違なしと、言ふに悔り源藏夫婦あた
りキヨロく見合せり。(中略)武部源藏威
儀を正し、一禮は先づ跡の事、これまで敵
と思ひし松王打つて變りし所存は如何にい
ぶかしさよと尋ねれば、オ、御不審尤も、
御存知の通り我々兄弟三人はめい／＼に別
れて奉公、情けなや此の松王は時平公に隨

唱名の、聲も涙に同向ある。判官輝國大きに感じ、伯母御前に先さられ、後にさがつた儂が成敗、強慾非道の齣頭と、水もたまらず打落す、覺醒は木像抱かへ、菅相丞の右手の方、御座を並べて直し置き。兵衛親子が奸計も顯はれ、何も角も納りし、此木像の不思議な働き、斯る例もある事や。いやとよ最前もいふ如く、匹夫くが工みも顯はれ、我急難を遁れしも、暫時の睡眠前後はしらす、木に影み筆に畫く、例は本朝名高き繪師、巨勢の金岡が畫いたる馬は、夜なく出て、萩の戸の萩を喰ひ、唐土にも名畫の譽れ、吳道子が墨繪の雲龍、雨を降らせし例もあり、又神の尊像木佛などの、人の命にかはらせ給ふ例は數へ盡されず。菅相丞が三度迄、造り直せし物なれば、木にも魂備はつて、我を助けし物ならん、譏者の爲に罪せられ、身は荒磯の島守と、朽果る後の世迄筐と申し召されよと、仰せは外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に残る威徳ぞ有がたき。輝國四方を打眺め、思はざる儀に隙を取り、夜も明はなれ候へば、御立ぞと申すにぞ、又改まる暇乞、伯母が

いふ迄は、納戸の内に隠れて居いと、一寸延しに命をかばひ、助けてよいか悪いかは、おらが了簡に及ばず、神明の加護に任さんよ、最前祝儀にくれた扇三本、幸ひ繪には梅松櫻、子供の行末祈る顔で、兵神の祠へ直し置き、信を取つて御圖の立願、櫻丸が今乞、中の繪は上から見ぬ三本の此の扇、初手に櫻をさらしてたべ、エ、上らせたまへと再拜祈念、取上げた扇ひらげば梅の花、南無三、是は叶はぬ告か、神の御心を疑ふ圖の、取直しせぬ物なれども、助けたいが一ばいで、取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪、頼も力も落果て、下向すりや折れた櫻、定業と締めて、腹切刀渡す親、思ひ切つておりや泣かぬ、そなたも泣きやんな、ヤ、ヤ、ヤ。アレ聞いたか女房共、櫻丸が命惜まれて、老人の心づかひ、御恩も送らず先立つ不孝、御救されて下されい、下耶ながら恥を知り、義の爲めに相果つるよ、三方取つて戴くにぞ、もうコレ今が別れかよ、泣くに泣かれぬ夫の覺悟。白太夫目をしげたくき。深い悴が切腹、介錯は親子がする、其の刀コレ見やれと、懐から取出

ひ、親兄弟も肉縁切り、御恩請けたる菅相丞様へ敵對、主命とは云ひながら皆な此の身の因果、何にこそ主従の縁きらんよ、作病かまへいとまの願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらんよ今日の役目、よもや貴殿は討ちはせまい、なれども身がわりに立つべき一子なくば如何せんこぞ御恩を報ずる時よ、女房千代と云ひ合せ、二人が中の悴をば先へ廻して此の身がわり、机の敷を改めしも我が兒は來たかよ心の響、菅相丞には我が性根を見込み給ひ何にこそ松はつれなからふぞこの御歌を、松はつれないつれないと世上の口にかゝる悔しき、推量あれ源藏どの、悴がなればいつ迄も人でなしと云れんに、持つべき物は子なるぞやと、云ふに女房猶ほせき上げ、草葉の蔭で小太郎が聞いて嬉しう思ひましよ、持つべきものは子なるとは、アノ子が爲めには好い手向、思へば最前別れたさきいつに無い跡追ふたを呵つたさきの其の悲しき、冥途の旅へ寺入りと早や蟲がしらせたか、隣り村まで行くよと云ふて道まで逝んで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、ドゥマア内へ逝るゝもので、死顔なりとも今一度見たさ

寸志の饒別せん、用意の物こなたへと、刈屋姫の上著の小袖、かけたる伏籠諸共に、御傍近く取直させ、浪風あらし楫枕、餘寒を凌がせ申さん爲、伯母が心を蕭きしめた、小袖を鳥迄召さるる様に、輝國のお世話乍ら、頼みまするごありければ、是は宜しき違ぜ物、苦の香防ぐさめ木の小袖、家來に持せ参らんご、立寄り伏籠に手をかくる。相承暫し止め給ひ、御恩を厚く籠め給ふ、伏籠にかけし此小袖、中なる香ばきみれ共、名は大方伏屋か刈屋、伯母御前より道眞が、申し請し女子の小袖、我身にはあはぬ苦、身幅も狭き罪人が、たゞ其儘にお預け申す、我子袖と思し召し、立田の前が追善の、佛事も共にさ伯母御前の、心を悟る御詞、骨身にこたへ忍び兼ね、思はずわつと聲立て、歎くに扱はさ輝國も、心を感じ萎れ入る。覺壽が心は伏籠の内、泣たは結句あの子が爲、別れに鳥渡唯一目、伯母が願ひを叶へてと、立寄る袖を引さめ、お年故の空耳が、今鳴いたは慥かに鶯、あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴けば親鳥も、鳴くは生ある習ひぞと、心の歎きを隠し歌、鳴けばこそ別れを急げ鶯の音の、聞ゆぬ里の曉もがな、

すは、願ひ込んだる鉦撞木、コレ此の刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力、利劍即是彌陀號と、撞木を取つて打鳴す鉦もしごろになむあみだくく、なむあみだくく、なむあみだくく、念佛の聲と諸共に漣押寛げ九寸五分、弓手の脇へ突立つれば、八重が泣く聲打つ鉦も、拍子亂れて、なむあみだくく、なむあみだくく、右の肋へ引廻し、憚りながら御介錯。オ、介錯と、後へ廻り撞木振り上げ、南無阿彌陀佛と、打つや此の世の別の念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刳切つてかつばと伏して息絶たり。八重が覺悟も此の場をさらす、夫の血刀取上ぐる、枳殻のかけより梅王夫婦走り寄つて、こりや何事と九寸五分もささり捨て、親の前に畏り。コレく先程歸れと有りし時、表へは出たれど、櫻丸がこね不思議と、丞相様の御秘蔵有りし、櫻の折れたを詮議もなされぬ、彼是不審に存するから、裏より忍び立戻り、始終の様子は承はつた、へエ是非に及ばぬあの樹と共に枯し命の櫻丸、兄弟の最期餘所に見て、親人の鉦鼓に合せ、女夫の者が忍の念佛、あつたら若者殺せしと、悔む夫婦も聞く親

に未練と笑ふて下さんすな、包みし祝儀はアノ子の香奠四十九日の蒸物まで持つて、寺入さすと云ふ、悲しい事が世にあらうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死る子は頼よしと美しう生れたが、可愛や其の身の不仕合、何の因果に痴癡まで仕舞ふた事じやませきあげて、かつばと伏して泣きければ。(中略)コリヤ女房も何でほへる覺悟したお身がわり、内で存分ほへたでないが、御夫婦の手前もあり、イヤ何源藏殿申し付けてはお越たれども、定めて最期の節、未練な死を致したでござらう、イヤ若君管秀才の御身がわりと云ひ聞したれば、いさぎよう首さしのべて、アノ逃げかくれも致さすにナ、につこりさ笑ふて、ム、ム、ム、ム、ム、ム、出かしおりました、利口なやつ立派な奴、けなげな入ツや九ツで、親に代つて恩おくり、お役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らす先だちし、嗚や草葉の蔭より、うらやましがるげなりから、悴が事を思ふに付け思ひ出さるる思ひ出さるくご、流石同腹同性を忘れたる悲歎のなみだ、ナフ其の伯父御には小太郎が逢ひますわいと、取り付けてワツと計りに泣き

と詠じ捨て、名残はつきすお暇と、立出給ふ御詠歌より、今此里に鷗なく、羽たつきもせぬ世の中や、伏籠の内を洩れ出る、姫の思ひは羽ぬけ鳥。前後左右を圍まれて、父は元より籠の鳥、雲井の昔し忍ばるゝ、左遷の身の御歎き、夜は明けぬれど心の闇路、照すは法の御誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺連今も猶、榮にまします御神の生るが如き御姿、爰に残れる物語り、盡きの思ひにせきかゝる、涙の玉の木樅樹、珠の數々繰返し、歎きの聲に唯一目、見返り給ふ御容顔、これぞ此の世の別れとは、知らず別るゝ別れなり。

も、八重も死なれぬ身の繰言、是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打納め、撞木さかばる杖と笠、白太夫は片時も早く、菅丞相の御跡暮ひ、島へ赴く現世の旅立、櫻丸が魂魄は、未來へ旅立此の亡骸、梅王夫婦を頼むぞと、八重が事迄つゞくに、頼む詞の置土産、冥途のみやげは唯念佛、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、南無阿彌陀佛笠打ちかぶり、西へ行くと足十萬億土、亡骸送る親送る、生きての忠義、死したる義臣、一樹は枯し無常の櫻残る二樹は松王梅王、三つ子の親が住所、末世に夫と白太夫、佐太の社の舊跡も、神の恵と知られける。

沈む。(中略)心を察して源藏夫婦野邊のおくり親の身で子を送る法はなし、われわれ夫婦が代らん立ち寄れば松王丸イヤイヤこれは我が子にあらず、菅秀才の亡骸を御供申す、いづれも門火と門火を頼み頼るゝ。御臺若君諸共に、しやくり上げたる御なみだ、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦むにぶつ、六道能化の弟子となり賽の河原で砂手本、いろは書く子があへなくも、散りぬるいのち是非もなや、明日の夜たれか添乳せん、らむうぬめ見る親ころ、劍と死出のやまけこへ、あさきゆめみし心地して、跡は門火にふひもせず、哀は故郷と立ち別れ、鳥邊野さして連れ歸る。

竹豊兩座の興行年表

左は斯界昌隆時代四十年間の、竹豊兩座の興行年表である。

昌隆時代竹豊兩座興行年表

自享保三年至寶曆九年(吉田文三郎退座之年)

竹 本 座

豊 竹 座

山崎與次兵衛齋の門松

近松門左衛門

享保三年正月二日

鎌倉三代記

紀海香

享保三年正月二日

大和太夫再び出座。

此時豊竹若太夫受領して豊竹上野棟重勝と稱す。喜代太夫、五太夫、文太夫出動。

日本振袖始同

同 二月二十二日

曾我會稽山 同 同七月十五日

日蓮上人記 同 同十月十二日

傾城酒香童子 同 同十月二十二日

澤太夫(後、出水太夫)初て出座。

博多小女郎浪枕 同 同十一月二十日

此の興行に國太夫(後ち宮古路豊後)出座。

善光寺御堂供養 近松添册 同 同十二月十三日

本朝三國志 近松門左衛門 享保四年二月十四日

俊寛平家女護島 同 同八月十二日

島原蛙合戰 同 同十一月六日

出語、大和太夫ッレ國太夫、三絃鶴澤三三

國性爺合戰 (二度目) 享保五年正月二日

九仙山頼母、三絃三三改め友二郎。

井筒河内通 同 同三月三日

出語、頼母ッレ澤太夫、三絃友二郎。

雙生隅田川 同 同八月三日

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

傾城吉原雀 作者不詳 同八月朔日

今様賢女手習鑑 作者不詳 同十一月五日

義經新高館紀 海音 享保四年正月二十日

神功皇后三韓責 同 同五月十五日

秋 泉州堺へ出興行。

業平昔物語 同 同十月朔日

鎮西八郎唐土船 同 享保五年正月二日

富仁親王嵯峨錦 (二度目) 同六月三日

日本武尊吾妻鑑

近松門左衛門

享保五年十一月四日

隨興茂太夫再勤。

小はる心中天網島

同

同十二月六日

治兵衛心中天網島

同

同十二月六日

攝津國夫婦池

同

享保六年二月十七日

千疊敷出語、大和太夫ツレ國太夫、三絃友二郎。

女殺油の地獄

同

同七月十五日

信州川中島合戦

同

同八月三日

山簾なほりぬきの本山に作り始む。

唐土嘶今國性爺

同

享保七年正月二日

式太夫出座。

浦島年代記

(二度目)

同三月三日

心中宵庚申

同

同四月二十二日

祇女佛御前扇車

松田和吉

同九月一日

當冬、茂太夫退座。

前日本傾城始
切山榊太夫葭原雀

紀

海音

享保五年九月二十一日

三輪丹前能

同

享保六年正月二十日

伏見常盤昔物語

同

同五月十六日

吳越軍談比翼臺

同

同九月十一日

大友王子玉座靴

同

享保七年正月二日

心中二ツ腹帯

同

同四月六日

東山殿室町合戦

同

同十一月一日

玄宗皇帝蓬萊鶴

同

享保八年正月二十日

四段目出語、太夫上野椽。

大塔宮曦鏡

竹田出雲
松田和吉
近松添刪

享保八年二月十七日

記録 曾我 作者不詳 同五月六日

(戸川不麟作なるべしとの考證あり)。

傾城無間鐘 紀海音 同七月(日不詳)

日本建仁寺供養 田西澤千柳 同十一月三日

三輪太夫(後、内匠太夫)初て出座。

頼政追善芝 田西澤千柳 享保九年二月朔日

源太夫出座。

四月二十三日より堺奈良へ出興行。六月二十三日より曾根崎新地芝居にて建仁寺供養、頼政追善芝興行。秋、伊勢古市へ出興行。

新築芝居にて 女 蟬 丸 田西澤千柳 同十月十六日

此の砌より芝居大入いたし作者紀海音、西澤一風、安田睦文、並木宗輔、若手の面々出て作意をなす故、今も残れる淨るりの外題あり云々(諸事聞書往來)。

前女 蟬丸(三段目迄) 田西澤千柳 享保二十年正月二日

お吉櫻町名花昔 竹田出雲 同十一月二十四日

將軍太郎真門 關八州繫島 近松門左衛門 享保九年正月十五日

出羽冠者頼平 右淨るり一枚かんばん、京大文字山のてい、四段目の道具、奥をひらげば、一面の山、大文字の道具建見事也、しかし大阪中大の字の焼るは、ふんぎ悪しと申せしが、はたして當三月二十三日、南堀江橋通りより出火にて、大阪残らず焼亡、是を大阪享保の大火事といふ(諸事聞書往來)。

三月廿三日の大火にて竹本豊竹兩座類焼、四月八日より假芝居にて、酒吞童子、持統天皇、相模入道十日替りに興行。

三國志大全 鼎軍談 竹田出雲 同七月十五日

諸葛孔明 右大將鎌倉實記 同十一月四日

十一月二十二日近松門左衛門歿

出世握虎稚物語

竹田出雲

享保十年五月九日

和泉太夫退座。

復島羽戀塚

(近松作二度目)

同六月十五日

喜太夫出座。

大内裏大友真鳥

竹田出雲

同九月十八日

此の淨瑠璃政太夫、大和太夫、文太夫、式太夫、喜太夫等の顔振れ也。四段目の兼道の身替り古今の趣向にて大當り。

十一年六月南都へ出興行。

南北軍問答

西澤千柳

享保十年三月三日

和泉太夫、品太夫初て出座。

身替弦張月同

同

同五月六日

大佛殿萬代礎

文耕堂

同十月二日

冬 京都へ出興行、豊竹島太夫江戸に下る。

曾我錦几帳

安田蛙文

享保十一年一月朔日

新太夫初て出座。

北條時頼記

西澤一風

同四月八日

右浄るりは、竹本にて近松門左衛門作、西明寺殿百人以上薦増補にて、五段目雪の段は其の儘なり、右役割爰に出す。

初段

二段目

大序 豊竹上總少椽

切口 豊竹喜代太夫 同 出水太夫

中 同新太夫

三段目

道行 豊竹上野少椽

切口 豊竹泉太夫 同 出水太夫

奥行 豊竹喜代太夫

切口 同新太夫

切 同上野少椽

切口 同出水太夫

五段目雪の段出語り出遣ひ

同

太夫 豊竹上野少椽

同

三絃 野澤喜八

同

人形出づかひ藤井小八郎、同小三郎、豊松藤五郎、中村彦三郎也、此の浄るり古今の大入り(諸事聞書往來)。

伊勢平氏年々鑑 竹田出雲 同九月十一日

道行出語、政太夫、大和太夫、三絃友二郎也。

前鼎 軍談 (二度目) 長谷川千四 享保十二年正月十五日

敵討未刻の太鼓

七 小町 竹田出雲 同四月十八日

三莊太夫五人嬢 同 八月朔日

工藤左衛門富士日記 同 享保十三年三月二十三日

加賀國篠原合戦 竹田出雲 同 五月二十三日

此の時正面の床を横に直す

尼御臺由井濱出 同 享保十四年二月十五日

大塔宮 躰 鎧 (二度目) 同 六月十八日

眉間尺象貢 同 八月朔日

九、十兩月竹本座京都へ出興行。
閏九月十九日竹田近江(初代竹田出雲椽なり)歿。

清和源氏十五段 並木宗助 享保十二年二月十五日

五段目出語り出遣ひ、太夫豊竹上野少椽、ツレ品太夫、三味線野澤喜八、人形藤井小八郎、同小三郎、近本九八郎、中村彦三郎也。

攝津國長柄の人柱 同 同八月十五日

切に蘆荊、出語也、太夫豊竹上野少椽、ツキ出水太夫、人形藤井小三郎、三絃野澤喜八

尊氏將軍二代鑑 並木宗助 享保十三年二月朔日

南都十三鐘 並木宗助 同 五月十五日

秋、冬奈良兵庫に出興行。

後三年奥州軍記 同 享保十四年正月二日

京土産名所井筒 長谷川千四 享保十四年十一月二十五日

三浦大助紅梅豹 長谷川千四 享保十五年二月十五日

信州姨捨山 同 八月朔日

須磨都源平躑躅 同 十一月十五日

國性爺合戰 (三度目) 享保十六年五月五日

天満蟲負連中より芝居の表に初て幟を立つ。

鬼一法眼三略卷 同 同九月十三日

藤原秀卿俵系圖 並木宗助 享保十四年九月十日

切に出語、太夫上野椽、ワキ出水太夫、三絃竹澤藤四郎。

蒲冠者藤戸合戰 同 享保十五年正月七日

切に出語、前同斷。

本朝檀特山 同 五月六日

切に出語、前同斷。

楠正成軍法實錄 同 八月朔日

此の時、近元九八、和田七の人形に目の動くことを工夫し始む。

源家七代集 同 享保十六年正月二日

切に女丹前出語、前同斷。

和泉國浮名溜池 同 四月二日

五月二十四日西澤一風歿。

酒呑童子枕言葉 (近松舊作) 同 六月朔日

九月三十日豊竹上野少椽、再び受領して越前少椽藤原重泰と稱す、祝儀出語り蓬萊山也。

赤澤山伊東傳記 並木宗助 同十月十六日

安田蛙文 此の時、天満橋床三右衛門幟一本を贈る。

増補用明天皇 長谷川千四 享保十七年四月朔日
文耕堂
鐘入出語、政太夫、友二郎、桐竹三右衛門也。

伊達染手綱 (近松舊作) 同 六月八日

壇浦兜軍記 長谷川千四 同 九月九日
文耕堂

大内裏大友真鳥 (二度目) 享保十八年二月朔日
大和太夫死。

車返合戦櫻文耕堂 同 四月八日
此の時、大森彦七の人形に、指先きの動くこゝを仕始む。
和泉太夫再び出座。
六月三十日類焼、假芝居にて『景事揃』夫れより京都へ出興行。

松山元日金年越文耕堂 同 十一月十五日

前鎌倉三代記 (三段目迄) 享保十七年正月二十日
八百屋お七戀耕櫻 (二度目)

湊太夫初て出座。

今様反魂香 並木宗助 同 五月七日
(今様傾城反魂香)

待賢門夜軍 同 同 九月十日

前吉野忠信 (三段目迄) 享保十八年二月二日
切お初天神記

要太夫初て出座。

切に越前少椽觀音廻り出語、ツレ湊太夫、人形藤井小三郎、三絃竹澤藤四郎。

鎌倉比事青砥錢 安田蛙文 同 四月十五日
伊太夫出座。

莠冷人吾妻雛形 並木宗助 同 七月十六日

忠臣金短冊 並木宗助 同 十月朔日
小川文助
安田蛙文
品太夫、河内太夫と成る。

北條時頼記 (二度目) 享保十九年正月二日
此の時正面の床を横に直す。

應神天皇八白幡 文 耕 堂 享保十九年二月朔日

政太夫、義太夫と改名す。

井筒 藥平 河 内 通 同 六月八日

蘆屋道滿大内鑑 竹田出雲 同 十月五日

此の時、與勘平、彌勘平の人形は左足を外人に遣はせ、人形の腹働くやうに拵始めし也、是を操り三人懸りの始めと云ふ(諸事聞書往來)。

三輪太夫出座、内匠太夫と改名。

此の時の太夫、義太夫、和泉太夫、喜太夫、七太夫、常太夫也。

秋 京都へ出興行。

曾我昔見臺 並 木宗助 享保十九年六月朔日
那須與市西海硯 同 同 八月十三日

此の年豊竹新太夫(肥前椽江戸に下り、若松丹後椽の名代を以て芝居を興行す、葺屋町辰松八郎兵衛の座をも兼り持ちたり。
冬、伊太夫退座。

南蠻鐵後藤目貫 並 木宗助 享保二十年二月七日

清和源氏十五段 同 同 二月十七日

接待、太夫越前椽、ワキ河内太夫、ツレ湊太夫、三味線竹澤藤四郎。

萬屋助六二代かみこ 並 木宗助 同 五月六日

苅萱桑門筑紫紫 並 木宗助 同 八月十五日

駒太夫初て出座。

甲賀三郎窟物語 竹田出雲 享保二十年九月十四日

十一月二代目義太夫受領して竹本上總少椽藤原喜教と稱す。

赤松圓心綠陣幕 文 耕 堂 元文元年二月朔日

此の時、本間入道の人形に眉の働く事を工夫し始む。上總椽受領の祝儀出語「天神記冥加松」祝儀の進物を芝居の表に飾り初む。

敵討 檻樓 錦 同 同五月十二日

猿丸 太夫鹿卷毫 同 同十月十三日

御所櫻堀川夜討 同 元文二年正月二十八日

竹本上總様、播磨少様となる。

太政入道 兵庫岬 竹田小出雲 同 十月十日

美濃太夫(かつ羽伊太夫)出座。

行平 磯馴 松 文竹田好松 元文三年正月二十五日

出水太夫死

小栗判官車街道 文千耕軒 同八月十九日

美濃太夫此太夫と改名。

平假名盛衰記 文三千浅田好可松 元文四年四月十一日

島太夫出座

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

和田合戦女舞鶴 並木宗助 元文四年三月四日

安倍宗任松浦登 同 元文二年正月十五日

釜淵雙級巴 (上中下) 同 同七月二十一日

和佐太夫(後ち錦太夫)初て出座。

前蟬 城無間鐘丸 (二度目) 元文三年正月二日

丹生山田青海劔 同 同四月八日

芝居大破に付建直し普請中曾根崎芝居へ引轉し、七月十五日より新芝居にて興行。

前鎮西八郎 宗助添助 同十月八日

若竹東二郎初て出座。

奥州秀衡有髮婿 並木宗助 元文四年二月朔日

佐渡太夫出座。

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

右淨瑠璃役割

初段

大序 竹本播磨少様
中切 竹本此太夫
切 竹本此太夫

二段目

口中切 竹本内匠太夫
口中切 竹本此太夫
口中切 竹本播磨少様

道行 竹本内匠太夫
竹本文太夫

三段目

口中切 竹本島太夫
口中切 竹本此太夫
口中切 竹本播磨少様

四段目

口中切 竹本百合太夫
口中切 竹本内匠太夫
口中切 竹本播磨少様

五段目

竹本文太夫

今川本領猫魔館

將門冠合戦

文三軒堂 元文五年四月十一日
耕前松 同 七月朔日
好可 同
田小出 同
淺田雲 同

前百日會我
切戀八封柱曆(大經師音曆)

近松門左衛門十七回忌追善興行也。

同 十一月十一日

建仁寺供養 (二度目)

元文四年五月六日

漢太夫退座。

狭夜衣鴛鴦劍翹 並木宗助 同八月十五日

冬堺へ出興行。

嶋山姫捨の松 同 元文五年二月六日

佐渡太夫退座。

本田善光日本鑑 爲永太郎兵衛 同 四月十日

柚太夫出座。

武烈天皇ふたまたら 同 同 九月十日

人形に眉毛の動く事を工夫す。文字太夫出座。

伊豆院宣源氏鑑

百合大夫、紋大夫初て出座。

千竹小三文
田川好耕
前小半松
出雲平洛堂
軒雲平洛堂
寛保元年
正月十四日

新薄雪物語

冬七木夫江戸に下る。
内匠大夫退座。

竹小三文
田川好耕
小半松
出雲平洛堂
雲
同五月十六日

花衣いろは縁記

三好松洛
竹田小出雲
寛保二年
二月十四日

室町千疊敷(津國夫)

出語、此大夫、ツレ島大夫、三絃友二郎。
同四月十七日

男作だて五雁金 竹田小出雲 同 七月二日

本朝斑女まじり箋 同

寛保元年
三月四日

前後三年奥州軍記 (三段目迄)

切青梅つばき擇食さかり盛

同
五月二十一日

(心中二ツ腹帯と同物)

播州皿屋敷

爲永太郎兵衛
淺田一鳥
同七月十五日

河内大夫、駿河大夫と改名

田村鷹鈴鹿合戦

淺田正藏
同九月十日

内匠大夫再勤。

此の年冬、豊竹越前少将、豊竹駒大夫、三絃竹澤東四郎、
人形若竹東九郎、作者並木宗輔等江戸に下り、翌春より肥
前座にて興行。

百合稚高麗軍記

作者爲永太郎兵衛
文者淺田一鳥
寛保二年
三月三日

切に宮島八景出語。

大夫内匠大夫、ツレ文字大夫、三絃野澤喜八郎。

八月越前少将駒大夫等江戸より歸る。

道成寺現在蛇鱗

淺田一鳥
並木宗助
同八月十一日

鎌倉大系圖

作者爲永太郎兵衛
文淺田一鳥
爲豐岡千平
爲永千蝶
十寛保二年

十月四日紀海音殿。
春 豊竹座南都へ出興行。

風俗大平記

爲永太郎兵衛
淺田一鳥
小岡半平
豐岡千平
寛保三年

入鹿大臣皇都諍
丹州爺打栗

竹田出雲
竹田小出雲
三好松洛
寛保三年四月六日
同五月十八日

大内裏大友真鳥

(西口)政太夫(さ)げ重兵衛)初て出座。

同 十月二十五日

兒源氏道中軍記

竹田出雲
竹田小出雲
三好松洛
延享元年三月六日
此の淨瑠璃三段目を竹本播磨床の内に勤めながら中場にて
死す時に七月二十五日行年五十四歳(諸事聞書往來)。

平假名盛衰記 (二度目)

錦太夫、柚太夫出座。

同 十一月十六日

切播磨椽追善
八曲篋掛繪

久米の仙人吉野櫻

爲永太郎兵衛 同 八月朔日
此の淨瑠璃大當り、翌延享元年四月二日迄打ち續く。

潤色江戸紫

(戀の辨櫻の増補)

爲永太郎兵衛
淺岡一鳥
但見仙鶴
延享元年四月二日

柿本紀僧正旭車

同 九月十日
道太夫、春太夫出座、和佐太夫、柚太夫退座。

出語、此太夫、島太夫、政太夫、百合太夫、紋太夫、其太夫、錦太夫、袖太夫、三絃鶴澤友二郎、同平五郎。播磨少椽死去の後淨るりのれつを定め、初段の切錦太夫、二の切政太夫、三の切此太夫、四の切島太夫、其の外紋太夫、百合太夫、袖太夫、其太夫いづれも淨るりの高下にて役場を割、三絃は鶴澤友次郎、同平五郎、人形は吉田文三郎、同才次、桐竹助三郎、同門三郎、山本伊平次是らにて相勤たり(諸事聞書往來)。

遊君衣紋鑑 同

同十二月朔日

正月十二日明石越後椽座『三軍枯梗原』作者櫻井頼母文瀾堂兩人也。

明石越後椽は播磨椽門人竹本森太夫なり、延享の頃より曾根崎芝居にて興行す、寶曆の初め斷絶せり。

軍法富士見西行

並木千柳 延享二年
三好松洛 二月十三日
竹田小出雲

詩近江八景 同

延享二年
二月朔日

四月三日明石越後椽座『延喜帝祕曲琵琶』作者紀甘谷。

夏祭浪花鑑

並木千柳 同
三好松洛 七月十六日
竹田小出雲

増補大佛殿萬代礎

陸奥太夫出座。

淺岡一鳥
岡珍平

同五月四日

是當芝居はじまりてより、世話もの九段續のはじめ也、比しも暑氣の氣をまじり、四ツ目より八ツ目迄、始て人形衣裳帷子を著せたり、是三代前吉田文三郎趣向にて、七冊目長町裏の段、本ごろにて人形水をかぐることを思ひ付しは、吉田文三郎也、此の人あやつりにかけては、人形を持出れば人の如く、右狂言にては役團七九郎兵衛、一寸女房おたつを使ひ、おたつ姿は今に歌舞伎にても、桔梗の帷子、黒繻子の前帯、淺黄のわたぼふしより外を著れば、おたつやうに見へぬもふしぎ、また團七九郎兵衛人形のわけ爰にします。

筑後はじまりてより、人形頭を打事、名人にて笹尾八兵衛と云ふ者あり、今も操りにて、くらう人さも能かしらを入兵衛といふが、樂屋のふちやふ也、此の八兵衛一生の内、國姓爺のかしら、安たいじんのかしら、日本振袖の始り、そさのゐの尊の頭、其の外新淨るりに寄て、あたまかしらを作りし故、其の狂言の名を以てするす、大塔宮齋藤頭、鼎軍談にて孔明かしら、用明天皇けんびいし頭、其の外人形頭の異名敷しれず、右夏祭團七の頭、國姓爺といふ敵役のかしらを、絲髪さなし、薄にくにぬらし花色のぎん付の綿入やげんの紋、三ツ目床の内より大島左賀右衛門の手なれじ出る所、新らしく甚妙也、六ツ目より茶のこばんじまを著せ、徳兵衛頭は、そさのゐのかしらを白ぬり、厚びんにて紺のこばんじまを著せしゆへ、今に團七の狂言、此の通の姿でなければ歌舞伎操りにても、團七徳兵衛さ見ぬす、旅芝居津々浦々唐土迄も、外の衣裳はやり付けになれと、此の團七島徳兵衛島のうごさるは、三代前吉田文三郎名人さいふべし、釣船の三ぶは安體神の頭を白髪さなし、赤小豆色にぬり、照柿のかたびら龍の爪にて、玉をつかみたる紋所、しうさ儀平次は齋藤のかしら、黄色の帷子、今に於て替らさざるは、定規を版に押たる如く也。

右團七の淨るり役割左の通り

作者 竹田出雲椽

- 夏祭浪花鑑 九冊物
- 一冊目 竹本此 竹本百合 竹本太夫 竹本太夫
 - 二冊目 竹本其 竹本太夫
 - 三冊目 竹本太夫
 - 四冊目 竹本太夫
 - 五冊目 竹本此 竹本百合 竹本太夫 竹本太夫
 - 六冊目 竹本島 竹本太夫
 - 七冊目 竹本政 竹本太夫
 - 八冊目 竹本錦 竹本太夫
 - 九冊目 竹本此 竹本太夫 竹本島 竹本太夫
- 操り段々流行して、歌舞伎は無が如し、芝居表は數百本のほり進物等數をしらす、東豊竹、西竹本と相撲の如く、東西に別れ、町中近國ひいきをなし、操りのはんじやう、いはんかたなし(諸事聞書往來)。

浦島太郎倭物語

爲豊淺 爲永太 爲岡田 爲太郎 爲千參 爲兵衛 爲平島 爲衛

同 八月五日

北條時頼記 (三度目)

同十一月三日

太夫元、越前少様一世一代。

切、雪の段出語。

太夫越前少様ワキ内匠太夫改め上野様、三絃野澤喜八郎、人形藤井小八郎、同小三郎、若竹藤九郎。

閏十二月朔日、陸竹小和泉座『唐金茂右衛門東鬘』、作者櫻井頼母、並木和助也。陸竹小和泉太夫は陸奥茂太夫の弟子にして、始め和佐太夫、道頓堀芝居に於て延享より寶曆の始め迄興行す。

楠 昔 嘶

並木千柳 延享三年
竹田小出雲 正月十四日
三好松 洛

佛御前扇車
切、筑後様三十三年忌追善
心中重井筒

同 五月四日

出語、出遣ひ

太夫此太夫、政大夫、三絃友二郎、人形吉田文三郎、山本伊平治。

八月朔日、陸竹小和泉座『歌枕榊棠花合戦』作者春草堂、並木和助也。

菅原傳授手習鑑

並木千柳 同
三好松 洛 八月二十一日
竹田小 出雲

此の淨るり古今の大入、別て吉田文三郎役、菅相丞白太夫千代三役なり、菅相丞の裝束に、梅鉢若松の縫、今に歌舞伎にも替らず梅王松王櫻丸、三子とも惣髪にて、黄色、大郡内島八掛紅なれば、大阪を始、國々にも三ッ子と見ず、是吉田文三郎が仕初なり、今歌舞伎芝居にて、松王を勤る役者、三段目時平公の諸太夫じやこ云ふ姿で出れども、甚惡し右菅原の役割爰に出ず。

作者 竹田出雲
三好松洛

酒吞童子出生記 梁 塵 輔

延享三年
五月六日

冬 京都へ出興行、十一月三日越前様一世一代、外題『久米仙人吉野櫻』。

初段

大序 竹本此太夫
中 竹本百合太夫
切 竹本錦太夫

三段目

口 竹本百合太夫
切 此太夫

二段目

道行 竹本紋太夫
同 同 同 同
中 同 同 同 同
切 同 同 同 同

四段目 竹本政太夫
口 竹本錦太夫
切 同 同 同 同
五段目 竹本紋太夫
同 同 同 同

右淨るり五段目時平の人形、桐竹助三郎、花王丸桐竹門三郎、女房八重山本伊平次相勤、道具を左右へ引明れば、天満宮の宮居、正面に飾り、鳥居玉垣石燈籠も、細工美を盡し、社内には管相丞の人形をかざり、竹本此太夫、竹本島太夫、竹本政太夫、其の外太夫、神主の姿にてはいなす故、あまたの見物ありがたく思ひ、賽銭山の如く上しとなり、此の砌の人物、はなはだ正直なり。

吉田文三郎管相丞の人形遣ふには、毎朝別火を食し水をあびて、是を勤む、樂屋にて右人形は荒蕨をしき、御酒をささげ神の如くに拜するかれいなり、大序勤むる太夫も初日より七日は、吉田文三郎とおなじく慎む故、おのつこ早朝より舞臺嚴重なり、此の砌はあやつり役者上下五十人餘も一座にありし故、物事自由なり、我天明の頃、竹本芝居かれば、漸再建なし、姫小松子の日遊の淨るりを、立春姫小松と増補し、今の鹽町政太夫三段目にて勤しが、操り好きの我なれば、朝より見物に参りしに、甚不入さは云ながら、大序の人形々々立の短きのにさし、足は折、わけ掛臺と云ふ物にのせ、人形の首の働きはせんにて留め、舞臺に人形遣ひ一人も不出、人形詞の時ば、十二三の前髪、是をかいしやくにんさ云ふ、後よりゆすぶる故、もの言ふやふに、少しの見物思ふかは知られども、やはりからくりの方がまし也、右大序を勤る太夫、二代目の駒太夫弟子生駒太夫、はじめ信太夫といふ、此の者ひじゆつを盡し、大序語りけるに、場には少々見物もあれど、舞臺には一人も人なし、みすの合より是を見て、役場仕廻へば大にいかり、樂屋にて大音に頭取にいふやう、いかに我々がやうな太夫じや迎、心を盡し節を附、勤居るに、大序の人形一人も樂屋

より出す皆々竹のつくにさし、詞の時は後よりかいしやく人きてゆすぶり廻る、あれでも事が濟歟、ぐわつたりびしよりはおそりなりと、大に怒りけれども、尤なれば詞を出す者もなし、頭取は豊松彌三郎さて、大のすいなり、生駒太夫をなだめて、なる程く皆々尤なれば、明日よりは、ていれいにいたすべし、しかし後よりゆすぶるを、立ものの人形遣ひが、持て居ると思ふたが能いへば、生駒太夫なげにささふ、彌三郎はて、東のたても若竹ゆみぶるじやと、若竹伊三郎の事を思ひ出し、大わらひにて濟しが、夫より二十年計り立しに、いよく操りじだらくとなり、不景氣なるも、右菅原の大序のまへに同事なれと、立春の大序さは、雲泥萬里の相違なり、おそるべし（諸事聞書往來）。

十月二十一日、陸竹小和泉座『女舞劔紅楓』作者春草堂也。

花 筏 巖 流 島

淺田一鳥
但見彌四郎
松屋來輔
十一月十七日

裙 重 紅 梅 服

淺田一鳥
但見彌四郎
延享四年
二月十三日

上總太夫（紋太夫也）出座。

二月二十一日、陸竹小和泉座『鎮西八郎射往來』作者春草堂也。

萬戶將軍唐土日記

淺田一鳥
但見彌四郎
同 三月四日
梁塵軒

鐘太夫初て出座、上野文字太夫退座。

惡源太平治合戰

並木周藏
安田蛙藏
淺田一鳥
同七月十五日

四段目に操踊。

此の淨るり四の切上總太夫相勤、操り人形にて、おやまおざり雀踊あり、是若竹東二郎工夫にて、立役人形に屏風手さいふこさをはじめる、右屏風手さは五本のゆびをならべ

傾城枕軍談 並三好木千
竹田出雲 八延享四年
月十三日

文字太夫、信濃太夫出座、紋太夫退座、豊竹に轉す。

義經千本櫻 同 十一月十六日

此の新淨るり古今の大當りにて大入なり。
右役割左之通

初段	大序	竹本此太夫	四段	目	竹本此太夫
中切	竹本信濃太夫	道行	竹本信濃太夫		
二切	竹本錦太夫	竹本百合太夫	竹本百合太夫		
中口	竹本百合太夫	同	同		
中切	竹本文字太夫	同	同		
三切	竹本政太夫	同	同		
目	竹本島太夫	五切	目		
竹本此太夫	竹本島太夫	目	竹本此太夫		
竹本此太夫	竹本島太夫	目	竹本此太夫		

此の時吉田文三郎役渡海屋銀平、鮎屋彌左衛門、佐藤忠信
三役なり、源九郎狐の人形、廣袖にて、是に源兵車の模様、

てなり、皮にてつなぎ、てふつがひの如くす、是を屏風手
さいふ、竹本豊竹とも、おやま人形には多くつかへども、
立役には此の度始て也、甚だふかつかふな者にて、是を指
先似たるこて敷の子手さいふ、其の外入形さふぐし、西は
引せん東は小猿逆、違ひかた板突上ヶ丸さふ片腹、みなみ
な東西の流あり、つかみ手逆、ゆび五本動くのもあり、是
も東はうて首動く、西はうてくび動かす其の外入形違ひの
口がふ、西は前のみり、やはり打合せ也、東は、半合羽の
如く、左右の方にて懸る、頭巾も西にては耳ををれど、東
は耳たてたる儘也、亦手袋逆、ゆびにはめるめりやすの如
きもの、舞臺下駄、みなく東西にて替る也、人形かしら
は、竹本座笹尾八兵衛より、いろく名あるを細工し昔よ
り傳はれども、豊竹は元禄年中よりはじまりし故、人形頭
さも名細工あれども何の淨るりの何頭さいふ事を聞ず、若
竹東二郎出精より、西の頭を寫し少々違ひ寫されし故、此
の砌よりは人形の頭の名、當り淨るりにしたかひ、しやう
しやうは申せし也(諸事聞書往來)。

だんだらの丸解、人形頭そまひをにて、此の時はじめて耳の働く仕掛を思ひ付し也、源九郎故、源氏車の模様を付しにはあらず此の趣向最初より狐さ見せざるこそ故、玉もつけられず、いろ／＼に工夫をなし、右狐場をつさむる政太夫の紋所源氏車故、源氏のゆかりにて、源氏車の模様付し故、今も歌舞伎杯には、長上下にてすれども、どこそのはづみにては、此の姿にならば、源九郎狐めかず、是も三代前、吉田文三郎仕始て、何國にても此の姿でなければ、源九郎狐は出来ぬなり(諸事聞書往來)。

四月陸竹小和泉座の座元、小和泉太夫歿。

假名手本忠臣藏

竹田出雲 寛延元年
三好松洛 八月十四日
並木千柳

新淨りりの折から、古今の大入なれど、少し大もありて、當十月より、此太夫、島太夫、百合太夫、友太夫、退座なし、東豊竹越前の芝居へ相往し故、立物の太夫多く出座せし事なれば、是非に不及、替り役にて、政太夫、錦太夫東より入替りし、千賀太夫、長門太夫、紋太夫事、上總太夫改名、内匠太夫事、此の冬大隅椽と受領し、此の人数にて、やはり忠臣藏を同年十一月迄相勤、十月に閑有てやはり替り役にて繁昌せしは、ごだいの狂言が能故也、斷りなるかな、此の忠臣藏歌舞伎にては、大銀のごだいに、三箇の津立物の役者も、由良之助身上定也、近在國々までも忠臣藏は、幾度しても見あかず、しやう根杯さいふこまはじまり、後には淨りりの文句を打消し、大序より大切まで幕引ず杯さ、いろ／＼にすれども、古いさいひく、見物も見るは忠臣藏なり、是より後、忠臣藏の増補數々新淨りり出れども、古元の假名手本にまさりしはなし、扱々奇妙なる淨りりなり(諸事聞書往來)。

大隅椽再勤入座、内匠太夫、千賀太夫、長門太夫、土佐太夫入座。

容競出入の湊

並豊岡木 寛延元年
淺田一桂 正元二年
歌舞伎黒船の狂言を寫せし新淨瑠璃也。
樹太夫入座、陸奥太夫退座。
鳥桂平輔

東鑑御狩卷 並木一丈鳥助 同七月十五日

蘆屋道満大内鑑(二度目)

寛延元年十一月十二日

攝州渡邊橋供養

豊田 安田 大助 寛延元年十一月四日
浅田 一蛙 鳥 十一月四日

此の外題大入り翌二年三月迄打續け、更に切淨瑠璃に『八重葎浪花濱萩』を加へ興行したり。此の時竹本芝居より此太夫、島太夫、百合太夫出勤、駒太夫、江戸へ行、上總太夫、道太夫、元太夫、春太夫竹本へ出勤。右新淨瑠璃役割

初段 豊竹 島太夫 豊竹 阿曾太夫
中 同 鐘太夫 同 此太夫
切 伊勢太夫 同 樹太夫

二段 豊竹 友太夫 同 伊勢太夫
中 同 樹太夫 同 樹太夫
切 同 百合太夫 同 樹太夫

三段 豊竹 阿曾太夫 同 此太夫
切 同 鐘太夫 同 樹太夫
道行 同 樹太夫

四段 豊竹 友太夫 同 伊勢太夫
同 樹太夫 同 樹太夫
同 樹太夫 同 樹太夫

五段 豊竹 友太夫 同 伊勢太夫
同 樹太夫 同 樹太夫
同 樹太夫 同 樹太夫

前攝州渡邊橋供養(二段) 豊田 安田 大助 寛延二年三月二十六日
切八重葎浪花濱萩 浅田 正蛙 鳥 助 三月二十六日

同二年三月迄大入、後に北の新地白人かしくさいふぜんせい
いの女郎ありしが、去家敷方の客に招引せられ、八重と名
を替へ、天満老松町邊に住居す、此の八重酒を呑げ、前後
を忘れ、しやうたいなきが病也、兄に絞りを結て渡世とす
る吉兵衛といふ者あり、此の者正直ものにて、折々妹に、
だじやくなる酒の事を異見せしに、或時言ひ募り、兄弟喧
嘩にて、刃物さんまいをなし、兄吉兵衛に手を負す、直さ
ま入牢あつて、言譯立がたく、寛延二年己卯三月十八日、
大阪中引廻し、千日寺にて獄門となる、此の時南新屋敷福
島屋清兵衛といふ方の女郎園といふ者、大寶寺町大工の丁
稚上り六さいふ者、西横堀にて心中をなす、此の間中山
無縁經とて、神崎に於て御駕籠の十右衛門といふ者、多く
の馬士と口論なし、手を負せる、是三月十八日十九日のこ
と也、同二十日に外題看板を出

○攝州渡邊橋供養 大序より二段目迄
○八重葎浪花濱萩 七冊物

栗島譜嫁入雛形

竹田出雲
三好松洛
並木千柳

寛延二年
四月十八日

切出語、大隅様、ワキ千賀太夫、三絃友次郎。

雙蝶々曲輪日記

同

同
七月二十四日

夏 龍澤友次郎死。

此の淨瑠璃趣向は能けれど夏祭りも同事、團七に徳兵衛を前髪にせしやうな狂言さばなばだ不入り(諸事聞書往來)。

源平布引瀧

並木千柳
三好松洛
同
二十一日

序切錦太夫、二切上總太夫此の時病死す、三段目政太夫、四段目大隅様にて、實盛の人形、吉田文三郎人の如く見ゆる、吉田才次瀬尾十郎、木曾よししたの役勤られしに、二段目にてよししたの人形に舞臺にてゑぼしすほうを著せる趣向、是は昔澤村宗十郎が油斗の伊勢新九郎の仕打を寫され

右新淨るりかしくの趣向は、三月十八日十九日の事なりしを、二十日にかんばんいたし、二十六日初日、古今稀なる早きことさ、大阪中こそつての評判也、是作者並木惣助および惣太夫操り中、夜を日についての出精、前代未聞の事共也さ、大阪は言ふに及ばず、近國よりも大入りなせしこそ、右かしくの役割斯の通り

八重霞浪花濱萩 七冊物

かし座敷の段

千里寺の段

一冊目

口豊竹阿曾太夫

新やしきの段

豊竹友太夫

若林屋の段

同 百合太夫

六冊目

同 島太夫

二冊目

豊竹此太夫

神崎の段

同 此太夫

詮議の段

三冊目

口豊竹阿曾太夫

同 此太夫

四冊目

同 伊勢太夫

七冊目

同 友太夫

同 豊竹

同 伊勢太夫

同 阿曾太夫

同 友太夫

同 豊竹

同 伊勢太夫

同 阿曾太夫

同 友太夫

同 豊竹

同 伊勢太夫

同 阿曾太夫

同 友太夫

是近年の大入りにて、七月十五日より、切に操り、大踊り雀黒羽おやま踊り、伊勢おんご、新作にて、道頓堀島の内、茶屋懸あんごうそろひ甚だ宜しく云々(諸事聞書往來)。

攝州渡邊橋供養の取り替

前花和讚新羅源氏

中八重霞浪花濱萩

切操大踊雀黒羽おやま

踊、伊勢音頭

九月二十三日初代此太夫受領して筑前少椽藤原爲政と稱す

梁塵軒 同七月十五日

十帖物 太郎

淺安田 同十一月四日

並木宗輔、駒太夫江戸より歸る、伊勢太夫江戸に下る、八重太夫初て出座。

たれど、歌舞伎にては、其の人一人、操りにては大勢懸り、黒き手をいだし故、はなはだ見にくし、吉田才次名人なれども、文三郎には、はるかにおされり(諸事聞書往來)。

國性爺合戰 (四度目)

寛延三年七月十六日

二段目の虎本皮にて張り眼杯も働きをなし九仙山、大隅椽、ワキ千賀太夫、三絃野澤喜八也。

九月七日並木宗輔(號千柳)歿。

文武世繼梅

並木千柳 同十一月二十四日
三好松洛

二代目紋太夫初て出座

戀女房染分手綱

吉田冠子 寶曆元年
三好松洛 二月朔日

(丹波與作の増補)

右淨るり五ツ目吉田文三郎道成寺の所作、ワキ吉田甚五郎、太鼓桐竹助三郎、笛吉田彦三郎、太鼓吉田才次、小鼓桐竹門三郎、是近年の大入也。
右戀女房に、右吉田文三郎の役、定之進重の井二役を遣ひ、詮議場は樂屋に休息して居られるに、舞臺に人形多くならび、蟹坂左内は平治を庭へなげ落すころに、下より人形をさる者なき故、文三郎見兼、我此の人形をさらんぞ、初日に思はず下へ落たる處は、平治の人形に袴の上をかづけ、くるく舞ふてうづくまる思ひ入をせられしに、見物一やうにわつと云つてほめにける、文三郎つひてんがうにせられし事さへ、今に歌舞伎にては、平治をする敵役、此

梅七川夏楓連理枕

淺安田 同
難波正三 同
藏助桂鳥 同
六月朔三日

和田合戰女舞鶴 (二度目)

島大夫、若大夫さ成る、『和歌八景』出語。

同 八月七日

玉藻前曦袂

浪岡橘 同
淺田蛙 同
安田桂鳥 同
寶曆元年正月十五日

の思ひ入をせぬはなし、いかさま文三郎は名人なり、右戀女房の淨瑠璃昔近松が作丹波與作の古淨るりを増補なし、吉田文三郎冠子あらかた作をせられしこのこゝ、何かに付て名人也(諸事聞書往來)。

役行者大峰櫻

竹田松外記
竹田文四

同十月十七日

竹本大隅椽(初代内匠太夫)大和椽藤原宗貫と改む。

名筆傾城鑑

吉田冠子
中村閨助
好村松洛

寶曆二年
二月二十三日

浪花文章夕霧塚

浪岡橋平
淺田蛙鳥

同四月二十五日

頼政扇の芝
切操り大踊り

(二度目)

同七月十五日

日蓮上人御法海

宗輔一鳥添副
並木正三

同十月十日

百合太夫退座京へ上る。

一谷嫩軍記

並木宗輔(三段目迄)
淺田一鳥
浪岡鯨兒
並木正三
並木正三
竹波甚藏
豐藏

同十二月十二日

八重太夫、時太夫(後ち此太夫也)と成る。

役割

初段 大序 豊竹筑前少椽
中切 同 信濃太夫
三切 同 鐘太夫
三目 豊竹阿曾太夫
中口 同 友太夫
中切 同 鐘太夫
切中 同 筑前少椽
道行 同 鐘太夫
同 信濃太夫
二目 豊竹時太夫
同 友太夫
同 阿曾太夫
同 若太夫
同 鐘太夫
同 筑前少椽
同 信濃太夫
此の淨瑠璃古今の大入り翌年まで打續にて、盆より切に操り踊りを附る。

世話言漢楚軍談

竹好田外記
近松半洛
中村冠二助
吉田子

同五月十八日

前川中島

(三段目迄)
(二度目)

同七月十六日

伊達錦五十四郡

同

十一月十六日

春太夫、陸奥太夫江戸より歸る。

春(三年) 竹本座京都に出興行。

愛護若名歌勝鬨

同

寶曆三年五月五日

道行山の段春太夫大當りにて是等名をあげる、舞臺一面水の船にて道具はなほだ宜し(諸事開書往來)。組太夫、折太夫初て出座、政太夫、錦太夫京都へ上る。

菖蒲前操弦

竹好田出雲
三田冠子
吉田松半
中村冠二

寶曆四年二月三日

大和椽上京、陸奥太夫退座、信濃太夫再び出座。

小袖組貫練門平

同

同四月十七日

新薄雪物語

(二度目)

同七月十六日

信濃太夫退座。

倭假名在原系圖

森太夫、志賀太夫出座、友太夫退座。

淺田一柳
並木兒
並木素六

寶曆二年十二月七日

雄結勘助島

同

寶曆三年七月二十八日

苺萱桑門筑紫髻

(二度目)

同 十月朔日

十七太夫出座、信濃太夫、志賀太夫退座。

相馬太郎李文談

並木永藏
並木鳥輔
並木素柳
竹千露

寶曆四年二月二十一日

前義經腰越狀

(三段目迄)
(南蠻鐵後藤目貫の増補改作)

同 七月二十九日

切笠淵雙級巴 (二度目)

小野道風青柳硯 同 十月三日

此の時傳法屋源七事竹本染太夫、同家太夫はじめて出座、
三の中染太夫、四の口家太夫、斯初床なれど新物にて役場
を取は淨瑠璃稽古が能故、今の太夫にない事也、右三の中
染太夫の三味線鶴澤長藏と云しは近比はてし市山勘五郎是
也(諸事聞書往來)。

前相模入道千匹丈 (二度目)
後庭涼操座敷 (寄せ物)
寶曆五年七月十六日

大和様歸る。

前柏子扇淨瑠璃合
後年忘座敷操
同十一月十六日

友太夫出座、桐太夫初て出座。

崇徳院讚岐傳記 同
寶曆六年二月朔日

森太夫、中太夫出座、錦太夫上京。

鬼一法眼三略卷 (二度目)
同六月朔日

播磨條十三回忌追善。

天智天皇苜蓿庵
並木田 同十二月十五日

冬伊勢太夫江戸より歸り新太夫と成る、阿曾太夫江戸に
下る、伊勢太夫、式太夫出座。

三國小女郎曙櫻
難波上野 寶曆五年四月二十一日

雙扇長柄松
並木田 同七月七日

秋 界へ出興行。

後三年奥州軍記 (二度目)
同十一月朔日

義仲勳功記
淺田 寶曆六年三月十八日

勳功記序切鐘太夫、二の切駒太夫、三の切筑前少條、四の
切若太夫、大切菊慈童、人形藤井小八郎、出遣ひ座中總員
出語り也。

男作五雁金 (二度目)

曾根崎芝居にて興行也。

寶曆六年八月二日

平惟茂凱陣紅葉

竹田冠出 吉田景冠出 近松半松出 中村松出 三好松出 十月二十一日千軒軒竹田出雲榎清定歿。

同十月十五日

姫小松子の日遊

政太夫京より歸る。

吉田冠出 竹田小出 近松半松出 三好松出 二寶

寶曆七年朔二日

薩摩歌妓鑑同

大和榎上京、百合太夫出座。

同九月三十日

甲源氏櫻軍記

淺田藏主 黒田藏主 難波三飲 豐竹律藏

寶曆六年閏十一月朔日

寫畫足利染同

諏訪太夫初て出座。正月五日豊竹肥前榎藤原清正(江戸)。

寶曆七年正月二十六日

前九年奥州合戦

淺田藏主 黒田藏主 七波才 豊竹律藏

同三月二十日

清和源氏十五段切山伏接待の段

(三度目)

同八月朔日

忠臣幡そらひ 豊竹筑前少榎一世一代出語、ワキ鐘太夫、ツレ此太夫(此の時時太夫)三絃鶴澤寛次。此の砌人形遣立者は若竹東二郎、豊松藤五郎、同彌三郎、藤井小八郎、同小三郎、若竹伊三郎、同新十郎、中村勘四郎、是等出精なし、みなく名人の部也(諸事聞書往來)。

昔男春日野小野

竹田小出 雲
竹田小出 雲
近松半瀧 彦
北窓後 丸
十二月十五日

敵打崇禪寺馬場

吉田冠 寶曆八年
近松半 三月十三日
三好松後 一落

菅原傳授、手習鑑

(二度目) 同 五月五日

蛭小島武勇問答

竹田小出 雲
吉田冠 彦
近松半瀧 彦
三好松後 洛
同八月十九日

大和棟歸る。
此の淨瑠璃太夫、政太夫、錦太夫、組太夫、深太夫、紋太夫、中太夫、百合太夫等也。

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

祇園祭禮信長記

豊中 同十二月五日
浅田 阿契
三津 一應
黒藏 飲子
主鳥律

麓太夫、恒太夫出座。
新太夫、伊勢太夫と成る。
此の淨瑠璃役割

初段

大序 豊竹若太夫

中 同 伊豆太夫

口 同 鐘太夫

切 同 此太夫

二段目

口 豊竹新太夫

中 同 十七太夫

切 同 鐘太夫

三段目

道行 豊竹新太夫

同 常太夫

同 伊豆太夫

同 駒太夫

同 鐘太夫

同 若太夫

同 此太夫

同 十七太夫

同 駒太夫

同 鐘太夫

同 麓太夫

右淨るり丁丑十二月五日より、寅卯三年越に勤る、此時若竹東二郎織田信長此下藤吉の役を遣ふ、右藤吉の人形頭、京高臺寺太閤様の木像を細工人に寫させ、此の頭にてつかふ、若竹伊三郎松永大膳の役、思のやうなる頭を打せつかへども、竹本人形の頭とは違ひ、さしてたる事もなし、此の淨るりの時、鍋屋宗兵衛豊竹麓太夫と改名にて、漸五段目を相勤候得共、段々出精なし、今は麓太夫にまさりしはなしといふも、能き太夫がなくなり、わるき太夫がふへる故、麓太夫の目に立ば、修行のかうにて尤也(諸事聞書往來)。

衰滯時代の百二十五年

漸衰期の二十五年 吉田文三郎

餘りに世才に聰く又餘りに自我的なりし別座創立の野望 父子相次いで竹本座を退く

作者として
の吉田冠子

座主近江の入牢 竹本座の人氣の失墜

竹田竹本打
込み興行

さまざま苦心した

恢復策も更に效無し 僅に景氣を挽回した『本朝廿四孝』竹本座の顔振

京阪竹本座の
入替り興行

竹本座の退轉 再興

一向に客足附かず窮すれば出るさまざまの愚痴 竹豊兩座の打込み興行 僅に一と

興行に
て分離 近松半二が智慧を絞つた『妹背山婦女庭訓』四五年の不入を
一時に取り還す

一層悲惨なりし豊竹座の末路 重々の不幸 遂に閉座 北堀江市の側

の芝居の創立 『妹背の門松』
の大當り 再興した豊竹座 堀江座の顔振

各座の興行年表

吉田文三郎が門下を率ゐて竹本座を去つた寶曆の末年より、天明三年近松半二が歿するに至るまでの二十五箇年は、義太夫節淨瑠璃の漸衰期——急轉直下の形勢一變の過渡時代にして、爾來明治の十七年、文樂彦六兩座の對立に至る迄の大約百箇年を、斯界の沈滯時代とする。

享保より寶曆に至る斯界昌隆時代の四十年中、其の前期の三十年は、主として吉田文三郎の人氣を中心とした竹本座の全盛時代にして、文三郎が斯道に竭した功績は赫々

吉田文三郎

として斯界の歴史に輝いて居るのである。されど一旦の野望よりして彼が吉田一派を率ゐて竹本座を去るや、斯界の景氣は俄然として變じ、形勢は急轉直下した。

吉田文三郎は、山本飛彈椽より直傳を受けたりと稱せらるゝ、竹本三郎兵衛の實子にして、享保二年『國性爺後日合戰』の時始めて出座し、錦しやの出遣、片手にての晴業に人の眼を驚かし、流石に三郎兵衛の子程あり、若年なれども天晴の腕前、往々は一廉の立者たるべしと云はれたる位の天才兒なりし。爾來四十年竹本座に勤めて種々の工夫を凝らし、人形の服裝舞臺の背景に至るまで注意を加へて研究し、歌舞伎役者までが彼の人形振りに倣ふて所作の手を附けると云ふほどの伎倆もあり、評判もあり、其の子文吾二代目文三郎亦父に次いでの名手にして、父子三代竹本座に屬し、同座の興隆——廣き意味に云へば我義太夫節淨瑠璃道の興隆——に與つて偉大なる貢獻を爲し、竹本座の興行には、無くてはならぬ一人として、座主出雲も重用して頭取役を命じ、優遇歡待、彼が爲すさまゝに、其の我意をも徹ふさせて居たのであつた。されど彼は至藝の人としては餘りに世才に聰さとしく、又餘りに自我的なりし。されば其の人氣と伎倆とを倚んで次第に驕傲となり、『假名手本忠臣藏』の紛紜に、我意を立て徹して勝利を取りてよりは、いよゝ高慢の鼻を高め來り、はては別座を組織して竹本座の向ふを張り、一ト當當てゝ見んと、の野望をも起すに至り、寶曆六年十二月座主出雲清定病歿し、近江代りて座主となりし比よりそろゝ準備に取りかゝり、同九年準備成り、まさるに檜幕をも揚げんとする間際に至り、人ありて和解し、文三郎自身は吉田一派を率ゐ

餘りに世才に聰く又餘りに
自我的なりし

別座創立の野望

父子相次いで竹本座を退く

『諸事聞書往來』には
親吉田文三郎粹文吾其外
の太夫をかたらひ、大西
芝居にて操り興行せんご
たくみありしゆ、座元よ
り是をばびく、段々挨拶
人ありて覺なきこ申せ
し故、吉田文三郎暫く京
都の芝居を勤、粹文吾祖
父の名をつぎ、吉田三郎
兵衛と改名す
と記せり

作者としての吉田冠子

座主近江の入牢

『諸事聞書往來』には
此の砌芝居は近比死去せ
られし竹田近江大棟、芝

て退座して京都に上ぼり、其の子文吾祖父の名を襲いで三郎兵衛と改名し、留座して出勤することとなりしも面白からず、同十一年退座し、父名を襲ぎて文三郎と改名し、一派を率ゐて江戸に下つたのでありし。

願ふに竹本座の運命は、文三郎の在否如何に係らず、大勢の趨くところ早晩没落の否運に遭逢したるなるべしと雖も、彼の退座はたしかに同座の運命をして、急運直下の降衰せしめたことは否定することが出来ないのである。彼は人形遣ひとして非凡の伎倆を有したるのみならず、又淨瑠璃作者としての伎倆をも併せ有したのでありし。作者としての彼は吉田冠子と號した。寶曆元年『戀女房染分手綱』に始めて改作の筆を執り、爾來竹本座附の作者と共に、『名筆傾城鑑』『世話言漢楚軍談』『伊達錦五十四郡』以上孰れも、寶曆二年、『愛護若名歌の勝鬨』寶曆三年、『菖蒲前操弦』『小袖組貫練門手』『小野道風青柳硯』以上寶曆四年、『崇徳院讀岐傳記』『平維茂凱陣紅葉』以上寶曆六年、『姫小松子の日遊』『薩摩歌妓鑑』以上寶曆七年、『敵討崇禪寺馬場』『蛭小島武勇問答』等を合作して居る。孰れも左したる佳作にはあらずと雖も、斯く文才ありしだけ、人形の振り、表情、衣裳の工夫、背景の考案等、舞臺上に於ける工夫考案に付ては、一層の伎倆と妙趣とを發揮し得たのでありし。

文三郎の退座によつて、いたく市中の評判を落したさへあるに、座主近江が分に過ぎた榮華を極め、市中の富豪貴人と交り、寶曆十一年臘月の年忘れの招宴には、一夜に四季の様を庭前に構へ、一同を驚かすほどの趣向を凝らすなど、あまりに驕傲に過ぎたる行

竹本座の人氣の失墜

居銀主に竹田、出羽、中の芝居、竹本と四軒の仕分け也、此の人数々*

* ちやうに長じ、大阪中銀持貴人杯にも付合、同年十二月年忘れにて我下家敷にて貴人を寄せ、一夜に四季の體を庭に置て人々に見せ、はなはだおごりに長ぜし故、御公儀より御捕方にて近江大塚、鐵屋某、田中氏など入牢さなる。此時竹本淨るりは古戰場鐘懸松五段續、此の節大阪町人へ御上より五千圓の用金を家へ申付られし故、はなはだ物さばがしく、古戰場鐘懸松を五千兩金借待と誰いふさなく申せしもおかし、夫より程なく相濟、皆々出牢す。

と記したり

竹田、竹本打込み興行

動ありけるより、咎められて入牢の身となり、程なく無事に落著となりはなりたりしと雖も、市中は五千兩の御用金を命せらるゝなど、一時なか／＼の騒ぎなりしより、自然と興行上の人氣にも障り、十二年九月半二、三郎兵衛等四人の合作、『奥州安達原』を上場したるも思はしからず、翌十三年正月には『假名手本忠臣藏』を擔ぎ出し、二度目

乍憚口上

一、御、存、知、被、遊、候、通、竹、田、芝、居、之、義、一、昨、年、よ、り、差、控、罷、在、候、處、難、有、奉、蒙、御、赦、免、舊、冬、よ、り、初、日、出、し、候、所、先、年、に、不、相、替、御、町、中、様、御、最、負、厚、被、成、下、芝、居、繁、昌、仕、候、段、御、當、所、は、勿、論、遠、國、へ、の、外、聞、實、に、身、に、餘、り、恐、悅、に、奉、存、候、然、る、所、此、度、之、類、火、に、燒、失、仕、候、早、速、に、芝、居、相、建、申、義、も、難、成、候、に、付、當、芝、居、に、相、交、り、か、ら、く、り、子、供、狂、言、奉、御、意、入、候、元、祖、よ、り、相、續、き、致、來、り、候、義、に、有、之、候、得、共、此、上、は、猶、々、御、最、負、御、取、立、を、以、て、兩、家、相、續、の、程、偏、に、奉、頼、上、候、別、し、て、御、斷、申、上、候、は、御、見、物、様、方、の、場、出、棧、敷、等、取、拂、ひ、濱、芝、居、同、前、に、仕、淨、る、り、あ、や、つ、り、か、ら、く、り、子、供、狂、言、番、組、を、相、立、奉、御、意、に、入、候、間、惡、敷、を、御、捨、置、被、遊、御、最、負、御、憐、愍、を、以、て、御、見、物、に、御、出、之、程、兩、芝、居、一、座、不、殘、奉、希、上、候、以、上

註 此の口上に「此度の類火に燒失」とあるは、十三年正月九日夜出羽の芝居よりの出火

にて類燒の事を云へる也。此の火事に竹田、越前(豊竹)の芝居は燒失し、筑後(竹本)の芝居は無事なるを得たり。

と口上を出し、淨瑠璃あやつり、からくり、小供狂言打交せ、竹田竹本兩座打ち込みにて、

さまぐく苦心した恢復策も更に效無し

「木札十文、さじきおい込二文、棧敷二百二十文、半疊二文、早朝一番に御出被遊候御見物様毎、日百人の間ほうらくにて御目にかけて申候」と云ふ、人氣取りの興行をも試みたりしと雖も、一向に引き立たず、四月よりは舊に復し、二ツ外題毎日替りにて日山城國蓄生塚後天竺徳兵衛郷鏡兵衛の合作を出したるも、此れ亦はなはだ不入にして、八月前は諸葛孔明鼎軍談切は御前懸り淨瑠璃相撲と題し、相撲の取組に倣ひ、東西兩座の當り淨瑠璃を隔日に上場し、而も大和椽の一世一代と云ふ鳴物入りにて興行したるも依然として人氣は寄らず、十二月御所櫻堀川夜討二度の興行を打ち上るや、一座は悉く江戸に下つたのであつた。留守中の竹本座は、京の竹本座の一連下りて興行したが此亦不入り

翌明和元年十一月歸阪し、江戸土産として、江戸花王愛敬會我を上場し、續いて十二月、假名手本忠臣藏三度目興行翌二年には、蘭奢待新田系圖、愛護雅名歌勝関二度補富士日記、菖蒲刀、御祭禮棚閣車操淨瑠璃、大友姻袖鏡牛二松洛三郎兵衛等六人の合作、會狂言役者雙六、事始室早咲等、引き替く七回までも、矢継ぎ早の興行を試みたりしと雖も何時も不入にして、新に太夫を抱へ、東より島太夫鐘太夫を招き、住太夫も京都より歸りて出勤し、三年正月十四日半二松洛、三郎兵衛等六人の合作になる、『本朝廿四孝』を上場し、四段目には「見物場をはすに引割御殿をせり上ぐる」大道具を工夫し、其の評判にて大入りを取り、やうやくにして一時の景氣を挽回することを得たのでありし。

漸衰期二十五年間の竹本座の舞臺には、大和椽あり、染太夫初代あり、春太夫初代あり、錦太夫初代あり、二代目及び三代目政太夫あり、岡太夫あり、綱太夫初代あり、咲太夫あり、明和に入

漸衰期二十五年間の竹本座の顔振

僅に景氣を挽回した『本朝廿四孝』

つては島太夫、鐘太夫、住太夫も加はり、組太夫も出座し、三絃には大西藤藏あり、文吾あり、初代及三代目鶴澤文藏あり、二代目文藏は、多く京都に居れり。鶴澤又吉初代文藏門弟あり。人形には桐竹三右衛門あり、門三郎あり、吉田冠十郎あり、冠藏あり、才治あり、藤井八十八あり、之を寛延、寶暦の最盛時代の顔振に比するも、何等遜色とてはなかつたのであつた。

即ち『奥州安達原』の役割は、

初 段	大序	竹本大和椽	中	竹本政太夫
		竹本絹太夫	切	竹本大和椽
		竹本文太夫		竹本春太夫
		竹本染太夫	道行	竹本絹太夫
二 段 目	口	竹本咲太夫	口	竹本志賀太夫
	中	竹本志賀太夫	中	竹本錦太夫
	切	竹本春太夫	切	竹本政太夫
三 段 目	口	竹本錦太夫	五 段 目	竹本道太夫
判官切腹	太夫	竹本政太夫	九 段 目	竹本錦太夫
五 段 目		竹本三根太夫		竹本綱太夫
		竹本錦太夫		竹本岡太夫
六 段 目		竹本文太夫	人形	由良之助
				吉田文三郎

となせ 桐竹門三郎

小浪 藤井八十八

本藏 吉田冠藏 力彌 竹川七良治

と云ふ顔振れにして、洵に多士濟々、斯程の一座を以て毎興行の不入りとは、如何にも合點のゆかぬ次第なりと雖も、畢竟時尚の變化にして、時人の操り熱は、次第に冷却降衰しつゝあつたのでありし。されば『本朝廿四孝』を上場するや、一座の連中も必至になり、四段目には引割御殿のせり上げをも工夫して、大道具を觀せ、近來稀なる盛況を致し、次で十月『太平記忠臣講釋』半二、三郎兵衛松洛等六人の合作を出し、『忠臣藏』にも優りたる趣向なりとて好評を博し、多年の不人氣も一舉に恢復し得たるかの如き氣配を呈したりと雖も、一向に持續せず、翌四年六月には、『夏祭浪花鑑』を擔ぎ出して見たが何等の利目きまもなく、八月には、半二、松洛、三郎兵衛等が智慧を絞ぼつて書き上げた『關取千兩幟』を上場したるも、さしたる評判も取れず、はては散々に氣を腐らし、顔振れでも變へて見たらと云ふ心算より、京都の竹本座と交替し、京の一連錦太夫、岡太夫、春太夫、千賀太夫等也浪花に下り、石川五右衛門一代噺並木正三等作を出して、人氣轉換策を講じたりしと雖も、此亦僅に一ト興行にて遁げ歸ると云ふさんさんの有様にして、詮方つきて又京都より歸り、半二、松洛、三郎兵衛等四人の合作、『三日太平記』を上場したるも一向に當らず、創立以來爰に八十三年、一時は「操流行して歌舞伎はなきが如し、芝居表は數百本の幟、進物等數を知らず、東豊竹西竹本と相撲の如く東西に別れ、町中近國ひいきをなし、繁昌いはん方なし」とまで云はれたほどの竹本座も、檀幕だんまくを撤して退轉し、跡を歌舞伎芝居の山下八百藏に譲つて、離散せざるを得ざるの果

竹本座の退轉

京阪竹本座の入れ替り興行

竹本座の再興

一向に客足附かず

窮すれば出るさまの愚痴

竹豊兩座の打込み興行

僅に一ト興行にて分離

敢なき次第とはなつたのでありし。實に明和四年十二月である。

然るに八百藏の芝居も思はしきこともなく、僅に二の替りにて落城すると云ふ次第

なりしより、最負筋の勸奨うけあがりやら、後援やら、さまざま評議の末再興と決し、明和五年六月日

開場し、名代を近松門、左衛門とし、淨瑠璃外題も門左衛門作、傾城阿波の鳴戸なるとと銘打つて

其の實近松牛二、八民平七寺田兵藏、竹田文吉竹本三郎兵衛の合作也上場し、再興休業の策を工夫したりしと雖も、一向に客足附

かず、次で七月日朔おはつ徳兵衛とくへいゑを改作しけふのふのお初讀賣三巴よみうりさんぱと題して上場し

たが、此れ亦不入りにして、中日までもなく閉場すると云ふ有様なりしかば、さまざま愚

痴も出れば、彼れ此れと縁起をかつぐ連中もあり、元來もとく近松門左衛門など、有もせぬ名

前を擔ぎ出すこと第一に不縁起なり、其の上外題の『傾城阿波鳴戸』とか『讀賣三巴』とか、陰

數の六字名四字名も面白からずなど、彼れ此れかづきまはりたる末、結局竹本座再興と

號して華々しく縁起を祝ふ事となり、外題も『初檜操目錄』と祝儀にふさわしき名を選び、

古き當り淨瑠璃を寄せ集めて人氣を取らんと試みたりしと雖も、僅に三日目にて閉場

すると云ふ大々の不入りにして詮方つきて豊竹座と交渉し先此豊竹座も亦退轉せしが、此頃再興して、不況ながらも辛

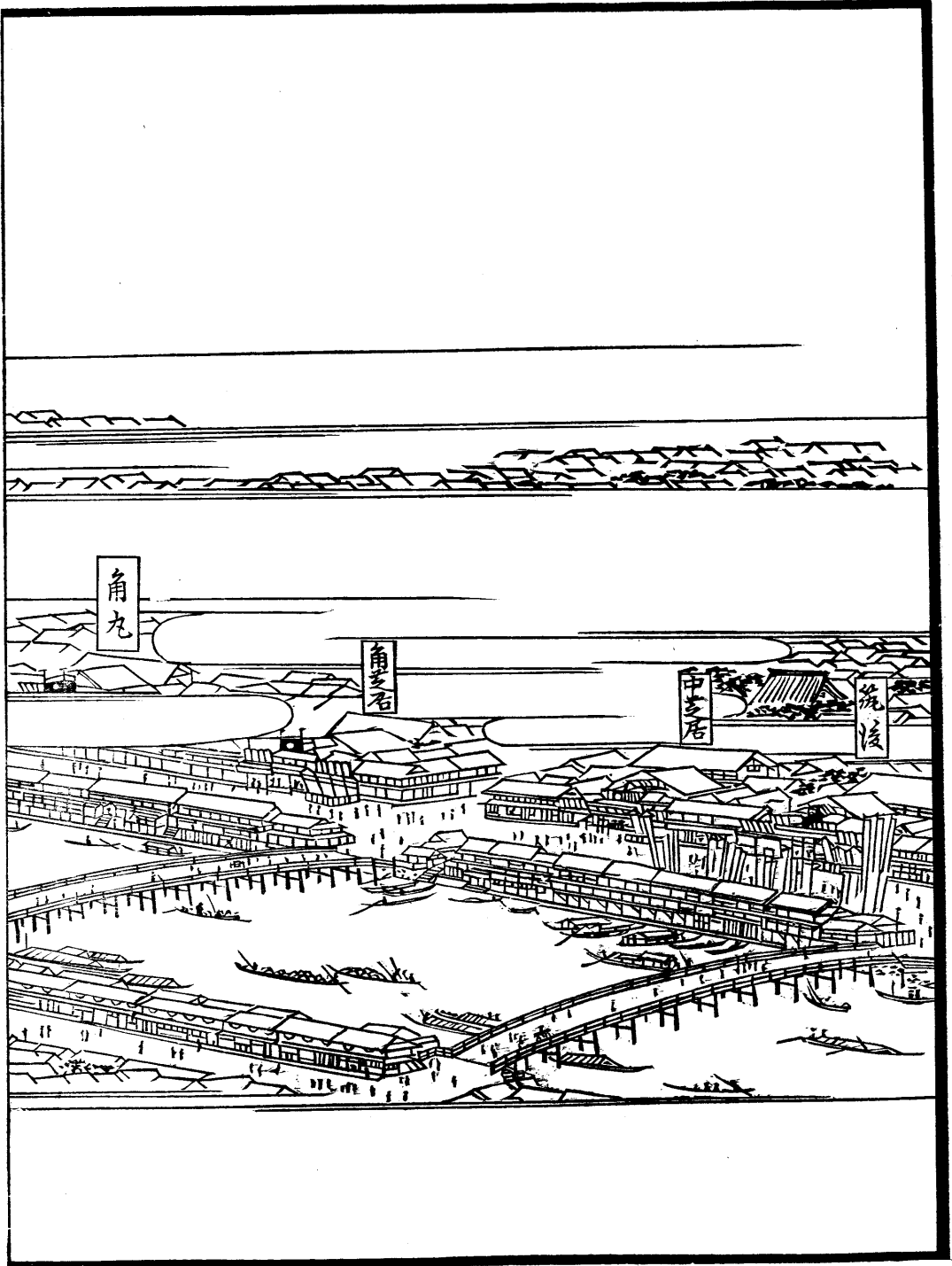
ふじて命脈を續け居たりしなり兩座打込み興行と云ふことを工夫し、六年八月日朔殿造千丈ヶ嶽とんぢやうがせき、豊竹座主の

合作を出したるも、これまた散々の不入りにして、僅かに一ト興行にて分離し、豊竹座の一

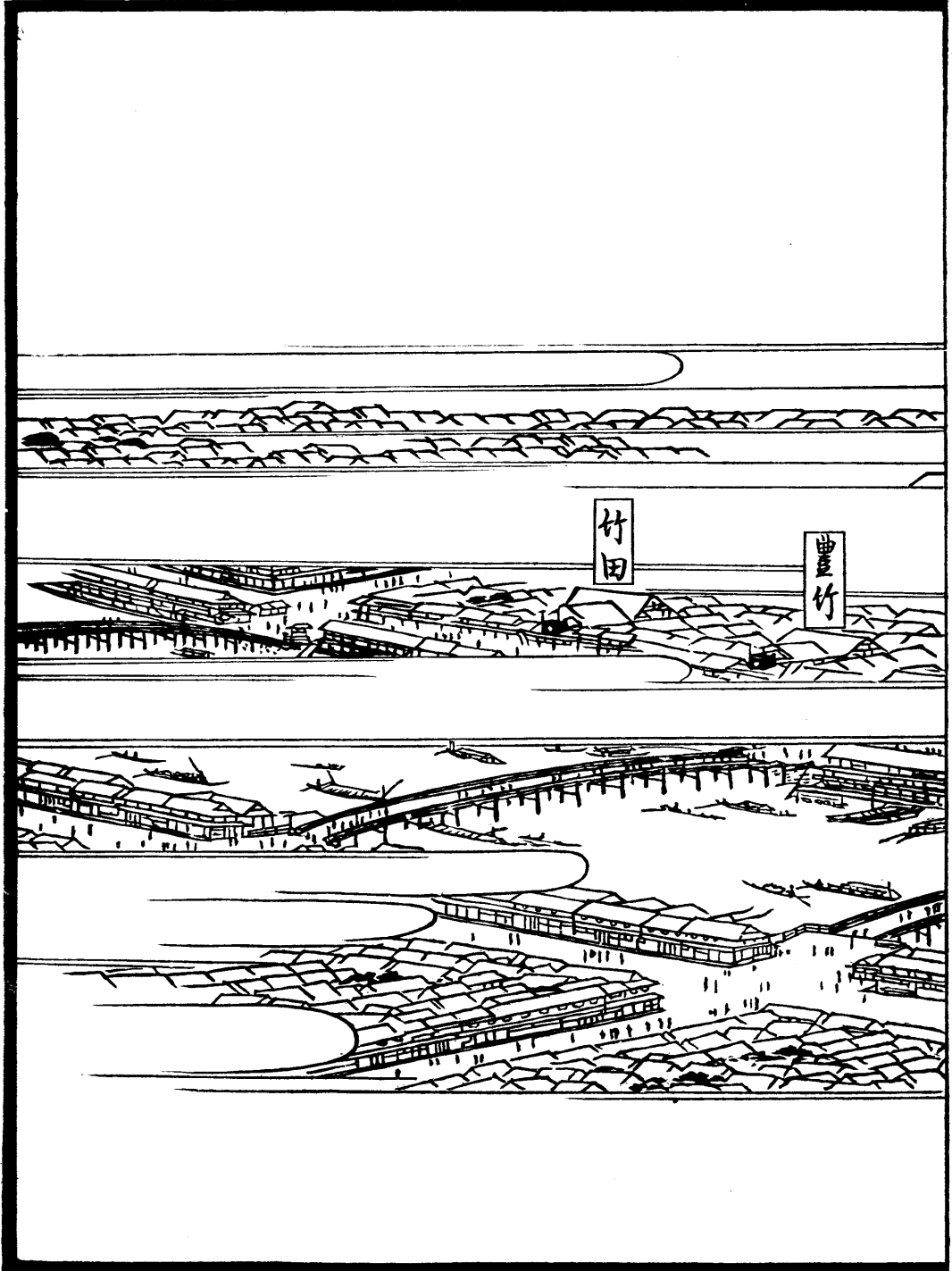
派は、分離後殆ど廢滅同様の姿となり、竹本座の連中は不況ながらも命脈を繋ぎ來り、吉

田文三郎を江戸より呼還へし、翌七年夏、口上看板いかめしく、江戸にて大入大當りの『神

靈矢口渡』江戸外記座の正本、福内龜外、吉田冠子、玉泉堂、吉田二一の合作を上場したるも、さのみの反響も來らずいよく廢



堀 頓 道



近松半二が一生の智慧を絞つた『妹背山婦女庭訓』

四、五年の不入を一時に取り返す

座と決したるより近松半二一生の智慧を振ひ十三鐘『妹背山婦女庭訓』半二、松田はく、榮善を新作し、明和八年正月八日上場し、春太夫に定高、染太夫に大判事を振りたる山の段かけ合の趣向一入優れたりとして人氣に投じ、四、五年の不入を一時に取りかへしたるほどの大入りを取り、爾來半二の歿時天明三年まで、大約十二箇年の命脈を長ふることが出来たのでありし。『妹背山婦女庭訓』は、蓋し半二の作物中の最も傑出したるものにして、新作淨瑠璃の最後の雄篇とも云ふべき名作である。竹本座の復活が、縦よし注射的一時の現象に過ぎなかつたにしても、爾來十二箇年の運命を長ふすることを得たのは、畢竟此の名作の賜ものに外ならぬのである。

『妹背山』以後の竹本座には、さしたる佳作とても現れざりし。作者として署名せるものは榮善平、吉田兵藏、松田はく、竹田文吾、北脇素人、一來堂、八民平七、荳源七、竹田新四郎守、川文藏、中井糸治、春木元輔、近松東南、近松能輔、青江堂、原羽裳等十有幾人を數ふべしと雖も、孰れも合作ものゝ一段一篇の筆者にして、佳作名篇の出づべきやうもなく、僅かに見るべきものとしては、近松半二の單獨作なる『道中龜山嘯』安永二年七月七日上場、『新版歌祭文』安永九年九月二十八日上場位のものに過ぎず、時は非なり、佳作は不出、衰運の恢復し難かりしも、無理ならぬ次第と云ふべし。

豊竹座の末路は尙一層悲惨なりし

豊竹座の末路は、竹本座に比して尙より多く悲惨なりし。寶曆七年十二『祇園祭禮信長記』を上場して三年越打通しの大入りを取りたる以來、俄かに景氣を高めて來た豊竹座も、十一年二月の大火にて類焼し、一時曾根崎新地の芝居にて興行し、新普請落成、九月

重々の不幸

遂に閉座

北堀江市の側の芝居の創立

『妹背の門松』の大當り

十日初日にて華々しく開場したが、僅に一年餘にして、十三年正月興行に際し、又々類焼の厄に逢ひ、重々の不幸に座元の困厄一方ならず、四月新芝居出来、翌明和元年九月開祖豊竹越前少椽歿延享二年以來追善興行として十月二十一日より『嬢景清八島日記』『大佛殿』萬代通の増を上演し、切に『紀念笈』と据ね、筑前少椽初代此も出勤し、一座不殘出語りにて勤め、次で十二月『いろは歌義臣整』かまど 黒藏主、阿 契合作翌二年三月『敷島操軍記』應律齊治 並木合作七月『内助手柄淵』齊治、惠吉、三 齊治、惠吉、三 齊治、惠吉、三 齊治、惠吉、三を上演したるも景氣振はず、殊に座元越前少椽死去の後、悴甚六相續出来ざるより閉座の止むなきに至り、八月日三十退轉して歌舞伎芝居となり明和四年の竹本座の退轉に先だつこゝ二年四箇月島太夫二代目 若太夫鐘太夫は竹本座に入り、筑前少椽は此の時限り引退し明和五年十一月五日病歿した。元祿十五年以降六十四年、西、竹本座と相對して市中の人氣を煽り、浪花名物雙美の花として唄はれた豊竹座も、爰に悲むべき終焉を告ぐるに至つたのでありし。

豊竹座退轉の當時、同座の重鎮此太夫二代目は江戸興行中なりし。『いろは歌義臣整』の興行後、若竹藤九郎とくもに江戸に下り明和二、三年と滞留して其の秋歸阪した。退轉の報に接するや早々にして歸阪し、北堀江市の側西側へ新たに芝居を建立し、豊竹此吉の名代にて自ら座元となり、明和四年十二月十五月初日にて開場した。櫓下は駒太夫、此太夫の兩人、爾餘麓太夫、時太夫、氏太夫等孰れも豊竹座の一連にして、駒太夫の實子生駒太夫後、二代目 駒太夫も此の時より出座し、外題は前、みどり淨瑠璃『河内通』三の切、三の切。『信長記』浮世風呂の口、氏太夫、奥此太夫、甚立、入太夫、爪先巖駒太夫切、菅傳助作『染模様妹背門松』油屋、時太夫 質店此太夫と云ふ取り合せなりしが、意外に成功し、芝居裏へ土藏三味線、衣裳等な 格納する倉庫也。までも建て増すほどの景氣なりしよりお染久松に儲けて出来たと云ふ 縁故より俗にお染藏と呼んだ。引續き、『潤色江戸紫』明和五年七月十五日『忠孝大磯通』九月二十

日^二紙子仕立兩面鑑^{十一}二月二日^二四天王寺伶人櫻^{十六}二月十二日^前北濱名物黒舟噺^切雙絞筐巢籠^{十七}八月二日^二を上演せしも、開場當時の景氣なく、八月竹豊兩座の打込み芝居を興行せしも、此れ亦不入りにして人氣立たず、七年九月道頓堀豊竹座の再興となりしより一座之れに移り、座元豊竹此吉、櫓下島太夫、駒太夫、此太夫の三人にて、十五日初日、源平鵜鳥越^をを上演せしが、翌八年八月此太夫、時太夫の兩人は分離して元の市の側の芝居に歸つて興行した。

再興した豊竹座

再興した豊竹座は、其の後座元豊竹和歌三太夫となり、島太夫駒太夫の二人櫓下にて安永三年まで興行したが、其の後の消息は詳ならず、其の間僅かに四箇年なるも、上場の正本には割合に佳作多く、梅野^{由兵衛}、迎駕籠^{死期茜染}、^{明和八年八月十四日上場}、^{三郎兵衛兵藏寺田合作}、^{苗屋半七}、^{艶容女舞衣}、^{安永元年十二月二十六日上場}、^{三郎兵衛應律平七、八民合作}、『櫻鏝恨絞鞘』^{二年十一月二十二日上場}作者未詳等は、孰れも此の短期間に上演せられたる正本である。

堀江座の顔振

堀江市の側の芝居は天保の比まで命脈を繼續して居たのであるが、漸衰期二十五年間に於て比較的好況を呈して居たのは、單り此の堀江座のみでありし。上場の正本には別段此れぞと云ふべきほどの佳作とてもあらざりしと雖も、太夫には此太夫あり、麓太夫あり、駒太夫^{二代}あり、綱太夫あり、三絃には鶴澤十次郎あり、市太郎あり、名八あり、三^{後蟻}あり、富澤萬五郎あり、豊次郎あり、人形には藤井小八郎あり、吉田冠二あり、竹豊兩座の不入氣に關らず可なりの人氣を取り、我義太夫節淨瑠璃のために、僅に其の氣を吐いて居たのであつた。

各座の興行年表

左は漸衰期二十五年間に於ける義太夫節各座の興行年表である。

漸衰期二十五年間各座興行年表

竹本座系

外題作者 上揚年月日

日高川入相花王

小出雲 竹本座
三郎兵衛合作 寶曆九年
後一(北窓) 二月朔日
二步堂

評判能大入せしに、同五月四日、芝居類焼して、直さま假り家を立、五月二十一日より、やはり日高川四段目の切ま

大切 用明天皇繼入之段

出語り 太夫 竹本政太夫

人形 同 染太夫

右文吾まは、二代目の吉田文三郎也、是逆も親に續く名人なり、此の時操り繁昌なるは、親吉田文三郎伴文吾、其の外太夫をかつらひ、大西芝居にて操り興行せんま、たくみありし逆、座先より是をはびく、段々挨拶人ありて、覺なきことを申せし故、吉田文三郎暫く京都の芝居を勤、粹文吾祖父の名をつぎ、吉田三郎兵衛と改名す(諸事聞書往來)

豊竹座系

外題作者 上揚年月日

芽源氏鶯塚

久米太夫、喜美太夫出座。
一黒七子鳥
契才藏
應子鳥
律子鳥
三寶豐
月曆竹
九年座

難波丸金雞

林太夫、豊太夫出座。
阿應笛
契律射
合作
五月十四日

太平記菊水の巻

松洛半二 同
後三郎兵衛 一合作
九月十六日

音太夫、岬太夫出座。
春太夫の評判次第に高まる。

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

平假名盛衰記 (三度目)
播磨椽十七回忌追善なり。

寶竹
月曆本
六月十日
年座

初 錦中染 錦太太 夫夫夫
二 錦政音 錦太太 夫夫夫
三 道行(音) 錦太太 夫夫夫
四 中次口 錦太太 夫夫夫
五 中切 錦太太 夫夫夫
二 半 松三 耶二 兵後 洛衛 合作
七月二十一日

極彩色娘扇

(續十場)八木太夫出座。
帷子衣裳にて水狂言也。

先陣浮洲巖

十七太夫江戸より歸る。
冬、豊竹筑前椽堺へ行。

三七四

一 黒子鳥
七 才子合作
應律阿契
寶竹
豐九
曆九
十二月七日
年座

櫻姫賤姫櫻

(續十二段)

阿應笛
契律合作
同同
三月十一日
年座

攝津國長柄人柱 (二度目)

同同
八月十五日

初 大序 中 喜美訪 伊勢太 夫夫夫
二 中口 此久米太 夫夫夫
三 中口 鐘籠伊勢太 夫夫夫
四 中口 此久米太 夫夫夫
五 中口 鐘籠伊勢太 夫夫夫
切 道行(音) 伊勢太 夫夫夫
切 景事 久此駒籠 米太夫 夫夫夫

前國性爺合戰
中入後年忘座敷操

(二段目迄)

男作五雁金	愛護若	いろは縁記	大友の真切鳥	楠音嘶	かんたん
道行	跡	三味	三味	三味	三味
合	春太夫	春太夫	春太夫	春太夫	春太夫
合	春太夫	春太夫	春太夫	春太夫	春太夫
合	春太夫	春太夫	春太夫	春太夫	春太夫

同
十一月二十八日

安倍晴明倭言葉

初	中序	中口	二	切中口
政太夫	音太夫	綱太夫	染太夫	百合太夫
松三郎	二	半	三	五
二	後	一	三	五
堂	衛	衛	衛	衛
合作	合作	合作	合作	合作
同	同	同	同	同
十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日	十一月二十一日

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

三十三間堂平太郎縁起
祇園女御九重錦

阿笛 契躬 合作 同
十二月十二日

加賀太夫、喜代太夫出座。
此の新淨瑠璃横曾根平太郎の熊野物語に取組し新淨瑠璃也
三段目柳の大木車に乗せ縁丸の小人形花道をひくからくり
にてはなはだ宜敷是若太夫場也殊の外大入せしに寶曆十一
年辛巳二月太夫出語り同次高砂の能人形出遣ひ、是趣向に
て狂言の大序なる(諸事聞書往來)

九月堺へ出興行、外題平假名盛衰記。

冬 籠 難 波 梅 作者未詳

吉田三郎兵衛(文三郎の子、初め文吾、祖父の名を襲ふて三郎兵衛となる)文三郎と改名し江戸に下る暇乞也。

古 戦 場 鐘 懸 松

二 步 堂 同
三 郎 兵 衛 合 作 同
松 落 十一月二十二日

此の禰芝居は近比死去せられし竹田近江大棟、芝居銀主にて、竹田出羽中の芝居竹本と四軒の仕分け也、此の人段々みよふに長じ、大阪中銀持貴人杯にも付合、同年十二月年忘れさて我下家敷にて、貴人を寄せ、一夜に四季の體を庭に置いて、人々に見せ、はなはだおこりに長ぜし故、御公儀より御捕方にて、近江大棟鐵屋何某田中氏なんど、入牢さ

八重霞浪花濱萩 (二度目)

三寶豐
月曆十一日
竹一年座

祇園女御九重錦 (二度目)

同
同
四月十九日

おはつ曾根崎模様 (十册物)

笛舳一鳥
墨藏主(阿契合作)
陶芋(福松)

同
同
五月十八日

人丸萬歳臺

應律一鳥
阿契(福松)
藤助(福松)

同
同
九月十日

初段

大序 鐘太夫
中序 鐘太夫
切口 喜代太夫
詰口 此太夫

四段 此太夫
口 七太夫
切口 駒太夫
詰口 十太夫
五段 喜代太夫
口 若代太夫
大切 鐘太夫

二段

道行 加賀太夫
口 加賀太夫
口 久賀太夫
切口 鐘太夫

式三番高砂かけ合
出語り 駒太夫
此駒太夫
此駒太夫

三段

切口 鐘太夫
詰口 若太夫

同
同
同

なる、此の時竹本浄るりは、古戦場鐘懸松五段續、此の節大阪町人へ、御上より五千圓の用金を家々へ申付られし故、はなばだ物さほがしく、古戦場鐘懸松を五千兩金借待さ、誰いふさなく申せしをか、夫より程なく相濟、皆々出牢す、(諸事聞書往來)

花系圖都鑑

二歩堂 同
三郎兵衛 同
松三郎 三月二十二年

戀女房染分手綱

(二度目) 同
七 月 二 日

奥州安達原

和泉(竹田) 同
三郎兵衛 九 月 十 日

三好長慶碓軍談

梁 蘆 軒

同
二月二十二年

岸姫松轡鑑

應律 笛躬
藤助 一鳥合作
黒藏主 永輔

同
閏四月十八日

八重太夫初て出座。

初發端 喜代太夫

中大序 采女太夫

中 品太夫

二 口切 若太夫

二 口切 淺女太夫

三 口切 鐘太夫

三 口切 八蘇太夫

三 口切 跡太夫

中 詰 民 若 太 夫

四 道行 鐘 太 夫

四 道行 品 太 夫

五 詰 富 太 夫

五 詰 若 太 夫

五 詰 竹 太 夫

五 詰 頭取 十 太 夫

五 詰 三絃 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

五 詰 同 同 太 夫

此の時より
枝芝居連、此太夫、加賀太夫、佐渡太夫、豊松豊五郎、同
彌三郎、藤井小三郎、京石垣芝居にて洛陽ひさこ念佛とい
ふ新浄るりを相勤る、鐘太夫跡より上る(諸事聞書往來)

假名手本忠臣藏 (二度目)

竹本座 寶曆十三年正月十八日

先此正月九日竹田芝居類焼に付竹本芝居にて淨瑠璃換り子供狂言一切十文の打込追出しにて竹田(筑後兩座打交り也)

- 第一 筑後あやつり 忠臣藏二ツ目、三ツ目、四ツ目
- 第二 竹田 狂言 奥州安達原
- 第三 筑後あやつり 忠臣藏六ツ目七ツ目
- 第四 竹田からくり 機關梅早咲
- 第五 筑後あやつり 忠臣藏道行、九ツ目
- 第六 竹田 狂言 友全染

山城國 善生塚

半二合作 三郎兵衛 (初日)

同 同 四月十三日

天笠 徳兵衛郷鏡

同上合作(後目)

同 同 四月十四日

毎日入替興行也、生駒太夫出座。

藤原秀郷倭系圖 (二度目)

豐竹座 寶曆十三年正月四日

正月九日出羽の芝居より出火類焼。普請中一座を二ツに別ち京堺へ出興行。

寶曆十三年癸未正月四日初日○藤原秀郷田原系圖當正月九日、出羽の芝居より火出、芝居残らず類焼、普請の間、一座を二ツにわかれ、京堺へ行、同年四月芝居普請、十四日芝居類焼にて、曾根崎新地芝居にて一之谷三段目まで切八重葎にて豊竹筑後様、暫く助に出る、殊の外大也、此の間道頓堀、豊竹芝居の表普請、進物の書付敷しれす、大阪中を板行にて賣あるく程の事也、同所にて四月十九日より○祇園女御九重錦(作者中村阿慶豐竹笛舳)同年五月十八日初日○曾根崎様、此の淨るりはお初徳兵衛を、ごだいにて、此の頃京都桂川にて帶屋長右衛門三十八歳、信濃屋おはん十四歳をこはぬ心中ありしを、右淨るりに取組、新淨るりとなす、同年九月新芝居普請成就し、道頓堀へ歸り、九月十日より初日○人丸萬歳臺五段續、朝式三番叟○千歳豐松元五郎○翁豊松藤五郎○三番叟若竹東二郎成就し二三番淨るりをまぜ出遣ひ、三十石夜船の始り丸山の段御殿の段右歌舞伎狂言を淨るりとなし、切古淨るり身取にて語る(諸事聞書往來)

新舞臺三十石燈始(古淨瑠璃式三番叟)

同 同 四月九日

三番つゞき出語也。

千歳 鐘太夫 二番目 太夫惣ヶ合

翁 鐘太夫 三番目 詰此太夫

東鑑御狩卷(三段目)

口跡 喜代太夫 切口 謹太夫

お花雙紋刀銘月 久米太夫 切詰 謹太夫

上 此太夫 道行 此太夫

北條時頼記(四段目切) 加賀太夫 ツレ 加賀太夫

十七太夫 鐘太夫

金比羅敵討稚物語 三郎兵衛合作 (京都竹本一座) 明和元年七月十五日

十一月一座江戸より歸る。

江戸花王愛敬會我 作者未詳 竹本座 十一月十七日

假手名本忠臣藏 (三度目) 同 同 十二月二十五日

判官腹切	政太夫	錦太夫
五段目	三根太夫	錦太夫
六段目	文太夫	錦太夫
道行	音太夫	文太夫
九段目	瀾太夫	岡太夫
十段目	口咲太夫	中政太夫
十一段目	奥瀾太夫	三根太夫

人形由良之助文三郎、力瀾七郎次、みなせ門三郎、本藏冠藏、小浪八十八なり。

蘭奢待新田系圖 平七(竹田)合作 竹本座 二月九日

序切音太夫、二の口岡太夫、二の切染太夫、三の切政太夫、四の口瀾太夫、二代吉田文三郎うかれ座頭を遣ふ、四の中音太夫、三の口、四の切錦太夫也。

九月十三日豊竹越前少様(初代若太夫)歿

嬢景清八島日記 (大佛殿萬代) 明和元年十月二十一日

序切麓太夫、二の切十七太夫、三の口此太夫、三の切日向景清、鐘太夫、四の切此太夫勤む。諸平家面白しさて評判也。切追善記念碑

曾我形見送(筑前少様ワキ島太夫)十一月十五日より差替へ二ッ腹帯八百屋(筑前少様、ワキ此太夫、三絃龜澤十次郎)十一月二十二日より、兜軍記琴責(同断)

いろは歌義臣登 阿黒藏 主合作 同 同 十二月十五日

駒太夫江戸より歸る、此太夫、若竹東二郎江戸へ下る。

愛護若名歌關 (二度目)

増富士日記菖蒲刀 平永 七輔合作 五月六日

御祭禮棚閣車操 各神社の祭禮に因んでの趣向なり。 文太夫 倉太夫 六月十五日

座摩 紅葉狩銀本地 三根太夫 政太夫
 御靈 渡邊大刀引の段 綱太夫 政太夫
 難波 御所櫻骨接の段 綱太夫 政太夫
 稻荷 千本櫻狐の段 綱太夫 政太夫
 天神 菅原傳授三の功 錦太夫 岡太夫
 高津 夏祭焼がれの段 春太夫 岡太夫
 生玉 萬歳所作事 崎太夫 綱太夫
 住吉 夏神樂祭揃所作事 春太夫 岡太夫
 文太夫 三根太夫 吉田文三郎

七月十日二代目竹本政太夫歿

菊池姻 袖 鏡 半二松落 同 九月十二日
 小幡(竹田)合作 同 九月十二日
 三平出(竹田)合作 同 九月十二日
 三郎兵衛七 同 九月十二日

會狂言役者雙六 作者未詳

事始室早咲 同 同 十一月五日

本朝二十四孝 半二松落 竹本座 同 十二月七日
 因幡小出七合作 同 十二月七日
 三平兵衛七 同 十二月七日

敷島操軍記 齊治(並木)律合作 同豐竹座 三月十六日

内助手柄の淵 齊應 律合作 同 七月二十五日
 惠吉(三笠) 同 七月二十五日

八月三十日豊竹座退轉して歌舞伎芝居となる。

此の年(明和三年)豊竹東治座元となり、豊竹此太夫と共に北堀江市の側に操芝居を創む。北堀江座之れ也。

新に太夫を抱、東より島太夫、鐘太夫出座、住太夫も京より歸り出勤。
序切住太夫、二の口綱太夫、二の切染太夫、三の口鐘太夫、三の中染太夫、三の切島太夫、四の口咲太夫、四の切鐘太夫にて四段目見物場をはずに引割御殿をせり上げ古今の大道具大入也(諸事聞書往來)

小夜中山鐘由來

半二松落 伊豆(竹田) 竹本座
永出平七 輔合作 明和三年
三郎兵衛 七月十八日

太平記忠臣講釋

半二松落 文吉(竹田) 同
小出平七 合作 同
三郎兵衛 十月十六日

此の外題忠臣藏にまさりしと大評判大入り。

四天王寺稚木櫻

半二松落 文吉 同
小出合作 五月四日
三郎兵衛 五月六日

夏祭浪花鑑

(二度目) 同 同
六月十二日

前花軍壽永春

半二松落 文吉 同
小出合作 同
三郎兵衛 八月四日

切關取千兩幟

不入續き故京都義太夫座に入り替り京都一座錦太夫、岡太夫、春太夫、千賀太夫大阪に來る。

石川五右衛門一代噺

並木正三等 同
同十月十四日

此れ京都一座の興行也、評判はなほだあしく通るが如く京に歸る。

星兜弓勢鑑

永輔才二 豐竹座
一 島合作 明和四年
兵藏(寺田) 正月三日
應律 四月

明和四年正月三日豊竹座再興。

二月伊勢へ出興行。
四月八日豊竹座古淨瑠璃一段づつ札錢十文の追出芝居なる。

三日 太平記

平二 松洛 同
三耶 兵衛七合作 十二月十四日

申太夫政太夫と改名し江戸より歸る、住太夫江戸へ下る。

(此の後、竹本座一時中絶)

竹本義太夫より筑後様となり貞享二年より明和四年迄八十三
三年目に竹本芝居退轉せし事世の盛衰とは云ひながら是非
もなや、當十月より座本山下八百藏と云ふ名前を上げ是
より歌舞伎芝居となりしこゝ一兩年なれども追々太夫がす
くなくなり操り再建すれども中芝居となりまた歌舞伎とな
り今では筑後芝居共大西芝居ともまざらばしきは是非もな
や、(諸事聞書往來)

傾城阿波鳴戸

半二 平七 同 五月
三耶 兵衛七合作 六月朔日

きのふのお初
けふの徳兵衛 讀賣三巴

半二 平七 同 七月朔日
三耶 兵衛七合作 九月十四日

初櫓 操目録

竹本座(再興)
同 九月十四日

小いな廓 色上 八民平七

同 十一月十九日

振袖 天神記

半二 東南合作 同 本座
才二 松洛合作 正月二十七日

裙重浪花八文字 八民平七

同 二月十二日

小春 中元噂掛鯛

松藏 竹本座 洛合作 同 竹本綱太夫座
嘉藏 竹本座 七月二十八日

染模様妹脊門松

菅 專 助 北堀江座
同 十二月十五日

忠孝大磯通

菅 專 助 同 五年
同 九月二十二日

助六紙子仕立兩面鑑

管 專 助 同 同
同 十二月二十一日

四天王寺俗人櫻

中村阿契 同 六年
同 二月二十四日

北濱名物黒船噺

菅 專 助 同 同
同 七月十二日

小いな雙紋筐菓籠

阿專 助 合作 同 同
同 七月二十八日

殿造千丈が嶽

應藏 律合作

竹本、豊竹合併興行

(明和六年八月朔日)

近江源氏先陣館

才二平七 松洛七 新松竹田南合作 三郎兵衛

竹本座 明和六年十二月九日

近江太平頭整飾

作者未詳

同同 五月二十二年

夏衣裳雁染

寺田兵藏

竹本春吉座 同同 六月二十二日

聖徳利生の池水

兵平 七合作

竹本春吉座 同同 八月十二日

萩大名傾城敵討

半二東南 三郎兵衛 才二合作

竹本座 同同 八月十六日

通矢數四十七本

作者未詳

同同 十月三日

椀久松山由縁十徳

同

同同 十一月十四日

妹脊山婦女庭訓

半松田二 善平(松田)合作 後見 松洛

同同 正月二十八日

義經腰越狀

(二度目)

北堀江座 明和七年正月十五日

源平鶺鴒鳥越

專阿平 助七 豊竹座再興(座元豊竹此吉) 契合作

同同 九月十九日

魁鐘岬

專阿 州野 豊竹座 同同 十二月十五日

九州與次兵衛灘

阿三郎兵衛 契合作

同同 正月二十三日

梅角額嫉妬蛇柳

竹本三郎兵衛

同同 五月二十三日

落標浪花筏

梁座 軒合作

同同 八月十日

櫻御殿五十三驛

兵藏善平合作
同同
十二月二十九日

雷太郎君代言葉

作者未詳
安永元年
正月日不詳

糕方武士鑑

兵藏善平合作
同同
四月二十八日

こりあ
へす 見取淨瑠璃

(古淨瑠璃
寄せ物)
同同
八月朔日

刀屋半七鯉初花
達模様愛敬會我

(正本不出)
同同
正月九日

時代時繪
世話模様いろは藏三組盃

金南三近松合作
北新地芝居(竹
本染太夫座元)
七月二十八日

島原千疊敷

(正本不出)
同本座
八月二十一日

梅野地駕籠死期茜染

兵藏善平合作
同同
八月十四日

本卦復昔曆

素人(北座)
梁塵軒阿契合作
同同
十二月十五日

嗚呼忠臣楠氏旗

三郎兵衛
伊輔(若竹)合作
同同
十二月二十八日

忠臣後日咄

素全(北座)
阿契芦州合作
同同
四月七日

千種結舊畫草紙

阿素人合作
同同
八月十九日

後太平記瓢箪實錄

三郎兵衛
同同
十二月十四日

茜屋平七
みのや三勝 艶客女舞衣

三郎兵衛
平應七律合作
同同
十二月二十六日

攝州合邦辻

專助合作
同同
二月五日

宏のだ妻今物語

(正本不出)
同同
三月十五日

伊達娘戀緋鹿子

專助合作
同同
四月六日

南無三寶
正三追善極樂往來蓮奇初

(正本不出)
同同
七月日不詳

呼子鳥小栗實記

專助合作
同同
八月二十七日

三十二相刀雙競

(正本不出)

竹座
安永二年
十一月五日

性根競姉川頭巾

善平 七
善平 二
合作

同
同
四月三日
四月六日

役者評判身振操

(古淨瑠璃寄セ物)

同
同
十一月六日

東海道七里の艇梁

善平 七
善平 二
合作

同
同
二月二十四日
二月二十三日

鹽飽七島稚陣取

文吉 素人
七 一
來堂 合作

同
同
九月二十五日
九月二十三日

日本歌竹取物語

源平 七
新四郎(竹田) 七
合作

同
同
二月六日
二月朔日

釜淵雙級巴
櫻鏢恨鮫鞘

(作者未詳)

豐竹座
安永二年
十一月二十九日

惣體北男鑑

(正本不出)

同
同
十二月三日
十二月十六日

軍術出口柳

喜助 阿契
九 筋 合作

同
北堀江座
正月二十九日

倭歌月見松

阿專 助
筋 合作

同
同
九月八日

綱屋貞柳歲且關

阿專 筋
助 合作

同
同
正月二十五日
正月二十一日

三國無雙奴請狀

阿東 南
筋 合作

同
同
四月三日

蓋壽永軍記

喜助 二
筋 合作

同
同
九月八日

おはん桂川連理柵

菅 專 助

同
同
十月十五日

端手姿鎌倉文談

同

同
同
正月六日
正月二十五日

伊賀越乘掛合羽

近松 東南

同
同
三月二十六日

心中紙屋治兵衛

文半 吉二合作

同同 四月二十七日

道中龜山噺

近松半二

同同 七月十七日

おはつ往古曾根崎村の噂

善半 平二合作

同同 九月二十三日

繁花地男鑑

守中 川文 藏合作
木井元輔

同同 七月二十八日

假名寫安土問答

熊二 東南
射輔(近松)合作

同同 正月九日

子の日立春姫小松

(姫小松子の日)
の遊の増補

同同 正月七日

置土産今織上布

春笛專 曉(豊)躬合作

同同 五月十五日

融大臣鹽竈櫻

菅專助

同同 八月十五日

女小學平治見臺

作者未詳

同同 十二月不詳

讚州屏風浦

江群 應律
笛水(豊)躬合作

同同 八月十七日

妹背結町家仙人

(操の顔)
見世

同同 十一月不詳

夏浴衣清十郎染

春專 助(豊)合作

同同 十二月二十二日

近江國源五郎鮒

梁春專 塵 助合作

同同 八月八日

今盛戀絳櫻

梁春專 塵 助合作

同同 十月十九日

東山殿幼稚物語

專助 春助
三郎兵衛律合作

同同 二月九日

おそめ 久松 新板歌祭文 近松半二

竹本座 安永九年九月二十八日

稻荷街道墨染櫻

應春專 助合作 律

北堀江座 安永九年九月二十三日

時代織室町錦繪 同

天明元年二月二十四日

合詞四十七文字

(舊淨瑠璃種の寄せ物)

同 堀江此太夫座 九月二十三日

替唱歌絲の時雨 同

天明二年三月日不詳

道具屋お龜 作者未詳

同 六月二十五日

吾妻街道茶屋娘 作者未詳

豐竹此吉座 天明二年九月二十六日

天明三年二月近松半二歿。

沈滯期の百年 操り各座の概況 幾多小勢力の對立 引續き人氣を占めて居た

市の側の芝居 文樂芝居の勃興 文樂御靈市の側三座の人氣を中心とした文

政天保時代 爾餘の各座 小は小なりに夫々相應の人氣 社内境内

芝居の禁令 文樂御靈兩座の退轉 禁令後の五芝居 西横堀清水町濱の文樂の

芝居 稻荷社内文樂の再築 明治初年の操り各座 松島の文樂座 彦六座との對立となる

次第に種切れとなつた新作正本 舊作淨瑠璃の洗張り興行 斯界の

景氣は減退する一方 當時の歌舞伎興行の一般 首振り小供芝居

沈滯時代の百箇年

操り各座の概況

幾多小勢力の對立

此の不況不振の中に却て淨瑠璃の伎巧は銑煉の極に達した

二代 政太夫の門系より出た幾多の秀才 越前少椽の系統より出た斯

界の大立者 筑前少椽の流より出た名人上手 沈滯時代の前半期を

賑はした爾餘幾多の名人 三絃と人形の名手

妙聲第一と云はれた駒太夫、いよゝく練熟して來

た麗太夫 父に劣らぬ二代目駒太夫 初めての出座より樂座中を驚かし 然るに 初代巴太夫 中古の名人二代目内匠太夫 其餘の幾多の名人上手

景氣は次第に沈衰すると云ふ不思議な現象

沈滯時代後半期の大立者 名人上手續々斯界に現はる 天保嘉永比

の中心人物の顔振 三絃界の妙手名人

新作正本表 操り各座興行年表 主なる太夫の略歴

天明三年より寛政十二箇年 享和三箇年 文化十四箇年 文政十二箇年 天保十四箇年 弘化四箇年 嘉永六箇年 安政

六箇年 萬延一箇年 文久三箇年 元治一箇年 慶應三箇年 を經て明治の初季に至る、大約百箇年は斯界

の沈滯時代である。

沈滯時代の初期、天明、寛政、享和比の操り芝居には竹本座の流れを引いた西の芝居あり、竹田の芝居あり、若太夫の芝居あり、豊竹座の没落に際し此太夫が創立した市の側の芝居北堀江座あり、北の新地の芝居もあり、緋々ながらも斷續的の興行を續けて居たのであるが、寛政の半頃よりは御靈社内の芝居も起り、文化に入つては更に博勞稻荷の文樂軒の芝居も起り、文樂の座去植村文樂軒は阿波の芝居興行師にして、明和の頭大坂に來り操り芝居の興行を始めたが、寛政の頃北堀江市の御靈社の芝居にて興行して居た。茲に幾多小勢力の對立とはなりしと雖も、比較的一頭他に優れたる營業振りを示し、連年幾

引續き人氣を占めて居た市の側の芝居

文樂芝居の勃興

文樂、御靈、市の側三座の人氣を中心としたる文政、天保時代

其の餘の各座

小は小なりに夫々相應の人氣

天保十三年社内境内芝居の禁令

文樂、御靈兩座の退轉

禁令後の五芝居

西横堀清水町濱の文樂の芝居

稻荷社内の文樂の再築

多の新舊淨瑠璃を上場し、可なりの人氣を占めて居たのは、市の側の芝居なりし。其の後文樂の芝居は倏忽にして頭を擡げ來り、殆ど市の側の芝居と拮抗し得べき勢を作し、文化の中頃よりは御靈社内の芝居も亦俄に勢を加へ來り、文政、天保の二十六年は、文樂御靈、市の側の三座の人氣を中心として、座摩社内の芝居もあれば、北堀江の荒木の芝居もあり、道頓堀角丸の芝居もあり、北の新地の芝居もあり、若太夫の芝居もあり、竹田の芝居もあり、出座の太夫は昨は甲座今は乙座と所定めず移り替り、時には一人の太夫、三絃にして、二座三座と掛持までして勤めたる者もある位の有様にして、一際優て大々の景氣を作つたものもなき代りに、小は小ながらも、各座夫れ／＼相應の人氣を持つて興行の命脈を繋いで居たのでありし。然るに天保十三年五月、社寺境内の芝居一切相成らずとの禁令出づるに及んで、夫の水野越前の改革の餘波である御靈と文樂の兩座は櫓を撤して退轉せざる可からざる次第となり、僅に挽回の機運に向ひつゝありし斯界の景氣も再び頓挫し、更に一層の沈滞を來すに至つたのであつた。

禁令後の操り芝居は、市の側の芝居、天満大工町の荒木の芝居、曾根崎新地の芝居、道頓堀の竹田の芝居、若太夫の芝居の五座となりし。文樂軒は、市の側の芝居、若太夫の芝居、堀清水町の濱に小屋を掛け、巧みなる得意の興行方針によつて當時の名ある太夫等を汲合し、依然として斯界の中堅となり、禁制やうやく弛むに及んで、再び許可を得て舊地、稻荷の社内に芝居を再築し、安政三年九月九日より開場し、當時の操り各座の中堅とし

明治初季の各座

松島の文樂座

彦六座との對立となる

次第に種切れとなつた新作正本

舊作淨瑠璃の洗張り興行

て、殆ど他座を壓して獨り其の名を擅にするに至り、かくて明治時代に入つたのでありし。

明治時代に入つての中堅も亦依然として文樂の一座なりし。座摩の芝居もあり、御靈の芝居もあり、堀江の芝居もありしと雖も、僅に名ばかりの芝居にして、文樂座と並び稱するには、其の人氣は餘りに貧弱なりし。明治四年文樂座は、松島千代崎橋筋に新芝居を建築して一座之れに引移り、翌五年一月十三日より開場したが、十七年九月再び平野町御靈社内に移り、二十四日より開場した。即ち今の文樂の芝居である此の時よりして博勢稻荷社内彦六座との對立となり、明治の蘇生的盛況時代に入るのである。

沈滯期の前半、文化の頃までは可なりの新作淨瑠璃も出たのであるが、無論往時の如き年々五六の新作を頻發したやうな盛況は見るべくもあらざりし。天明よりは寛政寛政よりは享和と、次第に其の作も減じ來り、而も佳作として見るべきは、『伊賀越道中雙六』天明三年四月竹本太市座、『彦山權現誓助劍』天明六年閏十月竹本座、『木下蔭狹間合戰』寛政元年二月北堀江座、『蝶花形名歌島臺』寛政五年七月豊竹榮治郎座、『日本賢女鑑』寛政六年十月北堀江座、『繪合太功記』寛政十一年七月豊竹謙訪太夫座、『箱根靈驗覽仇討』享和元年十月豊竹謙訪太夫座、『八陣守護城』文化四年九月竹澤太市座、『位のものにして、文政以後となりては、天保七年に出た、『花魁荅八房』同十一年に出た、『契情小倉色紙』嘉永三年三月に出た、『生寫朝顔話』同六年九月に出た、『花雲佐倉曙』の外は新作なく、孰時いつも古淨瑠璃の再演、洗張り興行ばかりにして、其の外題とても通じて六十種ばかり。

『伊賀越』、『加賀見山』、『千本櫻』、『日本賢女鑑』、『染分手綱』、『彦山權現』、『鬼一法眼』、『狹間

申国八月十五日あつたはなはれ

つづら板



燦燦

燦燦

高野野 假名 未定 職士 股

大 席

州 轉 戸 部 美

三 股 月

州 轉 織 部 美

三 股 月

州 轉 備 部 美

三 股 月

州 轉 の 部 美

三 股 月

州 轉 世 部 美

三 股 月

州 轉 部 美

三 股 月 州 轉 部 美

六 股 月

州 轉 部 美

大 席 のり 天 切 巻 幕

高野野 假名 未定 職士 股

燦燦 燦燦 燦燦 燦燦 燦燦 燦燦 燦燦 燦燦 燦燦 燦燦

合戦』『攝津國長柄人柱』『義仲勳功記』『忠臣藏』『近江源氏』『二十四孝』『八陣』『信仰記』『岸姫松』『日蓮上人御法海』『太功記』『忠臣講釋』『矢口渡』『妹背山』『璧仇討』『酒呑童子話』『菅原傳授』『一谷嫩軍記』『安達原』『三國無雙奴請狀』『累物語』『蘭奢侍』『姫小松』『蘆屋道滿』『新薄雪』『三代記』『雙蝶々』『嬢景清』『天の網島』『桂川連理柵』『新版歌祭文』『妹背門松』『戀の緋鹿子』『河原の達引』『兜軍記』『極彩色』『荊萱』『源平布引瀧』『白石嘶』『楠昔嘶』『粧水絹川堤』『千兩幟』『姫山姥』『大經師』『阿波鳴戸』『花上野譽石碑』『大友眞鳥』『伊勢物語』『先代萩』『戀飛脚』『夏祭』『昔八丈』『伊勢音頭』『合邦』『朝顔話』『本朝糸屋娘』『和田合戦』『盛衰記』『三十三間堂』『皿屋敷』

等の輪環興行なれば、眼先きを變へて人氣を新たにすると云ふ事も出來ず、而も此等の淨瑠璃外題たる孰れも歌舞伎芝居に入つて年々輪環的に興行せられ、登場の役者には、初代及び二代目嵐璃寛あり、二代目及び三代目嵐吉三郎あり、四代目片岡仁左衛門あり、初代實川額十郎あり、四代目大谷廣次あり、四代目三樹大五郎あり、二代目關三十郎あり、片岡市藏あり、享和、文化、文政、天保時代の江戸の歌舞伎は、市川家には七代目團十郎あり、三代目及び四代目團藏、三代目彦三郎あり、二代目及び三代目三津五郎あり、尾上には三代目菊五郎あり、岩井には五代目半四郎あり、澤村には二代目田之助あり、四代目宗十郎あり、其の他五代目瀨川菊之丞あり、五代目松本幸四郎あり、孰れも當時の人氣の中心となりし名優なりし。團十郎、幸四郎、菊五郎、團藏等の江戸役者までも數々來りて此れ等淨瑠璃物を各所の芝居に演じ、好評を取り、市中の人氣を騒がして居ると云ふ有様なれば、操り芝居の領域は浸蝕せられて其の景氣は減退する一方となり、殊更嘉永以降内外の事端頻出するの比となりてよりは、一層沈滯不振の極に達したのでありし。文政十二年に

斯界の景氣は年々減退する一方

書いた『劇場一觀顯微鏡』には、

京都芝居の数は四條に三軒布袋屋、龜屋、夷屋、都萬太、夫、早雲等の名代ありこれ大芝居なり。北野下の森六角堂、誓願寺、錦天神、革堂、因幡薬師、是等は是中芝居一軒づゝあり。

大阪は道頓堀に大芝居三軒、大西、中の芝居、角の芝居、その餘濱芝居三軒、角丸、竹田、若太夫なり。北の新地、堀江市の側、此の二箇所は時によりて大芝居、或は濱芝居となりて定らず。阿彌陀が池、座摩、御靈、稻荷、安治川等に、中芝居は子供芝居あり。天満には芝居のある時もあり、また無き時も是もある也。

とあり、京阪歌舞伎芝居の盛況想ふべきである。

左は初代及二代目璃寛、三代目中村歌右衛門玉梅の略傳である。『三都役者世々の接木』に據る。推して當時の歌舞伎興行の一般を知るべし。

初代 嵐璃寛 初名 伊丹屋 俳名 璃珪

實は大阪新靱町出世にて享和元酉年大阪竹田からくりの芝居初て出る幼名徳三郎といふて今の嵐吉の親猪三郎の門人なり文化五辰年には大阪座摩いなりの子供芝居へ出よく巳年より京宮芝居にて修行し同亥年大阪竹田芝居へ下りて八陣の正清いがこへの十兵衛にて名を上げ翌年も同座にて崇禪寺敵討新狂言にて遠城次左衛門兒富丸の二役を仕初古今の大當り大入り是よりますます名を上げる暫く徳の字子細有て壽三郎といふなり文政三辰年若太夫芝居にて永井源三郎と切干兩幟の岩川の役を名殘にして江戸中むら座へ下る彼地にて目が大きくて小からゆゑ梅玉にふ似たり目徳くといふて評判よく文政五年大阪中の座へ上る橘三郎と改名して源三位より政役を勤むよく未年には同座にて朝顔の駒澤を勤同年いで物語の有道役大出来にてよく

戌年大阪ほり江芝居にてひらかなの平次松右衛門の二役殊の外宜敷九月には角の座にて伊賀越
の山田幸兵衛の親仁形なでかし同十亥年中の座にて今木傳七阿波の十郎兵衛大出来にて當年先
師七回忌追善狂言にのり經熊坂切に千兩幟を不座にて當る翌十一年角の座にて大塔宮の齋藤
切にかされの女形を勤此の年同座にて瑠璃と改名して加賀見山のまのも又助の二役早替り大出
來よく丑年の春は中の座にてうすゆきの妻平國俊さいざき五平次の四役にて角の大座と張合同
年五月京東芝居にて梅玉と初ての一座にて白石嘶明神の森の出合古今の大出来同年秋大阪角の
座にて二度目に出し大評判次に連歌の評判にて木下藤吉役南無三御供がおくれたのまく切は今
に云出さぬものさてないくらゐの大出来にて同十三寅年春も同じ座にて雪月花狂言眞柴久次岩
木藤馬高木次郎太夫小ふな源五郎のしんぼう狂言にて故慶子と兩人の取合至極の出来にて是切
にて此の年いせ中の地藏芝居へ下り同年の秋大阪中の座へ出彦山の久よし友平切に八郎兵衛あ
こぎの平次役何れも梅玉と出合にて大當りなり九月には角の座にて蘆屋の與勘平切に油屋お染
を出し役まわりそくばくにて諸人目をおごるかすなり天保二卯春同座にて尾形力丸の反逆役切
に法かいぼうを出し評ばんよく翌辰春大阪筑後芝居にて宮本無三四役近年稀成大當り大入なり
同年秋中の座へ出で人形や幸右衛門早せ伊おりの二役至極の沙汰にてよく巳の春中の座にて小
ぐり判官りやうし浪七の二役大出来にて古今の大入次に川中島勘助てる虎の二役評判よく五月
には角にて梅玉一座にて和藤内切に雁金文七の大出来此の冬中の座にて大經師の茂兵衛と八郎
爲朝を出しよく午年も同座にてたばこ切三吉切に出入湊庄兵衛小萬の二役を勤同六未年も同座
にて景任げら但馬の二役大出来にて盆替りには梅玉一座にて狭間の東吉切に白井權八やり持定
助次に忠臣こうしやく鹽谷判官小春や彌七にて植木屋場慶子との出合みなそれ／＼に大當りを
して同七申年は中の座にて八犬傳に犬塚信の金まり大助の二役を仕初大出来なり同年より政切

に油商人を出し又京へ上り南芝居にて八陣の正清切に油商人を出し大當りをしてよく酉年は大阪角の座にて笹原半人船頭に平次の二役をつとめ同五月には筑後芝居へ出て今の多見藏一座にて金びら御利生に民谷源八郎と切に出村新兵衛の二役の處狂言中に病氣起り引籠りしがついに養生相叶わずして是が舞臺の名残となり

天保八酉年六月十三日終る 行年五十歳

二代 嵐璃寛 家葉村屋 俳巖獅
目

元京二條新地出生にて旅役者生島岩五郎といふ者の子にて尾上和三郎といふて今の多見藏門人なり文政十亥年春より京宮地芝居にて若女形にて賣出し天保四卯年春大阪角の座へ伊丹屋璃寛引立にて初て出麻亭環の狂言にてちんばの娘おれん役を勤此の時嵐徳三郎と改名す是が出世狂言と成てよく辰年には筑後芝居へ出て師匠の相方にてけいせい武藏の娘深雪團七女房梶春日のしのぶ役なぞ夫々に勤第一口跡がよふて美しくますく受よく夫より濱芝居へ出て女形を勤同十亥年秋筑後芝居にて女形より立役を初て勤む小野道風岩川次郎吉大出来なり同十三寅年に角の座にて賴政を出し其のよく卯年同座にて熊坂のりつね切に濡髪を當る弘化元辰年中の座にて璃寛と改名してよく巳年同座にてお初役大出来にて同年九月同座にて葛の葉大當りなり始終女形の方が沙汰よく嘉永四亥年角の座にて娘景清の景清を出しさてくゝゑらひ行玉同年初て江戸へ下り彼地にて矢張時代の女形の方が受がよく中にも妹春山のおみわ三庄太夫のさり娘女猿まわし遠山甚三中の藤兵衛杯は別に評判高く安政二卯年冬大阪角の座へ上りよく春白縫物語にて大友若菜姫乳母秋篠至極の大出来なるに番附の居所が人氣にさわり跡へ安達の袖萩を出し是も大出来成のにさのみごつとも言わず其かわり同年京南芝居顔見世に袖萩を出し勝利を得られしなり其後益人氣立直り翌辰年大阪角の座にて彦山のおその次に京南芝居にて和田のはんかく

秋は角の座にて大塔宮の花園何れも大出来にて女形さへして居られたら當時外に肩を並べる者はなしよつて一方の大立者なり

三代 中村歌右衛門

幼名加賀屋福之助といふて寛政元酉年大阪中の座へ初て出大振袖粧湖といふ狂言にて北條の子人形の役を子役にて勤夫より四五年の間大阪いなり宮芝居にて修行して同六寅年三代目相續して歌右衛門と改角の座へ出る此の時十八歳なり忠臣藏にて竹森と伊吾定九郎の仕内にてさしも名人と呼ばれたる小六玉の千肉をくじき二の替りには達大礎にて漸宿屋揚にておりきにかたげて這入らるゝ安達丈助ぐらゐのもろい役なり其の後は始終三枚目役にてかつら川の長吉つくれの錦の彦坂甚六出入湊にては五大力の彌助何れも沙汰よくさすが大立者と成人は格別の違あり夫より五年目にはいつかごの役廻り寛政十一未年中の座にて江戸より澤村宗十郎が上り源平はしらごよみの清盛を出す其の時藤九郎盛永役切隅田春にて金屋金十郎次に雪國嫁威谷にて蒲生戸根五郎役何をさせても上手成と評ばんよく享和元酉年角の座にてけいせい忍達淵のとき元祖爲十郎石川五右衛門役なれども其のかはり役を勤は大出来にて世上に名を上げ翌二戌年大阪北の新地芝居にて璧仇討の新物が出し時奴筆助役を勤勝五郎に嵐三五郎新右衛門と成政に元祖の美雀瀧口が工左衛門初花が元祖の友吉何れも大當りにて大入なり同三亥年は角の座にて二代目里冠と一座にて敵討兄弟標にて村川兵藏山田軍助の二役益替りには筑後芝居にて繪本忠臣藏に加藤與茂七役にて嫁切の場太刀打見事なり其の後は京四條東芝居を永らく勤文化五辰年大阪の中座にてけいせい品評林角の座にては里冠兩方はり合にて名古屋山三と土佐の又平佐々木藏人の三役大出来大當りにて角の座をおしこかす後に法かいぼうを出し是を浪花の名残にして江戸中村座へ下る彼地の人氣格別にて同六巳年同座にて忠臣藏の七役くる木うりの所作事腰越狀の五

斗兵衛古今の大當り同八未年も同座にて七變化大出來なりよく九さる年忠臣講釋の七役を動是を江戸の名残にして大阪中の座へ上る其の勢ひ盛んにて乗込の當日には道頓堀東堀川筋迎ひ船篝り提灯萬燈の如く凡近來の程の乗込を見聞及ばず顏見世狂言は江戸土産糊錦鶴翼袖に平清盛役にて入目を招き戻す所大評判にてかわり狂言忠臣藏に七役の中にも百性彌さくにて鎌腹別して大出來二の替り傾城繁夜話に松浪藏人柿本金助の二役切に七變化所作事を勤中にも座頭と越後獅々にては今の世までも其の名を残し古今獨歩妙不思議の大當り俄に花道も取くらぬの大入にて前代見聞の事なり此の時芝居側には江戸表のホイキより謹別の幟數百本又大阪表のひいき連中より天鷲絨縮緬の幕幟を建る千日前の辻合には芝翫はしら冠柱さいふ物をたてる凡昔よりかゝる例のなき事なり次に一の谷の熊谷と切に伊勢音頭にてみつぎを勤引つゞいて齋藤太郎左衛門ひらかなの平次松右衛門の二役古手屋八郎兵衛何を出しても仇矢なく秋は角の座へ出て菅原に松王丸腰越の五斗兵衛岩永左衛門何れも大出來にて文化十一戌年春中の座にて釣鐘櫻に清水清玄地ごく長兵衛の二役切に娘道成寺をつむ次に宮本無三四と團七の茂兵衛大出來にて又二度江戸中村座へ下る同十二亥年同座にて雙蝶々に放駒長吉役を勤長五郎と與五郎に坂三津おせきと十治兵衛が市川市藏後に蝦十郎と成此の時三津五郎が米屋場にて口上をいふ「此の度より兄弟に成升からは此の後歌右衛門と放れ駒と成升せぬよふ御當所に長吉とお取立下されませこふもあらうか

歌家名
いっかがやと見物思ふ坪茶碗

われるほど入人の大和屋三津家名

秀 佳

大詰戻り駕次郎作に歌右衛門與四郎に三津五郎禿にまつ江何れも大出來古今の大入なり同年盆後より同座にて御當所御暇乞として大塔宮齋藤役又跡へ吃又平靱猿を差加へ又八月より忠信の

二役九月よりは春藤次郎右衛門奴の道行を三津五郎と兩人人形の身振り何れも大出来く又先の上へ鬼一の鬼若丸と妹春山の入鹿お三輪の二役を相勤是も大評判にて名残はつきじ目出度舞納

見物も名残惜さの歌右衛門

残し玉へや君の繪姿

鶴見好成

彌江戸表を發足して道中つゞがなく霜月七日の夜に角芝居へ乗込歌右衛門鯉十郎花友門之助何れも上下にて禮も亂敷九之助橋の西詰に舟に乗移れば川筋迎舟には提燈篝り火白晝の如く實に天神祭も及ばぬくらゐの事なり飛んだり舳たりおごつたり四連中には皆御座舟に乗移り大手丸笹瀬丸花玉丸大魚丸其の外百龜丸錦丸守り丸大好丸には大阪のひいき連中又初鶴丸神馬丸には藝者末社が太鼓をはやし茶屋中の舟置屋中松島若中船東西濱若中船何れも太鼓鉦にてはやし立われもくさ櫓よせて悦びの手を打てば兩方よりは鯨波芝居の内外大群集にて前代見聞の嘖しのため目出度儀式も相濟同十二日より顔見世初日晝狂言忠臣講釋御目見には妹春山なり座付引合には連中よりの趣向を左に顯はす

大手連

見付向ふ絹張の霞に日の出松ヶ枝に鶴の巢籠見事なり 手事は疾大黒の趣向なり

笹瀬連

舞だいい面のさくらのつり枝絹ばりの釣がれ道成寺の趣向見事なり

花玉連

初めには鯉十郎丈への御馳走にて見付絹ばりの不二の山連中の中より一人引廻し合羽三度笠を著て江戸訛にてほめ詞あり

芝説丈へは見付絹ばりにて一面の牡丹前には青竹のけつかい花道に絹ばりのほし石橋の文句を譽詞になぞらへ同石橋のふり妙なり

右石橋の時場へ丁ちん一張宛棧敷へは牡丹の花に火を燈したんさくを付色上する此の廻書には歌右衛門の自筆にて

御ひいきの言に咲けり冬牡丹

芝 説

右石橋のほめ詞文句

「芝説當千の無類の上手く花やか賑ひみちく大將自身の座頭うけものはゆるや歌右衛門歌右衛門妙見の奇瑞あらわれさうく思われ江戸におしまれげにも始終の勢ひ浪花町にはづむ時なれや萬人年中待おくせひいきの玉にぞ直しけるよつて顔見世古今稀成大當り大入なり

扱此所にて著者より御断奉申上候は加賀屋先生の一代の事申々筆に述がたく是迄は大略に顯すさいへども此の後は年々の大當りの年號當り狂言而已を巨細に印外事は後篇に顯し侍る文化十三子年春角の座にて信仰記に東吉切に夕ざり伊左衛門よしなを兩人にて相勤伊賀越の丹右衛門と武助別して譽田内記の大當り舟橋に佐の源左衛門役を勤鍛十郎の荒次郎との出合古今又さあるまじく大當りなり切九變化の所作事大出来なり

同十四丑同座にてけいせい稚兒淵に石田の扇にて能の場石川五右衛門の餅屋場の立廻り餘人及ぶ所にあらず大切戻り駕に次郎作來芝門之助何れも大出来大入なり次御堂前敵討に舟越九八郎切に十二化所作事次に二十四孝の横藏高坂彈正何れも大當りにて當年少々入くんだる事有て秋迄休座して同年すぐに又三度目に江戸へ下る

文政二卯年冬大阪角の座へ上り東海道の横山星川との早替りを初て出すよく辰年春同座にて花

大樹に木下東吉、鍛十郎と鎗の長短大出来なり次に忠信二役、權太を出し八陣の正清、奴蘭平よく巳年春江戸坂三津登同座、明智光秀、布引の瀬の尾兩人にて所作事次にかゝ見山にてお初忠臣講釋にてしかま宅兵衛夕ぎり伊左衛門三津五郎と毎日替り妹青山にて定家とふか七何れも大出来にて中にも石切梶原の二ッ胴今古大當りなり同五午年は中の座へ出染分總たばこ切三吉を初て出す次に金門の五右衛門と布袋市と角左衛門の早替り次が孝行酒屋の伊吾益替りは江戸幸四郎半四郎一座にて三勝が舟へさびこみの半七をして切に檀風祈の段を初て勤む九月は角の座へ出て戀女房にて定之進重の井左内けい政の四役、菊水の巻の秋夜切に萩の屋八重桐を勤む

文政六未年角の座にて越の勘左衛門にて大丸のかたり揚次に新升市紅と三人が忠臣藏の七役夏祭りの團七秋は崇禎寺の敵討に治左衛門何れも大出来大當りなり同七申年同座にて油ばかりの庄九郎、腕久の所作事次に菅原の七役切に救入濱の黒船和田の板額伊賀越の政右衛門三代記の高つな不殘大出来同八酉年も同座にて百萬國に高橋合法の新しいもの狂言仕組に申分はなけれども中の若手の一座にまけ色なり併し切九變化の所作事の内鳥羽繪と浦島は末代其の名を殘しけり次は一世一代名殘狂言腰越の五斗兵衛、姫小松の後寛彦山にておそのま内匠の二役一の谷の熊谷何れも無類の大出来にて古今の大入なり其の後は京と堺にて出勤する梅玉舞納の後は道頓ぼりすいびに付芝居茶屋其の外掛り一統より再勤を乞依而翌戌年より中の座へ再勤と極る

打出したから鐵ほうの玉ならで

ひびきばかりで當る事やら

梅 玉

木下陸に竹中友兵衛五右衛門二役切極彩色に兵助大出来又とあるまじくよく亥年は角の座にて遊やまさくらに正清と秀九大當り大入なり當年秋備中宮内芝居へ下る文政十一年角の座天満宮に時平の笑ひ覺壽荒藤太大當り堤げたの十作にて見されの幕切三國一の歌町中大流行なり古

今の大人なり當年六月には藝州宮島芝居へ下り往古より自分一人大將にて三十日の興行に金千兩の給金を取たる人は此の人に限るゝの事にて宮島の大繁昌第一乗込の時に彼地の者仰天したるこの事なり是より天保六未年までの角梅のよし兵衛鬼若丸にて後に橋辨慶御所櫻の辨慶磯の藤彌太うすゆきの大膳伊賀の守五平次の三役大川友右衛門蝶花形の小坂部白石の常悦と宗六齋藤實盛連歌の評判の光秀に吃又平雪月花に五右衛門と髮結五郎七淀の川瀬の歌大流行なりあこやの岩永と十藏母の二役是鯉のばくさいふ至て仙人藝なり毛谷村六助平瓦の治郎藏安倍の保名京東芝居にて松王丸又大阪角にて大判事屬屋の熊谷紐の有常淺間左衛門左り甚五郎龜屋忠兵衛其の外自來也名越長兵衛行平の此兵衛天保二卯年角にて操淨留理打交にて興行千本櫻に渡海屋銀平次に景清にて則景清役淨留理は藍玉事組太夫にて三味線鶴澤勇造手すり方は吉田千四其の頃の玉揃ひなり夫よりは博の四郎次郎五常軍かんき雷庄九郎多門喜三兵衛淺澤の不破數右衛門奴矢田平釣ふれ三ふ奴淀平佐々木巖流と二役笠原新三郎天保六未年三月いせ古市芝居へ行講釋の師直矢間十太郎青陽とりに三輪五郎左衛門澤井又五郎に山田幸兵衛此の内一ツもおろかなく何れもきつしりの大出来なり

天保七申年は門人芝翫へ四代目歌右衛門を譲り悴鶴助を芝翫と改させ自分は玉助と改俳名梅玉さいふよく酉年中の座にて玉手綱に伊達新左衛門番さう彦七物種太郎に鬼一法眼後の鉢木に佐の源左衛門是又大出来にて翌戌年は五月まで病氣にて五月に角の座にて新洞左衛門と切に石切梶原役是生涯の舞臺の名残なり凡近世奇代の稀人にて役者の祖神とも稱すべき人なり

天保九戌年七月十三日終る 行年六十一歳

嗚呼名殘惜しや此世の別れ道

妙法蓮華けふの旅立

梅 玉

首振り小供芝居

思ふに當時の操り各座の興行は、竹田の芝居にあれ、大西の芝居にあれ、將た若太夫の芝居にあれ、單に操り芝居一方とのみ限りては、採算頗る覺束なかりしより、歌舞伎芝居と取り替へ引き換へ興行し、程能く、連繫を取つて居たりしことは、前の璃寛等三人の興行略歴に依つても之を知るを得べし。首振り小供芝居をも興行して居たりしと見ゆ。『梅玉餘響』三代目歌右衛門梅玉の追悼出版である。天保九年十二月浪華猿笠翁輯に、梅玉自筆の手簡を載せたるが、其の中に左の一節がある。

此の項梅玉七歳、天そのかへるさいつも日本ばしを北へわたるまごころをどういふ事にか其の日は明五年の記事なり。若太夫芝居の前を通られ看板をみて奥次郎が坐がしらじやなさ申何こゝろなく立て居られ候さき勘定場に私どもの伯父源藏居合せむりにすゝめて一幕見物いたさせ申候その狂言は國性、爺三、だん目にて頼太夫かたり首ふりにて、

「かんき奥次郎「きんせう」花桐「和藤内友藏みな」私同年の子供に御座候これを見て歸りがけに源藏へ相談いたし芙蓉三保木難助雷子などへも申合次ぎのかわりより私を出すつもりに親ども申候これはまつたく竹林寺不動さまの御かげさ子供心にうれしう存じ居申候ほどなく替り狂言になり二十四孝三段目、囃太夫にて「ちひ藏音松「おたれ一さく」かげ勝奥次郎「母花桐」横藏私大切に伊勢ものがたり梶太夫、後、染太夫、江戸へ行し、雜太夫、三人、かけ合にて「小よしに花桐「豆四郎に奥次郎「しのぶ一徳」によう八音松「あり常わたくし是にて大入大ひやうばんに御座候それより三箇年程いろ」の狂言をいたし京大津堺西の宮なごかげまはり私十二歳に相なり候冬親ども義死去いたしあくれば十三歳初て荒木奥次兵衛座芝居にてせりふないふ狂言を、致し申候狂言は鎌倉山にて「勇助に政吉「あら次郎に友藏「斯左衛門に入藏「勇助女房に吉太

されど淨瑠璃其のものゝ
伎巧は銑煉の極に達した

二代目政太夫の門系
より出た幾多の秀才

耶「やす村と源左衛門二役に私これも打つゞき繁昌いたしそれより音松と私たてわかれ座摩いなりにて評判よろしく道さん掘着しげぬの邪摩になるよしにてやかましく申候處小六三五郎兩人より子ども藝道稽古の爲なれば十五歳迄と申込み其の時はいなりにてみなく同座にて私は日本駄右衛門音松は幸兵衛市藏は圓秋をいたし一徳おさい半季も致し申途にて衣裳さりかへる程の大入り日々に

缺字 りあがり申候その後隠居三五良古美雀片岡古いろは文五郎澤村の太夫同座にて宮島へ下り申候は十五の時にて忠臣ぐらに若狭之介伊吾彌五郎をいたし近江源氏に美雀の取立にて九ツ目の谷村小藤次をいたし申候其のとき場の御見物が美雀あまへよれかゝ屋が見ゆぬと申たに樂屋へは入り大わらひに御座候それよりいなり芝居へかへり五大力の狂言私源五兵衛一とくきく野にて又々大入まことにこれが子ども芝居の世さかりとみなく申候十六歳の六月より角のしげぬへまれき看版を出し上り申候云々

されど操り興行上の不振不況如此なるにも關らず、淨瑠璃其のものゝ伎巧は却て此の沈滞不況の間に於て著しく精達し、前後に比なき程の幾多の名人上手も輩出するに至り、殊更嘉永安政の操り極衰の時代となりては、まさに銑煉の極に達したのでありし。思ふに新作正本の種切れとなつては、勢ひ舊作淨瑠璃の修練工夫を專一とし、各自の伎巧一ツに依つて人氣を繋ぐと云ふ事に傾かざるを得ざるは必然の數にてありし。されば斯界の景氣の次第に沈衰下降し往くとは反對に、太夫にも、三絃にも、人形にも、千苦萬楚の難行を積んで鍛へ上げた幾多の名人上手の輩出するに至つたのも、別に不思議なる現象でもなかつたのである。二代目竹本政太夫は二百にちかき門人を有し、實二年の「竹本政太夫門人連名書」に、素人門人八十五名、太夫門七十九名を列記して居る。傑出したる逸才には、土佐太夫あり、柴太夫あり、

住太夫あり、綱太夫あり、八十太夫あり、中太夫三代目あり、寛延寶曆の全盛時代より、明和安永の漸衰時代に至る三十餘年の斯界を飾つて居たのであつたが、中太夫三代目の門下よりは、竹本播磨大椽二代目土佐太夫に居る。此の人初めは江戸に在り、文化四年正月歸阪、道頓堀大西芝居に土佐太夫にて出勤。文政十二年五月、荷文樂軒芝居を勤めて病氣にて引籠り、四代目政太夫二代目氏太夫なる。明和四年九月初座、文化六年の二秀才を出し、播磨大椽の門下よりは、大隅太夫文化八年初座、文久三年土佐太夫初め沖太夫、次で音太夫、文化四年初座、天保二年まで勤め、三年江戸に下り、十年住太夫初め富太夫、初代文化十年初座、天保三年島太夫初め文字太夫、初代文化九年初座、文政十年京都興行中に歿す。の三人を出し、四代目政太夫の門下よりは、五代目内匠太夫寛政十一年正月初座、天保三年三月まで勤め、初め竹本和太夫、次で竹本住太夫、組太夫藍玉當司と云ふ素人なり。文政十二年正月初座、天保十年以後の事蹟詳ならず。の二人が出て、文化文政時代の大立者となり孰れも嘖々の名を成したのでありし。

越前少椽の系統より出た斯界の大立者

豊竹越前少椽初代若太夫の門系より出た秀才には、初代内匠太夫東西兩座の入れ替りに方り竹本大隅駒太夫の兩人がある。ともに斯界の全盛時代を飾つた大立者なるが、駒太夫の門下よりは、實曆三年十月歳十七にて出座し、初めより序切の大役をつとむ。明和四年江戸に下る。麓太夫鍋屋と云ふ高名の人、通稱鍋屋宗左衛門寶曆七年十二月初座、長命にして、文化十三年十二月八十七歳の老齡にて、二代目駒太夫初代駒太夫の子也。明和三年文樂芝居にて『蝶花形名歌鳥壺』を語れり、文政五年五月六日歿。の三人を出し、麓太夫の門下よりは、巴太夫寛政三年三月初座、初當時より出座、父に劣らぬ美音の三人を出し、麓太夫の門下よりは、巴太夫寛政三年三月初座、初其の聲柄に驚きたる程なりしと云はる。文政元年御霊社内の芝居の櫓下となる。文政十一年十月興行まで勤め、十二月十一日歿。が出て、其の師麓太夫とともに斯界沈滞時代の前半期に於ける權威となり、初代内匠太夫の門下よりは、初代春太夫延享元年三月歿。代長門太夫寛延元年八月東西入替りの二度目内匠太夫初め難太夫、寛曆の末出座、人在り、同七年の番附には大關の位置に据れり。を出し、春太夫の弟子咲太夫三代目の門下よりは、四代目

筑前少様の流れより
出た名人上手

目 染太夫 初め重太夫、寛政六年十月初座、文政六年九を出し、目 四代 染太夫の門下よりは更に 目 三代 月興行半より病氣にて引籠り遂に歿す。

重太夫 五代目政太夫也。初め三代目中太夫の門弟にて琴太夫と云ひしが、故あつて染太夫の門に入り、師の舊名を譲られて重太夫と名なる。文化四年正月重太夫にて出座、天保十一年二月興行に五代目政太夫となりしが、不圖病。目 五代 染太夫 初座七月、梶太夫と改名、文政八年染太夫と名なる。初め津太夫、文化十一年七月氣にて六月二十三日歿す。

引籠り六月七日歿す。尤も此の人は四代目の弟子と云へど、入を、出し、此亦斯界沈滞時代の前半期に於ける大立者となつたのでありし。

豊竹筑前少様 初代此の門下よりは、目 二代 若太夫が出て居る。鐘太夫が出て居る。八

重太夫 二代目が出て居る。岡太夫が出て居る。而して此等高弟の門下よりは、更に幾

多の秀才が輩出して居るのである。岡太夫門下の秀才としては、目 二代 組太夫 初め八十太

戸住居 初彌太夫 初め磯太夫、寶曆三年四月初座、文化十年頃より鼠の春太夫 三代目なり、明和の比出座

なりし。代 彌太夫 出勤も絶えずなりしが、文政三年五月歿す。鼠の春太夫 文政の初めより、明和の比出座

て出勤 等がある。彌太夫の門下の逸才としては、目 二代 彌太夫、安永の比より出座、文政三代筆

太夫 寛政三年十一月初座、天保十年比より出勤も絶えずなりしが、目 八重太夫 二代目の門

下の驥足としては、目 二代 八重太夫、目 二代 時太夫、目 三代 時太夫 明和三年初座、寛永十一年二月興行後

目 三代 此太夫 明和二年三月初座、文 磯太夫がある。而して磯太夫の門下よりは更に 目 四代 此太

夫 俗に云ふ太平此太夫也。初め時太夫、四代目寛政を出し、目 四代 此太夫の門下よりは、目 五代 時太夫

の初めより出座、文政十年まで勤め其の後引退す。目 久太夫 文政三年正月初座、天保十を出して居るのであるが、目 二代 若太夫及

文化六年五月初座、天 保二年まで勤め引退す。目 久太夫 文政三年正月初座、天保十を出して居るのであるが、目 二代 若太夫及

目 三代 若太夫 越前少があるも、座本を主業とし、檀下太夫として其の名を署したるも、多

くは名ばかりに止まりたるが如し。目 二代 彌太夫、目 三代 筆太夫、目 四代 此太夫、目 五代 時太夫、目 三代

沈滯時代の前半期を
賑はした爾餘幾多の
名人

久太夫等は孰れも化政時代の
大立者なりし。

其の他沈滯時代の前半期を賑はした太夫には、竹本三綱翁と云はれた目^{三代}綱太夫がある。目^{二代}綱太夫^{京都四條「猪の熊」の住居なるが}の高弟にして、其の一流の語り風は、あめや流とて^{此の人通稱、館}さかんに評判を取りたるほどの名人にして、^{享和の比より評判たかく、天保二年までつとめて引退。}

其の門下よりは、目^{四代}綱太夫、初めむら太夫、文化九年博勢町文楽芝居初座。天保六年正月綱太夫と名残りとして、江戸に下る。嘉永元年正月道頓堀若太夫芝居の興行を名残りとして、江戸に下る。

氏太夫、初め文字太夫、文政三年の比より相應の役割もつき次第に出世し、一旦退座せしが、文政十二年正月堀江市の側芝居に出勤、此の時氏太夫となる。弘化元年二月文楽座の興行後退隠し、四年十一月二十五日

竹本山四郎^{初め壽太夫、次で津賀太夫、此の人大阪にての出勤は、藩に於て、主に京都又は地方興行、江戸に下り、其の後京都に歸る。}の三秀才が出て居る。

三絃にも、人形にも、亦幾多の名手が輩出した。天明より享和にかけての三絃の名手

は、目^{二代}竹澤彌七^{初め、二代}竹澤駒吉^目、竹澤寛治^目、寛治^目、鶴澤名八^目、鶴澤蟻鳳^目、鶴澤三二^{後三代目、蟻}等にして、人形の名手は、桐竹門造^初、吉田冠藏^目、吉田冠二^目、吉田冠三^目、吉田新吾^目、吉田千四^目、吉田才治^目、豊松重五郎^目、同東十郎等である。

文化、文政年間の立者には、三絃に^初豊澤廣助^{初め竹澤源吉、寛政三年十五歳にて竹本座へ出座、其の後初代蔵太夫の名附親にて竹澤千右衛門と改名し、次で三代目、鹽町政太夫の名附親にて、竹澤權右衛門と改名せしが、文化五年正月道頓堀大西芝居にて、祇園祭禮信長記の興行の折、其の師の未亡人より竹澤彌七の名を譲られしも、即ち三代目彌七なり、同八年故あつて竹澤の苗字を捨て、新に豊澤の苗字を起し、師の恩は廣大なりとの意味を含めて、おのれは廣の一字をとりて廣助と稱し、秘藏の弟子虎造に大の一字を與へて大助と名のらしめた。古今の達人と稱せらる。}

改名披露は曾根崎新地の芝居にて、文化八年七月二十九日より、前菅原傳授手習鑑、道明寺の切に、太夫彌太夫^{初代}三絃廣助^目、切、大和國茜染長町の段に彌太夫廣助にてつとめたり。豊澤大助^目、竹澤彌七^目、豊澤仙左衛門^{初め竹澤吉松、豊澤權平と改名、次で彌平となり、仙左衛門と改名、文政七年八月師匠廣助の死により二代目廣助と相續せり。}、竹澤兵吉^途、一旦豊澤を二代目鶴澤才治^目、豊澤龜之助^目、鶴澤友治郎^目、鶴澤文藏^{初め鶴澤傳吉、文政八年十一月座、摩社内の芝居に}

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

目^{三代}鶴澤才治、豊澤龜之助、目^{三代}鶴澤友治郎、目^{三代}鶴澤文藏

妙聲第一と云はれた
駒太夫

て改名披露祝儀の淨瑠璃橋辨慶に。鶴澤文三郎、後鶴澤目二代鶴澤清七、初め鶴澤鶴澤彌三郎、鶴澤勇造、鶴澤豊吉、後傳吉となり再び改め目二代鶴澤寛治、目三代寛治、初め文吾次で八鶴澤寛三郎、三代目寛治の初花澤伊左衛門、初め鶴澤伊左衛門三代目蟻鳳竹本播花澤咲治、一時二代目花澤伊左衛門弟子なり代花澤伊左衛門、磨太夫と成りし人なりの弟子なり。す。復目三代花澤伊左衛門、初め花がある。人形には、目二代吉田冠藏、初め冠三吉田冠三、二代吉田才治、吉田文藏、目二代吉田三吾、初代三吾の弟にして二代目吉田文三郎の門弟吉田九孝の弟子なり。文政の始め頃より文樂座と座摩裏門芝居の兩座の頭取をつこめ飛ぶ鳥を墜すほど吉田金四、目三代吉田文三郎、初め千四二代目文三郎の門弟なり。吉田兵助、三代目文三郎吉田文三郎の子也。吉田辰五郎、初代辰五郎の子にして等がある。

按ふに寛延、寶曆時代、新界の最の尤者は、初此太夫、豐竹筑目二代政太夫、初内匠太夫竹本
 條、初駒太夫、初春太夫、目二代若太夫初代島、初鐘太夫、初八重太夫此太夫等にして、明和、安永
 時代、新界の漸の尤者は、初染太夫、目三代政太夫竹本播、初駒太夫、初麓太夫、初春太夫目二代内
 匠太夫、初島太夫の復名なり代鐘太夫、目二代此太夫、初代八岡太夫、即ち又兵衛初彌太夫、二代
 目八重太夫、おしゆん傳兵衛猿廻三代八重太夫、目三代時太夫、竹本播磨大椽、三代目等なりし。
 就中初駒太夫は、「日本にての名音と云ふは此の人なり……古今淨瑠璃語りの妙聲に
 て一といふて二のなき事よふく三番目は大和椽四も五も續く聲なく第六番に初春
 太夫、麓太夫なり」と云はれたほどの名音にして、豊竹座が棹尾の興行、「祇園祭禮信長
 記」の三年越の大入りも、畢竟は此の人の上かん屋と爪先き鼠の力にして、元文より明和
 に至る三十餘年の盛況は、半ば此の人の人氣にて持ち切つたとも稱し得べきほどの名
 人なりし。

いよく練熟して來た麓太夫

父に劣らぬ二代目駒太夫

初めての出座より樂屋中を驚かした初代巴太夫

中古の名人二代目内匠太夫

其餘幾多の名人上手

然るに景氣は次第に沈衰すると云ふ不思議な現象

されど寛政、享和、文化、文政斯界沈滯期の前半に入つては、更に幾多の達人、幾多の名手が輩出した。麓太夫の名音は此の期に入つていよく練熟し、其の技は一層の精彩を加へて來た。父、駒太夫にも劣らぬ美音にして、其の流風を語り覺は、駒太夫病氣等の節は望まれて替り役をも勤めたるに少しもかはりなく聞は、生駒くくと町中の評判を取つた目二代駒太夫の生駒太夫がある。初めての出勤に『彫刻左小刀』の大序の奥、七冊目の口を語り、其の聲柄の立派なるに樂屋中を驚かしたほどの初代巴太夫がある。文化の始めには大番附の關脇となり、同七年には一躍大關の位置に進んだ、中古の名人目二代内匠太夫がある。紙屋節の一風を残した初代彌太夫俗に紙屋彌太がある。文政より天保にかけて盛名を馳せた目三代筆太夫がある。兵蘭と云ふ素人より出でて天晴れの語り人となりし目三代中太夫がある。隠居して三綱翁と名乗つた天晴れの名人目三代綱太夫がある。人に勝れて美音、大聲と云はれたる目三代重太夫政太夫がある。受領して竹本越前大椽藤原明郷となつた目五代染太夫がある。出座の始めより重き替り役を勤め、諸人を驚したほどの目三代長門太夫がある。其の他目四代染太夫、八十太夫三代目春太夫より名前を借り目三代内匠太夫、初代富太夫住太夫目二代巴太夫等、孰れも押しも押されもせぬ立派なる立者なりし。されば太夫の顔觸れより觀るも、三絃人形の顔觸れより推すも、寛政、享和、文化、文政の時代は、寧ろ寛延、寶曆、明和、安永の時代よりは優り、更に一段の好評と好景氣とを齎らざるを得ざるの譯合となるのであるが、事實は却て之れに反し、盛んなるべき筈の斯界の景氣は次第く々に沈衰し、ますます増加すべき筈の人氣はさかさまにいよく減退

沈滯時代後半期の大立者

名人上手續々新界に現はる

すると云ふ、不思議なる現象を呈したのでありし。

沈滯時代の後半期天保より明治の初めに至るまでの斯界の大立者としては、播磨大椽の門下より出た竹本大隅太夫 頼堀若太夫の芝居にて「國性爺合戦」の序切と樓門の段を語つて居

る。天保九年大隅太夫と成り、元治元年に歿した。がある。竹本住太夫 初め富太夫、文化十年の比より芝居に出つ。天保二が

ある。二代 巴太夫の門下より出た 五代 豊竹若太夫 黒治と云へる素人より出たる太夫也。文政八

夫。文政十二年其の師若太夫巴太夫と改名に付き後を襲ふて がある。豊竹靱太夫 燕子と云へる素

出つ。天保五年より芝居に がある。四代 政太夫の門下より出た竹本勢見太夫 鈍教と云へる素

居に出つ。天保五年退隠が がある。四代 染太夫の門下より出た 三代 竹本長門太夫 就き次で綱太夫に

（四代目）に學び、菊太夫と稱し、田舎廻りの興行に出でて修業し、文政五年石屋橋染太夫の門に入り竹本實太夫

と改め、同六年正月より文樂の芝居に出たが師染太夫は其の年十一月病歿した。されば名ばかりの師弟の

干係である。世話する人ありて長門太 がある。

三代 長門太夫の門下よりは、更に 四代 長門太夫 初め登茂太夫、天保十年の頃より芝居に出つ。安

成る。竹本長尾太夫 弘化の末より江戸にて芝居に出つ。嘉永六年實太夫と成り、明治十六年四代目長門太

嘉永元年湊太夫と成る。の三秀才が出て居る。越前大椽 五代目 染太夫の門下よりは、六代 染太夫 初

實太夫。文政九年の頃より芝居に出つ。天保九年梶太夫と改名。弘 七代 内匠太夫 初め森太夫。天保十

化三年六代目染太夫と成る。明治二年三月興行より引籠り五月歿。目 七代 内匠太夫 初め森太夫。天保十

匠太夫と成つて出 が出て居る。竹本山四郎 山城の門下よりは、四代 重太夫、初め萬太夫、次で

二年の頃より京都の芝居に出つ。後ち大阪に下り 津太夫 居に出で、後ち大阪に下る。が 出て居る。

而して 六代 染太夫の門下よりは更に 八代 染太夫 五代目染太夫の實子也。初め津太夫慶應三年

梶太夫と成る。十二年 が出て居るのである。

三代 綱太夫の門下より出た秀才には、目四代 綱太夫 初めむら太夫 文化九年より芝居に出つ、掛合由良之助と九段目の切な語つて居る。天保六 がある。氏太夫 初め文字太夫 文政三年より芝居年綱太夫と襲名 嘉永元年江戸に下り文政二年歿。同十二年氏太夫と成る。弘化元年まで勤めて がある。而して氏太夫の門下より 目五代 春太夫 が出た。退隱 同四年歿した。

目五代 春太夫 初めさの太夫後ち文字太夫 天保十年七月歿は初代以來の名人と云はれたるほどの語り人にして、其の門下よりは 目五代 組太夫 目六代 春太夫 初め南部太夫次で 春子太夫 明治十七年太夫と 氏太夫 初め養老太夫明治七年六月氏太夫と襲名 豊竹時太夫 鶴澤文駄と云へる三絃彈より太夫となりし人也。明語等を出し、明治の斯界を賑はして居るのである。

其の他沈滞時代の後半季に於ける大立者としては、竹本咲太夫 二代目政太夫門弟、文政十四年咲太夫と成 がある。住太夫 初め田喜太夫 内匠太夫の門弟なりしが其の死後三代 がある。目四代 彌太夫 初め小松太夫 三代目彌太夫の門弟彌太夫歿後三代目長門太夫の預り弟子と成る。天保九年初めて芝居に出つ。十四年竹本實太夫(三代目)と改名し嘉永七年彌太夫襲名。明治元年三月が がある。目五代 彌太夫 初め小熊太夫 三代目長門太夫門人 嘉永四年長子太夫と改名。師の がある。目五代 八重太夫 四代目八重太夫の門弟後ちに三代目長門太夫の門に がある。目三代 豊竹巴太夫 是長へる素人より出たる太夫也。初代巴太夫の門弟にして文政八年より出座。初め勝太夫、次で綾 がある。目四代 巴太夫 二代目巴太夫門弟 天保三年の頃芝居に出。師の死後政太夫の預り弟子となり十二年明治元年巴太夫襲名 がある。目五代 豊竹駒太夫 三國と云へる素人より出たる太夫也。嘉永三年初めが がある。目 豊竹駒太夫 芝居に出。初め富司太夫 元治元年駒太夫襲名 がある。孰れも沈滞時代の後季の五十年を飾つた斯界の花にして、嘉永二年板の相模番附には、東大關に綱太夫、西に染太夫。關脇に長門太夫、若太夫。小結に大隅太夫、巴太夫。東前頭に駒太夫、三光齋 都京、八重太夫、津賀太夫、むら太夫 都京、越太夫、咲太夫、筆太夫、頼母太夫、津

天保より嘉永に至る
斯界中心人物の顔振

三絃界の妙手名人

島太夫、西前頭に岡太夫、梶太夫、湊太夫、内匠太夫、茂太夫、中太夫、春太夫、錦太夫、時太夫、島太夫等あり、以て天保より嘉永に至る斯界中心人物の顔振を想ふべし。

太夫に幾多の名人上手が輩出した如くに、三絃にも亦幾多の妙手名人が輩出した。

天保、弘化、嘉永の頃には、五代竹澤彌七初め力造。天保六年、五代目彌七襲名。がある。四代鶴澤寛

治三代目寛治の門弟。初め文吾。がある。三代豊澤廣助初め仙左衛門。天保十年、三代目廣助襲名。政太夫、氏太夫の相三絃也。がある。

三代野澤吉兵衛鶴澤文三、四代目文三郎の門弟。初めは勝鳳。二代目也。初代勝がある。三代鶴澤

清七初め勝右衛門。天保十三年、三代目清七襲名也。がある。清七の門弟、鶴澤清八天保十三年、清八と改名。大

隅太夫也。がある。鶴澤清六二代目清七の門弟。初め徳太郎、天保が有る。鶴澤燕三がある。

安政、萬延、文久、元治の頃の大立者としては、四代豊澤廣助三代目、初め猿之助、後源

夫の相三絃也。六代目染太がある。豊澤團平初め力松、後ち丑之助。弘化元年、二代目廣助の幼名を

後ち長門太夫、湊太夫、春太夫等を彈けり。明治十六年、文樂座の檯下に、太夫がある。豊澤新左衛門初

越路太夫と並べて三味線、豊澤團平の名を書かせた程の勢力を持つて居た。鶴澤清七初め佐吉、後ち文駄。安政三

平の預り弟子となる。安政三年、新左衛門と改名。鶴澤清七初め佐吉、後ち文駄。安政三

名がある。鶴澤燕三初め竹松。初代清七の末弟。師の死後、二代目清七の預り弟子となる。の伎能は、

此の比に至つていよゝゝ練熟徹底し、大番附大關の地位にまで進んで居るのである。

其の他慶應より明治の初季にかけては、四代野澤吉兵衛初め虎造、後ち吉彌。慶應元年、四代

がある。鶴澤叶鶴澤清八の門弟。六代目染太夫の粹也。嘉永の初め芝居にがある。五代鶴澤友治

郎京都野澤喜八郎の門弟。初め小庄、次でがある。豊澤團平の伎倆は此の期に入つてますます

す精彩を加へ來り、明治十六年には文樂座の檯下に、太夫、越路太夫と相竝んで三絃團平

の名を署せしむるまでの勢力を成するに至つたのであつた。

左は天明三年以降明治十七年に至る、斯界沈滞期大約百年間の新作正本の年表と操り各座の興行年表である。之れに附するに、其の時々代表人物とも見るべき主もなる太夫の略歴を以てした。彼此綜合稽考し來れば、小座分裂、浮沈常なく、出座の面々は動靜定まらず、太夫も三絃も入替り移り替りの興行にして、僅かに命脈を繋いで居た各座の消息も、時人の淨瑠璃趣味の消長も、流行淨瑠璃外題の變遷も、大要観察するを得べしと信ずる。

天明三年以降の新作
正本年表

外題

作者

上場年月座名

天明三年以降新作正本年表

(本表には便宜上大阪江戸兩地に於ける新作(正本全部を一括して掲載することとした)

石田 詰將 基軍配

二月近松半二歿。

(江戸作者)
萬象亭 偶田喜四郎 合作
中田林七 松芝鬼眼

天明三年正月二日
肥前座(江戸)

伊賀越道中雙六

(江戸作者)
近松 加半 二合作

天明三年四月二十四日
竹本太市座

おしゆん 近頃河原の達引
傳兵衛

(江戸作者)
爲川宗輔 筒井半二 合作
奈河七五三助

大阪にての上場は天明三年三月座
摩社内の芝居也

富士太鼓

松田貫丸 四合作

天明三年十月二十二日
肥前座

太平記義臣の礎

黒藏主

天明四年正月二日
堀江此太夫座

伽羅先代萩

(江戸作者)
松貫四 高橋茂兵衛 合作
吉用角丸

天明五年正月日不詳
結城座(江戸)

比良嶽雪見陣立

芝屋 下芝 叟合作

天明六年六月五日座

彦山權現誓助劔

梅野 松野 保下 風藏合作

天明六年十月十八日座

東唄操文章

野澤 氏組

天明七年三月二十五日座

安徳天皇兵器貢

梅野 潤野 軒合作

天明七年五月朔日座

基太平記白石嘯

鳥亭馬 紀上太郎 旭合作
三容揚 環 焉 烏

江戶淨瑠璃也、上場月日及座名不詳

廓景色雪茶の會

若竹 丹青 堂合作
梅野 下風 躬

天明七年九月二十六日座
竹本千太郎座(大西芝居)

大功艶書合

芝代 古 道合作

天明七年十月十九日座

韓和開書帖

若竹 清 躬合作

天明七年十二月二十三日座
竹本千太郎座

花上野譽の石碑

芝井 半 叟合作
(江戶作者)

天明八年八月二十一日座

木下蔭狹間合戰

若竹 並木千柳 合作
近松余七 躬

寛政元年二月二十一日座

博多織戀鏑

管村 專 助合作

寛政元年五月九日座

有職鎌倉山

同

寛政元年六月二十二日座

天王山杜鵑合戰

正者 不出 詳

寛政元年九月八日座

濱真砂千町封疆

同

寛政元年九月二十三日座
竹本文治郎座

戀傳授文武陣立

菊川七五三 軒合作

寛政二年十一月十五日座

筆始いろは曾我

作者未詳

寛政三年二月日不詳座(江戸)

彫刻左小刀

近竹松 柳千葉 軒合作

寛政三年三月四座

おはな花楓都模様

管專助

寛政三年六月十一座

三拾石艦始

近松柳

寛政四年五月二十二座

太平鳴戸の船諷

司馬芝叟

寛政五年三月九座

會稽故郷錦

近松柳 車止合作

寛政五年三月二十三座

蝶花形名歌島臺

若竹村魚 躬合作

寛政五年七月十六座

浪花名所古跡辻

中村魚眼

寛政六年正月二座

持丸長春金竿劔

近松柳

寛政六年三月二座

日本賢女鑑

近松柳 合作

寛政六年十月十三座

仇討優曇華龜山

司馬芝 奥

寛政六年十月日不詳座(鶴澤三根吉座ならん歟)

警報春住吉

奈川支千 助合作

寛政八年正月二日詳

鬼上官漢土日記

近松柳 助合作

寛政八年十一月八日座

忠義墳盟大石

若竹笛躬 中村魚眼合作

寛政九年二月二十一日座

會稽多賀譽

奈河七五三助

寛政九年四月二十三日座

比良御陣雪升形

梅野下風合作

寛政十年正月二十八日座

忠臣二度目清書

鳥亭焉馬

寛政十年三月十一日座

忠臣一力祇園曙

司馬芝叟

寛政十年八月十五日座

繪合太功記

近松千葉軒 近松湖水軒合作

寛政十一年七月十二日座

唐土織日本手利

並村木魚千柳合作

寛政十一年九月十二日座

太功後編の旗颺

近松千葉軒 湖水軒合作

寛政十一年十月十四日座

近江鴉湖高名硯

同

享和元年正月朔日座

箱根靈驗壁仇討

司馬芝叟

享和元年八月四日座

日吉丸稚櫻

近松藏柳萬枝軒合作

享和元年十月十四日座

敵討操姿鏡

松代目 中貫葉四合作

享和二年五月五日座

日吉丸二度清書

近松梅枝軒加藏合作

享和二年八月二十八日座

假名義士の書添

屏風裏形

享和三年八月十九日座

會稽宮城野錦繪	佐川藤太	文化二年十月三日座日
花競名句雨乞	淺芝一叟 蓬筒合作	文化三年正月日不詳詳
弘法いろは物語	佐川藤太	文化四年二月二十三日座日
女郎花縁助太刀	松貫四樹中葉合作 真羽亭喜下石上	結日城不詳座
櫻姫花洛鑑	佐川藤軒太合作	文化四年九月十日座日
八陣守護城	中川村藤漁 岸太合作	文化四年九月十日座日
玉黒髪七人化粧	佐川藤新太合作	文化五年三月三日座日
鎮西八郎譽弓勢	佐川藤太	文化五年十月十五日座日
自雷也物語	並井春三合作	文化六年八月二十四日座日
四天王寺伽藍鐘	佐川藤太	文化九年四月日不詳詳
瓢馬印黄金千生	梅野下風軒合作	文化九年十二月二十六日座日
本町糸屋娘	佐川藤新太合作	文化十年九月八日座日
酒香童子話	同	文化十一年二月二十二日座日
方言競茶番種本	十返舎一九	文化十有二年未詳版

操り各座興行年表

五	天竺	近吉	田新	吾軒	文化十三年八月	不詳
契情	小倉色紙	山田	案山子	軒合	鶴澤伊之助	座
生寫	朝顔話	春の	家山齋	合	天保十一年正月	樂二座
花雲	佐倉曙	山田	案山子	軒合	嘉永三年正月	不詳
		佐久間	島玉和軒	合	嘉永六年九月	不詳

附記

以上の外、興行年月、座名、作者等の詳ならざるもの左の如し。孰れも明和以降の作物と想定せらる。

おつ八郎兵衛重恨絞鞘。三國妖婦傳。伊勢音頭戀寐乃。絹川累物語。三十
三間堂棟由來。出生太平記。

自天明三年 至明治十八年 操り各座興行年表

本表は完全とは稱し難し。徴すべき記録太だ乏しきにより、往々記事の缺漏せるもあり、月日の相違せる等もあるべし。此等は他日考證補正して更に完成するところあるべし。切に大方諸賢の指教を望む。

天明		次 年	
三	四	重 要 事 項	各 座 興 行 事 歴
<p>三月 八重太夫江戸より歸る。</p>	<p>春、初代重太夫三代目咲太夫と成る。 豊竹氏太夫歿。 二月二十七日</p>	<p>初代竹本住太夫、二代目駒太夫江戸より歸る。</p>	<p>西の芝居 正月 前「新薄雪物語」 切「加賀見山舊錦繪」 「加賀見山」は住太夫の江戸土産也。長局を語る。(座元竹本太市)</p>
<p>四月二十四日 〔伊賀越道中雙六〕 (新作)</p>	<p>六月芝居普請出来。 七月十五日 「染分手綱」 九月十七日 「戀の序ひらき」 十月八日 「造直お菊酒屋」</p>	<p>市側の芝居 普請中一座は座摩社内 の芝居に移りて興行。</p>	<p>興行 座摩社内 の芝居 正月 「式三番」基太平 記 新吉原 此太夫 (市側の一座の芝居) 普請中の興行</p>
<p>三月十五日 前「義仲勳功記」 切「近頃河原達引」 八重太夫江戸土産猿廻しの段大當り。 (同上)</p>	<p>七月曾根崎新地芝居 「女節用操鏡」</p>	<p>東の芝居</p>	<p>其他の各座</p>

年 六	年 五	年
<p>三根太夫二代目染太夫と成る。森太夫二代目三根太夫と成る。</p>	<p>十一月 初代染太夫歿。</p> <p>〔戀女房染分手綱〕 此太夫一座（座元豊竹此吉） 一座の顔振は 此太夫、駒太夫、麗太夫、時太夫、雛太夫、百合太夫、人形吉田文三郎、豊松重五郎、吉田文五郎、三絃瀧澤寛治、同名八等也。</p>	<p>九月十日 豊竹島太夫（二代目）若太夫歿。</p> <p>豊竹岡太夫（又兵衛、岡太夫俗に云へる岡又なり）歿。岡太夫の弟子豊竹磯太夫自ら氏を改めて竹本彌太夫と名乗る。（即ち紙屋彌太夫也）</p>
		<p>三月三日 前「三莊太夫五人娘」中「千本櫻」切 「阿波の鳴戸」 「千本」の四時太夫 「鳴戸八」は此太夫也。</p> <p>七月十五日 「日本賢女鑑」</p> <p>九月十五日 「浪花名所古跡辻」 一座西京へ出興行。 留守中首振り芝居興行也。</p>

天明

次 年	六	七
重 要 事 項		<p>二月 豊竹八十太夫、竹本組太夫、 (通稱靱の組太夫)と成る。</p>
	<p>六月五日 〔比良嶽雪見陣立〕 (新作) (座元竹本千太郎) 一座の太夫疾太夫、 麗太夫、政太夫、内匠 太夫、中太夫、氏太夫 等也。 閏十月十八日 〔彦山権現誓助劔〕 (新作) 役割。序切突太夫、 五ツ目麗太夫、七ツ 目政太夫、九ツ目内 匠太夫、角力揚中太 夫、氏太夫也。</p>	<p>五月朔日 〔安徳天皇兵器貢〕 (新作) (座元竹本千太郎) 八月九日 〔鬼一法眼三略卷〕 此の興行限り麗太夫 退座。 九月二十六日 〔廓景色雪の茶會〕 (新作) 座元竹本千太郎、豊 竹此吉兩名、權下豊 竹此太夫、竹本政太</p>
各 座	西の芝居 市の側の芝居	
興 行	座摩社内の芝居	
事	東の芝居	
歴	其他の各座	<p>十一月八日 曾根崎新地芝居(座 元吉田才治) 〔天神記〕</p>

寛政

年 元	年 八	年
	<p>十二月 初代住太夫再び江戸に下る。 和太夫、二代目竹本氏太夫と成る。</p>	
<p>九月二十三日 〔濱真砂千町封疆〕 (新作) (座元竹本文治郎) 一座の太夫は麓太夫 梶太夫、二代目駒太 夫、二代目綱太夫、 鐘太夫等也。</p>	<p>十二月二十五日 (座元竹本千太郎、後 見竹本政太夫) 〔最明寺殿由緒礎〕</p>	<p>夫也。三代目時太夫 久々にて出座。 十二月二十三日 〔韓和聞取帖〕</p>
<p>五月九日 〔博多織戀鏝〕 六月二十二日 〔有職鎌倉山〕 九月八日 〔天王山杜鵑合戦〕</p>	<p>二月二十一日 〔木下蔭狭間合戦〕 (新作) 麓太夫二代目駒太夫 出座。 役割。序切駒太夫、 七ツ目麓太夫、九ツ 目此太夫、十冊目駒 太夫也。</p>	<p>五月 人形仕立子供狂言 (首振り芝居也)</p>

寛政

次 年	二 年	三 年
重 要 事 項	<p>四月 町太夫、三代目竹本春太夫 と成る。(俗にねづみ春太夫 也)此人大阪にての出勤は 稀也。</p>	
		西の芝居
各 座	<p>五月二十日 〔彦山権現誓助劔〕 七月十六日 〔近江八景石山遷〕 九月 〔長柄人柱〕</p>	<p>三月四日 〔彫刻左小刀〕〔新作〕 豊竹巴太夫初て出 座。 四月十五日 〔會稽故郷錦〕 六月十一日 〔花楓都模様〕〔新作〕 七月十五日 〔甲斐信濃世話兩 國志〕</p>
市の側の芝居	<p>二月十五日 〔星月夜百人上臈〕</p>	<p>十月大火類焼、芝居普 請中北の新天地、堺、京 都、奈良にて興行。</p>
興 行	座殿社内の芝居	
事 歴	東の芝居	其他の各座

年	年
<p>十月十三日 二代目豊竹八重太夫（通稱） 和泉平兵衛なり、俗に泉平 八重太夫と云へり）歿。</p>	
<p>三月九日 「太平鳴戸の船謡」 （新作） 三月二十三日 「會稽故郷錦」 （新作） 七月十六日 「蝶花形名歌島臺」 （新作） 九月三十日 「鼻手本繪金藏」 （各種のよせ物）</p>	<p>芝居普請出來、 三月二十六日より 前濱千鳥大内軍 記 切「壽門松」中の巻 五月二十二日 「三十石艦始」新作 七月二十五日 「浪花堀江藝子始」 九月二十八日 此太夫一生一代 前攝津國長柄人 柱「切」勤功記」 役割 「長柄人柱」三段目時 太夫、四の切八重太 夫「勤功記」三段目 此太夫、三絃纏澤寛 治</p>

寛政

次 年	六 年	七 年	八 年
<p>重 要 事 項</p>	<p>二代目豊竹湊太夫三代目八重太夫と成る。 (北の新地の芝居にて披露)</p>		
<p>各 座</p>	<p>西の芝居 九月九日 前「義仲勳功記」 切「千代萩」 十月五日 「假名手本忠臣藏」 十一月朔日 「近江源氏」</p>	<p>正月十四日 「本朝廿四孝」 (二度目) 此時竹本土佐太夫久々にて江戸より歸阪、二段目の切を語る、下駄の場は氏太夫、政太夫(三代目)、四段目は麗太夫。</p>	<p>正月十二日 「祇園祭禮信仰記」 二月十二日</p>
<p>興 行</p>	<p>市の側の芝居 三月二日 「持丸長者金竿劔」 (新作)</p>	<p>十月十三日 「日本賢女鑑」(新作)</p>	
<p>事 務</p>	<p>座摩社内の芝居</p>		
<p>其 他</p>	<p>東の芝居</p>		
<p>歴 史</p>	<p>其他の各座</p>		

年一十	年 十	年 九	年
		七月十日 初代竹本咲太夫（後も男徳齊）歿。	十月四日 二代目此太夫歿。
			前「岸姫松」 切「新版歌祭文」
		正月十一日 「廓訛潮來晝草紙」	
正月二日 「近江源氏」 竹本和太夫（後ち五代目内匠太夫）初て出座。	八月十五日 「忠臣一力祇園曙」 （新作）	二月二十一日 「忠義墳盟大石」 （新作）	
		十月十二日 「日蓮上人御法海」	
	三月十日 道頓堀若太夫芝居 前「忠臣講釋」 切「宿無團七時雨傘」		
	八月二十日 同芝居 「三日太平記」		
		二月十六日 北の新地の芝居 前「和田合戦」 切「天の網島」 太夫竹本岡太夫也。	三月二日 御靈社内芝居 「玉黒髪七人化粧」
		七月二十二日 御靈社内芝居 「出世握虎稚物語」	

寛政		次 年	
年 二 十	年 一 十	重 要 事 項	各 座 興 行 事 歴
	九月二十二日 三代目豊竹時太夫歿。		西の芝居
三月十三日 前「矢口渡」 次「千本櫻」			市の側の芝居
十二月二十日 「瓢馬印黄金千成」			座摩社内の芝居
			東の芝居
閏四月六日 若太夫芝居 「奥州安達原」	十月十四日 同芝居 「太功後編の旗颯」 (新作)	七月十二日 道頓堀若太夫芝居 「座元豊竹諏訪太夫」 繪合太功記」 (新作) 役割。五ツ目の切咲 太夫、七ツ目の切咲 太夫、十冊目露太夫、 十二冊目同咲太夫、 奥内匠太夫。	北の新地の芝居 「瀬瀬紺屋譜」 四月八日 五月二十日 同芝居 前「和田合戦」 切「天の網島」

年	次 年
<p>三</p> <p>十一月 二代目重太夫、四代目染太夫と成る。</p>	<p>重 要 事 項</p>
<p>九月九日 「義仲勳功記」 (座元吉田芳松) 槽下政太夫、麗太夫 兩名也。</p> <p>十月五日 「假名手本忠臣藏」 十一月朔日 「近江源氏」</p>	<p>西の芝居 各座</p> <p>「日吉丸稚櫻」 四月十一日 座元豊竹馬吉槽下麗太夫。</p>
<p>二月五日 「傾城北國曙」 太夫竹本彌太夫、土佐太夫、竹本倉太夫(後に三代目内匠太夫)</p>	<p>市の側の芝居</p>
<p>五月 「蘭奢待新田系圖」 切「織合團七稿」 槽下豊竹巴太夫</p> <p>七月十五日 「勝関李源氏」 切「曾我會稽山」</p>	<p>御靈社内の芝居 興行</p> <p>文樂の芝居</p>
<p>其他の各座</p>	<p>其他の各座</p>

年 六	年 五	年 四
<p>此の頃より各所宮芝居流行</p>		
<p>正月十一日 〔廓訛潮來畫草紙〕 (新作)</p>	<p>正月十日 〔祇園祭禮信仰記〕 麗太夫は四段目鼠の 役場也。 三月三日 〔妹背山婦女庭訓〕 掛合妹山巴太夫、昔 山土佐太夫。 四月五日 前〔岸姫松〕 切〔新版歌祭文〕</p>	<p>正月二十四日 〔本朝廿四孝〕 土佐太夫江戸より歸 り出勤。 三代目重太夫出座 九月九日 〔八陣守護城〕 (新作) 樽下麗太夫。 毒酒の段より船の段 巴太夫。 十月 〔鄙島由緒〕</p>
	<p>三月二日 〔玉黒髮七人化粧〕 三代目綱太夫安方内 と三段目の切を語 る。</p>	<p>正月七日 〔妹背山〕</p>
	<p>十月十一日 北の新地の芝居 〔鎮西八郎譽弓勢〕 (新作) 座元竹本の太夫。</p>	

文化		次 年	重 要 事 項	各 座	興 行	事 務	歴
七 年	六 年	西の芝居					
<p>三月 初代竹本住太夫江戸に歿。</p> <p>五月 四代目政太夫、其師（三代目政太夫）と共に江戸に下る。師政太夫は此時播磨太夫と名乗る。</p>	<p>冬二代目氏太夫、四代目竹本政太夫と成る。</p>						
	<p>十月 「日蓮上人御法海」 (座元竹本和太夫)</p>						
	<p>九月九日 「八陣守護城」</p>			<p>五月五日 「忠臣講釋」 豊竹岩太夫（後ち五代目時太夫）初めて出座。</p> <p>七月二十一日 「出世握虎稚物語」 (座元豊竹八木太夫) 巴太夫出座。</p>			
	<p>八月二十二日 角丸の芝居 「自來也物語」 座元豊竹道太夫、麓太夫出座。</p> <p>九月 荒木芝居 「繪本優曇華物語」 巴太夫出座。</p>						
<p>五月五日 北新地の芝居 「優曇華龜山」</p>	<p>十二月二十日 堀江荒木芝居 「伊賀越乗掛合羽」</p>						

年 九	年 八	年 七
	<p>七月 政太夫一行歸阪。七月十四日竹本播磨太夫江戸に歿。 (行年八十)</p>	
		<p>八月 前「三日太平記」 切「大塔宮」 初代染太夫二十五回忌追善。 「大塔宮」三の切四代目染太夫勤む。 十月五日 「太功記」</p>
	<p>十月十二日 前「日蓮記」 切「白石噺」 新吉原土佐太夫</p>	
	<p>七月二十五日 前「大塔宮」 中「勤功記」</p>	<p>四月十六日 「本朝廿四孝」 此時巴太夫槽下と成る。</p>
<p>正月二日 「曾我會稽山」 (太夫元竹本理太夫) 巴太夫出座。 政太夫出座。</p>		
	<p>九月十日 荒木芝居 前「優曇華物語」 切「勤功記」 座元竹本頼太夫 槽下麓太夫巴太夫</p>	<p>五月四日 道頼堀若太夫芝居 前「鎌倉三代記」 切「天の網島」</p>

文化

次 年	九 年	十 年	十
重 要 事 項		竹本文字太夫、島太夫と成る。	此の頃より政太夫は座摩、御靈、稻荷と替るくの出勤也。
各 座			
市の側の芝居		四月八日 「花櫻會稽褐布染」 土佐太夫出座。	
興 行	御靈社内の芝居 二月朔日 「新薄雪物語」 九月五日 「三代記」 十月十六日 「菊萱」 十一月二十一日 「姫小松」	四月八日 「花櫻會稽褐布染」 (太夫元竹本富太夫)	
事 業	文樂の芝居 四月 「四天王寺伽藍鑑」 八月朔日 「大原問答」 此の興行より三代目網太夫(あめや綱太夫也)續いて出勤也。 九月九日 「躰仇討」	九月七日 「太功艶書合」 十二月二十二日 「累物語」	二月二十二日
歴	其他の各座	九月二日 座摩社内芝居 前「國性爺合戦」 切「反魂香」 政太夫出座。	

年 二 十	年 一
	<p>七月 津太夫梶太夫と成る。</p>
<p>三月二十日 前「菅原」 切「香庚申」 八百屋の段土佐太夫</p>	
<p>正月 「桑名屋徳藏入船物語」</p>	
<p>三月二十一日 「伊賀越道中雙六」</p>	<p>十月 「小栗判官車街道」</p>
<p>三月二十日 道頓堀角丸芝居 「菅原傳授手習鑑」</p>	<p>四月十九日 座摩社内芝居 「義經千本櫻」 (太夫元豐竹枝太夫) 櫓下麗太夫、巴太夫の兩名也。</p> <p>七月十五日 道頓堀竹田芝居 「假名手本忠臣藏」 (櫓下麗太夫) 初代津太夫初めて役附勢揃の段つれを語る。</p> <p>十月七日 道頓堀若太夫芝居 「鄙島原」(新作)</p> <p>十月八日 北の新天地の芝居 「妹背山婦女庭訓」 切 「蘆屋道満大内鑑」 狐別れ土佐太夫。 (座元竹本絹太夫、竹本彌太夫)</p>

文化		文化	
十	次 年	年 二 十	次 年
重 要 事 項		重 要 事 項	
	各	各	各
	座	座	座
	興 行	興 行	興 行
	事	事	事
	歴	歴	歴
	市の側の芝居	<p>九月九日 前「一谷嫩軍記」 切「妹背門松」 實屋土佐太夫 十月十二日 「日蓮上人御法海」 此の後西の芝居の消 息不詳。</p>	西の芝居
	座摩社内芝居		市の側の芝居
	御霊社内芝居		御霊社内芝居
	文楽の芝居	<p>十月十二日 「日蓮記」 十一月十日 「一の谷」 次「天の網島」 十二月二十六日 「蝶花形」</p>	文楽の芝居
	其他の各座		其他の各座
	市の側の芝居		市の側の芝居
	座摩社内芝居		座摩社内芝居
	御霊社内芝居		御霊社内芝居
	文楽の芝居	<p>(此頃座太夫元は竹本 喜太夫也) 四代目染太夫座附太夫 と成る。 三月二十一日 前「伊賀越」 中「知死期蒔染」 切「桂川連理柵」 岡崎の段三代目經太 夫、帯屋の段土佐太 夫、梅由内の段筆太</p>	文楽の芝居
	其他の各座		其他の各座
	市の側の芝居		市の側の芝居
	座摩社内芝居		座摩社内芝居
	御霊社内芝居		御霊社内芝居
	文楽の芝居		文楽の芝居
	其他の各座		其他の各座

文政

年元	年四十	年三
<p>正月二日 前「新薄雪物語」 切「中將姫」</p>	<p>正月十一日 「妹背山婦女庭訓」</p>	
		<p>四月十九日 「義經千本櫻」</p>
<p>此の年より常芝居と成る。豊竹座の再興とも云ふべき也。 櫓下巴太夫也。</p>		
<p>前「蘭奢待」 切「織合團七縞」</p>	<p>四月十五日 前「忠臣講釋」 切「浪花八文字 鰻谷」</p>	<p>夫、沼津の段三代目由太夫 四月十五日 「忠臣講釋」 八海目切中太夫 五月 「比良嶽」 七月十四日 「三國無雙奴請狀」 切「累物語」 十二月二十六日 「蝶花形名歌島臺」 次「二代鑑」 切「義臣傳」 麗太夫出座、時年八十七。</p>
<p>(此の頃、太夫元竹本木太々夫也)</p>	<p>五月 「新田蘭奢待」 七月 「葦源氏」</p>	

文政

年次	元 年		二
重 要 事 項			
各 座	市の側の芝居	<p>八月二日 前「一の谷嫩軍記」 切「蘆屋道満」</p>	
興 行	座摩社内の芝居	<p>正月七日 前「妹背山」 切「伊賀越」 (太夫元野澤吉彌) 伊賀越八ッ目切綱太夫。</p>	
事 歴	文樂の芝居	<p>三月 「三國無雙奴請狀」 次「大塔宮」 切「戀の緋鹿子」</p> <p>七月十五日 「芋源氏」</p> <p>十月 前「立春姫小松」 中「長柄人柱」 切「千代萩」</p> <p>十一月 前「一の谷」 切「天の網島」</p>	
其他の各座		<p>二月二十三日 「狭間合戦」</p>	

年	三	年
<p>五月十日 初代竹本彌太夫歿、竹本磯太夫二代目彌太夫と成る。</p>	<p>此の年土佐太夫受領して竹本播磨大椽藤原秀富と名乗る。</p>	
<p>八月 前「一の谷嫩軍記」 切「蘆屋道満大内鑑」</p>		
		<p>八月十六日 前「比良嶽」 切「八重霞」</p>
<p>四月八日 「雙蝶々曲輪日記」 切「本朝廿四孝」 廿四孝三の切中太夫同 四の切重太夫</p>	<p>正月二日 「妹背山婦女庭訓」 切「壽連理の松」 淡町の段時太夫也。 磯七使者中太夫。</p>	<p>五月二十八日 「みどり淨瑠璃」 十一月十六日 前「太功記」 切「天の網島」 新地茶屋中太夫、「太功記」十の切三代目重太夫。</p>

年	五	年
<p>五月六日 初代麓太夫歿。(行年九十三)</p>		
<p>七月二十九日 「大塔宮」 三の切中太夫。</p>		
<p>五月 前「日高川」 切「博多織」</p>	<p>二月六日 前「大友眞島」 切「姫山姥」</p> <p>三月 染太夫一行伊勢へ出 興行。</p> <p>三月二十七日 前「忠臣講釋」 切「盛衰記」 神崎重太夫</p>	
	<p>十月十七日 前「國性爺」 次「女護島」 切「河原達引」</p> <p>十一月八日 前「奥州安達原」 切「教興寺村」</p> <p>十二月二十八日 「繪合太功記」</p> <p>十月二十日 同「芝居」 前「菅原傳授」 切「覺仇討」 道明寺の切、天祥山 中太夫、阿彌陀寺切、 彌太夫。</p>	

文政

次 年		重 要 事 項
六	五	
		各 座
		興 行
		事
		歴
		市の側の芝居
		座摩社内の芝居
		御靈社内の芝居
		文樂の芝居
		其他の各座
		<p>九月二十一日 「日蓮記」 勘作住家播磨大椽。</p> <p>十二月二十八日 「祇園祭禮信仰記」 此の時對普請の段々 碁立の段は染太夫、 三の口と爪先鼠は三 代目重太夫、三の切 播磨大椽、序切と風 呂屋は梶太夫也。實 太夫（こぼれ口長門 太夫也）初めて見習 さして出座。</p>
		<p>二月朔日 「新薄雪物語」</p> <p>三月十一日 「廿四孝」 此れより一座は伊勢 古市へ出興行。</p> <p>四月十六日 前「本朝廿四孝」 切「桂川連理柵」 帯屋の段筆太夫。</p> <p>五月一座歸阪座摩社内 の芝居へ出勤也。</p>
		<p>四月十六日 角丸芝居 「矢口渡」 四段目切綱太夫。</p>

七 年	年
	<p>七月二十五日 豐竹時太夫四代目此太夫と成る。 長崎に下る。</p>
	<p>七月二十九日 前「孃景清」 次「長柄人柱」 昔「八丈」 切「法界坊」 白木屋二代目彌太夫、日向島播磨大様。 九月二十七日 「義經千本櫻」 此の興行中途より染太夫病氣、梶太夫（後ち越前大様）代役、此亦病氣こぼれ口長門太夫代役。</p>
<p>三月三日 前「源平布引瀧」 切「累物語」 竹本播磨大様江戸行名殘興行。 大様は中に「先代萩」御殿さ「紙子仕立」天文字屋の一日替り。 留守中櫓下は彌太夫也。</p>	<p>七月二十五日 前「大塔宮臆鏡」 切「極彩色娘扇」 天王寺村筆太夫。</p>
<p>四月 前「新薄雪物語」 切「倭莊子」</p>	<p>十二月二十八日 「蘭奢待新田系圖」 切「伊呂波藏三組盃」</p>
<p>四月二日 角丸芝居 「四天王寺伽藍鑑」 此限り綱太夫退座。</p>	

次 年	七 年				
重 要 事 項					
各	座	興 行			
事	歴				
			<p>十二月二十八日 前「伽羅累物語」 切「又平」 豆腐屋の段切巴太夫 御殿の段切巴太夫 將監閑居若太夫</p>		
			<p>二月二十八日 「蝶花形」 切「河原達引」 猿廻し若太夫</p>	<p>十月十六日 「荊萱」</p>	
			<p>十二月二十八日 前「姫小松」 切「桂川」</p>	<p>九月五日 「鎌倉三代記」 此の頃橋下中太夫也</p>	<p>八月 前「伊賀越」 切「大内鑑」</p>
			<p>八月 前「伊賀越」 切「大内鑑」</p>	<p>八月八日 此の頃より政太夫又々各座へ出座の事と成る。</p>	<p>八月八日 堀江荒木の芝居 「加賀見山廓寫本」 政太夫出座。</p>
			<p>九月九日 北の新天地の芝居 前「八陣守護城」 切「象仙人」掛合 八陣八の切巴太夫 此村屋舖若太夫。</p>		

年	八
九月 竹本梶太夫五代目染太夫と成る。	五月 竹本八十太夫春太夫の名前を借受けて之を名乗る。
八月十八日 三代目中太夫歿。	四月 播磨大椽八十太夫歿太夫等と共に歸阪。
八月二十二日 前「國性爺」 中「鷗山姫捨松」 切「十二月粧水」 <small>景事十二化け也</small>	五月朔日 前「楠昔嘶」 中「粧水絹川堤」 切「兜軍記」 琴責掛合 重忠、播磨大椽。岩永、彌太夫。三絃鶴澤傳吉、豐澤兵吉。
十月二日 「本朝廿四孝」	三月十八日 前「鎌倉三代記」 切「大内鑑」
十月十七日 前「忠臣講釋」 切「加賀見山」 十二月 「操顔見世」	五月七日 前「白石嘶」 中「和田合戦」 切「宿無團七時雨傘」 「白石」逆井村の切、「和田合戦」三の切巴太夫。
九月五日 「伊賀越道中雙六」 <small>沼津若太夫岡崎の段切巴太夫</small>	七月十七日 前「日吉丸雅櫻」 次「三十三間堂」 切「桂川」
九月七日 前「太功艶書合」 切「雙蝶々」 <small>四代目染太夫三回忌、五代目染太夫改名披露興行也</small>	五月朔日 「盛衰記」 <small>逆櫓の段中太夫。之れ中太夫名残りの舞臺也。</small>

文政

次 年	九	
重 要 事 項		
各 座	興 行	文 樂 の 芝 居
<p>市の側の芝居</p>	<p>座摩社内芝居</p> <p>正月二日 「日本賢女鑑」 重太夫、筆太夫出座。</p> <p>二月十日 前「鎌倉三代記」 切「阿波鳴門」 「關取千兩轍」 「夕霧伊左衛門」 猪名川内筆太夫、三 絃鶴澤寛治（文吾改 め）也。十郎兵衛内播 磨大椽。</p>	<p>御霊社内芝居</p> <p>二月朔日 「假名手本忠臣藏」 扇ヶ谷若太夫。 山科の切巴太夫。</p> <p>三月三日 「菅原傳授手習鑑」 切「大安寺」 四段目の切巴太夫。</p>
<p>文樂の芝居</p> <p>二月四日 前「有職鎌倉山」 切「加賀見山」 此の時より又々綱太 夫入座。</p> <p>五月十三日 「夏祭浪花鑑」 七月十四日 「嬢景清八島日記」</p>	<p>其他の各座</p> <p>三月三日 座摩芝居の一行道頓堀 角丸芝居にて興行。 「假名手本忠臣藏」 筆太夫出座。扇ヶ谷、 平衛門、天川屋の中 を語る。 山科の切、掛合由良 之助磨大椽、六段 目の切—おかる重太 夫。</p> <p>四月 京都道場宇治幕太夫 座にて政太夫一座興 行。</p>	

年	十	年	年
<p>七月十三日 大平時太夫此太夫と成る。</p>			
		<p>七月十三日 〔近江源氏先陣館〕 切「大經師」 此太夫「大經師」を勤む、三絃疾治改輪澤市太郎也。盛綱陣屋の切播磨大椽。</p>	<p>正月二日 前「妹背山」 切「姫山姥」 槽下巴太夫、播磨大椽の兩人。 背山と杉酒屋は播磨大椽、妹山と四段目は巴太夫にて二枚番附也。此の興行表札場の所までかけ出しなする程の大入也。 巴太夫伊勢へ出興行跡播磨大椽一人槽下</p>
<p>三月十五日 前「富士見西行」 切「桂川」</p>	<p>正月二日 前「太功記」 切「博多織」 十の切重太夫 博多柳町綱太夫也。 槽下竹本綱太夫也。</p>	<p>七月十一日 北堀江荒木芝居 〔伊賀越道中雙七六〕 切「法界坊庵室」 岡崎の段切政太夫。</p>	<p>八月二十日 此の時長門太夫初めて文樂芝居へ出座。 「忠臣講釋」 八月二十三日 高津社内芝居 前「白石噺」 中「教興寺村」 切「兜軍記」掛合 政太夫一座。 十月十六日 同じ芝居 「假名手本忠臣藏」</p>

文政		次 年
年	十	重 要 事 項
十一月 豊竹吾太夫五代目時太夫と成る。		各 座 市の側の芝居 座摩社内芝居
九月二十七日 「義經千本櫻」		
八月二十六日 前「白石噺」 中「壁仇討」 切「お七八百之段」 「壁」の十、十一は若太夫、八百屋の段は此太夫、白石七の切播磨大様。		興 行 御霊社内芝居
九月十八日 前「安達原」 中「おはつ徳兵衛」 教興寺」 切「合邦」 此の時巴太夫歸座出勤。安達の三「巴太夫、教興寺」播磨大様、「合邦」若太夫也。此の興行限り此太夫引退。此の興行後播磨大様退座。		
十一月十日 道頓堀中の芝居 「國性爺」 大切り様顔見世播磨大様出座、大切り様顔見世に高麗太夫（後ち竹本富太夫、安政三年江戸に下り逗留中盲人となり、今次久々にての歸阪也。）無本にて「昔八丈」城木屋の出語り評判を取る。		文 樂 の 芝 居 其 他 の 各 座
十一月四日 「三十三間堂由來」 切「志渡寺」 榎下は巴太夫一人の舊に復る。		文 樂 の 芝 居

(太夫元龜澤秀治郎)

正月二日

「義經千本櫻」

此の時より政太夫出座。

櫓下巴太夫、政太夫の兩人となる。

三月三日

「腰越狀」

三月二十七日
前「鎌倉三代記」
切「歌祭文」
播磨大櫓出座。

四月十六日

「鬼一法眼三略卷」

中「鳴戸八」

切「播州皿屋敷」

「鐵山館「鬼」の三政太夫「鳴八」巴太夫也。

此の興行後、政太夫退座。

五月十日

「優曇華龜山」

七月十二日

前「彦山權現」

切「加賀見山」

巴太夫一人櫓下。

「加賀見山」七ツ目掛合おはつ筆太夫、尾上巴太夫也。

二月二十七日(或は正月二日ともあり)

前「三代記」

切「歌祭文」

野崎村は高麗太夫也。

四月十四日

前「勳功記」

切「往昔曾根崎村噂」

七月二十九日

前「弓勢智勇湊」

切「檜樓錦」

太安寺堤の段政太夫也。

櫓下政太夫。

文政		十 一 年		次 年
重 要 事 項				各 座
十				
<p>十二月十一日 初代巴太夫歿</p> <p>竹本文字太夫氏太夫と成る 豊竹富太夫五代目若太夫と 成る。</p>				市の側の芝居
<p>正月十六日 前「伊賀越」 切「楠昔噺」</p> <p>此の興行より政太夫 出座、沼津氏太夫、 伊賀八綱太夫、井子 政太夫、三段目の切 は竹本組太夫也。 組太夫は藍玉當司と 云、素人太夫にして、 芝居への出勤は此の 時が初めなるが、此 の初座の太夫がのつ けより楠の三段目な き破格也。</p>				座摩社内の芝居
<p>八月八日 前「大塔宮」 切「蘆屋道満」 身替音頭播磨大椽。</p>				御靈社内の芝居
<p>八月二十六日 「八陣守護城」</p> <p>十月二十八日 「日蓮上人御法海」 此の興行中途より巴 太夫病氣。</p>				興 行
<p>正月二日 前「本朝廿四孝」 切「雙蝶々」</p>				文 樂 の 芝 居
<p>正月二日 「祇園祭禮信仰記」 播磨大椽門弟の一座 也。 (一)座々替り也。 碁立の段高麗太夫。 (三)絃竹澤兵吉と成 る)</p>				事 歴
<p>八月二十日 前「蝶花形」 中「いろは縁起」 切「容競出入湊」 わしの段政太夫也。</p> <p>九月二十四日 前「狭間合戦」 切「昔八丈城木段」 城木屋は高麗太夫。 十月二十六日 「菅原傳授」 四段目の切高麗太夫。</p>				其他の各座

二

年

八月
豊竹綾太夫三代目駒太夫と
成る。
八月
豊竹若太夫二代目巴太夫と
成る。

三月朔日
前「小野道風」
中「いろは縁起」
切「紙子仕立」
大文字屋は組太夫也。
三月二十五日
前「妹背山」
切「鬼一」
芝六住家の切、政太
夫。「鬼」三段目の
切、組太夫。
四月八日
「播州浦朝霧」
五月五日
前「立春姫小松」
切「千本櫻」
「千本」の四の切組太
夫。

二月二十六日
前「軍法富士見西
行」
中「新版歌祭文」
切「長柄人柱」
野崎村筆太夫也

八月四日
前「忠臣藏」
次「博多織」
切「盛衰記」
山科二代目巴太夫。

五月五日
前「忠臣講釋」
切「鰻谷」
七ツ目の切播磨大椽
此れ大椽名残りの舞
臺也。
「鰻谷」は高麗太夫。

九月十五日
前「出世太平記」
切「倭草紙」

五月十日
北の新地の芝居
前「立春姫小松」
切「教興寺村」
教興寺政太夫也。

天保		文政	
元	年	二	十
			次 年
			重 要 事 項
			十二月二十四日 播磨大椽歿
			市の側の芝居
			座摩社内の芝居
			御靈社内の芝居
			十月 「日蓮記」
			文樂の芝居
			十一月二日 「箱根靈驗記覺仇 討」 切「小野道風青柳 硯」 十一月二十七日 前「白石噺」 切「累物語」 「白石」吉原高麗太夫
			正月二日 前「伊賀越」 切「姫山姥」 岡崎巴太夫 沼津高麗太夫 此の興行より檜下巴 太夫、春太夫兩人也。 二月二十四日 前「新薄雪物語」 切「桂川」 帶屋高麗太夫
			閏三月十八日 「嬢景清八島日記」 切「合邦辻」 日向島高麗太夫
			二月朔日 前「菅原傳授」 中「岸姫松」 切「妹背門松」 道明寺の切政太夫、 質店紐太夫也。 三月三日 前「鎌倉三代記」 切「男作五雁金」
			其他の各座

年

四月八日

前「本朝廿四孝」

切「阿波鳴戸」

此の時政太夫は櫓下

ばかりにて出勤せず、

歸來引退、
三段目の切組太夫。

八月十日

三代目湊太夫二代目麓太夫

と成る。

九月二十日

八十太夫の春太夫歿。

八月十日

前「繪合太功記」

切「千本櫻」

「太功記」七ツ目巴太

夫、十冊目重太夫、

「千本の三」麓太夫、

(湊太夫改名)(巴太

夫文樂との掛持ち

也)

五月二十日

「雙蝶々曲輪日記」

中「腰越狀」

切「反魂香」

巴太夫退座。

八月八日

前「忠臣藏」

切「迎駕籠」

忠九の切むら太夫、

むら太夫江戸より歸

り出座。

九月十五日

前「狭間合戦」

切「花上野志渡寺」

壬生村高麗太夫、

志渡寺むら太夫。

十月二日

前「布引瀧」

中「千兩幟」

切「蘆屋道滿」

十一月十三日

前「本朝廿四孝」

切「阿波鳴戸」

次 年	重 要 事 項	各 座	興 行	文 樂 の 芝 居	其 他 の 各 座	
<p style="text-align: center;">二</p>	<p>正月二日 高麗太夫三代目住太夫と成る。 竹本磯太夫三代目彌太夫と成る。</p>	<p>市の側の芝居</p>	<p>座摩社内の芝居</p>	<p>御靈社内の芝居</p> <p>三月三日 二世紫吾妻内裡 竹本磯太夫出座。此の興行後三代目彌太夫と成る。</p>	<p>正月二日 前「鎌倉三代記」 次「國性爺」 切「大經師」 住太夫三段目の切を語る。 三月朔日 「四天王寺伽藍鑑」 切「妹背の門松」 質屋住太夫。</p> <p>四月十五日 前「忠臣講釋」 切「一の谷三段目」 切「五ッ雁金」 榎下重太夫。</p> <p>五月十三日 前「忠臣講釋」 後「みどり淨瑠璃」</p>	<p>五月五日 道頓堀角の芝居、操り歌舞伎打まじ興行。 座元吉田新十郎太夫豊竹此太夫 前「千本櫻」 切「日向島」 主なる役割 「千本櫻」三の切前此太夫、奥時太夫。 「日向島」組太夫。 人形在立、中村歌右衛門。出遣、吉田千曲。</p>
<p>天保</p>	<p>七月二十五日 「信州川中島」</p>	<p>七月二十九日 「平假名盛衰記」</p>	<p>七月二十九日 「平假名盛衰記」</p>	<p>七月二十九日 「平假名盛衰記」</p>	<p>七月二十九日 「平假名盛衰記」</p>	

三 年	年
<p>正月 竹本住太夫、五代目内匠太夫と成る。竹本佐賀太夫四代目中太夫と成る。 此の年竹本錦太夫江戸に下る。</p>	
<p>正月十一日 前「新薄雪物語」 切「蘆屋道満」 狐別れ住太夫。</p>	
	<p>切「四谷怪談」</p>
<p>正月二日 「生寫朝顔話」 (新作) 竹本内匠太夫初め和太夫文政の初め江戸に下り江戸にて住太夫と改名、久々にて歸阪、内匠太夫と改名出勤。 榎下重太夫。</p>	<p>九月二十九日 前「義經千本櫻」 切「阿漕」</p>
<p>十月八日 道頓堀若太夫芝居 「假名手本忠臣藏」 掛合の平右衛門、九段目は組太夫也。 三代目綱太夫大阪にての最後の舞臺也。</p>	<p>八月朔日 若太夫芝居 前「國性爺」 切「萬戸將軍」 三の切組太夫。 秋津島内綱太夫。 八月十五日 北新地芝居 前「新薄雪物語」 次「伊勢物語」 筆太夫出座。 實太夫出座。</p>

天保		三	年	次	年
重要事項					
				各	市の側の芝居
				座	座摩社内の芝居
				興	御靈社内の芝居
				行	文樂の芝居
				專	三月朔日 「酒吞童子話」 此の興行限り内匠太夫引退
				專	四月十四日 前「彦山權現」 切「雙蝶々」 橋本住太夫 彦九重太夫
				專	五月十九日 前「日吉丸稚櫻」 切「知死期茜染」 聚楽町住太夫
				專	八月六日 前「本町糸屋娘」 切「先代萩」
				專	九月十七日 前「太功記」 切「昔八丈」 白木屋 十冊目の切重太夫
				專	十月二十六日 「鬼一法眼三略卷」 切「新版歌祭文」
				專	十一月二十五日 前「伊賀越」 切「伊賀越」 前「伊賀越」 沼津住太夫 岡崎むら太夫 「出陣御殿」 山重太夫
				專	八月 道頓堀竹匠芝居 「日本歌竹取物語」 切「今安積沼」 筆太夫出座

七月二十四日
四代目政太夫歿（行年八十
四）

正月二日
「金門五三桐」

二月十日
前「一の谷嫩軍記」
切「比翼塚」
（禮下なし）

三月十七日
前「近江源氏」
中「白石噺」
切「楠昔噺」

四月二十三日
前「安達原」
切「天の網島」

四月十六日
前「源平布引瀧」
次「伊勢物語」
切「女舞劍噺葉」
「伊勢物語三の切組
太夫。」
巴太夫死歿。
「布引三の切若太夫」

五月二十三日
前「廿四孝」
切「新版歌祭文」
野崎村組太夫。

五月十九日
「菅原傳授」

袂折鑑と寺子屋の切
佳太夫。

七月二十九日
「忠臣藏」

由良之助と九ツ目住
太夫、勘平切腹むら
太夫。

九月十七日
前「璧仇討」
次「八島日記」
切「桂川」

十月十四日
三「國無雙奴請狀」
切「名筆傾城鑑」

天保		次 年
五		重 要 事 項
四		市 側 の 芝 居
年		座 摩 社 内 の 芝 居
五		興 行
五		文 楽 の 芝 居
五		其 他 の 各 座
<p>正月十一日 前「千本櫻」 切「妹背の門松」 此れ巴太夫大阪にて の最終の舞臺也。</p> <p>三月十五日 前「二代記」 次「反魂香」 切「景事、化粧の 姿見」</p> <p>三月十一日 前「東鑑御狩卷」 中「合邦」 切「伊勢物語」</p> <p>四月八日 前「彦山權現」 切「義經腰越狀」 此の興行の時竹本勢 見太夫初めて出勤。</p> <p>五月十七日 「矢口渡」</p> <p>七月十五日 「廿四孝」</p> <p>八月二十八日 「假名手本忠臣藏」 九ツ目むら太夫</p> <p>九月二十七日 前「和田合戦」</p>		<p>十二月四日 前「大友真鳥」 切「兜軍記」 十二月二十二日 「みどり淨瑠璃」</p>

年	六	年
<p>四月二十四日 豊竹巴太夫歿。</p>	<p>二月 竹本むら太夫四代目綱太夫 と成る。淀太夫むら太夫と 成る。</p>	<p>竹本氏太夫江戸に下る。</p>
	<p>三月三日 前「御所櫻」 次「先代萩」 切「伊勢物語」 「先代萩御殿」組太 夫</p>	<p>正月十一日 前「繪本太功記」 次「紙子仕立」 切「橋辨慶」 「尼ヶ崎」も「橋辨慶」 のシテは組太夫。</p>
<p>五月三日切 前「日吉丸」 切「妹背の門松」 「日吉」三の切重太 夫</p>	<p>二月二十三日 前「新薄雪物語」 切「博多織」 三月十八日 前「千本櫻」 次「勳功記」 切「阿漕」 三の切住太夫。 平治住家綱太夫。 「勳功記」三の切重太 夫</p>	<p>中「岸姫松」 切「女舞衣」 十月二十二日 前「日蓮記」 切「國性爺」 十二月二十六日 「祇園祭禮信仰記」 爪先鼠重太夫。</p>

七		六		年		次	年
							重 要 事 項
三代目内匠太夫歿。							市の側の芝居 座 興 行 事 歴
正月十一日 「蘆屋道満大内鑑」 次「糸の仙人掛合」 切「妹背の門松」 狐別れさ賀見世組太夫。							
閏七月十九日 前「忠臣藏」 切「八陣」 九月十二日 前「妹背山」 切「大友真鳥」							
二月四日 「大江山」							
三月三日 前「國性爺」							
九月十五日 前「小野道風」 次「楠昔噺」 切「大經師」 「楠」三の切住太夫。 十月二日 「伊賀越」 沼津綱太夫。 十一月十三日 「姫小松」 十二月二十四日 「日本賢女鑑」							
二月六日 「菅原傳授」 四段目の切長門太夫 三月二十七日 前「近江源氏」							
							其他の各座

年

七月二十三日
四代目竹本政太夫歿（行年八十四）

中「三代記」
切「天の網島」
「三代記」ハツ目の切組太夫。
「樓門」ハ「網島」の茶屋重太夫。

八月十六日
「玉藻前」
切「大塔宮」
身替音頭組太夫。

五月十日
「平假名盛衰記」
組太夫出座

切「戀飛脚」
新口村勢見太夫
近八住太夫。
近九綱太夫。

五月三日
前「夏祭」
切「先代萩」
七月二十五日
「梅魁茗入總」

九月九日
前「忠臣講釋」
切「盛衰記」
逆櫓綱太夫。
十月五日
前「頼政鶴物語」
切「加賀見山」

四月十一日
道頓堀竹田芝居
「妹背山婦女庭訓」
次「知死期茜染」
切「重井筒」
「妹背山」三の切掛合大判事、由兵衛内、筆太夫、定高と切六軒丁の段組太夫也。
五月
同じ芝居
「盛衰記」

天保

次 年	七 年	八
重 要 事 項		
各 座		二月朔日 「妹背山」 定高に竹雀の段組太夫。 鑓七上使者太夫。
		興 行
事 歴		
		其 他 の 各 座
其 他 の 各 座		

年

此の年稻荷社内(北の芝居)に説教讚語座起り、文樂以外、太夫三絃人形等は讚語座の配屬に甘んじ、文樂芝居の出方人形遣ひ等も讚語座に屬しても營業を續けんと主張するものもありしも、太夫一連は斷じて其の配下に就かずと主張し、爰に斯界のごたくを惹き起すに至りしが、十一月末西奉行所にて裁斷、讚語座の敗となる。

九月五日

前「二代記」

切「桂川連理柵」

三井寺蟬丸宮説教願立ありしも、文樂一座の太夫は其配下に付かず、芝居休みとなる。

十二月二日

前「先代萩」

切「國性爺」

説教讚語座との勝公事祝の興行なり。「國性爺」三の切住太夫、此の興行後引退。

十二月二十七日

前「玉藻前」

切「日高川入相花王」

「入相花王」四の切勢見太夫。

前「薄雪物語」

次「一の谷」

八月六日

道頓堀竹田芝居

前「四谷怪談」

切「昔八丈」

城木屋組太夫也。

同月十二日

稻荷北門芝居

(名代永川宮内)説教讚語座

「苺菅桑門」

三段目の切と高野山組太夫也。

天保

次 年	重 事 事 項	各 座	興 行	文 樂 の 芝 居	其 他 の 各 座
九	<p>豊竹綾太夫六代目竹本咲太夫と成る。 竹本百合太夫大隅太夫と改名(此れ初代大隅也)</p>	<p>正月十七日 「假名手本忠臣藏」 次「太功記」 扇ヶ谷筆太夫 九段目組太夫</p>			<p>二月十六日 前「狭間合戦」 切「伊勢物語」 大隅太夫狭間合戦七ツ目の中十冊目の切を語る 三月二十二日 前「廿四孝」 切「志度寺」 四月二十八日 前「八陣守護城」 切「伊賀越」 小松太夫(四代彌太夫)見習として出座 五月朔日 前「盛衰記」 切「鶴山姫捨松」 七月二十五日 前「一の谷嫩軍記」 切「伊勢音頭」 谷の三切重太夫 油屋大隅太夫 八月二十六日 前「義經千本櫻」 切「妹背門松」</p>

年	十	年	年
			竹本實太夫、梶太夫と成る。
	正月二十九日 「本朝廿四孝」		
	二月七日 前「新薄雪物語」 切「國性爺」		油屋若太夫。 實吉勢見太夫。 此の興行後一座の内 七八(長門)太夫、観太 夫、大馬太夫、栄太 夫、越太夫等八形門 遣、金四、東十郎等 也。三較人形方等退 座して十年正月二日 竹田の芝居にて 別興行を始む。 十二月二十六日 「菅原傳授手習鑑」 三の切若太夫。 四の切勢見太夫。 道明寺の段切重太夫
三月十五日 前「蝶花形」 切「播州皿屋敷」 鐵山屋敷若太夫。	二月五日 同上 前「先代萩」 切「大經師」	正月二日 道頓堀竹田芝居にて 前「妹背山」 切「八島日記」 名代竹本義太夫。 座元花澤芳三郎。 此の興行限り四代目 中太夫引退。道行の 掛合の雛鳥、道行の シテ四段目の切大隅 太夫。日向島の切長門太夫	
同上 前「忠臣藏」 切「融通大念佛」 九ツ目切長門太夫。	三月三日 同上		

年次		十年		年次	
重要事項		各座		興行	
		市の側の芝居		御霊社内の芝居	
		座摩社内の芝居		文樂の芝居	
				其他の各座	
竹本氏太夫江戸より歸る。					
		四月二十八日 前「八陣」 切「伊賀越」 沼津勢見太夫。			
		五月五日 同上 前「太功記」 切「夏祭」 局注進、尼崎の切大隅太夫。 團七内長門太夫。 此れより一座西京に行き興行。長門太夫一行は夫れより名古屋地方興行、翌十一年八月歸阪。			
正月二日 「小倉の色紙」 氏太夫出座。		七月十五日 「浦島太郎倭物語」 九月二十九日 前「廿四孝」 中「阿漕」 切「桂川」 帶屋若太夫。 十一月朔日 前「伊賀越」 切「蘆屋道滿」 沼津重太夫。 狐別れ勢見太夫。			

年	一	十
		<p>二月 三代目竹本重太夫政太夫 (五代目)と成る。</p> <p>六月二十三日 五代目政太夫歿。(行年六十 一)</p>
<p>十月二日 前「太功記」 切「伊賀越」 沼津の段彌太夫也。 杉の森八重太夫。</p>	<p>八月四日 「平假名盛衰記」 中「昔八丈」 切「楠昔噺」 白木屋五代目八重太 夫。</p> <p>九月九日 前「源平布引瀧」 中「關取二代鑑」 切「合邦辻」の下 秋津島内竹本彌太夫 也。</p>	
<p>十月十五日 「日本振袖始」</p>	<p>七月二十五日 「狭間合戦」</p> <p>九月九日 「五天笠」</p>	
<p>十月十四日 「日蓮上人御法海」</p>	<p>八月朔日 前「岸姫松」 切「四ッ谷怪談」</p> <p>九月九日 「三浦大助紅梅鞆 長者」 切「橋辨慶」</p>	<p>二月二十二日 「忠臣藏」 大隅太夫復座出勤。 山科の段政太夫。 此れ政太夫名残りの 舞臺也。</p> <p>四月二十六日 「酒吞童子話」</p>

年次	重要事項	各座	座座	興行	専座	歴
天保 十 二 年		<p>市の側の芝居</p> <p>正月二十九日 前「本朝廿四孝」 中「安達原」 切「千兩幟」</p> <p>四月八日 「播州浦朝霧」</p>	<p>座座社内の芝居</p> <p>正月二日 前「義經千本櫻」 切「八百屋の獻立」 三の切八重太夫 閏正月二十九日 前「姫小松」 中「桂川」 切「矢口渡」</p> <p>四月 前「狹間合戦」 次「五人伐」 五人伐茶屋場若太夫</p>	<p>御靈社内の芝居</p> <p>八月十九日 前「菅原傳授」 中「伊勢物語」 切「先代萩」御殿 春日村の切勢見太夫 菅原四の切若太夫</p> <p>十月四日 「廿四孝」</p>	<p>文樂の芝居</p> <p>正月二日 「信仰記」 瓜先嵐大隅太夫 閏正月十三日 「妹背山」 四段目の切大隅太夫也</p> <p>四月二十日 「玉藻前」</p> <p>七月二十三日 「詠開秋七草」</p> <p>八月十九日 前「太功記」 切「合邦」</p>	<p>其他の各座</p> <p>正月五日 天満天神社内の芝居 前「廿四孝」 切「兜軍記」 四段目の切富太夫</p> <p>九月二十七日 前「菅原傳授」 切「倭莊子」 杖折鑿と寺子屋大隅太夫</p>

年 四 十	年 三 十
<p>五代目染太夫十九年振にて 歸阪。市の側の芝居に出座</p>	<p>此の年五月より社寺境内芝居一切取拂ひと成る。従て大阪芝居は道頓堀に五軒北堀江、市側、曾根崎、此れ北堀江、天満大工町にて櫓八つと定まる。同時に諸藝人淨瑠璃はやし方の類町方にて家持又は田地畑等買候義不相成との布告あり、西奉行阿部遠江守より淨瑠璃語りの義は是迄通家屋敷、田地、畑等買求め候共差構なしとの申渡しを受けたるは此時の事也。</p> <p>秋、竹本筆太夫、近松狂言堂合考「淨瑠璃大系圖」小冊三卷成る。</p> <p>十一月 竹本咲太夫三代目豊竹巴太夫と成る。</p>
	<p>正月二日 「妹背山」</p> <p>二月二十四日 前「八陣」 切「紙子仕立」 大文字屋大隅太夫</p> <p>四月五日 前「出世太平記」 次「合邦」 九ツ目の切大隅太夫</p>
	<p>正月二日 前「義經千本櫻」 切「國性爺合戦」樓門之段 「千本御殿勢見太夫」 樓門長門太夫</p> <p>三月十七日 「木下蔭狭間合戦」 竹中岩長門太夫 壬生村勢見太夫</p> <p>四月二十八日 前「夏祭」 次「志渡寺」</p>
<p>二月二十八日 市の側芝居にて文樂軒主人興行 前「忠臣藏」 切「伊勢物語」 春日村の切勢見太夫 勘平切腹、掛合平右衛門氏太夫 山科の切染太夫</p>	<p>八月十六日 北新地芝居 「みどり操り」</p> <p>九月 同上芝居 「みどり操り」</p>

天保

次 年	十 四 年		
重 要 事 項	<p>八月 竹本小松太夫三代目實太夫 と成る。 八月 竹本壽太夫、津太夫と成る。</p>		
各 座	市の例の芝居	座摩社内の芝居	御靈社内の芝居
事 業	<p>四月二日 (同上文樂軒の興行也) 前「廿四孝」 切「白石噺」 四の切勢見太夫、 三の切染太夫、 新吉原氏太夫。</p>	<p>九月九日 若太夫芝居 前「菅原」 切「志渡寺」 三段目の切巴太夫。 閏九月二十五日 同「芝居」 前「千本櫻」 切「楠昔噺」 次興行 前「加賀見山」 切「三十三間堂」</p>	<p>十月 道頓堀竹田芝居 前「蝶花形」 中「盛衰記」 切「岸姫松」 櫓下若太夫。 十月二十七日 同「芝居」 前「忠臣講釋」 切「教興寺村」 太夫。 「講釋」八ッ目の切巴</p>
歴 史	其 他 の 各 座		

弘化

元 年		二 年	次 年
重 要 事 項			
市 側 の 芝 居			
各 座			
興 行			
事			
歴			
竹 田 の 芝 居			
御 靈 社 内 の 芝 居			
文 樂 の 芝 居			
其 他 の 各 座			
十月十二日 竹田芝居 「妹背山」 「日蓮記」 竹本大隅太夫一座 勘作住家巴太夫。		正月 前「出世太平記」 中「御所櫻」 切「久米仙人」 二月 前「義仲勳功記」 次「阿漕」	
正月二日 道頓堀若太夫芝居にて 文樂軒興行 前「信仰記」 切「國性爺」 爪先鼠勢見太夫 國性爺三の切染太夫。 正月二十九日 同上 前「三代記」 中「阿波の鳴門」 切「京鹿子娘道成寺」 玉造の段勢見太夫。 三月十日 同上 「廿四孝」 三の切巴太夫			

年 五	年 四	年 三	年 二
		竹本梶太夫六代目染太夫と成る。	此の年五代染太夫受領して竹本越前大椽(藤原明郷)と成る。
<p>八月朔日 前「蝶花形」 切「東土産」 「花雲佐倉曙」 三代目長門太夫前年(四年)江戸に下り今年三月歸阪。「佐倉曙」は其の土産淨瑠璃也。古今の大入り。宗五郎住家長門太夫</p>	<p>二月 前「妹背山」 次「薄雪物語」 切「兜軍記」 「薄雪」兵衛屋敷長門太夫也。</p>	<p>九月 前「伊賀越」 次「嬢景清」 切「三十石體始」 染太夫出座。</p> <p>十月 前「忠臣藏」 切「鱧谷」</p>	
	<p>五月五日 若太夫芝居にて 「玉藻前」</p>		

安政		嘉永					
年	元	六	年	五	年	次	年
				重要事項			
				市の側の芝居		各座	
				竹田の芝居		興行	
				御靈社内の芝居		事	
				文樂の芝居		歴	
				十一月朔日 前「一の谷」 次「盛衰記」 切「花旅川竹雀」			
				二月十一日 道頓堀若太夫芝居にて 「朝顔話」 明石船別れ、宿屋段 の切巴太夫。			
				十月 若太夫芝居にて 前「三代記」 次「鬼一法眼」 切「出世太平記」			
				長尾太夫（三味線團 平）初お目見の師匠 長門太夫と連名の招 き看板を出す。 菊畑長門太夫、松下 住家長尾太夫。			
				正月九日 「狭間合戦」 來作住家の切、竹中 砦の切巴太夫。			
				此れより三年八月迄は 西横堀清水町濱にて興 行也。			
				正月 竹本實太夫四代目彌太夫と 成る。			
				三月三日 前「妹背山」 切「合邦」 合那住家長門太夫。			

年	元
<p>六月七日 五代目染太夫歿。(行年六十 七) 七月二十六日 四代目綱太夫江戸に歿。</p>	
	<p>四月 「近江源氏」</p>
<p>五月六日 前「夏祭」 切「兜軍記」</p>	<p>四月 「出世太平記」 閏七月 「假名手本忠臣藏」 山科の段切巴太夫。</p>
<p>七月十六日 前「先代萩」 中「大塔宮」 切「象仙人」掛合 機下長門太夫。 此れ迄機下は巴太夫 也。</p>	
<p>正月二日 天滿天神の芝居 前「國性爺」 切「伊勢物語」 三段目の切長門太夫</p>	<p>八月三日 天滿天神境内の新門北 西角の芝居 「假名手本忠臣藏」 九ツ目長門太夫、扇 ヶ谷八重太夫。 十月十二日 同じ芝居 「日蓮上人御法海」</p>

安政

年 二	三 年	重 要 事 項		各 座		興 行		事 業		其 他 の 各 座 歴	
	<p>文樂座舊稻荷の地所に建築成り御免操座と成る。</p>	市の側の芝居	竹田の芝居	御霊社内の芝居	文樂の芝居	其他の各座					
				<p>九月九日 前「朝顔話」 切「戀飛脚」</p>							
				<p>正月二日 「祇園祭禮信仰記」</p>							
			<p>三月 前「戀女房」 次「一の谷」 熊谷陣屋長門太夫</p>	<p>五月五日 前「安達原」 中「紙子仕立」 切「隅田川庵室」</p>							
			<p>七月二十九日 前「本朝糸屋娘」 次「近江源氏」 切「伊勢音頭」 普請出来、以下稻荷社内新芝居にて興行也。</p>	<p>九月九日 前「鬼一法眼」 切「蘆屋道滿」 狐の別れ五代目春太夫。</p>							
			<p>十月二十五日 前「岸姫松」 次「花上野」</p>								

年 五	年 四
<p>二月 豊竹富太夫六代目若太夫と成る。</p> <p>四月 豊竹八重太夫麓太夫と成る。</p> <p>冬麓太夫歿。(行年六十六)</p>	
	<p>十二月 「假名手本忠臣藏」 切「妹背山」 山科の切巴太夫。</p>
<p>正月 千本櫻齋古中五日芝居類焼。</p> <p>四月 「千本櫻」 (芝居落成)</p>	<p>正月二日 前「新薄雪物語」 切「博多織」</p> <p>二月二十五日 「假名手本忠臣藏」 六段目切染太夫、九 ツ目長門太夫。</p> <p>五月五日 前「太功記」 切「桂川連理柵」 杉の森染太夫、十册 目長門太夫。</p> <p>七月二十九日 前「彦山権現」 次「勳功記」 切「三十石」</p> <p>十一月朔日 前「白石噺」 切「新版歌祭文」 野崎村長門太夫、油 屋染太夫。</p>
<p>二月 西横堀周防町濱芝居 前「蝶花形」 切「佐倉曙」 蝶花形八の切若太夫</p> <p>四月九日 同じ芝居 前「狭間合戦」 次「和田合戦」 此れ八重太夫(此の時麓太夫と改名)名残りの舞臺也。</p>	

安政		次 年	
五 年		重 要 事 項	
六 年		各 座	
		興 行	
		事 歴	
		市の側の芝居	文樂の芝居
		竹田の芝居	其他各座
		御靈社内の芝居	
	七月六日 將軍家定薨。音曲停止五十日間。		七月 「里見八犬傳」 五十日間停止 十月五日 前「源平布引瀧」 切「天の網島」 十一月八日 前「出世太平記」 切「阿漕」
			正月十一日 「妹背山」 鱧七使者長門太夫 三月三日 前「加賀見山」 次「國性爺」 切「隅田川道行」 又助住家染太夫。 四月二十日 前「夏祭」 次「楠昔噺」 切「岸姬松」 楠三の切長門太夫。 五月 前「雙蝶々」 切「盛衰記」 七月二十九日 前「廿四孝」 切「倭草紙」

萬延

年	元	年
	<p>正月 竹本田喜太夫住太夫と成る。</p>	
		<p>三月三日 前「繪本太功記」 次「彦山權現」 切「狭間合戦」 大隅太夫江戸より歸り久々にての出勤也毛谷村の切巴太夫、此れ巴太夫名残りの舞臺也。</p>
<p>九月 「大江山」</p>		
		<p>正月十一日 前「玉藻前」 中「先代萩」 切「大經師」 先代御殿長門太夫、三月三日 「四天王寺伽藍鑑」 切「孃景清」</p>
<p>四月 前「一の谷」 次「二代鑑」 切「大内鑑」 七月二十九日 前「近江源氏」 切「苜萱」 九ツ目切染太夫 九月九日 前「道中龜山嘯」 切「川中島」</p>	<p>九月九日 前「伊賀越」 切「兜軍記」 沼津染太夫、岡崎長門太夫。 十一月 前「頼政鶴物語」 次「妹背門松」 切「女護島」</p>	

竹本村太夫江戸に下る。

正月十一日
「大江山」

三月三日
「假名手本忠臣藏」

五月五日
「太功記」

八月朔日
前「朝顔話」
次「大塔宮」

九月九日
前「小倉の色紙」
次「大友真鳥」

十月二十九日
前「安達原」
切「志渡寺」

八月
竹田の芝居
「八陣守護城」
長尾太夫出座。
八冊目の切若太夫。

正月十一日
「妹背山」

三月三日
「伊賀越」

多満太夫、新關所を
語る。

岡崎長門太夫。

五月五日
前「三十三間堂」
次「阿漕」

切「腰越狀」
腰越狀三の切彌太夫

七月二十九日
前「自來也」
次「岸姫松」

三月
竹田の芝居
前「太功記」
切「橋供養」
局注進と橋供養庵室
長尾太夫。

年

三

年

二

元治		文久	
年	元	年	三
<p>十月十九日 三代目長門太夫歿。(行年六十五)</p> <p>十一月十三日 初代大隅太夫歿。(行年六十八)</p>		<p>八月 二代目越路太夫江戸より歸る。</p>	
		各座	
		市の側の芝居	
		竹田の芝居	
		御靈社内の芝居	
		文樂の芝居	
<p>十月二十八日 前「出世太平記」 切「天の網島」</p>		<p>正月十一日 「信仰記」 四月朔日 「千本櫻」</p> <p>八月二十八日 前「白石嘶」 中「極彩色」 切「皿屋敷」</p> <p>鐵山館染太夫、天王寺村長門太夫、此れ長門太夫名残り此の舞臺也。九月九日より引籠もる。</p>	
<p>十月 北の newly 芝居 「妹背山」 竹本山城椽出座。</p>		<p>九月九日 前「加賀見山」 切「關取二代鑑」</p> <p>十一月朔日 前「小野道風」 次「一の谷」 切「合邦」</p> <p>八月 天満天神我門の芝居 前「蝶花形」 切「伊勢物語」 春日村切長尾太夫。</p>	
		其他の各座	

年 二	年 元
<p>正月十一日 「妹背山」 三月三日 前「廿四孝」 切「伊勢物語」 三段目の切染太夫。 四段目の切春太夫。 「伊勢物語」春日村彌太夫。 五月十七日 前「源平布引瀧」 切「戀飛脚」</p>	<p>正月十一日 前「新薄雪物語」 切「先代萩」 御殿春太夫。 染太夫槽下さ成る。 三月三日 「假名手本忠臣藏」 切「新版歌祭文」 二代目越路太夫初めて文樂座出勤。 九ツ目切染太夫、野崎村春太夫。 五月五日 「彦山権現」 九月一日 「菅原傳授」 四段目の切春太夫。 十一月十三日 前「忠臣講釋」 中「三代記」 切「嬢景清」</p>

慶應		次 年		
年	三	年	二	重 要 事 項
				八月十六日 竹本多満太夫歿。
				市の側の芝居
				竹田の芝居
				御靈社内の芝居
				文樂の芝居
				七月二十五日 前「近江源氏」 切「桂川」 帶屋春太夫、近八の 切染太夫。
				九月 「三代記」 十月朔日 前「鬼一法眼」 切「加賀見山」
				正月 天満天神芝居 前「妹背山」 切「大津晝景事」 樽下若太夫、 杉酒屋若太夫。
				二月二十二日 「狭間合戦」 四月八日 「伊賀越」 沼津春太夫、岡崎染 太夫。 八月朔日 「大江山」 九月二十七日 「盛衰記」 十一月十三日 「蹙仇討」

年 二	年 元
	<p>三月十九日 四代目彌太夫歿（行年五十 五）。竹本長子太夫五代目彌 太夫と成る。</p> <p>七月 豊竹若太夫四代目巴太夫と 成る。</p>
<p>正月 裏門の芝居 「妹背山」</p>	
<p>正月十八日 「妹背山」 四段目の切春太夫。 此れ染太夫名残りの 舞臺。</p>	<p>二月十二日 「金門五三桐」 此の村屋敷彌太夫、 此れ彌太夫名残りの 舞臺也。</p> <p>三月晦日 「一の谷嫩軍記」 切「四谷怪談」 閏四月二十六日 前「賢女鑑」 次「阿漕」 切「兜軍記」 掛合 重忠若太夫。 岩永咲太夫。 あこや越路太夫。</p> <p>七月二十九日 前「太功記」 切「染分手綱」 染太夫退座、榎下湊 太夫と成る。 尼ヶ崎春太夫。</p> <p>九月二十七日 前「白石噺」 次「國性爺」 切「阿波鳴戸」 玉造の切春太夫。</p> <p>十一月 前「雙蝶々」 切「安達原」</p>
<p>正月 座摩社内の芝居 「妹背山」 杉酒屋住太夫。</p>	

明治		次 年	
三	年	二	重 要 事 項
		五月一日 六代目染太夫歿。(行年七十 三)	七月 四代目豊竹巴太夫歿。
		三月 裏門の芝居 「忠臣藏」	八月 裏門の芝居 「狭間合戦」
		三月 前「八陣」 切「蘆屋道満」 五月五日 前「加賀見山」 切「朝顔話」 花若切腹の段巴太夫。 此れ若太夫名残りの 舞臺也。	八月朔日 「先代萩」 御殿の切春太夫。 九月一日 前「三代記」 切「天の網島」 十一月十三日 前「出世太平記」 切「苅萱」
		文樂の芝居	正月十一日 「菅原傳授」 此の時筑紫配處の段 新作、二代越路太夫 勤む。 三月五日 「千本櫻」 五月十日 前「夏祭」 次「蝶花形」
		其他の各座	

年	年
	<p>八月一日 竹本咲太夫歿。(行年六十二)</p> <p>九月 竹本梶太夫七代目染太夫と成る。</p>
<p>七月二十五日 〔假名手本忠臣藏〕 切「伊勢音頭」 九ツ目切春太夫、油屋の段住太夫。</p> <p>九月九日 〔狭間合戦〕 來作住家の切染太夫</p> <p>十一月一日 前「布引瀧」 切「加賀見山」</p> <p>正月十八日 〔信仰記〕</p> <p>三月五日 前「玉藻前」 切「桂川」</p> <p>八月一日 前「伊賀越」 切「兜軍記」 岡崎の切春太夫</p> <p>九月十五日 前「鬼一法眼」 切「女舞衣」</p> <p>十一月十日 前「彦山權現」 次「合邦」 切「姫山姥」</p>	<p>正月 座敷社内の芝居 〔妹背山〕</p>

明治

次 年	五 年		六
重 要 事 項			
各 座	市の側の芝居	竹田の芝居	興 行
事	文 楽 の 芝 居	御 黨 社 内 の 芝 居	其 他 の 各 座
歴			
			<p>正月十八日 (新芝居) 「太功記」 御祝儀 「壽千代の春」 榎下太夫竹本春太夫 八形吉田玉造</p>
		<p>三月十五日 前「大江山」 切「廿四孝」 五月二十一日 前「白石噺」 中「覺仇討」 切「兜軍記」掛合</p>	<p>七月 「八犬傳」 九月二十七日 前「朝顔話」 切「天の網島」 十一月十五日 前「出世太平記」 中「伊勢物語」 切「冥途飛脚」</p>
	<p>九月 前「忠臣藏」 切「河原の達引」</p>	<p>九月 (中村久太郎座) 前「太功旭花山」 切「歌祭文」</p>	<p>二月十三日 「千本櫻」 渡海屋の切染太夫 四月十六日 前「先代萩」</p>

年	七	年	年
	<p>二月 竹本むら太夫重太夫と成る。</p>		<p>九月 前「盛衰記」 切「佐倉曙」 「盛衰記」三の切長尾太夫。</p>
	<p>三月 「狭間合戦」 竹本山四郎、竹本津太夫、長尾太夫等の一座。</p>	<p>四月七日 前「入陣」 中「加賀見山」 切「大内鑑」 六月一日 「平假名盛衰記」 切「歌祭文」 野崎村春太夫。 此れ春太夫大阪に於ける最終の舞臺也。</p>	<p>九月十四日 「假名手本忠臣藏」 平右衛門染太夫、おかるむら太夫。 掛合由良之助と九ツ目の切春太夫、勘平切腹越路太夫。 十一月十五日 前「安達原」 切「日蓮記」</p>
	<p>次「妹背門松」 切「染分手綱」 質店春太夫、古靴太夫退座。 六月十二日 前「三代記」 切「八重霞」</p>		

明治		年	七	八	
重要事項					
各座					
興行					
事					
歴					
市の側の芝居	竹田の芝居	御霊社内の芝居	文楽の芝居	其他の各座	
	二月 前「廿四孝」 切「桂川」 「桂川」帯屋津太夫也。		九月 前「玉藻前」 切「朝顔話」 朝顔宿屋住太夫 十一月 前「彦山権現」 切「四谷怪談」 此の興行限り七代目 染太夫引退。	三月十七日 前「太功記」 次「先代萩」 切「娘道成寺」 杉の森住太夫、十段 目の切重太夫。 五月十五日 「廿四孝」 六月二十四日 前「布引瀧」 次「河原の達引」 切「千兩職」 堀川猿廻し重太夫。	二月 道頓堀角の芝居 「大和錦朝日旗揚」

年	九	年
		<p>九月九日 前「八大傳」 次「合邦」 合邦住家越路太夫。 十一月一日 「伊賀越」 圓覺寺彌太夫、沼津 住太夫、阿崎越路太 夫。</p>
<p>正月十七日 「信長記」 爪先鼠重太夫。 竹本津太夫入座、花 子の段、薫田の段を 語る。 三月九日 前「妹背山」 切「歌祭文」 萬才の段、竹に雀の 段住太夫。 四月二十六日 前「大江山」 中「一の谷」 切「桂川」 松太夫家重太夫、谷 三の切越路太夫、帶 屋住太夫。 六月八日 「蝶花形」 七月十四日 前「豊臣太平記」 次「覺仇討」 切「荊萱」</p>		

明治		年	次
十		九	年
<p>七月二十五日 五代目竹本春太夫歿。</p>			重 要 事 項
			各 座
			興 行
			事
			歴
			市 の 側 の 芝 居
			竹 田 の 芝 居
			御 靈 社 内 の 芝 居
			文 樂 の 芝 居
			其 他 の 各 座
			前「九月二十九日 三代記」 切「萬戸將軍」 十一月十三日 前「朝顔話」 切「御所櫻」
			正月十七日 前「金門五三桐」 切「蘆屋道滿」
			三月十七日 前「八陣」 中「阿波鳴戸」 切「加賀見山」 「阿波鳴戸」八染太夫 此れ染太夫名残りの 舞臺也。
			五月一日 「假名手本忠臣藏」 六段目住太夫、九ッ 目越路太夫。
			六月十八日 「平假名盛衰記」 次「三十三間堂」 切「女鉢の木」
			二月 「信仰記」

年 一 十	年
<p>一月一日 「千本櫻」 實大夫權下と成る。</p> <p>三月十五日 前「先代萩」 次「國性爺」 切「比翼塚」</p> <p>五月一日 前「彦山權現」 次「岸姫松」 切「桂川」 帶屋の段彌大夫。</p> <p>六月十七日 「安達原」</p> <p>九月六日 「太功記」 杉の森住大夫、局注 進津大夫。</p> <p>十月十六日 「伊賀越」</p>	<p>九月二十四日 前「染分手綱」 切「伊勢物語」 坂の下と子別れ住太 夫。</p> <p>十一月二十四日 前「鬼一法眼」 切「昔八丈」 城木屋彌大夫。</p> <p>「伊勢物語」春日村越 路大夫。</p>

明治

年 二 十	年 一 十	次 年
<p>三月 竹本梶木夫八代目染太夫と成る。</p>		<p>重 要 事 項</p>
		<p>各 座</p> <p>市の側の芝居</p>
		<p>竹田の芝居</p>
		<p>興 行</p> <p>御霊社内の芝居</p>
<p>三月五日 前「廿四孝」 切「楠昔噺」 「二十四孝」三の切染太夫、井子彌太夫。</p> <p>五月 「五天笠」 此の興行中コレラ病流行芝居暫く差止めらる。</p> <p>九月同じ 「五天笠」にて續き興行。</p> <p>十一月 「日蓮記」</p>	<p>一月十六日 前「加賀見山」 次「河原達引」 切「腰越狀」 堀川越路太夫、長局住太夫、腰越狀三の切彌太夫。</p> <p>十二月三日 前「姫小松」 次「花上野志渡寺」 切「歌祭文」 志渡寺越路太夫、油屋津太夫。</p>	<p>事 業</p> <p>文 樂 の 芝 居</p>
		<p>歴 史</p> <p>其 他 の 各 座</p>

年 四 十	年 三 十
<p>一月十九日 前「大江山」 切「鷗山古跡松」</p> <p>三月二十九日 前「妹背山」 切「先代萩」 狐別れ重太夫、杉酒 屋津太夫。</p> <p>六月十一日 前「嬢景清」 次「合那」 切「蘆屋道滿」</p> <p>九月二十三日 「大内裏相馬錦繪」</p>	<p>一月 「狭間合戦」 壬生村住太夫、駒木 山城中の切彌太夫。</p> <p>三月 「玉藻前」</p> <p>五月 「菅原傳授」 道明寺の切染太夫。 四段目の切住太夫。</p> <p>九月 「詠開秋七草」</p> <p>十一月 前「小倉色紙」 次「三代記」 切「天の網島」</p>

明治		年 十 四		次 年					
十		年 五 十		重 要 事 項					
<p>一月 竹本實太夫四代目長門太夫 と成る。</p>		<p>竹本津太夫江戸に下る。</p>		<p>市 の 側 の 芝 居</p>	<p>各 座</p>	<p>興 行</p>	<p>事</p>	<p>歴</p>	
									<p>竹田の芝居</p>
									<p>御靈社内の芝居</p>
									<p>文樂の芝居</p>
<p>一月二十六日 前「信長記」 切「加賀見山」 爪先鼠住太夫。</p>		<p>一月二十一日 前「八犬傳」 切「白石噺」 三月二十四日 「千本櫻」 渡海屋の切重太夫。 六月五日 前「大友真鳥」 次「一の谷」 九月二十七日 前「太功記」 次「朝顔話」 杉の森住太夫、太功 記十冊目切重太夫。 十一月二十三日 前「伊賀越」 切「天の網島」 「伊賀越」岡崎切重太 夫、沼津住太夫。</p>		<p>十二月十八日 前「八陣」 切「苜萱」 森屋鋪の切彌太夫。 「八陣」八ッ目重太夫</p>	<p>其他の各座</p>				

年	七	十	次 年	
	<p>九月 津太夫江戸より歸る。彦六座に入る。</p>	<p>六月十八日 八代目染太夫歿。(行年四十一)</p>	<p>四月三日 竹本長尾太夫歿。(行年七十五)</p>	
	<p>九月十二日 (新築芝居) 「四天王子伽藍鑑」 切「三十三間堂」</p>	<p>六月一日 前「朝顔話」 切「河原達引」 朝顔宿屋の切重太夫</p>	<p>博勞町彦六座 稻荷北門</p>	
			各 座	
			竹田の芝居	
	<p>九月 平野町御靈社内に文樂座新築落成之に移る。 九月二十四日 「菅原傳授」 寺子屋越路太夫。 十一月十七日 「假名手本忠臣藏」 勘平切腹彌太夫。 九ツ日越路太夫。</p>	<p>七月五日 前「八犬傳」 切「桂川」 帶屋の段越路太夫。</p>	<p>五月一日 前「竹取物語」 切「安達原」 六月三日 前「賢女鑑」 次「廿四孝」</p>	文樂の芝居
			行 事	
			其他の各座	
			歴	

主もなる太夫の略歴
豊竹麓太夫

豊竹麓太夫

駒太夫門弟、通稱鍋屋宗左衛門、生れ付ての美聲にしてなべ屋ノとて評判せらる。寶曆七年十二月五月初日の「祇園祭禮信長記」の時初めて豊竹座に出座し、五段目信貴城の段を語る。此の淨瑠璃古今の大當りにして、同九年二月迄三年越に打ち續け、三月三日より「芽源氏鶯塚」同十年三月十一日より「櫻姫殿姫櫻」十一年二月十四日芝居類焼、普請中曾根崎新地へ引越興行。九月普請出來、新芝居にて「人丸萬歳臺」此の時初段の中三段目の切の口、大切出語りの「キ」を勤め、十二年四月十八日より「岸姫松響鑑」此の時始めて序切の大役を勤む。十四年改元明和元年と成る。九月十三日越前少椽受。十月二十一日より追善興行。前「嬢景清八島日記」切「追善記念銜」同二年三月十六日より「敷島操軍記」此の時二段目の切を語る。此の興行限り豊竹座中絶。一座北堀江市之側芝居へ移る。四年正月より道頓堀豊竹座再興。三月初日にて「星兜弓勢鑑」太夫は麓太夫、十七太夫、恒太夫、組太夫、錦太夫等にて、木札十文づくにて一切り追出しの興行也。六年八月竹豊兩座打込にて朔日より「殿造千丈嶽」此の時二の切、四の切を勤む。九年改元有て安永元年と成る。八月十九日より「堀江市之側にて」千種結舊繪草紙「二年四月六日より「伊達嬢戀緋鹿子」を勤めて一旦退座。十二月二十三日「けいせい戀飛脚」の時再び出座、此より一時曾根崎新地へ引越興行。三年市の側へ戻り、八月十三日より「花纏會稽褐布染」四年正月二十九日より「軍術出口柳」五年正月二十二日より作者近松半二も此座に入り、「鯛屋貞柳歳且關引續き六、七、八年と勤め、十年改元有て天明元年と成る。退座。他所へ行。六年六月五日より道頓堀西の芝居にて「比良嶽雪見陣立」十月十八日、「彦山權現誓助劔」此の時一座の太夫は、序切咲太夫、五ツ目麓太夫、七ツ目政太夫、九ツ目内匠太夫、角力場中太夫氏太夫也。七年五月朔日より「安徳天皇兵器貢」。八月九日より「鬼一法眼三略卷」。是を勤めて退座。暫らく休養。九年改元、寛政元年と成る。市の側へ再勤。二月二十一日より「木下蔭狭間合戦」七ツ目を語る。九ツ

豊竹座再興、木札十文の一切り追出しの興行

竹豊兩座の打込興行

安永

天明

新作「彦山權現誓劔」の顔振

寛政

いづれ仲枝



大舞

舞

舞

舞

高師は... (Vertical text describing the dance style or performance details)

假名乗出屋敷 (Large stylized title characters)

大序より大切までゆく (Vertical text describing the sequence of the performance)

第一

竹中辰光

義平公方おまの

竹中

十席

第二

竹中義隆

おの井公方おまの

竹中

十席

第三

竹中義隆

あまの井公方おまの

竹中

十席

第四

竹中義隆

あまの井公方おまの

竹中

十席

第五

竹中義隆

あまの井公方おまの

竹中

十席

第六

竹中義隆

あまの井公方おまの

竹中

十席

竹中辰光

あまの井公方おまの

竹中

十席

享和

文化

文政

二代目

豊竹此太夫

幼名豊竹八重太夫

寶曆 時太夫と改名

此太夫となる

明和

江戸に下る

留守中豊竹座退轉

歸坂

市の側の芝居新築

初開場的一座の顔振

目には此太夫、十冊目は二代目駒太夫也。夫より暫らく勤めて又々退座。道頓堀東西の芝居、曾根崎新地の芝居、西京南都堺等諸所へ出勤。十三年改元、享和となり、同四年改元、文化となる。文化三年十月五日より道頓堀大西芝居に出勤。座元、吉田芳松、榎下、「假名手本忠臣藏」七ツ目おかる道行と十冊目を語り、夫より續て出勤。五年正月十日より祇園祭禮信長記「花子の段、四段目爪先き鼠の段」を語る。六年八月二十二日より角の芝居にて「自來也物語」、此の時七十九歳の高齡也。十三年十月二十六日、博勞町稻荷社内文樂芝居にて「蝶花形名歌島臺」八冊目を勤む。此の時八十七歳也。翌十四年八十八歳の賀を祝ひ、文政五年五月六日享年九十三歳にして歿。覺種院從縁日起信士は彼の法號である。

二代目 豊竹此太夫

筑前少椽門弟。通稱は錢屋佐吉。初め豊竹八重太夫。寛延二年三月興行の時より見習として豊竹座へ出勤。寶曆元年十二月、「一谷嫩軍記」の時に豊竹時太夫と改名、序中、二段目の中、道行ツレを語る。同七年八月、清和源氏十五段目^{三度}の時、師名を譲られて此太夫となる。此の時序の切は山伏攝待のツレを勤む。明和元年九月十三日、越前少椽死去、追善として十月二十一日初日にて「燿景清八島日記」に花菱屋の段、四段目の切を勤め、切記念符掛合。閏十二月十七日より「伊呂波哥義臣兜」。二冊目の奥と七冊目の口を勤めて若竹藤九郎同道にて江戸に下る。留守中豊竹座退轉。三年秋歸阪。北堀江市の側西側に芝居を建築し、四年十二月初日、座元豊竹此吉、榎下太夫に駒太夫、此太夫の兩名にて、前、みどり淨瑠璃、河内通^三の切、三の切、「大塔宮」^三信長記、浮世風呂の口。氏太夫、奥此太夫、碁立。入太夫、爪先鼠。駒太夫、切。「染模様妹脊門松」油屋の段。時太夫、質店の段。此太夫此の興行大當り也。五年七月十五日より「潤色江戸紫」吉祥院の段、評義の段を勤む。九月二十二日より「忠孝大磯通庵室の段、大磯の段。十一月二十一日より「紙子仕立兩面鑑」大文字屋の段持役也。

六年二月二十二日より「四天王寺伶人櫻」七月二十八日より「前黒舟嘶」切「雙紋笹葉籠」七年正月十五日より道頓堀東の芝居再興。島太夫座頭にて「源平鶴鳥越」序切の中と二段目の切を勤め、八年八月市の側に歸る。十日より「浮標浪花筏」十二月二十五日より「本卦復昔曆」此の時より鐘太夫助に入る。九年四月七日より「忠臣後日嘶」改元安永となる。八月十九日より「千種結舊繪草紙」此の時より鐘太夫助に入る。十二月二十四日より「後太平記瓢箪録」二年二月五日より「攝州合邦辻」此の時より綱太夫新地へ引越。八月十三日堀江へ戻り「花津會稽襦布染」興行。四年正月二十九日より「軍術出口柳」九月八日より「倭歌月見松」五年正月二十二日より「鯛屋貞柳歳且闌」四月三日より「三國無雙奴請狀」九月八日より「蓋壽永軍記」十月十五日より「桂川連理櫓」六年正月二十五日より「端午姿鎌食文談」三月二十六日より「伊賀越乘掛合羽」五月十九日より「置土産今織上布」八月十五日より「融大臣鹽竈花」十月二十六日より「女小學平治見臺」七年正月二十六日より「御堂前菖蒲帷子」八月十六日より「讃州屏風浦」十一月十日より「妹背結町家仙人」十二月二十一日より「田村丸鈴鹿合戦」切に「今様亂拍子」出がたり出づかい也。八年三月より一座伊勢へ出興行、八月歸阪。十三日より「近江國源五郎鮪」十月十九日より「今盛戀緋櫻」十二月十九日より「色嘶庚申待」九年二月九日より「米山殿幼稚物語」九月二十三日より「稻荷街道墨染櫻」十一月朔日より「難祭婚禮盃」也。十年改元天明となる。元年二月二十四日より「時代織室町錦繡」五月五日より「物ぐさ太郎」六月南都に出興行。七、八兩月紀州和歌山へ出興行。九月十三日より「合詞四十七文字」十一月晦日より「白石嘶」新吉原の段持役也。大當り。二年二月十五日より「襦布染」五月五日より「なにはの詠」九月二十六日より「吾妻海道茶屋姫」十一月朔日より「麩臺原譽の仇討」切に「花艳都模様」三年正月一座さま社内の芝居へ移る。式三番出語り出づかひ、「墓太平記白石嘶」也。三番叟と新よし原を勤む。三月十五日より「義仲勳功記」此の時泉平八重太夫江戸

又々豊竹座再興

寛政

方御見世びらきの御祝儀に相ならひ初日よりしばらくの間早朝に御出被下候御見物様百人づ
い大切までほうらくにて御覽に入れ候通り切手進上仕候間是れ迄御なじみの者共打寄操芝居
興行の見世びらき御來駕被下候は却て一座の者共へ各様よりほうらくじやさも思召彌々御憐
愍御取立をもつて早朝より御見物に御出被下候は外聞かたゞ難有仕合に可奉存候恐惶謹
言

座元 竹本 此吉

同六年中は續て大西芝居にて興行。七年又々東の芝居再興。座元竹本千太郎豊竹此吉兩名櫓下
太夫は此太夫政太夫の兩名也。九月二十六日より廓景色雪の茶會第九目の切を勤む。十二月
二十三日より韓和聞書帖八年五月十日より初嵐元文嘶九年改元寛政となる。元年二月二十一日
より市の側芝居にて木下隆狭間合戦九ツ目の切持役也。五月九日より東の芝居に戻り博多織戀
鐘七月十九日より兒淵東軍記八月十五日より有職鎌倉山九月十八日より天王山杜鵑合戦也。二
年市の側へ戻り二月十五日より星月夜百人上臈五月二十日より彦山權現誓助劍七月十六日より
近江八景石山遷三年三月四日より彫刻左小刀三冊目六冊目の切を勤む。四月十五日より會稽故
郷錦六月十一日より花楓都模様七月十五日より甲斐信濃世話兩國志十月大火にて芝居類焼。西
京へ出興行。四年普請出來。三月二十六日より濱千鳥大内軍記五月二十二日より浪花堀江藝子
始九月二十八日より攝津國長柄人柱切に義仲勤功記三段目の切を勤む。此の興行此太夫一世一
代三味線鶴澤寛治代也。六年十一月西京蛸薬師芝居にて一世一代前彦山權現切に妹脊門松屋店
の段。時六十九歳也。十月四日歿。

豊竹巴太夫

一世一代

豊竹巴太夫

麓太夫門弟。通稱茶碗屋助三郎。寛政二年二月門に入る。同三年三月初日市之側の芝居に

享和—文化

諸所の宮芝居盛となる

櫓下となる

文政

て『彫刻左小刀』の大序の奥、七冊目の口を語る之れ初役也。樂家中にも恐れる程の聲柄なりしと云はる。四年九月二十八日より此太夫一世一代、前『攝津國長柄人柱』、三段目時太夫、四段目の切は八重太夫にして、大序と袴流しの口巴太夫也。夫より次第に出世し、十一年七月十二日より、道頓堀若太夫の芝居にて、『繪合太功記』新本能寺の段序切、淀堤の段道行シテを勤む。此時七ッ目の切は時太夫、十冊目は薩太夫、十二冊目は内匠太夫也。十二年閏四月六日より、奥洲安達原三段目の切を勤む。十三年改元にて享和。同四年改元文化となる。其の間市の側、大西の芝居等諸所にて勤め、三年五月稻荷文樂芝居にて、櫓下豊竹、前『蘭奢待』切に、『織合團七編』新町の段を勤む。七月、勝鬨孝源氏に長者内の段切、『曾我會稽山』に老女住家の段切を勤む。四年正月七日より、御靈社内芝居にて、『妹春山』春日小松原の段、三段目の切、妹山及四段目の切を勤む。九月九日より、道頓堀大西芝居にて、『八陣守護城』新毒酒より舟の場、七ッ目布さらしの場を勤む。五年三月三日より、『妹春山婦女庭訓』三段目、妹山巴太夫、春山土佐太夫、竹に雀巴太夫也。六年正月十一日より、『廓訛潮來畫草紙』新此の頃より諸所の宮芝居盛んとなる。七月二十一日より平野町御靈社内の芝居、太夫元豊竹にて、『出世握虎雜物語』大序と愛宕山連哥の段。夫より續て興行。八年四月十六日より、『本朝二十四孝』捨子の段と四段目の切を語る。此の時より、櫓下となる。七月二十五日より、前『大塔宮』中勳功記三段目の切を語る。九年博勢町稻荷社内文樂芝居へ出勤。正月二日より、『曾我會稽山』太夫元竹本理太夫也。四月、四天王寺伽藍鑑八月朔日より、『大原問答嫩葉蘊』新文化十一年二月、酒吞童子話。四月十九日より、座摩社内芝居へ出勤。太夫元豊竹綾太夫、太夫薩太夫、巴太夫の兩名、前『義經千本櫻』切に、『兜軍記』掛合、御殿と阿古屋巴太夫也。十五年改元有て文政。櫓下巴太夫にて、御靈社内に常芝居を立つ。江戸より若太夫歸り助に入る。七年九月九日より北の新地芝居にて、『八陣守護城』八冊目の切、切に、『衆仙人吉野櫻』瀧の段掛合衆皇子。十二月二十八日より、御靈社内の芝居にて、『伽羅果物語』豆腐屋の段、御殿の段を勤

播磨大椽と二枚番附

『妹春山』の大入り

竹本越前大椽

む。八年二月八日より『蝶花形』三月十八日より『三代記』五月七日より『白石嘶』逆井村の段、切に『和田合戦』三段目の切。八月前日吉丸次に『三十三間堂』三段目の切。九月五日より『伊賀越前崎』の段切を勤む。十月十七日より『忠臣講釋』七ツ目の切、切に『加賀見山』七ツ目掛合尾上を勤む。十二月採顔見世座附引合、襦布染、出立の段、切に『桑仙人』掛合。九年二月朔日より『忠臣藏』掛合おかる。山科の段切。三月三日より『菅原傳授』序切の中と四段目の切。四月西京四條道場の芝居に出興行。十年正月二日より『妹春山』此の時より播磨大椽出勤。初めて的一座さて、櫓下に付きて色々め合ひ、二枚番附と成る。脊山と杉酒屋は播磨大椽妹山と四段目は巴太夫、二の切と道行シテは筆太夫、萬歳と切の山姥は若太夫也。此の芝居古今の大入にて、表札場の處迄かけ出しをしたるほどなりしと云はる。三の替りより巴太夫は勢州に下り、跡は播磨大椽一人の櫓下にて興行。七月十三日初日にて『近江源氏先陣館』切におさん茂兵衛大經師、此の時大平時太夫此太夫となる。三弦花澤咲治鶴澤市太郎二代と改名。八月二十六日より前白石嘶中、壁仇討切、八百屋お七、九月十八日より元の二人櫓下となり出勤。前安達原三の切巴太夫中、おはつ徳兵衛、教興寺村播磨大椽、切に合那が辻若太夫勤む。此の興行後播磨大椽退座。十一月四日より巴太夫一人櫓下にて『三十三間堂棟由來』十一年正月二日より備後町政太夫出勤。太夫元鶴澤秀治郎、櫓下太夫巴太夫政太夫二人となり、『義經千本櫻』三月三日より『優曇華龜山』四月十六日より『地一法眼』三段目政太夫巴太夫は附物、鳴八を語る。此の興行後政太夫退座。七月十二日より巴太夫一人櫓下にて『彦山權現』八月二十六日より『八陣守護城』十月二十八日より『日蓮聖人御法海』此れを名残りとして中途より病氣にて引籠り、十二月十一日歿。

竹本越前大椽 藤原 五代 染太夫

阿波津田浦の人 通稱熊治郎 文化十年二十三歳の時大阪に出て、染太夫の門に入り、津太夫と

名乗る。文化十一年七月十五日より道頓堀竹田芝居櫓下豊竹にて、『忠臣藏勢揃の段ツレ』を語る。七月二十五日明石屋梶太夫目二代死去により、其の名を譲り受けて梶太夫目三代と改名十二年十月大西芝居にて『日蓮記』に梅ヶ谷の段、石ひきの段を勤む。十三年正月晦日より座摩社内芝居にて『大友眞鳥』姫島の段。十二月二十六日より稻荷社内文樂芝居にて『蝶花形』序中奥、次に『二代鑑』秋津島内の段口を勤む。同年中續て出勤。十五年改元文政となる。元年十月『姫小松』二の口、切に『長柄人柱』袴流しの口。二年二月二十三日より『狭間合戦』序切口、十冊目の口を勤む。十一月十六日より『太功記』瓜獻上の段切に『天網島』浮瀬の段かけ合、紙屋の段口を勤む。三年正月二日より『妹背山』かけ乞の段と花渡しの段。四月八日より『雙蝶々』米屋の段切に『二十四孝』花物屋舖の段、八月朔日より『大塔宮』に序切の大役と、切に『兜軍記』兵たん灸の段を勤む。八月十六日より『比良嶽』序切中、切に『八重葎』、し座敷の段。九月二十一日より『戒堂桑門』二の次高野山の跡。十一月朔日より『行平磯馴松』二の口、切に『母祭文』油屋の段口。十一月二十六日より堺宿院芝居にて『鎮西八郎譽弓勢』七冊目の切、十二冊目掛合。四年五月十三日より稻荷にて『三代記』分散大名の切、切に『襦袢錦』出立の段口。八月四日より『姫小松』二の切、切に『絹川堤』堀生村の口。十月『國性爺』三の切、次に『女護島』赦免狀の段。十一月八日より『安達原』序切、三の中。十二月二十八日より『繪合太功記』本能寺の段切、妙心寺の段。五年二月六日より『大友眞鳥』序切と三段目の中。三月二十七日より『忠臣講釋』序切、宅兵衛使者の段。九月二十一日より『日蓮聖人御法海』三國太夫館の段、清澄寺の段、勤作住家の中。十二月二十八日より『信長記』序切、浮世風呂の段。六年三月より勢州古市の芝居にて『同信長記』二段目の切、浮世風呂の段。五月歸坂。七月二十九日より座摩社内芝居にて『娘景清八島日記』二段目の口、切に『隅田川續佛』法界坊庵室の段。九月二十七日より『千本櫻』三の口、四段目の中。七年三月朔日より『源平布引瀧』二段目の切、三段目の中。八年二月二十八日より稻荷芝居にて『妹背山』序切、三の切掛合久我之助。五月朔日より『ひらか

五代目染太夫と藝名

江戸に下る

十八年振りに歸る

な盛衰記序切、迂法印内の段。九月七日より太功艶書合、此の時師名を襲きて五代目竹本染太夫となる。持役は六ツ目の切關帝堂の段。此の興業を名残として江戸に下る。時歳三十五
天保十三年十八年振りにて西京迄歸る。四月四條南側の芝居にて前に日本賢女鑑、次に關取二代鑑、秋津島内の段を勤め、十四年下阪。二月二十八日より堀江市の側芝居にて假手本忠臣藏、七ツ目掛合由良之助と山科の段を勤む。其の時の口上、

乍憚口上

御町中旦那様方益御機嫌宜敷被遊御座恐悅至極奉存候隨て私義十七年以前江戸表へ罷下り此頃歸著仕候得共御當處の御目見へ不仕候段歎かは敷罷在候處此度當芝居興行に付出勤可致様被仰下候段難有仕合に奉存候然る處忠臣藏にて九段目役場相勤被仰下候得共未熟不調法の私久々の御目見へに大役なれば恐入奉りだんく御断申上候處またく御最負様より事をわけて御進め被下候故餘儀なく押て相勤候得共誠に猿が人まれ御笑ひ草と被思召何卒御ヒイキ御憐愍をたまして首尾克く相勤申候やう初日差出し候はゞ賑々敷御入來の程ひさへに奉希上候
已上

月 日

竹本染太夫

弘化

越前大椽と受領

四月二日より二十四孝、方石之段、三段目の切。十五年改元弘化となる。元年正月二日より若太夫芝居にて前信長記、次に國性爺、三段目の切を勤めて退座。其の後各所の芝居に出勤。嘉永二年受領して越前大椽と成る。三年九月竹田の芝居にて前に伊賀越、次に曠景清、三段目の切を勤め、十月前に忠臣藏、次に櫻鏝恨鯨鞘、體谷の段を勤む。其の後消息不詳。安政二年春頃より病に罹り、六月七日歿。享年六十五歳。

二代目
竹本内匠太夫

二代目
竹本内匠太夫

第九章 義太夫節淨瑠璃の興衰

天明

寛政

江戸に下る

四代目 竹本政太夫

天明

竹本大和様の末弟。通稱戎屋久四郎。寶曆十一年其の門に入る。初め雛太夫。中古の名人と云はれたるほどの語り人にして、遺言に因り、師の歿後二代目内匠太夫を相續。安永の頃には切語りとなる。天明元年二月二十四日より西の芝居にて、櫓下元祖竹本義太時代織室町錦繡八ッ目切を語る。二年六月二十六日より道具屋お龜。其の後暫く退座。諸所に出勤。六年六月より東の芝居にて、比良嶽雪見陣立に二段目の切。十月十八日より同じ芝居櫓下元祖竹本義太座元竹にて、彦山権現警助、序切中ミ毛谷村の段を勤め、又暫く退座。八年十二月二十五日より、最明寺殿由緒礎。九年改元。寛政となる。元年九月二十三日より西の芝居座元竹本。濱真砂千町封疆十月二十八日より曾根崎新地の芝居岡太夫にて、前和田合戦にの切、紙屋治兵衛内の段。二年十一月十五日より西の芝居座元竹本徳松太にて、戀傳授文武陣立此の興行後江戸に下る。江戸にてなごらく出勤。歸坂後諸處の芝居を勤め、度々西京へも上り、寛政六年九月九日より道頓堀大西芝居座元吉田芳松、櫓下竹本にて、義仲勳功記四段目の切を勤む。十一月朔日より、近江源氏花賣の段、切政太夫、豊竹麓太夫兩名にて、義仲勳功記四段目の切を勤む。十一月朔日より、若太夫芝居、櫓下太夫政に、重井筒、紺屋の段。夫より又々諸處の芝居に出勤。十一年四月八日より、若太夫芝居、櫓下太夫政兩名にて、續紺紺屋譜三の切、三の中勤む。七月十二日より、政太夫退座、座元豊竹、諏合太功記、利休住家の段。九月九日より、太平記忠臣講釋八ッ目の切。十二年三月三日より、みどり淨瑠璃、花系圖、舟岡箱の段、切に、兜軍記三の口、重忠、内匠太夫、あこ、麓太夫、岩永、彌太夫、三味線、鶴澤清七、鶴澤三二、小弓、松雨齋也。十三年正月元日より、鴉湖高名硯を勤む。文化の始めには、大番、附、關、脇の地位に据はり、同七年には、大關に進む。厭味の無き藝風にして、中古にての美音の太夫と云はる。

四代目 竹本政太夫

三代目政太夫門弟。初め和太夫。通稱若狭屋藤助。明和四年九月二十五日道頓堀西の芝居に初めて出座。『應神天皇八白幡』五段目を語る。夫れより次第に出世し、天明三年四月二十七日より伊

寛政

享和—文化

江戸に下る

政太夫と改名
江戸に下る

稲荷座摩御靈替りくの出
勤
文政

賀越道中雙六『鶴が岡の段、圓覺寺の口を勤め、其の後諸所の芝居に出勤、八年十二月二十五日より、最明寺殿由緒礎』此の時竹本氏太夫と改名、六冊目と八冊目の奥を語る。初代氏太夫は豊竹なる九年改元寛政となる。元年より八年まで所々の芝居に出勤。九年十月十二日より市の側に『日蓮上人御法海』序切と龍の口の段を勤む。十年三月十日より若太夫芝居にて『太平記忠臣講釋』石切の段、次に『宿無團七時雨傘』並木正三内の段。八月二十日より『三日本平記』桃山の段、本能寺の段。十一年正月十四日市の側芝居にて『近江源氏』坂本の段切と八ッ目の中。四月八日より北の新地の芝居にて『續緞緝屋譜』此の時序切と二段目掛合、四段目の中。五月二十日より前『和田合戦』二の切、次に『天網島』茶屋場口。夫より所々の芝居を勤め、十三年改元。享和より文化となり、文化三年九月九日より大西芝居にて『義仲勤功記』二段目の切と四段目の中、十月五日より『忠臣藏』勤平住家の切と七ッ目平右衛門。十一月朔日より『近江源氏』和田兵衛使者の段を勤む。四年春より江戸に下る。五年九月歸阪。十月十一日より北の新地の芝居にて『鎮西八郎譽弓勢』九冊目の切、十二冊目掛合。六年正月十一日より大西芝居にて『廓訛潮來畫草紙』信田下箱の段切と左門隱家の段掛合。八月二十二日より角の芝居にて『自來也物語』推津箱の段切。此の年冬竹本政太夫と改名。七年五月より師匠同道にて江戸に下り、竹本政太夫にて葺屋町芝居へ出勤。先政太夫は竹本播磨八年七月歸阪。師匠太夫は残りて江戸に在りしが病氣となり終九年正月二日より博勞町稻荷社内文樂軒芝居にて『曾に江戸にて歿』七月十四日、行年八十歳也。我會稽山『鎌倉海邊段、本田箱の段。十年九月二日より座摩社内芝居にて『國性爺合戦』三段目の切。夫より續て十一年まで勤め、其の後他處へも出勤、稻荷座摩御靈と替りくに出勤たり。十五年改元、文政となる。四年早春より又々稻荷へ出勤。八月四日より姫小松子日の遊』三段目の切。此の夫元は竹本季太夫、櫓九月十九日より日高川入相花王』天作住家の段切。十月十七日より『國性爺合下は竹本政太夫也。』戦』三段目の切。十一月八日より前、奥州安達原』天に『往昔曾根崎村噂』教興寺村の段。五年六年と續

て勤め、六年十二月二十八日より、蘭奢待新田系圖三段目の中、切に『伊呂波藏三組孟新兵衛内の段』、七年二月朔日より『新薄雪物語』清水の段中、ミ詮議の段。三月六日より『大内裏大友真鳥三段目の切』、八月八日より堀江荒木芝居にて『加賀見山廓寫本』又助住家の段。夫より又所々へ出勤。文政九年二月朔日より御靈社内の芝居にて『忠臣藏』勤平切腹の段、七ツ目掛合由良之助。三月三日より菅原傳授道明寺の切。四月西京道場宇治嘉太夫座にて『前』蝶花形名歌鳥臺六冊目の切。八月二十三日より高津社内芝居にて『前』白石嘶次に『曾根崎村噺』教興寺の段、切に『兜軍記』掛合重忠。十月十六日より『忠臣藏』四段目と掛合由良之助、九段目の切。夫より又諸所へ出勤。十年七月二十一日より荒木芝居にて『伊賀越』木辻の段、掛合岡崎の段、切。十一年正月二日より御靈社内芝居にて『義經千本櫻』四段目狐の段。四月十六日より『鬼一法眼三略卷』三段目の切。五月二十日より『優曇華龜山』重左衛門屋舖の段。七月二十九日より稻荷社内芝居にて『前』弓勢智勇漢二段目切、切『襪襪錦』太安寺堤の段。八月二十日より『前』蝶花形六冊目の中、切に『いろは縁記』わしの段。十二年正月十六日より市の側芝居にて『前』伊賀越切に『楠昔噺』生駒山井子の段。三月朔日より『前』小野道風切に『いろは縁記』鷺の段。二十九日より『妹春山』芝六住家の切。五月五日より新地芝居にて『前』立春姫小松切に『教興寺村』の段。十三年改元天保となる。元年二月朔日より市の側にて『菅原傳授』道明寺の段、切。閏三月三日より『前』鎌倉三代記次に『男作五雁金』新屋の段。四月十日より『二十四孝』此の時は櫓下計りにて勤めず、夫より引込。十一月難波村土橋西詰泉湯と云料理屋にて一世一代の會を催し、此の時八露拂は『楠辨慶』組太夫、次に『一の谷』ミナクリ迄岡太夫、『忠臣藏』三ツ目久太夫、『三日太平記』九ツ目重太夫、申入後『忠臣藏』松切の段氏太夫、『姫小松』三段目政太夫也。此より文松翁と改名、政太夫名前は重太夫へ譲りて隠居の身となり、天保四年七月二十四日享年八十四歳にて歿。

竹本播磨大椽

天保

一世一代

其の顔振

竹本播磨大椽

三代政太夫門弟。初め竹本加太夫。安永の末師に従ひ江戸に下る。文化四年歸阪。正月九日より道頓堀大西芝居にて『本朝二十四孝』此のまき土佐太夫と名乗り、二段目の切を語り、「附け出し」なれど天晴の出来榮にて町中の評判よく直に立物となる。五年三月三日より『妹脊山』萬歳の段と三段目春山。六年正月十一日より『廓訛潮來畫草紙』信田下館の段中と甚内住家の段切。八月二十二日より角の芝居にて『自來也物語』長兵衛内の段を勤め、七年春より阿洲へ下り冬歸阪。八年十月十二日より市の側芝居にて『日蓮記』切に『白石嶺』新吉原の段。十年四月八日より『花禮會稽襦布染』官次郎切腹の段與五郎住家の段。十一年十月八日より北の新地芝居にて『妹脊山』妹山のかけ合切に『大内鑑』狐別れの段。十二年三月二十日より大西芝居にて『前管原』道明寺の段切に『膏庚申』八百屋の段。九月九日より『一の谷』須磨の浦切に『妹脊門松』質店。十三年三月二十一日より稻荷芝居にて『前伊賀越』切に『桂川』常屋の段。十五年改元文政となる。此の間引續き出勤。三年受領して竹本播磨大帳と成る。芝居櫓下に大額を上る。四年九月九日より道頓堀角丸芝居にて『忠臣藏』四段目と七ツ目掛合由良之助。十月二十日より『管原傳授』三段目の切、四段目の切。五年九月二十一日より稻荷社内芝居にて『日蓮記』勲作住家の段。十二月二十八日より『祇園祭禮信長記』三段目の切。六年三月より一座勢州古市芝居へ出勤。七月二十九日より座摩社内芝居にて『嬢景清』八島日記、日向島の段。七年三月朔日より『前布引瀧』切に『先代萩御殿』の段、『紙子仕立』大文字屋の段を勤む。江戸大薩摩座再建に付き座開き出勤の爲め江戸に下り、八年五月歸阪。同座摩の芝居にて『楠昔嶺』三段目の切、切に『兜軍記』掛合重忠。七月十五日より『木下陰狹間合戦』壬生村の切、十段目嶺の段。八月二十二日より『國性爺合戦』三段目の切。十月二日より『本朝二十四孝』三段目の切。九年正月二日より『日本賢女鑑』木津守館の切。二月十日より『前三代記』切に『阿波の鳴戸』十郎兵衛内の段。三月三日より道頓堀角丸芝居にて『忠臣藏』七ツ目掛合由良之助と山科の段切。七月十四日より稻荷文樂軒芝居にて

『嬬景清』日向島の段。八月二十日より『忠臣講釋』七ツ目の切。十月二十日より『釜淵雙級巴』五右衛門住家の段と七條河原の段。十一月十五日より堺宿院芝居にて『前御所櫻』切に『兩面鑑』大文字屋の段。十年正月二日より御靈社内芝居にて『妹春山』春山杉酒屋の段。夫れより暫らく他所へ行き七月歸阪。十三日より同御靈芝居にて『近江源氏先陣館』盛綱陣家の段切。八月二十六日より『白石嘶』七ツ目の切。九月十八日より『前安達原』切に『往古曾根崎村噂』教興寺村の段。十一月十日より道頓堀中の芝居にて『前國性爺合戦』三段目の切大切『操り顔見世』大金藏入鳩狐福翁の段。十一年三月二十七日より座摩社内芝居にて『鎌倉三代記』三浦別れの段。八月八日より『大塔宮曠鏡』身替音頭の段。十二年正月九日より稻荷文樂軒芝居にて『信仰記』天下茶屋の段切。五月五日より『太平記忠臣講釋』七ツ目の切。其の後病氣にて引籠り、秋の頃より段々重り、十二月二十四日歿。

三代 長門太夫

四代目染太夫の末弟。幼名は傳治郎。淨瑠璃に志し、近々眼の文字太夫に就いて稽古し段々上達。むら太夫後西代目綱太夫の許にも通ひて出精し、果ては家業を捨て、太夫にならん思ひ立ち、彌々文字太夫の門弟となりて、菊太夫と名乗り、文政五年正月早々生玉新太夫の一座に加はり淡路へ下る。最も新太夫は病氣にて代りさして豊竹。橋太夫後八重太夫座頭らにて勤む。正月暮おろしとて各村々にて一日芝居を始め、銘々目見へこして一段ッ、を語る。菊太夫は四枚目にて『薄雪物語』下の巻鍛冶屋の段を語りしが評判よく、夫より紀州へ渡り興行。其の年七月迄勤め橋太夫は歸阪し、残りの一行は熊野路へ入り、菊太夫を座頭として興行し、其の年冬迄勤めて歸阪。文字太夫大悦にて、田舎廻りの修行は一年にて宜し、自己には過ぎたる弟子なりとて、自ら仲人となつて石屋橋染太夫の門下に入れ、此の時竹本實太夫と改名す。翌六年正月二日より稻荷社内東門文樂軒芝居に見習として出勤外、信長記也。興行中序切の役を勤めし、梶太夫不快にて出勤遅くれ、其の儘幕を締る事も出来ず、當惑の末頭取吉田三吾より

話しあり、實太夫代りて之を勤めけるに、三味線才上出来にて諸人の耳を驚かし、其の明る日又々、上かんの持役なる重太夫休座せしより、其の替り役をも勤むることとなり、此れ亦評判能、褒美として改めて錦太夫の持役に直され、初序切中の役は錦太夫の持役なりしも、約束有て丹後座へ出勤したる錢二、文をも貰ひ前代未聞さて人を驚かした。梶太夫の悴鶴澤東市の順會に頼まれ、祝儀に「薄雪」鍛冶屋を語りしが縁となり、東市の幹旋により、初代長門太夫譲りの見臺と名前を貰ひ受け、三の替りの時改名して竹本長門太夫となる。一座は湊太夫を残して伊勢古市へ出興行。七月歸阪、二十九日より座摩社内裏門芝居にて前嬢景清八島日記序中の奥、次に「攝津國長柄人柱」袴流しの段口。九月二十七日より義經千本櫻序切口と道行のツキを勤む。四段目の切は師匠染太夫の持役なりしが、病氣にて中途より引籠り、梶太夫替り役を勤めしも、此れ亦聲を痛め、長門太夫替りを勤むることとなる。染太夫は病勢次第に募り十一月十七日終に歿。芝居も其れ限り休みとなり。七年三月朔日より前に「源平布引瀧」次は播磨大椽江戸行名残として「先代萩御殿の段」、「紙子仕立」大文屋の段、日數十五日の間毎日替り、切「新累物語」、「布引」の竹生島にて「累」の垣生村の口を勤む。此れより芝居は暫らく休座他處へ行。八年四月播磨大椽、咲太夫門弟八十太夫を引連れ江戸より歸り、同じ座摩社内芝居にて五月朔日より興行。前に「楠昔噺」次に「粧水絹川堤」長門太夫は「楠昔噺」の序中と土橋の段持役也。七月十五日より「木下蔭狭間合戦」此の時序切の大役竹中碧の中、五ツ目の口を勤む。八月二十二日より前「國性爺合戦」の序切切「十二月粧水」景事十二化のシテ。十月二日より「本朝二十四孝」序切と二段目の中と鐵砲渡し。九年正月二日より「日本賢女鑑」三ツ目と治良作住家の口。此の時より重太夫出勤。二月十日より前「鎌倉三代記」摺針住家の口、次「關取于兩幟」惠海庵の段。三月三日より道頓堀角丸芝居にて「假名手本忠臣藏」追手先の段七ツ目掛合力彌天川屋の口持役也。七月十四日博勞町稻荷社内文樂軒芝居にて前嬢景清八島日記序切、二の口、大佛供養の段奥、大切所

作事花競十三變化のシテを勤む。之れ文樂芝居初めての出勤也。八月二十日より『太平記忠臣講釋』序切と河原の段奥。十月二十一日より『釜淵雙級巴』予本通の段奥と五右衛門住家の段口。十年正月二日より『繪合大功記』光秀屋舖の段奥と夕顔棚の段。此の時より槽下竹本綱太夫目也。迄是は播磨大椽三月十五日より下なし。此の時槽下軍法富士見西行二段目の切中、大切、桂川連理柵、道行のシテを勤む。十一年四月十四日より義仲勤功記序切と三段目の中、切に往昔曾根崎村、河堀口の段奥。七月二十九日より『弓勢智勇湊』序切と三段目の口、切に敵討、蓋襷錦、道行シテを勤む。此の時槽下竹本政太夫也。八月二十日より前、蝶花形名歌島臺、鐵炮屋の段切、八冊目の中、次に『容競出入漢、瓢箪町』九月二十四日より『木下陸狭間合戦』來作住家の段切と七ツ目の中を勤む。此の時槽下竹本政太夫也。より『菅原傳授手習鑑』喧嘩の段と天拜山の段。此の興行後座替りとなり、跡は播磨大椽一座也。十二年正月御靈社内芝居にてなし。槽下本朝二十四孝、景勝下駄の段を勤む。此の時四段目の切にて見物の場を引分、御殿を三方よりせり上る道具立也。二月二十六日より『富士見西行』此の興行には役割のみにて出勤せず、尾州名古屋の清壽院の芝居に下り、八月迄勤めて信州飯田へ立越、夫れより松本善光寺に至り、戸隠山など參詣して歸り、伊勢に詣る。冬歸阪。翌十三年、改元天保となる。元年三月より越中富山に旅興行。一座の連中は竹本音羽太夫、後、湊、太夫、後、中、筆の太夫、後、越、三味線勝右衛門、清七也。順次興行して越後高田迄行き、盆後に歸阪、年内孰れの芝居にも出勤せず。二年正月文樂軒芝居に再勤。二日より『鎌倉三代記』摺針住家の段切、切に『大經師普曆』内の段を勤む。此の時高麗太夫住太夫三月朔日より『四天王寺伽藍鑑』古御殿の段切、内匠住家の段中。四月十五日より改名槽下なし。三月朔日より『四天王寺伽藍鑑』古御殿の段切、内匠住家の段中。四月十五日より『太平記忠臣講釋』四ツ目石屋の段切、切に『男作五雁金戻火の段。五月十三日より前、みどり淨瑠璃にて立春姫小松二段目の切、切に『加賀見山舊錦繪』草履打の段を勤む。七月二十九日より『ひらかな盛衰記』二段目の切、次『博多小女郎涙枕』下の關舟の段。此の時槽下豐竹麗太夫也。是迄は竹本八月二

十九日より『入陣守護城』四ツ目の切切に『紙子仕立兩面鑑』新清水の段。九月二十九日より『義經千本櫻』二段目の切中々三段目の口。三年正月二日より『生寫朝顔話』天麩揚屋の段切々濱松の段奥山岡屋舖の段切々勤む。椿下竹本重太夫也。三月朔日より『酒吞童子話』粗光館の段切々松太夫住家の段切。四月十四日より『彦山權現誓助飯』五ツ目切々七ツ目の口。五月十九日より『日吉丸雜櫻』奴部屋の段切切に『戀飛脚大和住來』新町の段。八月六日より『木町絲屋嬢』辻町の段切切、備前先代萩竹の間の段。九月十七日より『繪合太功記』五ツ目の切、夕顔欄の段。十月二十六日より『鬼一法眼三略卷』二段目の切切に『新板歌祭文』座摩の前の段。十一月二十五日より『伊賀越乘掛合羽』木辻の段切、阿崎の段口。四年正月二日より『金門五三桐』北村館の段切、廣小路の段奥。二月十日より『一谷嫩軍記』二段目の切切に『驪山比翼塚』花川戸の段。此の芝居より椿下なし。三月十七日より『近江源氏先陣館』四斗兵衛住家の段切切に『楠昔噺』三段目の切。四月二十二日より前に『奥州安達原』二段目の切切に『心中天網島』紙屋の段切。五月十九日より『菅原傳授手習鑑』道明寺の段切々天拜山の段。七月二十九日より『假名手本忠臣藏』扇ヶ谷の段切、七ツ目掛合平右衛門々九ツ目の口を勤む。九月十七日より『箱根靈驗雙仇討』錢別の段切に『桂川連理榊』帶屋の段。十月十四日より『三國無雙奴請狀』二段目の切。十一月四日より『大内裏大友真鳥』三笠村の段。十一月二十四日より前、みどり淨瑠璃にて『雙蝶蝶曲輪日記』八幡の段口切に『攝津國長柄人柱』四段目の切。五年三月十一日より『東鑑御狩卷』に三段目の切。四月八日より『彦山權現誓助飯』四の字盡の段々七ツ目の切。五月十七日より『神靈矢口渡』二の切六郎物語の段三段目の切を勤む。夫れより暫く退座。紀州和歌山より湯淺地方へ行。夫より諸所に出勤。冬歸阪。同年十二月二十六日より『祇園祭禮信仰記』畑の段天下茶屋の中、恭立の段を勤め、阿波徳島へ大阪操り引越に付き其の座に出勤。盆前歸阪。六年九月十五日より『小野道風青柳祝』揮筆の段切に『大經師昔曆』意春内の段。十月二日より『伊賀越』政右衛門屋舖の段切、伏見の

段掛合。十二月二十四日より『日本賢女鑑』三冊目の中と六冊目の切を勤む。七年二月六日より『菅原傳授手習鑑』喧嘩の段、四段目の切。三月二十七日より前、近江源氏先陣館、和田兵衛使者の段、切に『傾城戀飛脚』新町の段。五月三日より『夏祭浪花鑑』住吉の段、奥、三ぶ内の段。七月二十五日より『花魁若八達』前日、念華庵の段、奥、芳流閣の段、切。後日、杉門松原の段と玉かへし庵室の段、切を勤む。一日替り差し換へ也。九月九日より『太平記忠臣講釋』三ツ目鞘割の段、八冊目の切。十月五日より『粗政鶴物語』三段目の口チャク切に『加賀見山舊錦繪』又助住家の段。十一月朔日より『假名手本忠臣藏』殿中の段、七ツ目掛合、平右衛門と天川屋の段、切。十二月二十六日より『妹背山婦女庭訓』花渡しの段、七使者の段を勤む。八年二月大鹽平八郎の事あり暫く休座。大鹽の亂は二月十九日に起り三月十七日より『戀女房染分手綱』横田村の段、奥、香掛村の切。四月二十二日より『繪合太功記』夕顔棚の段、大徳寺焼香の段、切。七月二十三日より『玉鬘鬘七人化粧』瀧夜叉姫庵室の段、切、志賀壽太郎屋舗の段、切。九月五日より『鎌倉三代記』播針太郎住家の段。十二月二日より前、伽羅先代萩、御殿の段、重太夫、次に『國性爺合戦』三の切住太夫、切に『三十石殿始』茶屋の段、切、長門太夫也。此の時より櫓下竹本重太夫となる。十二月廿七日より『玉藻前囃袂』三段目の中、十住住家の段、切。九年二月十六日より『木下蔭狭間合戦』五ツ目の中、壬生村の切。三月二十三日より『本朝二十四孝』三段目の切。五月朔日より『ひらかな盛衰記』三の切、逆櫓の段。夏休み中、紀州和歌山に行き、盆興行の間に合はす、十二月事故有て、親かな盛衰記』三の切、逆櫓の段。夏休み中、紀州和歌山に行き、盆興行の間に合はす、十二月事故有て、親太夫、大隅太夫、咲太夫、越太夫、其の外下廻りの太夫、人形には門造、金四、東十郎、其の外附々の者一同、文樂座を退き、翌十年正月より道頓堀竹田芝居にて、櫓下元祖竹本義太夫の額を上げて興行。二日より開場し、『妹背山婦女庭訓』三段目の掛合に大判事、次、釧景清、八島日記に日向島の段、切を語る。此の時四代目長門太夫、當時登茂太夫、初めて見習として出勤。二月、伽羅先代萩、竹の間の段、次に『戀八卦柱層』大經師内の段、切。三月三日より『假名手本忠臣藏』七ツ目掛合、由良之助と九ツ目の切。此の外、願大當りにて五十餘日の興行

文樂芝居を退き竹田芝居に
新座を興す

也。五月五日より『繪合太合記』妙心寺の段切に『夏祭浪花鑑』七内の段。八月西京誓願寺芝居にて前『一谷嫩軍記』次『紙子仕立兩面鑑』中、『熈景清八島日記』切、『融通大念佛』。長門太夫は須磨の浦に八島日記の三段目の切持役也。九月菅原傳授手習鑑『喧嘩の段』四段目の切を勤む。十月前『鎌倉三代記』切『桂川連理榎』帶屋の段。十一月堺大寺の芝居にて前『菅原傳授』切『大念佛』。十一年二月尾州名古屋に下る。十五日より清壽院の芝居にて前『融通大念佛』次『三日本平記』九ツ目嘉平治住家の段切。四月朔日より『ひらかな盛衰記』宇治川物語の段、三段目の切逆櫓の段。二十四日より『假名手本忠臣藏』扇ヶ谷九ツ目の切を勤む。五月十五日限りにて名古屋を打揚げ、十六日より秋葉山參詣として出立。途中御油宿桔梗屋の主人に引留られ、桔梗屋は旅籠屋也。主人は先綱太夫門弟梅太夫。懇望否み難く、其の夜『梅忠』の新町を語りしが、好者追々に寄集り、無理強にすゝめられ、無據素淨るりを始むる事となり、前語り登茂太夫、即ち後の四代喜代太夫、三絃九造、勝右衛門、後二代目出語りは壽太夫、後山長門太夫、三絃は勝右衛門、清にて勤めたるに、大評判となり、夫れから夫れと引合に來り、吉田宿新井宿濱松近在安間村、掛川、中泉と勤、やうやく秋葉道に入りしも大雨にて川留、山梨にて四五日逗留、秋葉山へ參詣、鳳來寺に廻りて元の御油宿に出。此の時又々各所よりの引合もありしも、既に盆興行には文樂軒との約定もありしこゝにて、振り切つて歸阪。八月朔日より前『岸姫松響鑑』切に、『東海道四谷怪談』伊右衛門住家の段切を勤む。九月九日より、『三浦大輔紅梅約』星合寺二ツ胴の段、築島御殿の段切。十月十四日より、『日蓮上人御法海』彌源次住家の段切。十二年正月二日より、『祇園祭禮信仰記』天下茶屋の段。閏正月十三日より、『妹背山婦女庭訓』愛六住家の段切、三段目の切春山。四月二十日より、『玉藻前曠秩』大公望流の段、井手の里の段切。七月二十三日より、『詠開萩七草』築樂御殿の段、八住家の段。八月十九日より、『繪合太功記』妙心寺の段、次に、『攝州合邦辻』合邦住家の段切。九月二十七日より、『菅原傳授手習鑑』道明寺の段切、天拜山の段を勤む。然るに當冬伊勢松阪への前約あり、無

市中宮芝居廢止
槽八ッに定めらる

餘義中途より退出。替り役は梶太夫勤む。十三年正月二日より義經千本櫻切に團性爺合戦三段目の切。三月十七日より木下蔭狭間合戦符中岩の段切十冊目噺の段掛合久吉。四月二十八日より夏祭浪花鑑次に花上野譽陣志渡寺の段切を勤む。然るに此の興行中市、中宮芝居廢止の違しあり、大阪芝居は道頓堀に五軒、北堀江市之側、曾根崎新地三丁目、天満大工町木の芝居なりにて槽八ッに定めらる。依て五月十六日限りにて打ち切り、八月十六日より北新地の芝居にてみどり淨瑠璃。長門太夫は楠昔噺三段目の切、二の替りに合邦辻下の巻内の段切を勤め、九月末より阿波徳島二軒家の芝居吉川安五郎座の追抱に行、冬歸阪。十四年正月堺南新地北の芝居にて妹背山婦女庭訓掛合大判事を勤め、次にひらかな盛衰記三段目の切。二月伏見兩替町八丁目の芝居にて菅原傳授手習鑑四段目の切、大切忠臣連理鉢植植木屋の段掛合彌七を勤め、二の替りひらかな盛衰記逆櫓の段切を勤む。三月は西の宮新在家芝居にて前、『源平布引瀧』次に『播州合邦辻』合邦住家の段。四月は堺南新地芝居にて『假名手本忠臣藏』七ッ目掛合由良の助山科の段切。八月朔日より西京四條北側芝居にて前菅原傳授手習鑑『東天紅の段』手習兒屋の段切を勤め、八月下旬歸阪。道頓堀若太夫芝居にて前授二段目の中、四段目の切。九月二十七日より『太平記忠臣講釋』四ッ目琴歌の段、切に『往古曾根崎村噺』教興寺村の段。閏九月『義經千本櫻』次に『楠昔噺』三段目の切。同月前加賀見山齋錦繪次に『勢州阿漕浦』平治住家の段を勤め、十月上旬よりは阿波徳島二軒家久太夫座へ、津賀太夫を連て追抱に行。冬歸阪。十五年改元弘化となる。正月五日より西京宮川町八丁目新芝居にて『義經千本櫻』金吾討死の段、四段目の切。二月『妹背山婦女庭訓』三段目かけ合定高次に『往古曾根崎村噺』教興寺村の段。三月島原左女牛北側芝居にて『繼合出世太平記』嘉平次住家の段切、大徳寺焼香の段掛合眞柴久吉を勤め、七月より四條南側芝居にて興行。夫れより歸阪。二年正月竹田芝居にて前『出世太平記』松下閑居の段切。二月前『義仲勤功記』次に『勢州阿漕浦』平次住家の段。三月『假名手本忠臣藏』七ッ目掛合

嘉永

江戸に下る

歸阪

『佐倉曙』の大當り

安政

文樂芝居再築落成

由良の助と九ツ目切を勤む。三年四年の出勤の事は不詳諸所の地方興行に過ごせるものゝ如し。五年改元嘉永となる。元年九月竹田芝居にて前玉藻前玉藻前、秋次にて近江源氏先陣館、佐々木盛綱陣家の段切。此の時櫓下は竹本長登太夫也。凡て藝名などに國名を名乗ることを禁ぜられし故、長門を長登と改めたる也。十月日蓮聖人御法海勸作住家の段次に源平布引瀧鳥羽御殿の段切、身延山の段掛合を勤む。二年三年の出勤の事不詳。四年二月竹田芝居にて妹春山婦女庭訓三段目掛合大判事次に新薄雪物語、兵衛屋敷の段、大切壇浦兜軍記、琴貴の段掛合岩永を勤め、四月より江戸に下る。五月五日より茅場町薬師にて前妹春山婦女庭訓次、ひらかな盛衰記、逆櫓の段。七月赤城明神にて假名手本忠臣藏七ツ目掛合由良の助と九冊目の切。夫より各席へ十日づゝ出勤。五年二月歸阪。實父の喪にて暫く引籠り、八月朔日より竹田芝居にて前蝶花形名歌島壺切に東土産花雲佐倉曙、宗五郎住家の段を勤めしが、此の淨瑠璃古今の大當り也。六年春より若太夫芝居にて興行。十月前鎌倉三代記次に鬼一法眼三略卷、菊畑の段を勤む、七年改元安政となる。元年三月竹田芝居にて妹春山婦女庭訓三段目掛合大判事次に攝州合邦辻合邦内の段切を勤め、四月近江源氏先陣館八冊目の切を勤む。八月天満天神境内新門北西角芝居にて假名手本忠臣藏七ツ目掛合由良の助と九段目の切。十月日蓮聖人御法海勸作住家の段。二年正月國性爺合戦三段目の切。四月西京四條北側芝居にて伊賀越道中雙六岡崎の段切。五月假名手本忠臣藏七ツ目掛合由良の助と九段目の切。七月西横堀新築地清水町濱文樂軒へ再勤して是より櫓下太夫前伽羅先代萩次に大塔宮曦鏡、身替音頭の段切を勤む。九月生寫朝顔話、高田の宿戎屋の段より大井川迄。三年正月祇園祭禮信仰記、天下茶屋の段切。三月前戀女房染分手綱次に一谷嫩軍記、三の切熊谷陣家の段。五月前奥州安達原次に紙子仕立、面鑑、天文字屋の段切。七月本町糸屋、辰次に近江源氏先陣館、盛綱陣家の段切を勤む。九月博勞町稻荷社内、文樂軒芝居新築落成。先此舊地面内へ芝居新築の事。鬼一法眼三略卷、菊畑の段、長門太夫也。十月岸

姫松響鑑切花上野響碑志渡寺の段切を勤む。四年正月十一日より新薄雪物語兵衛館の段。二月
 『假名手本忠臣藏』七ツ目掛合伴内と山科の段切。五月『縮合太功記』序、厄ヶ崎の段切。七月前彦山權
 現誓助劔次に『義仲勤功記』三段目の切。十一月前若太平記白石嘶切に新版歌祭文上の巻野崎村の
 段切を勤む。五年正月千本櫻稽古中五日の類火にて芝居焼失。普請中西京四條南側芝居に一座
 引越。二月祇園祭禮信仰記三段目の切を勤む。其の間芝居落成。四月より義經千本櫻三段目の
 切。七月二十九日より里見八犬傳吉那屋の段切。此の興行中將軍の喪七月六日十三代家定將軍薨により五十
 日間の停止となる。解停後十月迄右淨瑠璃興行。十月源平布引瀧鳥羽法皇御殿の段。十一月前
 『出世太平記』次に『勢州阿漕浦平治住家の段。六年正月十一日より妹背山婦女庭訓二段目の切、鑱七
 使者の段を勤む。此の興行より三月三日より加賀見山舊錦繪次に『國性爺合戦』三段目の切。四月
 二十日より夏祭浪花鑑次に『楠昔嘶』三段目の切。五月前『雙蝶々曲輪日記』次に『ひらかな盛衰記』逆櫓
 の段切。七月二十九日より前本朝二十四孝次に『攝州合邦辻』合邦内の段切。九月九日より『伊賀越』
 岡崎の段切。十一月前『賴政鶴物語』次に『染模様妹背門松』質店の段。七年正月十一日より『玉藻前旭
 袂』次に『伽羅先代萩御殿の段切。三月三日より前『四天王寺伽藍鑑』次に『櫻景清八島日記』日向島の段
 切。四月前『一谷嫩軍記』次に『關取二代鑑』秋津島内の段。七月前『近江源氏先陣館』切、菟萱桑門筑紫
 縣三段目。九月前『道中龜山嘶』次に『信州川中島合戦』三の切直江屋舖の段。十月菅原傳授訴訟の段、
 切に『傾城戀飛脚』新町の段。十一月前『箱根靈驗雙仇討』次に『出世太平記』九ツ目の切。同年改元萬延
 となる。二年正月十一日より木下隆狹間合戦竹中岩の段切。二月二十五日より戀女房染分手纏
 次に『蹶伊勢物語』春日村の切。五月五日より『神靈矢口渡』切に『東海道四谷怪談』伊右衛門内の段切。
 八月朔日より『八陣守護城』八冊目。九月『日蓮聖人御法海勸作住家の段切。十一月前』姫小松子日の
 遊切に『往昔曾根崎村噂』教興寺村の段孰れも持役也。然るに此の興行千秋樂の夜より大病となり

文久

元治

四代目
長門太夫

早速の頓智より知られて直
ちに役付となる

二の替には出勤出来ず。此の年改元文久となる。二年二月「假名手本忠臣藏」に病氣全快出勤、九段目の切を勤む。此の芝居大當り也。五月「繪合太功記」尼ヶ崎の段を勤め、八月朔日より「前」生寫初顔話「次に「大塔宮囃籠」三段目の切を勤む。九月九日より「前」傾城小倉の色紙「次に「大内裏大友真鳥」三笠村の段。十月「奥州安達原」切に「花上野譽石碑」志渡寺の段切。三年正月十一日より「妹背山婦女庭訓」三段目掛合大判事、杉酒屋の段興。三月三日より「伊賀越前崎」の段切。五月五日より「前」三十三間堂棟由來「次に「勢州阿清浦」平治住家の段。七月二十九日より「前」自來也物語「次に「岸姫松響籠」三段目の切。九月九日より「加賀見山蕃錦繪」長局の段。十一月朔日より「前」小野道風青柳硯「次に「一谷嫩軍記」熊谷陣家の段切。四年改元元治となる。元年正月十一日より「祇園祭禮信仰記」天下茶屋の段切。四月「義經千本櫻釣瓶」すし屋の段切。八月朔日より「前」藩太平記白石嘶「次に「極彩色娘扇」天王寺村の段を勤む。此の興行中は兎角氣分優れず、押して出勤しつゝありしも、九月二十九日より不堪して引籠り、十月中旬より段々重態となり、十九日遂に歿。

四代目
長門太夫

三代目長門太夫門弟。初め登茂太夫。通稱は樋口吉兵衛、幼名は吉松也。天保九年冬入門し、十年正月二日「道頓堀」竹田芝居「妹背山婦女庭訓」の時より見習として出勤。三月三日「假名手本忠臣藏」の時早速の頓智より頭取越太夫に悦ばれ、直ぐに役附となり、忽ち頭角を露はすに至つた。此の太夫の自著の「淨瑠璃大系圖」には、

「ある日七ツ目掛合の見臺出し幕明て例の下廻りの役さて花に遊ばるを云て俗に云臈病口へ平右衛門役親太夫殿の白湯を持って待て居る處酒の酔をさまさせませうかなにさちりて來らずヤレ暫らくを間に合に云し處幕締りて頭取越太夫より呼に來りて先刻平右衛門の間に合宜敷切淨瑠璃大念佛開帳の場吉田金四早がわり巴磨太夫役場にて三味線鶴澤安治郎後清八

也右の役場替り役申付られて其の夜初て床に入て勤る。巴磨太夫病氣段々重りて終には千秋樂迄勤る。其の明る日鳴尾崎の段勤て其の明る日忠臣藏ニツ玉の段又殿中の段最此の時分には風邪流行にて日々病氣多く上の役は小松太夫是後に彌太夫なり下の役は登茂太夫にて勤芝居は大當りにて五十餘日勤る也。同五月五日より繪合太功記此の時先芝居の替り役の褒美として初めて役附に千本通りの段口と切に夏祭浪花鑑團七内の段跡勤る。

と記して居る。其の後は師匠と共に各所の芝居を勤め段々出世せしが弘化二年放埒にて家を出て津賀太夫の預りとなり諸所興行。安政五年七月實母病死の報に接し歸宅。翌六年正月十一日より稻荷社内文樂の芝居「妹背山婦女庭訓」の時竹本實太夫目四代と改名して出座鑪七上使の段を勤む。

『増補淨瑠璃大系圖』四代目長門太夫の自著にして新界研には登茂太夫時代の事歴中弘化二年より安政六年に至る。彼が放埒にて家を出て津賀太夫即ち壽太夫也。後ち山城椽までの消息に付き、左の如くに記して居る。

三月天保十年島原左女牛北側芝居に於て繼合出世太平記澁堤の段役割計りにて休む也是より後四條南側芝居に移り替秋の頃迄も續て興行相なれ共暫く休業致す也同年改元有て弘化元年と成同二年乙巳五月放埒にて家を退去致暫く姫路に住居し同十月歸阪致し夫より津賀太夫後山四郎方へ預けと成同三年丙午二月堺新地南の芝居にて妹背山序切と花渡しの段勤同三月雲州松江に赴く也最操りは淡州仙四座なり同年七月より人形座は先へかへして跡床十六人残りて後は素淨るりにて御山舞臺にて十日興行夫より平田今市木樂と段々に打て廻り十月米子に歸りて一先歸阪致す處登茂太夫と三絃今東京にて野澤語助事其の頃は竹澤龍作と兩人約束有て残り居て廣瀬へ行十一月末出立して備後路へ出福山濱手

より舟にて讚州多度津へ渡る山四郎高弟賀太夫事讚州木の郷村と申方にて是と約束致跡より行候積り延日になり賀太夫事も待兼丸龜舟場まで出し處行合又同道にて西讃岐觀音寺始として處々興行十二月二十日丸龜より乗船致し歸阪致は因講前日なり弘化四年丁未正月西京芝居約定有て津賀太夫の一座出勤の筈北側南側の入組にて南の方先へ興行の嘶となり津賀太夫方は北側故跡へ廻るになりし故夫迄待遠くなるに付此の度は小人數にて米子へ赴き興行致す夫より伯州路處々打て七月皆々歸阪致す後宮戸太夫事濱太夫と登茂太夫源三郎右三人残り伯州因州海道倉吉より因州鳥取へ入込十二月末元の米子へ戻り弘化五年戊申正月七日立にて大阪へ歸る也津賀太夫事西京四條道場にて素淨るり興行に付右三人共直様上京致右の座へ加はり浦の朝霧新物にて序切と三段目の切中勤め三月より尾州宮宿芝居に於て吉野太夫事豊竹生駒太夫と改名披露にて十月の間素淨るり興行に出勤致夫より桑名四日市と興行して一先盆前に上京致す登茂太夫は右四日市に残り八月末濱太夫迎ひに罷越候處夫迄に約束有て名古屋豊吉事豊澤仙右衛門是と三人同伴にて市の宮笠松と興行して是より信州飯田へ赴く同年改元有て嘉永元年となり同年中飯田に暮し同二年巳酉正月濱太夫は上京致し登茂太夫は稽古の約束有て跡へ残る夫より段々長逗留に相成同三年冬大隅太夫殿飯田へ來られ是と約定して來春早々東京へ罷越候積りの處師匠約定有て同四年辛亥四月東京到との知せ同門咲太夫また長尾太夫より申來り色々引合の内十月より飯田出立致甲州府中迄行し處師匠より歸阪可致書面參り致方なく身延山へ參詣致西甲州にて十二月中旬迄興行政冬分又飯田表へ立歸る同五年師匠實父病氣にて同二月歸阪致され暫く介抱の内三月死亡の由申來り又歸りがたく成て思はず逗留致同七年改元有て安政元年と成同三年辰三月津賀太夫事竹本山城椽と受領致され其方へ内談有

て上京致直様大阪に下りて河堀口へ歸り母妹に久々逢又師匠事其頃西横堀清水町澤文樂座出勤一の谷三段目を勤居られ師と同伴にて久々芝居へ赴く皆々に面會致居る處湊太夫殿方迄西京山城椽より書狀來り直に見る處急に登り吳との事故河堀口へ歸りて其明る日夜舟にて登る也西京山城殿方に一兩日逗留致此度は飯田表取片付の爲又々木曾路より飯田へ赴き候處兼て信仰致す田島山長源寺の七面堂建立有て内普請出來候飯田近在は申に不及町中連中の助力にて暫くの内に普請成就致跡へ殘す爲大額二面を奉納致夫より在郷最貧の方へ名殘に來りし處段々引留られ延日致同五年戊午七月急便有て實母死去のよし申來り早々歸宅有よふこの事故執る物も不取致支度致し同八月上旬河堀口へ歸宅致すなり。尤歸宅の砌長の御停止にて芝居も休にて同九月元の外麗里見入犬傳也師より出勤を勸められしッご長々田舎にて我儘に語り暮し大阪にては再出勤は存も寄らずと家内のみ見廻り同年冬に至りて同門の衆中よりも段々の勧めに難默止然らば元の一より修行の致し直しと古き登茂太夫を去りて 竹本實太夫 改名致す也尤此の實太夫名前は師長門太夫初代にて二代目は後六代目染太夫事續く三代目は後四代目彌太夫事續く登茂太夫にて四代目相續致す也干時安政六年己巳正月稻荷社内東芝居文樂座にて十一日より妹脊山婦女庭訓七使者の段口勤る也云々。

又右大系圖竹本津賀太夫の傳記中にも當時の地方興行に就いて左の如くに記して居る。

同八月天保十五年即ち弘化の元年也四條南側芝居にて長らく出勤致弘化二年乙巳二月より四代彌太夫座頭にて門弟中引連雲州松江にて素淨瑠璃興行にて凡一箇年松江其の外所々に相勤る同三年は西京にて處々興行愈りなく同四年丁未春より又々雲州松江表へ淡州義太夫座を伴ふて同處みづき社内にて興行次に御山にて同山部にて夫より追々杵築大社平田今市

廣瀬母里等にて無程一箇年彼地にて勤め冬分歸阪致春早々西京にて興行の話の處彼是入組出來此の興行出來不申依て三月より又々伯州米子へ行處々出勤して盆前歸阪致され夫より西京に赴く最其の頃より素淨瑠璃よせと號て處々に新席出來云々。

由是觀るも、京都の綱太夫一派の連中などは、所の興行ばかりにては面白からず、ぼろ／＼山陰の松江、米子、杵築あたりまでも、旅興行と偏歴し、其れには、淡路の人形一座が附いて廻はるなど、概略當時の模様も想察されるのである。

夫れより續いて出勤。元治元年十月十九日師匠長門太夫死去。二年改元、慶應となる。正月十一日より『新薄雪物語』清水寺の段掛合の團九郎と澁川使者の段。三月『假名手本忠臣藏』三ツ玉の段。五月『彦山権現誓助剱』山口八幡の段、杉坂墓所の段。九月『菅原傳授』東天紅の段。十一月『太平記忠臣講釋』鞘割の段、白川石切の中。二年正月十一日より『妹背山婦女庭訓』萬才の段。最も初日の前日氣となり、萬才より續けて三月『本朝二十四孝』万石の段、鐵砲渡しの段。五月十七日より『源平布引瀧』序切と紅葉山の段。七月二十九日より『近江源氏先陣館』序切と九ツ目の中。九月九日より『鎌倉三代記』播針住家の段切。十月『鬼一法眼三略卷』能登守詮義の段切。三年二月朔日より『木下隆狹間合戦』島原揚屋の段。四月『伊賀越』靱負屋敷の段切、般若阪の段。八月朔日より『大江山酒吞童子』入香の里の段切、奏聞の段。九月九日より『ひらかな盛衰記』三の中茶吞の段。十一月『覺仇討』八幡宮の段、錢別の段。四年改元、明治となる。元年二月『金門五三桐』此の村屋敷の段切、山門の段。三月晦日より『一谷嫩軍記』三の口寶引の段切に『四ッ谷怪談』伊右衛門内の段中。四月二十六日より前『日本賢女鑑』序切、次に『勢州阿漕浦』濱邊の段。七月『太功記』妙心寺の段、大徳寺の段中。九月二十七日より『白石嘶田植の段』。十一月『雙蝶々曲輪日記』米屋の段切。次に『安達原』三段目の中。二年正月十一日より『妹背山』序切。三月『八陣守護城』本城の段中切に『蘆屋道滿大内鑑』信田の段。五月五日より『加賀見山』

舊錦繪『多賀館の段切』鶴が岡の段掛合岩ふじ。六月『西京四條北側芝居』にて前『繪合太功記』五ツ目の段切。切に『蘆屋道滿』信田の段。八月朔日より『伽羅先代萩』才原屋敷の段切。九月『三代記』摺針住家の段切。十一月『出世太平記』本能寺の段切。三年正月『菅原傳授』東天紅の段。天拜山の段。三月『義經千本櫻』嵯峨野庵の段切。五月『夏祭浪花鑑』住吉の段奥。長町裏の段掛合に義平治。七月『忠臣藏』殿中の段。七ツ目掛合に久太夫。九月『狭間合戦』道三館の段切。十一月『布引瀧』清盛館の段切。十二月兵庫柳原芝居にて『大江山』保昌屋敷の段切。四年正月『祇園祭禮信仰記』割普請の段奥。三月『玉藻前』關亭宮の段切。安成祈りの段。八月『伊賀越』五ツ目切。九月『鬼一法眼』詮義の段。十一月『彦山權現』毛谷村の段。五年正月松島千代崎橋筋新築文樂座の初芝居に、御祝儀三番叟と繪合太功記『天徳寺燒香』の段切。三月『大江山酒吞童子』切に『本朝二十四孝』景勝足駄の段。五月『白石嘶』逆井村の段。七月『里見八犬傳』富山の段切入江の段。九月『生寫朝顔話』大磯揚屋の段。十一月『出世太平記』小栗栖村の段。六年二月『義經千本櫻』権の木權太かたりの段。四月『伽羅先代萩』原田屋敷の段前。六月『三代記』分散大名の段。九月『忠臣藏』渡が關の段と雪こかしの段。十一月前に『奥州安達原』切に『日蓮聖人御法海』勲作住家の段中。七年二月『狭間合戦』島原の段奥。四月『八陣守護城』門前の段。淀君館の段。六月『ひらかな盛衰記』宇治川先陣物語掛合延壽三段目の中。九月『玉藻前旭袂』二段目の切前。十一月『彦山權現』周防山口の段。三韓征伐出陣の段。八年一月『菅原傳授』喧嘩の段。三月『繪本太功記』鐵扇の段。五月『本朝二十四孝』諏訪明神の段ナク。六月『布引瀧』粟津の段。九月『里見八犬傳』瀧田城の段。十一月『伊賀越』親真屋敷の段切。九年一月『祇園祭禮信仰記』序切。三月『妹香山』序切。四月『大江山酒吞童子』矢脊の段切。七月『豐臣太平記』松永切腹の段切。九月『三代記』大阪城中評議の段切。十一月『朝顔話』切に『御所櫻堀川夜討』三段目の中。十年一月『金門五三桐』采樂御殿の段切。三月『八陣守護城』住吉濱邊の段奥。五月『忠臣藏』雪こかしの段。七ツ目掛合由良之助は春太夫の役。六月『盛衰記』序切。割なりしも病氣にて實太夫替る。

長門太夫と改名

八月京都四條南側芝居にて櫓下春太夫なりしも、七月死去に菅原傳授手習鑿茶釜酒の段。九月文樂座にて前同様の戀女房染分手綱與作勘當の段切。十一月鬼一法眼詮義の段掛合忠太夫同築地の段。十一年一月義經千本櫻堀川御所の段切。此の時櫓下と成る。三月伽羅先代萩が岡の段ナク。五月彦山權現山口濱邊の段ナク。九月繪本太功記鐵扇の段、瓜獻上の段。十一月立春姫小松伏見の段。十二年一月加賀見山舊錦繪兵法の段。三月本朝二十四孝序切と鐵砲渡しの段。五月五天竺鶴足山の段。十一月日蓮記清澄寺の段切。身延山の段掛合庄司。十三年一月木下蔭來作住家の切。三月玉藻前旭袂太公望流の段。五月菅原傳授岩倉山信敬祈の段。九月穠七草大堰川の段掛合天竺徳兵衛。十一月小倉の色紙輕賣の段、山巖寺の段掛合千倉神右衛門。十四年一月大江山酒吞童子羅生門の段。三月妹背山婦女庭訓三笠山の段。六月孃景清八島日記佐々木義秀館の段。八月西京四條北側芝居にて木下蔭狭間合戰來作住家の段切。同替り淨るり前八島日記義秀館の段切。九月文樂座にて大内裏相馬錦繪親友旅館の段切。十一月八陣守護城南蠻寺の段切。十五年一月花魁苔八總白簪川の段。三月千本櫻北野馬場先の段。六月大内裏大友真鳥真鳥城門の段。八月西京北側芝居にて八陣南蠻寺の段切。九月文樂座にて太功記瓜獻上の段。十一月伊賀越上杉館の段を勤む。十六年竹本長門太夫と師名を相續し、一月西京四條北側芝居にて假名手本忠臣藏天序鶴ヶ岡の段と七ツ目掛合由良之助。同月文樂座櫓下竹本長門太夫にて祇園祭禮信仰記花子の段。四月大江山酒吞童子頼光館の切中。此の時より櫓下を退き越路太夫に譲り、後見と成る。

第十章 江戸淨瑠璃の後半期

江戸的氣風の軟化

『我衣』病問長語
『獨語』の一節

宮古路豊後の系統

豊後江戸に下る豊後の曲風時人の批評
されど餘りに透徹せざる觀に畢

寛時代風潮の
變遷である

豊後の遺鉢を傳へて更に大成した常盤津文字太夫

幾分改良せられた豊後節

文

字太夫の流系

文字太夫と相竝んで盛名を馳せた富本豊前椽

豊後の直系なりとするの
説 文字太夫の門下よりの

出たさするの説 一度は常盤津系の一員として其
の門下に立ちたる事もあるが如し 豊前椽の略歴 富本の流系

富本より出でゝ更に一派を爲した清元節 初代齋宮太夫 二代目齋

宮太夫

清元と稱し延壽
太夫と名乗る

清元の流系

五代目延
壽太夫

宮古路加賀太夫の創めた富士松節 富士松より別れた鶴賀節 鶴賀

の祖若狭椽 富士松の流系 七代目加
賀太夫 鶴賀派の流系 鶴賀新内 繁

太夫と蘭八

豊後節以外の各派 一中節 元祖一中 一中節の流系 菅野派と字

治派 大薩摩節と河東節 大薩摩節の系統 河東節の流系

江戸的氣風の軟化

金銭名は立元、字は純彌、通稱は文平。信濃の人。井上蘭臺に從て學び、後ち一家を成し折衷學派と稱せらる。天明四年歿年五十三。

江戸淨瑠璃革命時代の各派の混戦 『淨瑠璃三國 誌』の一節 江戸淨瑠璃の變遷

次第に江戸化する豊後節系淨瑠璃 江戸淨瑠璃衰微の徑路

自正徳
至文久 江戸淨瑠璃重要事項年表

寛永二十年より正保四年慶安四年承應三年明暦三年萬治三年寛文十二年延寶八年天和三年貞享四年に至り、元祿十六年となり、寶永七年となり、正徳五年となり、元和偃武の時を去ること既に百年、時人やうやく太平に馴れて、文事逸樂の嗜好次第に加はり、井原西鶴の一代女一代男の如き、肉的享樂の一面を描いた軟文字まで歡呼して傳誦せらるゝ時代となり、服装より髪の結び振りまで、濃厚ちゆうこうづくりの上方風を輸入し來り、江戸の上下を擧げてまさに關西風によたくたよゝく化せんとし、歌舞伎にあれ、淨瑠璃にあれ軟調となり、浮華となり、金平節亡び、外記節亡び、肥前節、土佐節、永閑節、語齋節、式部節、手品節等、在來江戸節各派の淨瑠璃は次第に凋落し、一時は江戸上下の歡呼喝采を得て盛んに流行した半太夫節さへも、亦やうやく世人に壓かれ、僅に河東節一派によつて、江戸人の淨瑠璃趣味の渴仰を慰めて居りし時に方り、宮古路豊後江戸に下り、彼れ一流の艶婉鼻々の豊後節の鼓吹を始めたのでありし。

井上金銭の書いた『病間長語』には、

武士は繁華の地に居ぞ悪き、古は坂東武者とて豪雄なるものと覺へしも、京師に遠くして邊鄙に生長したる故なり、今はまた西國武士の豪雄に見ゆるも、東都に

遠くして邊鄙に生長すればなり、今も毎歲間年都下に祇役する士は、何にとなく江戸風しみこみて筋骨なまけ上臈めきたるか長じて、竟に商賈のありさまを似せるやうになれり、病夫も昔は升斗の祿ありし故に、武家の交をしてよく／＼その情を悉せり、近年の若武士は、他行などするにも二本棒はやばらしきなどゝて、出入の町人の所へあづけるもあり、又は一刀帶るもあり、かごを出たる鳥の心にて成て、淨瑠璃小廠にて町人に見らるゝを自喜するもの多し、さりとは淺間しきことなり、諧語の付合とやらに、人は武士なせ傾城にいやがられと云ふ句あり、これ故にかそ今の若武士の町人めきたがるなるべし。

と云ひ、曳尾庵の『我衣』には、

町人衣服之事、貞享年中迄ハ夏麻ノ單羽織ニサイミノ帷子ヒトヘ、冬上田島ツムギ、或ハキヌ郡内ノフトリ、是ヲ躰入ニモ寺參リニモ著シタリ、常著ハモメン布子ニ定紋ヲ付タリ、是時節迄ハ萬民トモニ不奢故ニ、溫和ニテ世上ノクラシモ苦ニナラズ、妻子モ安ク養ヒケリ、コレニ依テ賣買スル者マデ、今日ハ百錢ノ利ヲ得タリ、先ヅ一日ノ養ヒハアリトテ、晝ノ内ニテモ商ヲヤメテ歸ル、又翌日商ニ出ル、正月三日ノ内ハ堅ク商賣ニ出ズ、是ニ依テ人々三箇日五箇日ノ買物、舊冬晦日限りカヒ求メ、若シ油斷ニテ調子バハタトコマル、依之高利ニ賣コトモアリ、コレユエ切レモノモ多シ、享保ノ比ヨリ世上之者不商ニ付、人ノ心サガシク晝モ夜モカセギ、其クセ高利ヲ得ル事モナク、人十錢ニウレバ我八錢ニ賣テ、物數多ク賣ルヲ專

一トス、故ニ諸商人諸職人トモ利ヲ得ル事カタク、増テ元祿以來正徳迄ノ花麗ナル世間ヲミタル者共ナレバ、身上ハ分限不相應ニ奢ル故ニ、朝夕暮シ兼ルモノ多シ、唯氣強ク仁心モナキ利慾ノ方ヘ、智ノヒラキタルモノハ金銀ヲフヤシ、溫和ニ世上ヲソコナハザル人ハ、日日衰ヘ淺間敷世トハ成ケル。

其比卑イナシキ者ハ、身上クラシニ苦シメラレ、法外ノタクミヲ致スコエ、罪科者モ多シ、是ニ依テ元文刑罪ノ義一段輕ク成、大罪ハ小科ニ轉ジ、小科ハ死ヲユルサル、此時ヨリ敲放シトテ刑鞭ノコト始ル、夫故ニ死罪ノ者刑鞭ニテ免サル、ト心得、盜賊ノ類多シ、是其元ヲ嚴シク苦シメ、末ヲユルガセニスル故ナリ、元仁ヲ施サバ末迄仁ナルベキニ、元不仁ニシテ末ニテ仁ヲ行フニヨツテナリ。

寛永ヨリ貞享迄五六十年ノ間ノ人、正路ニシテ奢モナク又ムサボル心モスクナシ、元祿ヨリ正徳ニ至テ、三十年ノ間ノ人、正路ナレドモ、奢ル心多ニヨツテ、ムサボルコトモ多シ。

元祿寶永ノ比惡所ノ繁華ハ、晝ハ極樂ノ如ク、夜ハ龍宮界ノ如シトイヘリ、諸國ノ珍味、先此地ヲ最上トハコビ、異香匂ヒ家々ニ滿ツ、數ノ遊妓伽陵ノ袖ヲヒルガヘス、遊客ハ他人百金ヲツヒヤセバ、我ハ千金ヲツヒヤシタリト、多クツヒヤスヲ此里ノキボトス、享保ヨリハ、他人十金ヲツヒヤセバ、我ハ五金ヲツヒヤシテ、歸リタリト、世智辨ヲ元ト心得タリ、元祿ノ人ハ惡所ハ金銀ヲ捨ル所ナリ、不捨心ナラバ此地ニ足ヲ入ルノハ何ゴトゾヤト笑ヘリ、又今ノ世ノ人ノ心ハ、惡所ナドヘ足ヲ

入ル、ハ、還テ人ニワラハル、種ト思フ、人ニ笑ハレテ見ル程ノ所ニテモナシ、是ヲミルニハ不見ニハ不如。略中

正保慶安ノ頃、江戸中ニ武家ハ不及申、町人トモニ劔術柔術ノ類大ニ流行ス、依テ

男伊達ト云事ハツカウセリ、伊達ト云フコト御國入ノ朝、仙臺家士多クハ人ノ目ニ立衣裳ヲキタリ依テアレハ伊達衆ナリト云フヨリ始マル町人

トイヘドモ、武扁ヲ立辻切喧嘩所々ニ有之、此節大小ノ神祇組トテ、若手ノ旗本町

人トイヘドモ一ツニ組合、何百人ト云コトヲ不知、又白柄組ヅカ、風俗ハ、髪ヲ手

一束ニ切ダブサヲ取レヌ用心シ、冬紺縮緬白大綿入一ツ、帯モ白ク三重ニ廻シ、袖

口白太クク、リ、丈ハ三里ノ少シ下ヘ下ルホドニ短ク、鉛三々ツ、クケコミ、ツマノハ子カヘルヲヨシトス長キ

大小ヲ帶シ、柄絲下緒何レモ白シ、衆道専ラニ流行ル、其振廻人ニマクル事ヲ死ト

モセズ、或ハ菓子ヤ酒ヤ茶ヤ等ニテモ、空腹ノ節ハ入テ食之、持合ナキ時モ今日ハ

拂ハヌゾト云、商人不苦候トテ猶々インギンニスレバヨシ、若シアイシラヒワル

キト六箇敷云テ、身上モ仕舞程ナリ、インギンニスレバ一禮ヲノベテ立チ、重ネテ

五匁三匁ノ喰物タリトモ此間ノ代物何程トコマカニハイハズシテ、慶長金百疋

或ハ一兩モナゲ出シ、先頃過分ナリトテ遣ハス、ツリヲ上гентト云ヘバカヘツテ

立腹ス、又他人ニテモナカ間ニテモ被頼、何分御加勢奉願トヒタスラニネガヘバ、

命ヲ捨テモ反故ニ不致、唯男道ノ強ヲ表ニシテ義ヲ守リ節ヲ失ハズ、サシテアバ

レ歩行ニテモナシ、無理ナル事ヲモセズ、無心ガマシキ事ナドハ仲ケ間ノ法度ナ

リ、少シニテモ人ニヨハキ詞ヲ言フ第一ニキラフ組合ナリ、仲間入スルトキハ、ツ

テヲ求テ金銀ヲ出シ仲間ニ入、若シ親兄弟ノ以ノ外ナル事トテ勘當ナドスル時ハ、仲間ニテラク／＼ト養テ少モ不自由ヲサセズ、是則歴々頭分ニテサハイヲスル故ナリ、然レドモ後盜賊方ニ被仰付此輩コト／＼ク斷絶セリ、然ドモ元非道ヲイハズ、強剛ヲ元トスル計ナレバ、ソレ迄ノ間二十年程ハ無事ナリケリ、御停止ノ後モ猶元祿迄此風ノコル、此時ノ盜賊奉行中山勘解由施之。

寛延年中女黒裏ノ小袖ハヤル、若キ女計リナリ。

享保始若キ男白茶ノ裏ハヤル、寶永ゴロ、スミル茶、元文以來御納戸茶、古來ハ萌黃裏ナリ。

寛永十六年迄ハ、武家ハ格別、町人百姓トモニ衣服甚兪相ナリ、女モ町人百姓ノ妻ナレバ順之、正保慶安頃迄年々キシニテ輕キ貧家ノ妻娘武家へ奉公ニ出ル、次第々々ニ立身シ、上ツ方ノ御服ヲモ拜領シ、我家へ歸テ嫁スニモ右ノ拜領物ヲ著シ、見物遊山祝義ナドニモ一ツ二ツ有ルモノヲ著シタリ、故ニ自ラ世上ノ女子目ヲ奢セ、有徳家ノ妻子等ハ、手前金ニテ拜領物ノゴトクコシラへ著シ、右ノ兪服ヲ忘レタリ、然レドモ數多クハナシ、宜キ所ナレドモ下女ハ夏冬木綿ノハレ著ナリ、スデニ明曆三酉年、大火事江戸御城燒失ス、此時嚴有院殿十七歳ノ御年、日本橋ニテ三日施行ノ御粥ヲ被下ケリ、歴々町人ノ妻娘爲冥加此粥ヲ拜領セリ、貧家ノ妻女ハ申ニ不及拜領セリ、寛文年中ヨリ男女ノ衣服ソロ／＼ヲゴル、歌ニ。

馬ナラバイクツカハネン丑ノ年、扱モハネタリ寛文元年

寛文中ニ至テハ、惣鹿子ノ小袖ヲ著ス、地白綸子或ハ紺絳紫ノ結鹿子惣地ニセリ、最結搆ナリ、小船町一丁目石川六兵衛ト云者ノ妻甚奢タリ、此女常ニサアヤチリメン綸子ノ類ヲ著シ、晴ガマシキ所ヘハ純子綸子金入等ヲ著ス、常憲院殿上野ヘ始テ御成ノ時、延寶年中御代替彼ノ六兵衛御成ヲ拜スニ、黒門前ニ棧敷ヲカケサセ、御簾ヲアケ幕ヲ打セ、名香ヲ焚キ、蘭者待トイヘリ左右ニ女ノ切禿兩人絳縮縮ノ大振袖ヲ著セ、真中ニ座ス、御通行ノ節御簾ヲ卷セテ拜セリ、是東照宮御他界以後漸四十餘年ノ事ナルニ、増テ御城ハ明曆ニ燒失シ間モナク御三代ノ御代替リ、其外キシ由井丸橋等天艸亂、其外色々天災有テ、其節迄ハ下々町人體ヘハ御政務不行届モ最ナリ、シカレドモ石川六兵衛カ程迄女房ニ爲奢、上ヲ憚ラヌ仕方心付スト云ハアマリナル事ナリ、ヒツキヤウ萬事ニ付身ノ分限ヲワスレ放埒千萬ナリ、愚カナル町人ノ心ナリ、其時ノ上意ニ是ハ何レノ大名ノ奥方ゾヤ、アマリ結構成様子ナリ、アレ尋ヨトノ嚴命ニテ、則町人妻ノヨシ申上ル、是ヨリシテ町奉行吟味ノ上、石川夫婦遠島ニ被仰付、闕所トナルニ金入ノ小袖計リ、奢モノ不久ノタトヘナリ、六兵衛タハケニセヨ、名主町役人コレヲ止メヌハ皆々心ナキ事共ナリ、是ヨリ町人百姓男女ノ衣類、殊ノ外嚴敷御停止ニテ、寛永ノ如ク成ニケリ、ソレ迄ハ遊女モ縹子純子ヲ著シ、夜具モ絳縹子ニ金紋ナドヌハセタリ、此時ヨリ相止ム、前文ノ越後ヤ、此時大ニハヤルナリ。

元文ヨリ、町人ノ羽織丈長クナルハ、淨瑠璃太夫都古路ニ始ルナリ、醫ハ東國西國

『獨語』一卷大宰春臺著、和歌茶道俳諧三絃淨瑠璃猿樂俳優其他歌舞風俗等の事を論辯したる和文の隨筆也。春臺は鴻儒也。信濃の人、名は純、字は徳夫、通稱彌衛門、別に紫芝園の號あり、延享四年五月六十八歳にて歿。

トモニ昔ヨリ長キナリ、モツタイ計ニモナシ、一體僧衣ノ略タルモノカ、官モ法眼法印ニモ任ス、衣ヲカタドリタリトミユ、俗人何ゾ衣ヲ著センヤ。

羽織、天正ノコロ丈キハマリナシ、天和貞享ノ比マデ其人ノ丈相應ニシテ著ル、元祿ヨリ京大坂羽織ノ甚丈ミジカシ、此比京ノ人多ク銀座へ下ル、銀座元祿ノ比ハ三寶四寶^{ミツゴウヨツゴウ}ノ吹キ最中ナレバ、繁昌世界ニ及ブ者ナシ、晝夜金銀ヲマウケ、若キ手代ハ我勝ニ惡所へ行テ、金銀澤山ニ遣フユエ、惡所ニテモ尊敬シ銀座客ヲ我一トモテナス、世上ノ人はヲウラヤミテ、形銀座ヲニセタリ、銀座モノ袖永クカ、トヲ打羽織短ク袖下ニ等シ、是ヨリ羽織江戸モ短ク小袖丈長クナル始メナリ、享保ノ頃羽織丈元へ歸リテ中分ナリ、元文、コロ、上方ヨリ、都古路、豊後、椽ト云浮瑠璃語リ、下ル、此一流皆羽織長シ、元文ヨリ、此風世上ニハヤリ、先ヅカタチヨリ、我身へ寫ス、世ハ中ナレバ、此一節ヲ學ブ、若手ハ、先髮ヲ都古路風ニユヒ、羽織モ長クセリ、後々ハ、マナバヌ人モ羽織長クナル。

と記して居る。以て江戸風俗變遷の狀を想見すべきである。大宰純の『獨語』にも、亦左の如くに書かれて居る。

つく／＼と百年この方の風俗を思ひくらぶるに、餘所のことをばおいて、江戸の人の風俗こそ殊に昔にかはりたれ。我が親しき者の中に、慶長元和の比生れたるもの男にも女にも有りて、寛永の比を年の盛に經たりと云ふに男は、冬章のうちかけ、革の袴を美服とし、女は紫の革の襪子をはくを能きけはひとせりと云ふ。

其の襪子は我が幼き時までも残りて有りしなり。婦女の帯は金襴を美麗の限とし、黒地に梅櫻松を所々に織り付けて、是を鉢の木の帯と名付けて珍重しけり。廣さ僅かに鯨尺二寸ばかり、紙を心として綿など入るゝことなし。四月より八月まで、婦女の禮服に、綿にて廣さ鯨尺の八分ばかりなるを後に結びてたるゝをつけ帯と云ふ。今のつけ帯は昔の常の帯よりも廣く、今の人に昔のことを語れば、そらごとゝ思ひてつゆ信とせず。此等は我がまのあたりみたりし事にて詐に非らず。舊きこと知りたる人あらば尋ね問ふべし。都べて男女の衣服、昔は極めて質素なりき。男子も女子も十四五歳までは長き袖をきるに、昔は鯨尺の一尺七八寸を極とせしに、貞享の比より二尺計になり、それより漸くますます長くなりて、近比は二尺四五寸になりぬとみゆ。婦女の帯も貞享元祿の比より漸く廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸におよべり、綿を心として搦の如し。男の肩衣と云ふ物、昔は麻の幅鯨尺の八寸計なりしに、貞享元祿の比より幅一尺に及べり。寛永の比迄は婦女細き麻繩にて髪を束ねて、其の上を黒き絹にて巻きしに、其の後麻繩をやめて紙にてゆふ。越前國より粉紙にて元結紙と云ふものを造り出だし、海内の婦女みな是を用ふ、夫より絹にて巻く事もやみぬと、我が父正しく是を見て語り聞かせたり。今の人聞けば信とせず。凡男女の髪かたち、我等が見及びてよりこの方も幾かはりかしつらん、今は昔のかたものこらず。昔の婦人は、髪多く長きをたけにあまるなど云ひて譽めしに、近比は髪少く短きをよ

しとする風俗になりて、髪多き女は髻の内を或はきり或は剃りて少くする。此の風俗は京の婦女より移り來れり。此のことに限らず都へて男女の風俗、詞づかひ物の名まで、近比は京に似たること多し。京は公家の外、工匠商左のみなれば、人の心柔懦にて利にかしこく、江戸は武家の都なれば、あづまうどの心粗暴にて利にうとし。然るに三十年この方は江戸の人、京の風俗を學ぶ故に、武士の心も昔にかはれり。唯京の婦女の昔より豪衣するのみこそ、いまだ江戸にうつらぬ。江戸の婦女の外に出づるに、昔はきまゝとて黒き絹にて頭面をつくみ、目ばかりをあらはしけるが、其の後綿にて頭面をつくみしは、我が二十あまり、寛永の比までしかなりき。今はちひさき綿を頭上にいたゞきたるのみにて、面をば打ちさらし、はれやかなる顔にて道を往くさま、おもはゆげにも見えず。男は面をあらはすべきものなるに、此の頃はあみがさの肩の上までかゝるをかぶるはめすらしからず、冑の如くなる帽子をかぶりて面をかくすもあり、常の頭巾に覆面の如くなる物をつどり付けて目ばかりをあらはして道をゆくもあり。昔の女の如し。人目をしのぶ者の多くなりたるにや。また此の比の男は、小袖の裏を紅にし。或は紅のはだ絹を袖口なかにして、腕を纏ふばかりにひらめかす者多く見ゆ。女はかへりて、縹の白き裏などきるめり。此等は男女所を易ふと云ふべし。又昔は士君子こそ、學問し歌よみ詩を作り連歌し、或は管絃を玩び、すこし下れる品なれども、琵琶を弾じて平家物語し、筑紫箏幸若の舞など習ひて樂しみ

あへりけれ。三線を鳴らし淨瑠璃を語ることは唯市中の賤しきものゝみなりき。それだに大方人にかくしてしのびくくに習ひしぞかし。今は工人商の中にてやゝ富めるものは學問し、詩歌管絃を遊び、少し下れる品なれども猿樂などを習ひて樂しみとして、淨瑠璃、三線などをば近付けぬ類あり。士君子反りてよき樂しみをしらず、ひたすら淨瑠璃、三線を好みてはれやかなる所にて、おめす憚からず、賤しき所作をして人の玩となる。薄祿の士のみには非らず、諸侯貴人にもこの類多しときけり。これをも冠と履と處をかふと云ふべし。是のみに非らず、今の諸侯貴人の道を往くさま、昔にくらぶれば殊の外にをこがまし。少の所領にて従者の數もさのみに多からぬを、廣く長く竝べつづけて人の妨となるをかへりみず、臂をふり、足をふみならしていかめしくあたりをはらふ。見るもうるさく片腹いたく覺ゆ。傍若無人これに過ぐるこどやある。云々

豊後節は虎屋源太夫の高弟角太夫の門人、都太夫一中の弟子半中國太夫後ち宮古路豊後節の始めたものである。此の人の流風は、京阪に在つては國太夫節にて流行した。享保三年十一月竹本座「博多小女郎浪枕」興行の時出勤し、翌四年十一月の「島原蛙合戦」同六年二月の「攝津國夫婦池」の興行には出語り太夫和太夫のツレを語つて居る。

常磐津系圖、一中節系圖及淨瑠璃大系圖には豊後節の系統を左の如くに傳へて居る。

虎屋源太夫——伊藤出羽椽——岡本文彌——都越後椽——都太夫一中——都半中國太夫宮古路

されど伊藤出羽椽、都越後椽の兩人の事蹟は詳かでない。右は孰れも都三中の傳へしと云はるゝ一中節系圖に憑據したるものなるべしと雖も疑はし。尙攷ふべき也。

豊後節禁ぜらる

豊後の曲風、時人の
批評

宮古路豊後が江戸に下つたのは享保十五年にして、初めは葺屋町川岸の小芝居(播磨座)にて勤め、浄瑠璃は玉椿名古屋心中なり十九年に堺町の中村座に出勤し、江戸人をして其の濃艶臭々の聲調流風に驚かしめたのでありし。

元文四年豊後の浄瑠璃は禁止された。『江戸節根元記』には、禁止の理由を、宮古路の曲節流行りて色事駈落の數を増したるに由ると傳へて居る。

時の識者の眼に映じた豊後の曲風は、左の如くである。

寛文延寶の比迄の浄瑠璃は、皆昔物語を演せし故に、詞やさしく綴りなして、あはれにをかしきことも多かり、淫聲と云ひながら、忠臣孝子義士節婦のことを云へれば、愚なる小人女子も是を聞きて感じあへり。元祿の比より、稍ますく俗に近くなりて、淫靡の聲多し。寶永の頃、京の浄瑠璃師、江戸に來りて、鄙俚猥褻なる浄瑠璃を唱へしより、江戸の人は、是を面白きことと思ひて、興じけるに、享保の初に、また難波の浄瑠璃師來りて、かなたなる俗調を、弘めしほどに、江戸の人のいよいよ是を好みて、江戸の舊き浄瑠璃を捨て、ひたすらに京難波の浄瑠璃を習ふ。賤者の上に非らず、士大夫諸侯迄も是を好みて一節を學ぶ人あり。是に至りて、昔物語を捨て、たゞ今の世の賤者の淫奔せし事を語る。其の詞の鄙俚猥褻なること云ふばかりなし。士大夫の聞くべきことにあらざるは云ふに及ばず、親子兄弟なみ居たる所にては、面をそむけて耳をおほふべき事なり。されば、此の浄瑠璃盛に行はれて、よりこの方、江戸の男女淫奔すること、數を知らず、元文の年に

及びては、士太夫の族は云ふに及ばず、貴き官人の中にも人の女に通じ、或は妻をぬすまれ、親族の中にて姦通するたぐひいくらと云ふ數を知らず。是まさしく淫樂の禍なり。『獨語』

淨瑠璃は江戸京難波のみに非らず、遠國のいなかにも其の所の風ありて、一節かはりたることさましくなり。其の中に江戸の淨瑠璃は、本より武家の好みに合せたる故に、詞も節もいさめるやうにてつよみあり、京難波の淨瑠璃は、聲哀しくふるひてよわげ多し。さりながら元祿より以前は、何方の淨瑠璃も皆昔物語なりしほどに、詞がらさのみいやしからざりき。其の後はたゞ今の世の新しきことを語り出だせる故に、詞甚いやしくなりぬれば、聲も節もつれていやしくなり、淺ましくなれり。されども土地の風俗同じからねば、江戸の人京難波の淨瑠璃を聞きては、頭をそむけ耳を掩ひて聞くべきことにもせざりしに、實永の比、京より一中と云ふ淨瑠璃師來りて、京の淨瑠璃を弘めしより、江戸の人や、是をよろこびあへりしに、享保の初に、又難波より竹本と云ふ淨瑠璃師來りて、難波の淨瑠璃を弘む。是より江戸の人、貴きも賤しきも、難波の淨瑠璃を好みあへりしに、其の後、又都路と云ふ淨瑠璃師難波より來りて、悲しき聲にて、いやしき諺の淺ましぐとりみだしたることどもを語り出だすほどに、江戸の人、又是に移りて、興じもてはやすこと限なし。下さまの人は云ふに及ばず、諸侯貴人雲の上なるやんごとなき人にも、ひたすら是を好みて、歳の初めにも、吉事ありて目出度をりから壽

きあへる座敷にも、哀に悲しき聲にてうるはしきことどもを語りつづくるを、をかして聞きていまはしどもおもはず、日を暮し夜を明してあかすきくめり。淨瑠璃師、目くら法師などの語るを聞くだに、淺ましとみるに、士君子のさもいやしからぬ人ごもの、此の一ふしを習ひて、はれやかなる所にて、はぢ顔もなく聲打ちあげて語るものありとかや。此の比に及びては、江戸の人ひとへに京難波の淨瑠璃をのみ悦びて、江戸の淨瑠璃をばまた聞くべき物ともせず。世の風俗は民の好惡に従ひて移り易はるものなれども、三十年の内に江戸の人のすきくらひ、寒暑の如くに易はれるは他の故に非らず、これ全く淫樂の力なり。雅樂の風俗を善くするよりも、淫樂の風俗を悪しくする、其のしるし最速なり。和漢古今の風俗の中に、今の三線、淨瑠璃ほどの淫聲、又有るべしどもおもはれず。世の末とは云ひながら、淺ましく悲しき風俗ならずや。「獨語」

いまの豊後節といふ文句を聞けば、好色に主親を倒し、或は金銀を盗みとり、果ては心中して親になげきを掛くるを手柄とす。さるに因り聲音を聞くに一としていまくしからざるはなし。云々 「昔々物語」

豊後ぶしの淨瑠璃は翁が生れたる元文三年頃より流行いでたりと云へり、延享の頃は類に流行て、しかも今の如き高上風流に作りたる文句にはあらず、ひらたき事のみをいひつづけたる文句なり。云々 豊後ぶしを語る遊女の京より吉原へ下りて、殊の外流行て、萬客晝夜を争ひたりといふことを、子供の時間たり、翁がつづき

がらなりける永井丹波守京都の町奉行被仰付て、理運なる人なりしかば、我等奉行にて、京都に登りたらば、豊後ぶしを停止さすべしとて、腕をさすりて登られけるが、時勢につれて、制しがたきことなりけるにや、次第に流行て、其の弊淫奔相對死なども多かりけり。

其の比は、心中にて相對死も稀には有けり、殊に大坂にはいにしへより多しといへり、されば豊後ぶしの心中を作りたる淨瑠璃は、大抵京大坂のことなり、江戸には稀に有けり、今は御制法の行届たるにや、又は人のさがしく成りたるにや、かゝることもなし。

義太夫節は、有廟の御代より流行出しといへり、されば豊後ぶしの流弊、次第に淫風に移りて、遊士俗人の風俗、あらぬものに成行て、髪も文金風とてわけの腰を突立、元結多く巻て、卷鬢とて鬢の毛を下より上へかきあげ、月代のきはにて巻こみてゆひたり、衣類對の羽織を著、長さひもを先にちひさく結び、下駄の齒にかゝるやうにして、腰の物は落しざしにさし、懷手にして駒下駄はきて、市中をぶらりぶらりと歩行たり。云々

「賤のをだ巻」

私も今十七八の娘を持て居ますが、娘が十歳計りの時分に、噂がいふには、女の子のありつきは無面目では行かず、縫針は勿論なり、しつけ方、手習琴、三味線とこねば第一御奉公の口がないと云ふ故、そんなら半太夫節習はせうといへば、かゝる云ふには、今は兎角豊後節でなければ御奉公の口が遠く、此頃も半太夫節語る女の

子と、豊後節語る女の子と一所にさる所へ目見ねに行きしに、豊後節語る女子は其日にすんで、半太夫節語る子は目見ねもせず返へされたりなどといふ故、何にもせよ、早く能い衆の中をも見せたいと思ふて、近所の師匠へあげて豊後節を習はせるうち、十四五になるとほんに血で血を洗ふやうなれど、懺悔の爲めに話しませう、つひ近所の息子とちよくり合ひ、いつかはらみし故、どうしてくれふかと思ふたれど、親の慈悲でまた了簡して見れば、おれが豊後節をならはせたがわらかつたとあきらめ、もふ奉公にも出されず、今まで錢かけて習はせたがなんにもやくにも立たず、これほどばかな目に遇ふたことはござらぬ。云々 『淨瑠璃三國志』

如何に當時の豊後節が、主として男女の情事を語り、いかゞはしき曲風のものでありしかゞ想はるゝのである。

されど餘りに透徹せざる觀察である

されど色事、駈落の數が増したりとて、之を以て一に豊後節流行の罪なりとするのは、餘りに時代風潮の傾向を察せざる透徹せざる觀察である。儒學者一流の偏固な、獨斷的な見解である。

豊後節の流行によりて色事、駈落の數を増したと云ふ事は事實なるべし。時代風潮をしてますゝ悪化し、蕩化したと云ふ事も亦事實なるべし。されど零を十にしたのではない、三を七にし、五を七にした位のものに過ぎないのである。永井丹波守が京都の町奉行を拜した時、斷乎として豊後節撲滅の方針を執り、非常の意氣込みを以て之れに臨みしと雖、時代の風潮は如何ともなしがたく、遂に沙汰止みとなつて了つたと云

畢竟時代風潮の變遷である

豊後の遺鉢を傳へて
更に大成した常盤津
文字太夫

幾分改良せられた豊後節

はれて居るのに照して見ても、蓋し思ひ半に過ぐべきである。

淨瑠璃禁止後豊後は江戸を退き、京都に上り、寛保の末に江戸に歸り、延享元年に病歿した。一説には、彼自身淨瑠璃の文句を實地で行き、某女と契り、遂に情死して逝いたのだとも云はれて居る。果して然らば彼の爲人も大概想察すべし。

豊後節は禁止せられ、豊後は死んだが、其のどろりにやりとした曲風は、彼が門下の秀才文字太夫、小文字太夫、加賀太夫、繁太夫、蘭八等に依つて紹述舖陳せられ、倏忽にして江戸の全市を掩ふて流行を盛んにするに至り、果は在來江戸節各派を壓して獨り其の威を擅にするに至つたのでありし。

豊後の遺鉢を傳へて更に之れを大成し、隆々の盛名を成したのは宮古路文字太夫である。豊後の實子なりとも云ひ、又は門人にして後ち其の養子となりたるものなりとも云はる。後説眞なる可し。京都寺町に生れ、駿河屋文右衛門と云ひ、位牌を商ふて渡世としたりし。元文の初め江戸に下り中橋のほとりに住した。初め宮古路文字太夫と稱す。師豊後椽の曲節禁せられたるより一派を創め、關東文字太夫と改名したが、關東の二字不敬なりとて蓋し當時關東なる稱呼は、幕府が京都朝廷に對して用ゐられる所なりしに由る。差止められ、再び常盤津文字太夫と改めた。想ふに其の住居の常盤橋に近かりしより考へ付きたるものなるべし。師豊後の淨瑠璃禁止の嚴命を蒙りたるに鑑み、章句や曲譜に注意を加へたるものと覺ほしく、『賤の小田卷』には「豊後節も次第に高尚になり、文句も昔よりは、風流にかざりて、芝居の所作出語といへば、何時も常盤津文字太夫とて、男もよく、聲もよく、上手にて、其の狂言當り多し、云々」と云つて居る。元文

文字太夫の流系

元年市村座『小夜中山淺間嶽』の淨瑠璃の時に出席したるを初めとし、此の淨瑠璃中途にて差止めらる爾來市村、中村の兩座に出で、語り、市中の人氣を沸かして居たのであるが、安永四年中村座にて『樹花戀浮船』を語りたるを最後とし、其の後は引退して芝居に出でず、天明元年二月朔日歿した。麻布廣尾の祥雲寺に葬る。爾來彼の流れは連綿として絶えず、二代目文字太夫後、文三代目小文字太夫後、文字四代目文字太夫後、豊後五代目小文字太夫、六代目小文字太夫明治十九年故ありて離縁とな七代目小文字太夫通稱常岡丑五郎、初め三絃彈なりしが、十一年常盤津の養子となつて相續す。と相承け、今日に及んで居るのである。

『江戸節根元記』には、

京都宮小路國太夫節、芝居にて今に捨らずはやりしなり、弟子に文吾といふものあり、元文中東都へ下り、宮小路豊後太夫と名乗、三絃相方鳥羽屋三右衛門、佐々木市藏、三線手付は三右衛門なり、國太夫節の三絃は甚せはしく、東都にむき兼し故、子供にも能彈るゝように手を付替しなり、其の後加賀太夫、數馬太夫、杯とて同門あり、ワキを語り彌々はやりしが、所々にて色事心中、脱落もの等數多有之ゆゑ、豊後節御停止御觸被、仰出御法度に相成止みけり、其の年中國邊米相場兩に八斗二升の相場なり、落首に

豊後米八斗二升と觸られて、菰をかむるか宮小路きめら

と云し事あり、其の頃豊後米八斗二升、この外世の中つまり困窮のもの多くありしと、老人云傳しなり、夫故久々打絶しが、後に京都寺町位牌屋文右衛門といふ

もの、義太夫節を能語り、江戸へ下り名を上んどおもへども、名人共數多有之、中々渡世には難相成とおもひ居る處に、上方より一中と云者文右衛門を尋來る、其の時文右衛門は手跡指南して暮しける、同居して一中にかの節を習ひ、晝夜のわかちなく能稽古し、至て懇望にて語り覺わしが、音聲はよし、夫より工風して佐々木市藏を相方にし、義太夫、一中、豊後、押交て語る、是中、興豊後節の祖なり、近比の名人なり、夫より又はやりて、ワキ語り志津摩太夫造酒太夫など、其の頃は常盤橋邊に住居いたすゆゑ、常盤津文字太夫と名乗しなり、此の節芝居にて道行其の外所作事に能合し故、今に繁昌なり、今の豊後節かたりは勝手次第の名字をつく、常盤津富本豊名賀吾妻元はみな宮小路なり、是を名乗らぬは御觸を恐しか、三絃も元は佐々木なれども、今は色々様々の事を名乗、取極りなき流義なり。

と云つて居る。

文字太夫と相竝んで
盛名を馳せた富本
前椽

豊後の直系なりとするの説

常盤津文字太夫と相竝んで盛名を馳せ、別に富本の一派を成し、其の流れよりは更に清元の一派を出し、現代江戸節淨瑠璃盛隆の基礎を築いた偉人に富本豊前椽がある。宮古路豊後の直弟にして、師豊後の江戸構となれる時は、随ふて京都に上ぼり、始終隨身して教を受け、寛保の末師に伴ふて江戸に歸り、病床に侍して死水までも取り、歿後直に一流を創め、常盤津節の創始に先だつ事四年、既に富本の一派を成して居るのであつて、入門の年月は若く、文字太夫は兄弟子、彼は弟弟子たるの關係には在りしと雖も、師豊後に就いて學びたる年月は却て長く、押しも押されもせぬ豊後直門の偉才である。從來

文字太夫の門下より出たこと
するの説

一般の傳説に依れば、彼を文字太夫の門下生とし、初め品太夫と云ひ、文字太夫が宮古路と稱した頃よりの門弟にして、常盤津と改むるに至つて彼も亦常盤津小文字太夫と改め、後ち別れて富本の一派を成したものだと言ひ、『常盤津年表』元祖宮古路より三代には、目家元迄の日記也に、彼が初名品太夫の名で芝居に出たのは延享元年中村座の『駒鳥戀關札』の淨瑠璃の時にして、富士松節を始めた加賀太夫と文字太夫とは一日替りのシテを勤め、文字太夫のツレは志妻太夫品太夫の兩人、加賀太夫のツレは敦賀太夫佐賀太夫の兩人にて勤めたこと記し、同年八月朔日初日の、中村座『浮名の毛氈』の淨瑠璃には、小文字太夫と改名し、前同様志妻太夫と共に文字太夫のツレを勤めたこと記して居る。果して此の記事にして謬りなしとすれば、文字太夫に因んだ小文字太夫にして、師豊後の歿後一旦文字太夫の弟子となり、爰に小文字の名乗りを稱するに至り、寛延元年九月常盤津を去り『常盤津年表』には、淨瑠璃の興行の條に、「此の淨瑠璃は、過て小文字太夫破門さる」とあり夫れより富本の一派を稱したるものとも見るべし。小文字太夫の名乗りが永く常盤津に残り、富本には之れを名乗りたる者なし代々の家元は、必ず一たびは其名を侵して居ると云ふ點から考へて見れば、一度は常盤津系の一人として、文字太夫の門下に立ちたることもありたるべき歟、尙致ふべし。本名は福田彈司。通稱伴と云ひし。如し。松平伊豆守の家人なりしと云はれて居る。彈司など云へるしかつめらしき名乗の附け方等より考へ見れば、武家出の人物なりしなるべし。初め豊志太夫、次で豊前太夫と名乗る。椽號を鷹司關白より受領し、淺草竝木即ち今の日本橋區元柳町なりに芝居を創め、當時富本豊志太夫を名乗る。晩年に至り受領の椽號を用ひ、豊前椽と稱した。寛延二年正月雲州南海

一度は常盤津系の一員として其門下に立ちたる事もあるが如し
豊前の略歴

富本の流系

侯より、其の作『年朝賀例壽』の稿本と、目錄二千匹を賜はりしより、富本節の流れにては此曲を以て床を開くを例とし、淨瑠璃の末段に「國に羽を伸す鶴の丸」の文句あるより、家元に限り「鶴の丸」を替紋したと云はる。明和元年十月四十九歳にして歿。彼の系統は、二代目豊前椽、初代の實子、初め豊志太夫にて相續し、文化十四年十一月、嵯峨御所志太夫、二代目の養子也。文政八年初舞臺明治十三年七十二歳にて歿。四代目豊前椽、三代目の長男也、富本本系に於て最も優れたる語り人なり。五代目豊志太夫、早世、六代目豊前椽、四代目豊前椽の再度の繼承なり。七代目豊前太夫、本名は榎本清八、先代の家に寄寓し居たりし縁故により、七代目を相續す。初め豊志太夫と相承けて今日に及んで居るのである。

富本四代豊前椽は三代目の長男である。本名保太郎。初め豊紫太夫と稱し、天保十四年初舞臺、嘉永五年正月椽號受領。一旦長子玉次郎に譲り五代目となしたるも、早世せしかば、再び芝居に出づることとなり、歸り新參の舞臺には、五代目尾上菊五郎の口上にて『田面雁露手枕』の淨瑠璃を出した。座新富義太夫節に於ける攝津大椽と並び稱せらるる程の近代の名人にして、相應に文才もあり、自作の稿本にして世に公にせられざるものも少からずと云はる。

富本より出でゝ更に一派を爲した清元節
初代齋宮太夫

富本より出でゝ更に一派を爲した清元節の流祖は、豊前椽の高弟齋宮太夫の門人、二代目齋宮太夫である。初代齋宮太夫は筑前の藩士にして、浪人して清水屋太兵衛と稱す。師に優れたる名人にして、富元二代豊志太夫の後見にまで推された程の伎倆なりしも、富本二代も亦なかゝの語り人なりしより、家元を續ぐに至らず、後年延壽齋と號し、其後宗家と不和となりたるが如く、獨立して芝居を勤め、享和二年七十三歳にして歿した。此人を以て清元初代と起算するものもある。

二代目齋宮太夫

二代目 齋宮太夫は日本橋横山町の茶舗岡村藤兵衛の倅にして通稱吉五郎。師の齋宮

清元と稱し延壽太夫と名乗る

太夫が獨立して芝居を勤むることとなりたる頃より暫く藝籍を退き、古著渡世を業とせしが、文政九年、中村歌右衛門登阪の名殘狂言の際強ひての所望により再び出座し、豊後路清海太夫の名にて勤め、なか／＼の評判にして、江戸開關以來未曾有と云はるゝ程の大入を取りしより、一流を創めんと志し、師の本姓を取つて清水清海太夫と名乗りたりしに、清水と名乗る事不都合なりとて、當時飛ぶ鳥をも落すばかりの勢ひありし清水家より故障出て、奉行より差止めとなり、清水の一字と富本の一字とを取り、本を元に代へて清元と稱し、師の齋號なる延壽の二字を借り、清元延壽太夫と名乗るに至つたのであつた。實に文化十一年の十一月である。文政七年其の名を長男巳佐次郎に譲り、剃髮して二世延壽齋と改む。翌八年五月中村座にて大切淨瑠璃を勤め、相變らずの好評を博して居たのであつたが、一日何者とも知れず、彼の歸途を擁して刺殺した。當時此の兇行者は、延壽齋の聲望を嫉んだ富本一派の所業なるべしと取沙汰されて居た。「いつきなら突かるゝ事もあるまじにこは前生の因延壽齋」とは其時の落首である。

清元の流系

清元の流れは、二代目延壽太夫、初代人三代目延壽太夫、二代目の長男也四代目延壽太夫、戸今の材木商町田繁次郎也。なか／＼の名人にして、希望とあれば、椽號の受領を拜すること、容易の事なりしならんも、此等虚榮的な稱號など全く眼中に無く、初代延壽齋の通稱を藉りて「太兵衛」と名乗り得たりしほごの拙者也、されば一回だも芝居などに出勤したることなかりしか、五代目延壽太夫、明治に其の盛名は聲曲界に響きたりし。安政二年九月歿した。藝界の異人である。六代目延壽太夫、横濱富貴樓お倉の義理の子にして、俳優尾上菊之助の兄に當れり、所望と相承け今日に及んで居るのであるが、中にも五代目延壽太夫は、初代以來の語り人なりと稱せらる。

五代目延壽太夫

宮古路加賀太夫の創
めた富士松節

富士松より別れた鶴
賀節、其の祖若狹椽

清元五代延壽太夫は谷中、三河屋と云へる質屋の長子にして、齋藤源之助と云つた。生家は江戸屈指の舊家にして、上店、下店の二つに別れ、何不足なき身代なりしも、源之助は舌切心中の仕損まで演じたる程の放蕩者にして、さる口利きの仲介により、家元に養子の談しを持掛け、三代目の未亡人お磯と娘のお葉の兩人にて、或る會席茶屋にて試演を聴くこととなりしが、生來の美音とて首尾能く及第し、遂に五代目と相續するに至つた。舌切心中の仕損じより、舌捌には多少の申分ありたりしと雖、生來の美音と熟達せる伎倆とにより、獨吟にて舞臺を引き占むるほどの名人なりし。明治三十七年七十二歳にて歿。

常盤津、富本、清元の三派は、世に豊後三流と呼ばれて居るのであるが、此等三流の外に、宮古路豊後の直系を引いたものに、富士松節がある。豊後の高弟宮古路加賀太夫の創めたものにして、延享四年受領して富士松薩摩椽と號した。薩摩椽の系統よりは、別に鶴賀節の一派を成した鶴賀若狹椽が出て居る。

鶴賀節の流祖鶴賀若狹椽は、其師薩摩椽が未だ宮古路加賀太夫と名乗りし比よりの門人にして、初め宮古路敦賀太夫と云ひ、次で富士松敦賀太夫と云つた。一派を立つるに方り朝日敦賀太夫と名乗つたが、朝日の二字差停められたるより鶴賀と改めた。寶曆八年受領して若狹椽と稱し、退隱後は鶴翁と號した。天明六年年七十にして歿。狂歌に堪能にして雅號を大木戸の黒牛と云い、其女二人孰れも淨瑠璃に秀で、長女おこんは二代を繼ぎ、妹おぎんは三代目を相續した。

富士松本派は、二代目吟太夫流祖薩摩の長子なり三代目吟中二代目の養子なりと相承したが、二代、三代共にさまでの語り人にはあらずりし如く、暫く中絶した。然るに別派鶴賀派の祖若狭椽の妻女鶴老の弟子、加賀八太夫なる者、若狭の長女おこん鶴賀二代目鶴吉也と通じ家を逐はれたるより、中絶せる富士松本派を繼承し、四代目加賀太夫となつた。爾來五代目富士太夫四代目の長子により、五代目と相續した。伎倆才氣ともに優れたる人なりしと云はる。六代目島太夫四代目の長子にて薩摩に隠れて居たが、江戸に歸つて後六代目と相續した。七代目加賀太夫と相承け、今に及んだのであるが、七代目加賀太夫は、其の伎其の聲ともに優れ、義太夫節浄瑠璃に於ける越路太夫攝津大椽ほどの名人にして、林中常盤津七代目の家元たりし人豊前椽富本四代及び六代目の家元たりし人と併せ稱して、明治時代の唄浄瑠璃の三名人と云はれて居る。

七代目加賀太夫

富士松七代、加賀太夫は、本名小林平八郎、戊辰の役にも出征し、治定後、大警視川路利良氏の邸に寄食し、巡查となり、外泊して芝口三丁目の某の家に二階住居をして居た。然るに隣家は新内語りの太夫賀志太夫にして、壁越しに聞ゆる妙艶の調子にも云はれざるより、明鳥の稽古本一冊を買求め來り、月謝入らずの壁越稽古を始めたのがそも、斯道に入るの因縁にして、どうなりかうなり語れるやうな氣持になりしより、むづ／＼咽を鳴らして居る中、或る日偶、芝森本座にて、外題は『明鳥』市川市二郎後團の浦里に嵐桂木の時次郎、扇遊は市川團昇と云ふ顔振にて興行中のところに通りかかり、思はず語つて見たくて堪らなくなり、早速座主に面談し、「此の浄瑠璃是非にも自己に語らせよ」と蔵から棒の談判を開始した。座主も呆れ果てたが相手は警官なり、無碍にも斷り切れず、師匠は誰れ太夫名は何と申すぞと尋れて見れば、名もなければ師匠もなし、月謝入らずの壁越稽古なりとの偽らざる話しなれば、殆ど當惑し、宛に角咽前を拜見しての上と體能く逃げを張り、一段語らせて試たるに案外の出来にして、役者の方も納まれば、座主も大悦びにて、早速志賀太夫に紹介して正式の稽古を附けさせ

鶴賀派の流系

鶴賀新内

る事になり、磨をかけて出演したるに、大當り大評判にして、明治九年志賀太夫も見込を付けて稽古を勵み、後には志賀太夫自身紹介して家元稽古をなした。爾來伎倆はめき／＼と上達し、明治十七年富元四代目の懸望により、五代目菊五郎の媒介にて養子となり、豊紫太夫と名乗りしも、幾くならずして離縁し、二十九年富士松に復歸し、初めは上州横濱等の旅芝居をも勤め來り、夫れより東都の大小劇場に出座し、得意の喉を聞かせて江戸淨瑠璃の第一人と云はるゝに至つたと傳へられて居る。

富士松別派の鶴賀派は、二代目鶴吉富士松四代目となりし加賀八太夫と契り家を妹お三代目

鶴吉二代目の妹おさん也四代目若狹太夫三代之弟五代目若狹太夫四代之長子六代目祖元七代目新内代

目の實子也明治三十九年家元となると相承けて居るのであるが、初代若狹太夫の門人に鶴賀新内あり、此の人

の特色ある語り風には一種不可言の妙味あり、今に其の曲風を遺し、世人おしなべて鶴賀節と云はず、新内節又は鶴賀新内節と呼び慣はすやうになつたのも、畢竟此人出で、鶴賀本傳の曲風に一大變化を來たさしめたるよりの事にして、新内は家元を繼かず、傍系の儘に終つたのであるが、鶴賀節に在つては、第二の流祖とも云ふべきほどの人である。

『聲曲類纂』には、

鶴賀新内 富士松薩摩が門人なり本所松倉町に住す、本姓故有て略す、一派をなして新内節と稱し、

世に賞せらる。若狹、椽が門弟にあらすといへども、其頃新内が一流行るゝ事盛なりしかば、家名を鶴賀と改めくれなば我家門の繁昌ともならんと若狹椽が望によりてもだしがたく、則鶴賀と改るといふ。安永三年甲午八月六十一歳にして病て終れり。男を加賀と云後に加賀八太夫とあらたむ。初代新内が門人加

賀歳、二代の鶴賀新内となる。盲人にして本所 四つ目に住す。これが門人又初名を加賀歳といひ、又鶴吉にも學び島太夫と號しけるが、後三代の新内なり。淺草駒形に住し通稱吉右衛門。當世盛に行る。若狹椽は芝居に出る事度々なりしが、新内節にて所作を催し歌舞伎芝居へ出る事は新内よりほじまれりと記し、又鶴賀系圖を左の如くに記して居る、別説として致ふべし。

富士松 薩摩椽 始宮古路賀太夫

鶴賀若狹椽 始宮古路賀賀太夫、後富士松と改、復朝日又鶴賀と改

鶴賀吉 一女、心事 堀上町四丁目又本石町四丁目に住

鶴賀鶴吉 つる吉風つち事

鶴賀齋 始照太夫

鶴賀加賀八太夫 寶曆の頃の人、初代新内也 芝居へも出る

鶴賀加賀八太夫 加賀八太夫男 始加賀吉 系圖に二代新内とあれども新内と改めしことなしと云

鶴賀新内 二代 始加賀歳又若歳と云、盲人にして鶴賀齋の弟也 元鳥越又本所四ツ目に住す、文化七年七月終る

鶴賀新内 三代 通稱彦次郎後吉右衛門、始加賀歳太夫又島太夫、加賀八太夫、後豐名賀蘭太夫或は都路加賀太夫又豐名賀出雲椽又鶴賀出雲太夫等數度變名す

新内を以て初めより若狭様の門弟なりとするの説は、

若狭一日芝の赤羽橋を通りかゝりしに、大蓋をかぶり扇を持ち、謠を流しつゝ行く尾羽打ち枯らせる浪人者あり、其の聲に聴きどころありければ、呼止めて聞くに越前敦賀の浪人なりと云ふ。敦賀と云へば自己の初名でもあり、さうやら不思議の因縁なるかのやうにも思はれ、其の聲にて淨瑠璃を語つて見る氣はないかと聴けば、如何やうとも可然との答である。悦び連れ歸つて稽古を付けて見るに、少しく鼻にはかくれども、そのかゝり工合にゆも云はれぬ妙所あり、生來の美音なれば、若狭も懸命になれば本人も本氣となり、追ひくりに上達して、師若狭をも凌ぐほどの伎倆となり、本名の新内を取りて其の儘名乗りとし、爾來新内くとして評判次第に高くなり、はては世人をして、鶴賀節の淨瑠璃をばおしなべて「新内節」と稱し、鼻にかゝられば「新内節」ではないかの如く考へさせるまでに、流行を作るに至つたものだと云ふのである。

されど斯程の評判を取つて居たにも係らず、芝居には出勤したることなきが如し。
『聲曲類纂』には「芝居へも出る」と附記せるも、出勤の事蹟の徵すべきも無し。そは想ふに彼の流風が、柔婉裊々纏綿として竭きつさるの妙所はありしと雖も、歌舞伎所作事の相手としてはひたと調和せざるの嫌ありしに由るものならん歟。

其他宮古路豊後の直系としては繁太夫がある。宮古路蘭八がある。繁太夫の曲風は餘りに振はざりしと雖も、蘭八號鳳軒は蘭八節を起し、寶曆明和の頃盛んに行はれた。門人清八、宮蘭千枝と名乗り、別に宮蘭の一派を立てたが、其の歿後中絶した。文政の頃宮蘭千之出で、之を再興し、今は僅かに一部の愛好者の間に、其の遺風の玩賞せらるゝに過ぎざるのみ。

繁太夫と蘭八

豊後節以外の各派

江戸後半期の淨瑠璃にして、豊後節系以外の各派には、一中節がある。河東節がある。大薩摩節がある。

一中節

一中節は宮古路豊後の師代都太夫一中の流風にして、初めて江戸に入ったのは正徳四年である。此年一中京より下り、五月市村座に出勤し、『萬歳女鉢木』を語り、大當りを取つたと云はれて居る。『戯場年表』されど此に所云一中は、果して初代一中なるか、將又一中の子若太夫二代目千中也にして、假りに父の名を冒して一中と稱し居たりしものには非ざる歟疑なしとせず。享保十九年には秀太夫千中、金太夫三中等中村座に出勤し、『風流相生獅子』を語つて居る。されば山本土佐角太夫の系統を引いた京淨瑠璃の、江戸に入った先驅は一中節にして、夫れより約十六年を過ぎて、豊後節が江戸に入ったのである。

元祖一中

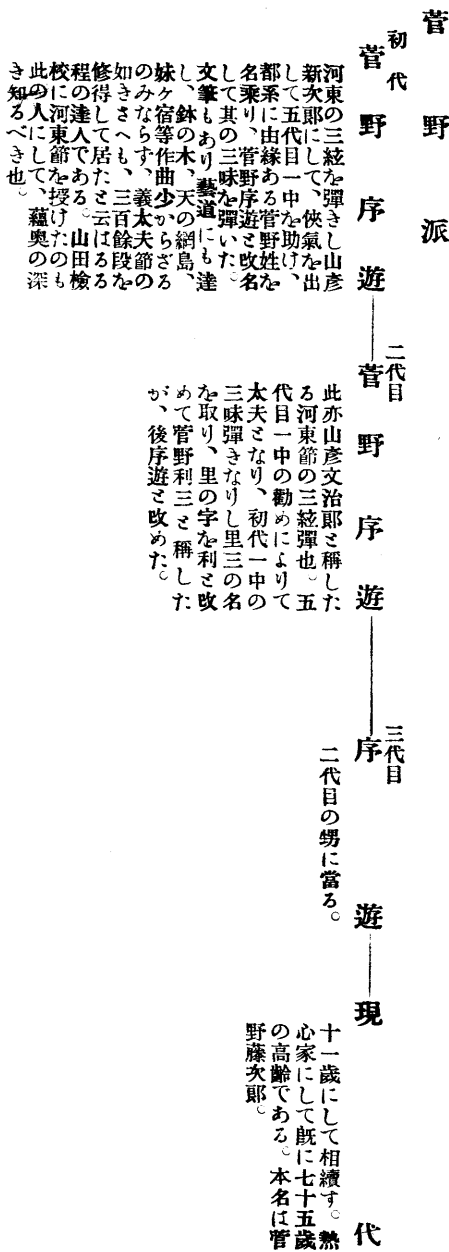
一中節の元祖一中は山本土佐角太夫の直門なりとも云ひ、土佐―伊藤出羽―岡本文彌―都越後都萬太夫座の主と相承け、都一中に至つたものだとも傳へられ、土佐の高弟岡本文彌の直門にして、土佐―文彌―都一中と相承したものだとも稱せられて居る。都三中の傳へ系圖は前に之を掲げた。彼が都の姓を名乗れるより推せば、何等か都越後に關係ありしものとは想察せらるゝのであるが、師弟の關係ありしものとは受取り難し。恐くは越後の經營せる都萬太夫座に入り、淨瑠璃をも勤めたることありしより、夫れに因んで都の姓をも名乗るに至りたるものなるべき歟。伊藤出羽椽を土佐直系の一員とするは、豊後節各派の系統圖に於て散見する所なるも、這も亦俄かに信じ難し。されば茲には姑く土佐―一中と直に相承け傳來せるものとして考證し置き、更に他日の研究に譲ることゝした。

一中節の流系

菅野派と宇治派

一中の流れは二代目千中、初代一中の嫡子初め若太三代目千中、二代目の實子初め一中四代目金太夫三中、二代目の聲にして、初め三代目を相續する著なりしも、二代の實子秀太夫相續の事さなりし、再代目を相續し問もなく其の居を京都に復歸し、四代目一中、菅野序遊本名山彦新次郎を頼りて京都より名聲を高め非凡なる美聲を微妙なる節廻しにより満都の人氣を沸騰せしめ、六代目一中七代目三中、四代目金太夫八代目一中、七代目の甥に九代目一中、八代目の父なり仙助と云へり八代目十代目一中、伊藤模太郎十四歳と相承けて今日に及んで居るのである。

一中節に菅野派と宇治派との別派がある。今之れを表示すれば左の如し。



宇治派

江戸村木町の名主勝田權左衛門の創めたものである。權左衛門日ごろ一中節を愛好し隠居して

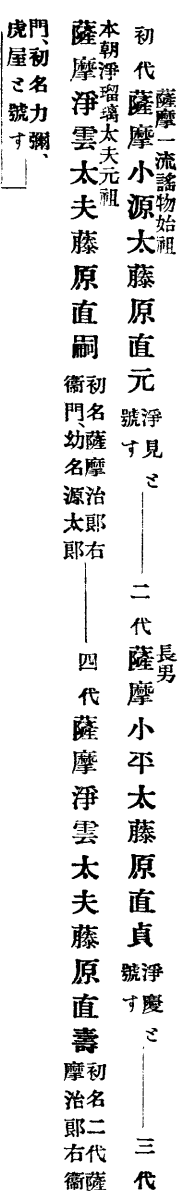
都一閑齋と稱し、其の妻に一靜、性は倭中と云ひ、一家孰れも一中節の肩入れ黨であつた。後ら一中節固有の節調に加味するに、宇治嘉太夫の藝風を以てし、一中節宇治派の一派を爲すに至つたのであつて、嘉太夫の宇治姓に因み、派名を選んだのである。

大薩摩節と河東節

大薩摩節の系統

大薩摩節と河東節とは、江戸生へ抜き純江戸節浄瑠璃の兩派にして、豊後系各派の浄瑠璃が倏忽隆々の勢を成し、盛んなる流行を作るに至るや、さらでだに氣息奄々の状に在りし在來江戸節浄瑠璃の各派は、概ね屏息し、敗滅したのであつたが、此の窮地を凌いで名節を完ふし、關西よたゝ派の浄瑠璃と對立し、生粹の江戸節浄瑠璃として其の氣を吐いたものは、僅かに、河東、大薩摩の兩派あるのみであつた。

大薩摩節の系統は、今確には考へ難し。大薩摩 軒屋系圖には左の如くに記して居る。



○五代 薩摩外記大椽藤原直政 初名兼太郎 惣右衛門又薩摩太夫

浄瑠璃の元祖浄雲の門弟惣右衛門後薩摩太夫と改め京都に於て操座を興行す正保元甲申年後光明院棟御叡覽の時外記大椽の授領を賜ふ番組世續物語業平小舞星合右三番也

初代 都 一 閑齋 二代目 宇治紫文齋 三代目 紫文齋 現代 倭文

初代の實子也。

初代の妻倭文(初め一靜)の門人紫文である、相續して紫文齋と改めた。三代目の孫きく女である

其の後江戸に下り四代淨雲太夫の跡を嗣延寶年中に操座を再興す三絃勘五郎六左衛門
出勤す亦同年右座に於て男歌舞伎を興行す中村座の役者出勤す長門太夫甥也正徳六丙
十一日大火の爲
死行年四十五歳

延寶座組帳

太夫 薩摩外記大椽藤原直政

ワキ 薩摩左内

ソキ 薩摩文五郎

小舞 多門庄左衛門

シテ 猿若 山左衛門(名古屋云)

ワキ 猿若 三作

諸物 吾妻海道下り

諸物 烏帽子折

以上

三 杵屋勘五郎
絃 同 六左衛門

ワキ 與 惣

ワキ 五郎

奴 丹前
山崎二段

○六代大薩摩外記藤原直勝

初名 薩摩文五郎 水戸産 柳屋芝源助

正徳二壬辰年操座を再興す故有て右代より大薩摩と改め紋所クツツを矢車と改む四五
年にして休座致し歌舞伎座へ出勤す此の頃市川團十郎始めて矢の根五郎を興行す右を
主膳太夫名前にて相勤む三味線七代目杵屋喜三郎節附して是を彈亦享保八癸卯年二月
元祖中村勘三郎百年忌の壽狂言興行に付市川團十郎泰平の綱引と云狂言を勤む右を大
薩摩外記藤原直勝名前にて勤む三絃六代目杵屋喜三郎作して 彈寶曆九己卯年
五月八日歿ス

○七代大薩摩朝日太夫

二代目主膳ナリ 幼名 大薩摩文五郎主膳 文五郎

寶曆元年太夫となり父と俱に歌舞伎座へ出勤す

七代目羽左衛門弟茂兵衛とも云
安永六年六月十六日歿す行年四十九歳

○八代大薩摩主膳太夫

初名大薩摩文太夫

歌舞伎座へ出勤す市村羽左衛門鞭櫻字佐幣と云所作を勤む長唄富士田吉次と掛合に語
る三絃西川億藏彈亦我背子戀相槌と云所作を長唄富士田音藏と掛合に語る三絃杵屋佐

吉弾又長歌吉次門弟富士田新藏と云者大薩摩淨瑠璃を懇望にて唄謡ひを止め門弟さなる猶又懇望に依て文太夫名前を譲り遣す所故有て後年源太夫と改む享和元年五月二十六日歿ス

- 八代主膳門弟
- 二代目大薩摩文太夫 後年源太夫 俗稱富士田新藏
- 三代目大薩摩文太夫 後年主膳太夫 富士田勘右衛門

若太夫岩松 寶曆三年癸酉年七月五日歿ス。

○九代大薩摩主鈴

兩人共歌舞伎座へ出勤す又嗣子なきに依り門弟七代目中村八兵衛を以て嗣

○十代大薩摩主鈴 俗稱中村八兵衛

九代主鈴の門弟江戸四日市一丁目肴商人七代目中村八兵衛師匠主鈴嗣子なきに依て右八兵衛薩摩家系圖本等を相譲り薩摩家元相續の儀を頼に依り同人引請菩提所谷中常在寺を相持師匠の名目を嗣十代目主鈴と改家元を嗣畢されども歌舞伎座へは出勤不致

○十一代大薩摩筑前大椽藤原一壽 俗稱十代目杵屋六左衛門 三郎助

歌舞伎三味線彈七代目杵屋六左衛門同人三郎助名前の砌大薩摩淨瑠璃懇望に付藤間大助儀證人に立文政九戌年二月八代目中村八兵衛より家元を預かる此の砌富士田勘右衛門儀文太夫名目懇望に付八兵衛三郎助相談の上相譲る文太夫名目の儀者八代目主膳太夫初め名目故菩提所谷中常在寺石碑の中文太夫の石碑を引受同忌供養可致事を契約す右文太夫名弘會へ家元の儀に依八兵衛三郎助兩人出席致す此の砌住吉町邊に住居の者大薩摩家の縁者の由申故障申出候處八兵衛所持致候薩摩家の系圖披見爲致申候に付左様に御座候はゞ宜敷旨申引取候由此の砌太夫門弟出來候日歿す行年五十九歳

○十二代大薩摩絃太夫藤原直光淨空 俗稱十一代目 杵屋勘五郎

江戸男歌舞伎三味線の元祖十一世杵屋勘五郎始の別家杵屋十代目六左衛門の養子となり三郎助名目を嗣大薩摩名目預り居候處故有て明治元戊辰年八月別家を養子に相譲り

薩摩外記藤原直政 二代目薩摩次郎右衛門が弟子にして譚海に永閑が弟子也といへり長門太夫が甥也と云。初名平太一流を語り出し外記節とて世上に流行り堺町に操座を設て芝居興行す。門人源次郎左源太左平太薩摩左内享保の頃也、後に剃薩摩宮内也頃清五郎平太夫等あり。

大薩摩主膳太夫 寛保延享の頃行はる。譚海に云、市村竹之丞が弟善藏といふもの薩摩左内が弟子になりて大薩摩主膳と云てさつまぶしを語り始めたり。嵐左内といふもさつま左内が弟子にて太平記の事を専ら語る事にせし也。又一流を語り出して主膳と左内甲乙なくはやりたり。嵐左内は和らかなる節さつま主膳はあらけたる節を好みて語りたりと云々。

同じ頃大さつまを名乗れる太夫には朝日太夫主膳が男なりと云主鈴 同多仲松尾太夫何れも三絃軒屋なり等あり。明和の頃も大薩摩大扇太夫同文太夫等ありて三絃前大薩摩の曲節行れしが、今は、長唄にて、此節を、かね、覺、わ、歌舞、伎、芝居にて、勇士の出端、荒事等に、た、ま、く、用、ゆる、の、み、に、し、て、一、派、の、太、夫、な、し。

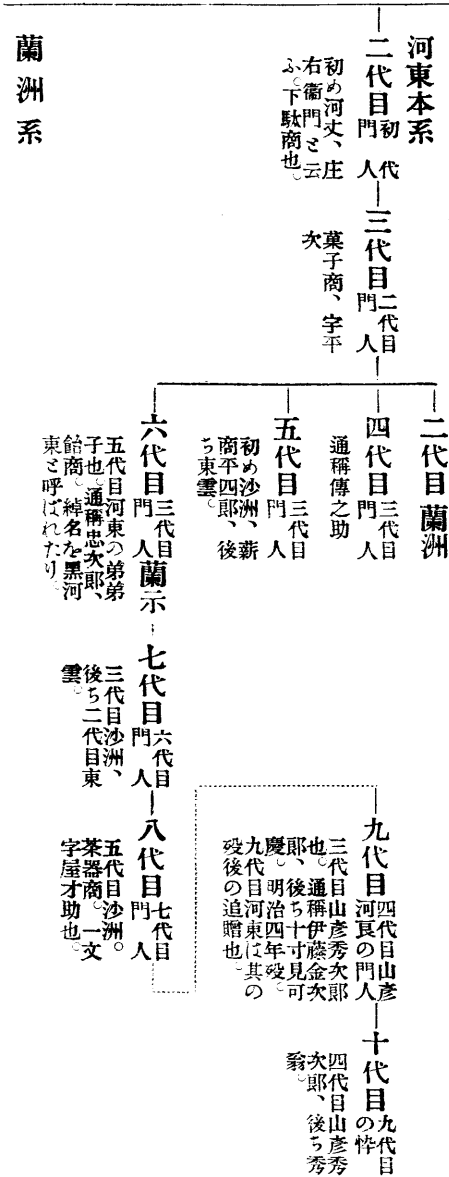
と云つて居る。交々参照綜合して稽考し來れば其の傳系相承の跡も大略判然たるべしと雖も、『聲曲類纂』にも云へる如く、大薩摩節の流行は寛保延享の頃を限りとし當時は可なりの太夫も出て軒屋の三絃と相俟ち、兎に角一派の浄瑠璃として獨立の命運を有し居たりしと雖も爾來次第に衰敗し、長唄うたひの兼業となり、たまく、歌舞伎芝居の勇士の出場、荒事等のあしらい杯に用ゐらるゝ位のものとなり畢つたのでありし。

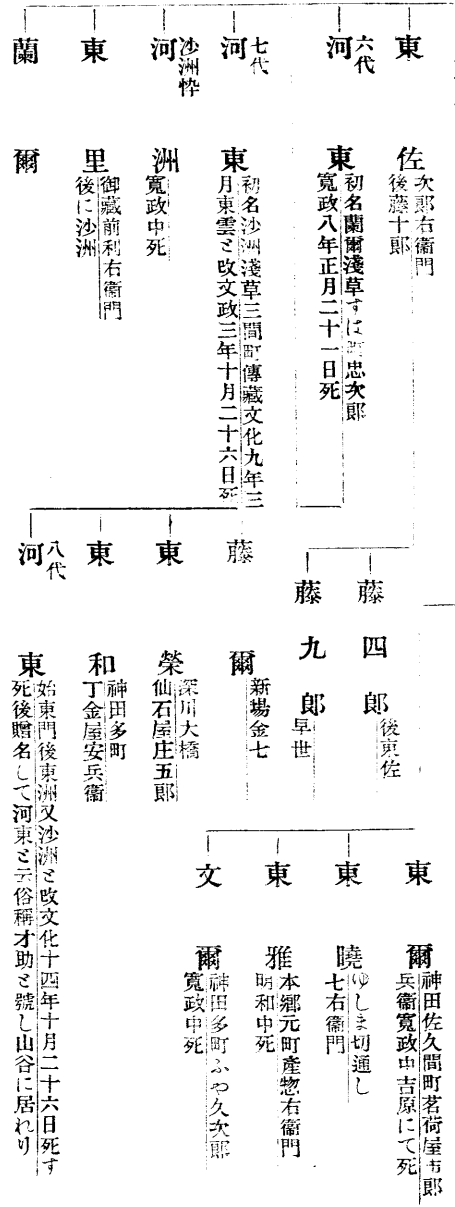
河東節の流系

河東の流れは河東本系と源四郎系蘭洲系、河良系との四系に別る。されど源四郎系と云ひ、蘭洲系と云ひ、河良系と云ひ、孰れも獨立したる別派と云ふ程のものにはあらず、恰も一家にして其の戸を分けた位の關係にして、宗家の世嗣にして出で、源四郎系を繼げるもあれば、源四郎系より出で、宗家を繼げるもあり、藝事の上にこそ力瘤をも入れ、互に譲らざるの意氣込みをも示したりしと雖も、其の間洵に隔意なき間柄なりし。這は惟ふに源四郎系の初代山彦源四郎も、蘭洲系の初代閑室蘭洲も、共に初めは半太夫の門人にして、河東が別派を成すに方り、其の門下に馳せ參した、云はゞ客分扱ひ格の門弟とも云ふべきものなりしより、かゝる關係ともなりたる次第なるべし。

河東の系統は大要左表の如し。

初代十寸見河東





江戸節浄瑠璃革命時代の各派の混戦、『浄瑠璃三國師誌』の節

『浄瑠璃三國師』は寶曆五年の著にして音同舎撰とあり、又巻頭五年乙亥孟春八部堂高在の序文あれど、其の何人なるかを詳にするを得ず。一册四卷、目次は、卷の一 常盤屋家内浄瑠璃問答、卷の二 竹音喜太夫木地太夫が評定、雪橋禪門閑居の悟道、波東舟中隅田川舟の内、大佐津間酒宴太夫が英雄、佐々木酒澤先陣争、卷の三 千歳上瑠璃

惟ふに豊後節系浄瑠璃の流行は、まさしく江戸浄瑠璃の革命なりし。江戸人の浄瑠璃趣味は根柢よりして翻覆されたのであつた。寶曆年間の著作にかゝる『浄瑠璃三國師』は、這箇江戸節浄瑠璃革命時代に於ける、各派混戦の消息を傳へて頗る興味津津たるものがある。左に其の一部を抄出して参考にする。

先づ近年は語齋式部太夫などの音聲全くすたり、後に淫聲第一の流を汲む木地太夫といふものあり。元祖宮古路に五割ましの淫聲なれども時なるかな世上の人此の浄瑠璃に歸するこゝ大半なり。頃ば珍文元年仲秋の頃さかよ。良觀さいふ僧深く彼淫聲をにくみ自下手談義と卑下して正聲のすたれたるを貶さんと専ら衆生を進められしとなり。彼良觀歸依の佛右衛門、良觀が口うつしの法談して聞かせんま宮古路の一流散々にいはれし事など話せば、側らに聞き居たる鎗兵衛も得道して、成程私が若い時はやつた外記筋や土佐筋を聞ては、今の浄瑠璃はあんまり利口で、さげ過きて、昔の耳からは耻かしくて聞かれず。又土佐筋は分なもののじや、聲は梁の塵を立たし

魂膽の枕、晴間太夫注法
印の法力、卷の四、戸佐
の丞揚屋大酒盛、玉彦傳
四郎三絃の夢想に別た
れて居る。

か節は利休の茶杓よりもしほらしくさいふに違はず、それを知らぬものは土佐節は軍計り、さい心得、
荒いものじやさいふは大きな間違ひ。長門太夫式部太夫などは軍計り多く、荒いもので御座る。
誠に土佐節は上下で立派な物、總體江戸節はおやぢの娘のさ分けて聲色をつかはず、世事を離れて
温和の者じやさいへば。家の子判吉は豊後節の方では俳名を戀里ささなへ、餘程語る男なれば、イ
ヤ箔兵衛殿上下で語るを餘り自慢せらるるな。此方はいに芝居も淨瑠璃の會も見ぬが、凡出語
りの分は皆上下で語る。すでに兩國や宮地などで出語りするにも、おらが節は自慢じやなければ、
簾をさら／＼と上げると、上下著て見臺を前につき出して一禮し、扇を構へて語り出す。外の淨瑠
璃はかうはしませぬ。なんぞ立派ではあるまいか。半太夫節などや河東節は隱居してもよい頃
——番頭の帳九郎こたへかれ、たさひ床の内に大肌ぬいで語つても、義太夫節は根がよい淨瑠璃な
れば人が受取る。面白くさへあれば内證の不行儀は目につかず、なんぼ立派じやさいふても上
下が居れば山猿の冠者。ほんに自慢でなければ、今義太夫節をちと習ふて見やれ、先づ語る語ら
ぬはさもかくも文句を讀むばかりでも學問になる。わしはなんにもしらぬ文もうなものなりし
が、此の節を習つてから、此ごろは三體詩の花さび蝶おどろけども人うれふすが、國性爺の序文でさ
らりさよめる。——義太夫節さへ習へば學文なしに、人の五常神祇釋教戀無常まで心のさマサツミ
いふ事なし。世上のむすこにおしへたきは此の節なりと廣言放て云ければ、杉之助に河東節語
つて諸事魂膽のみこんだ者じやが、此の自慢を聞かれ、ちさいひふせて呉れんさ、番頭をつきのけ。
なんぞ學問と義太夫節と一つにならうか。又儒者の醫者のさいふものが、豊後節語るは、馳し。ち
と酒機嫌か色氣のある座敷では、半太夫節か河東節とこればうつらず。しかし京大阪は其の國風
故皆河崎音頭歌、義太夫と土地相應に樂むからは、江戸に住むものは江戸の節を語るか、氏神への申
譯。——判吉又進み出でて、それは旦那の了簡違ひ。豊後節のなまくら太夫どもが語るを聞きて、一

途に悪くいわぬもの。木地太夫などの淨瑠璃を御ききなされて御らうじませ。又面白いものだ。此の節を習へば道樂になるのなんのさいはるれど、神佛くさい親父などが、娘に習はせさうもないものださへば。側から武士右衛門さ云ふおやぢ。私も今十七八の娘を持つて居ますが、娘が十歳許りの時分に嫁がいふには、女子のありつきは無面目では行かず。縫針は勿論なり、しつけ方、手習、琴、三味線とこれば、第一御奉公の口がないさういふ故。そんなら半太夫節習はせうさへば、いふには。今は兎角豊後節でなければ御奉公の口が遠く、此の頃は半太夫語る女の子と豊後節語る女の子と一所にさる所へ目見へに行きしに、豊後節語る子は其の日にすんで、半太夫節語る子は目見ぬもせずに返へされたりなごさういふ故、何にもせよ早く能い衆の中をば見せたいと思ふて、近所の師匠へ上げて豊後節を習はせる内十四五になるさ、ほんに血で血を洗ふ様なれごさんげの爲めに話しませう。つい近處の息子さちくり合ひ、何時か孕みし故、さうしてくりやうかと思ふたれど、親の慈悲で又了簡して見れば、おれが豊後節を習はせたが悪かつたさあきらめ、もう奉公にも出さず、今迄錢かれ入れて習はせたが何の役にも立たず、是程馬鹿な目に逢た事はござりませぬと、眞顔に成て話せば。判吉又進み出でて。ヤイおやぢ。己れが娘の根性がろくでなく道落したを淨瑠璃のさになどした。外記や土佐が流行つた時には、道落者はなかつたが、あつたな事ぬかすさ踏のめす、高が此の家に居まへと願へばよい、江戸中の白壁は皆旦那じや、何處へ行つても身に替へても、豊後節はひいきするさういふな。(千中又は三中)都丹中さういふ人——二階で淨瑠璃語て居られしが、下にけんくわがあるさ聞付け、半分頃から仕舞つて下へおり。是はさうじやと押しかけて、段々様子を聞く處へ。——判吉が請人末吉飛で來り、判吉が存外段々わびても聞かばこそ、直に暇を貰ひける。丹中はつくづく、判吉が淨瑠璃に熱心なるを見込み、あれ程でなければ太夫號はさらるゝものでなしと判吉に向ひ、——さても此の家を出るものならば、此方の尻をおれがもつて、名のある人さし

江戸淨瑠璃の變遷

本地太夫と勝負をさせ、貴様の存分にして遣ふ——併し外で勝負しては内證の藝になる。諸流の専ら入り集る中の町での晴勝負と判吉末吉諸共に暇乞して立出れば。——番頭帳九郎、息子に向ひて云ふ様は所詮置くも心外なり、私は喜太夫(義太夫)が方へ行きて此の事を語るべしといへば、息子は成程とおやぢにかくして一勝負土佐様を大將とし、外記、河東、半太夫、酒宴太夫(大薩摩主膳太夫?)に至る迄、微塵もひげは取らずまじ、夫れ迄は番頭さま敵同士とにらみ合ふて入りける。

松崎堯臣の『窓のすさみ』には、江戸淨瑠璃の變遷を敘して左の如くに云つて居る。

むかし古戦のおもかげを移して、天満と云もの説經となづけてうたひしとぞ、舞といふ俗曲ありしがそれを轉じて俚俗の語をもつて作りしとみゆ、予が幼年のころまで、かたはしを覺へたる者ありしが、いつとなく絶ぬ、また薩摩淨運といふものこれを變じ、世俗の悦ぶやうに文句を作り一曲を始しに、淨瑠璃姫といふものを立て作りしゆゑ、世に淨瑠璃と稱しておのづから曲の名となりしとぞ、文句は小野お通が作りしとも云、京に一中といふ一向僧の變じたるが一曲を制し、都太夫とて上方にてはやりしとぞ、其音謠にして愁しく東人は好、和泉太夫と云もの頼光四天王義經辨慶などの類を專にして、軍物語をつらねたる物なり、予が幼年のころはやりしとぞ、又土佐といふもの有て貴賤上下これを悦び、元祿のころまでこれをうたはざるものなきが如し、その文句ふし謠なりといへども、諷もの遺風を轉じたると思はるゝ、又半太夫といふものその末に出て交れり、これはやゝとらけて聞ゆし、大坂より義太夫と云もの出て近松といふ者文句を作り、世上にもてはやし、漸江戸へも渡りしが、享保の末より豊後ふしと云もの初り、謠に

してかなしく俗話にてつらぬき、桑間の氣蕩たり、大坂に始り、京へ移り、江戸にはやり來て江戸中諷はぬものなし、巷に溢る音なれ、常に往來の人のうめくを聞に、狄戎滌鑑の音には甚きに極れると思はる、とらけてかなしく、たわれて恥を知らず、衰はてたる聲かくもあるものにこそ、天文の始にや暫時制禁の事ありしか、頓てます／＼盛にして、上下貴賤泣聲出さぬはなし、淫聲の人を動する誠に別なるかな、男女しんぢうと云てともに死すること、京大坂の風たりしが、今はいつしか江戸に移り、年々に絶えず、其上貴人の息女婦人など出奔の事、聞も及ばぬ事なりしに今は、常の事となりて耳をそばだて聞ものなきが如くなり、上方のならばしいつとなく海内にみちて、元來の江戸の風絶はて、大名高家の慰にもこの悲音を翫ふ事になりぬ、そも／＼いかなる事にや。

『昔々物語』には

豊後が曲節はじめは下々に流行し、次第に歴々のなぐさみとなりぬ。その故は武士の風俗くずれて乞食河原者の風と化し、小身衆は豊後節の會を催して會料をどり、或は太夫號をとるとかや。浄瑠璃を上手にかたれば太夫方より何太夫といふ太夫號を授くるよし、これを忝しと思ひ手柄となし、何の誰れといふ人も、浄瑠璃仲間にては何太夫と呼びかはして通用す。武士の姓名をば公議事にのみ用ゆると心得、内證は太夫よりもらひし太夫號を通用す。苦々きことどもなり云々。

次第に江戸化せる豊
後系淨瑠璃

江戸淨瑠璃衰微の徑
路

されど如何に濃艶鼻々の豊後節一流の曲節を以て、時俗に媚びて一時の流行を盛んにすることが出来たにしても、根底よりして江戸的氣分を覆滅することの出来なかつたのは勿論である。江戸ッ兒は何處までも、江戸ッ兒なりし。關東草野の一角に樹立した新興都人の氣分をして、全然京都人化し、大阪人化せしむることは不可能事なりし。豊後節各派の淨瑠璃も、幾くならずして著しく江戸化せるものとなり、章句も、節調も、上方風の濃艶と純江戸節流の清雅とをつき混せたやうな一種の江戸化せる淨瑠璃情調ある節風をなすに至つたのでありし。惟ふに豊後節襲來の困厄の間に處して、河東大薩摩の兩流が、辛くも命運を繋いで敗亡の災禍を免るゝことを得たと云ふのも、畢竟其處には江戸人の氣分に倣つた純江戸節淨瑠璃と云ふかちめ贏目があり、又一ツは、早くより歌舞伎芝居の相方として結び付き、離る可からざるの關係を作つて居たりし因縁にも職由するの外ならないのである。

江戸淨瑠璃衰微の徑路は、京阪淨瑠璃衰微の徑路と其の趣を同ふし、歌舞伎芝居の流行やうやく盛んになるに従つて、操り芝居は次第に衰微し、果は人形に離れて淨瑠璃單り残り、三絃の流行につれて専ら素語り淨瑠璃として玩賞せらるることとなり、僅に歌舞伎芝居的一幕物に、役者の所作―振り事の相手として演奏せらるゝ位のこととなつたのであつて、『劇場一觀顯微鏡』にも「東都は所作事を専ら勤むる事にて、顔見世と春狂言には淨瑠璃の幕一場づゝ是非無くて叶さる事なり」と云へる如く、唄淨瑠璃を歌舞伎芝居の相手として演奏すると云ふ一事だけは、京阪になくして單り江戸而已に行は

れた京阪にては義太夫節浄瑠璃の歌舞伎の相手とせり江戸浄瑠璃の特色にして、同時に江戸歌舞伎の特色なりし。

『江戸節根元記』には、

外の浄瑠璃と違ひ江戸節註江戸半太夫系統の浄瑠璃の意味也は言葉なく音と節なり、此道に入らざれば分りがたき事なり。外の浄瑠璃は、老若男女のこと葉を聲なりにつかひわけしゆゑ能わかるなり。寛保年中延享の頃迄は、江戸操人形も江戸節にて興行あり、其より後は上方節になり、今土佐と云るは土佐節なり、肥前といへるは肥前節にて、中の芝居は小薩摩なり。是皆元は江戸節にて興行ありし也。

と記し、『後はむかし物語』には、

むかしといふもをこがましけれど、享保の頃までの人は今の人よりも心長く思はれ侍り、河東節の松の内は、役者の所作もなく、唯みすのうちにて、素浄瑠璃にかたりたるを、百日とか半年とか續たるといへり、見物おとなしく聞て居たればこそかくは有けれ、狂言ありとても、灸すゑの浄なりなども、長きものにて、所作もさのみなく、どらが十郎に灸をすゑてやるまでの事也、寛保にいたりて、夜の編笠あみかさは富十郎市松杯が所作は、格別のおもしろみもあるべけれど、今かゝるまだるき事を見てある見物はなし、豊後節なども、初め暫く役者の出ぬ前、素浄るりの事あれ共、是は近年は見物の退屈せぬやうにと思ふ故にや、三くだりも語れば、早せり出し杯なまにて、役者の出るやうに、節を付る也、見物も功者にて、爰はもはやせりだしに成節なりと聞覺て、其節を聞や否また拍子木も打たず、太刀の柄頭も女形のまげ

自正徳
至文久
江戸淨瑠璃重
要年表

の先きも見ねぬ内より、其役者を差さて響はる事になれり、その心よりして、おなじ狂言を二度も三度も見る人はなくて、一度限ればこそ、大中りといふ狂言も近年は三十日とは續かず、十日もすれば跡を出すやうになりて、昔の如く半年同じ狂言をしたるなどやうの事は更に無し、人のすくなく成たるにはあらず、江戸の土地のだんぐに場末までも家を建つらねたるをみれば、人は極めて多くなりたる也、人は多けれ共、貧しき人多くてかくなりたる也云々。

と記せり。以て江戸淨瑠璃が操り人形と分離したる年代も、歌舞伎芝居の所作事の相方としての其の後の變遷の傾向も、概略は想察するを得べし。

江戸淨瑠璃が傀儡と分離したる年代は明かには考證し難し。歌舞伎芝居の相手として、豊後節各派、河東、一中節等の太夫が舞臺に出たる事歴は、『賀久屋壽々免』一名「歌舞伎品定」近くは關根唯誠翁遺稿の『芝居年浪草』「演劇叢話」中にあり等幾多の参考資料あり、冗々しければ爰には之を省き、左に正徳以降の江戸淨瑠璃重要事項年表を掲げ、斯界變遷の大勢を稽考するの資料に供する。

江戸淨瑠璃重要事項年表 自正徳至文久
大約百五十年

元祿元年より正徳元年までは、特に記すべき事項なければ略之

- 正徳二年 江戸半太夫堺町に操座興行。
- 同 三年 四月、山村座二番目江戸半太夫淨瑠璃。
- 同 四年 江戸宮芝居所々御停止。山村座斷絶。
- 同 五年 三月、中村座、阪東一壽會我此の時、虎屋永閑出座、五月市村座、萬歳女鉢木此の時、都一中

京より下りて出勤大當り也。『戲場年表』に見ゆ。

享保二年 五月市村座江戸太夫河東松の内の淨瑠璃出語り大評判。

同 四年 辰松八郎兵衛芝居を始む。

同 七年 春中村座神樂獅子太夫江戸河東團十郎助十郎狂ひの舞大當り。

同 八年 春中村座水揚蝶の羽つかひ江戸河東。九月元祖都一中京都に歿。

同 十年 七月二十日十寸見河東歿。

同 十三年 春中村座江戸節淨瑠璃酒中花大谷廣治大當り。

同 十四年 春中村座扇惠方曾我大薩摩主膳太夫出座。

同 十五年 十一月二十二日土佐椽正勝木挽町六丁目に操座免許也。再興

同 十六年 四月土佐椽正勝芝居酒呑童子非常の大入。

同 十七年 春中村座松竹梅根元曾我宮古路豊後椽始めて出勤大當り。

同 十九年 春中村座風流相生獅子都秀太夫千中、ロキ金太夫三中なり。中村座宮古路豊後出勤大當り。

同 二十年 春市村座尺八初音の寶船江戸太夫藤十郎。

元文元年 春中村座家櫻傾城姿都千中、明烏口舌の枕江戸太夫雙笠江戸半十郎也。

春市村座小夜中山淺間嶽宮古路文字太夫出座これ常盤津の歌舞伎に出し初めにし、此の淨瑠璃中途にて奉行より差止めらる。

中村座殺生石薩摩平太夫淨瑠璃を語る。

同 二年 春中村座躍舞鶴曾我江戸太夫。春市村座品定問垣錦江戸太夫藤十郎結髪翡翠の柳

江戸太夫雙笠也。

同 三年 河原崎座、胡蝶の夢、常盤津、小文字、太夫、初出座。

寛保二年 春、中村座、夜の編笠、江戸阿東、大評判。

同 三年 中村座、篠塚五關破、大薩摩、主膳、太夫、同若太夫。

延享元年

同 三年

同 三年

中村座、駒鳥戀、關札、太夫、宮古路、文字、太夫、同志妻、太夫、同品、太夫、後富元の祖、三味線、佐々木幸八、宮古路、加賀太夫、同敦賀太夫、同佐賀太夫、三味線、竹澤平八の、一日替り、二月二十九日、築地本願寺脇より出火、外記座、肥前座、土佐座、孰れも焼失す、九月、肥前座の、建ちたるのみにて、其の他は再興出来ず、此の頃より、義太夫節の、操座ひまり行はれいよゝ世に弘まる。

中村座、卯花二世合駕籠、市村羽左衛門、瀬川菊之丞、生島又藏にて、太夫、宮古路、加賀太夫、改め、富士松、薩摩、椽、同敦賀太夫、同佐賀太夫、三味線、竹澤平八也。

同 四年

中村座、顔見世芝居、太夫、關東、文字、太夫、同志妻、太夫、同小文字、太夫、三味線、佐々木市藏、江戸太夫、河東三味線、山彦源四郎、さつま平太夫、三味線、杵屋喜三郎、一流揃ひの顔振也、此の年、關東の二字お咎めありて、常盤津と改む。

二月、肥前座、菅原傳授、手習鑑、大當り、三月、中村市村の兩座も興行亦大入り、大當り。

寶曆元年

同 二年

秋、森田座、藤戸日記、大薩摩、主膳、太夫、春市村座、笹結渡、涉船、太夫、富本、豊前、椽、同齋宮太夫、同大和太夫、同志名太夫、三味線、上て、うし宮崎秀五郎、宮崎忠五郎、三保崎左仲。

同 三年

正月、中村座、男達初買、曾我子藏十二段の淨瑠璃を舞臺にて語り、慶子は半若丸の人形を持ち、盛府は淨瑠璃姫の人形を持ち云々あり、〔戲場年表〕

同 四年

森田座、露時雨、裳涙、朝日若狭、太夫、後鶴賀、同異國太夫、同名義太夫、三味線、綾竹、勳九郎。

寶曆四年 中村座、富本豊前椽浄瑠璃。

同 五年 春、市村座、愛護會我、江戸半太夫、梁眠。

同 六年 中村座、鈴曙戀關札、太夫、富本豊前椽、齋宮太夫、大和太夫。

同 七年 春、森田座、浄瑠璃三段目、四段目、盡し、布引、一の谷、鬼一、在原系圖、物臭、眞鳥等、を興行す。

同 八年 秋、市村座、常盤津文字太夫、志津太夫、造酒太夫等、浄瑠璃。

同 九年 中村座、鶯宿梅妻、戸帶引、江戸半太夫。

同 十一年 春、市村座、江戸太夫、文字太夫等、浄瑠璃。

同 十二年 春、中村座、曾我、最負二本櫻、文字太夫也。

同 十三年 中村座、大薩摩、主膳太夫、浄瑠璃。

明和元年 市村座、振袖東海道、留袖淺間嶽、常盤津文字太夫。

同 鞭櫻、字佐幣、天薩摩、主膳太夫。中村座、積雪、篋品、姿、富本大和太夫、同常太夫。

同 二年 市村獻、江戸名所都鳥追、常盤津文字太夫、しづま太夫、御酒太夫。

同 蜘蛛絲、梓、弦、常盤津文字太夫。

同 四年 十一月二十二日、富本豊前椽歿。

同 六年 中村座、紅葉、雲錦、釣夜著、常盤津文字太夫。

同 八年 中村座、懷花、郭駟、常盤津文字太夫。

同 宮古路、蘭八、浄瑠璃、中村座へ、出勤。

同 市村座、紅葉、狩猩々、丹前、豐名、賀志、妻太夫、富本豊志太夫。

同 安永二年 常盤津文字太夫、引退。

同 四年 十一月、餘儀なき頼により、文字太夫再勤し、中村座にて『樹花戀浮船』を語る。爾後再び出座せず。

天明元年 二月、常盤津文字太夫歿。

四月二十五日より市村座、道行比翼の菊蝶、日道行垣根の結綿、二日道行瀬川の仇浪、三日目太夫、富本豊前太夫、齋宮太夫、安和太夫也。

同 二年 春、市村座、助六所縁、江戸櫻、江戸太夫河東。

同、中村座、助六面輪名取草、江戸半太夫。『新曲高尾機梅、富本豊前太夫。』陸月戀手取、同豊前太夫。

同 三年 市村座、東鹿子娘、道成寺、常盤津兼太夫。

同 四年 中村座、吾孀、街道戀、重荷、常盤津兼太夫。

桐長座、積戀、雪關、扉、常盤津兼太夫。

同 五年 中村座、忍戀、柳桂男、富本豊前太夫、同齋宮太夫。『坂町宵四辻、富本齋宮太夫。』風曲、江戸妓、富本豊前太夫。

桐座、四天王大江の山入、常盤津兼太夫。

同 六年 桐座、祝月、閨帯解、常盤津兼太夫。

中村座、振袖、吉野拾遺、富本齋宮太夫。

森田座、雪容、形麻衣、富本豊前太夫。『龍頭嫩源氏、豐竹越後太夫。

薩摩外記座、座元、豊竹新太夫、死去につき、竹本折太夫代りて座元となる。

同 七年 中村座、亂咲花色衣、常盤津大和太夫。

桐座、春待、谷諸聲、常盤津文字太夫。

兼太夫二代目文字太夫と相續す。初代の七回忌也。

天明八年 春中村座一節草齋宮が船富本齋宮太夫

同桐座おそめ久松おそめ浮名の初霞富本豐前太夫おらめ「世嚙翌雪解」常盤津文字太夫

秋中村座女郎花姿の初穂富本齋宮太夫「辰駕色相肩」常盤津文字太夫同兼太夫同御

酒太夫

寛政元年 中村座花色香嬪娘富本豐前太夫

市村座御前に候花笑顔常盤津文字太夫

同二年 中村座在姿淨瑠璃世界富本豐前太夫「八百萬圍生梅枝」常盤津文字太夫

河原崎座濡寄時雨櫻常盤津兼太夫

同三年 中村座笠屋三勝梅浮名初おはな朧夜初おはな柳浮名二日春雨二日常盤津文字太夫同造酒太夫同兼太夫

兼太夫

河原崎座細工業雛出來秋富本齋宮太夫

同四年 河原崎座戀衣縁初櫻常盤津文字太夫同御酒太夫同兼太夫

中村座けいせい淺間嶽都太夫一仲同春太夫同森太夫

河原崎座色衝寢覺床常盤津文字太夫同造酒太夫同兼太夫

同五年 中村座文紙衣姿不二屋常盤津兼太夫

市村座新曲神樂獅子「名酒盛色中汲」富本豐前太夫同齋宮太夫同安和太夫

都傳内座信田妻容姿中富常盤津文字太夫等

同六年 都傳内座濱千鳥色菊蝶「俠容形近江八景」達模樣吾妻八景富本連中也

河原崎座桂川月鳳出常盤津文字太夫

桐座『忍戀雀色時』常盤津兼太夫。

同 七年 三月十四日河竹新七段。

都座『冬笠廓水仙』富本豊前太夫、同延壽齋等。

桐座『色上戸航車』富本豊前太夫、同延壽齋等。

同 八年 都座『帶の文桂川水』浮借吾妻森、常盤津文字太夫等。

桐座『文枕閨初戀』富本豊前太夫等。

河原崎座『仇戀名畫の通路』丹前出口楊柳島、常盤津兼太夫等。

都座『雅似富士の寫畫』常盤津文字太夫等。

桐座『菊花嬖仇夢』戀すてふ鄙手枕、徒髮戀曲者、富本豊前太夫等。

河原崎座『錦鳥縁橋供養』常盤津兼太夫等。

都座『色蓮紅葉顔』常盤津文字太夫等。

同 九年 都座『初霞廓巢籠』梅見月戀閣思君、常盤津兼太夫。

桐座『羅睦月三引』富本豊前太夫。

同座『思春娘嬌已年』常盤津兼太夫。

同座『宮參結神垣』富本豊前太夫。

同座『菊閨妹脊狐』富本豊前太夫等。

同 十年 中村座『濡乙鳥埒傘』常盤津兼太夫。

桐座『髭豆男廓の文車』富本豊前太夫。

同座『戀の橋づくし』其の佛淺間獄、富本豊前太夫等。

森田座『兩顔月姿繪』常盤津兼太夫。

中村座『錦著戀山守』常盤津文字太夫。

市村座『戀相撲閨取組』富本豊前太夫等。

森田座『達弓色引方』常盤津兼太夫。

同 十一年 七月八日二代目文字太夫歿。

中村座『亂咲綠花笠』常盤津兼太夫等。

同座『助六廓花見時』江戸半太夫。

市村座『六玉川衛柵』富本豊前太夫同延壽齋等。

森田座『八重櫻一重操の櫻戸』常盤津要太夫。

中村座『我栖里假爪琴』吾妻國太夫。

市村座『歌枕雪鉢木』富本延壽太夫同齋宮太夫同豊前太夫。

森田座『祇園守花領巾』常盤津芳太夫。

同 十二年 市村座『瀨川の仇浪』富本豊前太夫等。

中村座『螢雙色夕月』吾妻國太夫。

同座『咲升花色源』常盤津綱太夫。

河原崎座『初紅葉一座土産』富本齋宮太夫。

同座『珍敷雪振袖』富本延壽齋同齋宮太夫。

享和元年 河原崎座『寄花文渦卷』富本延壽齋同齋宮太夫。

市村座『茂儂悔陸語』富本豊前太夫。

河原崎座『花屋臺都見物左衛門』富本延壽齋同齋宮太夫。

中村座『孔雀染盛卸』富本齋宮太夫。

市村座「紅葉傘兩振袖」宮本豊前太夫等。

河原崎座「梅水仙色抗」『巫の鈴俄振袖』香妻國太夫等。

同 二年 中村座「霞袖春山寺」宮本齋宮太夫。

河原崎座「三浦片貝操車」香妻國太夫。

同座「道行面影車」竹本錦太夫。

市村座「道行榮花月」常盤津綱太夫。

中村座「鶯飼石洒落妙字」常盤津伊勢太夫。

同 三年 中村座「三重霞嬉敷顔島」宮本齋宮太夫。

市村座「亂候柳黒髪」宮本豊前太夫。『道行暫網島』宮本大和太夫。

河原崎座「蘆薄露轉寝」宮本齋宮太夫。

市村座「積懸雪關扉」常盤津喜代太夫。『戀葉萩玉鉞』宮本大和太夫等。

中村座「よしや男袍著綿」宮本齋宮太夫等。『愈懸色の二番目』常盤津伊勢太夫。

市村座「錦鳥閨文車」宮本豊前太夫。

河原崎座「當南枝梅春日」常盤津綱太夫。

文化二年 中村座「母育雪間鶯」宮本豊前太夫等。

同 三年 中村座「好哉妹脊衝」宮本豊前太夫。

市村座「此の様縁未怨色事」宮本齋宮太夫。

同 四年 中村座「其の儘娘七種」『風流花振袖』宮本豊前太夫。

市村座「花安宅扇盃」常盤津小文字太夫。

同 五年 中村座「梅柳昔畫册」宮本豊前太夫。

文化七年 中村座花兄弟野良春駒富本豊前太夫

市村座有則戀重荷常盤津小文字太夫

森田座想惠戀重荷富本齋宮太夫

同 八年 中村座藤原春蝶菊拂曉鐘淺草『花墨傘相合』『枝鶴紅葉賀富本豊前太夫』『鄙都艳

玉簾常盤津小文字太夫同兼太夫等

市村座袖浦雪中借富本齋宮太夫『道行初音旅常盤津小文字太夫』

同 九年 正月大薩摩座にて小供芝居興行。十月結城座にて興行

中村座其の常盤津仇兼言道行拙振袖常盤津兼太夫

市村座戀いろは從盛娘富本豊前太夫

中村座三度笠故郷春雨富本豊前太夫『觀世水扇楓常盤津小文字太夫』『隙行駒七字

法掛富本豊前太夫『名所く秀句の曙常盤津兼太夫』『御名残尾花留袖富本豊前太

夫常盤津小文字太夫

市村座牛房鬚御節獻立富本豊前太夫『瀟屬戀塵夜』『團柱安八景常盤津小文字太夫』

同 十一年 二代目常盤津兼太夫死

二代目富本齋宮太夫清元延壽太夫さなる

中村座三津五郎十二支富本豊前太夫常盤津兼太夫『富岡屏風八景常盤津小文字太夫』

『兜軍記季責竹本連』『由縁月須磨寫繪富本連』『形容菊野眩常盤津連』

市村座都鳥名所渡常盤津小文字太夫『傲三升四季俳優富本豊前太夫』『御攝花吉野

拾遺清元延壽太夫

森田座命掛色の二番目常盤津小文字太夫

同 十二年 中村座二重衣戀占、籠、賀、若、狹、太、夫、

市村座八重霞櫻花掛合、清元延壽太夫、

同 十三年 河原崎座、人來鳥箱根兒鬻、常盤津文字太夫、江戶紫手向七草、同小文字太夫、岩井水

賤女晒布、富本豐前太夫、

同 十四年 中村座六玉山秀歌姿見、清元延壽太夫、

河原崎座、登分身五郎、天、藤、摩、文、太、夫、

文政元年 富本豐前太夫受領して、豐前椽となる、

同 二年 常盤津小文字太夫、文字太夫、三代と改む、

同 五年 七月十七日富本豐前椽、破、

同 七年 清元延壽太夫、剃髮、延壽齋と改む、

同 八年 清元延壽齋、横死、

同 九年 十一月河原崎座歌舞伎、操、打、交、興、行、

十二月十九日結城座より出火、

天保十二年 七月六日中村座より出火、操座とも焼失、

同 十三年 操座二軒地所得領、

嘉永四年 文字太夫、三代、豐後大椽と改む、

同 五年 結城座閉座、

安政六年 三月豐前大椽、富本豐壽翁と改む、

萬延元年 八月常盤津、豐後大椽と岸澤古式部と不和となり二派に分る、

文久二年 閏八月八日常盤津、豐後大椽、破、

第十一章 江戸に於ける義太夫節

江戸義太夫節輸入の祖辰松八郎兵衛 二流三流の輩で徐々地盤を固め始む 八郎兵衛江戸

入り前後の消息 一旦大阪にて興行し夫れより江戸に下りたるが如し、且候急盛んなる流行を作るに云ふ段取には運ばざりし 豊

竹新太夫江戸に下る 俄に勃興し始めた義太夫趣味、延享三年の大火一操り各座の焼失一肥前座単り再興

勃興の勢成る 菅原傳授手習鑑の大當り 菅原屋敷と紅梅の社、新太夫の退隱、二代目新太夫と相續した

伊勢太夫

江戸義太夫節の正本 操り各座 肥前座外記 座結城座 寛政比の江戸の芝居

新作正本上場年表

江戸作者 紀上太郎 内鬼外 容楊黛 馬松貫四 江戸作正本の異色 江戸的氣分に醇化された義太夫節の曲調

「關東義太夫」なる一種の稱呼さへ出來た、異色ある筆致、語格一例として『素櫻本町育』『神靈矢口渡』『白石噺』の一節

太夫の顔振 江戸生拔きの太夫として、僅に筆太夫綱太夫あるのみ 江戸に墳墓を残した京阪の太夫

『塵塚談』の著者が見た安永前後の斯界 享保以後江戸に徂徠した主

なる太夫

江戸義太夫節の盛衰 嘉永當時の消息

義太夫節の江戸に入つた年次は確かならずと雖も、夫のよた／＼たよ／＼調の豊後

江戸に於ける義太夫
節輸入の祖辰松八郎
兵衛

二流三流の輩で徐々地盤を
固め始む

八郎兵衛江戸入り前
後の消息

一旦大阪にて興行し夫れよ
り江戸に下りたるが如し

節と殆ど前後して江戸に入り、徐々として流行の地盤を固め始めたるものだと考定せらる。享保の末年には既に俗語にまで「河東上下がうし、外記袴、半太夫羽織に義太夫股引、豊後可愛や丸裸」と唄はれて居るのである。

江戸に於ける義太夫節輸入の祖は辰松八郎兵衛である。正徳四年竹本座を辭して東下し、辰松座を創立し、大阪より太夫を呼び寄せて興行し、爾來大阪の太夫三絃人形遣ひの輩は相次で江戸に下り、次第に義太夫節流行の勢、ひを作るに至つたのでありし。されど當時の出座の面々たる、孰れも京阪に於ける二流、三流の輩にして、其の後竹本園太夫、豊竹島太夫、染太夫、倉太夫、勘太夫等も江戸に下り、稍其の顔振にも見るべきものあるに至りしと雖も、此れ迎本場の大阪にては、未だく、駈け出しの連中にして、左まで聴き榮々のする腕前と云ふには非ざりしと雖も、江戸に入つては孰れも歴乎れつぽとした太夫なり、三味線弾なりで、やんやくの喝采を博し、大に幅を利かせて得意の鼻を隆めて居たのでありし。

竹本座を辭去した八郎兵衛は、其の儘直に江戸に下つたのであるか、將又一旦大阪にて興行し、夫れより江戸に下ることとなつたのであるか、其の邊の消息は確め難し。されど、浄瑠璃外題年鑑に「此外古代に虎屋喜太夫次に陸奥茂太夫二ツ井彦太夫永島重太夫竹本源太夫辰松八郎兵衛等、大阪表にて芝居興行在しか、共何れも井上竹本の浄瑠璃を語られし故別に新作を見聞及ばず」とあるより見れば、一旦大阪にて興行し、夫れより江戸に下りたるものゝ如し。『聲曲類纂』には、左の如くに記して居る。

享保四年亥十一月新左衛門町本屋又七といふもの品川宿の町人にかたらひ御殿山の上り口に芝居をとり立辰松八郎兵衛名題にて若松の丸の中にかたばみの紋やぐらまくを上げ同十八日より三日の内興行しけるが高貴の御方御覧あるべしとの仰事ありしにより其場を引はらひしころ江戸半太夫休座の時なれば半太夫が芝居を借受辰松座とあらため以後辰松座となれり云々

彼此綜合すれば彼が江戸に下つたのは、享保三年の末若しくは四年の始めなるべしと想定せらる。

候忽盛んなる流行を作るを云ふ段取りには運ばざりし

義太夫節の摺實な曲風はひたと江戸人の好尚と一致せず、従て豊後節の如く、江戸入り早々倏忽盛んなる流行を作ると云ふやうな段取りには運ばなかつたのでありし。されど中には「たとい床ゆかの内に大肌ぬいで語つても、根がよい淨瑠璃なれば人が受取る、面白くさへあれば内證の不行儀は目につかず、なんば立派じやといふても、上下が居ねば山猿の冠者、ほんに自慢でなければ、今義太夫節をちと習ふて見やれ、先語る語らぬはともかくも、文句を讀むばかりも學問になる。」と云ふ肩入黨もあり、新奇いと云ふのに集まる一部の人氣もあり、徐々地盤を拓き固めつゝ最初の十五年を過ごし、まさに勃興の機運に向はんとするに方り、享保十九年の五月九日辰松八郎兵衛は歿した。

八郎兵衛の死に依り一頓挫を來たさんとした江戸の義太夫節も、新たに豊竹新太夫を得て却て盛隆の機運を早めたのでありし。新太夫は豊竹座にても可なりの語り人であつた。享保十九年不詳江戸に下る。

豊竹新太夫江戸に下る

俄然勃興し始めた義太夫趣味
越前少椽一行の江戸興行

延享三年の大火、操各座の
焼失、肥前座單り再興

勃興の勢成る

『菅原傳授手習鑑』の
大當り

初め若松丹後椽の名代を以て興行し、傍ら辰松座葺屋にも出勤せしが、元文年中新たに堺町に芝居を興し、荐りに大阪淨瑠璃の新作を傳へて之れを語り、人氣を博し、此れよりして江戸人の義太夫趣味は、俄然として勃興し始めたのでありし。然るに偶々寛保元年、彼の師にして豊竹座の開祖たる豊竹越前少椽は、豊竹駒太夫、竹澤東四郎三味線若竹東九郎形人並木宗輔作者等を率ゐて大阪より來り、翌二年正月二日を初日として、田村麿鈴鹿合戦』を肥前座に上場し、次で三月三日、『石橋山鎧襲』爲永太郎兵衛を出し、破るゝばかりの大入りを取り、一行は八月市中の人氣を沸騰せしめたるより、局面は一層展開し來り、次で延享に入り、三年二月二十九日築地本願寺脇より出火の大火により、外記座、肥前座、土佐座等の操り各座は焼失し、九月肥前座は再興したが、他の兩座は其の儘に滅び、唄淨瑠璃の操座は全滅し、單り義太夫節淨瑠璃の操座のみ残りて其の覇を唱ふることとなりしより、茲に全く勃興の勢を成したのでありし。

偶々大阪の竹本座は、出雲千柳、松落、小出雲の合作『菅原傳授手習鑑』を上場し、延享三年八月二十一日、延享三年十月二十五日まで六十五日間の好評嘖々、近來に無き大入り大當りなりとの評判傳はりしより、芝居元と座元と太夫の三役を併せ兼ねた肥前椽新太夫は元文中に椽號を授領し、當時肥前椽と稱した。は、機逸す可らずとなし、竹本伊太夫吉田清次郎形人の兩人を大阪に急派し、淨瑠璃の節付けより人形の遣ひ振りまで實地に見聞修得せしめ、竹本座出勤の太夫、人形遣ひの數人をも伴ひ歸り、翌延享四年二月より肥前座の舞臺に上ばし、市中の人氣を煽つて見たのであるが、豫想以上の成功にして、百有餘日の大入りを取り、肥前椽自身も神田紺屋町に屋敷を求めて老後の計を爲

すに至り、菅原傳授興行の餘慶なれば、冥加の爲めとて龜井戸聖廟の傍側に紅梅の社を建立する等、今に一話として傳はれるほどの收穫を得たのでありし。菅原傳授手習繼は、中村市場せられたが之れ亦大入り大當りなりし。

新太夫の退隱

此の時よりして肥前様は、やうやく隱退の念を生じたるものゝ如し。大阪より下つた伊勢太夫を養ふて新太夫の名を繼がしめ、自己は丹後となり、後又宮内と改め隱栖したが、後繼新太夫の評判思はしからず芝居も不入り勝ちなりしより、再び肥前と名乗つて出場し、『小野道風青柳硯』寶曆四年十月三日竹本座上場の正本なりを出して大入りを取つたと云はれて居る。寶曆七年正月五日五十四歳にして歿。實に江戸義太夫節の堅壘を築いた殊勳者にして、同時に斯界唯一の成功者である。

二代目新太夫と相續した伊勢太夫

二代目新太夫と相續した伊勢太夫は、越前少様の門弟。延享二年十一月師越前少様一世一代『北條時頼記』の時初めて出座。爾來勤績。寛延二年十一月十帖源氏物臭太郎の二段目の切を勤めて江戸に下り、肥前座に出勤。新太夫の名跡相續。寶曆四年十二月歸阪。十五日より新太夫にて豊竹座に出勤。七年十二月『祇園祭禮信長記』の時元の伊勢太夫となる。二段目の口と道行を勤む十年八月『長柄人柱』を勤めて再び江戸に下り、一座を興し座元と成る。変年不詳

江戸義太夫節の正本

江戸義太夫節の正本は概ね大阪傳來のものにして、明和六年三月日十六吉田冠子、玉泉堂、吉田二一の合作に成る『蝦夷錦振袖雛形』を上場するに至るまで、通じて三江戸作淨瑠璃としては、新作、改作を併せて僅に『石橋山鎧襲』作者は豊竹座の爲永、義經新合狀、南蠻鐵後太郎兵衛、並木宗輔也

改作改作者不詳延享『新板累物語』並木貞輔、一二三軒八州堂、三樂坊合『八幡太郎東海硯』一二三軒元

年八月朔日『太平記枕詞』安田蛙文、一二三軒野澤雁使合作實『聖徳太子職人鑑』並木正三、文鐘軒吉

肥前座上場『吉野合戦名香兜』吉田冠子、竹谷平藏、伊藤荷門、多田大吉『和泉式部軒場梅』明和三年

場、上場月日の八種に過ぎず、明和六年『蝦夷錦振袖雛形』三月十六日出でより、次で『時代世

話女節用』七月十九日出で、翌七年には『神靈矢口渡』正月十六日外記座上場、福内鬼外、『往古模様

龜山染』四月十九日肥前座上場、三冬庵自在、『傾城扇富士』八月朔日外記座上場、曾我會稽、『源氏大草

紙』八月十九日肥前座、八年内鬼外作、『弓勢智勇湊』正月二十日肥前座上場、福、『關取一鳥居』七月七日肥前

吉田仲二合作等を出し、三箇年間八種の多きに上ばり、爾來安永より文化に至る大約四十六年

の間に、三十七種の新作を出すに至つたのでありし。作者としては、福内鬼外の平賀源内

あり、松貫四あり、紀上太郎富豪三井元あり、玉泉堂、吉田仲二、吉田二一、源平藤樹、梅野下風、達

田辨二、吉田鬼眼、吉田角丸、容楊黛、鳥馬、芝屋芝叟其二他、雙木千竹、千品龜井、三冬庵自在、筒井半幸、

々々、餘は一等あり、操り座としては、肥前座あり、外記座此の座は元々薩摩外記が操を興行した評

記節土佐節の如き世にすたりて、維時困難となり、遂に豊竹新太夫に譲あり、宛も阪地に於ける竹、豊兩

り、義太夫節の常芝居となつたのである故に、一名薩摩座とも稱した。譲あり、宛も阪地に於ける竹、豊兩

座の如く對立して其の盛を致し、別に結城座あり此の座は説教節結城孫三郎の創めたものなる

たのである。此亦可なりの人氣を集めて居たのであつた。

『寛天見聞記』には、寛政年間の芝居町の圖面を掲げ、當時の狀況をも附説して居る。

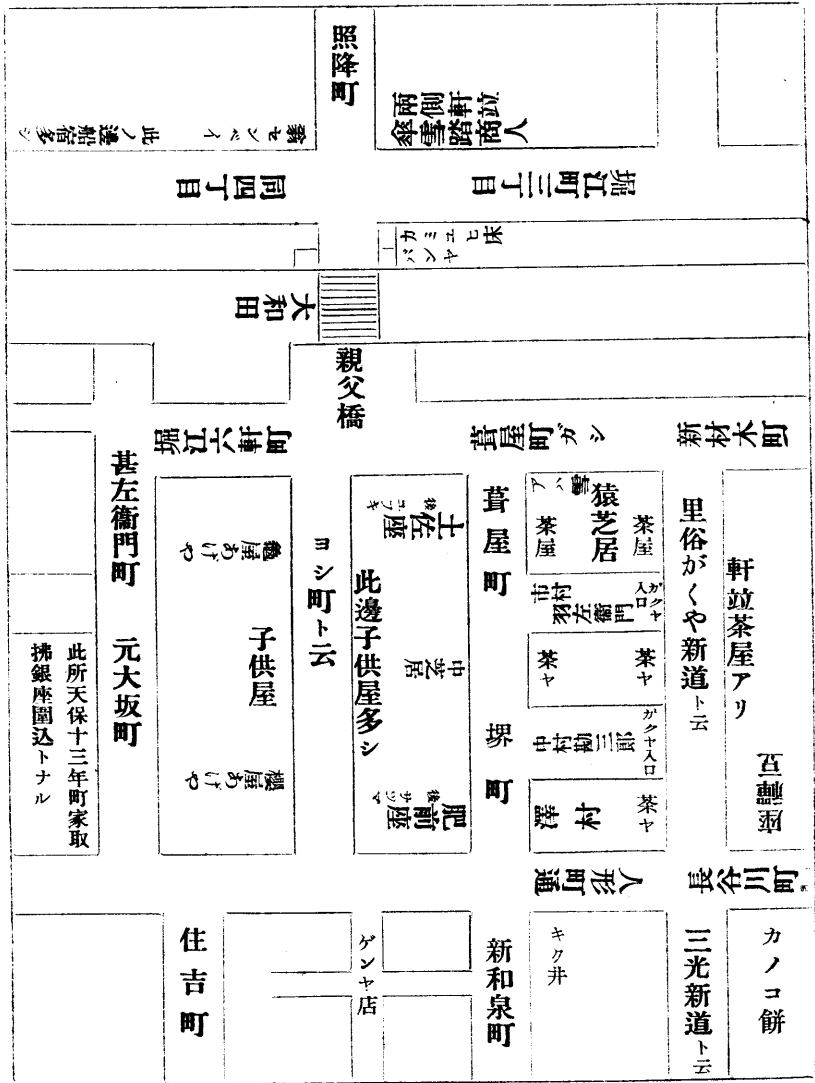
操り各座

肥前座外記座

結城座

『寛天見聞記』の選者は不詳、齋藤彦鷹の著す所なりと稱せらるるも疑はし。寛政以降世事の變遷を書いたもので、天保の末に及んで居る。書中の記事は悉く著者の親親實踐に係るものである。博文館發行溫知叢書中に之を取めたり。

寛政比の江戸の芝居



右に圖する處は寛政年中の繪圖なり、其頃葺屋町市村座は都傳内さかほり、堺町中村座は桐長桐さかほる、中の芝居には子供狂言又は竹田大がらくり、或は曲馬能狂言など絶す有、肥前座には住太夫土佐太夫何れも名譽の太夫にて、互に張合て操人形淨るり出語り、寛政六七の頃、土佐座にて假名手本忠臣藏十二段つゞき、暮なし、大仕掛を初て興行せり、河岸の芝居は猿狂言を専らとし、折節に珍ら

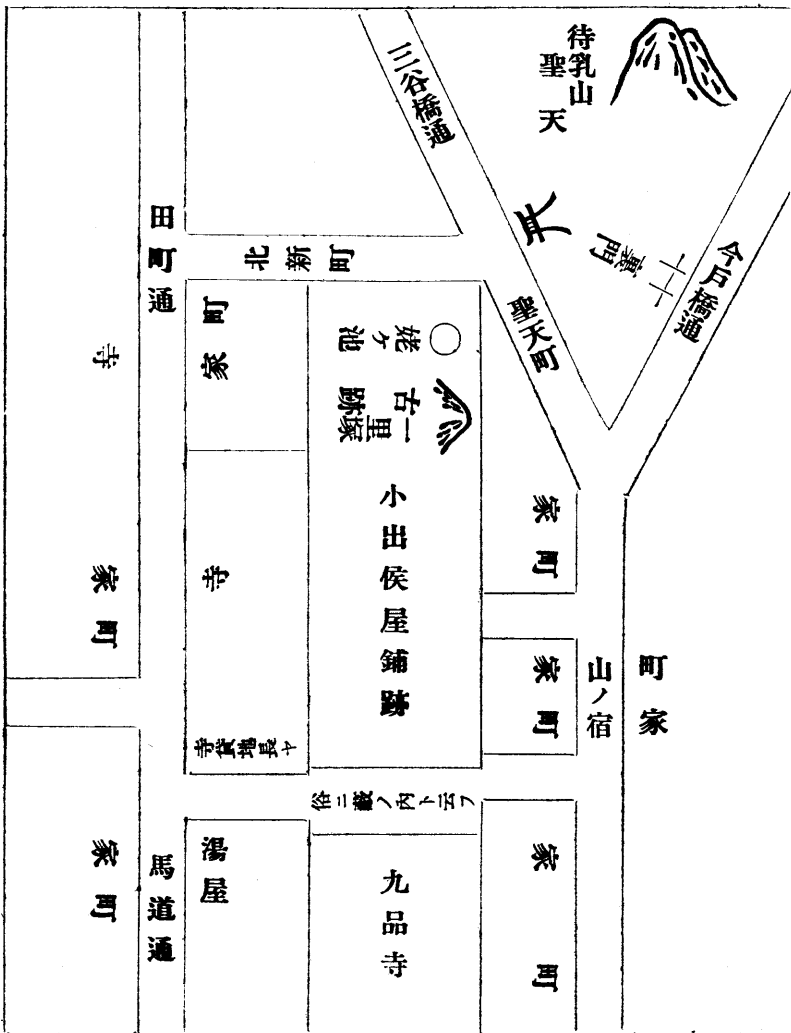
原註天保十二年十月七日曉
七時堺町より出火、兩芝居
近邊類焼、兩芝居普請止ら
れ、同十二月十八日兩芝居

しき物を見せ物とす、手妻早業杯、何れも兩國のこも張り芝居に同じ、新和泉町に玄治店と云大裏あり、是は昔御醫師岡本玄治老の拜領せる町屋敷也とぞ横堅にいく通りも路次有、此處に役者芝居者多く住居す、則四方と云酒屋の本家の裏なり、人形町は長谷川町の横通りをいふ、家毎に人形細工人ありしが、追々に減じて今は一二軒となり、近き頃迄三月五月人形市立しが今は絶てなし、又寛政の末まで此所にあらし音八と云役者の家にて、鹿子餅を賣ける、見世先に四尺ばかりの坊主小僧の形、袖なし羽織を著し、茶臺の上へ竹の皮包を持たるを立置たり、餅買人の來る時、此人形おのれと持出るぜんまいがらくり有し也、此音八は俳名を和考と云て道化の名人にて、元祿十三年四月五人男の狂言に布袋市右衛門をせし時、其の頃長谷川町に勝川春章と云佛畫師有て、此似顔を畫て出版す、是似顔畫の始なりと聞傳ふ、春章其の時壺の印を押出せし故、春章を世に壺と呼しとぞ、又大昔は今の長谷川町を福宜町と云し、頃、此所にも芝居有しとぞ、新乗物町は兩側に乗物職人軒を竝べ居しが、是も今はわづかに残り、芳町にかけまよとて男色を賣る野郎屋あり、役者の弟子奉公人請狀にて抱へるよし、子供屋おとく有て、揚屋は料理茶屋にて別家なり、價一ト切百疋、晝三分夜二分也、野郎十八九より藝者にすさいふ、又芝居にて女形の役者は平日人數少く、御殿場の狂言、或は御姫様の行列杯には、女形多く入用なる時、此野郎を雇ひ女形に遣ふなり、其の時野郎振袖を著し、編笠をかぶり樂屋入する、天明の始まで有しと云、新木材町の河岸へ煙草荷物あがり、斤目を改る煙草の市有り、爰を煙草河岸といひしが、是も今は絶たり、菊井松本澤村よし屋皆古き髮油見世なり、其外此地の名物、長谷川町に梅が枝でんぶ源氏茶漬、人形町に座禪豆、新和泉町に虎屋のまんぢう、しきり揚餅、翁屋の煎餅、壺屋淡雪豆腐、是等は古き賣人なり、人形町は兩側夜見世の屋臺、軒をならべ皆食物斗りなりしに、天保十二年十月六日の夜、堺町の芝居より出火して、葦屋町邊類焼す、同十三年二月、堺町葦屋町を引はらひ、淺草藪の内小出侯の屋敷跡を下され、町名を猿若町と改させらる、一ト廊の芝居町として役

竝座其の外役者茶屋共引
 拂へき旨命せられ、木挽町
 座も焼失又は大破の節、追
 て引拂へき旨命せらる、明
 暦十四年正月十二日小出伊
 勢侯下邸一萬七十八坪を替
 地に下さる、同十二月六日
 川原崎座も引移る、いづれ
 も新地永代被下候上、三座
 竝芝居付茶屋、其の外の者
 へ金八千二百五十兩下さ
 る、爰に無用の事ながらし
 るす。

第十一章 江戸に於ける義太夫節

者芝居の者共、此廓の中に住居すべしと令せらる、此時より役者他へ出る折には、おみ笠を冠り往來
 せり、木挽町の河原崎は、翌十四年の春此地へ引移り元大坂町の東側は、此時銀座へ圍込になる、また



小出侯の屋敷は、鼠山感應寺の跡替地に賜りしこそ、川柳點に、
 すみ田川岡で合羽が袖を引

新作正本上場年表

ちにはなれ乳母にははなれ泣小出

前に圖する芝居町と、後に顯はす處の深川其の外の料理茶屋水茶屋、また宿場の飯盛女と吉原町とをなして、世に惡所場とす、惡所と聞ては近よるまじき處なれども、しばらく御宿免有しと、國の金銀融通なるべきを身の分限をわすれ、惡所へ行て酒色に長じ、無益の奢に金銀を費し、其の身の不融通となり、又不養生となること歎くべきの至也、云々

左は江戸作者の新作及改正本の上場年表である。

肥前、外記、結城三座の新作淨瑠璃興行年表

外題 作者

上場年月座名

股野流石打 真田帶組打	石橋山鎧襲	並為永木太郎兵衛合作	寛保二年三月三日座
義經新合狀	作 者 未詳	延享元年三月(日未詳)座	
信田小太郎 小山判官	新板累物語	並木良輔一二三軒坊合作	寛延三年八月朔座
震の關守 鎧の渡守	八幡太郎東海祝	一 二 三 軒 作	寶曆元年八月朔座
上十五日男 下十五日女	太平記枕詞	安田蛙文 一二三軒合作 野澤雁使	同 二年七月二十一日座
寶曆七年正月五日、肥前座主	豐竹肥前椽藤原清正歿。(五十四歳)		
聖德太子職人鑑	並木正三文鐘軒合作	同 八年八月朔座	
吉野合戦名香兜	吉田冠子 竹谷平藏合作 伊藤荷門 多田大吉	(明和元年正月二日)詳	
和泉式部軒場梅	作 者 未詳	同 三年月日不詳(座)	
蝦夷錦振袖雛形	玉泉堂 吉田二一合作 吉田冠子	同 六年三月十六日座	

時代世話女節用 玉泉堂 吉田二一合作

肥和六年七月十九座日

神靈矢口渡 福内鬼堂外 吉田二冠子合作

外同七年正月十六座日

往古模様龜山染 三冬庵自在 吉川晴虹合作

肥同四年四月十九座日

傾城扇富士 (會稽山増補) 吉田泉忠 二堂増補

外同八年正月二十座日

源氏大草紙 福内鬼外作

肥同八年正月二十座日

弓勢智勇湊 吉福内鬼外補助

肥同八年正月二十座日

關取一鳥居 吉玉田泉仲 二堂合作

肥同七年七月七座日

嫩楽葉相生源氏 福内鬼外作

肥安永二年四月三十座日

獨鈷駄六一代嘶 吉松田貫仲 二堂合作

肥同三年九月三座日

吉野靜人目千本 松吉田貫仲 二堂合作

(座)同四年正月二日 (詳)

鎌倉山綠翠勝関 千品龜井作

外同四年正月七座日

戀娘昔八丈 吉松田貫角 丸四合作

外同九年九月二十五座日

櫻姫操大全 鬼松貫眼友三 郎合作

肥同五年正月二座日

昔八丈色揚瀬川染 吉松田貫角 丸四合作

外同二年二月二十三座日

河井正宗刀由來志賀の仇討
芭蕉翁俳句濫觴

紀上太郎作

外同 年八月(日不詳)座

江戸自慢戀商人

友三 眼郎合作

肥同 六年三月(日不詳)座

糸櫻本町育

達紀 田上 辨太 二郎作助

外同 年三月十一日座

御堂前菖蒲帷子

豐管 慶三助 若竹 應律 合作

肥同 七年正月二十六日座

矢口荒御靈新田神德

福一 内鬼 外森 羅萬象 合作

結同 八年二月八日座

伊達競阿國戲場

吉達 田 鬼辨 眼二合作

肥同 年三月二十一日座

大山納太刀譽鑑

紀上 太郎 平原 屋東 合作

外同 年七月六日座

驪山比翼塚

源平 藤橘 海田 一沫 合作

肥同 年七月七日座

稜重血紅跋

吉達 田 鬼辨 眼二合作

肥同 九年正月二十五日座

靈驗宮戸川

福内 鬼 外作

(座) 年三月三日(詳)日

むかし唄今物語

雙大 木原 千和 竹水 合作

肥同 天明年正月二日座

おちよ 牛兵衛 三日替
おぼん 長右衛門
おなつ 清十郎

雙森 木羅 千萬 竹象 合作

肥同 年七月(日不詳)座

局岩藤加賀見山舊錦繪

容 楊 黛 作

外同 二年正月二日座

日本勇將七草若菜切

津鬼 角 樹下 石上 合作

肥同 年七月十五日座

石田詰將基軍配

萬象亭 隅田喜四郎 三葉 松三 雙木千竹 松三 鬼眼

肥同 三年正月二日座

内百番富士太鼓

吉松田貫貫丸四合作

肥同 年十月二十二日座

伽羅先代萩

松貫丸 高藤茂兵衛 吉田角丸

結同 五年正月日不詳座

東唄操文章

野澤氏組作

竹同 七年三月二十五日座

基太平記白石噺

烏亭馬 紀上太郎 三津環 容楊 黛合作

同座 七年八月十二日座

花上野譽の石碑

芝候多藏 筒井半峰 宣候 玉木筆二補助

肥同 八年八月二十一日座

筆始いろは會我

(作者不詳)

寛政三年二月日不詳座

忠臣二度目清書

烏亭馬作

同座 十年三月十一日座

鎌倉敵討操姿鏡

松貫中 四(二代目)葉合作

享保二年五月五日座

鶯聲(雀雀) 女郎花縁助太刀

松貫市喜 紀中葉合作 眞羽亭喜樹下石上補助

結文化 四年七月日不詳座

以上の中佳作と稱すべきは、福内鬼外の處女作にして同時に彼が執筆正本中の第一の傑作たる『神靈矢口渡』松貫四、吉田角丸合作の『戀娘昔八丈』紀上太郎の『糸櫻本町育』容楊黛の作『加賀見山舊錦繪』松貫四外二人の合作『伽羅先代萩』烏亭馬、紀上太郎、容楊黛等五人の合作『基太平記白石噺』芝叟、半幸合作『花上野譽の石碑』等である。

江戸作者中特筆すべきは紀上太郎である。三井の一家にして元之助と稱す。紀州家との争事より遠慮して隠退し、文筆に隠れて一生を送つた。淨瑠璃正本に力を竭したのには其の閑居の餘業である。由縁齋貞柳の流れを汲んで狂歌には由甲齋と號した。京都油小路押小路に住へるより油押の二字の片字を取りたるものなるべし。作名に紀上太郎と名乗りしは、其の師由縁齋に因みある紀海音海音は由縁齋の實弟也の一字を取りたるものなりと云はる。

彼が江戸淨瑠璃に盡した功績は、淨瑠璃正本の作者としてよりは、寧ろ其の後援者、背後の助力者としての功多きに居るのである。文事美術に興味深く、金錢に屈托のない富豪の隠居者たりし彼は、平素より最負の傀儡の名手吉田文三郎を介して平賀源内と通じ、淨瑠璃正本に筆を執らせて芝居に演せしめ、時人の評判を聴くのを閑餘の樂みとしたのであつた。源内が作者としての福内鬼外の戲號は、彼が命名したものだと言はれて居る。『碁太平記白石噺』は鳥亭焉馬、容楊黛焉鳥旭、三津環と彼との五人合作なるが、わざ／＼焉馬を奥州に遣はし、方言訛語を研究せしめ、然る後筆を執らしめたと云はれて居る位にして畢竟は彼の身分なればこそ出來得たりし好事である。

鳥亭焉馬

鳥亭焉馬は本所相生町

堅川通り

に住んだ大工の棟梁なりし。通稱は和泉屋和助、中村氏。

五代目團十郎と結び

義兄弟の約あり

立川淡洲樓

其の住居の堅川通りなりしより取りて立川とし、團十郎に因みて淡洲と附けたる也。

と號し、桃

栗山人柿發齋などの別號あり、自己の職業に因んで野見てをなごんすみかねなどと洒落れたる狂名をも用ゐて居た。安永天明寛政の頃一枚刷洒落本、草雙紙等の作あり、久しく廢れたる落し咄を再興し、歌舞伎芝居に入つては脚本作者の補助なども勤めて居

たのでありし。文化八年に出た歌舞伎年代記は彼の著作である。彼が筆を執つた淨瑠璃正本は紀上太郎、烏亭焉馬等と合作せる『碁太平記白石噺』新作正本に彼の名の現はれ達たるは此の作を始めす田辨二と合作せる『伊達競阿國戯場』及び彼の單獨作なる『忠臣二度目清書』の三種に過ぎないのであるが、さすがに歌舞伎芝居通を以て任じたる彼れ焉馬が關係したる正本だけあつて、『白石噺』と云ひ、『阿國戯場』と云ひ、ともに其の脚色、構想の肯綮に中れる廉々が認められるのである。彼は淨瑠璃作者としてよりは寧ろ芝居道の通人として、構想の秘訣脚色の呼吸に付いて、幾多傾聽すべき經驗談を提供し、ものずき好奇心な——世話好な——洒落な相談役として、他の作者仲間に重寶がられて居たのであらうと想察されるのである。

福内鬼外

福内鬼外の傳記は茲に冗説するを要せざるほど顯著である。享保十四年讃岐の志度浦に生る。平賀氏、名國倫、字子彝、通稱源内、鳩溪と號す。紙鳶堂、天竺浪人、風來山人、森羅萬象等の別號がある。信州の豪族平賀入道源心の後也と云はる。

太田南畝の『奴師勞之』には左の如くに云つて居る。

平賀源内は讃岐の人なり、浪花にありて年を経しが、江戸に出て學校を建んと思ひて出來りしが、寶曆の末の風俗を見て、其の事の行れざるをしれり、性質物産を好みし故田村元雄坂上につきて物産の事を講究し、物産會をなす、凡物産會は寶曆七年丁丑田村元雄はじめて江戸湯島にて興行、翌年戊寅又神田に會し、同九年己卯平賀氏湯島に會し、同十年庚辰松田氏市谷に會し、同十二年壬午平賀氏又湯島に會す、亭主方より出すものを主品とし、諸子の携へ來るものを客品とす、凡三十餘國の物産、二千餘程の品の内にすぐれたるをふらびて一書とし、物類品ぐらう騷と名付く、寶曆十三年癸未の板也當

時躋壽館の物産會も是にならへるなり。

補 平賀源内、名國倫字士彜、鳩溪と號す、狂名は風來山人、又號天竺浪人、讚州志度浦の人也、養曆の末始て江戸に來り、聖堂に寓居す、官警田村元雄とくもに物産の學をつこむ、火澆布を考へ出して御勘定奉行一色安藝守殿につきて公に獻り、上覽に入る、後神田白壁町の裏に住居す、又藤十郎新道にうつり、又柳原細川玄蕃殿屋敷前の町に移り、此の頃門口に柳一本を植たり、柳終に馬喰町の町屋にうつる、檢校居を買て移、是より前、明和七年癸辰の頃、長崎に赴き、大通辭吉雄、幸右衛門が家を主とす、阿蘭陀本草を學び、エレキテル、セイリテイトといへる奇器人の身の火を取て、病造る事を學び得てかへり、専ら蠻學をなす、或は伽羅の櫛、銀むね象牙の齒月につくり、或は金から革等をつくりて常の産とす、安永八年己亥十一月二十日の夜病狂喪心して人を殺し、さし、町米屋の子獄に下る、同十二月十八日病て獄中に死す、屍を從弟某に給ふ、橋場總泉寺のうち左の方に葬す、其の友杉田玄伯私財を以て墓碑を建て表とす。

鳩溪みづから風來山人、又は天竺浪人と號して、狂文を書しは根なし草、志道軒傳をはじめとす、明和のはじめなり、其のち根なし草後編、放屁論、同後編、瘻陰隱逸傳、里のをだ巻飛んだ噂の評、天狗觸髅鑿定縁起、菩提樹の辨等を書しなり、皆不遇のあまりに鬱懷を吐しなり。

鳩溪儀太夫本を初めて書しは、神靈矢口の渡なり、三段目南瀬六郎由良兵庫の段は、曾我物語の引き事にある、杵臼鄭嬰が事にて書しなり、四段目の口わたしも、頼兵衛が所の文を、はじめ稻毛や東作よみて見て、此の義學臺とも今の六郷通りを來れば、矢口の渡しにかゝらす、此のいひけわなくてはいかゞと難ぞし、時直下に筆を採りて、六郷は近き世よりの渡しにて、其の水上げ弓と弦、矢口の渡しに、さしかゝり、さ書しを見て、さすがに、東作も稱嘆せしなり。

風來淨るり本の名は、福内鬼外と稱す、矢口の渡の名文は、忠臣義士のためなみだ、天に通せばあまの

川、つくみもきれて流るらんさいふ文句を自讀せり、琥珀のちりや磁石の針、糞も不糞も一様に迷ふが上のまよひなりさいふ文句は、例の物類品騰の餘習いまだぬけず、舊癖のをこりたるもなかし。

源内は往くとして可ならざるは無きの奇才にして、淨瑠璃正本の如きは彼にとつては實に些々たる緒餘の業に過ぎなかつたのである。合作單獨作を合せて通じて八種の新作を執筆して居るのであるが、『神靈矢口渡』は殊に優れ、一氣呵成的な彼が才筆の趣を偲ぶべし。『矢口渡』は時の社司某に囑れ、新田神社の社運恢興のために執筆上場したるものにして、此の淨瑠璃が大入、大當りを取るや、毎日の賽客引きも斷れざるほどになり、さしにも荒廢朽腐を極めし社殿も忽ちに改造せられ、神徳いやが上にも靈顯になつたと傳説されて居るのであるが、這は好奇的附會の傳説なるべし。恐くは鬼外一たび此の社に賽ふでし事もやあり、若くば聞傳へに傳へ聞きたることもやあつて、不圖其の縁起に思ひ及び、匆々筆を呵して夫の一篇を作したもなるべし。

紀上太郎、焉馬、鬼外の外には今に傳へて好評ある『加賀見山』は天明二年正月二日より外記座に上場したのであるが、非常の評判にして、木挽町森田座も亦狂言に仕組み、『鏡山故郷の錦繪』と題して上場し、大入り大評判を取り、爾來年々三月、諸家の奥女中の宿下りの時節には、此の外題を出さねばならぬと云ふ程の當り狂言となつたのであつて、克く當時の江戸的趣味と一致した傑作なりし。彼の執筆した淨瑠璃は、『加賀見山』の外には、鳥亭焉馬、紀上太郎等と合作した『碁太平記白石噺』の一あるのみ。恐く彼は、『加賀見山』の一

作に全力を傾注し、其の好評嘖々たるを見て満足して止んだのであらうと思はる。

江戸作者中最も多作なるは松貫四である。貫四は通稱萬屋吉右衛門、安永三年以後の上場、茸屋町の菊屋の主人也。正本二十八種中、貫四の署名せるものは十種にも及んで居る。比較的佳作多し。『戀娘昔八丈』、『内百番富士太鼓』は彼と吉田角丸との合作である。『伽羅先代萩』は貫四、茂兵衛、橋角丸三人の合作である。

爾餘の作者は特に傳ふべき程の事とてもなし、されば大概之を略した。

阪地の作者が其の淨瑠璃の題材を主として京阪地方の出來事に求め、關西的色彩を以て其の正本を彩りたるが如く、江戸作者の淨瑠璃正本は、主とし關東地方の傳説、江戸市井の出來事等を資料として潤色せられ、其處に江戸的特色を發揮したるものありしは無論である。

江戸作淨瑠璃には二つの特色がある。一つは其の曲調が何處となく唄淨瑠璃的で、常盤津、富本、清元、長唄などにも近き音調が、譜節の上に加味せられて居る事にして、一つは正本の用語格法が、純京阪式淨瑠璃の正本とは趣を異にし、彷彿として江戸文學的產物たるの特色が看取せらるゝ事である。

無論義太夫節には義太節本來の節調、特有の曲譜がなからねばならぬ事は云ふ迄もなし。されど義太夫節の抱有する所は頗る廣く、其の變化は自在多様である。熱しては激越の調となり、沈んでは切々の音となる。變化の妙を盡し、應用の自在を極め、而かも義太夫節本來の節調、曲譜に違はざる所に其の抱擁の大なるを見るのである。江戸

江戸的氣分に醇化された義太夫節の曲調

「關東義太夫」なる一種の稱呼さへ出來た。

に入つた義太夫節が、次第に江戸的氣分に醇化せられた曲調となり、音律となり、傳來の關西義太夫調八分に、江戸唄淨瑠璃調二分ぐらゐを加味した一ト風ある曲調となり、斯界の通語にまで「關東義太夫」と呼ばれ、純京阪淨瑠璃に對し、特に區別ある稱呼を附せらるゝまでに異色を帯ぶるに至つたと云ふのも、畢竟四圍同化の作用に由る自然の變化に外ならないのである。

普通の談話發音にさへ、關西人には關西特有の音調がある。江戸人には江戸つ兒持有の聲調がある。京阪人が江戸つ兒を學んでたんか、かを切つて見た所で、一向に切り榮わのしないのと同じく、江戸つ兒が京都人を眞似、大阪辯を使ふて見た所で、何處となくうつりがわるく、びつたり調子が合はぬことは、誰しも承知の事である。歌舞伎芝居の役者の臺詞にしても亦爾り、羽左衛門や菊五郎が、如何に巧みに臺詞まはしを工夫し、梅忠や鰻谷を演じて見た所で、つゞまる所は江戸産れの八郎兵衛、關東育ちの忠兵衛にして、仁左衛門や鴈次郎が、如何に巧みに長兵衛、長五郎に扮粧して見た所で、到底贅六的長兵衛、長五郎を脱することの出來ないのと同じである。されば江戸の出來事を綴り、江戸人をもでるとし、江戸人を主人公として書き下した淨瑠璃を語るに、大阪調、京都音を以て語つて見た所で、しつくり調和した情緒の浮んで來ないのは言を俟たぬ次第である。然るに世には随分融通のきかぬ不心得な議論をするものもある。江戸の語調には訛音がある。訛音があつては正則の淨瑠璃には非すと云ふ事を一天張りとして、『花川戸』であれ、『白石噺』であ

れ、『累物語』であれ、すべて「ア、左様か」的上方語調で押し通さうと云ふのであるが、洵に沙汰の限りと云ふべし。「おまへん」調の丈八屋白木「さうだす」調のお辰明鳥雪では調和が取れないのである。しつくり調和した江戸的氣分の浮んで來べき筈はないのである。譜節よしの調子とても亦爾り、必ずしも別に異流の譜節を學べと云ふのでは無い、常盤津、清元、長唄等唄淨瑠璃化せよと註文するのでもない、要は義太夫節淨瑠璃の格法、節調を離れざる範圍に於て、江戸淨瑠璃えざものは江戸的らしき氣分を發揮してこそ、其處に義太夫節本來の抱擁の大もあり、變化の自在も存するのである。

江戸作淨瑠璃は其の筆致及格法に於て、又著しく江戸的文學の特徴を備へて居るのである。殊更とちや世話淨瑠璃の臺詞の格法に於て異色ある筆致を有し、江戸的氣分の髣髴たるを看取するを得べし。

左は江戸作正本中の一節である。京阪淨瑠璃を讀んだ眼を移して之を讀下したら、明かに一種の異色ある用語、格法を會得することを得べきである。

『糸櫻本町育』八册目、小石川の段の一節

武藏野に、一村薄穂に出て、亂れ合たる絲筋の、分ていはれぬ戀仲の、儂りならぬ本町を、死に出しも死に角に、死れぬ命暫くも、義理と戀とにつなぐる、駒込邊の小借家を、假の浮世の假住居、店借て來て昨日今日、左七が留守にしはたらき、小糸が長屋呼あるけば、かたじけない夕暮より、相借家の窓頭、身のすぎはいは福の神、大黒舞の槌右衛門、元手入すに口先で、世を淡島の權兵衛と、薄い身代吹ば飛、

風の神の喜左衛門、三人打連ごや、と上れば直に座敷やら、臺所やら隔なう、御念頃に致しまして、先御亭主に近付に成ませうかい、ハイ不躰ながらアノ兄様は、急な用でちよつとそこまで出られまして、折角お招まをしまして、不調法な亭主ぶり、モウ歸らしやんすで御座りませう、夫までに御酒一ツと、恥しさうに出すちるり、盆に載たる筒茶碗、見るより先へ魂は、酒はゆなりし呑助達、腰はお留守に淡島權兵衛、手早に茶碗取上て、ハレヤレ、そんならアノ御亭主は、お前の兄御で御座りませうか、ハテ儲なア、私は又若い女夫の宿這入、ハア、何でもこいつは、お駒才三なぞとやらかして来た、宿這入じやなと思ふたが、そんならお前は妹御で御座りませうかいな、シテ見ますれば爰に三味線も御座りますが、ちと承はりたいなア、ヤ儲何れも御酒が出ました、エ、此長屋の付合は茶碗で一盃切が定りなれど、が一盃ぎりさいふも氣がくり、われら此の茶碗で二盃續て廻しませう、やいづれも早う御座るお酌、ハ、ハ、と慮外と酒追従、一ツ受てぐいと呑儲もうましと舌鼓待兼山の黒舞咽を鳴して、サア、く、く、淡島殿お盃頂戴いたさう、ハアこりや御造作で御座りますよ、見た處が二人ながらいやしう育ぬ人に見えました、随分と世帯を大切になされ、こちらも此の長屋へ来た時分は、夫は苦しい事が御座つた、く、が大黒殿のお蔭で、ごうやらかうやら暮しまする、いやマア一ソ下されうと、引受てぐいと呑儲もよい氣味、コリヤ御酒に念が入りました、池田屋の山くか四方の赤さうに御座る、アいや風喜先生囃お待遠、イヤもう先きから魂はちるりの中へ飛でしまつた、マア二三盃續けて給ふさいけじな上戸の息なし呑、お酌度々ハ、ハ、お慮外で御座ります、チツト、ハ、ハ、アコリヤ鶏を呼ぶやうなことを申た、ちよつとお間を淡島殿、イヤモウさんとわれらは二盃ぎり、マ一ツ呑と此の顔が、眞赤に猿の様になります、ハテ儲呑なりをしてじきする人、其の代此の大黒が一番祝儀を参らしませうと、疍張たる聲はり上、一ツ長屋の權兵衛殿、マ一ツ参つて猿となる、ハ、ハ、コリヤかたじけない、差詰此の權兵衛、何ぞ一ツするのぢやが、諺は知す、淨瑠璃は節がつけず、チ、有ぞ有

ぞふらい事をして見せう、此の間見て来た堺町で、今流行る輕業、むさん飛をして見せう、コレハふか
ろさ相借家に、のぼし立られ淡島が著たる紙衣の袖なし羽織、引くりかへす黄金裏、身拵する其の隙
に、大黒舞が持て出る、粗板足次其の上に、四方のふだるを積重ね、風の神が口まつ、の、出放題なる口上
いひ、大黒三味彈たく、借東西いふ、御覽に入まするが、むさん飛ちん藏、舁の上の輕身、發端がし
やちほこ立、足頭に付ますれば、鶴鶴の水遊び、ハトリト、く、く、足外へうつりますれば、香爐獅子、手
を放し立上りますれば、野中の一本杉、其の體逆に戻りますれば、元の香爐獅子、戻りまする、ハトリト
チ、く、く、口上に、一ツもいかぬ、舁の上計の輕業見る如く、家樽碎けてころく、腰骨がまち
でどうと打庭へごつさり打こけて、物をもいはすぎつく、小糸も氣の毒かけ寄て、お怪俄はない
かさ撫擦れば、相借家もうるたへさはぎ、薬ふ水よと抱起せば、やうく、に人心地、ア、く、恨しの風
の神、大黒殿も聞にませぬぞや、おれが仕付の輕業を留てくれたら此の様に、腰骨は打まいもの、ア、
腰いたや堪がたや、思へばく、商賣の、淡島殿も聞にませぬぞ、恨しげなる聲音にて、そもく、紀州名
草の郡、加田淡島大明神、女中様方の腰より下のわづらひは、直してやるこの御誓願に、此の權兵衛が
腰骨の折たを見すく、見ぬ顔して、知ぬふりは、お朋慾な、餘り氣強い淡様と、醉が廻つてすくり上、し
やくり上たる泣上戸、相借家は、天窓をかき、是は、借情ない、又例の泣上戸、ほんにやれく、こなたの様
に、泣年増が、大根島にあつたれば、嘩かし、時行であらうに、さ、仇口ましくら、相借家、立ぬ、權兵衛を肩に
かけ、引立れども、足立す、こいつはいかぬ、いつそ、拍子でやつてくりや、一ツさや一ツ、長屋の權兵衛殿、
輕業しくじり、腰抜たんのう、立れぬたんのう、立足も、しごるも、ごるに、歸りけり、詫住居には、取分て、哀
を添る、初夜の鐘、心も細き、行燈の、灯をかき立て、も、後先を、思ひ續て、しよんぼりさ、佐七様は、なぞ、遅い、
何して、居さん、す事じや、やら、早う、戻つてくれたがよい、住馴ぬ故かして、どうやら、氣味の、悪い内さ、す
みく、詠る、女氣の、待身になるな、かゝる、身に、形も、像も、面瘦し、佐七は、積る、憂事の、うきが、中なる、憂世

帯、うさく、戻る我家の内、ちらりと見るより走り出、チ、戻らしたか、符兼た、今迄何して居や
しやんした、遅かつた案じたか、女房顔してちまばかり、世帯めかすも可愛らし。

『神靈矢口渡』の一節

行末の六郷は近き世よりの渡にて、其の古は都より、東へ通ふ旅人の、廻るも遙弓と弦矢口の渡と聞
へたる、其の水は調布や、さらす垣根の朝露を、貫き留ぬ玉川の、舟を浮る流より、知ぬ心の底深き津
人の頓兵衛が、内さは思ひ棧作、物好したる亭座敷渡世には似ぬ家作りは、馬腦の階瑠璃の門扉、龍宮
城の乙姫か、夫かあらぬか、娘のお舟、馬が孔雀のぼつこり者、田舎に惜き姿也、擔桶に水を打たげ、立
歸る下人の六藏、申お舟様、調モリ料理は出来ましたか、且那殿はまだ晝寢、ほんにマア有ふ事か、今
渡守の頓兵衛といふては、おそらく日本國中に續者なき大長者なれ共、餘り人使がひごいから、幾度
置ても奉公人が、三日さは居たくまらぬ故、お娘御のお前が、籬本の世話なさるで可愛らしい其のお
手が荒ふかと思へば悲しうて、酸漿程な血の涙、御家老か番頭かと恭れる此の六藏、渡舟を漕除
々には、薪を割たり水汲だり、いまくしい事では有、愛な内でも且那殿と渡舟がなけりや、樂じやま、
小言にお舟は氣の毒顔、調コレ六藏人聞の悪い、さく様の噂よしてたもれと制する折からごやご
やま、しつかり候兵衛三上十次、からのびん助三人連、親分は内にかと揚口から大あぐら皆様よふお
出なさんしたと、お舟があいその煙盤、調さく様はまだ晝寢、御用が有なら起しませうと、いふ聲聞
て一間より欠まじくら、調ム、今そこへ行て逢べいと、ゆるぎ出たる主の頓兵衛、雪を欺く白髪に、
朱をそくいだるしか、み面強欲無道の眼ざし、八反掛の大廣袖、紙子仕立の伊達羽織、ごつかと座して、
調オ、皆揃つてよふ來た、して仕合はごうだぞやい、ごふかふ所じやごんせぬ、持て立た大しくじり、
三人ながら此の中の元手、すつぱり貢て仕舞ました、面目もなき仕合も、ちかはすれば、調ム、ソ
リヤさんく、な目に合た、なひは、貢る時がなけりや、勝事もない道理、少計貢た、調たの、なげ逆補鍋匠が、調つが、れ華鯨を請

合た様に、騒事たないわい、今一勝負やつて見る、コリヤ娘よ、ソレ板厨はきろの金を出してやれ、アイ板厨を
明るにも及ませぬ、さつきに品川の兵五郎様と青山の萬九郎様が見へて、日外借た金ちや迎、持て來
てござんす故、つい掛硯の引出しへ、ム、そんなら出してやるべいと、引出し明て、詞チ、幸爰に
六包有、一人前二百兩で足すばもちつき貸ふか、さいふに三人肝をつぶし、詞ナント聞たか、チアヤ
イ凡金持も多けれど、つがもないはした錢か何ぞの様に掛硯にも六百兩、目出度さいふも程が有、サ
レバサ昔からない物は金と化物さいへ共、化物はまだも出やふが、今時ない物は錢金、折々氣ばらし
に芝居を見ても、近年は淨るりできへ、何ぞさいや金のない事、餘りけちな此の時節、有所にはかう澤
山、マアどうすれば此の様にめつたに金が出来ますぞ、嗤して聞して下れさいへば、頼兵衛煙管こ
ちく、イヤサ皆が了簡が悪いから、出来る金も出来ないわい、塵が積つて山さいへど、積る内には又
吹ちる、詞二文四文ちや埒や明ない、出世しやうなら相場か金山博奕は勿論、是も近年はこすいか
しで能鴨もかくらぬ故、詞此の頼兵衛が思ひ付、彼鎌倉で借元の大將、足利尊氏様と謀反勝負の義
興殿が、やみ雲の高つげり、詞武藏野の高賭たかで大勝負、元手の強い尊氏様も根こんざいぶち負て、コ
リヤ一番切替ふと鎌倉へ盆がへ、何か破れかぶれの義興、うぬが命を投長半、鎌倉へ仕掛の博奕、詞
手におへない首尾に成たを、鼻ばりの竹澤監物殿が、すり取の江田判官殿から、詞此の親父へ人を
よこしててらをしてくれると思つて、ごうぞ魂膽してくれろと、色々のお頼、ハテ後生こそ願ふま
いけれ、詞人の爲に成事だじやが、甘口ではいけまいと、水銀奴からの思ひ付で、船の底をくり抜い
て、六藏めにさるを引せ、一番ごつきりて義興めを川中でぐぼんと云せた其の御褒美に此の頼兵衛、
詞尊氏様の尻持で、大名に成著なれど、夫では結句氣が詰り、好の博奕が打れませぬ、大名けんごんよ
しにして、やつぱりたべ付た、ぶつかけの渡守がよござりますと申上たりや、そんなら何なと望さ
有、そこでお金をしたるか請て、そいつを元手に大勝負勝程にける程に、持丸長者さはおれが事、詞

かふ普請をやらかしても、昔を忘れない様に、アレアノ通り床の間に、櫓や蓑を鋳物、出世の因縁かくの通りと語るにぞ、三人は不審晴、調夫で聞けた、そんならおいらも一思案、何ぞあてすつぼうにやつて見よかい、ヂヤカくり抜ふにも船はなし、是から坪皿をくり抜て、硝子入てやらかさう、ナフ候兵衛、イヤ〜夫よりもおらが望は、爰なお娘の舟底がくり抜て進ぜたい、サア〜お暇其の内も皆々打連立歸る。道引違へて走來る、村の小底がすつと這入、調申頓兵衛様お尋者の事に付て、竹澤様から御用が有、庄屋殿迄只今一寸ム、お尋者とは知た事、新田方の落人の御證議であんべい、夫なら行にや及ばない、ごちから來ても此の渡を、渡にやならぬ一筋道、兼て竹澤様さしめし合、新田方の落人が、若此所へ來るが最後、相圖の烽火を上るさ、村々で法螺を吹ば、竹澤様から捕手が出る、若もおれが方で擲取か討取か、加勢に及ばぬさいふ知せには、アノ亭座敷の上に釣した太鼓を打ば、村々で取圍んだが皆ちる約束、しやう屋ごのが大な面で、どう參つたかう參つた、隣の姥様茶を參つたさ、むだ斗りいふで、何か様子は知ませぬが呼でこいさの云付、そんなら一寸行てやらう、ヤイ六藏、若も落人臭いやつが見わたら烽火と太鼓の手都合を忘れるな、腰に大たうばつ込で小底を連て出て行。跡に六藏小聲に成、申々お舟様、調エ、お前はむごいとすり寄ば、調さ、様の留守に成さ、又じやら〜とてんがう斗、アイヤてんがうじやござりませぬよ、さうからお前に惚て居て、何ぼ口説ても戸板にごる付豆よ、其の豆故に身をつくし、根津音羽はいふに及ばず、氷川から補襦ほろ襦ほろ朝鮮長屋敷が橋、蕪園迄はついたれど、笠森のおせんとお前程なば、ごつこにもござりませぬはい、コレ申さうぞ叶へて下さりませ、アレ〜〜テモ耳の早いやつでは有、コリヤたまらぬと抱付、放せ〜とせり合所へ、表口から日傭の入助コレ六藏殿、調ちつこの内用が有、代に渡場頼さいふておれに任せて貴様はコリヤしなしやなく、親玉へ知るさ毛鹿をかぶる出入だ、サア〜ござれと引立れば、調アイヤ少仕かけた用が有、もちつと待て下され、イヤ〜待事はごんせぬ、貴様の顔で色事は唐

なすもモウ古い、飛だ茶鉢が西瓜と化たさ、打連舟場へ急行。娘は跡に獨言、聞けふの髪は上村のおみや様が、筋立てくれなまつた大事のを損ふて、此の筈の吹廻しの、紋迄なくして仕舞たまつぶやきく入にける。鶯の香離れぬ二人連、義峰公は漸き道念が忠義故、生麥村を落のびて、新田の方へ志し矢口の渡に差かり、同ノウ臺爰が兄義興殿の御最期有し矢口の渡し、此の水底の恨しや、川に向ひて合掌し、南無尊靈出離生死頓生菩提と、同向の聲と諸共に、暫し涙にくれ給ふ。臺も、俱に涙聲、御チ、お歎は御最早ふ新田へお歸り有、御一門をかつらひて、御矢の詮義兄御様の、敵をお討遊ばせと、諫る詞に義峰公、見れば渡に人もなし、道にて聞ば此の家が、渡守の内さかや、頼んで見んと門口に歩寄、頼ませうくこの給へば、奥より走て娘のお舟何の御用と立出れば、義峰公しとやかに、川の向ふへ参る者、舟の無心さの給へば、顔つくくく打守り、舟はいくらも有けれど、落人の詮義で日暮ては出しませぬ、其の上にお前の様な美しい殿御には、貸事は猶成ませぬと、顔に見されてうつさりさ、心の内は焼からの、胸をこがせる薄煙、いさしと思ひ懸香の、さふぞ留たき下心、義峰公は氣のごく顔、我くはいそぎの道、くれに及んでやど屋はなし、差當つてなんぎなれば、何ぞぞ渡して下さりませ、イエくどう有ても成ませぬ、宿屋がなくば私の内に、さまりなかつたがよいわいな、ソリヤさめて下されうか、留いで何さいたしませう、夫は近比忝い連の女が持病のつかへ、さいわいのよい足やすめ、臺こちへさ呼入れば、ムソリヤあなたはおつれ様かへ、エ、にくらしいさびんとする、臺はふしやくし、たびづかれの私らお留なまつて下さるさは忝うござんるす、アイお前もお連なら、おさまりなさんせ、サア申見ぐるしけれ、ゴアノおくのちんざしきがよい見はらし、あれでゆるりとお足休め、しからは左様と義峰公、臺諸共打連て奥の一間に入給ふ。(中略)ア、嬉しやく、夫聞たらもう何もかも入ませぬ、おまへどうぞ私が内に、十日も二十日も十年も百年も、たうりうなされて下さりませ、したが私らが様な田舎者は相手に成もおいや、有

うけれど、エトもうつんぞ、わしに斗物云せ、コレイナ、こちらむいて下さんせき、右よ左さ付け廻す、こはくのちりやじしやくのはり、すいもぶすいも一様にまやうが上のまよひなり。義峰公は氣のどくさ。(中略)聞より頼兵衛じだんだふみ、娘がもさとり引つかみ、前エ、おのればくく大たん千萬な、見ずしらぬ男めにほれくさつて、親の大事を他人にうち明、手に入た代物をようもくくおとしおつた、道しらす、ばちあたり、にくいやつさこぶしふり上丁くく、手おびの上のてうちやくに、娘はいきもたへぐに、前エ、ばち當り道しらすさいふ事、お前も見事御存か、つれくくふらちなしやうぶすき、あまつさへおそろしい、わるだくみが仕たらいで、たつた一人の娘のこひ人、ころさうさいふあく心から、げんざい我子を手にかけるば、あんまり非道じやごうよくじや、死る我身はいさばれ共、跡にのこつたお前の身の上、あんに過しがせらるくさ恨なげくば、前エ、やくにも立ぬままいごさ、落人を取にがして此の親が立物かさ、つきのけはれ退行んさす、娘は袖しにがみ付、前ぬけんいふてもなげいても、聞入給はぬ無得心、かく様がござるなら、仕様もやうも有う物何ないかても身一ツに、思ひつめたる義峰様、此の世でそはれぬあくゑんさ、聞ば聞ほど猶戀しく、お手にかくつて死だなら、親さ一ツでないさいふ、云譯立ばみらいにて、いさし殿御にあはれうかさ、夫を頼み二ツには、一人の娘が先立ば、一念ほつきもし給ひて、お心もなをらうかさ、はかない事を頼みにて、かくごきはめて死まする、娘がはいと思すなら、お心をひるがへし、義峰様を助けてたべ、頼まするさくごき立、わつさ斗にふししづみ、ちしほにあらそふ血の涙、ふびんさいふも愚なり、頼兵衛はせくらわらひ、前此の年迄仕こんだ根性、しやか如來が元服して、あやまり證文書うさいふても、いつかないつかなひるがへさぬ、あいつなきためた義峰めを取にがしては、竹澤様へやくそくの顔が立ぬご、娘を取てつきとばし、二かいなかけおり川ばたに、仕かけしのろしに火うちの早わざ天をこがせるほのほのひかり、かれて相圖の村々より、人をあつむるほらふき立、さも物すごき、其の有様、娘はくる

しき身をあせり、村々より大ぜいにて取まかれ給ひなば、何さておいのち有べきと、天にあこがれ地にひれ伏し、やうたい涙のひまよりも、思ひ付たる一しあん、上なるたいこにきつと目を付、此のたいこを打さきは、いけざりしと心得て、村々のかこみをさくさ、さいぜん聞たが天のあたへ、爰ぞ殿御へ心中の、女のみさほさ一筋に思ひ付たる心のまこと、よろめくあしをふみしめ、やうくばちをふり上げて、打んさしても手はまつかす、のび上りてはふるく、又おきななつてさび上り、ごんご一聲かつばさふす、おまにおごるきかけ来る六藏、それ打せてよいものか、抱さむるをつきのけはれのけあらそふ内、身がるに出立頓兵衛がつなぎしふれに飛のつて、櫓を押立てこぎ出す、上には娘が身をあせり、コレくくさ聲かざり、呼ごさげべごかなはれば、又もやばちをふり上る、おつさまかせさうしろより、ばち引たくる六藏が、わきざし引ぬき切付られ、らんかんよりまつさか様、川へさんぶり水けむり、上には娘がせんかたも、おちたるさやなふり上げて、あつたむしやうに打たいこ、ひびきにあらそふ頓兵衛は、ろを押立てゑいさつさ、手きづにひるまぬ六藏が、目比になれしうれんに、早瀬のなみを事共せず、拔手を切て立およぎ、娘は死手のだんまつま、夫をしたふしうぢやく心、蛇共成べき日高の川、ひれふる山のかなしみも、是にはいかで増るべき。

『碁太平記白石噺』浅草観音の段の一節

サアく且那方お茶屋様へお腰でもおかけなさい、今日は結構なお天氣で、私も仕合観音様もお仕合でございます、唯しも差合のない私が作つたのをあげやしも、お聞なさい、且那方の前だが、兎角世界は儒佛神の三ツでなければいきやせん、其の中でも佛法は口あたりが能からさかく繁昌するはお立合にお寺様方もござりやせうが、アノ地獄極樂の繪圖をかけて、坊様がゑさきをするをお聞なさい、ハさんだ事よ、ハ、こなたに御さるは極樂のていさう、此の世に置いて佛法しんじ善根のくりきによつて、上品上生の佛跡をゑたる所でございます、こちらに地獄のていさう、此の世において牛馬を

むごうしたるむくいによつて、人間の頭に牛馬の骸が付てござるなんぞいふも、ナばア様達が手を合してなんまみだく、わしやアごうのみかまはない、旦那方の前だが、牛馬をむごくした報で牛馬に成るなら、念佛を申さうより手短かに、此の世で佛をむごくしたらナア佛に成そな物ヨ、サかう云所が方便、私共がかう云も錢が貰ひたさ、ハイく、是はお侍様、ハイく、是は町人方は格別錢になるさ、おまへついで口合に、三文三文四文錢、なみたいていな口ではないさ、めんく、笑ひ催して我家くへ立歸る跡に、ごぢやうは錢そるへ、詞有難いけふもまづ五百には成りました、モシお茶や様、よつぼせり付ましたから、一ばい呑で参りましたよ、ナ、御太義く、イヤさつきに内から持て來たコレ此のぼた餅時分がよか参らぬか、是は有り難い、併今は一ばい呑で参りませう、ぼた餅は又、後にくふたか馬道の酒やなとして急ぎ行、参り下向の其の中に、人付合も吉原で、大福やの惣六同じく跡に樂頭たがの五町、詞モシ角町の親方、私はちよつと寄所がござりまする、おまへは直に御歸りなされまするか、イヤ江戸へ行所もあれど待合す人も有れば、ちよつと堺やへよつて行こ、ハイ夫なら後程く、五町はかしこへ惣六は茶やの奥へぞ入跡へ、佛には後を見する尻くらい觀九郎と云惡げん來かゝる向ふへ鐵棒の音もちりくん花川戸の、詞番七がホコリヤ久しう逢ぬが觀九郎殿替る事もごんせぬか、イヤモ替る事だらけ聞てたも、親仁は長々ちうぶの上、去年の春そつくり往生、小僧はかんの蟲が出てころりさやらかす、日なしのしりは七口喰ふ、そこで身代も賣て仕廻、かは今どぶ店がかせがして置くはい、おれも當時は苦に苦をかさぬ部や子でこそは候よ、ハ、ハ、ハ、此の人はいつも氣にくされのない人だよ、イヤく、まだ氣をくさらしてはならぬ、おれが手先で三浦やへやつた女郎、此の頃受出されて残り年が三年有る、こつちの取り込でかまはいでいたが先はれつきさしたやつ、此の尻を持って行くさ捨てても三十兩は取る、其の證文はコレ此の鼻がぼつぼに有ると唾せば番七、詞ホソリヤ金に成るはいの、金に成次手にけふよい唾を聞きました、奥州の何さや

ら、ナ、石堂殿さやらの預りの震筆さやら、若持てぬる者があらば持參せば、褒美は金子三百兩下さる。さお代官様より云付何でもこいつを持って出るさ大きな仕合貴様もひろく歩行人じや、随分氣を付さつしやれ、イヤおりや大屋様に頼まれた用が有、ちよつこいてこう、コレ茶や様此鐵棒頼みます、觀九郎殿此の頃に、ナ、行くか、其の中逢ふさ兩人は別れて、「こそは急ぎ行、にた山通の二三茶やが床几に腰かけて、御亭主何時じやの、アイモウセツでもござりませう、ナント善兵や、いつそ是から直に去らへいつて、土手からまつちや呼のぐい上りはどうだらう、ヨシ、こいつは日本だ、コレ里遊手前も行くか、した事さ、カ柳橋に有る、三人で三分なくなる智恵を出しさはこいつはよくいつた、コレもう一ばいくんなさ煎じ茶も、ちやを云ふ通さしられけり、深きさか今より後はよもあらし、コレ申間たい事がござり申、サ、吉原で名の高い女郎サア何さ云い申ぞ、しつてぬさるならおしへてくんさい、チャア、ム、其の名の高い女郎さいつてはしれぬが、夫れはごこの名は何んさいふ、コナ人は名をしり申せば夫れへ行申、おら姉サアでござるチャア、それを聞くべいさおもつて、ナ、あきんどやで聞げ髮結所へ行さ云し、夫れで聞けばそりや通に聞けさいひ申、マア其の通殿から聞申べいさ思ひ付き申た、ム、其の通さはマアおいらだが、ム、誰だらうな、ハテマア丁子屋で丁山かひな鶴か、松葉で松の井か扇やで花扇か、中近で半夫か、イヤ、今では葛やの人町か、しほ絹か、こういつて聞せても、長崎やへ阿蘭陀を見物にいつた様な物で一ツもわからぬ、ハテ氣の毒な物、ア、もう遅く成る、イヤコレどうぞよい手がくり求めて尋ていきや不便やさ夕間ぐれ、鐘は上野か淺草を、わさくさいふて皆々立て行、始終を後に觀九郎が猫撫聲に傍へ寄、コレコリヤわりや姉を尋る者さうなが、其姉に達せてやる、ヤアそんなら達せてくれやすか、テヤ、ナ、達せてやるはやるが、コリヤ其の我が尋る吉原さ云ふ所へ奉公をせにやならぬぞよ、ハテこがいな者でも置き申人があらば居申はサ、サ、そこじやて、其の奉公するには大ぶんむつかしい、コリヤおれを伯父じやと云はれば奉公に

も置かず、姉にも逢れぬ、おれを伯父じやと云へよ、ナ、合點か、サア、そんなりやおれが連れて行、サアあいべ、アイヤコレ觀九マア待た、ナ、おれを呼だは誰だ、ナ、角町の親方、何ぞ用でもござんすか、イヤ外の事ではない、ガ悪い事をするなやい、高のしれた代物、笠の臺の飛ぬ先き、とつとくよしにしたがよいぞよ、コレ親方そんないやみは云はるな、此の娘はおれが姪他人のかまふ事じやない、ナア姪よ、コリヤ伯父じやぞ、アイおぢサアの世話と成つて奉公に行申、必かまうて下さるなと、譯もぐわんぜも泣顔は、姉に逢たい斗に、公界の淵に望むかと思へばいと惣六も、不便さ餘り傍へ寄、コレ觀九郎何かと云ふもめんごしい、此の奉公人おれが買ふ、サ賣てくりやれ、ナ、何國へなと賣代物、直段次第でやりませう、ム、そんなら年も、一ばいに、五十兩位不足な、よもや不足は有まい、ガ是で物いひ有ならば、おれも正體急度糺すア、コレ、親方氣の短かい、夫では元直がつれるけれど、エ、しよ事がないと矢立取り出し證文を認める中、コレ伯父サア、あの人に奉公すりや姉サアに逢れ申が、チ、よい、委細はおれが呑込だ、と證文受取惣六は、おのぶ引き連立歸る。

(下略)

太夫の顔振

江戸生拔の太夫としてには僅に筆太夫、綱太夫あるのみ

江戸に墳墓を残した京阪の太夫

淨瑠璃の正本には可なりの新作も出で、二三の傑作もあり、江戸的特有的の色彩をも發揮するを得たりしと雖も、偕其の語人はと云へば、江戸生拔の太夫にして赫々の名を成したものは、僅に初筆太夫、目六代綱太夫位のものに過ぎず、目三代住太夫、豊竹鶴太夫、豊竹七太夫、竹本浪太夫、竹本登志太夫等ありと雖も、稱するほどの事もなし。江戸に墳墓を残した初代住太夫にあれ、初代播磨太夫、三代目政太夫にあれ、其他豊竹十七太夫、目三代豊竹若太夫、竹本太夫、竹本錦太夫、目四代竹本大和太夫、師大隅太夫、後自ら三代竹本土佐太夫、目四代土佐太夫、初め袖太夫、次三輪太夫、竹本紋太夫、竹本津賀太夫、目四代綱太夫、豊竹巴勢太夫、豊竹靱太夫等孰れ

『塵塚談』の著者が見
た安永前後の斯界

享保以後江戸に徂徠
した主なる太夫

も京阪仕込みの太夫にして、多くは大阪の初筆太夫にしても、後年赫々の名を成したのは畢竟大阪に上ぼつて幾多の修業を積んだ末の事にして、要するに江戸の天地たる、斯道育英の練場としては、餘りに不適當で又餘りに不調和であつたのである。元文二年に生れ親しく寶曆明和安永天明寛政享和の時代を睹聞し、文化十一年七十八歳にて尙ほ豊饒たりし、小川顯道の著『塵塚談』には、

「義太夫ぶしといふ淨瑠璃の事實、安永の比は、江戸中一めに流行し、小者調市迄も語りけり、されども人形芝居へ出る太夫は、不殘大阪ものにて、餘國の者は一人もなかりし事也、たまく江戸出生のよく語るといふ者が芝居へ出る時は、給金もな、紙一二枚計かたらせける、江戸は何業にても似せる事は器用なれど、義太夫節に限り出来ぬ事にて有しに、ちか比は義太夫節甚おとろへしゆゑに、江戸出生の太夫も、大阪上手の太夫の語りし段を語るよしなり。

と云つて居る。以て當時の消息を知るべきである。

左は享保以後江戸に徂徠した主なる太夫の顔振れである。

豊竹染太夫 越前少椽門弟 大阪の人 享保の比江戸に下る、江戸住居也。

豊竹島太夫 越前少椽門弟 和泉堺戎島の人 享保十年江戸に下る、江戸住居也。

豊竹越前少椽 寛保元年駒太夫を召連れ江戸豊竹肥前椽の芝居に下る、二年八月歸阪。

初代豊竹駒太夫 寛保元年越前少椽と共に江戸に下る、二年八月歸阪、寛延元年十一月再び江戸に下る、三年八月歸阪、寶曆十三年冬三たび江戸に下り、天明和元年冬歸

阪。

二代目竹本政太夫 寶曆十三年春より門第一座引連れ江戸に下る。翌明和元年十一月歸

阪。

竹本倉太夫

二代目紋太夫門弟。明和五年の比江戸に下り改名して紋太夫^{三代}と

なる。古今の上手にして此村屋の一流を殘すと云はる。(此の人通稱此村屋治兵衛也) 長らく江戸に在りて後ち歸阪。櫓下となる。

初代竹本組太夫

寶曆九年江戸に下る。明和元年の比歸阪。

初代竹本住太夫

明和四年江戸に下り大立者となる。天明三年歸阪。其の間江戸に在る。こと十七箇年也。天明八年再び江戸に下る。肥前座へ出勤。此の時花上野譽の石碑の淨瑠璃大當り也。文化七年江戸に歿。築地寺内妙法寺に葬る。

二代目竹本住太夫

江戸の人。祖太夫より住太夫と爲る。

三代目竹本政太夫

初め中太夫。明和二年江戸に下る。此の時無斷にて政太夫と名乗り紛紜あり、大阪江戸にて三人政太夫を生ず。四年冬歸阪。正式に政太夫と相續す。文化六年門弟氏太夫に政太夫を譲り引連れ江戸に下る。自身は竹本播磨太夫と名乗り出勤。

二代目竹本土佐太夫

安永の末江戸に下る。寛政七年歸阪。

初代竹本錦太夫

明和元年竹本一座江戸興行に付き共に下る。十一月歸阪。

豊竹十七太夫

駒太夫門弟。寶曆八年江戸に下る。九年冬歸阪。明和四年再び江戸に下り、長らく出勤。江戸に歿。

二代目豊竹駒太夫

安永七年(或は八年の始めならん)江戸に下る。天明三年歸阪。寛政元

年冬再び江戸に下り、四年冬歸阪。

豊竹鶴太夫 麓太夫門弟。江戸の人。天明二年入門、修業して江戸に歸る。

竹本大和椽 (初め豊竹三輪太夫、次に竹本大隅椽) 寶曆十三年一世一代を勤めて江戸

に下る。市之丞座へ出勤。天明和元年正月舞臺の祝儀に『清和源氏』山伏接待シテ大和椽ヲキ若狭太夫ツレ折太夫、三絃野澤喜八郎にて勤む。年内歸阪。

初代竹本春太夫 寛延二年春江戸に下る。寶曆二年歸阪。明和二年十二月、中太夫と共

に江戸に下る。四年十二月、兩人共歸阪。

初代竹本筆太夫 春太夫門弟。此の人江戸の人なりと云ふ。安永四年江戸に下り、天明

四年江戸に歿。『お駒才三』城木屋、比翼塚、花川戸等は、此の人の語り残したる淨瑠璃也。

竹本八十太夫 三代目咲太夫門弟。文化四年江戸に下る。師咲太夫死後、文化五いよ

いよ江戸住居と決心せしが、文政七年竹本播磨大椽江戸に下りし際、其の門に入り、八年四月大椽に伴ふて歸阪。堺春太夫の名前を借り受け、一代限り竹本春太夫と名乗る。

初代竹本長門太夫 寶曆三年の春江戸に下る。五年歸阪。

初代竹本文字太夫 大和椽門弟。寛延元年『忠臣藏』の紛擾より竹本座を退き江戸に下る。

『忠臣藏』には大序と掛合のおおるを勤めたり。長らく江戸に在つて歸阪。年次不詳

竹本陸奥太夫 大和椽門弟。寛延元年江戸に下り、寶曆二年歸阪。

竹本桐太夫 大和椽門弟。寶曆六年江戸に下る。大阪にては陸奥座の太夫なりし

二代目竹本内匠太夫 寛政三年江戸に下る。長らく勤めて歸阪。年次不詳

竹本雛太夫 二代内匠太夫門弟。修業熟して江戸に下る。遂に江戸に歿。

竹本鳴門太夫 大和椽門弟。寶曆の末江戸に下る。江戸住居となる。

豊竹恒太夫 二代目若太夫門弟。寶曆九年十七太夫同道江戸に下る。江戸住居なる。

豊竹氏太夫 二代目若太夫門弟。安永元年江戸に下る。六年歸阪。

初代豊竹源太夫 二代目若太夫門弟。寶曆五年江戸に下る。明和の初め歸阪。

三代目豊竹若太夫 天明の初め江戸に下る。江戸にての大立者なりし。短命にして歿。故若太夫名前は江戸に残りしを二代目巴太夫貰受けて歸り、實弟實太夫に譲りたるもの也。

豊竹鐘太夫 筑前少椽門弟。安永元年江戸に下る。三年七月歸阪。

二代目豊竹此太夫 明和二年の春江戸に下る。若竹藤九 三年秋歸阪。

豊竹岡太夫 安永三年江戸に下る。長らく勤めて歸阪。

豊竹伊豆太夫 筑前少椽門弟。寶曆十年江戸に下る。江戸住居なる。

豊竹七太夫 初代岡太夫門弟。江戸の人。大阪に上りて修行。明和七年江戸に歸る。

竹本錦太夫 三代目筆太夫門弟。天保三年江戸に下る。江戸住居なる。

五代目竹本内匠太夫 初め和太夫。文政の初め江戸に下る。竹本住太夫にて出勤。天保三

年歸阪。此の時内匠太夫と改名

二代目豊竹八重太夫 二代目此太夫門弟。安永八年江戸に下る。九年九月歸阪。天明元年

冬再び江戸に下り、二年冬歸阪。三年正月江戸土産として「おしゆん傳兵衛」猿廻しを出して古今の大當り也。通稱和泉屋平兵衛、故に泉平八重太夫と呼ばる。

三代目豊竹時太夫 二代目此太夫門弟。天明二年の比江戸に下る。七年歸阪。

四代目豊竹此太夫 畿谷南に入る西側大平と云へる旅人宿なりし故、大平此太夫と云はる。

享和元年江戸に下る。二年歸阪。文政元年春再び江戸に下り、二年冬歸阪。

五代目豊竹時太夫 文政八年冬江戸に下る。十年秋歸阪當時吾太夫也。歸阪後時太夫を改名。

初代豊竹君太夫 二代目此太夫門弟。初め喜美太夫。明和元年江戸に下る。安永二年

久々にて歸阪此の時君太夫を改む

二代目豊竹君太夫 文政元年江戸に下る。五年歸阪。

四代目竹本政太夫 文化四年春江戸に下る當時二代目竹本氏太夫也。五年九月歸阪。七年五月其の

師政太夫三代目と共に江戸に下る此の時四代目政太夫を相續師政。八年七月歸阪。

六代目竹本内匠太夫 越前大椽五代目門弟。江戸にて入門、天保十一年歸阪。十五年再び江

戸に下る。嘉永三年九月歸阪。

二代目竹本勢見太夫 天保十四年江戸に下る。嘉永四年十月江戸に歿。

初代竹本大隅太夫 嘉永三年江戸に下る。萬延元年三月歸阪此の間十。夫れより又々江

戸に下り、一年許りにて歸阪。

四代目竹本大和太夫 初代大隅太夫門弟。嘉永三年師と共に江戸に下り、遂に江戸住居とな

り、師歿後大隅太夫を名乗る。

二代目竹本大隅太夫 初代の門弟。伊達太夫の當時師と共に江戸に下る嘉永三年師に先立ちて

歸阪。師の歿後大隅太夫を相續。然るに江戸にては四代目大和太夫の二代目大隅を

名乗るあり、爰に二人大隅の形ちを爲したり。

三代目竹本土佐太夫 播磨大椽門弟。文化五年の比江戸に下る當時沖太夫。江戸にては音太夫

を名乗る。文政の初め歸阪。文政五年再び江戸に下り、七年冬歸阪。天保二年土佐太

夫を改名。三年春江戸に引移り、十年江戸に歿。

竹本富太夫

三代目住太夫

播磨大椽門弟。文政四年の頃江戸に下る。江戸にては此母太

夫改名として勤む。後古野太夫と改む。其後組太夫と改名せしが、ふと眼病を煩ひ盲

人となる。十年秋久々にて歸阪。高麗太夫にて出勤。昔八丈城木屋を出して大當り。

豊竹島太夫

三代目住太夫門弟。初め高太夫、次で大島太夫。天保十四年江戸に下

る。江戸に歿。

竹本浪太夫

播磨大椽江戸在時の入門也。初名鯉津太夫。文政二年以上阪。天保七

年の比江戸に歸る。

竹本三輪太夫

播磨大椽門弟。初め杣太夫。文政九年江戸に下る。三輪太夫と改名。

後ち土佐太夫名前相續。江戸に歿。

三代目竹本中太夫

文化六年江戸に下る。八年歸阪。

竹本紋太夫

三代目綱太夫門弟。江戸にて紋太夫と改む。古老格に進む。

竹本津賀太夫

猪の熊綱太夫門弟。文化十年江戸に下る。古老格に進み、遂に江戸に

歿。

四代目綱太夫

文政四年の冬江戸に下る。當時む天保元年夏歸阪。嘉永元年再び江

戸に下り、當時綱太夫也當時の總立者となり、引續き出勤。安政二年江戸に歿。

竹本氏太夫

天保五年の冬江戸に下る。十一年歸阪。

五代目竹本春太夫

氏太夫門弟。天保五年師と共に江戸に下り、當時さ文字太夫と改名出

勤。十一年歸阪。十三年春太夫と改名。弘化元年冬再び江戸に下り、嘉永四年歸阪。

二代目越路太夫

六代目春太夫

安政七年江戸に下る。文久三年八月歸阪。明治に入つての事歴は略之

竹本山四郎

三代目綱太夫門弟。嘉永の末竹本山城椽と受領。江戸に下り、安政元

年歸京都此の人元來京都の太夫也

豐竹生駒太夫

初代靱太夫在京當時の門弟也。初め吉野太夫。天保十三年の頃上阪。

竹本むら太夫

文久二年江戸に下る。元治元年江戸を去り甲州路に入り諸所興行中

甲府にて歿。

六代目竹本綱太夫

三代目長門太夫門弟。江戸の人。嘉永六年上阪修業。其の後江戸に

歸る。一旦廢業せしが、豐竹岡太夫又の門に入り、綱太夫と名乗り出動。其の後京都に

上ほり、山城榎の門に入り、殿母太夫と改名元治元年其の後續太夫となり、綱太夫となる。

明治以後の事歴は略之

竹本越前大椽

初め津太夫、次て梶太夫、目染太夫也。五代文政八年江戸に下る。當時染十

七箇年江戸に在り、天保十三年京都まで歸り、十四年二月歸阪。

六代目竹本染太夫

嘉永三年江戸に下り安政四年歸阪。

七代目竹本内匠太夫

初め三代目筆太夫門弟にして管太夫と云へり。筆太夫歿後江戸に下

り、守太夫後ち六代目の門弟となる。

三代目竹本長門太夫

嘉永四年四月江戸に下る。五年二月歸阪。

竹本由良太夫

三代目長門太夫門弟。天保七年江戸に下り、咲太夫と改め出動。

豐竹千鳥太夫

湊太夫門弟萬延元年江戸に下り元治元年歸阪。慶應の末より又江戸

に下る。

五代目竹本彌太夫

小熊太夫の當時江戸にて長門太夫の弟子となり、長子太夫と改む。嘉永

也五年歸阪。

竹本長尾太夫

三代目長門太夫門弟。嘉永元年自ら江戸に出でて出動。長尾太夫と

名乗る。嘉永六年秋久々にて歸阪。

竹本登志太夫

江戸の人、登龍軒と云ふ素人太夫の出也。嘉永四年長門太夫の門に入る。五年師の歸阪に伴ふて上阪。此の時僮僕として召し伴れ上ぼりし者、當時小定太夫なり、六代目綱太夫と成りし天才兒也。

豊竹巴勢太夫

初代巴太夫門弟。天保七年江戸に下る。江戸に歿。不詳。

四代目豊竹若太夫

二代目巴太夫門弟。江戸にて出勤。三代目若太夫名前を譲り受けて四代目となる。文政六年大阪に歸る。十一年再び江戸に下り、十二年歸阪。二代目巴太夫と改名。

豊竹富太夫

五代目若太夫。二代目巴太夫實弟。江戸にて出勤。文政八年上阪。十年再び江戸に下り、十二年歸阪。五代目若太夫と相續改名。

豊竹道太夫

五代目若太夫門弟。江戸の人。大阪に來りて修業。後ち江戸に歸る。

豊竹靱太夫

二代目巴太夫門弟。天保十一年江戸に下る。十四年歸阪。弘化二年再び江戸に下り、江戸に歿。

三代目豊竹巴太夫

嘉永元年江戸に下る。六年二月歸阪。

豊竹八十太夫

弘化元年江戸に下る。長らく勤めて甲州路に廻り、嘉永七年歸阪。

四代目豊竹巴太夫

六代目若太夫。天保十一年江戸に下る。當時富太夫。嘉永六年の頃歸阪。

此等幾多の太夫が前後して江戸に下り、操り各座の舞臺や各寄席の高座に出演し、江戸義太夫節の過去時代を賑はして居たのであつて、『寛天見聞記』に「其頃註寛政の頃也肥前座には住太夫土佐太夫何れも名譽の太夫にて、互に張合て操人形淨るり出語り」云々である。其の住太夫は初代住太夫にして、土佐太夫は、後に播磨大椽と受領せし二代目土佐

太夫である。兩人揃ふての肥前座の舞臺なれば、定めて噴々たる好評に盛況を呈したりしなるべし。曳尾庵の『我衣』文政七年の記事中には、左の如くに云つて居る。以て文政前後の江戸義太夫節操り芝居の概況を想見すべし。

義太夫節ハ政太夫信太夫死去シテ十餘年、人形芝居中絶シタリシヲ、十年以前津賀太夫ト云者アリテ是ヨリ再興シヌ、四五年以前ヨリ氏太夫又宮戸太夫下リテ餘光ヲ添テヨリ、年々絶ル事モナクテ相應ニ繁昌シタリ、然ルニ又今年四月上旬古ク絶タル薩摩座ヲ再興シ、茶屋三軒取除テ一ツノ戯場ナリヌ、四月下旬ヨリ始リケル、竹本播摩太夫元土佐太夫又多佐太夫竝ニ綱太夫、大和太夫、三絃ハ名ニオフ鶴澤蟻鳳始伊右衛門、一世一代福壽齋ト改名、八九年フリニテ出座ス、下リ豊澤仙右衛門上手也、人形寺田才二、吉田三吾、江戸ノ齋藤肥後始吉川清五郎、今ノ藤井彌市先彌市實父、ナドニテ花々敷操芝居ヲ興行セリ、予モ此頃見物ニマカリシニ、イカニモ播磨ハ近年ノ上手トモ云ハレ、綱太夫ノ甚面白キ語リ口ニテ、素人婦女ノウツツヲヌカサセタリ、三絃仙右衛門近年ノ上手ト思ハル、二十餘年フリニテ誠ラシキ操ト成モ太平ノ有カタキト悦ベル事トス云々

顧ふに江戸に於ける義太夫節の流行は、京阪兩地よりは大約半世紀遅れ、京阪地方には既に漸く時人の好遇より離れつゝありし義太夫節も、江戸に於ては歡待好評、市中の人氣を沸かさしむるほどの盛況を極めて居たのであつた。明和安永及天明の始めに至る大約二十年は、まさに江戸義太夫節の極盛時なりし。京阪地方の名ある太夫は

此の盛況を耳にして續々江戸に下り、各座に出演して好評を取り、殊に明和元年竹本座の一連來りて『姫小松子の日遊』を外記座に上場し、百有餘日に互るの大入りを取つて景氣を煽りてよりは、いよゝゝ熱度を高め來り、同七年福内鬼外の傑作『神靈矢口渡』を上場し、非常の大入り大當りを取るや、容楊黛、紀上太郎、松貫四等續々新作正本を供給するに至り、一層の盛況を添ふることとなり、肥前外記の兩座は兩々對立して盛りを競ひ、外記座には豊竹紋太夫あり、住太夫あり、肥前座には豊竹氏太夫あり、筆太夫あり、三絃には鶴澤喜八あり、野澤富八あり、共に外記座野澤蟻鳳あり、野澤庄次郎あり、共に肥前座別に結城座ありて亦勢を添へ、明和、安永、天明の盛況を作興して居たのでありし。

されど斯界衰退の期は須臾にして襲來したのである。歌舞伎芝居の壓迫は年を逐ふて加はつて來た。時人の操り趣味は日を逐ふて減退するばかり、寛政の末年よりは漸次に不況となり、嘉永の末に至つては、肥前外記の兩座も廢絶し、殆ど廢滅の姿となるに至つたのでありし。

左は初代竹本長尾太夫自筆の傳記『睦佳詩野志雄里』二代目春子太夫が淨瑠璃の雑誌誌に寄せたるもの中に見わたる三代目長門太夫の江戸興行嘉永四年四月江戸に下り五年二月歸阪の記事の一節である。嘉永當時の江戸義太夫節淨瑠璃界の消息一般を推すべき參考にもと轉載する。

茅場町薬師芝居、以前の狂言の中へ平假名三段目、長門太夫五月節句より出勤の評判高く、初日早朝より四方の見物詰かけて、山の如き大入にて帳場上ツたり、略中千秋樂の末迄大入にて廣大の儲けを致されたり。七月十五日より津久井勘七

の芝居となる。場所は赤城と申て西北手にあたつて、山手の邊鄙なり、此邊は御旗本衆御家人衆の屋敷計りの土地にて、此度は屋敷の見物を受ける見込と見わたる、狂言は忠臣藏にて、九段目と茶屋場由良之助長門太夫、六ッ目と平右衛門咲太夫、四段目と大切累土橋卷太夫、今の越おかる利太夫、九太夫中太夫、判内賀太夫、此餘は略す藥師にて咲太夫を斷りたる故に、此芝居には此方長尾太夫也を遣はす人形吉田冠二、同藤九郎、西川伊三郎、此餘は略す。扱初日出したる所、暑中といひ場所悪敷、殊に太夫人形不座なるが故に見物三步通より上は來らず、甚だ淋しく不入の上に、金主津久井勘七病死す、又引續き矢倉主結城孫三郎も死去す、此芝居日數二十日計り幸抱すれども不入にて相済み残りの日數は寄場へ出勤致され漸々と相濟む、右兩方の金方手放れの上は寄場所々へ師匠自前の出勤、誠に寄場の大入古來稀なりとの噂なり、それ故越年致され益々大入、三月中旬に至り實父傳右衛門大病の由天王寺より早便を以て知らせ來るに就き、俄に江戸發足有て皆々無事に歸國致されたり云々。

本場の大阪での櫓下長門太夫の初下り、二た興行目に『忠臣藏』を出して、如何に山手の邊鄙なりと云つた所で、僅に三步通りの見物とは洵にあつけなき次第にして、以て當時の江戸に於ける義太夫節の渴仰者が、主とし下町邊の所謂町人階級の人々にのみ限られて居つたかど觀察されるのである。

第十二章 明治時代の義太夫節淨瑠璃

明治初年の操り各座―其の顔振

明治七年の堀江座の顔振 明治八年の文樂座の顔振 明治六年の大番附 斯界の古老

は次第に凋落し太夫の實目は下落し來る景氣

彦六、文樂兩座の對立 當時の彦六座

の顔振 文樂座の顔振 二十三年、二十四年の彦六、

彦六座の瓦解―其の後を承

けて起つた稻荷座―其の顔振 明樂座起る 堀江座の再興―其の顔

振 堀江座の好評 時人の堀江座評

越路太夫の隱退と大隅太夫の退座 機運の急轉直下

近松座の瓦解 首振り芝居とな

つた近松座

明治の斯界を代表した越路太夫と大隅太夫 越路太夫の略傳

養父は素人淨

瑠璃の仲間 彼之初稽古 太夫志願 野澤吉兵衛の門に入る 初めての旅興行 江戸に下る 越路と改名 江戸興行中の苦心と難行 吉兵衛の死 京都に歸り春太夫の下に頼る 彼の不平 春太夫の懇諭 初めて文樂座に入る 當時の文樂座の顔振 次第に名譽をあらはし來る 櫓下と成る

越路の長所と大隅の長所 越路に對する批評 大隅が人氣を博した

二ツの原因 大隅太夫の略傳

大隅の死に對する世人の同情 近松座より發表した退座前後の消息

時人の

大隅評 落寞蕭條の現下の斯界 明治人に歎はれた流行淨瑠璃

明治初年の操り各座
―其の顔振

嘉永の末年外艦渡來の警報に長夜の眠を驚かしてより、尊王攘夷の論争となり、安永戊午の獄となり、長州兩度の征討となり、上下を擧げて恟々其の堵に安せざるの國狀となり來りしより、娛樂的の興行ものは等しく其の影響を受けて一般に不況となり、唯さへ萎菲銷沈の徑路をたどりつゝありし義太夫節操り芝居は、殆ど氣息奄々の窮狀に彷徨することゝなつたのでありし。されど明治に入つて百事緒に就き、文運煥發の機運に遭逢するや、再び頭を擡げ來り、茲に蘇生的、一時の盛況を呈するに至つたのであつた。

明治の初めには、竹田の芝居、堀江の芝居、座摩社内の芝居、稻荷北門の芝居等あり、太夫には豊竹巴太夫あり、若太夫あり、呂太夫あり、京都より下つた竹本山四郎あり、綱太夫^五目長尾太夫^六目豊竹時太夫、竹本古靱太夫、織太夫^{後五}目綱太夫、津太夫、久太夫等あり、文樂の芝居には^五目春太夫あり、住太夫あり、^八目染太夫あり、^五目組太夫あり、^五目彌太夫あり、實太夫あり、越路太夫、氏太夫、越太夫、路太夫等あり、孰れも歴乎たる語り人にして、到底現下の太夫連の企て及ぶ可らざる伎倆の尤者なりし。されど一座の顔振も定まり、常芝居的秩序ある興行を持續して居たのは僅に文樂一座あるのみにして、他は其の興行も斷續的で、一座の顔振も始終移り變り、離合常なく、一種の寄合興行とも云ふべき状態の下に、其の提携を持續しつゝあつたのでありし。

明治七年六月竹田の芝居より引越し、堀江の芝居にて興行した竹本山四郎一座の顔振は左の如し。
槽下太夫竹本山四郎、人形吉田金四也。

外題 菅原傳授手習鑑

大序より
四段目迄

大序

豊竹十三太夫
竹本小文字太夫
竹本古登太夫
竹本纒の太夫

加茂堤の段

竹本淺尾太夫
竹本梶摩太夫

傳授の段

口竹本宮子太夫
切竹本津太夫
跡竹本小賀太夫

道明寺の段

口竹本春子太夫
中豊竹呂太夫
切竹本長尾太夫

時平館の段

竹本織尾太夫
豊竹呂太夫

おそめ 久松 新板歌祭文

野崎村の段

口豊竹靱登太夫
中竹本津太夫
切豊竹古靱太夫

伽羅先代萩

御殿の段

竹本春子太夫
豊竹若太夫

三味線

鶴澤清六
鶴澤友治郎
鶴澤仙叶
豊澤

鶴澤豊造
鶴澤鱗系
鶴澤豊吉

人形

豊松東十郎
吉田喜十郎
吉田金四郎
吉田光造

縁の下の段

竹本小賀太夫

尼ヶ崎の段

竹本春戸太夫
豊竹巴太夫

繪本太功記

寺子屋の段

中豊竹若太夫
切竹本織太夫

天拜山の段

竹本梶太夫

配所の段

竹本文字太夫

北嵯峨の段

竹本山四郎

佐田村の段

口豊竹瀬太夫
中竹本春戸太夫
切竹本濱太夫

車引の段

口竹本澤太夫
松王丸竹本梶太夫
梅王丸竹本織太夫
櫻丸竹本古靱太夫
時平豊竹巴太夫

まさに當時の名人巧手を一堂に集めたるの観がある。而も一座中の呂太夫は後に
文樂座の中堅となりし人春子太夫は後の大隅にして、古靱太夫は前に文樂に在りて、

越路太夫と相竝んで、名聲を馳せたるほどの人氣太夫なりし。

古初太夫は十一年御靈裏門の芝居に出動し大内裏

狐の子別れを語りしが、千秋樂の當夜樂屋にて大工頭領某に暗殺さる。

然るに一方文樂座の顔振はと見れば、明治八年の三月興行の役割は左の如し。

文樂座 明治八年 役割

(春太夫は七年冬より退座此の興行には櫓下ばかりにて出勤せず)

樓下 太夫 竹本春太夫 人形 吉田玉造

繪本太功記 十段目迄

配膳の段

口竹本喜太夫 奥竹本實太夫

中國陣所の段

中竹本路太夫 切竹本梶太夫

千本通の段

口竹本越の太夫 奥竹本彌太夫

妙心寺の段

口竹本南部太夫 奥竹本彌太夫

本能寺の段

口竹本春馬太夫 切竹本氏太夫 跡竹本長子太夫

杉の森の段

中竹本住太夫 切竹本住太夫

高景軍配の段

竹本中太夫

尼ヶ崎の段

中竹本三根太夫 切竹本重太夫

伽羅先代萩

戀鹿子娘道成寺

御殿の段

口竹本組太夫 切竹本越路太夫 跡竹本須磨太夫

所作事

シテ 竹本越路太夫
ソキ 竹本三根太夫
ツレ 竹本南部太夫
阿佛坊 竹本梶太夫
陀佛坊 竹本組太夫
白拍子 吉田玉造

三味線

豐澤團平 鶴澤清四 豐澤廣助

鶴澤右衛門 鶴澤徳太郎

人形

吉田玉造 吉田長造 吉田兵治

斯界の古老は次第に凋落し太夫の貫目は漸次に下落し来る

されど逆に復活盛隆の機運に向つた斯界の景氣

彦六、文樂兩座の對立

彦六座の顔振

彦六座の創立者は柳適太夫にして、此の人日本橋北詰東へ入る安井稻荷前の澤の席の席主なりしが、之を廢して新たに彦六座を創立したのである。自分も座主なり太夫なりで出座し、なかくの語人なりし。中にも『彦山權現』六ッ目を得意としたりしより、直に座名に採つて彦六座と命名したのである。

東前頭二枚目なりし津賀太夫も同六年に逝き、十年には春太夫湊太夫共に文樂座の權下たりし巨頭十四年には竹本山四郎、十六年には六代綱太夫、十七年には八代染太夫も歿し、斯界の古老は次第に凋落し、太夫の貫目は漸次に下落して來たのであるが、時代は此頃よりしていよく文化煥發の盛運に向ひ來り、操り芝居の景氣は、此等名人巨頭を喪失せるに拘らず、却て逆に復活盛隆の機運に向つたのでありし。

先此、文樂座は稻荷より轉じて松島に移り、明治五年の正月より新築芝居其の後八千代座となりたる芝居に於て興行して居たのであるが、其位置一方に偏したるがためなるべし、開場當時の景氣には似ず、次第に入勝ちとなりしより、再び移轉と決し、御靈土田の席を買ひ取りて新築に著手し、十七年九月落成して之れに移轉した。開業式御祝儀壽式三番匠越路太夫、彌太夫、浪太夫、常子太夫、三代目越路太夫吉兵衛、綱造、勝市、丑之助、青鳳、人形玉、造紋十郎、玉助、玉治等の顔振なりし。然るに一方文樂一派に對抗して其氣を吐くべく彦六座起り、此の年二月より興行し、六月興行の後改築に著手し、九月新芝居落成開業式を擧げた。

彦六座の一連は、文樂一派外の同志の汲合とも云ふべき集團にして、明治七年春太夫が團平と共に文樂座を退くに方り、之と去就を共にした不平黨の一味も亦其中に在りし。一座の顔振は、住太夫元越駒太夫、柳適太夫、源太夫、朝太夫、春子太夫等にして、三味線には團平あり、新左衛門後三代あり、勝七、廣作、松太郎等あり、人形には吉田才治、豊松東十郎、吉田辰五郎等あり、之れよりしていよく彦六、文樂兩座二大勢力の對抗となり、其の後一座の顔振には多少の異動を來したりと雖も、爾來十年、兩座相競ふて斯界を賑は

して居たのであつた。

文樂座の顔振

新芝居移轉當時の文樂座の顔振は左の如し。

明治十八年三月興行 文樂座

櫓下

太夫 三味線 竹本越路太夫
係 豊田廣造
人 吉田玉造

義經 千本櫻

大序より
大詰まで

堀川館夜討の段

切竹本路太夫

椎木の段

奥竹本長尾太夫

伏見稻荷の森

口豊竹富太夫

壽しやの段

切竹本越路太夫

静別れの段

奥竹本津太夫

川連法眼館の段

切竹本津太夫

嵯峨野

中竹本織太夫

庭先きの段

竹本氏太夫

庵室の段

次竹本谷太夫

豊竹呂太夫

豊竹廣助

加島村の段

奥竹本南部太夫

三味線

豊竹鶴澤大助

渡海屋

中竹本多門太夫

鶴澤大助

豊竹鶴澤大助

銀平内の段

次竹本長尾太夫

豊竹吉兵衛

豊竹吉兵衛

二十三、四年の彦六、文樂
兩座の顔振

明治二十三年及二十四年の彦六、文樂兩座の顔振は左の如し。

いなり

彦六座 二十三年一月初日 役割

(此の興行に始めて櫓下を出す、仲間大関著氏太夫の扱ひにて納る)

櫓下

太夫 三味線 竹本大隅太夫

豊田辰五郎
吉田辰五郎
竹本辰五郎

別座

竹本辰五郎

乗掛合羽伊

賀

越

大序より
岡崎迄

上杉館の段 奥竹本袖太夫

圓覺寺茶の湯 豊竹此太夫

祝言の段

澤井城五郎 竹本生島太夫

切腹の段

般若阪の段 奥竹本芳太夫

八幡の段 竹本吉三太夫

政右衛門 中竹本伊達太夫

屋敷の段

大廣間 大内記豊竹新靱太夫

傳授の段 林左衛門竹本山登太夫

掛合

五右衛門竹本吉三太夫

繪本太功記

尼ヶ崎の段 中豊竹此太夫

切竹本大隅太夫

三味線 豊澤團平

三味線

豊澤團平 豊澤松太郎 豊澤仙昇 豊澤權平

文樂座 二十三年二月初日 役割

沼津驛の段 豊竹新靱太夫

此の所出遣

平作内の段 竹本越太夫

此の所出遣

新開所の段 口竹本源枝太夫

此の所出遣 奥竹本喜太夫 吉田辰五郎

岡崎の段 中竹本生島太夫

切竹本組太夫

三味線 豊竹松太郎

おなつ連理の松

住吉の段 竹本芳太夫

中竹本伊達太夫

堺港町の段 切竹本朝太夫

人形

吉田辰五郎 吉田三吾 吉田宗十郎 吉田紋之助 吉田兵吉

櫓下 別座

太味線 人形

竹本越路太夫 豊澤廣助 吉田玉造 竹本津太夫

妹背山婦女庭訓 大序より 大切迄

蘇我蝦夷子館の段 竹本登茂太夫 竹本壽太夫 竹本むら太夫

三笠山の段 竹本津和太夫

掛乞の段 竹本高尾太夫

萬歳の段 竹本さの太夫

芝六忠義の段 竹本路太夫

奥山の段 竹本長尾太夫

花渡しの段 竹本氏太夫

山の段 大判事竹本津太夫 段久我之助竹本谷太夫 掛合定高竹本越路太夫 ひな鳥竹本綾太夫

鎌足大臣祈の段 出遣早變り 竹本緑り太夫 桐竹紋十郎 吉田玉助

三味線 豊澤廣助 鶴澤七叶 鶴澤勝七

人形

吉田玉造 吉田玉助 桐竹紋十郎 吉田玉作

衫酒屋の段 竹本文太夫 竹本津太夫

道行 竹本路太夫 豊竹綾太夫 竹本緑り太夫 竹本津和太夫

鱧七上使の段 竹本高尾太夫 竹本長尾太夫

姫戻りの段 竹本谷太夫

御殿の段 竹本越路太夫

入鹿退治の段 入鹿竹本氏太夫 橘姫竹本さの太夫 淡海竹本文太夫 其他竹本菊枝太夫 竹本越路太夫

彦六座 二十四年九月初日役割

(此の時豊竹時太夫入座)

日本賢女鑑 續十册

櫓下 太夫 三味線 竹本大隅太夫 豊澤團平 竹本組太夫

堅田浦出陣の段

竹本芳太夫

佐々木隠家の段

竹本朝太夫

勢田ヶ崎の段

竹本組代太夫
竹本菅太夫

木津守岩の段

竹本小隅太夫
竹本越太夫

時政首實験の段

竹本生島太夫

木津守智略の段

豊竹新靱太夫

治郎作母物狂ひの段

竹本田喜太夫

天守の段

竹本阿蘇太夫
竹本七三太夫

比良ヶ嶽の段

豊竹小靱太夫
豊竹此太夫

坂本城中の段

豊竹時太夫

櫻 鏝 恨 鮫 鞘

御所櫻堀川夜討

鰻谷の段

竹本伊達太夫
竹本大隅太夫
豊澤團平

侍従太郎館の段

竹本山登太夫
竹本組太夫

堀川御所の段

竹本春子太夫
竹本源太夫

夜討の段

竹本組の太夫

三味線

豊澤團平
豊澤松太郎
豊澤廣作
豊澤濱右衛門

豊澤鶴仙
豊澤寛三郎
豊澤富助
豊澤源吉

人形

吉田光造
桐竹龜松
吉田鹿造

文樂座 二十四年十月 役割

源 平 布 引 瀧

大序より
四段目迄

檜 下

太夫 三味線 人形

竹本越路太夫
豊澤廣助
吉田玉造

木曾義賢館の段

豊竹巴勢太夫
竹本調太夫
切竹本路太夫

竹生島の段

掛合

實盛竹本谷太夫
飛彈左豊竹綾太夫
衛門竹本むら太夫
小まん竹本代太夫
宗盛竹本上太夫
忠太竹本尾上太夫

矢橋の段

豊竹呂瀬太夫

九郎助住家の段 中竹本高尾太夫
次豊竹綾太夫
切竹本長尾太夫

御殿の段 切竹本津太夫
三味線野澤吉兵衛

音羽山の段 口竹本久太夫
奥竹本緑り太夫

艶容女舞衣

花上野譽碑

酒屋の段 中竹本谷太夫
切竹本越路太夫

志渡寺の段 中竹本壽太夫
次竹本相生太夫
切豊竹呂太夫
敵討の段 竹本久太夫

三味線

豊澤廣助
鶴澤勝七
野澤勝鳳
鶴澤右衛門
鶴澤重太郎

豊澤花助
鶴澤鶴太郎
鶴澤徳太郎
豊澤吉之助
鶴澤廣七

人形

吉田玉造
桐竹紋十郎
吉田玉治
吉田兵吉

二十八年より三十六
年に至る文樂座の顔
振

御靈に移つた後の文樂座は、俄に景氣を恢復するまでには至らざりし。されど櫓下越路太夫の美調と津太夫、呂太夫の老熟せる藝風とは毎興行可なりの入りを取り、次第に景氣を恢復し來り、二十八、九年の頃よりして一層好況となり、二十八年四月前「玉藻前」中「歌祭文」切「楠昔噺」を出し道春館津太夫、野崎村越路太夫、徳太夫住家切呂太夫にて四十七日間の大入りを取り、之れより以前の興行は概ね三
十日前後、短きは二十日内外也二十九年二月前「加々見山」中「河原の達引」切「染分手綱」を出し、又助住家呂太夫、長局切越路太夫、堀川津太夫にて五十日間の大入り、次で四月「忠臣藏通し」「判官切腹津太夫」、「勘平切腹呂太夫」、「山科越路太夫、掛
合由良之助津太夫、おかる越路太夫、平右衛門呂太夫にて六十四日間の大入りを取り、爾來年々左の如き好況を持續し、

三十年一月初二日 前『木下蔭狹間合戦』中『艷容女舞衣』切『白石噺』四十日間
一月八日皇太后陛下薨去
に付十五日間音曲停止

竹中砦 呂太夫 壬生村 津太夫 酒屋 越路太夫

同年三月初十日 『菅原傳授手習鑑』通し 六十日間

相丞名残りの段 呂太夫 櫻丸切腹 津太夫 松王首實驗 越路太夫

三十一年一月初一日 前『祇園祭禮信仰記』中『伽羅先代萩』切『壽連理の松』

天下茶屋の段 呂太夫 『先代御殿 越路太夫 湊町 津太夫

同年三月初二日 『妹背山婦女庭訓』通し 四十九日間

山の段掛合 大判事 呂太夫 久我之助 文字太夫さの太夫此の時改名 定高 津太夫

難島 越路太夫 杉酒屋 津太夫 蟻七上使 呂太夫 御殿 越路

太夫

三十二年二月初十日 前『日吉丸稚櫻』中『阿波の鳴戸』切『國性爺』四十二日

間

小牧山城 中 津太夫 十郎兵衛住家 越路太夫 獅子ヶ城 呂太夫

同年四月初二日 前『染分手綱』切『紙子仕立兩面鑑』五十三日間

沓掛村 呂太夫 阪の下 文字太夫 重の井子別れ 越路太夫

大文字屋 口南部太夫鶴尾太夫此時改名 奥津太夫

三十三年一月初一日 前『八陣守護城』中『艷容女舞衣』切『岸姬松』五十日間

二條城中毒酒 呂太夫 清正本城 津太夫 酒屋 越路太夫 岸

姫飯原館 文字太夫

同年三月初一日 前『新薄雪物語』中『嶼山古跡松』切『新版歌祭文』六十日間

正宗住家 呂太夫 園部兵衛邸 津太夫 豊成館 越路太夫

野崎村 文字太夫

同年五月初二日 前『ひらがな盛衰記』切『苧萱桑門筑紫轢』四十三日間

逆櫓の切 呂太夫 神崎揚屋 越路太夫 宮守酒 津太夫

同年九月初五日 前『加賀見山』切『伊達娘戀緋鹿子』四十七日間

又助住家 呂太夫 長局 越路太夫 八百屋内 津太夫

同年十一月初一日 前『太功記』中『合邦辻』切『明烏六花曙』四十一日間

杉の森 呂太夫 尼ヶ崎 津太夫 合邦住家 越路太夫 山名屋

文字太夫

三十四年一月初一日 『菅原傳授手習鑑』通し 四十七日間

相丞名残り 津太夫 櫻丸切腹 呂太夫 松王首實驗 越路太夫

同年三月初一日 『假名手本忠臣藏』通し 七十四日間

判官切腹 津太夫 勘平切腹 呂太夫 掛合 由良之助 津太夫 おかる 越

路太夫 平右衛門 呂太夫 山科 越路太夫

同年五月初五日 前『木下蔭狭間合戦』中『河原達引』切『御所櫻堀川夜討』四

十四日間

竹中磐 呂太夫 壬生村 津太夫 おしゆん堀川 越路太夫 辨

慶上使 文字太夫

同年十一月初日 前『先代萩』切『櫻鏝恨鮫鞘』四十日間

原田屋敷 呂太夫 御殿 越路太夫 鰻谷 津太夫

三十五年一月初日 前『祇園祭禮信仰記』中『夕霧曲輪文章』切『染分手綱』四

十一日間 此の時の『夕霧』は、越路太夫大坂にて初めての出し物也。

天下茶屋 呂太夫 吉田屋 越路太夫 重の井子別れ 津太夫

同年三月初日 前『一の谷嫩軍記』中『岸姫松』切『桂川連理柵』四十一日間

熊谷陣屋 中南部太夫 呂太夫 飯原兵衛館 越路太夫 帶屋

津太夫

同年四月初日 前『大江山酒顛童子』中『新板歌祭文』切『傾城反魂香』四十日間

松太郎住家 津太夫 野崎村 越路太夫 將監閑居 文字太夫

三十六年一月初日 前『里見八犬傳』中『戀飛脚大和往來』中『狂言』花くらべ四季

の壽 切『加賀見山』越路太夫六代目春太夫と變名披露の興行此時文字太夫三代目越路太夫と相續 四十九日間

芳流閣 津太夫 新の口村 春太夫 長局 越路太夫

同年三月初日 前『本朝二十四孝』切『河原達引』第五回博覽會開會にて盛況 五十三日間

山本勘助母閑居 津太夫 十種香 春太夫 堀川 越路太夫

同年五月初一日 前『妹背山婦女庭訓』 切『壺阪靈驗記』春太夫攝津大椽受領號披露の興行也。此の時大隅太夫出座

七十五日間の大入り

山の段掛合 定高 越津大椽 羅島 越路太夫 大判事 津太夫 久我之助 染太夫

杉酒屋 越路太夫 鎌七上使 津太夫 御殿 攝津大椽 澤市住

家 大隅太夫

文樂以外の操り芝居が、彦六座倒れて稻荷座となり、明樂座となり、堀江座の再興となり、近松座の創立となり、四十五年一月開場 興廢常なき有様なるに反し、克く不斷の命脈を維持して、今日に及んで居るのである。

彦六座の瓦解―其後を承けて起つた稻荷座 其の顔振

「猿ヶ島仇討物語」

彦六座は二十六年の九月興行を最終とし、二十七年二月瓦解した。其の退轉の後を承けて起つたのが稻荷座 博勞町稻荷北門 である。二十七年三月二十六日開場したが、其の中堅は竹本彌太夫、竹本大隅太夫 初め春子太夫、稻荷座の初舞臺に大隅太夫と改名、三絃豊澤團平の三人にして、彌太夫、團平は檯下に居り、大隅太夫は別座の庵に据わられて居る。明治二十八年十月十七日興行には、珍らしくも、『猿ヶ島敵討物語』と云ふ變り外題を上場して居るのであるが、其の場割を左に掲ぐる。以て當時の同座の顔振をも見るべし。

猿松次郎が奇體の妖術 三國ヶ嶽發端は祖交は山へ忠義の柴菊

日本一黍團子

祖母は川へ恩愛の洗濯 祖出村の出立は 桃太郎が不思議の神術

猿ヶ島敵打物語

第一號より第十號敵打まで

蟹が困苦の仇討に鉄の刃の返り忠覺風辰す寶鏡さいが栗が改心の切腹 蟻の信義に竹姫の貞女動かぬ忠義は石臼三峰の助太刀栗塚のかけ腹から栗の身代り

第一號

三國嶽の段

此の所人形出つかひ中乗り

第二號

蟹多館の段

人形出遣ひ中乗り

第三號

猿冠者新御殿の段

第四號

有田義久館の段

第五號

五臺山麓辻堂の段

此の所人形出つかひ

第六號

五臺山魔風賊窟の段

第七號

明神の森竹雄姫術受の段

此の所人形出遣ひ大中乗り

第八號

佐治川洗濯桃拾の段

第九號

栗右衛門内桃太郎出現の段

此の所人形出遣ひ中乗り

勢揃より
猿ヶ島敵打の段

此の所人形出つかひ

三味線

竹本越五三太夫
竹澤團平

竹本光瀨太夫
竹新靱太夫

竹本祖の太夫
竹本梅太夫

竹本偶榮太夫
竹本越七三太夫

竹此太夫

竹本登茂太夫
竹本彌太夫

竹本新靱太夫
竹本偶榮太夫

竹本七五三太夫

竹本此太夫

竹本大團太夫
竹澤團平

竹本新靱太夫
竹本七五三太夫

竹本梅登太夫
竹本偶榮太夫

竹本朝靱太夫
竹本彌太夫

三味線

三十一年比の稻荷、文樂兩座顔振

明樂座起る

堀江座の再興―其の顔振

豐澤廣作	鶴澤仙次郎	豐澤團平	豐澤源吉	鶴澤友松	豐澤團之助	豐澤仙昇	豐澤松太郎	三味線	人形
吉田駒十郎	豐松清十郎	吉田三吾	吉田玉松	吉田玉米					

三十一年比の稻荷座には、大隅太夫、彌太夫の兩雄に加ふるに組太夫あり、之に次では雛太夫あり、新靱太夫あり、伊達太夫、春子太夫、柳適太夫、芳太夫、菅太夫、生島太夫あり、文樂座の中堅越路太夫、津太夫、呂太夫の三巨頭、次ではむら太夫、綾太夫、源太夫、染太夫、七五三太夫、文字太夫、高尾太夫、叶太夫等の若手の錚々ど相對して、兩々競ふて市中の人氣を賑はして居たのでありし。

されど稻荷座の運命は太た短期なりし。三十年十月興行後面白からざる經緯となり、三十一年六月遂に瓦解した。其の後を承けて起つたのが明樂座であるが、三十一年十一月創立此亦僅に四箇年にして、三十六年一月興行限り退轉した。明樂座の退轉より堀江座の再興となるまで、三十八年九月再興、其の間約三箇年、二箇年七月、大隅太夫は三十六年五月、六代春太夫改名披露の興行の時より文樂座に入り、次で時太夫も亦文樂の舞臺に上ぼり、綴太夫、靜太夫等青年有爲の太夫も亦此の座に入り、まさに文樂一座を以て斯界を横斷せんとするの時に當つて堀江座が再興された。

堀江座は春子太夫、伊達太夫、新靱太夫、雛太夫、長子太夫等の若手の錚々の一團にして、三十八年九月より開場し、翌三十九年三月よりは竹本住太夫も入座し、鍛太夫、米太夫等の青年有望の太夫もあり、一座車輪になつて活動し始めたるより、文樂一座だけでは、何んとなく不足感^{ものたりな}じを以て、荐りに其の渴を訴へて居た斯道の好者は、歎呼して之を迎へ、開場以來非常なる評判を取り、四十年三月よりは、大隅太夫も亦來つて此の一座に加はるに至り、更に一層の景氣を作興するに至つたのであつた。

三十九年二月興行に對する時評は左の如くである。淨瑠璃雜誌四十七號所載
中村商海子の批評也

堀江座に於ける『妹脊山婦女庭訓』素人評

さて長子太夫の『芝六忠義の段』「様子立聞く女房が」のまくらより聞しが、性來雜聲なる此の人に斯る場所は全然不適當である、何となれば段中の主人公たる芝六は薩張押が利す、お雛、三作の情が薄く、眼目たる「一生の智恵も壽命も十三年にちぢめたか」の邊りも「思へばく今日の日は我身一人の悪日か由緒正しい武士の子を一生狩人山賊に朽果さすばかりか、所の法に行はれ非業の死は殺生の罰か報ひか悲しや」云々の邊りは、「一言一句悲痛胸に迫りて見物の同情を曳く所なるに、お雛の愁歎一向に感じなかつた、彼の近松半二が「隨分骨を折つて作りはすれども太夫に語り殺さるゝこそ悲しけれ」云々と言し逸話も思ひ出されたのである、然し苦言を云ふも決して當人を非難するにあらず、畢竟技藝上末の榮を思ふ最良の老婆心に他ならずである、三味線の龍助は老熟にして穩健、相變らずの好人氣である、切の新靱太夫は想像せしよりも能く、至極堅實に語り、芝六の生酔などは最も適物にて例の巻舌も長く「あすの明六ツがゴンと鳴さ」より「おんまり嬉しき、身祝ひに呑酒屋叩き起して、御酒五合供へた」の邊りは輕妙にて上々の出来なり。

後のにて「出世の雲が見ゆるぞく」より「早う明六ツが鳴て下され天道様頼みますく」も申し分なく、「嬉しひも六ツ悲しひも六ツ」まで成蹟良好大喝采、鎌足公も至極沈著の態度を以て語り、大に貫目があつた併し末段「天の岩戸」を「天戸」と語るは如何、團丸の絲は無難で結構なり、手摺の方は吉田玉治の芝六「憂を拂ふ玉簪」と芝六の生酔、手拭にて顔を包み、心の苦痛を酒にまぎらす思入れ申分なし、箕助のお維も宜く、勞き三作を捕れて後のクドキ文句と合一。その愁歌も哀く「覗く表は裏表、夜明は我子の最期時」のあたり、人形とは思はれぬ程宜いので見物を泣かしたのである。次の「花渡しの段」は角太夫熱心に語つてゐたれど、此の人の語りぶりは咽喉に何かツマリし様で聞憎かつた併し例の入鹿の笑ひは大舞臺で彼の「吉野の牧より狩出したる其の馬引け」の乗地も太く末段の「響の音はリンくくく」より段切は意外の上出来にて満場大喝采丈に取つては大儲けさいふの他なし。絲の吉勝も相應によく、角太夫の乗地になりてタキキも充分答はたり、手摺の吉田玉治の入鹿大臣大舞臺に使ひ、頭と衣裳が良く、お刺に斬新であるから申分なく、馬に乗る所などの工合ひは奇麗な手際でその技倆や賞すべしでたつた、兵吉の大判事はモウ少し、玉松の後室は人形の顔が若すぎて一寸と滑稽であつた、倭次は本題の眼目とする「山の段」であつたが、此の場は近松半二等の作として輿論の人口に膾炙せられ、而して通例三の切「山の段」と「杉酒屋」と「道行」及び「御殿」を以てこの名作を代表するのであるが、此の數段の中「山の段」は最も技巧の至れるものにて、凡そ淨瑠璃作者の先づ最も重きを措き、技を盡し巧を弄するは三の切たる事は勿論であるが、尙この作は三三節目に全力を籠めたるは稀なるべし、別けてこの「山の段」は趣味甚だ豊かにして、舞臺上精巧なるパノラマ的油畫にも優適すべく、實に見ても聽ても將た瞑想するものにして、此の一段は趣味甚だ深く、要するに耳には頗る麗しく、一種の樂劇として成功せしものである。さて前段「花渡しの段」に幕を引かず淺黄幕を卸し兩床の出来るを待て切て落すと「山の段」にて、

頃は彌生の難の節句、櫻雲蒸すが如き妹山春山の遠景、東西相對する兩様の山莊、駭珠を躍らす急灘の吉野川例の仕掛で廻る早瀬もお約束通りで、その装置には價値あり、同時に左右二階、棧敷の膝隠しを打返すさ、これも一面に櫻花の釣枝となり、先づ満足なる道具立て、その綺羅美やかなるは随分衆目を驚かしたのであるが、同座仕打が道具人形衣裳等に善を盡し美を盡し資金を吝まざる所は人の意表外で、實に感銘するの外はないのである、この場の役割は

大判事 竹本春子太夫 久我之助 竹本鏡太夫 三味線 豊澤新左衛門 山以上の方

後室定高 竹本伊達太夫 辰羅島 竹本羅太夫 三味線 野澤市治郎 琴 豊澤

直三郎 山以上の方

にて先づ大判事の春子太夫が第一の呼物なり、案するに完世翁式の型を學びしものと覺しく、節に折々非凡なる語り口がチャリさあつたが、若手にも似ずこの難物を随分濫く雄健に語りコナシ、加も「身の中の腐りは殺ですつるが跡の養生、畢竟親の子のま名をつけるは人間の私し、天地から見ると時は同じ世界にわいた蟲」凡神的思想めきたる名文句と、悲壯なる「げに道理嫁は大和掣は紀伊國、妹脊の山の中に落つる吉野川の水盃、櫻の林の大鳥壺、目出度祝言さしませうはい」の名句と、「兎にも角にも世の中の子さいふ文字に死の聲の」邊り、句を最も長く語り出したり更に貫目ありて人形を活し、外猛くして内情ある大判事が、愁を見せぬ武士かたぎ、性情意思の一ならずして而も人情に合一するなどの點は、充分解釋的に語りコナシ、見物をして満足せしめ、此の場唯一の太夫とて大囃采なり、鏡太夫の久我之助は、箝り役とて敢て非難するにあらねども、心中には忠孝日と輝く久我之助が、經机に、念彼觀音の忠節心なる思入れが、更に無いのは、珠に稷の感があつた。内剛にして外優美なる太宰の後室たる難役は、伊達太夫の咽喉には全然不適當で、更に貫目が無い、無限の悲痛を笑顔に包み胸を掻き捲るくの思ひあらしむる彼の「馴れぬ雲井の宮仕へ」と、「娘入内さす

さは偽り眞此の様に首切つて渡すのちやはいのふ」云々入内せず死ねるをそれほどに嬉しがる娘の心知いで成うッ」誰の姿を見ての娘の迷懷哀れなる句と「ハテそりやモウ是非に及ばぬ枝ぶり悪い櫻木は切つて接木を致されば太宰の家が立ちませぬ」云々の名句も本人は熱心に語つてはぬたれども何んだかの足らぬ心地して俗に落ちたり、この一段のみにて一團體を成せる舞臺上に雄飛せる模範的人物を活動させざりしは返す／＼も残念であつた然れど何も其の語振の悪しきさいふにあらず、單に輕過ぎて實がない、換言すれば爛漫たる山吹の如して、役は宜しけれど語つて實がないのであるが、同座太夫の拂底上よりいへば先づ伊達の役で儲け所、貫目はなげご成功さいふの外なし。雜太夫の雜鳥、本人も至極落著て得意の美音で熱心に呼吸をつめて語つてなり、俗に評すれば花顔妙齡の雜鳥が無邪恍惚麗聲艶音櫻花爛漫たる舞臺の背景と相俟つて美觀快感に酔はしめたり、然れども丈の語りぶりには餘り輕くして俗に落ち、大内へ入内さすべき姫の氣品を失ひ更に太宰家の家庭に育てられし雜鳥の資格を表明せず、結局ドコまでも俗になり、姫が賤しいのであつた。此の場の三味線はあらゆる義太夫節調を網羅し所謂「大おとし」「文彌おとし」「すゑて」「よつま」「たつき」「ごうぐや」「すりこみ」など稱するくさ／＼の節調の、凡そ義太夫節に用ひらるゝ限りが此の一段の中に利用せられ、波瀾のある限りが盡されてあるが、新左衛門の三味線は不相變穩健にして、流味あり、調子も緩急も申分なし、沈著な音色を以て、場中を唸らせしは流石に一方の旗頭と評せられたり、市治郎の絲も健腕にて腕一杯懸命に弾てゐたれど、この舞臺にかけては輕く少し拍子足らずやの感であつたが、此の場に於ける三味線は妹山を新左衛門に、香山を龍助に、彈すが至當ならん乎、又それが實際希望で正當なりとテン通連の評論である。

(中略)

次は『杉酒屋』の段きて此の場は三の切として、端場は樂天的滑稽趣味の世話淨瑠璃であるが口は

一太夫と絲の圓治郎にて大當りなり最も一太夫にはもつて來いの役能く徹る聲にてお誂への、ア于代のはじめの一踊……まづは松阪こへたる、松阪こへたエ……ヤツサおごりばありやありやハッハヨイヤサ……も面白く、家主のサワリ彼の二十四孝の作り變へ文句も大陽氣で藪場崩るくばかりの喝采なり絲の圓治郎も健腕にてあいては大喝采を得たり、切の長子太夫は前の芝六住家の段を語りしとは大に相違し丸で産れ變つたかの如く至極上出來にて大好評、頗る輕妙に語りて情合ありたり、例のチホコ育ちお三輪の臺詞……三、オ、あの人はいの何ぢやいの私に悔りさしやつたはいの……三、さしやつたはいの……の所かいの、コレお前に忠義を云ふて聞かず……三、忠義とは何の事ぢやはいの……三、エ、忠義とは忠義の事ぢやはいの……三、サ其の忠義は知ッてゐるがのそれがどうぞしたかや……の邊り、忠義の意義を知つたかぶりのあごなき町家娘の口吻なぞ趣味深う語しぞ嬉しく、「年に一度は七夕の」より段切に至るまで見物に満足を與へ、其の他臺詞、地なぞ得もいはれぬ味ひありて先づ本興行妹脊山に於ける太夫側にて第一の出來なり、殊に龍助の三味線は老熟圓轉得も云はれぬツボありて能く太夫を補助したりき。

(中略)

次の春子太夫此の人の地合ひは大に好し、例の「老せぬや」葉の名をも菊の酒吸めども盡ぬ泉の壺一の謠も長く鏝七も滋味があつて庭強く巧者に語つて面白かりしが入鹿は今一息、憎味も賞目が足りなかつた、新左衛門の三味線は健腕にて快絶大受けなり。次は「姫戻りの段」にて此の處も人形遣ひにて別に取立ていふところなれど、この場は雜太夫の勤めるが正當なるに、さりさては艶に乏しい角太夫に持せしは大に當を得ざる處なり、まだしも妙音の絲にて補助せし故、お蔭で色氣のない語り口が保たれたのである、豊澤竹三郎の三味線は獨舞臺、健腕妙味の撥を以て滿場を吟らせしし大手柄なり、例の稱號、松葉屋……博勞町……で大喝采、好人氣で

あつた。……玉殿の段奥の伊達太夫は其の名聲と共に毎もながら人氣男なり、お三輪は勿論丈のものが「おはした」は輕妙例の「竹に雀」の馬子唄は甚だよし、手負になつてからは悲愴痛烈、金輪五郎も大きく語つてゐたり、絲の市治郎は不變腕相健にて能く緩急をばかり乗地なぞも聞答して大受なり。云々

堀江座の好評

再興した堀江座は寧ろ文樂に優るほどの人氣を取つて居たのでありし。當時の評判は、「故參の文樂座よりも新參の堀江座が御繁昌で、何れかと問へば概して堀江座見物と答ふるが一般である。例の意匠に凝たる舞臺、斬新を以てする衣裳と人形と、青年の太夫三味線に實際淨瑠璃の力ある事實談が、山の神の井端會議にまで提出されるなり、大した勢力である。最も文樂座も好評にてお客吸ひも叮嚀であるが、どういふものか、とんと風説がない。實に堀江の繁昌は不思議である、人氣といふものは恐いものである。」とまで云はれたほごにして、爾來六箇年、明治四十四年に入り近松座創立の計畫成り、一座移轉の交渉も熟したるより、同年五月興行前義經千本櫻「中」左倉曙切河原の逢引を名残りとして閉座し、一座は近松座に移り、四十五年一月より華々しく開場した。

時人の堀江座評

尙ほ左に堀江座興行外題の役割二、三を挙げ、時評を示し、當時の面影を偲ぶの一端に供する。孰れも「淨瑠璃」雜誌より轉載

三十八年十一月興行(二回目) 前「繪本太功記」 切「桂川連理欄」

堀江座二回目十一月興行は、前狂言繪本太功記切が「帶屋」舞臺道具、建人形衣裳等が斬新の調製であるから、寄と障と堀江の「太功記」の評判である。

十段目口の『夕顔棚』は竹本鍛太夫にて旨味も落付もあり随分巧者に語つてゐたれども、十次郎初菊等は少し艶氣に乏しき感であつた。老母の『皀月』も少し品格薄く、時々氣が抜たり怖くなつたりして一向ものにならないのであつたが、『操』以外の出来にて「お宮使ひを」の邊り纖巧に失せず情を忘れずと云ふ語振で、節も相應に旨し、此の太夫としては先づ上出来の方である。

次の竹本伊達太夫は頭から柄にない演題那の音聲にて如何と思ひしに、巧みに遊を張り、樂に語つて大喝采、俗受は大に宜い方であつたが、随分聞辛い所があつた。初菊、操、重次郎等は色氣も情合も合ませてはゐたが、餘り可い出来さはいへず、併し「二世も三世も夫婦じやま」の邊り、色氣タツブリ大儲け「何う急がるゝものぞいのう」の處は音聲を痛めて居る爲か、ダレ込みしが「是れが別れの盃かこ」の處は結構にて大喝采、光秀の出来なり。「現はれ出でたる明智光秀」は柄に似合はぬ大舞臺で、滿場崩るゝばかりの大喝采であつた。皀月も大に腹があつて手負ひの感は充分與へたり。「主を殺した天罰で」の處も見物がお定りの「猪突鎗」でマツて居ましたと力むだ甲斐があつて結構至極であつた。操のクドキ文句も大當りくく、初めは軽く疊みて段々尻を大きく語り込みたる輕妙の程は實に場中を呻らせたり、明樂座没落以來浪人してズツと發達した。今の處大隅太夫の語振りより遙か上手であると言讀せられたのである。「取り付く島も」は意外の上出来にて「弓矢の道に日を委れ」の邊りも中々巧みに語つて大當り「雨か涙の鹽境」は一倍の大舞臺で、イヤハヤ我れ知らず息を詰めての大喝采、鳴りも止まずであつた。

久吉の呼び掛けにてはいよくお手のもので、寫實繪本の太功記の段切迄約一時三十五分間、大勉強觀客に息をもつかせざりし當人の技倆は敬服の外なしてあつた。市次郎の絲も連れて骨折の程見ゆ大に結構、其の健腕の程は實に賞すべしである。

切の『桂川連理櫓』、『六角堂の段』は雛太夫で若い充分巧者に語つて見物も満足であつた。絲の豊

澤竹三郎は近來大に發達し健腕にして、滋味なり嬾も軽く音締もしまつて品ある處、遣は松葉屋致五代目廣助の後繼者たる格を失はず尙前途有望である、専ら好評せられたり、『帶屋』の場は長子大夫少し重荷であるが皮肉物を先づ那だけに聽したから上出來の方である、儀平と長吉は活動しがお半と長右衛門はヘケであつた、併し半齋は上々の出來にて評判高いのである。

三十九年 前『奥洲安達原』 次『攝洲合邦辻』 中『碁太平記白石噺』 切『大經師昔曆』
五月興行

謙杖直方切腹の段

人形出遣ひ

- 中 竹本 三笠太夫
- 次 竹本 角太夫
- 三味線 豐澤 廣七
- 袖 濱 夕 吉田 兵三
- 切 三味線 竹本 春子太夫
- 豐澤 新左衛門
- 安部 宗任 吉田 義助

切の春子太夫は流石に落附きもあり音聲も巧に使ひ分け、枕よりシツトリと例の「此の垣一重が鐵の」詞地も謙く、「門より高ふ」の句も引締めて上手に語り、無理當をせぬは大に結構祭文の間も語尾の癖を出さずシツボリと「泣潰したる目なし鳥」で見物を泣せ、瀟場靜肅悲觀的の見物と化させし其の技倆や賞賛すべしであつた。滾夕の娘を想ふ情もよく寫し出して結構例の「身は濡鷺の足がきや」の邊りは音聲巧みにして而も輕妙に疊み動し、見物にマスイ劑を注射せし如く喝采中の大喝采であつた。

夫より謙杖切腹迄は随分長い愁嘆にてダレ易い所なれど、何處までも淨瑠璃を引締て語り、見物を飽させぬは大に感服であつた、後の「御大將」もより「庭に忽ちすつくと宗任」の邊は大舞臺にて、三味線の新左衛門と共に兩者相俟て段切まで拍手大喝采雷鳴の如しであつた。

攝州合邦の辻

- 中 三味線 竹本 錢太夫
- 豐澤 猿治郎
- 合 邦 吉田 玉治
- 切 三味線 竹本 伊達太夫
- 野澤 市治郎
- 玉手 御前 吉田 玉松

中の鐵太夫は何時もながら大人氣なり、彼の朝香姫の詞なぞは專賣とも云ふべく、月流し花美しきといふ音聲で高尙に語り、百姓の出さなつて天王寺清水附近の所盡し文句、百姓のチャリも大舞臺にて満場を喰らせ至極結構であつた。切は伊達太夫にて筒の小さい丈の咽喉には全然不適當なり、「顔と顔とは隔たれど」の邊も小さい、サワリも不出來評なし、「玉手はすつくさ立上り、ヤア戀路の間に迷ふた我身、道も法も聞耳持の」云々より手負ひの條となり、箱傾耳すべき價值表れて「憎い苦ぢや」……さう様何と疑は晴ましてござんすかへ」「チイヤイ……チイヤイオイヤイ……」も柄も似合ぬ大舞臺、同向の百萬遍「南無阿彌陀佛」……「南無阿彌陀佛」もアザヤカにて大喝采蓋し「合邦」も手負も大きく熱心に語つてはゐたれども表の地聲に乏しく、單にウラ聲一方さいふ質であるから、勢ひマが狭いので、大體は成功せしも舞臺が小さいから頓と受けぬ。

碁太平記白石嘶

口 竹本花太夫

淺草門前の段

奥 竹本雛太夫
三味線 豐澤竹三郎

奥の雛太夫に竹三郎は好人氣、見物は前幕の「合邦」で陰氣に受け肩を凝した所へ、口の花太夫が千日前式の口上で溜飲を下げ、肩も肱もくつろいで満場太陽氣と化し、入替つた雛太夫も大舞臺にて、此の處儲けの場例の美音に花を咲かせたは、「鱧變じて地藏となる、地藏變じて鰻となる。」ア、善哉
「……ウロン善哉」……見なよ……見なよ……見るさ冥途へ連れて行くぞよ……ハイ
「……見は致しません……見なよ……」……「……」などの聲色文句にて、此のチャリには聽客大噴出し満面喜色を浴て大喝采であつた、加ふるに二十世紀の藝術家として妙技健腕として聽衆界の讚評を博しつゝある例の花形、松葉屋事、豐澤竹三郎の三味線にて大喝采を博し、ヤンヤと喰らせだが、柏手喝采の多くは竹三郎に歸して博勞町……さいふ稱號は蓋し驚くべき勢力で同座切

ての名物男である。

新吉原揚屋の段

中 豊竹司太夫 宗 六吉 田兵吉
 切 竹本住太夫 傾城宮城野 吉田 箕助
 三味線 豊澤 龍助 妹しのぶ 吉田 玉治

切の住太夫は同座太夫中首相たる置位を占め、大立物といはるゝ程あつて、丈の顔を出すや場中靜肅宛然水を打て清聽さす所、追の老練家にて自ら銘ある太夫の權式を備へ威嚴を示すなどは、後進者の爲好龜鑑で、眞に得難き人材と云ふべし。表情主義に重きを置き本文を活躍せしめ、地より詞に、或は臺詞より地に係る音聲一上一下能く調和を保ち、樂天的圓滑に語り動すは天稟か。「もしや夫れぞと摸寄て」の邊りより「それを持って居るからは妹じや、コレ、コレ、よう顔を見せてたもいのう、……ナ、姉さアでござるかいの、遇たかつたさ諸共に」の姉妹奇遇の所、情趣溢るゝばかりにて、「ヤア、ソリヤ御養生も叶はなんだか」の愁歎も大にこたはれ大喝采見物のハンカチを紋らした。「何の奉公ごころかい」も「つゞくは末の松山を」も無理當をせず、樂に動したは年功也。「思ひ返せば十二の年」上出来にて得も云はれぬ情味があつた。「樂み暮した甲斐もノウ」の「かい」の引地も旨く、ノウのユリナトシも至極あざやかにて大喝采、天性備つた丈が獨特の美音に聽客唯醉へるが如しであつた、惣六の出さなり「似たりや似たり花あやめ燕子花」より「曾我物語」の講釋もダレズ、充分ハテを語つて惣六の義侠心を表したも唯感服の外なしである、何を語つても落附があつて藝風の溫雅なる故人住太夫其の儘さて、毎時も賞讃の榮を荷ひ、老ひて益々盛なるは斯道のため祝すべしである。

龍助の三味線は團平張、圓轉熟達と云ふか、高からず低からず滑かなる調子にて、太夫の音聲に障らす能く呼吸をはかつて補助したは流石の龍助にて、團平系の格式を失はず、絲界に於ける西派一流の彈者たり。而して當今浪花の地に於て淨瑠璃の師と仰がるゝ者を世人の間に對しては、堀江太

夫和泉町助廣南龍さ及び豊澤新左衛門等の各師を以て答ふるのみであるが、其の他は當今西區新町通りに居住する爲川兵吉さて素は山城太夫一名大を彈たる人なれど、今は新界を退き素人の地位にありて、營業の餘暇單に娛樂的に同廊二三の藝妓に教ふるのみなれど、敢て薰陶を受くるに何條否むまじきことである。

大 經 師 昔 曆

大 經 師 内 の 段

切 三味線 竹本新靱太夫 豊澤團丸

番頭助右衛門 吉田 玉治

口 竹本組代太夫

大經師以春 吉田光八

切の新靱太夫は流石老練家にて、此の面白味の寡い莫として難物と嘯さる作を、陰氣ながらも趣味ありげに語り動す所は感服の外なし、而も色ほく舞臺の美々しき、新吉原揚屋の住太夫に堪能満腹したる見物を引き、辛くも喰ひ止て一段シンミリと聞かしたは、何れにか長所あるといふべく、「跡におさんは唯一人親の難義を身一ツに胸は千筋の亂れ苧やの、地より語出し、「ア、おいとしや父様は二重賀さやらが顯れてもしや牢へも入うか」とある詞地はシツクリとして揚中水を打たる如く、おさんと茂兵衛の主従間柄は品良く語り解けて、至極結構な世話場と思ふた。

四十二年十一月興行 前『鎌倉三代記』 中『傾城反魂香』 切『近頃河原の達引』

鎌 倉 三 代 記

片岡春元忠義の段

切 毎日替

竹本大島太夫 豊澤竹三郎 竹本長子太夫 野澤八助

長子大島毎日替り、評者の聞た日は長子であつた、長子は花はないが能く語る、見參せよと正面の花壇引上げ、白木造りの御殿さなる、美麗にて如何にも蘭奢の香仕さうであつた、造酒頭の手負笑ひも能かつた。

入墨の段

口 竹本組榮太夫
 奥 豊澤仙太夫
 豊澤猿治郎
 籬は近來の出来には、藤三の造り馬鹿も面白く「我妻かアハ、ハ、ハ、杯輕妙と申すべきが上評々々」

三浦之助別れの段

此の所人形出遣ひ
 中 竹本三笠太夫
 次 野澤春吉作
 野澤春治郎
 野澤伊達太夫
 野澤吉三郎
 切 竹本伊達太夫
 野澤吉三郎

(三笠は時鳥の端場を髓に語り上受であつた近來の進歩は一段と現はれた、次の(籬)のおらちの間同太夫の口に合ひ面白し、切の(伊達是が悪るければ仕方なし、一時五十分間の長丁場ものを語り消化すは流石太夫と感服した、三浦の母の咳にて拍手もあり悪くはなかつたが、病人としては體過るゝ感じた、三味線の吉三郎は相變らず達者に弾く其の進歩は著しきものにて末頼母しく。兵吉の佐々木、此の様な荒ものとなつては能く遣ふ、三浦之助を遣ふ小兵吉も近來は目立つて來て殊に三浦之助は能く遣ふたが、一御藥なり共あたくめんさ」軍扇を持ち藥土瓶の掛ある焜籠の口を扇ふがす正面を扇ふぐは何んの爲か分らなかつた。

吃の又平傾城反魂香

將監閑居の段

中 竹本鑓太夫
 豊澤春治郎
 切 竹本大隅太夫
 三味線 豊澤團平
 豊澤團平
 此の所人形出遣

(大隅)の吃は近來の出来にて、極淡白と能き吃であつた、一言をのれつてエヘ、ハ、ハ、ハ、愛いも能く「唾を飲みこんでハ、ハ、ハ、ヘエ、ハ、ハ、ハ、」の笑ひ輕妙、玉造の又平は能く遣ふた、實に人形とは思へざる迄身が入つたが、繪像を書かんさ手水鉢の元に至り、水鏡に自分の顔寫し罷の先を直す杯は臭し、小細工に過ぐ、文五郎のお徳も玉造の又平と俱に上評。

お、俊 傳兵衛 近頃河原の達引

四條河原のどん

竹本三笠太夫
豊澤仙市

堀川猿廻しのどん

竹本春子太夫
豊澤新左衛門

此の所人形出遣い

切
ツレ
豊澤仙之助

大隅の跡で、四條河原を深んき開かせしは大手柄なり、本興行の呼ものゝ一たる春子の堀川悪しき
苦はない、母親も盲目と嘘に受取られた、與治郎扑訥の情も宜く、節に於ては、女に力入れ「はだには一
跡を丸く語り「男もはだは」すかして大受お鶴の一人り歌ふ所杯殊に宜しく、「オットよしく」
で拍手、近來文字を調べ出し遺憾なし、三味線の新左衛門は特種の腕の利し時仙之助のツレ弾きで
鳥邊山の間も猿廻しも一點の申分なく面白く聞され大好評であつた、玉造の人形は眞に迫り、悪酒
落もなく小便も蔭でする杯注意至れり、殊に「母者人ごうやら風が替て來た様なき安堵を杖に中
腰になる工合何ん共形容出來ず、唯だ妙技と云ふの外なし、此の與治郎は當時一品と云ふも過言に
あらず、其の他の人形は取り立て云ふ程の事なし。

因に云四十四年五月の堀江座最終興行は、前「義經千本櫻」「渡海屋」の中は三笠太夫切は大
夫、小金吾殺しは角太夫、「鮮屋」は春子太夫、中「佐倉曙」「宗五郎住家」の中は錦太夫切は大隅太夫此
（好評）道行は文五郎の静玉造の忠信好評、時病後の出座さて元氣未だ全く恢復せず、十
分なら、次「近頃河原の達引」伊達太夫の切、矢口渡長子太夫の「頼」と云ふ出し物なりし。
ざりし、兵衛内無難

明治の後半期に於ける斯界の人氣の中心は、越路太夫と大隅太夫の兩人なりし。之
に加ふるに、若手の武者には春子太夫あり、文字太夫あり、南部太夫、伊達太夫等あり、斯道
の黒人連中は、津太夫、呂太夫、彌太夫、住太夫等の滋味ある藝風を渴仰して集まり、三十年
の前後より四十年の前後に互り、隆々たる好況を極めて居たのでありし。されど大正
二年四月攝津大椽二代目越路太夫、三十六年一月一日興行に春太
夫と改名。次で五月二日興行に攝津大椽となる。が、文樂座に於ける「楠昔嘶」徳

越路太夫の引退と大

隅太夫の退座

太夫住家磯柏子は津太夫中は時太夫を名残りとして引退し、時齡七十八歳大隅太夫も亦、同月一日近松座に於ける『管原』道明寺を勤めたるを名残りとして同座を退き、五月廣島吳地方を行し六月二十四日神戸より笠戸丸に乗船臺灣に渡り、七月三十一日臺南病院に歿するや、斯界は俄かに寂寞を感じ來り、識者の一部には、早くも既に斯道の危機を急呼するものさへ出たのでありし。

機運の急轉直下

近松座の瓦解

爾來機運は忽ち急轉した。伊達太夫は近松座を出で、文樂座に投じた、春子太夫は亡師の遺壘を固守して堅闘し、彌太夫之を援けて勢應して見たりしと雖、其餘は雛太夫、菅太夫、角太夫、絹太夫と云ふ顔振の無人芝居なれば、到底文樂座の越路太夫、津太夫、南部太夫、伊達太夫、駒太夫、古鞞太夫、叶太夫、源太夫、鍛太夫と云ふ顔振れと相對して勢力を維持して往ける筈もなく、折角彦六、稻荷、明樂、堀江と系統を引いて來た近松座の一團も、瓦解の已むなきに至り、大正三年五月興行を限りとして休座のこととなり、爾來春子太夫は全く休聲し、彌太夫、菅太夫、錦太夫、雛太夫、角太夫、米太夫等の一團は、大正五年二月一日より再び近松座の舞臺に上ばり、往時の首振り芝居を復活興行し、本意ならざる境遇の下に、僅に其の餘命を繋ぎつゝあるの有様である。其の第一回興行此の興行は意外の成功にして、二十日

前三所十觀音靈驗記藤井寺より壺坂寺迄

- | | | | | | |
|---|----|----|----|------|--------------------------|
| 藤 | 竹本 | 彌 | 竹本 | 藤井安元 | 市川荒玉 <small>(十四)</small> |
| 井 | 竹本 | 小澤 | 竹本 | 娘 | 嵐橋 <small>(二十二)</small> |
| 每 | 竹本 | 澤松 | 重太 | 僧 | 市川家一郎 <small>(十)</small> |
| | 豐本 | 彌夫 | 彌夫 | | |
| | 澤本 | 丸太 | 子夫 | | |
| | 澤本 | 丸太 | 子夫 | | |

壺坂寺
同 澤市内の段
御 山

竹本 角太夫
竹本 澤助三郎夫
豊本 錦團太夫
豊澤 龍市平夫

次忠 臣 講 釋 赤垣出立

竹本 彌太夫

野澤 八助

切白 石 嘶

淺草雷門
の だん

同 奥山
の だん

替り 毎日 竹本 數島太夫
替り 毎日 竹本 澤東太夫
替り 毎日 豊澤 新之太夫
豊澤 米仙松園介夫
源太 吉夫

揚 屋
の だん

竹本 組榮太夫
野澤 吉郎夫
豊澤 力松夫

大切御 祝 儀

翁 竹本 千歳
三番叟 竹本 太夫
竹本 彌太夫
竹本 三國太夫
竹本 榮太夫
替り 毎日 竹本 數島太夫

引 拔

座頭 澤市
女房 お里
觀世 音
中村 二雀(十四)
中村 鷹子(十)

曾平 藏太
赤垣 源
お平 源
眞平 藏太
源左右衛門弓

淺尾 關二郎(十四)
中村 魁一(十三)
實川 右延(十五)

茶店 亭主
惣し 坊六
惣し 坊六
勤九 郎
お九 郎
仕出 しぶ

市川 右一(十一)
淺尾 關二(十四)
市川 秀荒丸(十四)
片岡 づい(十六)

けいせい 宮さの
新造 宮里の
同 宮柴
禿お 宮ふり
妹お のげ
惣お のげ
道り 手まさ

實川 治(十五)
中村 魁一(十一)
中村 雀(八)
片岡 關(十四)
市川 家一(十四)

式 三番叟
千歳 中村 扇
實川 延治 村 扇
三番叟 片岡 秀丸

養父は素人淨瑠璃の仲間

彼の初稽古

入り、五歳の時、釣鐘町上の町大工棟梁二見伊八屋號大和屋の養子となつて龜次郎と改む。養父伊八は素人淨瑠璃仲間の一人にして、表徳をい文と云ひし。龜次郎十一歳の時、慰みにとて三味線の稽古を始めさせたのであるが、初稽古は竹澤新造の門人なりし新造と云へる素人の稽古屋也上達頗る早く次で、鶴澤清七三代の門に入らしめいよく稽古を勵ませた。

されど越路の生來の美音は、三絃よりは寧ろ語りの方が相應したりし。一段二段と習ひ進むに従つて次第に興味も加はり來り他も賞賛ほむるやうになれば己も爾おのれりとおもひ込み、果は太夫として其の身を立てんと養父の許を請ふまでに至つたのでありし。養父伊八も一旦は拒んで見たりしと雖も、決心牢としてなかく固く、到底翻すべくもあらずと見わたるより、我を折りて之を許し、改めて三代目野澤吉兵衛の門に入れ、いよく黒人仲間の本修業にと懸らせたのでありし。時年二十歳

明治三十六年十月の淨瑠璃雜誌には、野澤語助東京在住の三絃の巨頭なりし。三代目吉兵衛の門人、大阪西區の生れ、初め竹澤龍造の門に入り龍作と云ひしが、吉兵衛に就いてより野澤吉之助と改む。山四郎一座に加はり操り芝居に出動し、其の後暫く京都に住し、江戸に下り、語助と相續改名す。大正二年二月二日歿の直話として左の如くに記して居る。

竹本攝津大椽に就ては、中々面白いお談がういます、殊に斯人を素人海より太夫に勧めたのは、マア私が取持つたやうなものでございます。

私が師匠吉兵衛と、大阪へ立戻つて居ります頃上町邊に龜次郎と云ふ素人三味線弾がういます、時偶席亭より黒人の空席に雇はれて居りましたが、私が未だ何んな男だか一向面體を存じませんでした、其の頃京都の富の小路に鍋島家の姫君が御隠居遊ばしましたが、至つて淨瑠璃が、お好きでういましたに依て、徒然の折柄には、素人連をもお召に相成る事がういます、私が京へ参り

ました時に恰當お催しがムいまして、私も圖らず廣丸連と云ふ京の素人連中に加はり、都合三名にてお邸へ伺ひました所、大阪よりも十三と云ふ素人太夫と例の龜次郎が参りました。

何がさて素人連の事でムいますから、何れも鼻を高め居りまして、俺は是が得意だから是非とも語り度い、イヤ俺もそれが得意だから他人には滅多に語らせない杯も、何や角と争ひ出して、役割は容易に極りません、斯く樂屋揉めに時を移しては甚だ恐れ多い事でムいますから、そこで私は龜次郎と相談致し、これちや逆も果しが無いゆゑ、二人で徐々彈語りを演らうぢやないか、語物は『橋辨慶』が面白い。お前さんは牛若を演んなさい。私が辨慶を受持ちませうと、先づ演り始めました所、私は實に龜次郎の美音なるに舌を卷て驚きました、天性太夫になる者と認ましたに依て、龜さん：三味線彈になつて居るは惜い事だ、お前さんのやうな咽喉は、眞實珍らしいから寧ろ太夫になつちやア何うだへと、勧めますと、何分共にお願い申しますと云ひますゆゑ、私も何うにもして太夫に取持たうと思ひ、大阪へ戻つて師匠(吉兵衛)に此の事を話しましたら、其の内に折もあらば連中に加へやうと略ぼ納めて呉れました。

間もなく京の七軒町へ行く事になりました、愈々龜次郎を同道致しました所、當人も大きに喜ました。

扱太夫となるには龜次郎の藝名では何うも可笑うムいます、そこで師匠と三人にて種々と考へましたが、是と云ふ面白い藝名も出ませんゆゑ、宿屋より國盡しを借受けて、先づ五畿内より見始めましたが、山城は現在山城椽：大和も同じく大和太夫：斯んな鹽梅に大體藝名となつて居りまして、残つて居るものは何れも口調が宜しうない、段々奥州の果まで調べました所、師匠が手を拍つて、ア、好いものを見附けた、何うだ南部と云ふ藝名は：エツ、南部：、ナニモそんなに驚かんでも好いぢやないか、デモ南部の鮭は鼻曲りと云ひますから：延喜でもない馬鹿な事を言ふま

い、マア兎も角も藝名に仕やうと、そこで龜次郎が

竹本南部太夫と名乗つて、七軒町の興行へ現れました。是が即ち當今の竹本攝津大椽で、いいます、其の後師匠に就て頼に稽古致しました、是より越路になり又進んで春太夫になるに就ては、又た面白いお話が、いまして、結局斯人は腹もありませんが、一ツは運の好い方で御座います。

越路が太夫として世に立たんといよく決心した動機も、吉兵衛の門下に投ずることとなつた因縁も、右の實話に由つて略ぼ了解されるのである。

野澤吉兵衛の門に入る

龜次郎が師事した野澤吉兵衛は初代越路太夫三絃彈勝風より、太夫に轉じ越路と名乗るの實子にして、初め鶴

澤市治郎にて文三三代目巴太夫の相方を弾く、一度文藏四代目となり、又文三に復すの門人也天保五年より芝居に出勤し、同十一年

文樂芝居にて父名を繼いで勝鳳となり、同十五年即ち弘化元年正月道頓堀若太夫の芝居に

て吉兵衛と相續改名し、此の時五代目染太夫後ち竹本越前大椽の國性爺三の切を弾けり龜次郎入門の當時は春太夫五代

の相三絃を勤めたりし。然るに所存あつて之を高弟吉彌後四代目吉兵衛に讓つて自ら座

頭となり門下の太夫三絃彈を以て素淨瑠璃の一座を組織し、地方興行をと思ひ立つたのであつた。

察するに吉兵衛の思ひ立は『堀川』なり、『千兩幟』なり、『阿古屋琴責』なり、主として三味線もので聽衆を呼び彼の冴へたる撥音一ツで、一當當てゝ見やうこの目論見なりしが如し。されば勢ひ伎倆よりは美音の太夫を必要としたるが如く、彼は龜次郎に囑目し自ら紹介の勞を取つて春太夫の弟子となし近畿より中國、四國と旅興行にと引き連れ出發したのである。此の時歳二十二

江戸に下る
越路と改名

江戸興行中の苦心と難行

約二箇年の旅興行の後一旦大阪に戻りたる吉兵衛は、更に龜次郎の南部太夫を眞打とし、他に其太夫勝鳳等、彼が門下の太夫三絃彈數名を加へたる一座を組織し、萬延元年八月再び江戸興行にと出立したのであつた。九月に江戸に著いたが、此時に亡父越路太夫の名を南部太夫に襲がせて二代越路太夫と改名させた。時歳二

吉兵衛の父初代越路太夫は善光寺參詣の途次江戸に入り、嘉永元年八月病没した。其の墓は深川雲光院に在り。想ふに吉兵衛が江戸に下りたるは、一つは亡父越路の十三回忌追善のためもありべし。

吉兵衛一座は植木店を初席とし、夫れより順次に各席を打ち廻はつたのであるが、當時の越路の内心の苦みと稽古の辛さとは、到底筆舌で盡し得るやうな生なまやさしい次第ではなかつたのでありし。彼が南部太夫なる名前を得て籍を藝人仲間に置いてから、僅かに三年目の江戸下りなれば段數とても多くの持ち合せがあると云ふではなし、毎夜くの出しものにははたたと當惑せざるを得なかつたのである。江戸の寄席興行は毎夜出し物をさし替ゆるの慣ひである加之其師吉兵衛よりは、此の前春太夫と自分の興行弘化元年冬五代目春太夫江戸に販三絃吉兵衛也の折は、八十八文の木戸錢なれば、這回こんがも値段は落されず、一晚二段づゝ語つて埋め合せを付くべしとの難題は提出される。倏忽たちまちの間に淨瑠璃かたりもろの種切れとなる。急稽古ききこに練習れんしゆねばならず。吉兵衛の稽古は嚴格なり、其時ほど辛らかりし事はなかりしとは、後年彼れ自身の追懷談として傳へられて居る所である。されどかくして辛酸苦痛を耐へ來つて、彼の技能はめききと上達したのでありし。後年越路が人に語りて、自分には大恩ある師匠二人あり、其一人は親しく藝道を仕込

んで貰ひし目三代野澤吉兵衛にて、他の一人は竹本春太夫なり」と云つたと聞くが、往時を追懐したら定めて無量の感慨に咽びたるなるべし。

吉兵衛の死

越路の美調と吉兵衛の手腕とはいたく江戸市中の人氣に投じ、其の興行は可なりの成功なりし。江戸に在る事殆ど二箇年に及んだが、文久二年七月其師吉兵衛は假初めの病より遂に起たず、越路當時彼は住太夫と改名して居つた。は一行中の勝鳳の三味線にて暫時興行を續け、翌三年六月其太夫、勝鳳等と共に大阪に歸つた。此時歳二十八

京都に歸り春太夫の下に頼る。

當時師匠春太夫は文樂と離れ、京都寺町和泉式部境内の芝居に在りしかば、越路は直に其の下に頼り、一座に加はつた。外題は『五天笠』四段目『岸姫松』『天網島』『八百屋獻立』『姫山姥』と云ふ取り合せにて、越路には『姫山姥』の御殿の一役が振られた。九月一座は堀江の芝居に出勤の事となり、外題は『忠臣藏』『天網島』『奴請狀』にして、越路は旅路の嫁入の掛合のシテと、生駒太夫の紙治内の口を語つた。此に於て彼は大に不平なきを得なかつたのである。

彼の不平

江戸にて吉兵衛の三味線にて人氣を一身に集め、得意滿面、心密かに期待する所あつて歸つて來た彼は、此の役振りの餘りに新參者扱にして、師春太夫の心事の餘りに冷酷なるかを疑はざるを得なかつたので、嫌氣がさし、再び去つて江戸に下らうと決心したのでありし。

其の事を傳聞した師、春太夫は懇々不心得を諭し、苟も他日の大成を期するものが、席次や、役振りや、些々たる小事に拘々たるべきに非ざるを説き、一意修業の必要なるこ

春太夫の懇諭

初めて文樂座に入る

當時の文樂座の顔振

とを懇諭したのであつた。此の懇諭に悟つた越路は、爾來翻然覺醒して再た他を思はず、熱誠其の師に仕へていよ／＼藝道を勵んだのである。爾來北の新地の芝居、堺の芝居、京都、九州等師に伴ふて各所に出勤し、慶應元年三月、春太夫が再び文樂軒芝居に出勤することゝなるや、彼も亦隨ふて此の芝居に入りし。此れ越路が文樂座に出勤した初めである。

當時の文樂座には染太夫を櫓下として、湊太夫あり、實太夫あり、咲太夫あり。三絃には團平を筆頭に、鶴澤傳吉、野澤吉兵衛四代、豊澤濱右衛門、鶴澤豊造あり、人形には吉川才治後、吉田玉造、吉田松江、吉田喜十郎等あり、孰れも鏘々たる面々の顔揃ひなりし。

春太夫が再び文樂座に入った時の外題は、『前忠臣蔵』切『新板歌祭文』役割は、桃の井屋敷―咲太夫、扇ヶ谷―湊太夫、山科―染太夫、野崎村―春太夫、一力の掛合は、由良之助―湊太夫、平右衛門―染太夫、おかる―春太夫にして、越路は、桃の井屋敷の口を勤めたのであるが、咲太夫が僅かに初日を勤めたのみで引籠りたるより、越路は之れが代役を振られ、口より切まで通して語り、好評を取り、中頃師匠春太夫の缺勤の際にも、代役を勤めて、『野崎村』を語り、此亦上出来にて、新顔の太夫大に腕前を發揮し、面目を施したのでありし。

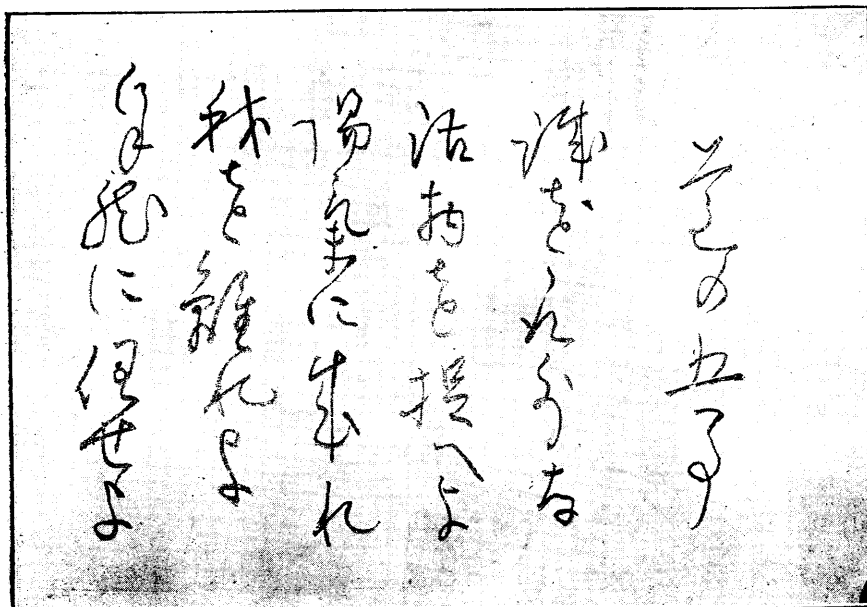
次第に名譽を現し來る
櫓下さ成る

爾來數々先輩の代り役をも勤めて譽れを爲し、慶應元年五月彼が文樂入座後の二回目興行なりには代役として津賀太夫の持役なりし、『彦山』六ツ目須磨の浦長枝太夫の持役なりし、『彦山』九ツ目の切を語り、明治三年三月『千本櫻』の興行には川連館の中より切咲太夫の持場まで通して語り、而も此の川連館の出来榮は意外にも上評なりしより出世の縁となり、明治三年九月興行よりは切り、語りに出世し、『木下蔭狭間』の奥御殿の切を勤め、爾來累進して評判いよ／＼高まり、明治十六年四月興行には長登大夫實太夫改名の後を承けて文樂座の櫓下となり、爾來三十年、嘖々の聲望と

攝津大椽

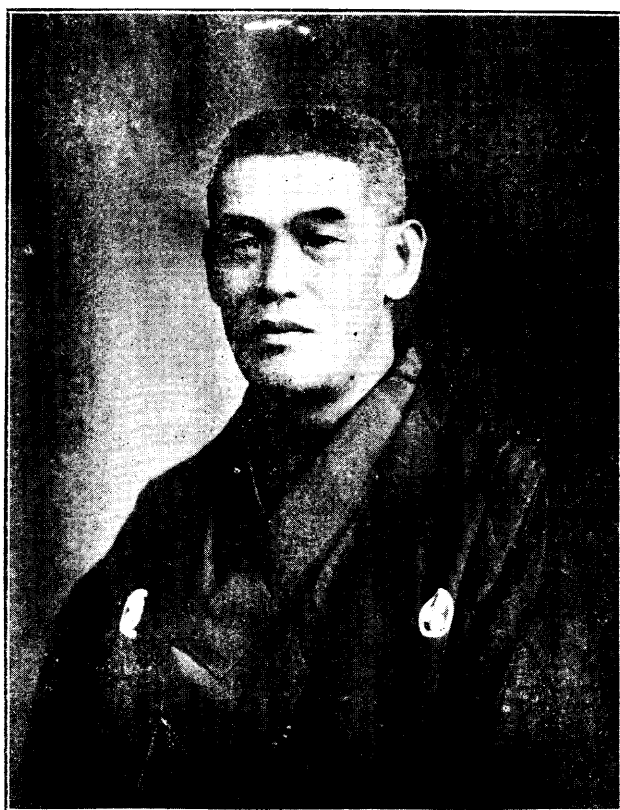


攝津大椽書





攝津大椽書



三代目越路太夫

斯界の重任とを雙肩に荷ふて、赫々の名を成したのでありし。

元來淨瑠璃を語ると云ふ事には二つの方面がある。唵囀玉を轉ころがすが如き美くい調子で、聽客の音曲的欲望を満足せしむると云ふ事が其の一つである。意味を語り、情を語り、能く作意の本旨を語り活かすと云ふ事が其の一つである。越路の長所は前者にして、大隅の長所は後者なりし。越路の『鶺鴒山古跡松』、『先代萩御殿』、『妹脊山竹雀』等は古今獨歩、他の企及し能はざる程の妙趣を極めたのであるが、大隅の『壺阪寺』、『娘景清日向島』、『近頃河原達引』等には、亦一種言ふべからざるの妙味が存じたのでありし。越路獨特の品位のある——美しい調子で、『中將姫』、『本朝二十四孝』など語り進んで來ると、神韻縹緲——聽客はたゞ譯もなく其の聲に酔はされて仕舞ふたのであるが、大隅が淡々として些の虚飾かざりもなく、街氣もなく、『河原達引』や『壺阪寺』など語り込んで往くと、聽客はいつとはなしに引き入れられて、恍惚として、不知不識、曲中の人と同化して了しまふたのでありし。越路と大隅とは實に明治時代に於ける義太夫節淨瑠璃の兩面を代表した巨人なりし。

されど此の兩人をして天保、嘉永の名人揃の中に立たせて其の伎を競はしたならば、天保、嘉永の斯界には、竹本系に、四代目綱太夫あり、五代目染太夫、盛前大椽となりし人也、三代目長門太夫あり、初代大隅太夫あり、梶太夫六代目染太夫あり、津賀太夫あり、六代目内匠太夫あり、豊竹系に、五代目若太夫あり、三代目巴太夫あり、駒太夫あり、岡太夫あり、三光齋あり、八重太夫あり、湊太夫あり。名人上手群をなして輩出して居るのであるが、就中優れたるは長門太夫にして、「三段目」にても、四段目にても、舍利にせよ、艶物にせよ、巧妙を極めし名人なり」と云はれて居る位の達者である。嘉永、安政、萬延を通じて、果して彼等が文樂芝居の樞下の地歩を占め、斯界の人氣の大半は彼の雙肩に荷はれて居たのであつた。明治時代に於て贏ち得たほどの名聲を擅たにすることを得たであらうか、否は疑問であ

越路に對する批評

る。

唄ふ淨瑠璃は聞き飽いた語る淨瑠璃でなければ……と云ふのは、畢竟斯曲愛好者中の一部の聲に過ぎなかつたのでありし。一般の聽客には、依然として唄ふ淨瑠璃の方が歡呼され喝采された。竹本綾之助さへ一時は八町泣かせの綽名さへ贏ち得たほどの時代もあつたのである。越路は實に此等多數黨の拍手喝采裡に擁立せられた運命の寵兒とも云ふ可し。彼は其の生來の美聲が累いして、一時は斯道の破壊者なり、外連淨瑠璃の發頭人なりとまで、惡罵を浴びせられたこともあつたのでありし。

左は當時の越路評の一ツである

(明治三十五年七月六日
淨瑠璃雜誌掲載)

越路談集

大阪泉町 中村商海散史

余の友人横濱一商館にて貿易に従事する者あり、商業整理のため頃日來阪し余を訪問す、次語淨瑠璃談に及ぶや彼曰く、方今義太夫の勢力は比較的に東京にあり、見よ有名なる文樂に於ける太夫名家は拂底の時代なり、彼の越路、津、文字、呂、文南部等熱達の者を除くの外、各世評ある太夫の如きは却つて東京横濱の素人社會に數多あり、否彼等よりも素人の方能く語るなり、僕は義太夫を以て無上の快樂とす……中略……東海旅行汽車中濱松驛にて始めて越路の野崎村なるを聞く、欣喜雀躍、當地に著するや劈頭第一文樂座に腕車を著し、有無を云はず圓金を投じて越路を聞きしが、何んぞ圖らん彼の野崎村は、語る乎、諺ふ乎、判明せず、美音美聲と云ふ點は別問題として、義太夫語りの價值無く、恰も新内節を聞いたかの感にて一向面白からず、彼れが義太夫を研究する久し然れども野崎村のみは實に閉口せり、彼の『合邦下の巻』『盛衰記神崎千歳屋の場』『夕霧吉田屋』など自體輕浮の淨瑠璃なるを、輕々しく語りしも幾分乎輕妙の處ありしが、這般の野崎村は無論新内節と斷言して可な

り、僕は敢て彼を攻撃するにあらず、單に僕の研究所見を談するのみ、一君は淨瑠璃雜誌百話集と題して、越路は消極的黒人の百人向きを語る云々と云はれしが、其は治論一班實際研究するさ何も語るにあらずして謠ふのである、最も題物に君知らずや例の悪口屋野澤語助の曰くに、越路太夫は八方美人的に語るが實に感心のものである、何程お錢を取つてもお客様は黙つて聞いて御座るが考へて見ると廉價である彼が義太夫を研究し分析するさイヤハヤ源氏節もあり、新内節もあり、ウカレ節もあり、乃至は常盤津も祭文も皆包含せられてある云々併し語助の云ふ點も相違なければ、這は所謂商賣敵と云ふ點多少あれば信用出來ずとするも、兎も角今日の地位は謠ふに相違なし、要するに越路よりも文字太夫の方第一位、將來有望の太夫にて恐らく越路も及ぶまじ、津太夫彌太夫、呂太夫の如きは、維新以來斯道海の元勳株音聲の低きと惡聲は扱置き、彼等が真正の淨るり語り公然太夫の資格を有して居る、呂太夫を代表して文太夫の語る、頼光館の段音聲低く且つは苦しいが、流石文太夫三人の笑ひなどは失敗も取らず、聽衆を満足させるのは感心なり、文太夫は當地よりも寧ろ東京に信用あり、素人の有名なるは當地の彌生軒なり云々。

野澤語助曰く、昔は此の淨瑠璃は諸國諸藝の司といつて、有りさあらゆる藝道のうちでも司といはれる丈に、何處の津々浦々、さてはいづくの國々へ行つても威張つたもので、指でもさくせることではなかつた、……太夫にも名人がありました、長門太夫若太夫春太夫はいづれも皆藝がしつさりして居て、一分のすきがありません、あれ等がほんまに義太夫を語つたのですよ、何ソの越路が咽喉が好いの何ソのと言つたところで、足下にも追付くこつちやありません大阪に參した時越路が先代萩を文樂でやつて居ます、そこで一日聞きに行きましたが、これちや三味線彈者が骨の折れる事ださ氣の毒になりましたよ、それは同じ竹の間で政岡か悲しさ辛らさ遣る方もなく、さりさて泣くに泣かれず、齒を喰ひしばつて泣くところがありますが、其の「くいしばり」さあるのは、情さして口惜い悲

しいが泣かれないところなんだから、くいしばりさ語るのにも、其の心もち則ち其の情を胚ませなければならぬ。然るに、くいしばりさ調子に乗つて見臺の上に延び上つて見臺をドン／＼と拍子こつて叩き上げる、これぢやア、くいしばりさくいしばりさばつて泣くのぢやない、高吼に吼るので、折角忍んで泣いて居るのに、其の泣聲が御殿中に響き渡つて仕舞ふ、それを弾かなければならぬ、三味線彈者は因果なものである云々。

福田琴月君曰く、越路のお得意は、多くは艶物である。例の三勝の酒屋、朝顔の宿屋、猿廻し、紙治等、其の他時代物中の艶々しい處では、仙臺萩御殿、忠臣藏、九段目、中將姫などある。處で酒屋では

『あそこには園がうきおもひ、かくれまてしもうば玉の、世のあぢきなさ身一つに、むすばれさげぬかた絲の、くりかへしたる獨言』

から、例の誰でもやる『今頃は』のさばり文句が、最も人の聞かうとする處であるらしい『かへしたる』の五文字を、彼れが、何程だけの聲の波動を用ゐるか、其は大したものである。朝顔日記の宿屋では、琴が這入つて『露の乾ぬ間』をやる、是が此の一段中の聞處だ、又後段、川岸の處で『石になつたる松浦瀉、ひれふる山のかなしみも』が大拍子の處だ、猿廻しでは『あの面白さを見る時は』の處。紙治の茶屋場では『南のもこの親方さ、こゝろにまだ五年ある年の内』などいふ處だ。其の他仙臺萩御殿の雀の歌、忠九の『鳥類でさへも』中將姫の『あらいたわしの中將姫』から『昨日までも今日までも』の處、これが越路太夫の専門、其の聲に接して誰れもかれも溜飲をさげる大高潮の處だ、さてそれが一種の魔力を以て人に美感を興へるには相違ないが、この例のみならず他の文句でも、歌の様にうまく聲をふり廻すだけが、これが義太夫の眼目であらうか否や、まさかそんなものではあるまい。例の太功記十段目の光秀、操さつき。初菊重次郎さ個々別々に躍動させて、其の言々句々は各其の性格を代表させてこそ、義太夫だらうと考へられる。一體、越路は、語るでなく歌ふ様に思はれる、結局技術あつて想の

なき畫家の如きもので、山光水影もふるうばかり美しくしいが、熟知すれば輕浮此の上もなく、紙背に徹せざる職人畫と同様な私に思ひます併し、ながら相生太夫、播磨太夫など到底お話しにならないので、横町の隠居が少し修行すればあの位になれるのは何でもない。越路の悪口を云ふた私でも彼等を聞くに、たまへ大瑕はあるにもせよ、越路の妙處を思ひ出されるのである。そこへ行くに彌太夫だ、聲もない、節の廻しもさう旨くはないが、聞く中に自から目をふさがれて、其の中に人物が眼の前にあらはれる。つまり團洲藝なので、言語の中に其の感情が含まれるからだ、節をこるばして咽喉を聞かすさいふ野心の無いだけが、此の道の識者には尊ばれ不漢者には、隠氣なきけなされる所以である。

彌太夫と對立して、殆んど語り口も似てゐて、今一層聲が低いのは津太夫である、素より技量に至つては越路以上の者だが、何分あまり聲の小さいで、大向ふへは少しも聞ぬから、さしたる評判もないが、彌太夫と共に、浪花の二老大家である。

大物では、例の豊竹呂太夫、竹本七三太夫、チャリの名手は南部太夫、先づ方今他にはあるまい。

其の他若手では、さの太夫、改文字太夫だ、あれには越路の聲があつて、其の上に言葉は越路よりも能い、まづ美術界での武内樓風不偏な比だ。今十年も経たら大したもので、實に將來有望の太夫である。

されど這は餘りに酷評である。彼が壯年時代より五十前後迄の淨瑠璃には「語るでなく唄ふ様に思はれる」感なきにしもあらずであつた。雖然、彼が兩鬢の霜やうやく多きを加へ來るに従ふて、彼の藝風はますます練熟し、其の聲、併せ兼ねたる妙境に入り、眞に斯界の偉人たるに背かざるの眞價を發揮し來たつたのでありし。念ふに彼をして外連淨瑠璃の發頭人など、餘りに痛酷に失するほどの惡評を招くに、至らし

大隅が人氣を博した 二ツの原因

めたと云ふのも、畢竟は越路の貫目もなく、伎倆もない、煎餅乎たる薄べらな門弟共が、形を學んで眞を得ざるよた・淨瑠璃を振り廻はし、沼々として斯界の風儀を崩し掛けて來たので、爰に痛棒三十的の批評ともなり、警告的の痛罵ともなり、延いて其の師に累ひするに至りたるものにして、之を以て直ちに越路太夫の眞價を上下するには足らないのである。

大隅太夫が淡々茶葉を嚙むが如き藝風を以て、濃調嬌艶の越路と相對し、殆ど遜色なきまでの人氣を博し得て居たと云ふには二ツの原因がある。一つは餘りに聲に趨りて情に疎なるの感なきを得ざりし越路の藝風に對する時人の反感的迎合で、今一つは義太夫節淨瑠璃の眞意義に對する時人の理解力の増進したことである。越路の藝風に嫌厭たりし眞面目なる斯道の愛好者は、津太夫を歡呼し、呂太夫を歡呼し、彌太夫を歡呼し、住太夫を歡呼し、大隅太夫を歡呼した。就中大隅の淡々一點の銜氣なき語り口の中に、何も云はれぬ情味を藏し、譜節よしに捕とらはれずして、活き格に拘らずして格に入り、直に個性の機微と相觸るゝ底の藝風には、心よりして謳歌的喝采を禁せなかつたのでありし。加之、明治の中期に入り、泰西文藝の研究やうやく盛んとなるに至りてよりは、劇にあれ、歌曲にあれ、一般に、形に捉はれずして眞に活くるの藝風が理解され、鼓吹さることとなり、中村芝翫や市川九藏の餘りに形に趨り過ぎた藝風が漸次に人氣を失墜すれば、團十郎の澁味ある藝風や、菊五郎の活々とした藝風が、次第に聲望を高め來ると云ふ風潮となり、聲に趨り過ぎた越路も面白からざれば、舊式故型に拘はり過ぎた津

太夫、呂太夫彌太夫にも申し分があると云ふ次第となり、はては大隅太夫の淡々菜ッ葉を嚙むが如き藝風が、いたく時人の歡呼喝采を博し、聲望を盛んにするに至つたと云ふ譯合なりし。

大隅太夫の略傳

大隅太夫は幼名重吉姓は井上、父は木島屋伊助と稱す。京都下鞍馬村の出なるも、大阪に來り順慶町井池東へ入るに住んだ。文久三年の船場の大火に類焼してより、南區二ツ井戸に移る。家代々大工業なりしも、鍛冶職に轉じた。初め野澤勝鳳の弟子となり、後ち五代目春太夫の門に入り、春子太夫と名乗る。慶應二年なり明治五年九月堀江の芝居に出勤し、前『忠臣藏』桃井館の口と掛合の重太郎、切『お俊傳』兵衛河原達引に道行のツレを勤めたのが初舞臺である。明治六年五月道頓堀若太夫座に入り一座の太夫は、長尾太夫、組太夫、織太夫等にして此の時大隅は、美聲の聞へありし松鳳軒の『中將姫』雪貴の奥を勤めた。六年七月師春太夫に隨ふて竹田の芝居に出勤し、『娘景清』八島日記の花菱屋を勤め、好評を得て出世の緒を作つたのである。

十年八月其師春太夫の死去により二代越路太夫の預り弟子となる。爾來東京へも

往き十二年綱太夫の一座にて出稼興行也。歸阪後は、御靈裏門の席緩瀬彌太夫等と一座道頓堀澤の席染太夫等と一座京都道

場の芝居津島彌、津、袖太夫等と一座等に出勤し、十七年稻荷彦六座の創立に際し入座した。

爾來引續き彦六座に勤め、二十七年三月稻荷座と變りしも相變らず出勤し、此時大隅太夫と改名し、新左衛門の三絃にて三十三間堂平太郎住家を語りし。四月、三絃團平となり、外題は『國性爺合戰』なりしが勵しき稽古の爲めに聲を痛めて休座した。五月、新左衛門の三絃にて『妹背山』杉酒屋を勤めて好評。三十一年團平の三絃にて『志渡寺』

大隅の死に對する世人の同情

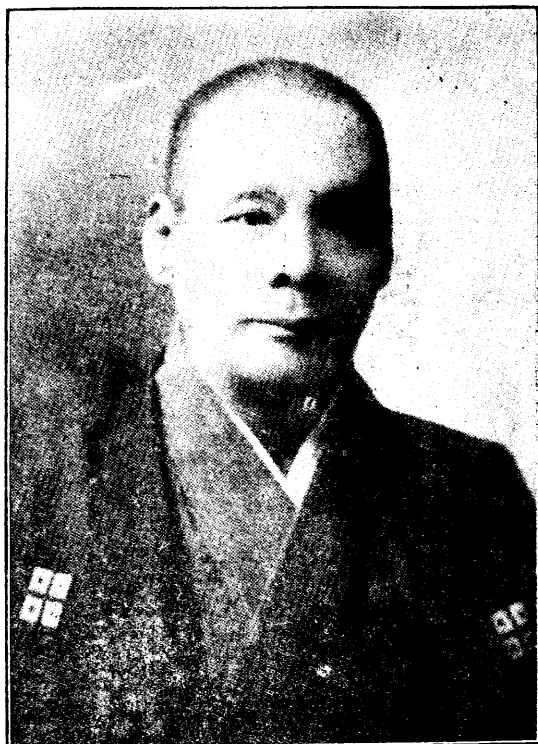
近松座より發表した退座前後の消息

を勤む、此の時團平死し三絃鶴澤叶となる。稻荷座倒れて明樂座となりしも引續き出座。三十六年五月^{二代}越路春太夫と改名の興行に文樂座に入り、『三十三所花の山』を勤め、四十年三月退座して堀江座に入り、『忠臣藏掛合の由良之助』と山科を勤めた。此の時より三絃仙左衛門となる。四十三年八月岐阜へ出興行中腦充血にて卒倒し、暫く休聲靜養し、四十四年一月より再び堀江座に出勤し、四十五年一月近松座の創立に際し、入座して『三番叟』の翁と『野崎村』を勤めしも健康舊の如くならず、大正二年四月『菅原傳授』道明寺を勤めたるを名残りとして退座することとなり、五月廣島、吳地方を巡業し、六月^{二十日}神戸を發して臺灣に渡り、大腸加答兒に侵されて遂に起たず、七月三十一日^{午後九時}臺南醫院の病室に逝いた。

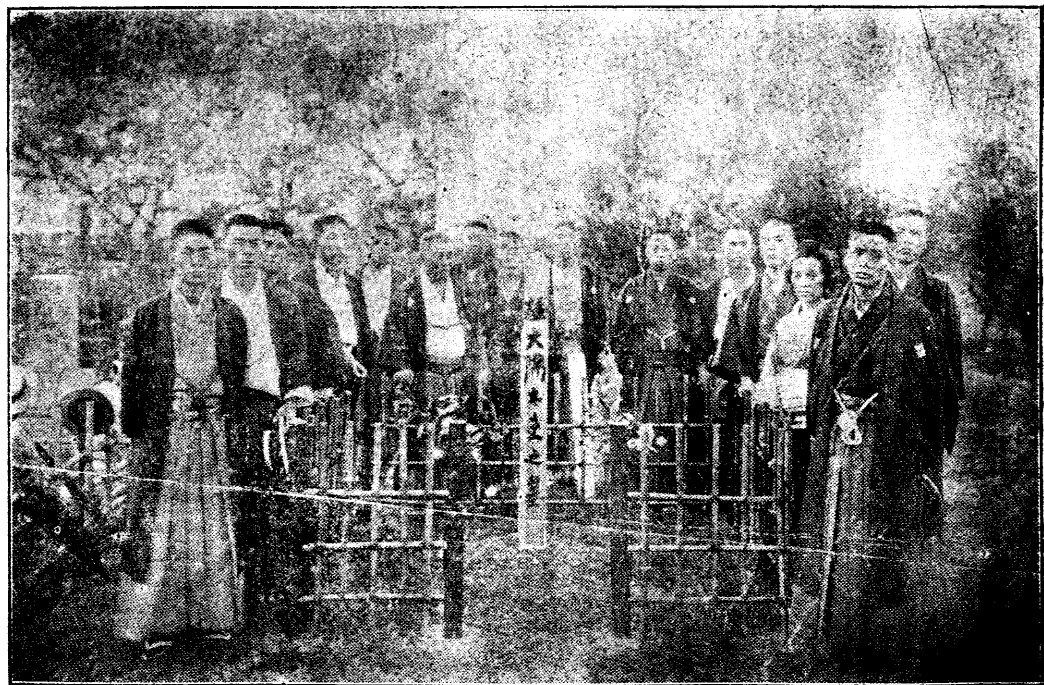
大隅太夫の死——不幸なる境遇に對しては、世人は一般に同情を表し、近松座の仕方門弟春子太夫、伊達太夫等の心事に付いても、彼此批判的の風評も惹起すに至つたのであるが、左は近松座より因講會長に送つた當時の辨明書である。依て大隅退座前後の事情をも明かにするを得べし。

拜啓彌々御清復の段奉欣賀候頃日來故竹本大隅太夫死去に關し一二新聞紙に登載する記事の登載あり當會社が藝術家を待つに極めて無情冷酷なるかの如く且又春子太夫及伊達太夫の二人が師大隅太夫に對し不徳義の所置ありしかの如く吹聴仕候は誠に遺憾の至りに存候間參考迄に貴會へ申告仕候

故竹本大隅太夫宿病全く癒はず昨年開場以來興行毎に手に汗を握る如き事多く又聽衆の冷罵頼りに起り候事一再ならず其の都度本人の健康を憂ひ休養を勸告し每興行二三日位を休場す



影面の夫太隅大本竹故



(橋板三北臺) 碑墓の夫太隅大本竹故
(影撮日四月八)筆の氏橋高社聞新日灣臺に標墓

遺詠

團平師死後の有様

いまの世は

下手も上手も

わかりなし

ひいきな者は

皆上手なり

大隅



故竹本大隅太夫の葬儀場
薩北新起街本願寺に於ける

るを例としたり然るに本年に入り病勢甚しきものゝ如く成績不可なるを以て會社は休養を勸告せしも我儘強き同人は依然出勤を續け居りしに人氣は次第に惡傾向を來すのみなればかくては益々本人從來の名聲を傷け本人の不幸甚だ大なるを顧慮し五月興行の半に於て事務取締役大島徳藏は大隅太夫を其の宅に訪ひ次興行より暫時休養せらるゝことの健康上にも名聲上にも得策なることを忠告せしかば同人は同意を表し直に休養を申出でたり

翌日會社は春子太夫、伊達太夫を召ひ此の事を告げしに二人は痛く驚き怫然色を爲して曰くこは師匠にさり身上の一大事なり師匠は何故吾々に謀らず輕卒にも之を即時に承諾せしは其の意を得ずと蒼皇馳せて大隅の宅に行けり大隅は會社の忠告極めて理あるを以て汝等に謀らず即答したりと云へり然して大隅の家計に到底靜養の餘裕を與へざるを知れる春子伊達の兩人は直に會社に來りて此の際師匠と進退を共にせんを申出でたり於之會社は徐ろに大隅の休養は會社營業上の問題を放れ大隅一個人として考ふるも斯道の老大家として晩年の名聲を失墜せざる様相努むるは門弟の責任なれば須らく休養して病氣の恢復を計り然る後藝壇上に活動せらるゝを期待したしと懇々諭したれば二人も其の理に服して歸れり

翌日又春子太夫來りて然らば大隅師は此の儘次興行も引續き出勤し追て本人より靜養の爲休場申出でたる時其の期間丈け休場さす事になし呉れと請へり會社は師弟の情に篤き感ずると同時に尙抵牾の情たるを察し其の姑息手段を戒め此の際大隅太夫の家政を整し寃費を省くべきを告げ尙家に在る二男繁をも書記として近松座に使用せんことを答へしに春子太夫は吾々二人の給料を割きても師に奉ぜん決心なりと斷乎として言明せしかば然らば會社も休養中毎月金五十圓を支給すべしと云ひしに春子太夫は感激して好意を喜び直に大隅に意を齎せしに同人は大に満足して茲に暫時休養の事と決定したり

これ會社が老藝術家を待つに優遇を以てし、紋下を重んじたるの所置たるを信じて聊か會心する所に御座候此の間に於て或る者は虚構の言を以て大隅太夫と當方又は春子、伊達の圓滿なる間に離間策を講ぜしなれど之を省く

斯くて大隅太夫は春子、伊達二人に命じ自分休業中は後進を統御して會社の營業に支障なからしめんことを諭せり依りて數日の後春子、伊達二人は近松座の隣家魚嘉に於て集會を爲し大隅休業中に於ける出演者の一致團結を求めしに孰れも異論なく大隅太夫の休業に満足の意を表し將來協力して出演せんことを誓約せり當日會合者の重なるものは竹本管太夫、同籙太夫、同角太夫、同鏡太夫、同絹太夫、同三笠太夫、同米太夫、同組榮太夫、同薫太夫、豐澤新左衛門、同竹三郎、野澤八助、豐澤新造、野澤吉作、鶴澤徳太郎、吉田兵吉、吉田玉造以下十餘人但し竹本彌太夫、豐澤團平、同助三郎三名は都合ありて前以て當方より出勤を差止めあれば當日參會せず又竹本大島太夫、野澤吉三郎は以前より休業中竹本錦太夫、同靜太夫は不在缺席したり

以上の事實は當會社に於て至當の所置之信じ特に春子、伊達二人が門弟として故大隅の爲に盡したる衷情の切なるに同情し會社は努めて出來得る限りの便宜を以て大隅太夫の靜養を容易ならしめ一日も早く藝壇に雄飛せん事を期待したるものにて有之候ひき右御諒相成度此の段得貴意候也

大正二年八月二十六日

株式會社 近松座

因講會長竹本攝津大椽殿

時人の大隅評

左に大隅太夫に對する時人の批評の一、二を紹介する。

明治四十一年堀江座十一月興行

前『八陣守護城』 中『佐倉曙』 切『御所櫻』

義太夫雜誌 七十一號所載

て云ふに云はれぬ無限の情誠に眞に迫りて妙境さや云ふべし、而して妻おさんの啣文句例の「お前一人が男ぢやと世間の人に響られて、後に残りし女房子は、不心中者不孝者と、數多の人に笑はして、それがお前の本望か」は満場大喝采であつたが、夫より子別れの條に移り、「然らばその父はな、千萬人の人の爲めに、鎌倉のお殿様へお願に行程におこなしうして待て居やうぞ、ソレ女房目出度う門出の盃せん」云々。以下「父様のうと慕う子を、心強く振拂ひ、見返りもせず二足三足、さすが恩愛振返り、見れば見替す妻や子が、さう様のうとわが夫のうと呼聲に、チーイと云ふも胸迫り、親子夫婦の憂別れ……」云々に至る處、悲痛慘愴、その哀別離苦の悲みには、満場水を打たる如く、蕭々して實に見物を泣かせたが、此處は流石に大隅太夫獨特の寫實と云ふ妙味、一字一句悉く血を吐き涙を絞つて情に訴へざるはなしと云ふ語振りで評者も思はず貫泣をしたのである、此の一段が當興行の呼物となり、開場以來連日の大入あであるさは季ならぬ佐倉の曙、否櫻の花が不景氣知らずの返咲き？をしたなぎと好評噴々。

大隅太夫大成功先は目出たしくく。
團平の三味線は穩健にして遊味あり、今改めて彼是言ふは管であらう。

明治四十二年堀江座四月興行

前『三十三所花の山』中『楠昔嘶』切『姫山姥』義太夫雜誌七十四號所載

楠昔嘶 德太夫住家の段

中 竹本 綴太夫
切 竹本 大隅太夫
三味線 豊澤 團平

中の綴太夫は相應に語つてゐた。

切の大隅太夫は、去る二十年彦六座に於て、故人團平の三味線で演じた限り、此の度は久々の語物である、此の『三段目』は一月興行の『日向島』と共に斯道では至極難物で一才と語人が少ない、何しろ登場

人物が多く、爺と婆との外におさわ、照葉と云ふ二人の女房の外に、子役が二人ある、而してその夫たる楠に宮都宮と云ふ智將、勇將が二人もある、殊に此の段は他の淨瑠璃の様にサワリさか、或は此處と云ふ的場の無い、單に濫い一方で、之を悉く語り分けるのだから、餘程至難であるが、一座の重鎮たる大隅太夫は、流石舞臺にスキがないのみならず、例の持前の寫實を、或は時代に語り、或は世話に碎きて、その技倆を充分に示してゐる、彼の徳太夫が子を思ふ親子の義理合ひの人情は、最も緻密に語つて、滿場を泣したが、その技倆は到底非凡でない、評者も大に敬服の至りである。

團平の三味線は例の腕前いつもながらの好評なり。

大正二年近松座四月興行
前「菅原傳授手習鑑」中「桂川連理柵」切「糸鹿子娘道成寺」義太夫雜誌百十六號所載

(此れ實に大隅太夫の近松座に於ける名残りの舞臺である。)

道明寺丞相御名残のだん

竹本大隅太夫
豊澤團平

「早期限ぞと御膳の拵へ」よりこんな皮肉物に成ては外に眞似人は無い、先當分は是以上の道明寺は聞く事は出来ぬから、斯道家は後學の爲め聞て置くべしぢや、「お年故のそら耳か、今鳴いたは慥に鷄、あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴ば親鳥も、鳴は生ある習ひぞと」腹で泣て語る、聽衆感じて泣く、此長丁場の物を短かく感じたは語る人の力なり、又團平の三味も太夫を助け能く弾きたり、殊に「道明寺迎今も猶榮にまします御神の、生るが如き御姿、爰に残れる物語り」で充分叩置き、氣を代へてチン／＼／＼「盡ぬ思ひにせきかぬる」チロしに掛る工合は腕ぢや、遅く來て此の場を聞外す人有り評者は勿體ない感じがする、人形では菅丞相を玉造が遣ふて居るから、落付も有て何んさ無く貫目も備はり、「巨勢の金岡が書たる馬は、夜なく出て萩の戸の萩を喰ひ、唐土にも名畫の譽れ云々」不動の姿勢で品位有て善かつたが、庭へ降てから首の振り様が未だ多いは腹が充分掘らぬ結果な

落實蕭條の現下の斯界

り。「是ぞ此の世の別れさば」で左の袖を巻て上げるは紋切型であるに、唯袖を上げし丈けで有たは左を遣ふ者の手落で有た、玉市の太郎は好い役が付て可なり見られた、兵吉の覺壽マア、文五郎の立田は悪き苦なく、他は評するの事は無く、幕。

越路と大隅とは偶然にも時を同ふして引退したが、其後の斯界は實に落實蕭條の感なきを得ないのである。三代越路は文樂座の檣下として奮闘的努力を盡して居るのであるが、到底二代越路全盛時代の景氣は見らるべくもなし。春子太夫は近松座の没落と同時に引退し、暫く杳として消息を絶つて居たのであるが、頃者京都の竹豊座に出演し僅に其の太夫的生活を續けつゝあるの有様である。津太夫、彌太夫には先代ほどの健實老熟の伎倆なく、南部、伊達太夫ありと雖も共に、腹の薄い上廻りの淨瑠璃にして、最早其の前途も見え透いて居る。駒太夫、古靱太夫も左して未來があるとも思はれない。叶太夫、錦太夫、源太夫、鍛太夫、雛太夫、靜太夫、米太夫等の前途も知るべきのみ。

觀じ來れば斯界の前途はまさしく暗澹である。恐らくは斯くして歩、一步と次第に敗滅の運命をたどりつゝ行くのであらう、浩嘆に禁へない次第である。

左は『淨瑠璃雜誌』の記者が、大正三年中其の誌上に上ぼして批評した淨瑠璃外題其の多くは素人淨瑠璃であるの統計表である。以て義太夫節の本場として誇れる大阪に於ける流行淨瑠璃の一般を徴すべし。

明治人に歎かれた流行淨瑠璃

尙ほ左に二六新報紙上に掲載せられた明治三十八年十一月の上半、十五日間、東京市内の主なる義太夫席約二十箇所^三に於ける、奥三人^多切^は女義太夫^打である。の出し物の統計表を掲げて参考に資する。總計段數九十四段。回数八百四十八回。

柳	四八	酒屋	四六	太十	四一	野崎村	三七	壺阪	三七
御殿	三六	辨慶	三三	鳴八	三三	寺子屋	二四	安三	二四
日吉丸	二三	鈴ヶ森	二二	十種香	二一	玉三	二一	宿屋	二〇
蝶八	一九	合邦	一八	本藏	一八	八陣	一七	新吉原	一七
新口村	一五	紙治	一五	猿廻し	一一	三吉	一一	勘作	九
山名屋	九	赤垣	九	吉田屋	八	百度平	八	湊町	八
沼津	七	聚樂町	七	松王郎	七	宗五郎	七	松波	七
陣屋	六	逆櫓	六	白木屋	六	岸姫	六	又助	六
鏡七	六	毛谷村	五	三代記	五	鰻谷	五	忠四	五
帶屋	四	瀧	四	岡崎	四	五斗	四	幡隨	四
(以上五十段を假に流行物とす)									
すしや	四	講釋七	三	八百屋	三	油屋	三	質店	三
香掛村	三	小磯原	三	賢女鑑	三	圓覺寺	三	阿古屋	二
二代鑑	二	下總屋	二	宮守酒	二	土橋	二	新町	二
以上二回以上出演の物六十五種。八百〇八回									
右の外一回限りの出演物は●大安寺●阿漕●吃又●千兩幟●廻山姥●竹の間●五人斬●日向島●彌作●四ッ谷●志渡寺●引窓●岩井風呂●正宗●菅三●大文字屋●日高川●長局●淺間嶽●大江山●夏祭●局注進等である。									

嘉永年間の板行と思はるゝ『松の壽』と題せる雜書^{本書は春夏秋冬の四冊に分てるが如し。其の内容は國々大川相撲競あり、東都浪花料理茶屋競あり、諸國温泉名湯一覽あり、要するに國內著名の事物を相撲番附の體裁に倣ふて等位を分ち品騰考選したものである。}に載せたる淨瑠璃番附は左の如くである。

竹田出雲	義經千本櫻	宗助	關取二代鑑	寛政	口會稽口口染	お七
享和元	繪本太功記	半二	彦山權現誓助	明和	容競出入湊	吉三結鹿子
近松半二	妹脊山婦女庭訓	同	伽羅先代萩	宗助	契情阿古屋松	男達五雁金
同	近江源氏先陣館	門左衛門	出世太平	安永	釜淵雙紋巴	心中重井筒
長谷川千四	壇浦兜軍記	櫻田治助	楠伊達競阿國戲	門左衛門	軍術出口柳	山城國蓄生塚
竹田出雲	蘆屋道滿大内鑑	二步堂	太平記菊水	享和	攝津國女夫池	昔模樣龜山染
近松半二	伊賀越道中雙六	明和九	攝州合邦	同	日吉丸稚藏	驢山比翼塚
同	太平記忠臣講釋	半二	傾城阿波鳴	同	雙生隅田川	石田詰漿菜軍記
竹田出雲	源平布引瀧	淺田一鳥	傾城勳功	寛政	博多小女郎	相生源氏
風來山人	神靈矢口渡	半二	關取千魂	同	博多夏連	いろは藏三組盆
近松門左衛門	蝶花形名歌島臺	出雲	夏祭浪花	春艸	女舞多織戀	時代織室町錦
近松半二	伽羅先代萩	宗助	姻田合戰女舞	延享	心中宵庚申	比良嶽雪見陣立
並木宗助	南蠻鐵後藤目貫	明和四	和模樣妹脊門	一鳥	道成寺現在鱗	讚州屏風浦
竹田出雲	小野道風青柳硯	安永二	雙蝶々曲輪日	爲永	花筏巖流島	小夜中山鐘由來
同	八陣守護本城	寛政元	有職鎌倉	二步堂	極彩色姫扇	築島武勇問答
近松門左衛門	四天王寺迦藍鑑	門左衛門	岸姫松戀飛	天明	近頃河原達引	通矢數四十七本

次第 御祝儀菊壽童 近松門左衛門 淺田一鳥並木千柳 竹本豐竹連中

前九年奥州軍記 日本振袖裕 近松半二堂春草堂豐竹應律寛延元年 竹田出雲

假名手本忠臣藏

澤井月夕是司振袖天神記竹田出雲

後二年奧州軍記
三好出雲
二小落
步雲
堂並木丈助
爲永太郎兵衛

國性爺合戰

近松門左衛門

天 明 元	竹 田 小 出 雲	寬 政 元	近 松 半 二	淺 田 一 鳥	立 川 焉 馬	中 村 阿 笑	近 松 門 左 衛 門	竹 田 出 雲	長 谷 川 千 四	文 耕 堂	三 好 松 堂	二 步 堂	竹 本 三 郎 兵 衛	竹 田 出 雲	並 木 宗 助	淺 田 一 鳥	文 耕 堂						
鎌 倉 三 代 記	日 高 川 入 相 花 王	木 下 陰 狹 間 合 戰	花 上 野 譽 石 碑	源 氏 物 草 太 郎	碁 太 平 記 白 石 嘶	祇 園 祭 禮 信 仰 記	加 賀 見 山 舊 錦 繪	田 村 磨 鈴 鹿 合 戰	鬼 一 法 眼 三 略 卷	新 薄 雪 物 語	奧 州 安 達 原	本 朝 一 十 四 孝	菅 原 傳 授 手 習 鑑	一 之 谷 嫩 軍 記	平 假 名 衰 盛 記	繁 太 夫							
出 雲	明 和 元	並 木 丈 助	宗 助	同	文 耕 堂	小 出 雲	松 洛	門 左 衛 門	同	門 左 衛 門	松 洛	焉 馬	西 澤 一 風	近 松 東 南	豐 竹 應 律								
大 內 裏 大 友 真 鳥	娘 景 清 八 島 日 記	苺 萱 桑 門 筑 紫 轅	那 須 與 市 西 海 硯	法 恩 日 蓮 記	敵 討 櫻 堀 川 夜 錦	御 所 櫻 堀 川 夜 場	戀 女 房 染 分 綱	糸 櫻 本 町 育	出 世 山 景 清	玉 藻 前 曦 袂	信 州 川 中 島 合 戰	姬 小 松 子 日 遊	二 度 目 清 書	北 條 時 賴 記	伊 賀 越 乘 掛 合 羽	義 經 腰 越 狀	朝 顏 日 記						
明 和	宗 助	同	丈 助	元 助	宗 助	安 助	同	明 和	天 明	一 鳥	二 明	躬 二	門 左 衛 門	安 永	門 左 衛 門	享 和	半 明	天 明					
粧 水 絹 川 堤	攝 津 國 長 柄 人 柱	新 板 歌 祭 文	八 重 霞 浪 花 濱 荻	萬 代 會 我	橋 野 國 殺 生 石	昔 々 口 勝 咄	迎 籠 梅 由 兵 衛	播 州 皿 屋 鋪	立 春 恨 絞 鞆	祇 園 錦 女 御 丸 重	伊 達 娘 戀 緋 鹿 子	平 家 女 護 島	大 塔 宮 職 鎧	道 中 龜 山 嘶	小 五 兵 衛 薩 摩 哥	古 戰 場 鐘 懸 松	戀 娘 昔 八 丈	蘭 奢 待 新 田 系 圖	山 內 五 山 桐				
三 浦 大 助 紅 梅 豹	花 衣 いろ は 縁 起	軍 法 富 士 見 西 行	魁 鐘 富 士 岬	傾 城 扇 富 士	丹 州 爺 打 栗	實 生 源 氏	廓 色 上	忠 臣 金 短 冊	將 門 冠 合 戰	花 系 圖 都 鑑	三 十 石 艦 始	百 合 稚 軍 記	賴 政 扇 の 芝	篠 田 妻 今 物 語	小 栗 判 官 車 海 道	猿 曳 門 出 調	伊 勢 音 頭 口 銀	百 千 鳥 鳴 戸 口	傾 城 揚 桃 梅	衣 川 二 人 靜	彫 刻 左 小 刀	武 烈 天 皇 鑱	桂 川 連 理 櫛

右は必ずしも當時の流行人氣の如何を主眼としたるものに非ざるべしと雖も、亦其の一般を徴すべく、之を以て前記明治時代の流行浄瑠璃外題の統計表と照し合して稽考する所あらば、時代の経過と相伴ふて時人の好惡、流行の消長にも、太しき變遷あることを想察することが出来るであらうと信するのである。

但『松の壽』の番附中、作者、中村阿契を『阿笑』とし、『加賀見舊錦繪』を近松門左衛門作とし、同じ『伽羅先代萩』を二箇所にも掲げ、而も之を近松半二作とせざるが如き、いかゞはしき廉々、鈔からずと雖も、凡へて原文の儘、何等の修補も加へず之を掲記した。

江戸作者中其の作多からざるも學を以て聞ひたるものには二代目森羅萬象がある。平賀源内の門人にして、初め森島甫齋、後ち中原中良と改む。字は虞臣、法眼、桂川甫周の弟也。學漢蘭に涉り、緒餘小説、浄瑠璃を作るに巧妙にして師風あり。師源内より其の號森羅萬象を譲られ、別に二代目風來山人、天笠老人とも號し、狂名には竹杖爲輕と號したり。其の後森羅萬象の號を門人福島屋仁左衛門（七珍萬寶）二代目竹杖爲輕、南湖子、錦雪庵等の號ありに譲り、源平藤橘と改む。文化五年十二月五十五歳にて歿。

補遺と餘論

素語り淨瑠璃 木偶と離れて別に開拓すべき天地もあり運命もある 深く木偶と絶縁すべし 聴くべき淨瑠璃として觀るべき歌舞伎 近松作正本の筆致 歌曲と劇との中間を往くべき淨瑠璃 色と淨瑠璃との眞價 出雲半二等の特 見る眼の面白味よりは聴く耳の感じ 活きた人間と死んだ 木偶との角力 文三郎ほどの伎倆を以てして尙ほ且つ爾り 木偶劇より出でて歌舞伎に入つた淨瑠璃正本 流行は趨勢である 時人の操り趣味は既に去つて居る

明治に入つての新傾向

淨瑠璃正本の研究 紳

漸次に衰退廢亡すべき在來の正本

徳島教育會の社會教育上より觀た義太夫節正本の調査報告

首肯し難き廉太だ多し 餘りに偏狭なる觀察

現在の正本は尙ほ幾多の淘汰を免れざるべし 素淨瑠璃となつて保つべき晩年の餘命

古淨瑠璃の復活

人氣を支配するも流行を左右するも要するに鼓吹の 仕方一つである 津太夫の復興した『日吉丸』三段目

左までに流行

せざる淨瑠璃中にも佳作多し

されど孰れも可なりを要する 大に奮勵努力を要する

淨瑠璃正本の新作

現代語にて書いた淨瑠璃は果して義太夫節の節調と調和せざる 元祿時代を直寫した近松の世話淨瑠璃 理然として融和して居る

能はざるに非ず人なき也 淨瑠璃正本の用語は必ずしも現代語の速記的描寫たる

を必要としない

近松が案出した一種の臺詞 十分に元祿時代調を以て響いて居る 文語と現代語との中間を縫ふた文章らしき詞—詞らしき文章

義太夫節淨瑠璃の興衰起伏の跡は、上來觀察する所の如しと雖も、開は主として木偶劇、操り芝居の起伏興衰に關してありし。明和、安永以降木偶劇——義太夫節淨瑠璃芝居は次第に否運に傾いて來た。されど

木偶を離れた淨瑠璃——素語り淨瑠璃の流行は年を経ていよく盛んとなり、はあつたにしても、縱し多少の起伏盛衰都鄙一般猫も杓子も争ふて傳習演奏し、「一口淨瑠璃と我家の門」を云はるゝまでに普及傳布し明治に入つては更に一層盛んとなり、社會階級の凡べてを通じて隆々たる流行を見るに至つたのでありし。されば況く

義太夫節淨瑠璃の全般に涉つて之れが起伏興衰の大勢を論ぜんとするには、一面素淨瑠璃としての斯道の傾向趨勢にも想到し觀察するところ勿らねばならないのは勿論である。

義太夫節淨瑠璃は其の始め木偶の補助たすけによつて起り、又之れが協力によつて榮えた。されど淨瑠璃としての義太夫節は、之れなくとも、必ずしも孤存獨立して其の運命を保つことが出来ないでは無いのである。阪採り芝居の榮枯盛衰は、素淨瑠璃としての義太夫節の流行起伏と相關する所少からざるは勿論である。阪地の採り各座を以て斯界人氣の中心とし、之れが景氣不景氣を以て義太夫節淨瑠璃の盛衰榮枯を卜するの照尺とすることも、亦道理ある觀察の仕方には相違ないのである。されど採り芝居としては何處までも劇としての運命に支配せらる。一種の芝居としての生存適否の法則の下に支配せらる。されば過去に於ける採り芝居が歌舞伎芝居の壓迫に堪へずして敗退し、慘憺あはれなる境遇となり、悲むべき末路となり、現下いまの如き憐むべき状況に彷徨するほどの運命とまで成り下がつて來たのも、蓋し自然の數にてありし。

木偶と離れて別に開拓すべき天地もあり運命もある

潔く木偶と絶縁すべし

元來義太夫節淨瑠璃には別に淨瑠璃としての本來の生命もあれば、開拓すべき天地をも有し、運命をも有して居るのである。創始時代の淨瑠璃の運命開拓の方法としては、木偶と提携し、相頼り相扶けて人氣を作ると云ふ事が、太だ有力にして必要なる機宜の處置たりしには相違なかりしなるべし。されど時代は幾變遷し、採り劇改良論さへ最早徹底せざる空論として顧みられないほどの時代となり來つて居るのである。思ふに木偶と離れた淨瑠璃——素淨瑠璃としての義太夫節其のものこそ、聲曲としての淨瑠璃本家の眞面目なるべし。人偶は畢竟副作用である。聽者の感じを強める爲めの補助である。木偶劇の時代は過ぎた、採り芝居の前途も左まで永くもあるまじとの見込が附いたとすれば、潔く之れと絶縁し、宜しく聲曲本來の立場に復り素淨瑠璃として邁往徑行するの賢なるに如かざるべし。

由來淨瑠璃は聽くべきものにして祝るべきものではないのである。面白味く見せること云ふ事は歌舞伎芝居の本領にして、面白く聽かせること云ふ事が聲曲たる淨瑠璃の本領である。されば淨瑠璃としての義太

聽くべき淨瑠璃、祝るべき歌舞伎

近松作正本の特長と淨瑠璃
としての眞價

夫節本來の立場よりすれば、何處までも語るこそが主、木偶從の根本義より打算して邁進すべく、所作本位の歌舞伎役者本位の歌舞伎芝居とは初めより其の方途を別にし、正本の如きも、歌舞伎脚本の筆致や脚色とは自ら其の選を異し、何處までも聲曲本位の特長と異色と妙趣とを具備して居なければならなかつたのである。

近松門左衛門の作物が、構想到於て筆致に於て、ともに後の群少作者輩の脚本的正本の類と全然其の行き方を異にして居たことは、既に前にも詳しく之を説いた。近松の正本は、彼自身が告白せる苦心談にも云へるが如く、「淨瑠璃はもと音曲なれば、語る處の長短は筋にあり、作者より字配りをし、かつめ過れば、かへつて口にかゝらぬ事もあるものなり、我作には此かゝはりなき故、天爾波おのづか少し」と云へる行き方に於て、他の群少作者輩の地の文も詞の長短も殆ど鑄型に入れたやうな一本調子の行方とは全然趣きを異にし、長短交々併せ用ぬ、雅俗所に隨つて活用し、規格に拘はらずして自ら格に入り、地合の中にも詞あり詞の中にも地合あり、語つて變化あり、聽いて却つて興味ある、聲曲としての淨瑠璃正本の妙味と特長とを併せ具へ、見る眼の面白味よりは聽く耳の感じを主とし、叙景の裡にも情意あり、情意を説く中にも背景あり、景情併せ寫して些の凝滞なく、筆々生動し、個々活躍するの妙趣を備へて居たのでありし。

出雲半二等の正本の筆致

海音の作物は近松の妙調達意の筆致に及ばざりしは勿論なりと雖も、尙ほ脚本的ならずして淨瑠璃正本たるの特長を失はなかつたのである。されど出雲半二、文耕堂、宗輔等の作物となりては、詞本位の——鑄型に入れたやうな千變一律の書き方にし、「早く渡せ」と、手詰の催促、「暫くは御容捨」と、立上るを松王丸、「古手な事して後悔すな」と、云はれてぐつこせき上、「早く切れ、疾く切れ」と、主蕃が權柄の類にして、「と」の字受けの智慧のなき接續語を常套し、(こ)そは連れて行く、(こ)そは入りにけり、(た)どり行く、(追)ふて行く、水嵩増る如くなり、「涙打寄る如くなり」の類の型に入つたやうな段落語となり、「かけ寄て」「詰め寄て」「顔打守り」「膝すり寄せ」「目を見開き」「大息つき」等の千變一律のかぶせ語となり、ばては正本

其の儘歌舞伎芝居の「ナヨホ」語りの用に供せらるゝこととなり、遂に斯界衰頹の因を作るに至りしことも、亦既に前に説ける所の如し。

歌曲と劇との中間を往くべき淨瑠璃

見る眼の面白味よりは聽く、耳の感じ

活きた人間と死んだ木偶との角力

木偶劇より出でて歌舞伎に入つた義太夫節正本

元東歌曲は地の文を主とし、歌舞伎脚本は臺詞本位のものなるべきは本來の約束にして、淨瑠璃は地と臺詞とを併せ兼ねべき兩者の中間に立つて居る。されば地合と臺詞、孰れを主とし孰れを後とすべきにあらずと雖も、元來語り活かす云ふ聲曲本來の立場よりすれば、勢ひ歌曲的に、目よりは耳、宛轉流暢地の中にも臺詞の調あり、臺詞の中にも地合あり、規格に提はれずして自ら規格に入り、語つて變化あり、聽いて興味あり、見る眼の面白味よりは聽く耳の感じを主とするの正本を必要とすべきは當然なるべし。近松は克く這間の消息に通じ、又能く兩者の中間を行き、彼れに傾かず、此れに偏せず、巧みに按排點綴して、筆々變化の妙を極め、曲節自在の妙用を備へて居たのである。

そも、脂粉香黛の活きたる人間と死んだ木偶とを互角に見て角力を取らせ、より以上の人氣を汲集しやうと試みたのが、不了箇の極にして、吉田文三郎の如き自己の技倆と人氣とを鼻に懸け何處までも木偶本位、太夫や三絃は木偶の屬物の如くに心得歌舞伎を凌いで人氣を取らうと試みたりしと雖も、折角全力を注いで考案工夫した「夏祭浪花鑑」も「菅原傳授手習鑑」も、直に歌舞伎に上場せられて却て一層の大入り大當りを取られ、結局隣の島を肥すべき肥料の供給者たるの愚さを味つたに過ぎなかつたのでありし。文三郎ほどの伎倆を以てして尙且爾りである。紋十郎逝き王造逝いた今日に在つて、尙且依然として木偶劇の恢興や隆盛を夢みて居るが如きは、そも、愚の骨頂である。

左に木偶劇より出でて歌舞伎に入つた義太夫節正本の主もなるものを表示すべし。

- | | | | |
|---------|-------|---------|---------|
| 曾根崎心 | 大經師昔曆 | 梅川冥途の飛脚 | 國性爺合戰 |
| 山崎與壽の門松 | 小ぼる心 | 信州川中島合戰 | 心中二つ腹帯 |
| 次兵衛 | 治兵衛 | | |
| 心中宵庚申 | 大塔宮曠鏡 | 北條時頼記 | 須磨都源平躑躅 |

鬼一法眼三略卷	瓊浦兜軍記	蘆屋道滿大内鑑	蒔萱梁門築紫標
和田合戦女舞鶴	敵討 登 樓 錦	御所櫻堀川夜討	釜淵 雙 級 巴
茜染野中隠井	平假名盛衰記	新 薄 雪 物 語	播州皿屋敷
田村鷹鈴鹿合戦	男作五雁金	軍法富士見西行	夏祭浪花鑑
楠 昔 嘶	菅原傳授手習鑑	義經千本櫻	假名手本忠臣藏
八重霞浪花濱萩	雙蝶々曲輪日記	源平布引瀧	新 板 栗 物 語
戀女房染分手綱	玉藻前囃 袂	一谷嫩軍記	日蓮上人御法海
義 經 腰 越 狀	小野道風青柳硯	義仲 動 功 記	姫小松子の日遊
祇園祭禮信仰記	極彩色 娘 扇	由良湊千軒長者	岸 姫 松 譽 鑑
奥州安達原	鑲景清八島日記	姻 袖 鏡	本朝二十四孝
太平記忠臣講釋	關取千兩 幟	染模樣妹背門松	傾城阿波鳴門
近江源氏先陣館	神靈矢口波	妹背山婦女庭調	迎駕籠死期茜染
櫻御殿五十三聯	艶容女舞衣	攝州合邦 辻	伊達娘戀緋鹿子
戀 娘 昔 八 丈	桂川連理 櫛	糸 櫻 本 町 育	往古曾根崎村の噂
新版歌祭文	加賀見山奮錦繪	伊賀越道中雙六	伽 羅 先 代 萩
彦山權現誓助劍	碁太平記白石嘶	花上野譽の石碑	木下陸狭間合戦
有職鎌倉山	蝶花形名歌島臺	日 木 賢 女 鑑	加賀見山廓寫本
繪本太功記	箱根靈驗壁仇討	日 吉 丸 稚 櫻	八陣守護城
生寫朝顔話	花 雲 佐 倉 曙		

されば義太夫箭淨瑠璃の恢興を策し局面を新たにして更に興隆の機運を作らんとするには須らく聲曲

本来の意義に復り、木偶と離れて別に新たななる發達を遂げしむるの方策を講ずるの賢なるに如かないのである。

流行は趨勢である

木偶操りは我國獨特の妙戯である。何とて永久に保存し、後人に傳へたきは誰しも異存なき萬々の希望なるべし。されど流行は趨勢であり、社會的嗜好の歸向に外ならずとすれば、無理に強ひても詮なし。『假名手本忠臣藏』『菅原手習繼』『妹背山婦女庭訓』『義經千本櫻』『平假名盛衰記』『繪本太功記』等、如何に優れたる正本を上場するとしても、入りこ不入りとは自然の趨勢に任かするの外なし。近松座の一團が離散してより既に二箇年有餘なるも、一向復活の氣配も見えず、獨り舞臺の文樂座さへ亦はかくしき景氣さてもなし。時人の操り趣味は疾く既に去つて居る。

時人の操り趣味は既に去つて居る
明治時代の新傾向
淨瑠璃正本の研究

明治時代に於ける異色とも見るべきは淨瑠璃正本の研究の盛んになつたことである。早稻田の文科では、一時近松作正本を教科用に採擇講授した事もあつた。近松研究など云へる流行語さへも出來た。達識な歴史家により、近松作正本中に謳はれた時代思想近松が觀た元祿時代に就いて解剖し、批判し、紹介された。近松世話淨瑠璃、近松時代淨瑠璃、近松傑作集、近松淨瑠璃全集、半二傑作集、出雲傑作集など續々刊行された。時人の淨瑠璃に對する理解は次第に秩序的となり、聲曲としての方面より、將又文學的作品としての方面より、交互仔細に玩味研究さるゝこととなりし。諸曲は武人の嗜むべきもの、淨瑠璃は平民の語るべきものなりなど云つて、痛く斯曲を蔑視した僻見もいつかは撤去されば、は紳士淨瑠璃など云へる新熟語さへ作り出され、素人淨瑠璃の流行はあらゆる階級を通じて曾てなき盛隆を見るに至り、讀んで文の美や想の妙に憧憬^{ぞら}て居た淨瑠璃平民論の先生達も、語つて眞個の妙諦に觸れて、始めて又格別の妙味の存することを悟了するに至つたのでありし。

大正五年十一月四日の大阪毎日新聞に左の記事あり、以て素人淨瑠璃流行の盛況を想ふべし。

大阪に素人淨瑠璃の天狗連が二千五百以上三千以内はあると淨瑠璃道具の商賣人は觀測して居る。

紳士淨瑠璃なる新熟語

この三千人の天狗連を相手にして居る商賈人のなかに「ゆか掛り」といふのが十五六軒あるといふが、一番古いのが天卯齋で、淨瑠璃會のある時に此の床掛りへ電話をかける。

床、簾、燭臺、後幕

の類をチャンと調べて會場へ出張つて「語られまするは〇〇、三味線御存じ、いよく三吉別れの段さうざい、さうざーい」と口上までを勤めて呉れる。

其の一人の日當が一日に二圓五十錢から三圓ぐらゐで、御祝儀は御心まかせと定つて居るが、天狗連の「ドサ行き」にもキツと此の「ゆか掛り」がお件を仕るのである。ドサ行きとは地方巡業とか田舎行きといふ異名で、特に床掛りが必要になるのだ。

義太夫天狗の一人づつに持て居る柳行李のなかにはどんなものが這入つて居て、それが糞らほどの値もりに當るかと聞いて見たら、

▲見臺(七圓から二百圓位まで) ▲湯呑(一圓から三圓位) ▲床蒲團(二圓から六圓位) ▲床蓆(これには際限なし) ▲肩衣(夏物、冬物ともに四圓から七圓位) ▲袴(昔は平袴、今はマチ高もある) ▲腹帶(角力取のまはしのやうなもの) ▲腹枕(小豆の入つた袋で懐に入れるもの) ▲「ネコ」(ともいふ) ▲調子臺(高下駄のやうなもので尻の下に入れる臺) ▲床本(見臺にすゑる大きな本) ▲手拭 ▲扇子 ▲鼻紙

これだけあると大きな顔を曲め立てて天狗の鼻を振りまはすことが出来るのだ。

けれども大阪の天狗連はヤツパリ東京よりも馬鹿貧澤をしないやうに心得て、滅多に高いものを作らない習慣がある。黒人筋の見臺でも三百圓以上のものは餘りない、近いころに古靱太夫の木地目塗りで二百圓といつたのが随分高いうちに數へられて居るくらゐだが、東京では何々銀行の支配人とかで東華とかいふ天狗の如き、一人で千圓の見臺と八百圓のさ、五百圓のさを三口も持つて、自慢にして居るといふ噂である。

然し大阪でも掛合ひの肩衣に相應の贅を盡したやうな話はあるが、一般に馬鹿錢を使はぬが特色だといつて居る髯天狗があつた。

東京と大阪との淨瑠璃流行熱は昨今ほとんど五分々々だといふが、大阪の板元から床本、稽古本、豆本の賣れるのはヤハリ大阪の方が多いいいふ。其の數は加島屋一軒から出すもので、一日に床本が三十冊、稽古本が二百冊、豆本が十冊ぐらゐ、これを通じると一年に十萬冊以上、隨分夥しいものだ。

そして其の賣れ先が、日本全國は固より、歐米の日本人居住地、南洋諸島の日本人部落にまで涉つて居ることは驚くではないが。

惟ふに今日時人の受けもよく、寄席の出しものとして、喝采を博し、専ら世上に流行しつゝある正本中にも、『鎌倉三代記』の如き、『御所櫻堀川夜討』の如き、其の他、『日吉丸稚櫻』にしても、『八陣守護城』にしても、果して幾年の壽命を持續し得べきものなるかは疑問である。時代思潮は著しく變化して居る、史的研究は次第に普及して來た。されば在來の空想的な、性慾的な——機性的な正本は漸次に衰退廢亡し、時人の好尚と遠かり行くべきは必然にして、『鈴鹿合戦』、『住家』、『平と平』の讀み違ひ——不思議に文字の合ふたるも此れ孝行のしるしかや』と云ふが如き、奇巧一片の作意の正本や寅の歳、寅の月、寅の日、寅の刻に生れたる女の生血が、眼病の妙薬となり、癩病の奇薬となること云ふが如き脚色の正本は、いつかは斯界の流行より葬り去らるべきは必然である。

曾て徳島縣教育會では明治四十四年二月以來、義太夫節正本と社會教育との干係に就いて調査を加ふる所あり、約二箇年を経て其の結果を發表した。査定の標準は、

- (一) 社會教育の資料として裨益ありと認めたるもの
- (二) 社會教育の資料として第一種に亞ぎ何人をして聽かしむるも多少の裨益こそあれ殆ど弊害なかるべしと認めたるもの

漸次に衰退廢亡すべき在來の正本

徳島教育會の社會教育上より觀た義太夫節正本の調査報告

(三) 社會教育の資料として多少の缺點を含み裨益する所少しと雖も思慮ある者をして聽かしむれば敢て弊害なかるべしと認めたるもの

(四) 社會教育の資料としては卑猥慘酷等の著しき缺點を有し弊害少からずと認めたるもの

以上の四種に別ち、毎段理由を加へ、等種を附して品臈して居る。例へば左記の如し。
(三)本文の末に(一)(二)育會の査定したる種別である。

御羅先代萩政阿忠義の段天明五年松貫四高橋茂兵衛吉田角丸合著 政阿の忠烈は云はずも、千松と鶴喜代とが殊勝

なる言々句々、皆之れ武士道の發顯たり、謀叛に加擔せる入沙が非業の最後を遂ぐるに至つては、適切に勸善懲惡の理法を誨ふるものなり。(二)

三十三間堂棟由來平太郎住家の段文化十三年祇園女御九重錦改作 此の段當時甚だ流行す、これ聲曲の變化多ければなり、然れども全段荒唐無稽にして、さしたる教訓を含まず、唯面白しと云ふに過ぎず、強ひて之を求めれば、無情の草木も平太郎が深切に感ぜしこと、平太郎が親の仇を報ぜんさ苦心せしこと、これぞ、この段のみにてはさまで感も深からず、因みに祇園女御九重錦は寶曆十年、若竹笛舁、中村阿契の合著なり。(二)

傾城阿波の鳴門順禮歌の段明和五年近松半二、八民平七、寺田兵藏竹田文吉竹本三郎兵衛合著 この段は最も人口に膾炙せられたるもの、一にして、徳島縣とは縁故深き語り物なり、十郎兵衛が目的の爲に手段を擇ばざりしは惜むべし、一段哀れなる語り物と云ふの外多く、教訓を認めず、唯採るべきはおつるが海を渡り山を越えて父母を尋ぬる可憐の情と、母お弓が子に對する慈愛の情とのみ。(二)

繪本太閤記尼ヶ崎の段寛政十一年近松湖水 本文「北條義時は帝を流し奉る」『和漢共に無道の君を弑するは民を安むる英傑の志』の二句頗る穩當を缺く、當時の思潮を解する思慮ある者にあらざれば、非理を教ふる事にもなるべし、語る者も、聽く者も、心すべき所なり、この段亦軟弱に互る語句あり、但し

現今前記の二句を省きて語る者多し、同感なり。(三)

繪本太閤記孫市切腹の段同 功名は戰國時代の武士の唯一の理想なりき此の段孫市が我が子の功名を立てしめんき、頑是もなき一子重若に自分の首を討たしむるは當時を知るものにして始めて會得すべし、慘又慘聽く者をして身慄を生ぜしむ。(三)

三十三所壺阪靈現記明治八年、加古千賀著 妻お里が貞節を守り、艱苦貧窮に打克つて、三年の間夫澤

市の爲に祈願を怠らざりし辛苦は、今の輕佻浮薄の世、名譽に憧がる婦女子等のよき鑑と云ふべし。然れども此の段澤市がお里を疑ふ詞の中、軟弱に互る語句なしとせず、これ最上の語物たらざる所以、殊に『每晚七ツからさき云々』の語は卑猥なり、但し現今關東、關西共多くは省きて語りつくあるは當然と云ふべし。(二)

日吉丸稚櫻小牧山城中の段享和元年、近松柳、近松加藏、近松萬壽、近松梅枝軒合著 段中清忠が死せるお政の首を打ち、我が隠匿

ひし龍興の息女萬代姫の身替りに立つる所あり、これ女孀吉晴に間道を教へたる罪を償へるなり、而して自分も切腹して義者の節を立てたり、面白き脚色なれども、兎に角裏切は不忠と云はざるべからず、又お政の詞の中「わたしと一所に云々」の卑猥の語あり、現今大抵はこの十數字を省きて語れるは當然の事なり、末段竹松の詞殊勝にして人を感動せしむ。(二)

艶姿女舞衣酒屋の段安永元年、竹本三郎兵衛、豊竹應律八民平七合著 能く人口に膾炙したる語り物なれども、全段の結構、軟弱の嫌ひあり。(三)

天網島時雨炬燵紙屋の段享保五年、近松門左衛門著 全段の結構、軟弱なり、殊に「なとくしの十月中の亥の子に炬燵をあけた祝儀とて云々」の卑猥あり。(三)

菅原傳授手習鑑寺子屋の段延享三年、竹田出雲 白太夫の子三人兄弟の中、松王一人不忠と見ゆじは、松王が苦肉の計略にして、故らに敵に荷擔して菅公の爲に闘れるなり、而して誠忠無二の松王が一子小太郎を

身替りこせる義烈、小太郎が幼少ながら喜んで若君の身替りとなり、深く首差し伸べたる真情、源藏夫婦が身命を賭して若君に傳つける苦衷、皆これ臣たるものも、龜鑑とするに足る、源藏が他人の子を身替りこし、然も其の母をも一刀の下に斃さんとしたるは、時代思想と見れば止むを得ざるこゝなるべし、大義親を滅すこは之の謂ひか。(一)

生寫朝顔話宿屋の段嘉永三年、山田案、山子遺稿、翠松園主人校補此の段も能く人口に膾炙し、女義太夫間には殊に流行せる語り物なれども、主人公深雪朝顔が淫奔の顛末を物語る所、軟弱にして、子女を愆る、嫌ひあり。(三)

中將姫古跡松雪責の段著作未詳中將姫の忍耐、淨舟、桐の谷の忠義共に教訓となる。然れども、繼母岩根御前が中將姫を折檻する所、餘り慘酷にして、聽く者をして慄然たらしむ。(三)

茜染野中の隠井長吉殺の段元文四年原田由良助著長吉姉の難儀を救はんこ苦慮せるは友情の切なるものあれども、主人の金を盗みしは悪事なり、又姉の夫由兵衛、縦へ必要に逼りたれば、義理ある弟を殺して金を奪へるは非道の極み、餘儀なき事として、思すべからず、女房小梅が身を賣りて金を調へるは、夫婦の情かくもあるべし。(三)

戀女房染分手綱沓掛村の段寶曆元年吉田冠子、三好松洛が近松翁の伊達染手綱を改作せるもの、馬士八藏の孝心よく債鬼を泣かしむ、其の八平次を討つて主人の仇を報ぜんさせるは忠と云ふべく、座頭慶政の難を救ひしは俠と云ふべし、而して灰中の三百兩を返さんさせるは正直、又乳母が養君に對しての慈悲、何れもかくありたきものなり。(一)

大様右の如し。而して第四種に屬するものとして、左の如くに云つて居る。

第四種 此の部には、一段全く教訓的意義を含まずして却て有害なる語句あるもの、或は一二風教上に資すべき材料あれども、段中軟弱卑猥の語句多く、徒らに青年子女の劣情を挑發せしむる嫌あるもの、又は作者が人情の弱點を捉へて、婦女子の歡を買はんが爲に、趣向脚色せりと認めらるゝもの等、總

て風教上有害なりと思惟せらるゝものを擧げたり中には本朝二十四孝十種香の段新版歌祭文野崎村の段傾城戀飛脚新口村の段戀娘昔八丈城木屋の段などの如く、普く人口に膾炙せられ聲曲上には惜しかるべきものもあれど風教上よりして之を觀るべきは、斷然排除すべきものなりと信ず、かゝる類の語り物に戀々たるは、これやがて義太夫全部の價値を限す所以なるを想へばなり。

本朝二十四孝百度參詣 同十種香 傾城戀飛脚新口村 伊達娘戀緋鹿子八百屋 新版歌祭文野崎村 妹脊山婦女庭訓竹に雀 柱川連理櫛帶屋 夕霧伊左衛門廓文章吉田屋 四谷怪談伊右衛門内 道成寺現在蛇鱗日高川 櫻鐔恨絞鞘無筆書置 戀八卦柱曆大經師屋 染模樣妹脊山松實屋 戀娘昔八丈城木屋 浦里時次郎明烏六花曙山名屋 桂川連理櫛道行 生寫朝顔話摩耶ヶ嶽 同明石船別 薰樹累物語土橋 花雲佐倉曙牢屋 妹脊山婦女庭訓山の段 同鱧七使者 彦山權現誓助劔お菊反討 伊勢音頭戀寢及油屋 壽連理松湊町 増補八百屋獻立八百屋 天網島時雨炬燵 同茶屋 八島合戦二の切 同三の切 祇園祭禮信仰記碁立 夏祭浪花鑑三ぶ内 義經千木櫻大物浦 輻山姥廓物語 糸櫻本町盲屋敷 愛護稚名歌勝関比叡山

首肯し難き廉太だ多し
餘りに偏狹なる觀察

以上の調査は主として社會風教上の關係より觀察査定したるものにして、文學上、聲樂上から觀た義太夫節正本の價値とは全く没交渉であるを附言までしてある次第なれば、彼此論議の必要もなしと雖も、之れが調査の任に當つた委員は云へば、徳島縣下の主もなる教育家を網羅し、斯道に堪能の聞のある人士をも加へたる一團にして、二箇年有餘の日子を費し、慎重綿密なる調査の未發表したるものだと云はれて居るより見れば、教育家の立場より觀たる義太夫節正本の評隲としては、又得難き參考資料と云ふべし。

調査報告中首肯し難きもの太だ多し。例へば澤市の詞に面白からざる所ありとて、『蜜飯』を二種に落し、勘平の詞に感服し難き語句ありとて、『忠六』を二種に脱したるなど、餘りに偏狹なる觀察の仕方

して、元來社會教育なるものゝ大旨が、果して徳島縣教育會調査委員等の考へて居るやうな無味乾燥の
ものであらうか、風教の指導と云ふところで、又彼等調査委員等の考へて居るやうな偏固なものであ
らうか、大いに考慮を要すへき事柄であらうと信ずる。社會は生きて居る、人生には意味がある。凡ゆ
る藝術的作品は人生の機微に觸れて始めて慰安さとなり、感化さとなり、風教指導の一助さなるので
ある。

淨瑠璃雜誌の記者は、其の誌上に批評した統計の順位最も多く、批評した淨瑠璃外題の順位、換言すれば
きものより次第に順と徳島縣教育會の査定發表した種類別の等位さを對照し、左の如くに記して居る。

外題	本誌批評 統計順	教育會 種類別	外題	本誌批評 統計順	教育會 種類別	外題	本誌批評 統計順	教育會 種類別
太閤記尼ヶ崎	一	三	盛衰記逆鱗	一七	一	戀巖及油屋	三三	四
合邦下の巻	二	三	三十三所壺販	一八	二	千本櫻鮎屋	三四	三
先代萩御殿	三	一	菅原三段目	一九	二	八陣守護城	三五	二
菅原四段目	四	一	本藏下屋敷	二〇	三	菅原東天紅	三六	〇
忠臣藏六段目	五	二	日吉丸三段目	二一	二	鈴鹿合戦阿漕	三七	一
女舞衣酒屋	六	三	戀女房香掛村	二二	一	忠臣藏九段目	三八	一
鳴戸順禮歌	七	二	双蝶々引窓	二三	二	先代萩竹の間	三九	一
御所櫻辨慶	八	三	梅由樂樂町	二四	三	二十四孝十種香	四〇	四
天網島紙屋	九	三	安達原三段目	二五	二	日蓮記勘作内	四一	二
伊賀越岡崎	一〇	二	中將姫雪貴	二六	三	四ッ谷伊右衛門	四二	四
岸姫松三	一一	三	堀川猿廻し	二七	三	嫩軍記三段目	四三	一
忠臣藏四段目	一二	一	恨敵鞘緋谷	二八	四	戀娘鈴ヶ森	四四	三
伊賀越沼津	一三	二	歌祭文野崎村	二九	四	雙仇討瀧の段	四五	三
白石嘶揚屋	一四	三	花上野志渡寺	三〇	一	連理榎帶屋	四六	四
戀飛脚新口村	一五	四	松王下屋敷	三一	一	忠臣藏茶屋場	四七	三
三十三間堂柳	一六	二	天網島茶屋	三二	四	昔八丈城木屋	四八	四

布引瀧四段目	四九	二	二十四孝三段目	七七	三	朝顔話笑葉	一〇五	二
百度平住家	五〇	一	廓文章吉田屋	七八	四	双蝶々橋本	一〇六	〇
信仰記上爛屋	五一	二	忠臣藏三段目	七九	三	義經腰越杖	一〇七	一
明烏吉原揚屋	五二	四	忠臣藏身賣	八〇	二	彦山七ッ目	一〇八	〇
佐倉曙下總屋	五三	一	嬢景清日向島	八一	一	鏡山草履打	一〇九	三
佐倉曙儀作内	五四	一	信仰記金閣寺	八二	四	妹脊山井戸替	一一〇	〇
楠昔噺三段目	五五	一	加賀見山又助	八三	二	先代萩提伐	一一一	〇
嫩軍記須磨浦	五六	二	二代鑑秋津島	八四	二	神靈矢口渡	一一二	一
三信記肉付面	五七	二	太閤記夕顔棚	八五	〇	朝顔話大井川	一一三	〇
玉藻前三段目	五八	二	女舞鶴市若	八六	二	妹脊山御殿	一一四	〇
大文字屋	五九	〇	伊賀越相合傘	八七	〇	太功記局注進	一一五	〇
太閤記妙心寺	六〇	二	時雨傘岩井風呂	八八	三	妹脊門松油屋	一一六	〇
忠臣講釋七	六一	一	朝顔話舟別れ	八九	四	先代萩對決	一一七	〇
兜軍記琴責	六二	二	いざり天神堤	九〇	〇	橋辨慶	一一八	〇
由良湊山の段	六三	三	戀女房十段目	九一	二	霄唐申	一一九	〇
義士赤垣出立	六四	一	賢女鑑十段目	九二	一	近江源氏八	一二〇	〇
千本櫻椎の木	六五	〇	大江山辰橋	九三	〇	妹脊山杉酒屋	一二一	〇
朝顔話宿屋	六六	三	非人太功記	九四	〇	五人伐	一二二	〇
鎌倉三代記八	六七	三	忠臣藏九半目	九五	〇	二十四孝桔梗原	一二三	一
薰樹累物語	六八	四	布引瀧三段目	九六	〇	名筆吃又平	一二四	〇
八百屋獻立	六九	四	壽連理松湊町	九七	〇	白石嘶田植	一二五	二
妹脊門松質屋	七〇	四	淡路町飛脚屋	九八	四	大阪町盡し	一二六	〇
伊賀越饅頭娘	七一	〇	朝顔話濱松	九九	二	二十四孝狐火	一二七	〇
三日太平記九	七二	一	妹脊山川の段	一〇〇	〇	忠臣講釋道行	一二八	〇
蓋襦錦大安寺	七三	一	妹脊山竹雀	一〇一	〇	一の谷寶引	一二九	〇
伊賀越圓覺寺	七四	二	彌作の鎌腹	一〇二	一	道齋坊	一三〇	〇
加賀見山長局	七五	一	國性爺樓門	一〇三	一	川口萬歳	一三一	〇
蝶花形八ッ目	七六	一	彦山九ッ目	一〇四	一	野良千屋	一三二	〇

現在の淨瑠璃正本は尙ほ幾多の淘汰を免れざるべし

素淨瑠璃となつて保つべき晩年の餘命

古淨瑠璃の復活

以て教育家の立場より觀たる義大夫節正本の品隔さ、時人の好尙さは、尙ほ太しく相違あることを知るを得べし。

無論今尙ほ語られて居る淨瑠璃正本中には、風教上如何はしきものも少くないのである。例せば、大經師昔曆』の大經師内奥庭離座敷の場の如し。「親の敵じやなければ、覺のだんびら研すまし」云々のあたり、淫猥聽くに堪へざるものもあるのである。されど此れ等は漸次に淘汰され、廢除され、斯道の聲價と品位とを維持することとなるべきは勿論なるべし。

想ふに今日残れる淨瑠璃正本は尙ほ幾多の淘汰を免れざるべし。世話物淨瑠璃には比較的淘汰さるべきもの少し。されど時代物、半時代物淨瑠璃正本は、其の中構想にも無理もなく、一段づゝ引き離しても作意徹底し、現に歌舞伎芝居の中幕物として今尙ほ稱美されつくある『盛衰記』の逆櫓、『菅原傳授』の佐田村、寺子屋、『中将姫古跡松』の雪責等の如きものは残り、丸本總こかしの續き狂言などは次第に飽かれて時好さ遠かり、往時折々試みられた「拍子扇淨瑠璃合」さか、「年忘座敷操」さか、「冬籠浪花梅」さか云へるやうなみどり淨瑠璃的のものとなり、やがて木偶人形さも離れて素淨瑠璃となり、尙其の晩年の餘命を長うすることが出来るであらうと信するのである。

されど一方に淘汰さるれば又一方には之が補充の必要が起る。されば斯道救済の第一案件として、今日廢絶して傳はらざる過去の名作を復活再興し、漸次に廢絶し行くべき正本の不足を補充すること云ふ事の必要も出て來るのである。就中近松作正本の研究復活は急務中の急務なるべし。

顧ふに人生詩人としての彼れ近松の作物は、明治の文運煥發の時代に入つて遺憾なきまでに講究され、十分の尊敬と嘆美とを受つたのでありし。されど、淨瑠璃正本として、三絃に上ほせての彼が作物の妙味と眞價とは、未だ十分の了解と嘆美とを受つて居ないのである。近松に次いては海音、文耕堂、出雲、一風、宗輔、千四丈、輔松、洛、小出雲、一鳥等の作物中今に傳はらざる佳作を復活することである。此れ等作者の正本にし

て、其の作、其の想、却て即今世上に流行、歓迎せられつく在るものに比し、數等の佳作たるものも尠くないのである。されば此れ等佳作を選抜復活し、多少にても面目を新たにして世人に見ゆるの策を劃すること、亦斯道作興の一策たるを失はざるべし。

人氣を支配するも流行を左右するも鼓吹の仕方一つである

津太夫の復興した『日吉丸』三段目

左までに流行せざる淨瑠璃中にも佳作多し

されど孰れも可なりの難物である

大に奮勵努力を要する

思ふに同じ淨瑠璃にしても二代越路の全盛時代には『中將姫』の雪責、先代萩御殿の類が流行り、大隅太夫が次第に頭角を現はして來れば、『靈阪』『合邦』の類が忽ち流行するに至るなど、時の人氣太夫の鼓吹の仕方一つにては或程度までは人氣も支配し、流行を左右することも出来るのである。されば熱心之を鼓吹する太夫さへあれば、今まで廢れた淨瑠璃中の名作をも復活し、新たな流行を作るさ云ふ事も、左までの難事にはあらずるべし。例へば『日吉丸稚櫻』の三段目の如き三代津太夫後七代綱太夫一たび之を語つて評判を取りてより、忽ち復活して盛んなる流行を見るに至りたるが如し。下る道頓堀若太夫の芝居座摩の芝居等に『出勤』、『紙治』、『大文字屋』等得意の語り物を出演せしも不評なりしより、心中面白からず、少く自暴自棄氣味となり、其の聲柄にもなき『日吉丸稚櫻』を出したるに、當節多き淨瑠璃さて非常の評判を取り、之れより津太夫の名も高くなれば、中古廢たれて居た此の淨瑠璃も復活流行するに至つたのであると云はれて居る。今日古き名家の名跡を相續し、大きな看板を掲げ、斯界に其の名を誇りつくある太夫や三絃の連中は、せめては其の家々の先人名家の語り残したる當り淨瑠璃だけにても工夫研讀し、時の流行を新たにすること云ふ心懸けを以て奮勵一番する所なからればならぬのである。

全然廢絶せるには非されど、左までに流行せざる淨瑠璃の中にも『曠景清』の『日向島』の如きがある。『往昔曾根崎村傳』の『教興寺』の如きがある。「競伊勢物語」の『春日村』がある。「極彩色娘扇」の『天王寺村』がある。「宗岸庵室」もあれば、『彌作鎌腹』もある。「壽の門松」もあれば、『姫小松子の日遊』もある。「博多小女郎涙枕」もある。數へ來れば語るべき淨瑠璃正本は、まだく澤山に取り残されて居るのである。されど孰れを見ても可なりの難物である。なまやさしき技倆にては語りこなされさうにもなき代物ばかりである。されば第一には、今の太夫連中に對し、奮勵一番更に大に技を練り工夫を凝らし、斯道の復興、振作に努力盡せんことを

淨瑠璃正本の新作

現代語にて書いた淨瑠璃は果して義太夫節の節調と調和せざるか

元祿時代を直寫した近松の世話淨瑠璃

渾然として融和して居る

能はざるにあらす人なき也

淨瑠璃正本の用語は必ずしも現代語の速記的描寫を必要としない

勸奨せざるを得ないのである。

三代目越路が文樂座の櫓下となりてより以來或は日向島を上場し伊勢物語を上場する等存りに此れ等難物に手を付け勇往邁進せるの苦衷は諒さすべし矣。然るに舊近松座の一連が僅かに首振り芝居つゝあるは、如何に送り、往、荷、且、の消息を傳へ。

斯界の局面轉回策中、最も急務とするは、淨瑠璃正本の新作である。明治に入つても幾多の新作淨瑠璃が出た。されど佳作が無い。近松座には新作乃木將軍を上場した事もある。されど此れとても一回限りで流行しない。世人の多くは現代語を以て書いた淨瑠璃正本は、到底義太夫節の曲調と調和するものでないを考定して居る。義太夫節淨瑠璃は保存すべきものにして新作すべきものではないと論斷して居る。されど開は誤解である。近松が書いた世話淨瑠璃の正本は、彼が生存當時の社會事相の描寫であり、直寫である。慶安に生れて享保に死んだ彼は、彼が天賦の詩才を以て克く當時の世態を直寫し、元祿武士を描き、町人を描き、男性を描き、女性を描き、而も些の凝滯、悪感、不調和の痕跡を止めずして渾然として融和して居るのである。大正の詩人が明治を描き、大正を直寫するも、元祿詩人たる近松が元祿を描き、寶永を描き、正徳を直寫するも、其の間差別のあるべき理由は、ないのである。若夫、近松を泉下に起し、彼れをして寛政文化時代を描き、嘉永、安政時代を描き、明治、大正時代を描かしめたるならば、彼が元祿、正徳、享保に於て、元祿時代を直寫し、正徳を直寫し、享保を直寫したるの筆を呵して、又克く寛政文化、嘉永、安政、明治、大正の各時代を直寫し、渾然として融和せる興味多き正本を提供し得べきや、必然である。能はざるには非ず人なきである。

自然を美化するの働きは、美術家の手腕である。凡ゆる社會の事相を詩化して淨瑠璃正本中に收め、些の悪感、不調和を感じしめざるまでに渾然たらしむるの作用は、作者の詩才に俟たればならぬのである。繪畫の寫真とは、根底に於て主張を異にするが如く、淨瑠璃正本も必ずしも現代語の速記的描寫を事とすべきものではないのである。近松は元祿時代を直寫した。されど彼が正本に使用した臺詞は、必ずしも元祿時代の日常用語の速記的直寫にはあらずし。明治、大正の正本中に明治、大正の現代語を使用することが不調

近松が案出した一種の臺詞

十分に元祿時代調を以て響いて居る

文語と現代語との中間を縫ふた文章らしき詞——詞らしき文章

和なれば、元祿時代の正本中に、元祿時代の現代語を使用することも亦不調和でなければならぬ。時人の用語、其の儘を直に正本上に使用することの餘りに、聽客に耳近にして却て詩的興味、樂的興味を減殺するの嫌あることは、今も昔も同一なるべし。さればこそ近松は、一種の語調を案出し、臺詞を案出して、彼が正本上の臺詞とし、語調として居るのである。寫眞にあらすして尙且つ迫眞の妙味あらしめたのは、彼が卓越したる詩才の働きである。例せば『天の網島』の治兵衛、おさん、孫右衛門、勘太郎の如し。孰れも直寫せる元祿時代語にあらすして、而も十分に元祿時代調を以て響いて居るのである。近松の使つた臺詞は、純乎たる現代語でもなければ、又純乎たる文語でもない、文語と現代語との中間を縫ふた文章らしき詞——詞らしき文章とも云ふべき一種の用語である。此の一種の用語を按出して來て調和を看出した所に、近松の偉大なる詩才を認むることが出るのである。大詩人出で、而して明治大正の昭代を描いて後昆に傳へよ。斯道をして新たる生命と境遇の上に、興隆盛榮を期するの途は、唯近松の再來あるのみである。操り芝居の敗滅は已むを得ないとして、せめては、潔淨瑠璃の型式に於てなりとも、永久的生命あるものとして、長へに後人に傳へたきものである。近松の再來は、望み難しとして、せめては、近松に近き文章にても出現せよかしと祈るのである。

義太夫大鑑 上卷終